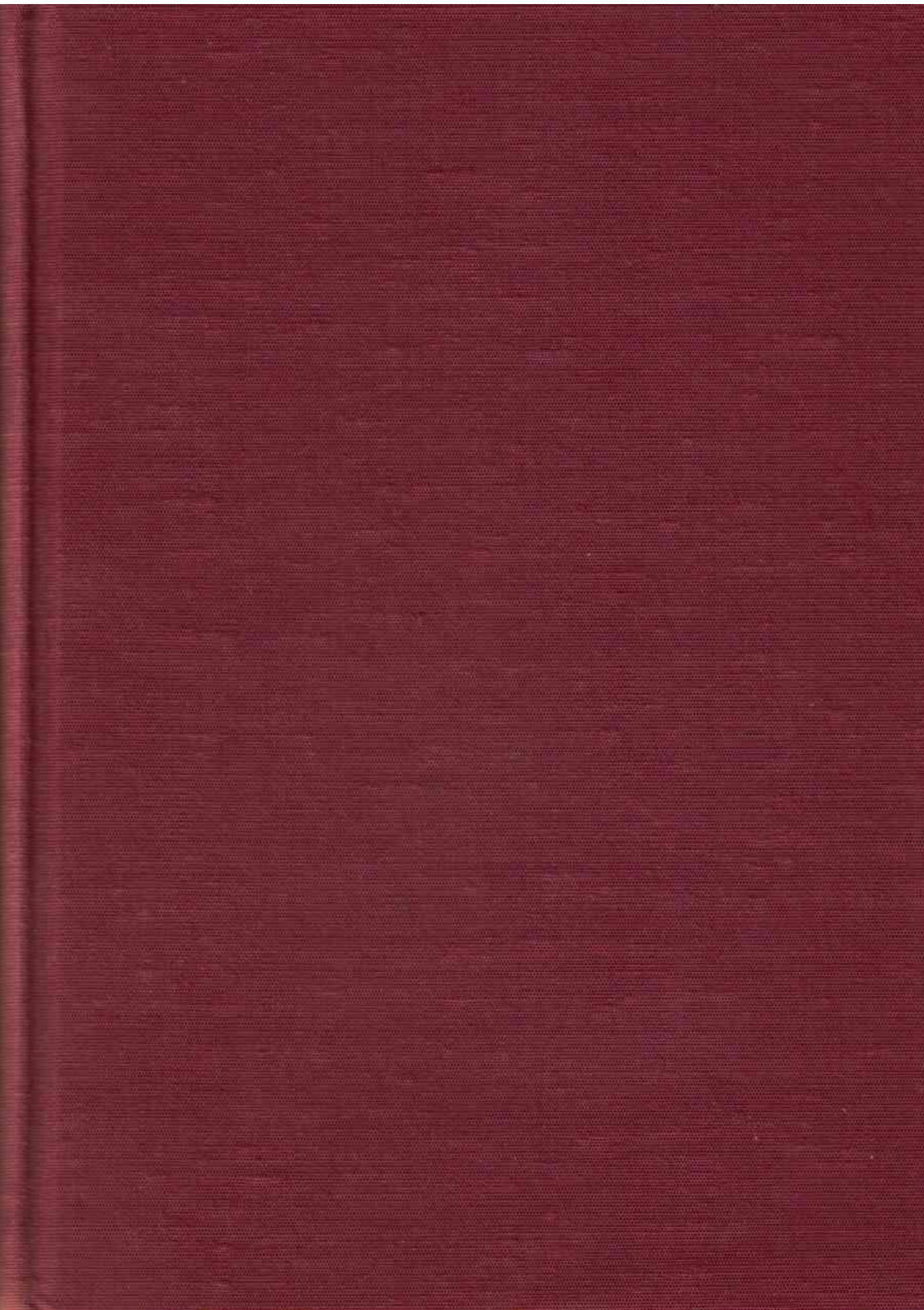


樽本照雄 著

清末小説五談

清末小説研究会



清末小説五談

樽本照雄著

清末小説研究会

清 末 小 說 五 談

目 次

1	呉禱漢訳小説の特色	14
	漢訳についての低い評価、あるいは評価の変化／呉禱漢訳小説の特色	
2	呉禱漢訳ドイル「斥候美談」——高須梅溪訳「大佐の罪」	31
1	ドイル原作の経緯——犯罪から狐狩りへ	31
2	原文、日訳と漢訳	34
	はじまり／斥候となる／イギリスの駿馬／狐狩り	
3	呉禱漢訳ル・キュー『薄命花』	
	——柳川春葉「虚無党の女」の原作	51
1	先行文献——底本確定のむつかしさ	51
2	角書「科学小説」の謎	55
3	呉禱漢訳とその底本——柳川春葉	56
4	原作——ル・キュー	58
5	春葉と呉禱の翻訳	61
6	超常現象	66
7	菊池幽芳『新聞賣子』および『薄命花』の広告	68
8	謎解き——鍵語としての催眠術（メスマリズム、動物電気）	72
9	補 足——未確認作品	80
4	呉禱漢訳「博浪椎」から『棠花怨』へ	
	——黒岩涙香訳『梅花郎』	84
1	「博浪椎」と『棠花怨』	84
2	天涯芳草館主のばあい	85
3	異題名の同一作品——底本が『梅花郎』	86
4	雑誌と単行本	87
5	黒岩涙香訳述『梅花郎』	92
6	呉禱漢訳法国雷科の謎	93
7	涙香訳と呉禱漢訳	99
8	物語の大筋	101
9	回数の違い——涙香41回と呉禱40章	107
10	おわりに	108

5	呉禱漢訳『狭黒奴』 ——尾崎紅葉訳『狭黒児』……………	112
1	はじめに	112
2	呉禱漢訳『狭黒奴』への言及	113
3	紅葉日訳『狭黒児』の原作	114
4	エッジワース「感謝する黒人」の背景	116
5	エッジワースの奴隷制度に対する考え	118
6	エッジワース作品の意図	121
7	エッジワース原作から紅葉日訳を経て呉禱漢訳へ	123
	奴隷シーザーは命を懸ける／恩義に報いる——その具体的方法を紅葉が提出する	
8	紅葉による改変	138
	最後部分の巧妙な改変／結末／紅葉の加筆	
9	結 論——紅葉改変の結果	145
10	まとめ	147
11	呉禱漢訳について	148
6	天宮人「(改良戯劇) 義侠記」 ——呉禱『狭黒奴』との違い ……	155
	『月月小説』初出と単行本／呉禱漢訳が底本である根拠／借用また借用／亡国貧民という設定／シーザー夫妻は感謝する／いくつかの改変——変化するクララなど／結末／まとめ／視点の移動	
7	呉禱漢訳デュ・ボアゴベ『車中毒針』	
	——英人ブラック『車中の毒針』……………	171
1	問題の所在	171
2	日本の常識	172
3	研究情報伝達経路——収集の困難さと理解の不足	174
4	『車中の毒針』の原作——マッカーサーの示唆	182
5	呉禱漢訳を検討する	187
	マクラ／『車中毒針』について	
8	呉禱漢訳ガボリオ『寒桃記』 ——黒岩涙香訳『有罪無罪』……………	201
1	ガボリオ本と涙香訳	201

- 2 英訳3種類 202
- 3 涙香訳の英訳底本——錦（ニシア）の謎 204
- 4 涙香本の主題 205
- 5 涙香『有罪無罪』から呉禱『寒桃記』へ 206
- 6 呉禱漢訳『寒桃記』について 209
- 7 錦嬢の登場 214
- 8 加筆と暗号通信文の削除 216
- 9 星川と伯爵夫人の直接対決 218
- 10 結 論 224
- 9 呉禱漢訳『寒牡丹』——尾崎紅葉『寒牡丹』……………227
 - 1 紅葉『寒牡丹』 227
 - 2 呉禱漢訳 230
 - 3 「紅茶屋」から始まる 234
 - 4 肉体と精神 237
 - 5 復讐——階級の対立 239
 - 6 結婚の刑——新しい段階が展開する 241
 - 7 呉城の問題 246
 - 8 蕾又伯爵夫人 248
 - 9 急展開 250
 - 10 ひとつの手続き 251
 - 11 結 論 256
- 10 呉禱漢訳モーパッサン『五里霧』
 - 上村左川訳「五里霧中」の原作……………260
 - 1 上村左川について 261
 - 2 「アフター・ディナー・シリーズ」について 262
 - 3 英訳短篇シリーズの訳者について 265
 - 4 偽作の混入 267
 - 5 呉禱漢訳と左川日記 267
 - 6 重大な改変 282

- 11 吳禱漢訳『美人煙草』について——広津柳浪「美人葺」……………288
- 1 誤記からはじまる 288
 - 2 吳禱漢訳『美人煙草』の寅半生評 293
 - 3 柳浪「美人葺」と吳禱漢訳 295
- 12 吳禱漢訳「新魔術」——大沢天仙『催眠術』……………306
- 漢訳「新魔術」／天仙原作と吳禱漢訳／催眠術
- 13 吳禱漢訳『侠女郎』——押川春浪著「女侠姫」……………320
- 1 はじめに 320
 - 2 春浪作と吳禱訳 321
 - 3 加筆の例 325
 - 4 日本人礼賛 327
 - 5 商務印書館の合弁問題 328
 - 6 「数千の銀貨を空中へ」 330
 - 7 冒険のはじまり 332
 - 8 幽霊城探険 334
- 14 吳禱漢訳「大復讐」——押川春浪「復讐」……………337
- はじめに／目次の比較対照／春浪作のおおよそ／春浪作と吳禱漢訳／結論
- 15 吳禱漢訳レールモントフ『銀鈕碑』
- 日訳「当代の露西亜人」……………350
- 1 吳禱漢訳の底本がわかるまで 350
 - 2 新聞広告など 352
 - 3 後の文学史、目録、叢鈔など 354
 - 4 明確な指摘 358
 - 5 嵯峨の家主人 359
 - 6 矢崎日訳と吳禱漢訳 361
 - 7 「銀鈕」の謎 367
 - 8 補 足 373
- 16 吳禱漢訳ズーダーマン『賣国奴』
- 登張竹風訳『賣国奴』……………378

- 1 呉禱漢訳『賣国奴』の公表経過 379
『繡像小説』連載／竹風単行本と『繡像小説』の掲載——発行遅延説／商務版「説部叢書」の『賣国奴』1——元版系／陳大康のばあい／商務版「説部叢書」の『賣国奴』2——初集本／中村忠行ほかのばあい
- 2 中村忠行が登張竹風を指摘する 395
- 3 竹風訳『賣国奴』 397
- 4 呉禱漢訳『賣国奴』 399
竹風日記の大序／山園（バウムガルト）中尉と砂田（シュランデン）男爵／砂田城攻撃＝猫橋事件——呉禱の誤解1／百合の証言という加筆——呉禱の誤解2／百合（レギーネ）の登場／百合と褒賞金——解釈はひとつではない／男爵と百合／保正の百合に対する心情の変化／百合の表情／性的表現の抑制、削除／百合が父親に殺される
- 5 呉禱による文末の加筆 432
【追記】2022.10.1 441
- 17 登張竹風「賣国奴」の雑誌『明星』掲載について ……………443
- 18 漢訳ドーデ「ベルリン包囲」——呉禱、竊名、胡適 ……………446
- 1 はじめに 446
- 2 呉禱のばあい 447
- 3 竊名のばあい——周瘦鷗か？ 461
- 4 胡適のばあい 469
- 19 包天笑漢訳クレイ「古王宮」——涙香訳『古王宮』の原作 ……………476
- 1 クレイ原作から日記と漢訳へ 478
- 2 天笑漢訳と涙香日記 480
- 3 天笑の改編 484
- 20 包天笑漢訳ヴェルヌ『碧海情波記』
——森田思軒訳「大東号航海日記」 ……………491
- 1 底本 492
- 2 天笑漢訳の改編者表記 495

3	思軒識	496
4	本文	497
5	思軒日訳の本筋あるいは重点	502
6	思軒抄訳の理由	507
21	包天笑漢訳「新造人術」——原作と底本	510
1	はじめに	510
2	原作の探索	511
3	底本の探索	514
4	ヘリング原作と春影日訳、さらに天笑漢訳	515
	前言／レイーズ・ストロング原作、抱一庵訳「造人術」——天笑と魯迅／翻訳の方向／人造人間は半人半羊／「バツクスター」漢訳の謎	
5	結末	524
22	陳景韓漢訳『侠恋記』——有明山樵『伯爵と美人』	528
1	はじめに	528
2	有明山樵『伯爵と美人』と『大和撫子』	529
3	杉山藤次郎と西村富次郎	532
4	住所から見る杉山藤次郎と西村富次郎	533
5	有明山樵『伯爵と美人』と陳景韓漢訳『侠恋記』	535
6	回数ズレ	540
7	結末部分を創作する	545
23	陳景韓漢訳コレリ『新蝶夢』の奇怪	
	——黒岩涙香訳『白髮鬼』	552
1	陳景韓漢訳がかもす違和感	552
2	原作と底本	553
3	漢訳と言及文献	555
4	原作者名表記の疑問	557
5	翻訳の実例	558
6	突然の改変と転換	566
7	包天笑の証言	567

- 8 陳景韓の弁明 570
- 24 モーパッサン最初の漢訳「義勇軍」**
 —橋本青雨訳「義勇軍」……………574
- 1 陳景韓漢訳モーパッサン 574
- 2 先行文献 576
- 3 青雨日本語訳の問題 579
- 4 青雨日訳と景韓漢訳 582
- 25 陳景韓漢訳ル・キュー「虚無党奇話」**
 —松居松葉『虚無党奇談』……………591
- 1 渡辺浩司の指摘 594
- 2 『新新小説』のばあい 595
 一 「第一 政府……地獄」／二 「第二回 西比利亞之雪」／三 「第三 我友伯爵夫人」／三b 「第三 伯爵夫人(一)」／
- 3 『月月小説』のばあい 605
 三 「女偵探」上下下——3度目の漢訳／四 「爆烈弾」上下／主人公の交替、あるいは人称の変更——一人称から三人称へ／五 「俄国皇帝」上中編
- 4 『小説時報』のばあい 617
- 5 結 論 620
- 26 もうひとつの漢訳ル・キュー「虚無党奇談」**
 —松居松葉『虚無党奇談』……………623
 帝召訳「虚無党奇談」／ル・キュー原作から松葉日訳を経て景耀月漢訳へ／景耀月について
- 27 林訳『俄宮秘史』の原作・補記**……………636
 林訳『俄宮秘史』の原作／魁特の理由／原作者の国籍／馬泰来の探究と樽目録の対応／付建舟の記述／付建舟の誤指摘／『俄宮秘史』——「法国魁特転訳徳文」について
- 28 母我漢訳プーシキン「棺材匠」**——アリンスン英訳……………650
 雑誌初出／鍵語はアリンスン英訳／母我漢訳の底本はアリンスン英訳
- 29 漢訳『露漱格蘭小伝』のこと**……………657

はじめに／小説のあらまし／内容紹介／新聞広告

- 30 アンデルセン最初の漢訳「裸の王様」
——台湾版「某侯好衣」……………663
従来からいわれる漢訳の歴史／新発見の「某侯好衣」／日本語底本の特定
- 31 劉半農「洋迷小影」——杉谷代水「(狂言)衣大名」……………672
劉半農「洋迷小影」の前言／いくつかの疑問——「洋迷小影」の意味／半農
のいう日本喜劇とは——坪内逍遙と杉谷代水／冒頭部分の比較検討／衣裳の
色合いと模様／結末
- 32 貢少芹訳『一粒鑽』の原作……………686
貢少芹漢訳『盜花』——研究者の誤解か？／Cholmondeley について／『一
粒鑽』の原作／貢少芹漢訳を見る／婚姻法／登場人物対照表／結末の相違
／結論
- 33 漢訳デラノイ『鉄錨手』の原作……………702
- 1 中村忠行の説明 703
 - 2 中村説の影響 705
 - 3 注目点にもどる 706
 - 4 原作の特定 706
 - 5 『M. R. C. S.』が『鉄錨手』になる理由 710
 - 6 漢訳者は楊心一 711
 - 7 楊心一について 712
 - 8 『(偵探小説)雙指印』のこと 713
- 34 『老殘遊記』初版の刊年——孟晋書社に關係して……………717
- 35 劉家公認の贋作『老殘遊記』……………723
- 1 いくつかの版本 724
 - 2 不思議な肖像 726
 - 3 胡適が偽作と指摘 728
 - 4 あらたな展開 730
 - 5 劉大紳の証言 736

- 6 劉大紳と百新公司の人々 737
- 7 劉大紳の傳幼圃觀 740
- 8 劉厚沢の陳蓮痕説 741
- 9 ふたたび胡適について 742
- 10 最後に汪原放「校読後記」 743
- 36 「説部叢書」の箱売り——商務印書館の販売活動…………… 746**
- 1 「説部叢書」の成立から 747
- 2 製本の変化 749
- 3 「説部叢書」の箱売り 751
- 4 商務印書館と金港堂の合併をめぐる 757
- 5 初集本の木箱広告 762
- 6 もうひとつの「説部叢書」第一集——試行本 766
- 7 「説部叢書」初集の冊数 768
- 37 厚生「青娥血涙」は康有為作か…………… 771**
- 【附録】清末小説研究会ウェブサイト2021.11.15【追記】2022.9.30
- 38 民初小説年表の最新成果——黄曼『民初小説編年史』について………… 776**
- 全体の紹介／新しい発見と注意点／まとめ
- 39 『清末民初報刊小説目録（1815-1919）』について**
- 出所不明の目録を私が信用する理由 …………… 783
- はじめに——不思議な目録／入手の経緯／大要 編集方針、詳細、厳密、不一致—
—しかし欠陥ではない、広範囲／編者を探索する／最後に
- 40 文娟論文を評した文章を評する——陳鵬安論文について …………… 795**
- はじめに／文娟論文からはじまる／陳鵬安論文の指摘と新発見

あとがき 806

凡 例

- 1 書名の角書、副題は、本書での初出のみ記し、以下は省略する。
- 2 旧暦は漢数字で、新暦はアラビア数字でしめす。
例：宣統二年九月十九日（1910.10.21）
ただし、引用文はこの限りではない。
- 3 記号は以下のとおり。
『 』 雑誌、新聞、単行本（書名）、全集
「 」 論文、雑誌掲載、あるいは単行本中の個別作品、作品名一般、叢書名
[] 原文と翻訳文の区別がつきにくいばあい、使用することがある。また筆者の注
- 4 漢語文献に使用される記号は、そのままを引用する。ただし、簡化字は使わない。日本語漢字にかえる。
- 5 カッコ類は、引用文のなかでも原文のままである。例：「○○「○」○」とし、「○○『○』○」と書き換えない。

呉禱漢訳小説の特色

『清末小説から』第150号（2023.7.1）に掲載。呉禱漢訳小説について概略を説明する。呉禱が日本語翻訳から選択した作品の内容が見事だ。女性が活躍する小説も多い。これらが特色になっている。もうひとつは白話を主に使用し日本語底本に忠実であることだ。少なくともそうなるように努力している。清末民初の時代にあっては珍しい部類にはいる。また呉禱にとって漢訳の仕事は専門でないこともいう。

漢訳についての低い評価、あるいは評価の変化

清末民初小説に対する評価は高くない。それには理由がある。文学革命派が主流を占めた五四以後の中国学界は清末民初の作品を目の敵にした。自分たちが乗り越えようとした障壁であったからだ。また前の時代を否定して今いる自らの正当性を主張するためでもある。公正を求めるほうが無理なのだ。しかしその影響力は強い。世界に波及している。

翻訳小説になるとほとんど罵りに近い言葉が投げつけられる。翻訳する価値のない外国の駄作を多く取り上げた、もとの戯曲を小説化した、誤訳が多い、勝手な加筆、削除を行なった、などなど。林紘を批判した言葉だ。しかしその負の側面が漢訳小説全体に押し広げて適用され「常識」になった。「常識」だから誰も疑うことはない。

後の研究者は学界の清末民初翻訳についての「常識」を当然のように学習し努力の末に自分の血肉にした。それ以外は受けつけない人々が量産されたことをいう。中国以外でも同様だ。研究者にはそれが動かぬ拠りどころとして各自の背後

にある。その結果に悲劇が生まれるのは必然となる。

バーサ・M・クレイ原作が漢訳されてふたつの作品になった。ある研究者は先行論文を参考にしつつ漢訳2作品が同一原作にもとづくという前提を定めた。それを確認する論文を書く。原作を含めた3作品の登場人物名を対照した(2018)。その結果は漢訳2種ともに原作とは一致するところがまったくない。原作に登場しない人物は漢訳者が勝手に創作したと説明した。原作とはかけ離れた漢訳人名であることを疑問に思わない。漢訳者が自由勝手な漢字を当てているとあくまでも固く信じている。その自信はどこから生まれるのか。

答えは簡単だ。清末民初の漢訳がでたらめだという学界の誤った「常識」をその研究者が受け入れているからにほかならない。当時のいい加減な漢訳だからまったく別の名前を使用することは普通にあるという理屈だ。結論が先行している。無理やりこじつけているという意識が皆無である。先行論文と自分はいくまでも正しい。清末の漢訳者の方が誤っている。先入観で固まった判断姿勢は複数の論文で変わらない。

普通、それほど異なった訳語ならば奇妙に感じるのではないか。原作にない人物を漢訳者が作るのはおかしいと思わないのか。調べてみれば英語原作とは関係のない別々の漢訳だった。漢訳2種の原作者はクレイではあっても異なる作品である。原作が違うのだから人名が相違するのは当然だ。筆者は批判しているのではない。その研究者は中国学界の「常識」を正直に鵜呑みしたことによって犠牲者になったといえる。痛ましい。気の毒に感じる。

林紓についての事例をあげる。文学革命派は特別に的を絞って林訳を批判した。彼らの目的は罪もない林紓を引きずりだして主敵に仕立てあげることだった。林紓は戯曲を小説にかえて翻訳した、戯曲と小説の区別がつかない、と虚偽をでっち上げて非難した。これが歴史的事実だ。不可解なことに同時代およびその後の研究者たちは誰も林紓を擁護しなかった。世界中の研究者が林紓を罵る快楽に没入し続けた。

そこに新しい資料が発掘された。その結果、近代中国文学史上まれにみる冤罪事件であることが判明する。中国学界の「常識」が転覆した。1918年の「双簧戯(なれあいの芝居)」(『新青年』掲載)から始まって2007年まで林紓は無実の

罪を着せられていた。その時間は十分すぎるくらいに長い。

それを知った中国のある読者は驚いたようだ。このような定説を覆す問題について外国の研究者に頼らなくてはならないのか、あなた達は書くことができなかったのではなく書く勇気がなかったのだ、と正直な感想を書き込んでいる（豆瓣読書2021.3.10）。中国の研究者は外国人からの指摘を嫌う。それが日本からだど怒りが倍増するのを経験で知っている。日本小説の登場人物に成りすました中国人が反撥して日本人の著作に低評価を下す（2022.11.23）。屈折しているから笑う。中国学界の「常識」が一般人にも浸透していることが明白だ。嘲罵したところで林紓冤罪の事実は微動だにしない。

一時期あれほど激しく展開していた劉鉄雲「老残遊記」批判だった。胡適批判でも同じことだ。現在は知らぬ顔をして正の方向で評論する。それらを見れば中国学界の価値判断は不変のようである。時代によって上級の判断も変化するという先例だ。ゆえにこれまで長年堅持していた林紓批判を今後どう処理するのか興味深いことになる。

林紓批判を維持していた中国学界の影響が日本にいる瀬戸博士の論文に露呈しているのも不思議ではない。立論の方法は昔からある使い古されたものだ。林紓を批判するという目的を最初に定める。それに向けて従来からある資料を配置しなおす。新資料により林紓の冤罪が証明された。だがそれすら捻じ曲げて論点のすり替えに用いた確信犯だ。林紓批判の資料が不足すれば捏造した。それが瀬戸宏『中国のシェイクスピア』（松本工房2016.2.29）である（のちに漢訳。（日）瀬戸宏著、陳凌虹訳『莎士比亞在中国：中国人的莎士比亚接受史』広州・広東人民出版社2017.1）。中国学界に事大する瀬戸博士にしてみればどこが悪いかというかもしれない。結果とし東京大学教授、慶應大學教授、華東師範大学副教授を巻き込んで彼らに軽く致命傷を負わせている（瀬戸著作の嘘にまみれた林紓批判部分を賛美あるいは黙認するという間違った書評を書いたことを指す）。

樽本照雄著、李艶麗訳『林紓冤案事件簿』（北京・商務印書館2018.7。底本は樽本『林紓冤罪事件簿』清末小説研究会2008.3.31）が出版された。刊行したのが商務印書館であることが重要だ。すなわち林紓冤罪の事実を公認したと理解できる。今後は批判を保留するという合図を発信したことに等しい。中国学界そのものが林紓

評価に関する基本方針を転換した。その意義は小さくない。

ところが瀬戸博士は変化に気がつかなかっただけ。北京の商務印書館創業120年国際学術研討会に参加して従来通りで変わらぬ林紓批判の漢語論文を重ねて発表した。瀬戸宏「商務印書館版《吟辺燕語》的文化意義——再論林紓的莎士比亞観」（『中国出版史研究』2019年第4期 2019.12）だ。以前、瀬戸博士の日本語文章について次のように書いたことがある。「私が今まで読んできた漢訳シェイクスピア関係の論文のなかで、瀬戸博士のものは最悪最低である」。瀬戸博士の漢語文章はこの判断をより強固なものにした。樽本照雄「林訳の改編者表記——瀬戸博士の嘘と捏造」（『清末小説から』第140号 2021.1.1.のち樽本『清末小説四談』2021.5.1所収）で詳しく述べた。

林訳を含めて清末民初の翻訳群は不当に低く評価されていると繰り返す。必要なのは批判することではない。当時の翻訳作品の内容がどうであったのか、原作の発掘と翻訳文そのものを具体的に検討することが不可欠なのだ。いまだに原作不明の漢訳作品がいくつもある。原作探索の困難さをそこから推し量ることができる。

もうひとつ知っておくべきことがある。清末民初の翻訳界に外国作品は原書から直訳しなければならないという認識はなかった。漢訳者は自分が理解する外国語を通じて作品を選択した。重訳になることは珍しいことではない。また訳者が底本を自由に変更する、加筆する、削除するなどの行為が普通に見られる。容認されていたというよりも原作を知らない読者は誰も気にしなかった。だいいち原作、底本などを明記する習慣さえ存在しなかったのだ。創作のつもりで読み始めたら内容から翻訳だと気づくことも当たり前が発生する。もし直訳しない漢訳は翻訳ではないと批判するならばそれは清末民初における翻訳の実情を無視した発言だ。現在の基準を過去に当てはめて糾弾するのは研究とはいえない。

その時代に必要とされ適合する翻訳の形が存在した。内容をざっくり把握し細部にはこだわらない豪傑訳もその存在理由がある。底本を改変して翻案にする作品も出る。忠実な翻訳ではないと切り捨てることは好ましい態度ではない。過去の漢訳を否定してどうしたいのか。そうではなくどの部分をどのように削除要約して豪傑訳になったのか、どこが翻案なのかを詳細に探ることが大切だ。そうし

てこそ建設的な研究になる。

呉禱漢訳小説の特色

本稿では呉禱の漢訳小説いくつかについて簡単に説明する。詳細は各論を見てほしい。

創作は「開国会」（1907）、「革命軍」（1911）、また陳鵬安（2022）によるほか「滌浦狂濤記」（1919）、「新東厨司令登庸記」（1919）、「寓言小説黄龍陣」（1920）、「社会実写小説弱女救災記 一名歳寒松」（1920）があるという。それらに加えて坂口模次郎著『成吉思汗少年史』（1903）および松村介石著『社会改良家列伝』（漢訳刊年不明）も説明の対象にはしない。また未見の作品については発言を控える。

漢訳小説作品のおおよそは文末に原作者の国別に簡単な目録を作成したから見てほしい（呉禱漢訳小説の底本と原作一覧）。原作不明3種があるから完璧というわけにはいかない。輪郭を示したとご理解いただきたい。

一覧によれば呉禱漢訳小説は1905年から1913年に公表されている。ただし1908年から1912年までは空白、あるいは未発見である。いまのところわかっているのは実質4年間に7ヵ国22作品を清末民初の社会に送り出したことだ（呉禱漢訳の国別集計）。その漢訳全体が1919年の五四以前であることは注目にあたいする。

おおまかな分類で短篇13種（うち底本の雑誌『太陽』掲載は10種）、中篇3種、長篇6種である。白話を使用した漢訳が20種もあるのは時期的に見て画期的であり特徴的だ。

翻訳家の活動として4年間に22作品というのは数的にはどうなのか。そのうち短篇が約6割を占める。全体をみれば作品数は少ないといわざるをえない。そこから推測すれば呉禱にとって翻訳の仕事は専業ではなかった。専業であれば漢訳作品はもっと多いはずだ。

呉禱は以前に愛国学社で歴史、地理の教科を担当した。愛国女学では伝統音楽を教えたこともある。それくらいしかわかっていない。ただし書家としての呉禱に注目すれば日訳小説を漢訳したのは余技の可能性が高い。彼を経済的に支えて

いたのは主として書家の活動であったということになる。1900年頃からだからかなり早い。

漢訳を専業とはしていなかったとしても選択した作品そのものは充実している。

呉禱はポーランド1種、ロシア3種、ドイツ1種を日本語経由で漢訳した。ロシアのチェーホフ、レールモントフ、ゴーリキーなどの作品は清末においては早期の紹介になる。異色だと言わなくてはならない。それを強調する中国の研究者は阿英を含めて多い。呉禱漢訳といえばロシア作品をあげるのが以前の中国学界では定説だった。

呉禱漢訳小説で言うべき特色がひとつある。底本に日本語小説を使用したことだ。日本人作家の作品は5種ある。残りの17種は日本語に翻訳された海外6カ国の作品だ。そこで呉禱漢訳小説研究には日本語の知識が必要となる。翻訳内容を検討するばあい底本の日本語作品を使用するのが原則だ。日本語の壁がある。呉禱漢訳を対象とする研究者が少ない理由のひとつとなる。

それに関連する例あげる。呉禱漢訳『銀鈕碑』（1907）について阿英が不可解な紹介をしている。呉禱はレールモントフ作、嵯峨の家主人訳「当代の露西亜人」（1904）を底本とした。レールモントフ『現代の英雄』に収める「ベーラ」部分だ。もともと全訳ではない。しかし1907年というのはかなり早い。

阿英は呉禱漢訳の冒頭部分を引用した（1938初出未見。『小説四談』1981。233頁）。つづいて日本語底本を提出して比較検討すべきところだ。ところが阿英は楊晦が英訳から重訳する『当代英雄』（1930）の関連部分を引いて呉禱漢訳と対比させた。論の進め方が基本的に間違っている。異なるものを並べて両者に少なくない差異があるという。見当違いもはなはだしい。阿英は日本語底本について知識がなかった。不十分な説明にならざるをえない。呉禱漢訳を顕彰するつもりがだいなしになっている。清末文学研究の権威である阿英がそういう杜撰な文章を書いた。残念以外のなにものでもない。

現代のある研究者も同じことをしている。チェーホフ作、薄田斬雲訳「黒衣僧」を呉禱が漢訳して『黒衣教士』である。その研究者が呉禱漢訳を比較検討する際に使用したのは斬雲日訳ではなかった。ロシア語から直接翻訳した1992年の漢訳本を主に取り出した（2013）。結論が説得力を持たないのは当たり前だ。それ

が学術誌に掲載される。関係者は研究方法が誤っていると気づいていない。問題の根が深いことを示している。現在まで阿英の影響力が及んでいることがわかる。

呉禱漢訳小説についていえば選択した作品の題材が多彩で豊富である。少年少女小説から冒険小説、探偵小説、裁判小説、恋愛小説、復讐譚、恩義と友情、虚無党、催眠術、精神錯乱、ロシア人と異民族など多方面にわたっている。

同じころに前述林訳小説がある。林紓のばあいは活動時期が長かった。1899年から死後の1925年にも林訳は公表されている。主として英語とフランス語に堪能な共訳者が多数いたから翻訳数も200種前後にのぼる。数の上では比較のしようもない。だが呉禱漢訳は林訳とは重複しないのも特色のひとつだ。林紓には共訳者がいたのと同じく呉禱には日本語翻訳があった。口述者と日本語本の違いはあるが翻訳方法は共通する。多種多様な日訳の中から選択して22種の呉禱漢訳が生成された。

呉禱は日本語をどこでどのように学んだか。その詳細は明らかになっていない。以前の研究論文では呉禱は日本に留学したと普通に書いていた。そういうだけで誰もその証拠を提出してはいない。

筆者が考えるに呉禱は日本に留学はしていない。ひとつの根拠は留学生名簿などに呉禱の名前が見えないからだ。呉禱は書物で日本語を学んだと思われる。その場所は上海かどうか不明である。

もうひとつの根拠は誤読だ。呉禱の漢訳作品を読むと日本語のひらがなカタカナ読みについて誤解するところがある。

小さな例をあげると「ツ」と「シ」を混同して漢訳する。「英国勃拉錫克」がその見本だ。英人「ブラック」の「ツ」を「シ」と見間違っ漢字の「錫xi」を当てた。

あるいは日本語の副詞を知らずに取り違える。日本語底本に「中学校からの帰路に、ハタと行き逢った」という個所がある。「ハタと」は副詞で「思いがけず」「ふっと」「やにわに」という意味だ。呉禱はそのカタカナが理解できなかった。「向他姨母家黒塔街緩緩行走（彼のお婆の家にむけてハタ街をゆっくりと歩いた）」とした。「ハタ街（黒塔heita街）」という場所名に誤訳している。日本に留学していたならばそのようなことはないだろう。

呉禱の誤訳は日本語能力に関係するが別の側面を明らかにしている。意味不明の箇所は普通ならば漢訳しないのではないか。しかし呉禱は努力したうえで結果として間違った。そこには日本語底本に忠実であろうとする彼の翻訳姿勢が見える。誤訳がかえって彼の漢訳者としての誠実さを浮かび上がらせるのだ。

日本に留学しなかった包天笑が日本語作品の漢字を拾って漢訳したのと似ている。ならば日本に留学した陳景韓が正確に漢訳したかと問われればそうとばかりはいえない。最初は直訳し次に翻案して最後は創作した作品がある（『俠恋記』1904）。作家としての側面が強く出ているのだ。あるいは長篇小説を強引に短縮して冒頭部分だけを出した。漢訳短篇『新蝶夢』（単行本1906）である。奇妙きわまりない。包天笑もその事を回想してあきれていた。日本語理解度の問題ではなく翻訳に対する個人の姿勢に起因する。

包天笑、陳景韓らは翻訳といいながら日本語作品を利用して自分の創作をすることがたまにある。それらに比べれば呉禱漢訳は基本的に異なる。日本語底本を尊重しながら漢訳したことを指す。登場人物は基本的に省略することなく漢訳した。規模の問題ではあるが底本から離れて別物になるほどに大幅かつ無理な改作をすることはない。

呉禱漢訳には問題小説が含まれる。問題小説とは内容が複雑重厚であることをいう。読者が読んだ後に深く考え込むほどの作品だ。

たとえばエッジワース原作、尾崎紅葉訳『俠黒児』（1893）である。紅葉は“THE GRATEFUL NEGRO 感謝する黒人”を翻訳した。紅葉日訳を呉禱が忠実に漢訳して「俠黒奴」（1906）だ。恩義と友情の板挟みになった黒人奴隷を主人公とする。エッジワースはジャマイカの奴隷制度を背景に設定し普遍的な命題である恩義と友情の二者択一を主人公に迫った。呉禱漢訳から改良戯劇の天寶宮人編串「義俠記」（1907-08）が生まれた。小説から戯曲へと拡散するほどの驚愕度があった作品だということができる。エッジワースから紅葉（忠実な呉禱漢訳）を経て改良戯劇になる。紅葉が部分的に書き換え、戯曲も改変して結果として原作とは別作品になった。その経過がおもしろい。

原作不明、長田忠一＋尾崎徳太郎訳『寒牡丹』（1901）を呉禱漢訳は日訳題名そのままの『寒牡丹』（1906）だ。ロシア貴族が一般女性に性的暴行をはたらい

た。ロシア皇帝の裁定で加害者と被害者が結婚させられる。そのうえで男性はシベリアに流刑となった。伯爵邸に入ったその女性は堅実に財産を管理して地域の慈善医療にも心を配る。最終的に相手の愛情を獲得する。加害者と被害者が結びつくという小説内容が十分に意想外かつ強烈である。ロシアの自立する女性が性的暴力に負けずに階級を越えた愛情をつかむ。女性の強靱さを見せつける。重厚にして通俗的な恋愛小説だ。呉構による作品の選択がよい。

呉構漢訳『寒牡丹』（1906）の底本はガポリオ原作、黒岩涙香訳『有罪無罪』（1889）である。偵探小説という角書がつく。証拠というがそのまま信用していいのかと問題提起する。十分に問題小説だ。確実な証拠が追及される裁判小説の要素を備える。弁護士が犯人とされた主人公の無実を証明するために手をつくす過程が刺激的だ。裁判場面が登場するのも清末の当時としては珍しいだろう。少し残念なのは底本にある暗号使用部分を呉構が省略したことだ。漢訳していれば暗号がでてくる初期の翻訳となっただろうと惜しむ。

前出レールモントフ作、嵯峨の家主人訳「当代の露西亜人」（1904）がある。ロシア軍士官と異民族の娘ペーラをめぐる物語だ。呉構は題名を『銀鈕碑』（1907）に変えた。呉構が題名を変更したのは作品の結末を少し書き換えたことが原因である。そうすることの方が小説としてより印象的になると考えた。そういう時代の漢訳だ。冷酷なロシア人とイスラム教徒の少女という非凡な題材が珍しい。

前出日訳の「黒衣僧」（1904）を漢訳して『黒衣教士』（1907）だ。黒衣僧と会話する精神錯乱の研究者という内容である。狂人を主人公にする小説が清末に出現するなど誰が想像できただろう。心理小説としても無視はできない。

ゴーリキー作、長谷川二葉亭訳「猶太人の浮世」（1905）の漢訳が「憂患余生」（1907）になった。ロシアにおけるユダヤ人問題というのも稀有な主題である。

以上のロシア小説の日訳はいずれも雑誌『太陽』に掲載された。それが呉構漢訳によって清末の1907年に登場している。1919年の五四よりもかなり先行することにご留意いただきたい。

原作にない部分を結末に加えた作品はもうひとつある。ズーダーマン著、登張竹風訳『賣国奴』（1904）と同じ題名で漢訳「賣国奴」（雑誌掲載は推定1905）だ。

内容そのものが衝撃性に富む。賣国奴を父に持った息子の苦悩と召使いの女性との純愛を物語る。これほど濃密な作品が清末にいち早く出現しているのは驚きでもある。ただ呉禱は戦闘場所の地理的位置を誤解する。誤読はしかたがない。また最後部分に底本には存在しない後日譚を創作して加筆した。呉禱にしてみればそうすることが必要だった。原作を知っているから余計だと思う。そこを批判するならば魯迅、周作人の漢訳も同じ例があるから同様に指弾すべきだ。「賣国奴」のばあいはそれらの部分的不具合がある。しかし作品そのものの有する豊潤さが漢訳の欠陥を上回る。

自立する女性が主人公、あるいは登場する作品をほかにも漢訳している。大沢天仙著、山陰金為+銭塘呉禱合訳「新魔術」（1906）と広津柳浪著、銭塘呉禱訳「美人煙草」（1906）だ。両作品ともに日本原作である。女性が働いて恋人の男性を経済的に援助し大学を卒業させる。これも小説題材として新しい。

「侠女郎」（1913）では日本の若い女性が海外で活躍する。探検小説の要素がある。押川春浪「女侠姫」（1912）を原作とする。

葛維士（ガーヴィス）著、中内蝶二訳、銭塘呉禱重演「理想美人」（雑誌掲載は推定1906）はいわゆる不治の病にかかった女性が題材となっている。それだけで驚愕度が強くかつ貴重な小説といえる。

ドーデ「ベルリン包囲」を押川春浪が翻訳して「老愛国者」（1912）だ。呉禱が漢訳して「拊髀記」（1913）になった。老愛国者が主人公だがそれを精神的に支える孫娘の存在も忘れることはできない。

作品の主人公が女性である作品は5種ある。主人公ではないが重要な役割を担っている女性の作品は7種にのぼる。恋愛小説があるから女性が登場するのは自然だ。しかし22作品のほぼ半数以上で女性が活躍するのは注目してもいい。

呉禱による独特な固有名詞漢訳法を説明する。

明治時代の日訳では固有名詞を日本化する作品がある。『賣国奴』（1905）ならば主人公のボレスラフ、フオン、シユランデン（Boleslav von Schranden）を例にする。竹風は日本風に砂田保正（すなだ やすまさ）に置き換えた。シユランデンから連想して砂田となる。別の漢訳者がいたとしてそういうばあいは砂田保正を使用するのではないか。あるいはまったく関係なく中国化する。ところが呉禱は

そうではない。日本語読みに漢語音を当てる。砂田は「史拿[那]特shinate」に、保正は「やす」から「約西yuexi」に漢訳した。呉禱以外にそういう例はないように思う。

もう少し実例をあげる。

『棠花怨』（1908。前身は「博浪推」1907）の底本は黒岩涙香訳『梅花郎』（1890）だ。呉禱はその底本作者を「（法）雷科」と表記する。雷科は涙香を指す。涙香（るみかう）の「るみ」に「雷lei」を、「かう」に「科ke」を当てた。フランス人にしたのはご愛嬌だ。

『梅花郎』の主人公梅花郎（ばいくわらう）は呉禱の漢訳では「裴克羅peikeluo」である。

『車中毒針』（1905）の画家 Paul Frenense は英人ブラックによって加納元吉になった。呉禱は加納（かのう）を音読みして漢字の「葛撓genao」を当てる。

『寒桃記』（1906）の主人公はガボリオ原作と英訳は Jacques de Boiscoran ボイスコランだ。涙香は「姓ホースカーラン、名ヂヤケヤス」とする。そこからの連想で日本名は星川武保だ。涙香独自の表記法といえる。呉禱は星川（ホースカーラン）に「賀士倫heshilun」を配置して近似だ。

以上のとおり。これらの作品はいずれも日本語底本のままではない。日本風登場人物名を漢語音で写したことで外国小説風になった。いってみれば日本風を排除してもとの原作にもどったのだ。日本化しない日訳は違う。「パーラン」とあれば漢訳してそのまま「巴蘭」だ。あるいは日本語原作の作品の登場人物は漢訳ではそのままを使用しているから区別がつく。

呉禱漢訳小説には負の側面も一部だがたしかに存在する。情景描写について呉禱の漢訳は加筆して飾る傾向があるのは許容範囲内である。誤訳は翻訳につきものだ。また作品によっては最後部分を少し書き換え、あるいは加筆した。望ましいことではなかった。しかしそれが許された時代の漢訳である。

総体的にいて呉禱漢訳小説の特徴ひとつは問題小説を含む多彩な内容であることだ。それを選択した呉禱の見識は特に優れている。評価されるべきだと思う。また女性が活躍するものも多数を占める。特色のひとつだ。さらに白話を使用して日本語訳に忠実であろうとしている。これが基本姿勢である。力づくで変更し

て別作品に仕立て上げたものはない。1919年より以前の実例だから強調している。以上により筆者は呉構漢訳小説を高く評価する。

呉構漢訳の国別集計

	1905	1906	1907	1908	1909	1910	1911	1912	1913	合計
イギリス		3	2							5
フランス	1	2	1						1	5
日 本		2	1						2	5
ポーランド		1								1
ロシア			3							3
ドイツ	1									1
アメリカ		1				1				2
合 計	2	9	7			1			3	22

呉構漢訳小説の底本と原作一覧（創作は含まない。簡略化して示す。詳細は樽目録を参照のこと）

イギリス 1906年3種／1907年2種

- 「斥候美談（軍事小説）」 フランス軍人の狐狩り 短篇 白話

科楠岱爾著（日）高須梅溪訳意 中国銭塘呉構重演 『繡像小説』72期 刊年不記。推定丙午1906／コナン Doyle 作、高須梅溪意訳「（軍事小説）大佐の罪（斥候の滑稽談）」『太陽』1904。ARTHUR CONAN DOYLE“THE CRIME OF THE BRIGADIER 准将の犯罪”（“THE STRAND MAGAZINE”1900）

- 「侠黒奴（短篇小説）」 恩義と友情 中篇 白話

（日）尾崎紅葉著 銭塘呉構訳演 『東方雑誌』1906／（渡辺浩司）紅葉山人（尾崎紅葉）『少年文学第19編 侠黒児』博文館1893。MARIA EDGEWORTH“THE GRATEFUL NEGRO 感謝する黒人”（“POPULAR TALES”1804）

- 「理想美人」 いわゆる不治の病 短篇 白話

葛維士著 (日) 文学士中内蝶二訳 钱塘呉構重演 『繡像小説』71-72期 刊年不記。推定丙午1906/ガー井”ス作、中内蝶二訳「理想の美人」『太陽』1904。CHARLES GARVICE 著。原作不明。

●『薄命花 (科学小説)』催眠術 短篇 白話

(日) 柳川春葉著 呉構訳 商務印書館1907/柳川春葉「虚無党の女」『太陽』1904。
WILLIAM TUFNELL LE QUEUX, “THE SOUL OF PRINCESS TCHIKHATZOFF”
 (“STOLEN SOULS”1895所収)

●「博浪椎 (裁判小説)」恋愛の四角関係 長篇 文言 原作不明 GEORGE MANVILLE FENN とか

(法) 雷科著 天涯芳草 (呉構) 訳 『競立社小説月報』1907→『棠花怨 (裁判小説)』
(法) 雷科著 中国天涯芳草館主海陽呉構宣中訳 中国図書公司1908/黒岩涙香訳述
『梅花郎』明進堂1890

フランス 1905年1種/1906年2種/1907年1種/1913年1種

●『車中毒針 (偵探小説)』殺人事件 長篇 白話

(英) 勃拉錫克著 呉構訳 商務印書館1905/英人 (石井) ブラック (HENRY JAMES BLACK 快樂亭ブラック) 演述、今村次郎速記『(探偵小説) 車中の毒針』三友社1891。
底本のアメリカ版は F. DU BOISGOBEY 原著、S. LEE 英訳“THE MYSTERY OF AN OMNIBUS.”1882。イギリス版あり。フランス語原作：FORTUNÉ DU BOISGOBEY, “LE CRIME DE L'OMNIBUS.”1881

●『寒桃記 (偵探小説)』四角関係の殺人事件 長篇 白話

(日) 黒岩涙香原著 钱塘呉構訳述 中国商務印書館1906/黒岩涙香『有罪無罪』魁真樓書店1889.11.5。英訳“WITHIN AN INCH OF HIS LIFE”1874。原作 E/MILE GABORIAU“LA CORDE AU COU”1873

●『寒牡丹 (哀情小説)』自立する女性 階級を越えた愛情 長篇 白話 原作不明

(日) 尾崎紅葉著 钱塘呉構訳 中国商務印書館1906/長田忠一+尾崎徳太郎『寒牡丹』春陽堂1901

●『五里霧』妻とその愛人に対する復讐物語 短篇 白話

(日) 上村左川著 杭県呉構訳 商務印書館1907/モウパッサン作、上村左川訳「五里霧中」『太陽』1902。GUY DE MAUPASSANT 著、ROBERT CHARLES STORRS WHITLING 英訳“MONSIEUR PARENT” (THE AFTER-DINNER SERIES. GUY

DE MAUPASSANT'S SHORT STORIES. 3RD SERIES,[1896])。原作“MONSIEUR PARENT”1885

- 「拊髀記（歴史小説）」老愛国者と孫娘 短篇 白話
（日）押川春浪著 中華吳構宣中訳 『小説月報』1913/[渡辺105]押川春浪「巴黎奇談 老愛国者」（『英雄小説 大復讐』本郷書院1912。GEORGE BURNHAM IVES 英訳 “THE SIEGE OF BERLIN (“ALPHONSE DAUDET'S SHORT STORIES”1909)。原作 ALPHONSE DAUDET“LE SIÈGE DE BERLIN”1873
-

日本 1906年2種/1907年1種/1913年2種

- 「美人煙草（立志小説）」自立する女性 短篇 白話
（日）広津柳浪著 錢塘吳構訳 『東方雜誌』1906/（広津）柳浪「美人萇」『太陽』1905
 - 「新魔術」催眠術 働く女性 中篇 白話
（日）大沢天仙著 山陰金為、錢塘吳構（構）合訳 『新世界小説社報』1906/大沢天仙（興国）『催眠術』文禄堂書店1903
 - 『虚無党真相』虚無党物語（梁艶論文による）漢訳未見 長篇 白話
（徳）摩哈孫著 芳草館主人（吳構）訳 広智書局1907/[梁艶144]塚原洪柿園著『虚無党』国民書院1904、『続虚無党』国民書院1906
 - 「侠女郎（冒険小説）」活躍する若い女性 短篇 白話
（日）押川春浪著 中華吳構宣中訳 『小説月報』1913/[渡辺105]押川春浪「冒険小説 女侠姫」『英雄小説 大復讐』本郷書院1912所収
 - 「大復讐（英雄小説）」青年の復讐 短篇 白話
（日）押川春浪著 中華吳構宣中訳 『小説月報』1913/[渡辺105]押川春浪「英雄小説 大復讐」『英雄小説 大復讐』本郷書院1912所収
-

ポーランド 1906年1種

- 「灯台卒」老灯台守の失敗 短篇 白話
星科伊梯撰（日）国[田]山花袋訳 錢塘吳構重演 『繡像小説』刊年不記。推定丙午1906/シエンキウイツチ作、田山花袋訳「灯台守」『太陽』1902。HENRYK SIENKIEWICZ“LATERNIK”1893
-

ロシア 1907年3種

- 『黒衣教士』黒衣僧と会話する精神錯乱の研究者 恋愛悲劇 短篇 白話
(俄) 溪崖霍夫(契訶夫)著 (日) 薄田斬雲訳 錢塘吳構重訳 商務印書館1907/露国
チエコーフ作、薄田斬雲訳「黒衣僧」『太陽』1904。英訳本は ANTON TCHEKHOFF
著、R. E. C. LONG 訳、*THE BLACK MONK AND OTHER STORIES*, 1903。CHEKHOV
(Чехов) 著「Черный монах 黒衣の僧」1894。
 - 「銀鈕碑(言情小説)」ロシア軍士官と異民族の娘 中篇 白話
(俄) 萊門=甫著 吳構訳 商務印書館1907/レルモントフ作、嵯峨の家主(矢崎鎮四
郎)訳「当代の露西亜人」『太陽』1904。LERMONTOV (Лермонтов) 著「Герой
нашего времени 現代の英雄」(「Бэла ベーラ」部分) 1840
 - 「憂患余生」ロシア人とユダヤ人 短篇 白話
(俄) 戈厲機著 (日) 長谷川二葉亭訳 錢塘吳構重演 『東方雜誌』1907/ゴーリキー
作、長谷川二葉亭訳「猶太人の浮世」『太陽』1905。GORKII (Максим Горький) 著
「КАИН И АРТЁМ カインとアルチョム」1899
-

ドイツ 1905年1種

- 「賣国奴」賣国奴を父に持った息子の苦悩と召使い女性との純愛 長篇 白話
(徳) 蘇徳蒙原著 (登張竹風原訳 吳構重訳) 『繡像小説』刊年不記。推定乙巳1905
/ (ズーダーマン著) 登張竹風訳『賣国奴』金港堂書籍株式会社1904。HERMANN
SUDERMANN“DER KATZENSTEG”1889
-

アメリカ 1906年1種/1910年1種

- 「山家奇遇」妻の死を認めることができない男性 短篇 白話
(美) 馬克多槐音著 (日) 抱一庵主人訳 錢塘吳構重演 『繡像小説』刊年不記。推定
丙午1906/マーク、トワイン著、(原) 抱一庵主人訳「山家の恋」『太陽』1903。
MARK TWAIN“THE CALIFORNIAN'S TALE”1893
- 「二十六点鐘之大飛行(冒険短篇小説)」アドバルーンの冒険 日訳不明 短篇 文言
(美) 濮倫孫記 天涯芳草館主賣中(吳構)訳 『申報』1910/原作は EDGAR
BEECHER BRONSON“AN AERIAL BIVOUC (TWENTY-SIX HOURS IN A
BALLOON)” (“THE AMERICAN MAGAZINE”1907)

【参考文献】網羅していない。

阿 英「訳史話」1938『小説四談』上海古籍出版社1981.12

中村忠行「吳禱訳『売国奴』その他」『中国文芸研究会会報』第24号 1980.7.28

郭延礼には以下の文章がある。

「六 吳禱的俄羅斯文学翻譯」（「第5章 外国文学的訳介及其流播」『近代西学与中国文学』南昌・百花洲文藝出版社2000.4）。

「俄羅斯文学的早期訳者吳禱」（『自西徂東：先哲的文化之旅』長沙・湖南人民出版社2001.4）。

「俄羅斯文学三大名家的早期訳者吳禱」（『文学經典的翻譯与解讀——西方先哲的文化之旅』濟南・山東教育出版社2007.9。「俄羅斯文学的早期訳者吳禱」と同文）。

沢本香子「書家としての吳禱」2009初出。補遺を追加して樽本照雄『清末翻譯小説論集（増補版）』2017.1.15電字版所収

樽本照雄「吳禱の漢訳チャーホフ」2010初出。『清末翻譯小説論集（増補版）』2017.1.15電字版所収

——「吳禱の漢訳ゴーリキー」2011初出。『清末翻譯小説論集（増補版）』2017.1.15電字版所収

そのほかの吳禱漢訳に関する論文は『清末小説五談』に収録している。

郭 長海「天涯处处有芳草 錢塘海陽是兩家」『清末小説』第34号 2011.12.1

趙 霞「二十世紀初留学生訳者特点剖析——以吳禱《小説月報》前期（1910-1920）翻譯作品為例」『中国近代文学学会小説分年会暨中国近代小説學術研討會論文集』開封・河南大学文学院2013.9

崔 琦「吳禱的翻譯活動与日本《太陽雜誌》」『清華大学学报（哲学社会科学版）』2013年増1期（第28卷）、2013

楊 鳳鳴「吳禱与契訶夫——從《黑衣教士》看吳訳受到的日本影響」『東方翻譯』2013年第6期（総第26期）2013.12

王 岩岩「翻譯的歷史文化影響——以吳禱、周瘦鵑 The Californian's Tale 的翻譯為例」『校園英語』2017年第14期「翻譯研究」2017.4.5

鄒 波「東アジアにおける『ドラ・ソーン』の翻譯と翻案——小説の翻譯を中心に」香港日本語研究会『日本学刊』第21号 2018.8 電字版

文 娟「試論吳禱在中国近代小説翻譯史中的地位——以商務印書館所刊單行本為研究視角」『明清小説研究』2018年第4期（総第130期）2018.10.15

- 『前『五四』時代的文化符号：商務印書館与中国近代小説』桂林・広西師範大学出版社2021.6
- 荒井由美「吳禱についての文娟論文」『清末小説から』第133号 2019.4.3
- 「文娟論文を評した文章を評する——陳鵬安論文について」『清末小説から』第148号2023.1.1
- 陳 鵬安「転訳中の“報恩”模式転換——以吳禱訳《侠黒奴》為中心」『東北亜外語研究』2019年第4期（総第27期）2019.12.15 電字版
- 「吳禱相關史料の新發現——兼与文娟《試論吳禱在中国近代小説翻譯史中的地位——以商務印書館所刊單行本為研究視角》商榷」『明清小説研究』2022年第1期（総第143期）2022.1.15
- 梁 艷「關於吳禱訳《（偵探小説）虚無党真相》的底本及其他」『清末小説から』第144号 2022.1.1

呉禱漢訳ドイル「斥候美談」

——高須梅溪訳「大佐の罪」

『清末小説から』第145号（2022.4.1）に掲載。ドイル原作「准将の犯罪」はのちに「准将が狐を殺した顛末」と改題された。呉禱漢訳「斥候美談」は高須梅溪日訳「大佐の犯罪」にもとづいている。

科楠岱爾著、（日）高須梅溪訳意、中国銭塘呉禱重演「（軍事小説）斥候美談」上中下である。先走りして説明すればドイル原作は上中下に分けない。梅溪日訳がそうしているのを呉禱はなぞっただけだ。

『繡像小説』第72期に掲載された。該期の刊年は不記である。それにもかかわらず以前は「丙午三月十五日（1906.4.8）」と記述していた。正確ではない。発行遅延が常態化していたのが事実だ。新聞などの刊行記録を見る。実際の刊行は丙午（1906）十二月だと推定される。

この刊行事実が李伯元の死去（同年三月十四日）に関係する。すなわち李伯元死去後も『繡像小説』は刊行されていた。これは「文明小史」の作者問題に直接つながっている。ただし呉禱漢訳とは関係がないから本稿では説明しない。

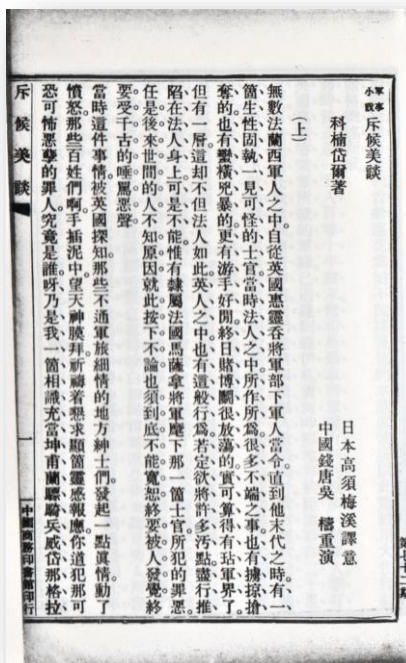
呉禱が使用した底本は次のとおり。コナンドイル作、高須梅溪意訳「（軍事小説）大佐の罪（斥候の滑稽談）」（『太陽』10巻10号1904.7.1）である。

1 ドイル原作の経緯——犯罪から狐狩りへ

ドイル（ARTHUR CONAN DOYLE、1859-1930）の原作については中村忠行（1978）



梅溪日訳



呉構漢訳

の指摘がある。その部分を引用する。

……訳者は呉構，高須梅溪訳からの重訳である。原作は、『ジェラルルの冒険』(Adventures of Gerard: Tales of Napoleonic Soldiers, 1904)の第三話「准将が狐を殺した顛末——一名：准将の犯罪」(How the Brigadier Slew the Fox, or The Crime of the Brigadier.)，作者自身がジェラルルものの中で一番愛したといふ例の小説である*1。

中村は注意深く記述している。それは「准将が狐を殺した顛末——一名：准将の犯罪」(How the Brigadier Slew the Fox, or The Crime of the Brigadier.)と作品名をふたつ掲げているところに見ることができる。前者が「狐」、後者が「犯罪」を使用して題名が異なる。「清末探偵小説史稿」という論文の主題からは対象外だといいながら貴重な指摘をした。

ジェラルル准将ものは基本的にふたつの連作で構成される。最初は『ストラン

ド・マガジン THE STRAND MAGAZINE』において1894-95年に連載された。次の連作は同誌1902-03年に公表されている。これがのちにまとめられて2種類の単行本になる。『ジェラルール准将の武勲 THE EXPLOITS OF BRIGADIER GERARD』（GEORGE NEWNES LTD.、1896）および『ジェラルールの冒険 ADVENTURES OF GERARD』（同社、1903）だ*2。

本稿で紹介する呉禱漢訳（すなわち梅溪日訳）のドイル原作には少し複雑な事情がある。

該作の初出はアメリカの雑誌『コスモポリタン THE COSMOPOLITAN』（1899.12）だ。その時の題名は「准将の犯罪 THE CRIME OF THE BRIGADIER」である。雑誌の武勲シリーズと冒険シリーズの連作からはずれて時期的にはその中間に独立して発表された。そのままイギリスの『ストランド・マガジン』（1900.1）に転載後、すぐさま短篇集『緑の旗 THE GREEN FLAG AND OTHER STORIES OF WAR AND SPORT』（1900.3）に収録となった。

複雑なのはその後のことだ。前述のように『ストランド・マガジン』に連載していたジェラルールものを集めて『ジェラルールの冒険』が刊行された。そのとき別の単行本『緑の旗』に収録していた「准将の犯罪」を「准将が狐を殺した顛末 HOW THE BRIGADIER SLEW THE FOX」と改題して冒険の第3話に配列したのだった。同一作品が題名を変えてふたつの短篇集に収録されている。ほとんど同時期であるのがおもしろい。

中村は以上の詳細を省き作品名を並記して大要を示したと理解できる。

その経過を知れば梅溪日訳の題名が「大佐の罪」である理由がわかる。すなわち底本としたのは「准将の犯罪」と題した『コスモポリタン』か『ストランド・マガジン』であると考えていい。本稿を書く過程で両者を比較対照した。その結果、単語の使い方にわずかな違いがあることが判明する。梅溪が使用したのは『ストランド・マガジン』の方だ*3。

高須梅溪（本名芳次郎、1880-1948）は文芸評論家。翻訳にロングフエロー著『乙女の操 EVANGELINE』（新潮社1906.3.18。国立国会図書館デジタルコレクション所収）などがある。

物語の主人公はナポレオンの軽騎兵エティエンヌ・ジェラルール（ETIENNE

GERARD) という。フランスの軍人に設定してある。ドイルは敵をイギリス軍にした。

大要は次のとおり。スペインにおいてイギリス軍と闘っているときの出来事だ。ジェラルドは敵陣地の斥候（偵察、スパイ）を命じられる。彼は敵地に入りこむが見つかり銃弾をあびて馬を失った。偶然に敵の駿馬を奪う機会がありそこを脱出した。ところがその馬のせいでイギリス人が狐狩りを実行している現場に巻き込まれる。敵愾心を燃やしたジェラルドが狐を殺してイギリス人を打ち負かした。イギリス人のお株を奪ったからジェラルドの「犯罪」というわけ。

brigadier を辞書で見れば准将とある。少将と大佐の中間の位という。梅溪が題名を「大佐」としたのは本文中にジェラルドを「大佐 colonel」と呼ぶ場面があるからだろう。そのほうが当時の日本読者には理解しやすかったと思われる。

また梅溪が示した副題は「斥候の滑稽談」であることにも注目する。もともと深刻な戦闘が発生するわけではない。戦場でイギリス軍人が狐狩りをするという奇想天外な物語だ。しかも狐をめぐるフランス軍人とイギリス軍人の意地の張り合いという滑稽談に仕立ててある。ドイルがフランス人の視線で記述し、しかもイギリス人を打ち負かしたのだからなおさらだ。

2 原文、日訳と漢訳

冒頭部分を2分割して比較対照してみよう（ルビ省略。下線筆者。くり返し記号は文字に変換する。以下同じ）。ドイル原文に忠実な笹野日訳を使用する。

はじめり

【ドイル】 In all the great hosts of France there was only one officer toward whom the English of Wellington's Army retained a deep, steady, and unchangeable hatred. There were plunderers among the French, and men of violence, gamblers, duellists, and roués. All these could be forgiven, for others of their kidney were to be found among the ranks of the English.

But one officer of Massena's force had committed a crime which was unspeakable, unheard of, abominable; only to be alluded to with curses late in the evening, when a second bottle had loosened the tongues of men.

p.41

【笹野】フランスの大軍の中にイギリスのウェリントン軍が深い、不動、不変の憎しみを持ち続けている将校がただ一人いる。フランス軍の中には略奪者、暴力的な男、ギャンブラー、決闘者、放蕩者がいた。こういう者たちは全員、許されるだろう。なぜなら、同じような連中がイギリス軍の中にも見られるからだ。しかし、マセナ元帥の軍のある将校は言語道断、前代未聞、唾棄すべき罪を犯した。この話をもっぱらののしりながら言及されるのは、晩遅く、二本目の瓶が将兵の舌をゆるめた時である。 59頁

「准将の犯罪」は第三者の説明から始まる。イギリスの軍人が深く憎んだ前代未聞の罪とはなにか。それをフランス軍将校のひとりが犯したというのだ。読者の興味を強く引きつける書き出しとなっている。イギリス軍人がしらふでは話題にすることもできないほどの侮辱であったことを下線部分が示している。

梅溪日訳は基本的に原文どおりだ。ただし奇妙な方向に翻訳している箇所がある。

【梅溪】数多き仏蘭西の軍人の中で、英国のウェリントン公部下の軍人に未代迄も、執念深く憎まれた一人の士官があつた。仏人の中には、略奪を為るものもあれば、乱暴狼藉を働くものもある、賭博、決闘、遊蕩三昧等にも耽ける人達もあるが、これは独り仏人の独占と言ふべきものでない、英人の中にも此手合があるから、強みて仏人のみを咎める訳にはゆかぬ、しかし仏のマツサナ將軍の旗下に属する一士官が犯した罪悪は、其後仮令世間に知れずに済んで了つたとは言ふものゝ、実に憎むべき罪悪で、十分呪詛すべき価がある。120頁

くり返すが、酒がまわってからようやく話題にできる。これがドイル原文だ。

イギリス人にとっては酔わずには言及したくない痛恨事を意味する。ところが梅溪はその部分を省略した。不思議なことに下線で示すように「其後仮令世間に知れずに済んで了つたとは言ふものゝ」を加筆した。これでは話題が軍隊内部に留まることになる。つづく部分にイギリス人が知って大いに怒ったというのに矛盾する。それ以外はドイル原文にほぼ忠実だ。ゆえにそこだけ違和感が生じる。

呉禱漢訳を見る（固有名詞は梅溪訳を使用する）。

【呉禱】無数法蘭西軍人之中。自從英国惠靈吞將軍部下軍人當令。直到他末代之時。有一個生性固執一見可怪的士官。當時法人之中。所作所為。很多不端之事。也有擄掠搶奪的。也有蛮橫兇暴的。更有遊手好閑。終日賭博闖很放蕩的。實可算得有玷軍界了。但有一層。這却不但法人如此。英人之中。也有這般行為。若定將許多污点。盡行推陷在法人身上。可是不能。惟有隸屬法國馬薩拿將軍麾下那一個士官。所犯的罪惡。任是後來世間的人。不知原因。就此按下不論。也須到底不能寬恕。終要被人發覺。終要受千古的唾罵惡声。1
丁オ

無数のフランス軍人の中に、英国のウエルリントン將軍部下の軍人の当時から末代にいたるまで、生まれつき意地っ張りで見ると怪しげな士官がひとりいた。当時のフランス人の中には品行が不真面目なものも多かった。掠奪をするものもあれば、乱暴狼藉をするものもいる。さらには仕事嫌いで遊び好き、終日賭博、決闘、遊蕩にふけるものは確かに軍事界を辱めるものだといえる。しかしそれらはフランス人だけがそうだというわけではなく英人の中にもそのようなことがあった。もし多くの汚点をフランス人にだけ押し付けるならば、それはまったくできないことだ。ただフランスのマツサナ將軍麾下のあの士官が犯した罪惡は後の人々がその原因を知らないからここでは論じないにしても、さすがに許すことはできず、結局は人に気づかれてしまい、結局のところ永遠の痛罵と怒りを受けなければならない。

呉禱は梅溪日記をほぼ忠実に漢訳している。だから梅溪訳では省略してある酒後の罵り話は漢訳にはない。これはしかたがないだろう。

ただし下線部分の2ヵ所について梅溪日訳とは少しのズレがある。

前者はウェリントン軍がフランスのひとりの士官について深く憎悪したという原文だ。憎んだのはイギリス人だと確認しておく。そこを梅溪はイギリス人に「執念深く憎まれた」と受け身にして訳した。

呉禱はその日本語の受け身型が理解できなかったらしい。「まれた」とひらがな表記だったからだろう。呉禱はその漢字だけを拾い「執念深く憎むべき士官」と理解した。それで「有一個生性固執一見可怪的士官（生まれつき意地っ張りで見ると怪しげな士官がひとりいた）」という漢訳になったと思われる。「憎む」「憎まれる」という部分が消失して梅溪日訳とは離れてしまった。

後者は梅溪による改変個所だ。「其後仮令世間に知れずに済んで了つたとは言ふものゝ」では前後がつかないという判断をした。それはいい。ただし呉禱が見たのは日訳の「其後」「世間」「知」「言」という日本語漢字だ。それらを組み合わせて独自に「任是後來世間的人。不知原因。就此按下不論（後の人々がその原因を知らないからここでは論じないにしても）」と書き換えた。もとの日訳がおかしなものだからそれに手を入れても正しい漢訳にはならない。

つづく部分だ。

【ドイル】 The news of it was carried back to England, and country gentlemen who knew little of the details of the war grew crimson with passion when they heard of it, and yeomen of the shires raised freckled fists to Heaven and swore. And yet who should be the doer of this dreadful deed but our friend the Brigadier, Etienne Gerard, of the Hussars of Conflans, gay-riding, plume-tossing, debonair, the darling of the ladies and of the six brigades of light cavalry. p.41

【笹野】 このニュースがイギリスに持ち帰られると、戦争の詳細についてほとんど知らない田舎紳士たちはこれを聞いた時、怒りで顔を赤らめ、イングランド中部地方の自由農民たちはそばかすだらけの拳を天に振り上げて、のしった。しかし、この恐るべき所業をやらしたのは、我らが友、コンフラン軽騎兵連隊のエティエンヌ・ジェラルド准将、派手に馬を乗りこなし、

羽飾りを翻し、礼節に厚く、淑女及び軽騎兵六個旅団の寵児だった。59頁

ドイルが「the shires (イングランド中部地方)」をさりげなく出しているのには意味がある。そこは狐狩りで有名な地方だ。特に該地の農民が怒りを爆発させた。物語の「犯罪」が狐狩りに関連するという伏線を張った。

【梅溪】当時、其事実が英国に知れた時は、軍旅の細事に通じて居ない地方紳士等は、真赤に為つて腹を立て、百姓等は、泥だらけな手で、神を拝して、何卒此報酬を思ひ知らせ給へと祈つた位であつた。しかし此恐ろしい罪悪を犯して[た]曲者は誰あらう吾友コンフランの驃騎兵エテイ子、ゲルラド大佐である、大佐は、嫺雅な優しい好騎手の一人で、六旅団の軽騎兵を初めとして、一般の貴婦人にも可愛がられて居る、此様な人物が一大罪を犯したとは、不思議！不思議！ 120頁

「イングランド中部地方」を省略し「freckled fists (そばかすだらけの拳)」を「泥だらけな手」と訳した。また原文にはない下線部分の「此様な人物が一大罪を犯したとは、不思議！不思議！」を挿入する。厳密な翻訳ではなく署名に「意訳」と示す通りの意識になっている。

呉禱漢訳はどうか。説明のため日本語訳には梅溪の用語を使った単語にカッコを施した。

【呉禱】當時這件事情。被英国探知。那些不通軍旅細情的地方紳士們。發起一点真情。動了憤怒。那些百姓們啊。手插泥中。望天神膜拜。祈禱着懇求頭箇靈感報応。你道犯那可恐可怖惡孽的罪人。究竟是誰。呀乃是我一箇相識充當坤甫蘭驃騎兵威岱那格拉特大佐。大佐在驃騎兵營裏。体格嫺雅。馬技高強。衆人本称他是一箇好騎手。自從六箇旅団的輕騎兵為始。以及一班貴族家婦女。莫不箇箇愛敬於他。那樣一等好人物。犯出那般大罪。真是不可思議！不可思議！ 1丁オウ

当時この事実が英国に知られると「軍旅」の細事に通じない地方紳士たち

は真情を發揮して激しく怒り、「百姓」たちは手を泥の中に突っ込んで天の神にひれ伏し、靈驗あらたかに報いたまえと祈祷したのである。あの恐ろしい罪を犯した罪人は誰であろうか。ああ、すなわち我が友コンフランの驃騎兵エテイ子ゲルラド大佐である。大佐は驃騎兵の兵営では体格「嫺雅」にして馬術の技量が優れており、周囲の人々は好騎手であると称えている。六旅団の輕騎兵を初めとして貴族の婦人も敬愛しないものはいない。このような好人物があのような大罪を犯したとは、まことに不思議！不思議！

呉禱漢訳は梅溪日訳の省略誤訳加筆をほぼ反映している。

「嫺雅な優しい」は立ち居振る舞いを指す。呉禱はどうしても対句風に「体格嫺雅。馬技高強」としたくなるらしい。ただし「挙止嫺雅」は見かけるが、身体を指す「体格」と嫺雅が結びつかない。

ここの呉禱漢訳には梅溪の日本語訳からそのまま流用する単語がいくつかある。呉禱はそれがかまわないと判断したようだ。たとえば「軍旅」という漢語は「軍隊」を意味する。しかし梅溪は「いくさ」とルビを振る。そうならば漢訳して「戦争」とするのが妥当だ。また日本語の「百姓」は漢語では「国民」という意味である。「農民」と漢訳すれば誤解がない。いずれも些細なことで当時の読者は気にしなかったと思う。

以上を見ればドイル原文の冒頭部分に呉禱漢訳の特徴が凝縮されている。

呉禱は白話を使用して日本語訳に忠実に漢訳をする。これが基本姿勢だ。ただし日本語ひらがな、あるいはカタカナについては時たま理解が及ばないばあいが生じる*4。また前述のように日本漢字に引かれて読み間違えることもある。

呉禱が独自に判断して省略する個所があることも指摘しておく。

斥候となる

1810年のこと。マセナ軍はウェリントン軍を押し戻しタホ川に追い落とせると思った。ところが防御線を築かれていたため封鎖する以外に方法がなかった。ジェラルドは馬の世話をしながら地元のワインを楽しんで時間を過ごす。それだけでないことをドイルは示唆する。ジェラルドの自分語りである。

【ドイル】 There was a lady at Santarem—but my lips are sealed. It is the part of a gallant man to say nothing, though he may indicate that he could say a great deal. p.41

【笹野】 サンタレムにある女性がいた——しかし、わたしの口は封じられている。そういうことについて何も言わないのが勇者のたしなみだ。ただし、言おうと思えば大いに言えるとはほのめかしておくのはよい。 60-61頁

前半はジェラルルの言葉だ。後半の「たしなみ」と「ほのめかし」の部分はドイルが口をはさんで注釈したとわかる。

次に示す梅溪はそれを理解してカッコを使用して区別し脚色を加えた。ドイル原文に忠実であるとは言えない。呉禱漢訳も併記して引用する。

【梅溪】 サンタラムと言ふ處には、美人が居つたが、それは別に述べる必要もなからう、(実は、何も言はないのが色男の常で、実を言へば、大ありなのであらう。) 121頁

【呉禱】 有一處地名三塔蘭。很多嬌麗美人。那都是閑話。2丁オウ

サンタラムという處には多くの好ましい美人がいたが、それは言うほどのことではない。

ドイル原文では女性はひとりだ。特別な存在であることが匂わせてある。だが梅溪はそれを普通名詞にした。というよりも単数であることを強調しなかった。日本語では「美人たち」とわざわざ書かなければ単数であることもあるからだ。そこから呉禱は美人を複数にふくらませた。梅溪日訳を経て微妙に変化させた個所だ。

ドイル原文を見ているから梅溪日訳の不足が判明する。梅溪日訳だけによっている呉禱が取り違えをするのは避けられない。

もうひとつは梅溪の下線部である。漢訳をする必要がないと呉禱は考えた。ドイル原文から離れた日訳だから呉禱の処理は結果として間違っていない。

主人公のフランス士官ジェラルは恐れを知らない勇猛果敢な人物だ。だからこそマセナ元帥に斥候を命じられた時、心中に不満を感じた。騎兵隊の大佐がやる任務ではないと思ったからだ。

ところが梅溪の日訳を経た呉構漢訳で彼は臆病者にされてしまう。主人公ジェラルの印象が変わってしまう勘違いである。

【ドイル】 His words turned me cold. p.42

【笹野】 元帥の言葉にわたしはがっかりした。62頁

【梅溪】 何等危険の業ぞ！。將軍の命令は、自分の肝を寒からしめた。121頁

【呉構】 喳。這是何等危険可怕的事！將軍只一箇將令。就把俺的肝胆嚇得粉樣碎冰樣寒。3丁オ

おお、これはなんと危険で恐ろしいことだ！將軍のただ1片の軍令が私の肝を粉碎するほど驚かせ砕けた氷のように寒からしめた。

ドイル原文の“turned me cold”の意味は「自分をぞっとさせた」または「気乗りしない」だ。笹野の翻訳「わたしはがっかりした」が適切だろう。斥候という簡単な任務は自分にはまったくふさわしくないと不服だからである。

梅溪は「何等危険の業ぞ！」と加筆して反語にした。つづけて「自分の肝を寒からしめた」という意味は「がっかりさせた」となる。だからこそ「閣下、御言葉ではござりまするが、輕騎兵の大佐に斥候の役目を仰せつけられまして、無益でございませう。（“Sir,” said I, “it is impossible that a colonel of light cavalry should condescend to act as a spy.” p.42）」となる。梅溪日訳はこれで筋が通っている。

ところが呉構は反語表現が理解できなかつたらしい。日本語の「何等」を見て漢語と同じに「なんという」の意味だと考えた。あとは漢字と記号の「危険」「業」「！」だけを手がかりにして出てきたのが彼の感嘆文である。さらに梅溪日訳の「自分の肝を寒からしめた」を増幅させて漢訳し誤解の傷口を広げたのだった。

つづくジェラルルの反論は、呉構がいくら梅溪日記に忠実に漢訳してもただの言い訳にしか見えなくなる。

イギリスの駿馬

マセナ元帥はジェラルルに軍中で最も速い名馬を見せた。彼はその馬に乗ることの方に惹かれてひとりで斥候に出発する。もともとジェラルルは女と馬のこと以外は何も考えない（with never a thought beyond women and horses. “HOW THE BRIGADIER SLEW THE BROTHERS OF AJACCIO”）人物として設定されている。その馬好きが「大佐の罪」では重要な役割をになっている。馬と狐狩りが結びつくのだ。

敵の防御線奥深くに入り込んだところでジェラルルはイギリス軍に見つかってしまった。一斉射撃を背にして名馬を走らせた。逃げ切ったと思ったところで馬は突然倒れてしまう。敵弾が胴体を貫いていたのだ。馬を失った軽騎兵にはなす術がない。ジェラルルは捕虜になることまで覚悟した。幸いイギリス軍高級士官が宿泊する場所の馬小屋に身を隠すことができた。ジェラルルがそこで確認したのはイギリス軍の驚くべき行動だった。イギリスから多くの狐狩り用の犬を取り寄せ、週に3日も狐狩りをやっていたのだ。

ジェラルルはイギリスの狩猟馬を見た。本作では2度の馬描写がある。ジェラルルが乗っていたフランスの名馬が最初だ。2度目がこのイギリス産である。そこを引用する。

【ドイル】—and, oh, my friends, you have never known the perfection to which a horse can attain until you have seen a first-class English hunter. He was superb: tall, broad, strong, and yet as graceful and agile as a deer. Coal black he was in colour, and his neck, and his shoulder, and his quarters, and his fetlocks—how can I describe him all to you? The sun shone upon him as on polished ebony, and he raised his hoofs in a little, playful dance so lightly and prettily, while he tossed his mane and whinnied with impatience. Never have I seen such a mixture of strength

and beauty and grace. p.46

【笹野】——ああ、諸君、第一級のイギリス産狩猟馬を見るまで、馬がどれほどの完成度に達するか分からない。その雄馬は最高だった。背が高く、肩幅は広く、筋骨たくましく、それでいて鹿のように優美でしなやかだった。色は漆黒で、首、肩、腰、蹴爪突起——どうすれば彼のすべてを諸君に説明できようか？ 太陽は磨かれた黒檀を照らすように彼を照らし、彼はちょっとふざけて踊るように軽々と蹄を上げ、その間もたてがみを揺すり、もどかしそうにいなないた。これほどまでこのような強さと美しさと優雅さが混じったものを見たことがない。69-70頁

「蹴爪突起 fetlock」とは辞書によると「蹄の上部後方の関節、突起」だそうだ。別に「球節」とも。

ジェラルドが語る狩猟馬賛美は詳細だ。それでも足らず「どうすれば彼のすべてを諸君に説明できようか？」という。それは同時に作者ドイルの気持ちの描写でもある。馬の状態を彼がどれだけ歓喜に包まれ愉快地書き記しているかがわかる箇所だ。梅溪日訳を次に見る。

【梅溪】英国最上等の獵馬を見ない中は、一寸何んなものか分からないであらう、今曳いて来た馬を見ると、唯に美しいのみではない、背も高く幅も広く、強健で而かも優美で、其快捷なること、さながら鹿のやうである、毛色は漆黒、其頸、其肩、其兩足、其距毛、何と言ふ完全な出来工合であらう。日光が當ると、其毛は黒檀のやうに光つて、蹄を上げる時には、恰度道化踊のやうに輕快無比の處が見える、更らに鬣を振つて嘶くと、実に勇ましい、壯快だ、自分は曾て是位『美しさ』と『強さ』とが具合よく調和したのを見たことがない、125頁

「其距毛（そのひづめのけ）」の「距」は「蹴（けずめ）」と同じ。部位は前述の「蹄の上部後方の関節、突起」にあたる。この梅溪日訳はほとんど直訳といっている。呉禱はそれをどう漢訳したか。

【呉禱】俺素来不曾見英国上等獵馬。起先不知是怎樣東西。及至看見這匹馬。不但風神美妙。而且背脊又高。肩幅又闊。又強健。又美觀。駛走的快捷。簡直和鹿相似。毛色漆黑。頸啊肩啊兩足啊蹠（蹄）毛啊。沒一件不是完完全全。天生成功的。映在太陽光之下。毛片似黑檀般膩而有光。举起蹠來。恰好如翻鈸一般。輕快無比。更振鬣一嘶。真箇驍悍。真個英壯。俺出生出世。也不曾見這等美到極處健到極處天生成體魄調和的馬。7丁ウ

自分は英国の上等な狩獵馬を今まで見たことがなかったから、初めはどんなものかは分からなかった。その馬を見るに及んで風貌は美しいだけではなく、背は高く、肩幅は広く、強健でしかも優美で、走りは快捷にして、さながら鹿のようである。毛色は漆黑、その頸、その肩、その兩足、その蹄の毛、ひとつとして完全でないものはなく天然の成功物だ。日光が当たるとその毛は黒檀のようになめらかに光って蹄を上げるとちょうど（打楽器の）ハツを翻すように軽快無比である。さらにたてがみを振っていななくと、実に勇猛で、実に勇壯だ。自分は生まれてこのかた、これらの美しさが極点に達し、強さが極点に達して身体と精神が調和した馬を見たことがない。

馬が蹄を上げる動作が軽快である様態をドイルは「ちょっとふざけて踊るように in a little, playful dance」と表現する。それを梅溪は「道化踊のやうに軽快無比の處」と翻訳した。「ふざけて踊る」が「道化踊のやうに」になったわけだ。「playful ふざけて」が「道化」に、「dance 踊る」が「踊」に該当する。

呉禱は「道化」を意味する漢語の「小丑」を使用してはその動きを伝えられないうちが思っただけだ。「翻鈸（ハツを翻す）」にした。「鈸」とはシンバル様の打楽器。鑊（にょう）鉢などともいう。馬が蹄を高くあげる動作をシンバルを軽々と上方にひるがえす様子に置き換えた。「道化踊のやうに」を直訳はしなかった。読者が理解しないことを危惧したと思われる。あえて意識してシンバルを出すことで読者の了解を優先したとわかる。なにがなんでも直訳を押し通すのではない。題材によって柔軟に漢訳するその姿勢がよい。

呉禱はドイル原作を知らない。しかし梅溪日訳を経由してドイルに近づいたと

いっていい。呉構漢訳にはこういう鋭い個所があるから少しの誤解を埋め合わせることができる。

上の個所は梅溪の日本語をほぼ直訳したといえる。駿馬についての説明だとわかっている。しかも日本語漢字をそのまま流用することができたのがその要因だ。

狐狩り

ジェラルルが乗った駿馬は遠方の掛け声に反応した。狐を駆り立てる「yoy／ヨーイ／ワーイ／嘩呷」（ドイル／笹野／梅溪／呉構の順）という音声を聞いて狩猟馬は反射的に正気を失ったのだ。谷間に狐を追って多数の猟犬が各種軍人とうごめいている。騎手ジェラルルを無視して馬はその大集団の中に突っ走って行った。イギリス人は自分たちがやっている狐狩りにまさかフランス人が紛れ込んでくるとは思いもしない。そこがジェラルルにとっては危険でありながら滑稽でもある。

先行するイギリス騎兵を追い抜いてジェラルルはついに先頭を走った。イギリス人を打ち負かした快感と誇りに酔いながらサーベルを握り狐を狙う。

調べるとこの伝統的狩りの目的は狐を追い回すこと自体を楽しむことだ。最終的に狐は猟犬に食い殺される。しかしドイル原文では次に示すようにジェラルルがサーベルで狐を胴切りして終わる。狐が猟犬に殺されてはジェラルルの出番がない。ドイルが主人公のフランス人を目立たせるために工夫したのだろうと考える。

何度かサーベルが空を切った結果ようやく狐を仕留める瞬間を引用する。

【ドイル】 And then at last the supreme moment of my triumph arrived. In the very act of turning I caught him fair with such another back-handed cut as that with which I killed the aide-de-camp of the Emperor of Russia. He flew into two pieces, his head one way and his tail another. I looked back and waved the blood-stained sabre in the air. For the moment I was exalted-superb! 49p.

【笹野】 それからついに勝利の最後の瞬間が来た。向きを変えている最中に

キツネを逆手切りでまともに攻撃した。これはロシア皇帝の副官を殺した時の逆手切りだった。キツネは二つになって飛んだ、頭はあっちに、尾はこっちに。わたしは振り返り、血まみれのサーベルを宙に振った。その瞬間わたしは有頂天——最高だった！ 75頁

THE CRIME OF THE BRIGADIER.

49

France. I had brought honour to each and all. Every instant brought me nearer to the fox. The moment for action had arrived, so I unsheathed my sabre. I waved it in the air, and the brave English all shouted behind me.

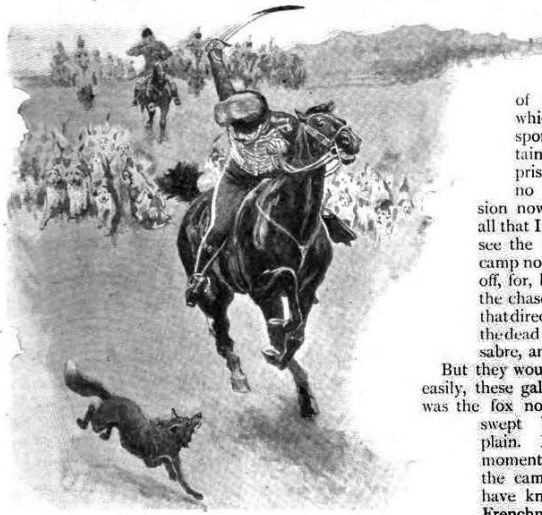
Only then did I understand how difficult is this fox chase, for one may cut again and again at the creature and never strike him once. He is small, and turns quickly from a blow. At every cut I heard those shouts of encouragement from behind me, and they spurred me to yet another effort. And then at last the supreme moment of my triumph arrived. In the very act of turning I caught

Ah! how I should have loved to have waited to have received the congratulations of these generous enemies. There were fifty of them in sight, and not one who was not waving his hand and shouting. They are not really such a phlegmatic race, the English. A gallant deed in war or in sport will always warm their hearts. As to the old huntsman, he was the nearest to me, and I could see with my own eyes how overcome he was by what he had seen. He was like a man paralyzed, his mouth open, his hand, with outspread fingers, raised in the air. For a moment my inclination was to

return and to embrace him. But already the call of duty was sounding in my ears, and these English, in spite

of all the fraternity which exists among sportsmen, would certainly have made me prisoner. There was no hope for my mission now, and I had done all that I could do. I could see the lines of Massena's camp no very great distance off, for, by a lucky chance, the chase had taken us in that direction. I turned from the dead fox, saluted with my sabre, and galloped away.

But they would not leave me so easily, these gallant huntsmen. I was the fox now, and the chase swept bravely over the plain. It was only at the moment when I started for the camp that they could have known that I was a Frenchman, and now the whole swarm of them were at my heels. We were within gunshot of our pickets before they would halt, and then they stood in knots and would not go away, but shouted and waved their hands at me. No, I will not think that it was in enmity. Rather would I fancy that a glow of admiration filled their breasts, and that their one desire was to embrace the stranger who had carried himself so gallantly and well.



"AT EVERY CUT I HEARD SHOUTS BEHIND ME."

him fair with such another back-handed cut as that with which I killed the aide-de-camp of the Emperor of Russia. He flew into two pieces, his head one way and his tail another. I looked back and waved the blood-stained sabre in the air. For the moment I was exalted—superb!

Vol. xix.—7.

「副官 aide-de-camp」はフランス語だという解説もある。筆者が注目するのは最後部分の「わたしは有頂天——最高だった！ I was exalted-superb!」だ。狐狩りを得意とするイギリス人を打ち負かしたという自信があふれている。「有頂天——最高」と畳みかけた。

梅溪の日本語訳はその個所だけが少し違う。

【梅溪】しかし自分が最後の勝利を得る時は来た。自分は曾て一刀の下に露帝の副官を切り下げた時のやうに、身をかはして、返へし撃ちに切下すと、見事、狐の体は両断されて、胴と首とは離れ離れに為つて飛んだ、吾は後方を顧みて、鮮血滴る剣を空中に振つた、この一瞬間、自分は天上天下唯我独尊！。128頁

日本語訳はドイル原文と同じだと言っている。ただ「有頂天——最高だった」を「天上天下唯我独尊！」とした。突然、釈迦の伝説を織り込んだことになる。ここは一般に流布する意味、つまり「自分だけがすばらしい、うぬぼれる」だ。梅溪にしてみれば「有頂天——最高」はその慣用句を適用するのがよいと考えた。強調表現をしたかった。そこを呉禱はどう漢訳したか。

【呉禱】最後の勝局。已在眼前。俺就更使出生平本領。好似從前一刀之下。斬殺俄羅斯皇帝的副官時候一般。扭軀身體。向後一擊。趁勢斬了下去。好啊。有趣啊。那狐身早則化為兩段。身體和頭顱。分離兩下。兀自飛得老遠。俺當即迴顧後邊。將鮮血淋漓流滴的寶劍。搖擺空中。這一刹那之間。俺覺得天上天下。惟我獨尊！ 11丁オ

最後の勝機が目前にあった。自分はすかさず生来の本領を發揮し、曾て一刀のもとにロシア皇帝の副官を斬殺したように、振り向きざま後方に一撃して勢いに乗じてそのまま切り下すと、見事、いいぞ、狐の身体は早くも両断されて、胴と首とはふたつに分離してそのまま遠くに飛んでいった。自分は後方を顧みて、鮮血滴る剣を空中に振った。この一瞬間、自分は天上天下唯我独尊だと感じた！

呉禱は「天上天下唯我独尊」そのまま流用して違和感を持たなかった。梅溪日訳を直訳していることが明らかだ。

ジェラルールが自分で満了したのはほんの一瞬だった。フランス人と知られたから今度は彼自身が狐となってイギリス人から追跡される。狐を追った結果に自分が狐になる。自然な流れだ。

【ドイル】 But they would not leave me so easily, these gallant huntsmen. I was the fox now, and the chase swept bravely over the plain. p.49

【笹野】しかし、彼らは、この勇敢な狩猟家たちは、そう簡単にわたしを放っておかなかった。今度はわたしがキツネで、追跡が平地で勇ましく展開した。76頁

【梅溪】併し敵の騎兵等は、其儘自分を見逃さなかつた。狐の代りに、今度は自分を獲物の的として、平原の中で狩を初めた、129頁

梅溪はドイル原文のとおりには日訳している。呉禱はどうか。

【呉禱】但敵軍騎兵們。並不見俺是逃亡。總道俺棄了群狐。另往別處平原。找那些好打的東西狩獵。11丁オ

しかし敵軍の騎兵たちは私が逃亡したとはまったく気づかず、私が狐群を捨て別の平原に狩の獲物を探しに行ったと考えた。

呉禱漢訳は梅溪日訳のままではない。勘違いしている。どうやら梅溪の文章に見える「見」「逃」「なかつた」を独自に組み合わせて漢訳した。それが「私が逃亡したとはまったく気づかず（並不見俺是逃亡）」である。上の漢訳ではジェラルール自身が標的の狐そのものにされたことがわからない。日訳の意味から離れたのは残念なことだ。

梅溪はドイル原文にない終わり方をさせている。

【梅溪】以上は大佐の直話であるが、英人が渠を敵視したのは無理がない、これその復讐に熱中する由来の一条。129頁

【呉禱】以上乃是大佐自己的話。英人将他做讐敵看待。自在情理之中。這也是彼此復讐切恨の一箇原故了。11丁ウ

以上は大佐の直話であるが、英人が彼を敵視したのは無理がない。これが互いにひどく復讐しあう由来のひとつだ。

梅溪日記の最後部分を呉禱は直訳してジェラル物語は終了した。

【注】

1) 中村忠行「清末探偵小説史稿——翻訳を中心として(1)」『清末小説研究』第2号 1978.10.31。19頁

2) 次を参照した。

【参考文献】

ウェブサイト the arthur conan doyle encyclopedia 所収の『ストランド・マガジン』から本文を参照した。略称 [ドイル]

コナン・ドイル著、笹野史隆訳『ジェラル准将の武勲』コナン・ドイル小説全集第47巻 笹野史隆発行2018.4.30

コナン・ドイル著、笹野史隆訳『ジェラルの冒険』コナン・ドイル小説全集第48、49巻 笹野史隆発行2018.11.30。略称 [笹野]

3) 並記する。『コスモポリタン』において軽騎兵のジェラルが自分の身分を称して「軽歩兵の大佐」と間違っているのはおかしい。

『コスモポリタン』“a Colonel of Light Infantry” p.172 「軽歩兵の大佐」

『ストランド・マガジン』“a colonel of light cavalry” p.42 「軽騎兵の大佐」

4) カタカナについて小さな誤解があることを3例指摘しておく。

梅溪「一遍グルトと敵陣を廻つて」122頁という箇所だ。「グルト」はいうまでもなく日本語の「ぐるっと」でうしろの「廻つて」とつながる。呉禱は「将敵陣四周。約摸一格爾特之地。環繞一週（敵陣の四周、あのグルトという地をひと回り偵察して）」3丁ウとする。地名だと思い違いした。

「a slow fox (足の遅いキツネ)」 p.45 を梅溪は「ノロ狐」125頁と訳した。ここの「ノロ」は足が遅いという意味。呉禱は「響（ノロ、ノロジカ）」7丁オと誤解した。

狐を追う軍人が速度の違いによりまともらず拡散してしまった。その状況を梅溪は「チリヂリバラバラに為つて」127頁とする。このカタカナが呉禱にはわからない。擬音だと考えた。「只聴得剔歴剔歴撲喇撲喇之声（チリヂリバラバラという音を聴いただけ）」10丁オ

呉禱漢訳ル・キュー『薄命花』

——柳川春葉「虚無党の女」の原作

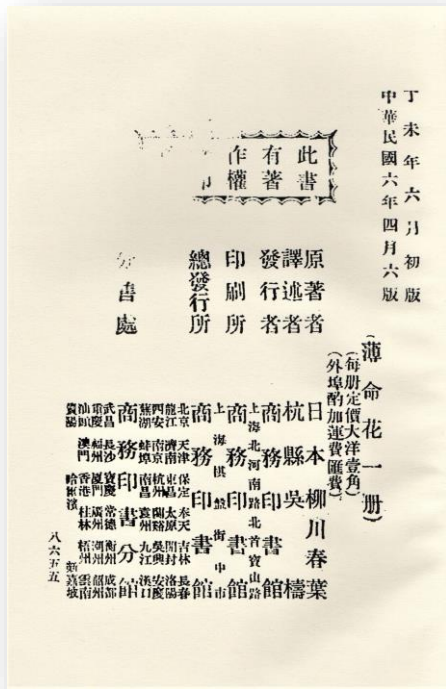
『清末小説から』第143号(2021.10.1)に掲載。沢本香子名を使用。呉禱漢訳『薄命花』の原作者は柳川春葉と明記されている。ただしその作品は長期間にわたり特定されなかった。その理由のひとつは『薄命花』そのものを見る機会がなかったからだ。影印本を入手してそれが「虚無党の女」であると確認した。さらに春葉日訳の原作はル・キュー WILLIAM TUFNELL LE QUEUX “STOLEN SOULS (盗まれし魂)” (1895) であることも突き止めた。作品が催眠術を主題とする大衆小説であることもわかる。

日本柳川春葉原著、杭県呉禱訳述『薄命花』（上海・商務印書館 丁未（1907）年六月初版／中華民国六（1917）年四月六版 袖珍小説。影印本を使用）について述べる。

1 先行文献——底本確定のむつかしさ

阿英『晚清小説史』（1937、281頁／1955、185頁）は呉禱の翻訳作品に『薄命花』があると記述するのみ。それが阿英目録（1954／1957）では以下のとおり詳しくなっている。

薄命花 旦 柳川春葉著。呉禱訳。光緒三十三年（一九〇七）商務印書館印。164頁



奥付 影印本



表紙 孔夫子旧書網より

阿英は実物を見て目録を作成した。だから『薄命花』は柳川春葉原著だと書くことができている。ただし春葉の作品名までは記載しない。阿英は小説に記載された基本情報のみを抽出して目録を編集したからだ。言いかえれば原作あるいは底本探索までする余裕がなかった。誤解のないように注記すれば阿英目録が刊行されたこと自体が大きな成果だった。だからこそ研究者は長年にわたって使用してきたのだ。

それ以後、底本探索は困難状態に陥る。清末の翻訳研究は外国語の関係で底本探索を進めにくい。特に日本語がからむと困難度が高まる。中国には日本語を理解する研究者が少ないことが理由のひとつかもしれない。別の側面を見れば漢語を理解する日本の研究者で清末民初小説に興味を持つ人も多くない。

基本的には刊行物そのものが問題だ。『薄命花』を見るのがむづかしい。よく知られているようで作品の入手が容易ではなかった。

放置できない。なんらかの情報を追加したくなる。だが実際に着手すれば簡単

なことではないことがわかる。

中島利郎は次のように書いた。[中島76B-83] 袖珍小説叢書<柳川春葉（専之1877-1918）訳とあるが、邦題、原作共に未詳>*1。

調べても「未詳」とせざるを得ないくらい春葉の作品は数が多いということだろう。春葉作品が不明であればその原作をさぐる糸口さえ行方不明だ。

昔の文献を持ち出して申し訳ない。それだけ言及されることが少ないという事情をご理解いただきたい。また中島の該目録初稿が「2」で中断したのは次の書籍にすべてを注入したからだと推測する。

中島が資料協力をしたという阿英著、飯塚朗+中野美代子訳『晚清小説史』（1979）*2には少しの加筆がある（傍点筆者。以下同じ）。

注（56）『薄命花』柳川春葉（一八七八～一九一八）原作の『生さぬ仲』（一九一三）か。光緒三十三年（一九〇七）商務印書館刊 374頁

『生さぬ仲』と具体的に書名を出したところが新しい。ただし「か」をつけて疑問を残す。確認できていないことを意味する。見れば『生さぬ仲』の公表は1913年としているのではないか。『薄命花』はそれに先行する1907年刊行だから時間的に矛盾が生じる。杜撰である。中島が書き加えたようには見えない。

そこに気づいたのは呉燕（2010）*3だ。『薄命花』について注19をつけている。

19) 阿英『晚清小説史』の訳者飯塚明と中野美代子の見解によると、『薄命花』の日本語底本は柳川春浪の『生さぬ仲』であると言う。[飯塚明、中野美代子訳、『晚清小説史』、『東洋文庫』1979年、頁374] そうだとすると、中国語訳の出版年代は日本語原作より早くなるが、それは間違いとしか思われない。樽本照雄の『新編増補清末民初小説目録』の中では、この小説について、日本語原作の作者名しか示されていない。翻訳年代と呉構の作品選択の傾向から判断すれば、柳川が明治三十八年以降創作した『薄情者』、『やどり木』を代表とする家庭小説の中から選ばれた可能性が高いのではないか。28-29頁

『生さぬ仲』については呉燕の指摘が当たっている。また『新編増補清末民初小説目録』（樽目録第3版 済南・齊魯書社2002。46頁）も同様だ。ただし呉燕が示している「薄情者」（『新小説』1905）、『やどり木』（1906）にしても「ないか」と書いて可能性を述べただけ。底本の確定がないからもどかしい。『薄命花』そのものを欠いた状態では正解に到達しないのもしかたがない。

目録類を見れば『薄命花』は明らかに1冊の単行本である。もとの春葉作品も相当な分量があるに違いない。それが思い込みのひとつにもなっていた。『生さぬ仲』『薄情者』『やどり木』などという作品があげられたのもその予測にもとづいていたはずだ。すべてが未解決のままである。問題を解決するためには書物そのものが不可欠だ。

そういう状況で新しい示唆があった。米国 Xilao LI が Yanagawa's A Nihilist Lady と示している（2007）。それを手がかりにして樽目録第4版（2011）より「柳川春葉「虚無党の女」『太陽』10巻11号1904.8.1か」と注釈欄に追記した。「か」と示した理由は単純で『薄命花』を見ていないからだ。

李艶麗「晚清日語小説翻訳書目録（1898-1911）」（2014）*4はさらに一步進めている。『薄命花』（光緒三十三年）にもとづいて粗筋を紹介したのが斬新だ（155頁）。しかしそこに注釈をつけて「日本語原作には言及しない（不涉及日文原作）」という。

『薄命花』は該書うしろの「晚清日語小説翻訳書目録（1898-1911）」にも掲げてある。

12.《薄命花》, 呉構訳, 上海商務印書館1907/ (日) 柳川春葉著《虚無党の女》, 《太陽》10巻11号, 1904.8.1? 170頁

雑誌『太陽』の刊行年月に「?」をつけている。漢訳は確認したが春葉日訳は見えないという意味なのか。単なる誤植なのかは不明だ。

書影とともに漢訳本文の一部分を引用紹介しているのが付建舟『清末民初小説版本経眼録・日語小説巻』（2015）*5である。大いに役立つ。

付建舟が掲載するのは袖珍小説の2種類だ。「光緒三十三年六月初版／同年十月再版」には訳述者を銭塘呉構とする。もうひとつは「丁未六月初版／中華民國六年四月六版」で杭県呉構と記す。初版10年後の中華民國になってからも重版された。人気があったことがわかる。

阿英『晚清小説史』（1937）から付建舟著作（2015）までずっと78年が経過している。春葉から呉構への翻訳経路は判明した。しかし具体的な内容の解明にはいたっていない。さらにいうならば春葉作品は翻訳だがそのもとづいた作品についても不明のままである。

2 角書「科学小説」の謎

筆者は2020年になって『薄命花』の影印本を入手した。いくつかの疑問を解決する入り口に立ったということだ。

該書を見れば分類名の「袖珍小説」は表紙に記載されている。商務印書館は「袖珍小説」という部門を設定しているからそのうちの1作品だ。参考までにほかの部門には「欧美名家小説」「説部叢書」「林訳小説叢書」「小本小説」などがある。

ところが『薄命花』のどこにも角書「科学小説」がない。以前はその角書があると思っていた。

もとづく資料がある。版元商務印書館の広告（1911）だ*6。

「袖珍小説」の部に『薄命花』を収録する。書名上部に割注で「科学小説」と表示しているのがわかる。これが角書だ。ほかの作品にもすべて角書がついている。作品の実物を見ることができなければ版元の表示を信じるほかない。阿英目録はもともと角書そのものを採録しないのが編集方針だ。参考にすることはむづかしい。

実際には（影印本が実物のままとして）その記載はなかった。念のためにほかの袖珍小説複数を見た。いずれも個別に角書はついていない。商務印書館の編集者が図書総目録を作成した時、そこにはない角書を勝手に付加したらしい。ただし「科学小説」としたのには編集者



なりの考えがあったのだろう（後述）。

ついでにいえば商務印書館の刊行物、特に重版奥付に表示する初版の刊年が間違っていることがある。事実ではない数字を記載するのだ。図書総目録の角書についてもそれと同じことがいえそうだ。書物を確認する機会が増えればこのような例がほかにも出てくるものと思う。

角書など細かなことだと疑問を持つ人もいるだろう。気にしない研究者が多い。しかし問題は小さくない。実物を見て目録を作成しているかどうかがあぶりだされるからだ。ひとつひとつ確認する作業を続ける必要がある。

3 呉構漢訳とその底本——柳川春葉

漢訳『薄命花』の底本は柳川春葉「虚無党の女」（『太陽』10巻11号1904.8.1）である。



「虚無党の女」本文



表紙

春葉作品は雑誌掲載が2段組みでわずかに全13頁だ。それを漢訳してどうして単行本1冊になるのか。不思議だった。呉禱訳の影印本を見てようやく理解できた。

袖珍と称するだけあって小型本らしい。「らしい」というのは実物大に影印したようには見えないからだ。手元の書籍は全体を拡大した印象がある。全57頁。しかも1頁が21字×10行で合計210字にすぎない。

商務印書館の袖珍本系列で『三疑案』（丁未年九月初版／中華民國二年十一月三版）は23字×11行の253字だ。また呉禱訳『五里霧』も同様である。だが『銀鈕碑』は22字×11行の242字であって不揃いだ。すると『薄命花』を含めて袖珍本系列は判型は統一されていても組版の定型はないということになる。

結果として『薄命花』はゆったりと活字を組んだから1冊になった。あるいはその逆で単行本にするためにゆるくページを設計した。

それに比較して同じ商務印書館の「小本小説」は小型本だが30字×13行で1頁当たり390字もある。また「説部叢書」初集、2集が32字×12行の1頁は384字だ（全部が一致しているとは限らない）。そこを見れば『薄命花』は贅沢な意匠が与えられた。なぜ特別扱いなのか。単にページ数の関係なのかその理由はわからない。

呉禱が日本に渡って学んだという資料はない。主として日本語翻訳作品から漢訳しているから彼が日本語を理解しているのは事実だ。この『薄命花』もそのひとつである。呉禱は中国で日本語を学習したと考えられる*7。

底本の著者柳川春葉（本名専之、1877-1918）は紅葉門下の家庭小説作家で知られる。小学校卒業後、一時期英語塾に通ったことがある。

春葉は外国文学にも関心を持っていた。それを紹介する文献から引用する（割注は開いた）*8。

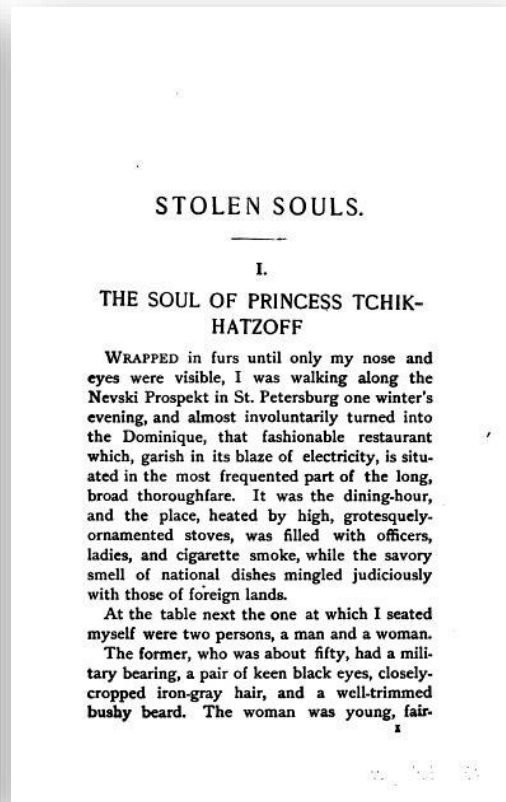
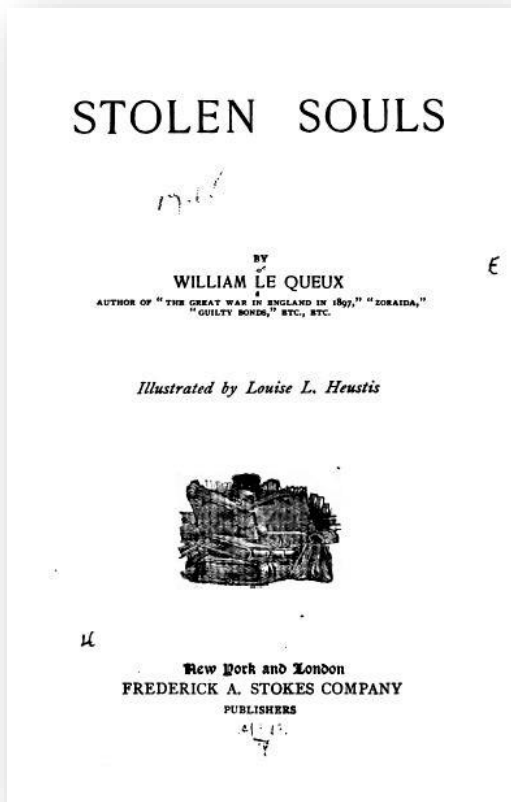
彼（春葉）は当時流行の北欧や西欧の文学に関心をもって、ツルゲーネフの「車輪の響」（「新潮」明治三九・三・二五）、モーパッサンの「農夫の娘」（「新潮」明治四〇・一・一五）、イプセンの「蘇生の日」（梁江堂刊 明治四三・二・五）などの翻訳、翻案もこころみ、……（後略） 47頁

上に見る外国作品は春葉の経歴から考えれば英語訳からの重訳だろう。

ロシア文学に関心をもつから翻訳して「虚無党の女」があるとは思う。ただし春葉の該作品に言及する日本と中国の研究論文を見かけない。もちろん目録類は除く。李艶麗の説明は例外的な存在だ。

4 原作——ル・キュー

春葉が使用したのはル・キュー (WILLIAM TUFNELL LE QUEUX、1864-1927) “STOLEN SOULS (盗まれし魂)” (NEW YORK AND LONDON: FREDERICK A. STOKES COMPANY, 1895. open library 所収) である。



短篇小説集で全14篇を収録している。春葉はそのうちの第1章(篇) “THE SOUL OF PRINCESS TCHIKHATZOFF (チカツォフ公爵夫人の魂)” のみを日訳して題名は「虚無党の女」とした。

それをさらに呉禱が漢訳して『薄命花』である。「美人薄命」の「花」だからいずれも女性を指す。といっても早死にするわけではない。英文原作の固有名詞から日訳の普通名詞になり漢訳では抽象的な題名に変化している。

ル・キューの題名「チカツォフ公爵夫人の魂」から想像できるのはロシア人が登場していることくらいだ。そこから虚無党を想像することはむづかしい。だから春葉の日訳「虚無党の女」はル・キューの作品内容をうまく抽出しているといえる。そこから呉禱『薄命花』に飛躍するのは訳者の主観なのだから別にいいだろう。しかし『薄命花』を見ただけでは虚無党が関係しているとはわからない。虚無党小説を論じる論文で言及されることがない理由だと思う。

商務印書館の図書総目録に角書「科学小説」を付加していた。編集者が苦心した結果ではなかろうか。虚無党が出てくるから「政治小説」あるいは「虚無党小説」とする方法もあった。しかし編集者は内容が虚無党ではなく催眠術を主としていると把握した。しかし当時も「催眠術小説」という分類はない。それではあまりに特化しすぎる。ならば「医学小説」でもいいようなものの商務印書館はその角書は使用したことがない。催眠術ならば「科学小説」に含まれてもいい。そういう理由だと思われる。それにしても漢訳題名が『薄命花』という女性を示しながらなおかつ「科学小説」というのだから違和感がある。しかし作品を読めば納得はするだろう。

一人称小説の主人公はイギリス人ウエントウォースである。彼はロンドンの日刊新聞通信員としてロシアの首都サンクトペテルブルクに滞在していた。彼が党员だというのではない。ロシア虚無党に同情する記事を書いたことがある。その後も時々呼ばれて秘密集会に参加していた。互いに利用価値があるという関係であった。

彼はレストランでアガフィアという女性の隣席にたまたま座った。それ以後、彼女のことが忘れられなくなるという不思議な感覚を持つようになる。その理由は物語最後に明かされる。虚無党の秘密集会に出てみるとその女性が組織加入の

宣誓を行なっている。それ以来、彼女との不可解な出会いが続く。彼女からコレラ患者となった前恋人に手紙を渡してほしいという願いがありそれを実行している。

イギリスに帰国しロンドンで馬車の中のアガフィアを見かけた。ウエントウォースは殺人事件に巻き込まれ意識を失って放置されていたのを友人のファーガス



レストランのアガフィア

ン医師（催眠術大家）に助けられる。ふたりが追究するとアガフィアが彼女の後見人デリアノフ（催眠術師、虚無黨員、実は露国政府の走狗）によって催眠術をかけられていたことが判明する。アガフィアは悪漢の思うがままに操られていたのだった。悪人の催眠術師デリアノフの目的はアガフィアが相続したチカツォフ公爵の財産を横取りすることだ。目的は成功したが彼自身は宮殿に爆弾を仕掛けたときにそれを取り落した。自爆死してしまい自業自得で終わった。そういう物語である。

春葉日訳題名の「虚無党の女」は小説内容を示している。ただし虚無党そのものについて詳細に説明する作品ではない。主題は催眠術のほうにある。催眠術をかけられたアガフィアとウエントウォースの身边に不可解な事件が起こることが主要な内容だ。虚無党は背景に設定されているにすぎない。遺産の横取りに男女の恋愛模様風をからめる。催眠術が重要な役割をはたしているとくり返す。

呉構が翻訳したチェーホフとゴーリキーの作品とは作風がまったく違う大衆小説である。

5 春葉と呉構の翻訳

春葉の日訳はル・キュー英文のほぼ直訳になっている。段落まで同じだ。「ほぼ」というのは春葉の加筆がわずかにしてもあるからだ。

加筆に関してまず細かいところから指摘する。1例を示す(ルビ省略)。

チカツォフ公爵夫人(アガフィア)についてル・キューは衣装と持ち物に注目して説明した。関係部分のみを抽出する。

a velvet *shuba*, lined with Siberian fox/the *bashlyk* …… of Orenberg goatwool p.2

ビロードのシュバ(外套)、シベリア狐の裏地/オレンベルグ山羊の毛でできたバシュリク(頭巾)

物語がはじまるのはロシアだ。雰囲気を出すためにロシア語を、ただし英語表記の *shuba*、*bashlyk* を使用した。装飾が高級品であることを示して裕福な女性であることを読者に伝えている。英語圏の読者がシュバ、バシュリクをそのまま理解したかどうかはわからない。前後関係で推測させるという作者の意図なのだろう。オレンベルグ **Orenberg** は **Orenburg** とも。地名だ。モスクワから南東にカザフスタンとの国境に近いウラル山脈の南端に位置する。

春葉と呉構の翻訳はそれをどのように処理したか。並置する(呉構漢訳についてカタカナ語は春葉日訳を使用する)。

【春葉】西比利亜の狐皮の裏を付けた、天鵝絨の外套／バシユリツクは、オーレンブルヒの山羊の毛で 97頁

【呉禱】背面貼著西伯利亞出産的狐皮。裳面上又加天鵝絨外套／巴秀立克冠。乃是奥凌堡所出山羊的毛。3頁

裏にはシベリア産の狐皮をつけ表面はびろうどの外套／バシユリツク頭巾はオーレンブルヒで産出した山羊の毛

春葉は「外套」と訳した。しかし「バシユリツク」はそのままだ。呉禱漢訳は春葉日記を直訳している。「冠（頭巾）」を付け加えたのは呉禱の工夫である。

たとえば原文の **revolver** を春葉は「ピストル」と翻訳した。呉禱は「披斯脱爾手槍」つまり「披斯脱爾（ピストル）」と音訳したうえでさらに「手槍（ピストル）」を並置する。二重手間をかけた。

日本語を読む人はすぐに理解する。このやり方はルビである。漢字に振り仮名をつけるルビという活字文化は明治時代からある。日本で普通に見られるルビを呉禱は自分の翻訳に導入した。上のピストルで実例を示せば「^手槍^槍」となるだろう。そのような組版の習慣がないからもとのカタカナ語に意味を接続させて表示した。

清末民初の商務印書館は日本金港堂と合弁会社だった。印刷技術を導入してその鮮明さを宣伝している。しかしルビ文化は普及しなかったようだ。教科書に注音字母を振るのはだいぶのちの中華民国時代になってからである。小説本文に傍点は見るとルビは知らない。

呉禱による新しい漢訳方法だった。しかしそれを疑問視する人がいた。『小説林』第5期（1907）の「新書紹介」では次のように書いている（本文のみを翻訳する）。

薄命花 商務袖珍本 定價一角

是書記筆。似有欠妥處。如云科澆洋盃。蘭泊洋灯、披斯脱爾手槍等。按杯子、西文為 ^{ママ}Cup。訳音為科澆。訳義則盃也。灯、西文為 Lamp。訳音為蘭泊。

訳義則灯也。手槍、西文為 Pistal^{ママ}。訳音為披斯脱爾。訳義則手槍也。音義並列殊為鮮見*9。

本書の翻訳には妥当ではない箇所があるようだ。たとえば「科滄洋盃」「蘭泊洋灯」「披斯脱爾手槍」などである。「杯子 (コップ)」は外国語で Cuq [Cup] という。音訳して「科滄 (コップ)」でありその意味は「盃 (コップ)」だ。「灯 (ランプ)」は外国語で Lamp という。音訳して「蘭泊 (ランプ)」でありその意味は「灯 (ランプ)」だ。「手槍 (ピストル)」は外国語で Pistal [Pistol] という。音訳して「披斯脱爾 (ピストル)」でありその意味は「手槍 (ピストル)」だ。音と意味を並列するのはまことに稀である。

紹介文を書いた人が日本にルビというものがあることを理解していれば違った評語になったのではなかろうか。

また漢訳だけにたよって英語を再現した。だからピストルの英文が revolver であるとは思わない。それはしかたがないだろう。

春葉の翻訳ではル・キュー原作にない小さな加筆がいくつかある。アガフィアが醸す高貴な雰囲気を描写して独自の書き加えをする。

【春葉】何から何まで、有らん限りの善盡し美盡したもので、従つて當人の様子は、何う見ても貴族らしく見受けられるのだ。97頁

【呉禱】總而言之。這女子身上。任從那裏起。任到那裏止。好是天生就無瑕無疵。盡善盡美。當真沒一絲一毫遺憾。叫人指摘出來。因此上。他的體態豐度。任是誰人。總道他是貴族門風。斷斷不是尋常小家之女。3頁

言ってみればこの女性はどこからどこまでも天性で疵がなく、善をつくし美をつくしており他人が指摘すべき残念な箇所がまったくないようだ。だから彼女の様子から貴族の家風だろうと誰でもがいうはずだ。断じて普通の貧乏人ではないのだった。

呉禱は日本語をそのまま重訳するのが基本姿勢である。上の箇所では少し説明

の語句が増えたとはいえ日訳と基本的に合致している。

そればかりか呉禱の加筆は春葉日訳をこえて理解しやすい箇所がある。

ル・キュー原作で使用されるある単語に注目する。作品に出てくる Prince は公爵だし Princess は公爵夫人を意味する。春葉の日訳はこの単語についてなぜか統一していない。「姫さま」から「奥さま」までの間で揺れている。わざと多様性を示したといえなくもないが不安定にしか見えない。

Agàfia Ivanovna, the Princess Tchikhatzoff p.10

アガフィア・イヴァノヴナ、チカツオフ公爵夫人だ。

【春葉】チカツオフの公爵、アガフィア、イワノウナ 101頁

ここは公爵夫人でなくてはならない。「チカツオフの公爵」としては春葉の誤訳になる。アガフィアは最初に登場する箇所ではアガヘアとしている。そこは誤植かもしれない。

【呉禱】梯加奥夫公爵、伊華奴烏娜 22頁

チカツオフ公爵、イワノウナ

春葉を受け入れたから呉禱もここでは公爵と誤った。もうひとつカタカナの「チカツオフ」に見える「オ」は小書きである。今では「チカツオフ」と書くが当時は大きく表示していた。誤解するはずのない箇所だ。しかしなぜだが「オ」に引っかかり漢語の「奥」を当てた。別の作品ではそのような誤りは犯してはいない。ここだけは呉禱の不注意だろう。現代漢語では「契卡佐夫」とすることも考えられる。

呉禱はアガフィアを漢訳しない。春葉日訳の「イワノウナ（伊華奴烏娜）」で統一した。

ル・キューにある「Princess」（p.11）を春葉は「姫さま」（102頁）とし呉禱は「夫人」（26頁）だ。呉禱漢訳が正しい。別の箇所も示す。

I recognized her features. It was Agàfia!

“You, Princess?” I cried in astonishment, grasping her hand. p.14

私は彼女のことがわかった。アガフィアだった。／「あなたは、公爵夫人でしょう？」私は驚いてそう叫ぶと彼女の手を握った。

【春葉】此女こそ誰あらう、寢寐にも忘れないアガフィア其人だ。／『やア、チカツオフの姫さまで——』と僕は嬉しさのあまり矢庭にその手を握った。

104頁

【呉禱】唉。這女子是誰人。正是我寢寐不忘餐飯不[如]廢的伊華奴烏娜那人。我喜得不可支持。喊道。『呀。伊華奴烏娜夫人——』登即和他行握手的礼。

33-34頁

アア、この人こそ誰あろう、私が寝ても覚めても忘れず食事がノドを通らないまでに思いつめたイワノウナその人である。私は喜びのあまり思わず声をあげた。「や、イワノウナ夫人——」矢庭に彼女と握手をした。

春葉の「チカツオフの^{ひい}姫さま」では公爵の娘と誤解されかねない。呉禱の「イワノウナ夫人」は春葉よりも適正だ。

だいいちル・キュー原作ではアガフィアが自身の経緯を説明していることを見逃すわけにはいかない（下線は筆者。以下同じ）。

although only eighteen, my mother compelled me to marry the Prince, who was nearly forty years older than myself. p.21

まだ18にしかありませんでしたが母は私に公爵との結婚を強要しました。その人は私よりも40歳近く年上でした。

【春葉】妾の母は其時には未だ十八にしかありません妾を、四十ばかりも年上の、父と申しても可いやうな、彼の公爵家に無理に嫁きましたのです。

108頁

【呉禱】那時我母親。将我十八歲的女兒。嫁與一位年過四十的公爵之家。50頁

その時、私の母は18歳の女兒を40歳もこえたある公爵の家に嫁がせたの

です。

ここを見れば春葉が「(チカツオフの) 姫さま」とするのが不適切であるとわかる。つぎの箇所は呉禱の加筆があるから中国の読者は正しく理解しただろう。

Especially so if one's idol is Agàfia Ivanovna, the Princess Tchikhatzoff
p.10

ことに相手がチカツオフ公爵夫人のアガフィア・イヴァノヴナであっては【春葉】それに対手がチカツオフの公爵、アガフィア、イワノウナと来ては恐るべし恐るべし。101頁

【呉禱】女子的丈夫乃是梯加奥夫公爵。他自己名字。叫做伊華奴烏娜呀」
22頁

女性の夫はすなわちチカツオフ公爵だ。彼女の名前はイワノウナなのだよ。

春葉日訳ではチカツオフ公爵にしかない。アガフィアが公爵では意味が通らないと呉禱はわかっている。だから上のように「丈夫(夫)」を補充した。内容を正確に把握していることが理解できる箇所だ。

小さな異同はある。soup (p.2) を春葉はそのまま「スープ」(97頁)とし呉禱が「麵包(パン)」(5頁)に置き換えたという箇所などだ。そほのかは省略する。許容範囲内だと考える。

6 超常現象

記者ウエントウォースはレストランでアガフィアを見かけたあとなぜかしら彼女に引き付けられるようになった。彼女が体験する肉体上の跡がウエントウォースの身体にも同時発生するという怪奇現象だ。

家にもどったウエントウォースは彼女の叫び声を聞いた。同時に右腕をねじ上げられノドにあてられた刃物の冷たさを感じる。彼以外には誰もいない室内のことだった。鏡の前に立って見た。

I saw upon my throat *a thin red line*, while upon my wrist were three red marks that had apparently been left by unseen fingers! p.8

ノドのところに細い赤い筋があり、一方で私の手首には見えない指が残した赤い跡が明らかにみつあった。

問題は下線部分だ。春葉は省略した（春葉日訳にくり返し記号があれば文字に置き換えた箇所がある）。だから呉構漢訳にもない。

【春葉】これは抑も如何に、細い赤い筋が丁度咽喉のところに現然と印いて居るので 101頁

【呉構】又不知為何。恰好咽喉之間。顯然印著細細一縷一縷的紅筋。19頁
なぜかはわからないがちょうどノドのところに明らかに細く赤い筋がついている。

手首に出現した赤い跡はアガフィアと結びつくことが後でわかる。ル・キューはまぎれもなくそれを重要な手がかりに設定した。これが伏線となって次の展開になる。

I took the letter slowly from her hand, and as I did so, was amazed to discover that on her slim white wrist there were three red marks, exactly similar to those I bore! p.11

私は彼女の手からゆっくりと手紙を受け取ると、彼女の細く白い手首に私に生じたものと全く同じ赤い跡がみつあるのを発見して驚いた。

容貌が以前とは違うように見えても手首の赤い跡がふたりに共通して残っている。ウエントウォースはそれによってその女性がアガフィアであると直感した。

しかし春葉はその部分を省略したから次の場面でも引っ込めたままにせざるをえない。

【春葉】快諾一番其手紙を受け取つた。而してつらづらその女の顔を見ると、扮装こそ斯くは違つて居るとは云ふものゝ、是は不思議！擬うべくもなき彼女の女、チカツオフ公爵と聞いた彼の女である。102頁

【呉禱】當即收下了他的書信。随又看望女子的面顔。怎地這等装扮。和往時大不相同。可不是稀奇意外的事！如今看他模様。簡直没得個比方。聽說他是梯加奧夫公爵夫人。更覺可怪了。26頁

彼女の手紙を即座に受け取りそのまま女性の顔を見た。その装いがどのように昔とは大いに異なっているとはいへ珍しくも意外なことでもなかった！彼女の様子を見ればまぎれもなくあのチカツオフ公爵夫人である。まことに不思議なことだった。

原作では手首の赤い跡がふたりで共通する。この怪奇現象こそは物語の謎を解くカギなのだ。なぜそこを春葉は削除してしまったのか。たしかにふたつの場面で1ヵ月そこらの時間が経過している。それだけの時間があれば赤い跡も消失しているはずだと春葉は考えたのかもしれない。しかし超常現象なのだから合理的判断は必要なかった。ル・キュー原作のままに翻訳したほうが異様で奇怪な物語世界が保持できただろうと惜しむ。呉禱は春葉日記に従うほかない。

物語の最後部分において謎解きがある。催眠術であった。

7 菊池幽芳『新聞賣子』および『薄命花』の広告

催眠術が登場する作品といえば『薄命花』の前には呉趺人が関与した漢訳「電術奇談」（1903）*10がある。その底本は日本の菊池幽芳日記『新聞賣子』（新聞連載1897／単行本1900）だ。刊行年を見れば呉禱が『新聞賣子』と『電術奇談』を読んでいたとしても不思議ではない。「虚無党の女」および『薄命花』はほかならぬ催眠術という単語でそれとつながる。

もうすこし細かく具体的に『新聞賣子』（『電術奇談』）と「虚無党の女」（『薄命花』）の接点を指摘する。

医療用具のランセットというものがある。この単語について呉構漢訳は春葉日訳よりわかりやすく説明している。

Ferguson, who had placed his hand upon her breast, took out a lancet and made a slight incision in her arm. p.19

彼女の胸に手を当てていたファーガスンはランセット（刃針）を取り出し腕にわずかな傷をつけた。

【春葉】ファーガソンは女の胸に手を當てゝ見て、それからランセットを取り出して、雪よりも真白な二の腕にプツツリと打込んでみて 106頁

【呉構】法医生将手捫一捫他的胸前。姑且試験。随又在身边取出蘭色忒試験葉管。颯的打入他賽過霜雪樣白的兩條玉腕之中 44-45頁

ファーガソン医師は彼女の胸をすこし押してみた。それからランセット試験葉管を取り出して雪よりも真っ白なふたつの腕にスーと打ち込んだ。

ランセットとは外科用器具である。先の鋭くとがった両刃のメスだ。あるいは刃針、穿刺針などという。ランセットをそのまま示した春葉訳では読者は何のことかわからない。前後から判断してなんらかの道具であると推測はできるが。

呉構は「蘭色忒（ランセット）」にその意味の「試験葉管」を追加した。以前に説明したルビあつかいである。それが読者には親切だという考えだ。そこはいいにしても呉構は日本語の「二の腕」が理解できなかった。漢語では「上膊」という。「兩條」では「二本の」腕にしかない。小さなところで誤訳をする。

このランセットという単語で『新聞賣子』（『電術奇談』）と「虚無党の女」（『薄命花』）がつながる。

【幽芳『新聞賣子』】利一は失望の極^{ランセット}披針を掴み来りて泰蔵が腕の常脈を切断しぬ、死せる人ならずば鮮血さつと迸ばしるべきを濃き黒ずみたるどろどろせる濃血の僅かに一滴ぼたりと落ちたるのみ。33頁

上のランセット（披針。細い刃針）は相手の生体反応を見るために使われた。

『薄命花』でも同じ役割をはたしている。

幽芳訳『新聞賣子』（『電術奇談』）では物語の発端に催眠術が登場する。主人公の裕福な青年（インド帰り）が友人の操作する電気機械によって催眠術をかけられ覚醒せず記憶を失う。そればかりか身体に異常を発生し別人になって新聞の売り子になった。そこから日訳題名は命名された。単行本の前編表紙にはその後姿が描かれている*11。

ただし作品名を見ただけではこれが催眠術をあつかった小説だとは気づかない。



前編 表紙

そこで大阪毎日新聞は事前に啓蒙記事を掲載して小説発表の準備をした。

『大阪毎日新聞』1896.11.30「催眠術の伝授」から引用する（ルビ省略）。

始めて催眠術を発見したるは独逸の理学者メスメルと云へる人にて其方法は極めて簡単なるもにてありき則ち重に動物に対し其額を打ち又は目の前に指を綾なして眠らしむるに過ぎりき而して此方法をば発見者の名を附してメスメリズムと称したり今日の催眠術即ちヒプノチズムは畢竟此メスメリズムの

進化したるものなり／＼たび催眠術をかけられたる人は己の知れる事ならば如何なる事をも命ぜられたる儘に行ふ可し

フランツ・アントン・メスメル（メスマーとも。Franz Anton Mesmer、1734-1815）はドイツ人医師。動物磁気によって患者を治癒させることを提唱した（メスメリズム mesmerism、動物磁気療法）。これが催眠術（ヒプノティズム hypnotism）につながる。

催眠術によって他人の意識と肉体を操作する側面を強調して書かれているのがル・キュー「チカツォフ公爵夫人の魂」である。前述のとおりノドに発生した赤い筋、見えない手によって手首に赤い印がつけられる箇所がそうだ。

催眠術を強調して押し出したのが幽芳の翻訳小説である。幽芳「催眠術 小説「新聞賣子」を掲ぐるに就き」（『大阪毎日新聞』1897.1.1。単行本では文章題名から「催眠術」を削除し掲載を二月一日に誤る）が掲載された。「催眠術則ちヒプノチズムがメスメリズムなる名の下に始めて世に顕はれしは今より百年前の事なるが」と書いて催眠術が医学界、心理界、教育界などに起こすだろう大改革について述べる。そのなかの医学、心理における働きについて説明する2ヵ所を引用する（傍点ルビは省略。句点をほどこす）。

或は五厘銅貨を肌に触れて其銅貨と同じ形の隆起を生ぜしめ十字架を触れしめては十字形の隆起を生ぜしむるを得可し。殊に甚しきは一言の命令を以て手を触れず刀を触れずして身体に出血せしむるを得可し。

催眠術の心理上に及ぼす結果については実に慄然たるものあり。催眠術を施されたるものは施術者の命ずるまゝに如何なる事をもなす可し。

幽芳の解説は彼の『新聞賣子』よりもル・キュー作品に適合例を見ることができ。

さて呉禱の『薄命花』はその題名からは虚無党あるいは催眠術が出てくるとはわからない。ただしその新聞広告は露骨なまでの種明かしをしている（記号は陳大康による）。

[編年史③1306] 『時報』光緒三十三年七月初十日 (1907.8.18) 「上海商務印書館続出最新六種小説」

《薄命花》：此是叙俄国党人岱拉那夫以動物電気佩伊華奴烏娜之身，使之無端恐惧，所以待伊者至酷，攫其資，紡（繼）而欲絶之。遇拯獲生，而岱卒以行刺自斃。事頗悲冗，所謂読之動魄回腸者，其此種稗史耶？ 洋装一冊，精製袖珍抄本，每冊定価大洋一角。（注：[編年史⑤2457] も同文）

『薄命花』：ロシア虚無党员デアリアノフがイワノウナに動物電気をかけて限りない恐怖に落とし込む。イワノウナをひどく扱うのはその財産を奪いつくすためだ。彼女は偶然救われデアリアノフは自分で死んでしまう。事件はひどく痛ましい。いわゆる読めば驚き感情が高まるというその種の小説であろうか。洋装1冊、上製袖珍本、定価大洋1角。

人名は春葉日記を使用して訳した。「動物電気」とは催眠術を指す（後述）。『薄命花』では催眠術が使われる。ただ1ヵ所だけ出現する「動物電気」を広告のために取り出したのは文案者が興味を感じたからだろう。

もとが推理的要素をそなえた小説だ。ところが新聞広告は小説を最後まで読んでようやく明かされる事実を晒してしまった。大筋をすべて書けばいいというものではない。そこが広告を書いた版元商務印書館の編集者には理解できていないようだ。そういう常識のない時代だったとしかいいようがない。

8 謎解き——鍵語としての催眠術（メスメリズム、動物電気）

催眠術について登場人物で専門家のファーガスンが解説するという形をとっている。そこを見ていこう。便宜的に数字を振る。

① “She remembers nothing distinctly since she was hypnotized,” Ferguson said, “therefore you are a stranger. p.19

「彼女は催眠術をかけられてからまったく何も覚えていない。だから君の

ことも知らないのだ」とファーガスンは言った。

【春葉】ファーガツソンは僕に向つて、『この方は催眠術を施されたのです。其以来皆無夢中で、何事も記憶して居らんのです、夫で君を見知らんのだ。』

107頁

春葉はル・キュー原作どおりに直訳している。ところが呉禱は奇妙な漢訳をした。どうみても誤訳である。

【呉禱】只聴法医士対著我道。『我用的是催眠術方法。凡是以前的事並非如夢寐之中。全然忘却。不論什麼事。都能記憶著。因此。他還能穀認識老兄』

46頁

ファーガツソン医師が私に向かつていうのをただ聞いていた。「私が用いたのは睡眠術という方法です。以前のことはけっして夢の中というわけではないのだがまったく忘れている。なにごとであれ記憶をすることはできる。だから彼女は君を見分けることはできるのだ」

呉禱漢訳の奇妙なところは「忘れている」のに「記憶をすることはできる」と矛盾しているからだ。

さらに呉禱は日本語「この方」を「我」と取り違えた。「施された」という受け身を理解していない。それ以後の漢訳が日訳とは反対になった。アガフィアがウエントウォースのことを「見知らんのだ」とするのが春葉日訳だ。ところが呉禱は「還能穀認識老兄（見分けることはできるのだ）」と解して逆である。

もうひとつは日本語漢字を勘違いした。

春葉日訳「其以来皆無夢中で」の「皆無」は日本語では「すべて」という意味だ。「まったく夢の中で」記憶がない。そう自然につながる。

ところが呉禱は「凡是以前的事並非如夢寐之中（以前のことはけっしてすべて夢の間というわけではない）」と漢訳した。そうした理由は春柳の「皆無」という漢字に引っぱられたからだ。呉禱からすれば漢語で「皆無」ならば「全無」「毫無」「完全没有」と読める。それが呉禱訳の「非」になった。続く文章が日訳とは反

対になってしまった原因である。

このあとでアガフィア自身が説明している。それがあってもかかわらず誤解をした。不可解だといわざるをえない。

I seem to have been in a long dream; I can remember nothing distinctly.

p.20

私は長い夢の中にいたようで何もはっきりとは覚えていません。

【春葉】妾は只今まで全く夢の心地で何も明瞭と覚えて居りません。107頁

【呉禱】我至今還全然如在夢中。不論什麼事。總不能明白清醒。48頁

私は今にいたるまでまるで夢の中にいるようでなにごとであれはっきりとは理解できないのです。

明らかに呉禱漢訳のファーガスン医師の説明とは食い違っているではないか。どうして前後で一致させなかったのか理解するのはむづかしい。

呉禱が理解する日本語は基本的にかなり深いと筆者は理解している。春葉日記にくらべてわかりやすい翻訳上の工夫をしているところからそれがわかる。しかし上の例のように日本漢字に引かれて誤解を生じている箇所があることも事実なのだ。呉禱は書物だけを頼りに日本語を学習したのではないかと推測する理由である。

②Ferguson, who was one of the greatest English authorities on hypnotism and a student of the occult, eagerly asked what the man had done. p.20

ファーガスンは催眠術についてイギリスの最も偉大な権威のひとりでありオカルトの学究だったからあの男が何をしていたかを熱心に尋ねた。

【春葉】此ファーガツソンと云ふ男は、英国で一二と云はれる催眠術の大家であるので、其デアリアノフなるものゝ為たところを、詳細に女に語らしめた。107頁

【呉禱】可知法軌遜医士那人。在英国之中原是頭等有一無二的催眠術名家。他見女子道出魔術兩個字来。将岱拉奴夫所作所為的情形。仔仔細細解説。告

訴女子。47頁

ファーガツソン医師という人は英国で唯一無二といわれる催眠術の大家である。彼は女性が魔術という2文字を話したからデリアノフが行なったことを彼女にむかって仔細に説明した。

ここも呉禱の誤訳である。「女に語らしめた」が命令形であることを呉禱は理解しなかった。ひらがなについての理解に弱点がある。

次の部分は催眠術の核心を説明している。ファーガスンは主人公の眼を見つめて言った。1行ずつ比較対照して検討する。

③The man has experimented successfully upon you with the novel method of producing hypnosis recently discovered by Charcot at La Salpêtrière.
p.20

その男はシャルコーがサルペトリエールで発明した新しい催眠術法を君にうまく実験してみたのだな。

【春葉】うむ、その男は旨く君に成功したのだ、ラ、サリペトリエーで、近頃シャルコーの発明した催眠術新法が。夫を其デリアノフと云ふ男が君に試験し居つたのだよ。107頁

【呉禱】唔。那人要在老兄身上。成他的功。近来名人蝦爾科。發明一種催眠術新法。名叫獵薩利拍特来。岱拉奴夫那厮。却要借老兄来試験試験。48頁

うむ。その男は君の身体でうまくやったのだ。近ごろシャルコーという人が催眠術新法を発明したのだがそれをラ、サリペトリエーという。デリアノフというあいつが君にちょっと試験したのだよ。

ジャン＝マルタン・シャルコー (Jean-Martin Charcot, 1825-1893) はパリのサルペトリエール病院の医長で神経学者。ヒステリーの治療に動物磁気 (催眠術) を適用して成果をあげた。パーキンソン病の命名者としても知られる。

春葉は人名シャルコーと病院名サルペトリエールを区別している。それを呉禱は新技術の名称だと誤解した。

Remarkable as it may seem, it is, nevertheless, possible to transfer by suggestion the sensibility of hystero-epileptic subjects to any liquid. p.20

それはどうやら驚くべきことにヒステリー性てんかん患者の感性をどんな液体にも暗示で転移することができるようだ。

【春葉】シヤルコーの説明に依るとだ、ヒステリー患者に其感覚を盡く流動体の中に移ったと思はせることが出来ると云つて居る。107頁

【呉禱】據蝦爾科所説。能將害希斯忒里病的人。遍身知覚情感。一齊搬移到各様流質之中。48-49頁

シヤルコーの説明によるとヒステリー患者全身の知覚情感をすべて流動体のなかに運びこむことができるという。

ウエントウォースがレストランで知人を見かけて中座したことがあった。その際にデアノフはワイングラスに指を突っ込みアガフィアの意識をワインに注ぎ込んだというわけ。そこからウエントウォースとアガフィアの意識下における連帯がはじまった。睡眠術をかけた結果の現象だという説明だ。

On drinking the wine, you absorbed her sensibility, and her very soul thus transferred to you, produced the mysterious affinity of thought and deed. p.20

ワインを飲むことによって彼女の感性を吸収し彼女の魂が君に移って思考と行動の不思議な親和性を生み出したのだよ。

【春葉】其移った酒を君が飲んだので、即ち此の方の感覚を君の体中に吸収して了つたのだ。107頁

【呉禱】那人搬到老兄喝的酒裏。就是将這位娘子知覚情感。吸收到老兄身体之内。49頁

君が飲んだ酒のなかにその人は移った。そこでこの女性の知覚情感は君の体内に吸収されてしまったのだ。

呉禱は直訳している。

The very singular coincidence of the marks upon your wrists, and the curious magnetic force that impelled you towards her, are nothing more than demonstrations of the powerful psychical influence of the mind on the body. pp.20-21

君の手首のマークの非常に奇妙な偶然の一致と、君を彼女に駆り立てた不思議な磁気力は身体にやどる心に向けての強力な心理的影響を表示するものに他ならない。

【春葉】夫れだからして君と此方との間には、其後思想と行為の不思議な親和が行はれたので、君が知らず知らず此方の方へ引き寄せられるやうに成つたと云ふのも、全く其結果に過ぎなかつたのだ。107頁

【呉禱】因此上老兄和娘子兩人。後來思想行為。奇奇怪怪的併做一堆。非常親熱。老兄不知不覺。自然親近到這位娘子一邇來。原来全然是這個緣故啊。49頁

そのため君とこの女性との間には後に思想と行為が不思議に一致して非常に親密になったのだ。君は知らず知らずのうちに自然とこの女性の方に近づいたのはもともとからまったくそういう理由だった。

原作にある手首の跡を春葉は省略した。ゆえにその超常現象は呉禱漢訳にも存在しない。それ以外は一致する。

④The scoundrel was an accomplished hypnotist, p.21

その悪党は熟練した催眠術師で

【春葉】デアノフと申しますのは大層催眠術が上手でして、108頁

【呉禱】岱拉奴夫那人。原来是催眠術的高手。51頁

デアノフというものは元來催眠術の名手でした。

呉禱による直訳である。

⑤His irresistible power of fascination I was unable to withstand, and by hypnotic suggestion he has caused me to hand over to him the greater part of my fortune. p.22

彼の否応もない幻惑の力を私は撃退することができませんでした。そして催眠術の暗示によって私の財産の大部分を彼に引き渡すことになったのです。

【春葉】然う斯う致して居りますうちに彼の動物電気とやらいふものを妾に掛けましたのでございませう。妾は理由も無く唯デリアノフが怖く成つて参りました。 108頁

【呉禱】他又将一件東西。名叫動物電気。佩在我身上。我無縁無故。忽地懼怕岱拉奴夫起来。 52頁

彼はさらに動物電気というものを私の身体にかけました。私は理由もなく突然にデリアノフが怖くなってきたのです。

下線をほどこした春葉日訳部分はル・キュー原作とは異なっている。催眠術をかけられて財産を横取りされた。そこを省略してデリアノフに対する恐怖に置き換えた。春葉の誤解か、あるいは別の意図があつてそうしたのか。そこはわからない。

春葉は突然「動物電気」を持ち出した。それまで「催眠術」だったのをアガフィアはなぜ別の「動物電気」にしたのか。呉禱は日本語を理解している。そこで「動物電気」を生かしながら「催眠術」とは別物のように区別した。原文のアガフィアが言うそのまますを忠実に漢訳したことがわかる。

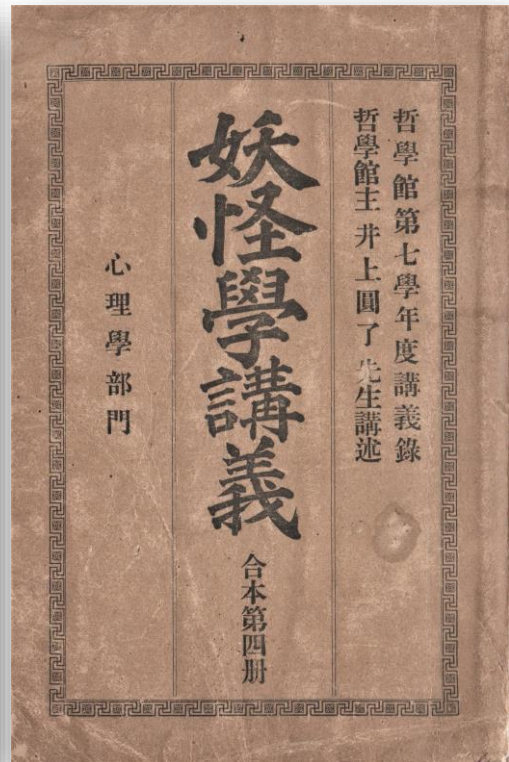
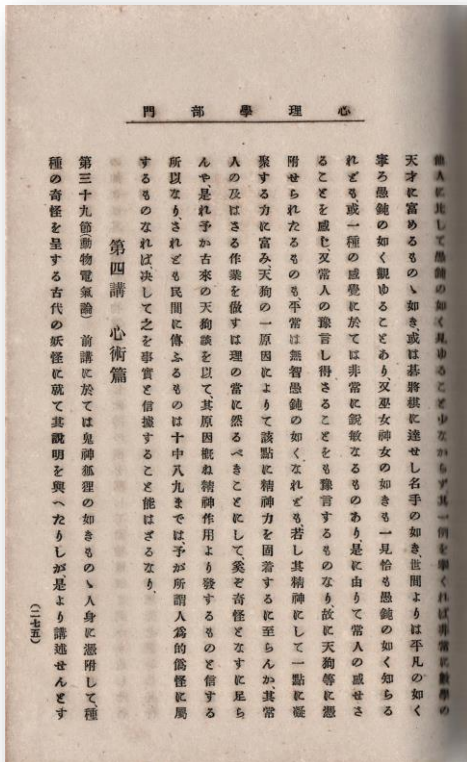
ル・キュー原作は「hypnotic suggestion (催眠暗示)」となっている。催眠術である。

春葉が「動物電気」を使用したのは明治時代にそう称していたことがあるからだ。動物の体内には電気がある。その力を利用すれば病気治療に効果を発揮する。使電者がメスメリズム(催眠術)を使い受電者(患者)に電気を伝える。そこから他人の意識を操縦するまでに至る。医学から心理学への変化だ。春葉は当時の用語を翻訳に持ち込んだ。ただしそれまでは催眠術を使用していたから別の単語

「動物電気」が出現して呉構は困惑しただろう。

メスメルは「動物磁気」と称していた。磁気と電気は異なるがアメリカを經由して日本に伝えられる過程で一体化したらしい。

日本で早い著作は鈴木万次郎訳述『動物電気概論』（1885）^{*12}がある。あるいは井上圓了『妖怪学講義』巻5（1894）^{*13}の「第4講 心術篇 第39節（動物電気論）」から該当箇所を引用する。



他人の媒介或は技術によりて精神上に変動を与へ、或は外界に奇怪を現する事に関して説明を与へんとす、近年西洋に於て動物電気の論大に行はれ、催眠術の如きは其原因を動物電気に帰し、此種の術を称して動物電気と謂へ、蓋し此名称を与へし所以は、催眠術の如きにありては、一人か他人の精神思想を動かし、其行為挙動を自由に左右することを得るか故に、其状宛も電気の磁針に於けるに類するより、動物電気と名くるに至りしものなり、故に動物電気とは今日謂ふ所の催眠術にして、此種の術を総称するときは鬼神術と

云ふ 276頁

催眠術＝動物電気という等式である。別の箇所では鬼神術に「スピリチュアリズム (spiritualism)」とルビを振る。

井上圓了著書の部分を漢訳した蔡元培の訳作がある。蔡元培訳『妖怪学講義録総論』(1906)*14だ。しかし「巻1 総論」部分のみである。目次に「動物電気」は見えるがそれだけ。該当箇所は漢訳されていないから内容を知ることはできない。

当時の蔡元培は革命活動のひとつとして知人に毒薬爆薬の研究製造を命じている。また暗殺の道具として催眠術を使うことができると認識していた。その蔡元培が創設した愛国女学において呉禱は歴史、地理、音楽の教科を担当していたのも事実だ*15。呉禱が催眠術の出てくる作品(本作と『新魔術』1907)を漢訳したのは蔡元培からの影響があったのではなかろうか。

動物電気は春葉にとっては普通の語彙だった。しかし呉禱に動物電気についての知識があったかどうかは不明だ。呉禱は基本的に春葉の日本語をそのまま漢訳している。春葉の日本語を見て呉禱が催眠術の別名が動物電気だと推測したとしてもおかしくはない。

以上、細かい箇所をあげた。結局のところ呉禱漢訳が上質の口語訳であることに間違いはない。

9 補 足——未確認作品

葛威廉著、楊心一訳『虚無党軼事』があるという。原作は WILLIAM TUFNELL LE QUEUX “STOLEN SOULS” と表示されるが刊行されたかどうかは不明だ。

また『新聞報』に「虚無党軼事」を副題にした翻訳小説が複数掲載されている。現在筆者は該新聞を見るができないからここでは触れておくだけにする。興味のある人は目録で調べてほしい。

【関連文献】

- 中村忠行「晚清に於ける虚無党小説」『天理大学学报』第85輯 1973.3.21
- 中村忠行「清末探偵小説史稿——翻訳を中心として（2）」『清末小説研究』第3号 1979.12.1。
ル・キューの説明あり
- 榎内裕子「硯友社文学に見られるツルゲーネフ受容の様相——柳川春葉の場合」『ロシア語ロシア文学研究』第27号 1995.9.1
- 陳 建華「“虚無党小説”——清末特殊的訳介現象」『華東師範大学学报（哲学社会科学版）』1996年年第4期
- 一柳廣孝『催眠術の日本近代』青弓社1997.11.30
- エティエンヌ・トリヤ（Etienne Trillat）著、安田一郎＋横倉れい訳『ヒステリーの歴史』青土社1998.5.10
- 森川登美江「清末小説点描5——ロシア虚無党を描いた小説」『大分大学経済論集』第51巻第6号 2000.3.20
- 張 全之「從虚無党小説的訳介与創作看無政府主義对晚清小説的影響」『明清小説研究』2005年第3期（総第77期） 2005発行月日不記
- 泉谷安規「理論と実践のはざまにおかれた文学作品——モーパッサンの幻想小説をよむための試論」弘前大学人文学部『人文社会論争（人文科学篇）』第18号 2007.8.31
- 李 艷麗「「日本」の可能性 冷血作品を解説する試み」『年報地域文化研究』第13号 2009年 東京大学大学院総合文化研究科地域文化研究専攻 2010.3.31
- 「晚清俄国小説訳介路徑及底本考——兼析“虚無党小説”」『外国文学評論』2011年1期 2011.2
- 『晚清日語小説訳介研究（1898-1911）』上海社会学院出版社2014.8 国家对外文化交流研究叢書
- 詹 宜穎「虚無党小説的跨境旅行——關於“Strange Tales of a Nihilist”英、日、中三個版本的考察」『東亞觀念史集刊』第13期2017.12.1 未見
- 文 娟「試論吳禱在中国近代小説翻譯史中的地位——以商務印書館所刊單行本為研究視角」『明清小説研究』2018年第4期（総第130期）2018.10.15
- 荒井由美「吳禱についての文娟論文」『清末小説から』第133号 2019.4.1

【注】

- 1) 中島利郎「晩清の翻訳小説——華訳日本文学編年目録初稿」2 関西大学大学院文学研究科院生協議会『千里山文学論集』第16号 1976.10
- 2) 阿英著、飯塚朗＋中野美代子訳『晩清小説史』平凡社 東洋文庫349 1979.2.23
- 3) 吳燕「『燈臺卒』をめぐる」『清末小説』第33号 2010.12.1
- 4) 李艷麗「晩清日語小説翻訳書目録（1898-1911）」『晩清日語小説訳介研究（1898-1911）』上海社会科学院出版社2014.8
- 5) 付建舟『清末民初小説版本経眼録・日語小説卷』北京・中国致公出版社2015.1。249-251頁
- 6) 商務印書館「商務印書館出版図書総目録」『東方雑誌』第8巻第1号 1911.3.25。またこれより先行する次もある。『商務印書館書目提要』宣統元（1909）年九月改定7版。「袖珍小説（の部）／科学小説 薄命花 一角／俄国党人以動物電気佩伊華奴烏娜之身、使之無端恐懼而攫其資、忽遇拯獲生、而党人卒以自斃」（付建舟『晩清民営書局発行書目』上冊 哈爾濱・黒竜江教育出版社2016.12。209頁）
- 7) 樽本「書家としての吳禱」『清末翻訳小説論集（増補版）』清末小説研究会2017.1.15 電字版所収。以下同じ。「吳禱の漢訳チェーホフ」、「吳禱の漢訳ゴーリキー」
- 8) 大塚豊子、山田みよ子、磯貝多恵子「（柳川春葉）一生涯、二著作年表、二[三]業績」昭和女子大学近代文学研究室『近代文学研究叢書 第18巻』昭和女子大学光葉会1962.3.1
- 9) 『小説林』第5期 丁未七月。該雑誌影印本ではこの「新書紹介」を削除する。〔編年史⑤2458〕は「光緒三十三年八月十五日」として日付けが一致しない。また原文英語の誤植を説明なく正している。資料の扱い方法としては不適切だ。
- 10) 初出は日本で刊行されていた漢語雑誌の『新小説』だ。（日）菊池幽芳氏原著、方慶周訳述＋我仏山人（吳趸人）衍義＋知新主人（周桂笙）評点「（写情小説）電術奇談（一名催眠術）」24回、『新小説』8号-2年6号(18号) 光緒29.8.15（1903.10.5）-刊年不記〔光緒31.6〕である。単行本は複数種刊行された。関連する論文は次のとおり。樽本照雄「吳趸人「電術奇談」の原作」『清末小説論集』日本・法律文化社1992.2.20
—— 「吳趸人「電術奇談」の方法」同上
—— 「吳趸人訳「電術奇談」余話」『清末小説探索』日本・法律文化社1998.9.20
樽本著、陳薇監訳「吳趸人《電術奇談》の原作」『清末小説研究集稿』中国済南・齊魯書社2006.8
姜小凌「明治与晩清小説転訳中的文化反思——從《新聞売子》（菊池幽芳）到《電術奇談》（吳趸人）」『文化研究』第5輯 2005.5

松田郁子「「電術奇談」翻案から『情変』改作まで——清末における恋愛小説試作」
『関西大学中国文学会紀要』第29号 2008.3

- 11) 菊池幽芳「新聞賣子」75回（『大阪毎日新聞』1897.1.1-3.25）。のち単行本、『新聞賣子』大阪駈々堂、前編1900.9.12／1901.1.20三版、後編1900.10.30／1901.1.20再版。単行本2冊の口絵は尾竹国弑画
- 12) 鈴木万次郎訳述『動物電気概論』十字屋・文明堂大売捌 1885.7。国立国会図書館デジタルコレクション所収。国会図書館の記述は「メスマー著」とする。誤りだろう。ネットを検索するとジョン・ボヴィー・ドッズ（John Bovee Dods、1795-1872）の著作であるという。該書について張邦彦は次のように書いている。「此書假託梅斯爾原著，實則摘録自美国催眠師多茲（John Bovee Dods, 1795-1872）的著作」。張邦彦『精神的複調：近代中国的催眠術与大衆科学』台湾・聯經出版事業股份有限公司2020.4。41頁
- 13) 井上圓了『妖怪学講義』巻5 心理学部門 哲学館1894。国立国会図書館デジタルコレクション。また『妖怪学講義』合本第4冊 心理学部門 1896.6.14増補再版
- 14) 蔡元培訳『妖怪学講義録総論』上海・商務印書館 丙午（1906）年八月初版／中華人民共和國七年九月六版。孔夫子旧書網に写真あり。1920年2月七版の影印本がある（上海文藝出版社1992.3）。また高平叔編『蔡元培全集』第1巻 北京・中華書局1984.9 に収録する。
- 15) 樽本「書家としての呉構」『清末翻訳小説論集（増補版）』清末小説研究会 電字版。679頁

呉禱漢訳「博浪椎」から『棠花怨』へ

——黒岩涙香訳『梅花郎』

『清末小説から』第146号(2022.7.1)に掲載。沢本郁馬名を使用。「博浪椎」と『棠花怨』がある。最初は別作品のように扱われていた。阿英目録では作品名が違い署名が天涯芳草と呉禱だ。どう見ても別人である。しかし研究の積み重ねによって両作品の底本はともに涙香訳『梅花郎』だということが判明した。呉禱が使用した独特な固有名詞漢訳法がある。涙香の日訳を音訳するやり方だ。たとえば涙香(るみかう)を「雷科」としたのがそれだ。ほかの漢訳でもその例を見ることができる。

1 「博浪椎」と『棠花怨』

今でこそ「博浪椎」と『棠花怨』が同一作品だということは周知のことになっている。しかしそこにたどり着くまでに時間がかかった。

阿英目録はふたつの作品についてつぎのように記述する*1。1950年代のことだ。研究者の多くが阿英目録を基礎資料として使用した。清末小説目録としてはほとんど唯一だったからだ。

【阿英147】博浪椎 法科雷著。天涯芳艸訳。光緒丁未(一九〇七)競立社小説月報本。未完。

【阿英149】棠花怨 法雷科著。呉禱訳。光緒三十四年(一九〇八)中国図書公司刊。

両者はまず作品名が異なる。雑誌と単行本の違いがある。また原作者は似ているが「科雷」と「雷科」では一致しない。結論から言えば阿英の誤記だった。実際に上の雑誌で確認すれば「雷科」が正しい。

決定的なのは訳者が天涯芳草[草]と呉禱だ。どう見ても両者は結びつかない。それが当時の事実だった。

細かなことだが阿英の表記だと雑誌名は競立社『小説月報』である。正確ではない。表紙と目次では『競立社小説月報』と称している。競立社『小説月報』と書いている論文があれば阿英目録を写したことがわかる。一言加える。奥付のみ「社」を取った『競立小説月報』と表示する。

阿英目録をながめているだけでは上の2作品は別物だ。それで終わっていた。

今から考えれば妙なことだとわかる。阿英は単行本『棠花怨』の実物を所蔵していた。彼はなぜ原本どおりに訳者名を記述しなかったのか。採取したのは表示の一部分である呉禱だけだ。そこに記載されている天涯芳草館主は捨てた。つまり天涯芳草と呉禱が結びついていたのを無理やり分離させたのだった。

阿英の記録によって回り道をさせられることになる。いまさら気づいても遅い。阿英目録だけでは解決できなかった。書物の実物を見るほかに方法はない。そのことがよくわかる。

上記2作品は題名が違うし原作者名、訳者名も一致しない。同じものだと判断するには相応の手続きが必要となる。その経過は樽目録によって追跡することができる。詳細は注にまとめた*2。

概要を以下において説明する。

2 天涯芳草館主のばあい

樽目録初版（1988）は阿英目録を基本的に採用している。「博浪椎」と『棠花怨』は別作品として収録しているのは上述したとおりだ。

研究の新しい変化を反映したのは樽目録第4版（2011）からである。「天涯芳草館主」は呉禱が使用したという事実を吸収した。王中秀ら『近現代金石書画家潤例』（2004）*3がそう指摘したのだった。以前にはまったく知られていない。

これにより呉禱が書家であることが判明した。小説家翻訳家であると当時に書家でも有名だった*4。それまでなぜ未知のままだったのか、理由は不明。ここで天涯芳草館主、あるいは天涯芳草が呉禱と結びついたのが大きな前進だ。ただし漢訳作品の実物が提示されるのはもう少しあとになる。また「博浪椎」の底本については不明のままに残った。

もうひとつは『棠花怨』の底本についてアメリカのX教授から教示があった。それにより黒岩涙香『梅花郎』（明進堂1890）を目録に記載したという次第だ。

3 異題名の同一作品——底本が『梅花郎』

つぎの新しい展開は樽目録第7版（2015）に示される。両作品ともに底本が（黒岩）涙香小史訳述『梅花郎』（明進堂1890.1.15）であることを注記した。

「博浪椎」は『競立社小説月報』掲載のものを早くから見ている。しかし『棠花怨』については実物、あるいは影印本でも手にすることができない。次の文献を参照した。

陳大康『中国近代小説編年史』1（2014）*5は中国天涯芳草館主海陽呉禱宣中訳『棠花怨』に言及する。呉禱と天涯芳草館主が繋がっている作品の実例を提示したのが新しい。

王中秀らは呉禱の潤格、潤例（揮毫料金）を掲げた新聞を収録していた。書家としての呉禱だ。その呉禱つながりで「博浪椎」と『棠花怨』が同一作品だと判断することができる。

付建舟『清末民初小説版本経眼録・日語小説巻』（2015）*6も参考になる。

そこまで来て筆者は足踏み状態に入る。作品の一部は雑誌掲載の「博浪椎」で読むことが可能だ。問題は『棠花怨』の方である。該書は清末までは重版された。だが中華民国以来、重版もなく影印本も作られていない。図書館目録を検索したが努力不足で見つけることはかなわなかった。実物が手元になれば研究に着手できない。

筆者が『棠花怨』を古書（表紙奥付なし、本文のみ）で入手したのは2020年になってからだ。これで「博浪椎」と本文を比較対照することが可能になった。漢訳

作品ひとつをとっても手間ひまがかかることがわかるだろう。ただし筆者が単に資料の不足する日本にいるのが原因だ。普遍化して言うことではない。

4 雑誌と単行本

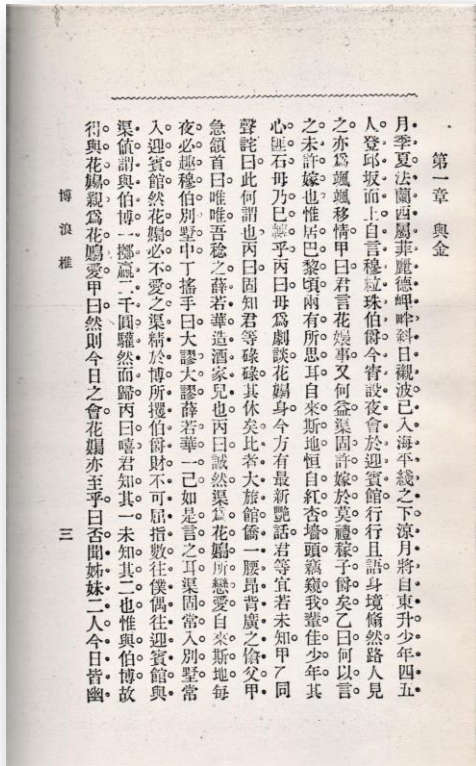
本稿で使用する書籍について説明する。仮に番号を振った。

① 雑誌連載

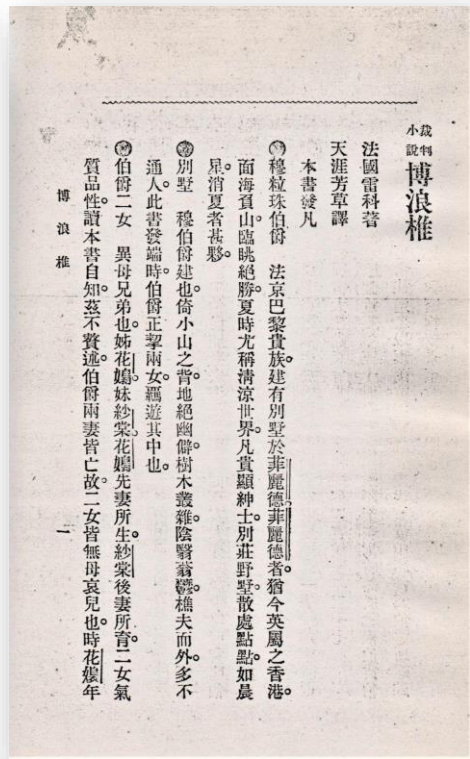
「(裁判小説) 博浪椎」10章

(法) 雷科著 天涯芳草訳

『競立社小説月報』第1、2期 光緒三十三年九月二十八日、十月二十四日
(1907.11.3-11.29)



本文



凡例

呉禱が原作者を「法国雷科」とした理由は後述する。雑誌では「天涯芳草」のみの表示だ。天涯芳草だけでは呉禱とは結びつかない。以前はほかに資料がないから無理もないと思う。目録では呉禱であることが判明したあとに追加記入した。

雑誌連載は2回全10章で中断している。雑誌そのものが第2期で停刊となったからだと推測する。漢訳全体は単行本で全40章だから最初部分だけの掲載だ。涙香日訳には章題はつけられていない。呉禱は独自に内容にそった章題をつけている。またその一部が単行本とは異なる。後に改変したということだ。参考として注に掲げる*7。

題名の「博浪椎」から連想する人もいるだろう。張良が博浪沙で秦の始皇帝を狙って投げつけた鉄椎（槌）だ。しかし涙香の小説は、殺人犯にされかけた男性が無実を証明しようと奮闘する内容だ。また恋愛が原因で事件が発生するという側面もある。題名と内容が適合しない。そのためか単行本にするとき『棠花怨』と改題したらしい。この事実ひとつ取っても改変の手が加わっていることがわかる。すなわち初出と後の単行本で文章に細かな違いがあるということを目指す。ただし変更といっても些細なものだ。大筋に変わりはない。

「本書発凡」という主として登場人物の説明がある。ここは涙香訳にあるのをそのまま漢訳した。これも後に述べる。

② 単行本

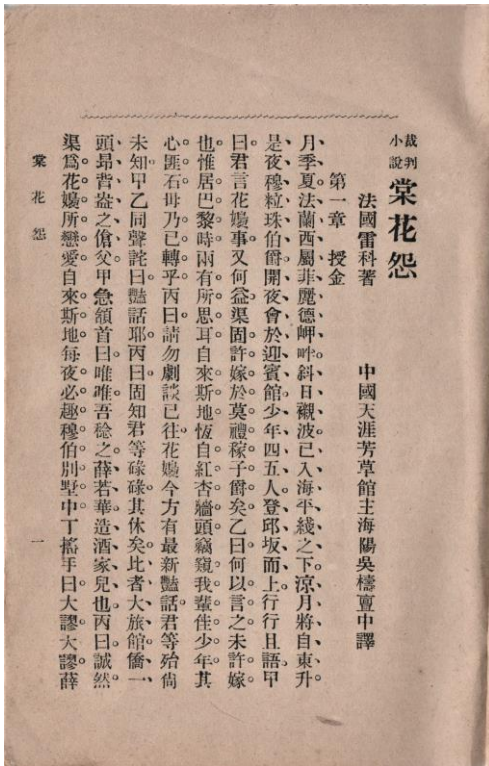
『（裁判小説）棠花怨』40章

（法）雷科著 中国天涯芳草館主海陽呉禱宣中訳

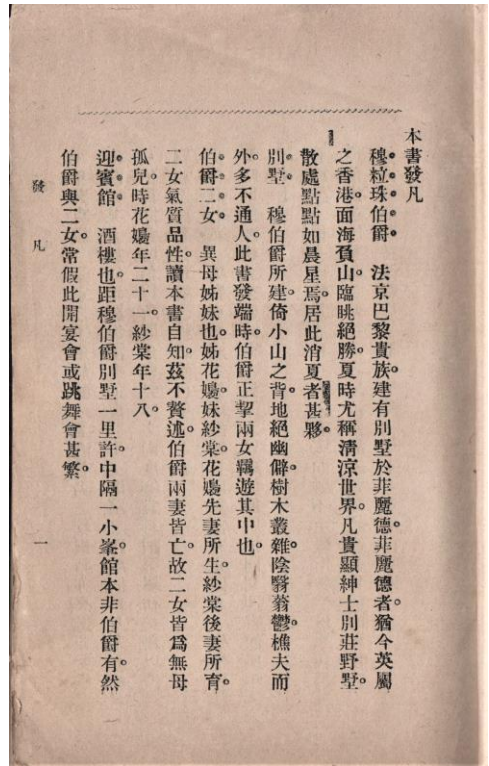
上海・中国図書公司 光緒三十四年十一月（1908）

呉禱宣中の頭につける「海陽」は不詳。初版未見。版本について簡単に説明する。

a 架蔵のものは表紙なし、奥付なし。「本書発凡」あり、「致謝朱勤甫書」*8なし。書店がつけた説明では宣統元年十月第四版であるらしい。三版まで本文前に配置されているはずの「致謝朱勤甫書」を収録しないからその可能性もある。



本文



凡例

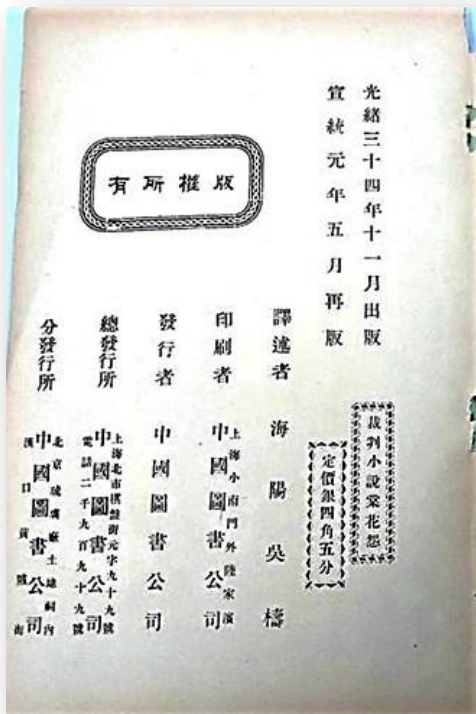
b 孔夫子旧書網に複数の写真がある。光緒三十四年十一月出版／宣統元年五月再版。また表紙は「再版」。また「宣統元年七月三版」など。「致謝朱勤甫書」あり。

c [編年④1663] 標「裁判小説」、署「法国雷科著，中国天涯芳草館主海陽吳禱中訳」、光緒三十四年（1908）十一月出版。「致謝朱勤甫書」あり。[大康18-907] 十一月但日期不詳

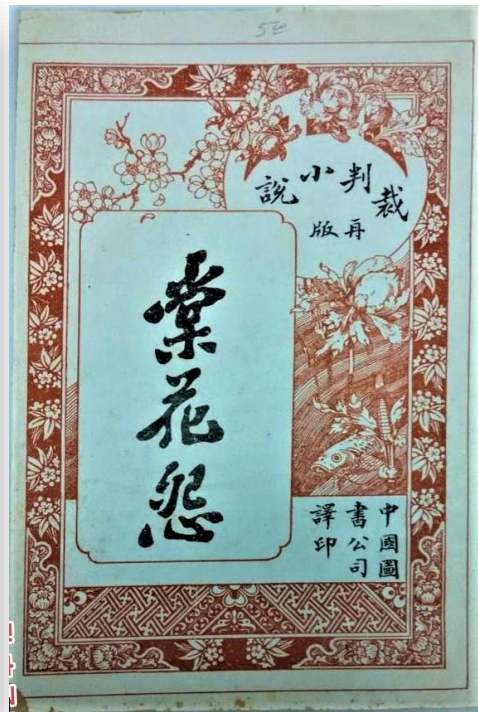
d [付日267] に初版の奥付本文写真を掲載する。正文首署「法国雷科著、中国天涯芳草館主海陽吳禱中訳」。奥付は訳述者：海陽吳禱、発行者：中国図書公司、光緒三十四年十一月出版。「致謝朱勤甫書」あり。

雑誌初出から単行本として刊行された。しかも三版か四版まで重印されているのは清末読者から好評で迎えられたことを証明する。

清末民初において角書の「裁判小説」は吳禱の該作品以外には見ることができ



再版 奥付



表紙

孔子旧書網

ない。その文字から法廷での裁判場面があると普通は想像するだろう。しかし法廷は出てこない。殺人事件からはじまる恋愛小説だ。探偵恋愛小説といってもいい。法廷場面のない裁判小説というのも不可解だろう。これには理由がある。物語最後に主人公の宿敵が底なし穴に落ち込んで死んでしまう。それを涙香は形容して「天の裁判」（第40回190頁）という。裁いたのは法廷ではなく天（神）というわけ。それを吳禱はそのまま「而天裁判也（そうして神が裁いたのだ）」（第39回144頁）と訳した。これが角書の由来だ。余談ながら一言。裁判場面が出てくる吳禱漢訳『寒桃記』（ガポリオ作、涙香訳『有罪無罪』1873）がある。しかしこちらの角書は「偵探小説」だ。

棣棠（テイトウ）は「やまぶき」の漢名。「棣棠花」はその花を意味する。花言葉は「高貴」。吳禱漢訳の底本は涙香訳『梅花郎』だ。花つながりで「棠花」を連想したと思われる。「怨」はうらみ。組み合わせて『棠花怨』だから高貴な人の恨み事となる。

5 黒岩涙香訳述『梅花郎』

呉禱が使用した底本は涙香『梅花郎』だ。

(黒岩) 涙香小史訳述『梅花郎』41回、明進堂1890.1.15。国立国会図書館デジタルコレクション所収

初出は『絵入自由新聞』連載 (1889.2.17-4.10) である。

参考までに架蔵のものを示す。黒岩涙香 (涙香小史) 訳述『人耶鬼耶』集栄館1920.8.17/11.5再版。



「人耶鬼耶」と「梅花郎」との合冊本。初版の「凡例」は未収録。もとの章数41は22に減少して異なる。個所によっては字句も違う。

原作については不明のまま。以下の言及がある。

イ [流水160]「梅花郎」作者マンビルフェン（注：GEORGE MANVILLE FENN、1831-1909）

ロ [柳田44]「梅花郎」ジョヨオジ・マンヴィル・フェンの作といふも、フェンの何といふ作か未詳

ハ [伊藤47]『梅花郎』ジョージ・マンヴィル・フェン（英1831-1909）の作だと云われている。伊藤秀雄はボアゴベ『指環』『劇場の犯罪』を疑う

ニ [小森99-126]「デュ・ボアゴベの原作と推定された『梅花郎』は、G・M・フェンの“Rosery Folk”が原本”^{*9}。しかし open library および hathi trust 所収の“THE ROSERY FOLK : A COUNTRY TALE”（LONDON : CHAPMAN AND HALL, 1884）を見たが原本ではなかった。

6 呉禱漢訳法国雷科の謎

呉禱は涙香訳『梅花郎』を漢訳した。その原作者をフランス（法国）の「雷科」だとしている。この表記が奇妙だ。その疑問が当然のように出てくるだろう。雷科はどこから来たのか。涙香はどこに行ったのか。

清末の翻訳小説は多数ある。その中にフランスの雷科という作家は呉禱の「博浪椎」と『棠花怨』のほかは見かけない。まずここからして違和感が生じる。奇妙だという理由だ。

呉禱は日本語を理解した。漢訳に使用した底本は日本語だ。原作をイギリス、アメリカ、ドイツ、ロシアなどと表示したものがある。

たとえば呉禱漢訳に涙香作品を底本とした『寒桃記』（1906）がある。こちらには黒岩涙香を明記する。その例にならえば『棠花怨』にも涙香の名前を記すのが妥当だろう。だいいち涙香日訳の原作は不明のままである。フランス人であるかどうかもわからない。それをなぜ日本涙香ではなくフランス雷科としたのか。

余談ながら雷克（RIECK）という人は当時実在した。しかしドイツ人だし作家ではない。

雷科についての筆者の仮説を述べる。その前に触れておくべき事柄——涙香の

独特な固有名詞漢訳法が存在する。説明の順序があるということだ。

まず指摘したいのは呉禱が底本のわずかな個所を省略していることだ。

涙香は「凡例」と称して本文前に登場人物と必要個所を説明する。新聞初出、単行本も同様。冒頭と文末部分を引用する（ルビ、傍点省略。以下同じ）。

（凡例）

茲に説起すは最組入りたる物語にして人情に涉り犯罪に涉り其筋道様々に入乱れたる故成る可く読者の意に落ち易き様にと先づ本文より前に編中の重なる人物と必要なる廉々を説明し置かん

（中略。注：後述）

◎名前 右に記せる人物の名前は總て呼び声の似寄りたる者或ひは意味の近き者等を無理に当嵌たる者なり本篇の終りに至りて一々原名と対照す可し猶ほ此外にも多少の男女あれど夫等は總て其時時に記す事とし茲には略す又本篇を梅花郎と名附しは此篇の眼目たる少年梅花郎の名前を其儘掲げたる者なり

呉禱はここを無視して主として人物部分だけを漢訳した。特に涙香が書名を『梅花郎』にした個所（本篇を梅花郎と名附しは）などはそのまま漢訳することはできない。なぜなら呉禱は梅花郎に別の漢訳語を与えたからだ。

本文にはほかにも涙香の文章を省略する個所がある。1カ所を掲げる。

第1回最後部分

是れ即ち梅花郎が身に幾多の災難と幾多の波乱を起し来る許なりとは後にぞ思ひ當られける／涙香曰く此話しに就ての凡例を掲げ置きたれば人の名前及び身分など總て凡例に引合して読まば分り易かる可し。15頁

第2回最初部分

世に男女の情ほど不思議なるはあらじ昔の人は之を恋と云ひ今は之を愛情とも情愛とも云へり世の中の喜びも悲みも此愛の情より出る事多し。15頁

以上は本文中に涙香自身が出てきて説明している箇所だ。漢訳する必要がないと呉禱は判断した。本漢訳ではこれに類する箇所は省略している。別の作品では呉禱が身を乗り出して解説するばあいもあるから作品によるのだろう。

まず涙香日訳の舞台がフランスであることをいっておく。そこから涙香がもつづいた原作者はフランス人だと呉禱は考えたのかもしれない。表面的に見ればそうだ。

ただし雷科の謎を解くためには該作に登場する人物の名前を見る必要がある。『棠花怨』を読めば人物名に特徴があることがわかる。

涙香は原作の外国人名を日本人名に書き換えた。物語の舞台はフランスでありながら活躍する人たちは日本語の名前を与えられる。明治時代の翻訳では普通に見られる措置のひとつだ。呉禱が日本語作品を漢訳するばあいはそのまま流用することもある。ところが『棠花怨』においてはその日本語を漢語で音訳しているのだ。

上で「中略」とした箇所から小説の主要人物を選んで涙香と呉禱漢訳「本書発凡」と対比させる。名前の漢訳にご注意いただきたい。

【涙香】◎^{むらつはく}村津伯 仏国巴里の貴族にしてフェレットと云へる所に別荘ありフェレットは我国にて云へば大磯の如き所なり海に向て山を負ひ眺望に富みて夏殊に涼しき土地なれば貴顕紳士の別荘も所々に飛散れる上、納涼の為に集ふ人も多し

【呉禱】穆粒珠伯爵 法京巴黎貴族。建有別墅於菲麗德者。菲麗德者。猶今英属之香港。面海負山。臨眺絶勝。夏時尤称清涼世界。凡貴顕紳士別荘野墅。散處点点如晨星焉。居此消暑者甚夥。

ムラツ伯爵 フランスはパリの貴族。フェレットに別荘があり、フェレットは今イギリス領香港のごとく海に向かい山を負い絶景に臨んで夏はとりわけ涼しい場所だから貴顕紳士の別荘も暁天の星のようにところどころに散在しここで納涼をする人も多い。

呉禱の漢訳で目をとめるべきは人名であるとくり返す。地名など涙香訳がカタ

カナを使用すれば呉禱はその音に近い漢語に変換した。そこまでは普通のことだ。

ところが見ようによっては不可思議なのが人名である。村津（むらつ）を穆粒珠（mulizhu）と漢語音に置き換えた。上の呉禱漢訳を日本語にして「ムラツ」とカタカナ表記にしたのはそれを写したいからだ。音だけからいえば似ている。しかし漢字がまったく異なる。その変更は物語の舞台がフランスに設定されているところからくる。

フランス人だといいながら日本語の名前「村津」にする。涙香は日本翻訳界の慣習に従いそういう翻訳方法を採用した。涙香自身が別の作品で次のように言っている。「此篇は西洋の原書を訳す者なれども土地の名及び人の名等は読む人の為め記憶し難ければ殊更らに我国の人名及び地名に似寄りたる文字を用ゆる者とす」（『有罪無罪』「凡例」1888）

しかし呉禱はそうは思わなかった。彼なりの工夫として、フランス人風に見える聞こえるように漢語音から漢字「穆粒珠」を当てたのだ。

呉禱の独特な固有名詞漢訳法はこれ以前の作品にも使用されている。英人ブック『車中の毒針』を漢訳した『車中毒針』（1905）、漢訳題名が同じの登張竹風日訳ブーダーマン原作『賣国奴』（1905）、あるいは前出の涙香訳『有罪無罪』を底本とした『寒桃記』（1906）などだ。それらも日本風登場人物名を漢語音で写している。

さて避暑地を説明して日本の大磯ではわかりにくいと呉禱は判断したらしい。そのかわりに持ち出したのが香港だ。しかし納涼、避暑という点では合致しないだろう。あくまでも例えだ。別荘地らしく見えればそれでかまわない。

主人公の青年が梅花郎（ばいくわらう）である（下線は筆者）。

【涙香】◎少年^{せうねんばいくわらう}梅花郎 個は銘酒製造を以て有名なるボルドーと云へる所の豪家の子にして同じく此フエレットの海濱に來たり村津伯が別荘より程離し大旅館に逗留せり、知る人の引合せにて村津伯の夜會に臨みし事も有り又伯の二次小枝嬢と手を取りて踏舞せし事も有り去れど此土地にて初めて逢ひ知りたる者なれば極めて懇親の間柄と云ふには非ず唯旅の道連とも云ふ可き位の交際を為せるなり年齢は二十五歳なり

【呉禱】少年裴克羅 豪家之子。生於釀造菊酒著名之璞爾特。亦來遊菲麗德海濱。寓某大旅館。地距海濱。與伯爵別墅去海濱之距離同。藉友人介紹於伯爵。間嘗臨伯爵所開夜會。於紗棠兩度褰裳舞蹈。第屬初交。藉以消羈旅之閑愁。結他鄉之膩語而已。年二十五。

少年バイクワラウ 豪家の息子。菊花酒を釀造して著名なボルドーに生まれ、同じくフェレットの海濱に来て某大旅館に逗留したが、そこは海辺より伯爵の別荘と同じくらいに離れている。友人に伯爵を紹介され伯爵が開催した夜会にも参加してサエダ嬢と2度衣をとって踊ったことがあった。交際し始めたばかりで旅のやるせなさを解消するための他郷での親しい知り合いにすぎない。歳は25。

下線部分が次に示す雑誌初出と語句が異なる。

ひとつの初出は「設有著名璞爾特造酒公司（著名なボルドー酒造会社を設立し）」だった。ボルドーを酒造会社の名前と誤解していたことになる。それを後に訂正した。ただし「菊酒（菊花酒）」を追加した理由は不明。

次は「第交不甚摯（その交際はそれほど密というわけではなく）」が初出であった。書き換えてもほぼ同内容だ。

みつつめ。最初は「膩侶」としていたのを「膩語」に変えた。涙香が薄い関係であると書いたのに比較すれば「膩」の方はよほど濃くなってしまふ。

くり返す。村津（むらつ）を穆粒珠に、梅花郎（ばいくわらう）を裴克羅（peike luo）と翻訳すれば音だけは日本語に近い。しかも同時に漢字の穆粒珠、裴克羅はフランス人らしい雰囲気醸しているといってもいい。少なくとも日本人には見えない。

呉禱が用意周到なのは、村津小枝を穆粒珠紗棠と漢訳した個所だ。小枝が梅花郎に救助を求めるために送った手帳がある。その表面には「SM」と記されている（71頁）。「さえだ・むらつ」の頭文字にほかならない。現代漢語音の紗棠と穆粒珠はそのまま「SM」になっている（47頁）。手抜かりはないのだった。

同じように他の人物も漢語音で翻訳した。一覧表にする。

涙 香

呉 禱

村津 むらつ 伯	穆粒珠伯爵
初音 はつね 姉	花嬢
小枝 さえだ 妹 SM	紗棠
梅花郎 ばいくわらう	裴克羅
蟬沢 せみざは	薛若華
森川 もりかは 子爵	莫礼稼子爵
小西 こにし 男爵	柯尼西男爵
西村 にしむら 判事	倪星闌判事
撫子 なでしこ 侍女	那茜
長右衛門 ちやうゑもん	查爾蒙
兵太郎 へいたらう	海忒勞
のち「ひやうたらう」	
棗女 なつめ 侍女	那芝

涙香はフランスの地名についてカタカナを使用する。日本での常用語「巴里(ぱりー)」には呉禱も「巴黎」を当てる。別の「ペリゴー」には「貝梨哥」、「メシナク」は「梅西納克」という具合だ。それはいい。ところが日本語の町名を使った個所にわざわざ漢語音を当てている。すなわち「春田町(はるたまち)」(第28回132頁)は「哈爾達 ha'erda 街」(第28章97頁)である。

以上を見ればその延長上に原作者名を「雷科」とした理由を推察することができる。

涙香(るいこう)を歴史的かな遣いで「るみかう」と表記しても同じだ。「るい(るみ)」に「雷 lei」を、「こう(かう)」に「科 ke」を当てた。音が似ている漢字を選択して「雷科」は「涙香」そのものだ。涙香までもフランス人にしたと考えれば興味深い。

「雷科」は涙香を示す呉禱の造語であるというのが筆者の仮説である。

陳景韓漢訳に似たものがある。(意)波侖著、冷(陳景韓)訳『新蝶夢』(1906)

だ。マリー・コレリ原作、黒岩涙香訳『白髪鬼』（1894）の作中主人公「波漂、羅馬内（ハビヨ、ローマナイ）」から引いてきて「波侖」とした。似ているだけで涙香を明示したものではない。参考までに述べた。

7 涙香訳と呉禱漢訳

会話からはじまる冒頭部分を見る。

【涙香】茲は是れ仏国フェレット岬の辺り夏の日はや既に波を照して海の果に入り月さへ東に登らんとす今宵は山手の迎賓館に於て村津伯の催ふせる夜会ありとて坂を登り行く四五人の少年紳士あり登りながら口々に語り動揺めく様は見るも楽しげなり 甲「君は初音嬢の事ばかり言て居るけれど彼れは駄目だぜ森川子爵と許婚に成て居るから[」] 乙「ナニ許婚では無いのサ成る程巴里に居る頃は互に想ひ想はれたと云ふことだが此地へ来てからは時々我党の好男子を垣間見るので何時か心が替つたのサ[」] 第1回11頁

【呉禱】月季夏。法蘭西属菲麗德岬畔。斜日襯波。已入海平線之下。涼月將自東升。是夜穆粒珠伯爵。開夜会於迎賓館。少年四五人。登邱坂而上。行行且語。甲曰。君言花嬢事。又何益。渠固許嫁於莫礼稼子爵矣。乙曰。何以言之。未許嫁也。惟居巴黎時。兩有所思耳。自来斯地。恒自紅杏牆頭。竊窺我輩佳少年。其心匪石。毋乃已轉乎。第1章1頁

季節は夏。フランスはフェレット岬のあたり、傾いた日は波に映え、すでに水平線の下に入り、涼しげな月が東に昇ろうとする今宵はムラツ伯爵が迎賓館で夜会を開くというので青年四五人が坂を登りながら語っている。甲が言う。君はハツネ嬢のことを言うが、あれはだめだね。彼女はモリカハ子爵と婚約しているから。乙が言う。なんの、まだ婚約はしていない。パリにいた時だけふたりは互いに想ってはいたが、ここへ来てからは美人が塀のなんとやらでいつもわれら好青年を見るものだから、心石にあらずとはいえ心変わりしたといわざるをえないな。

見てのとおり涙香訳は句読点をほどこさない。終わりカッコ（」）も使わないこともある（引用文では補った）。涙香は地の文は古文で、会話は口語でと書き分けている。呉禱はその全部を文言で漢訳した。会話を示すカッコも使用せずただ漢字の「曰」を用いるのも従来からの書法である。

雑誌初出から書き換えた個所がある。初出では「少年四五人」部分を前に移動させていた。甲の発言直前に「身境恹然。路人見之。亦為颯颯移情（身边は自由自在で道行く人がそれを見ればざわざわと心情が変わってしまう）」があった。青年たちの振りまく雰囲気の良さを形容した。これは涙香の「動揺めく様は見るも楽しげなり」に相当する。漢訳初出は日本語を直訳したが後の単行本ではそこを削除した。

涙香の書く、初音嬢が「垣間見る」とはこっそりとのぞき見ることをいう。のぞき見るは漢訳の「竊窺」で十分だ。ところが呉禱は「紅杏牆頭」と垣根、塀を出した。日本語の「垣」に引きずられたとわかる。

もとは漢語の「紅杏出牆」がある。原義は赤い杏が垣根越しになることをいう。転じて俗説で女性の浮気を意味する。呉禱はそれに関連させた。呉禱が日本語漢字に誘発されて違う方向に漢訳することはときどき見られる。

「我心匪石」はいうまでもなく古典からの引用。石は動く。しかし自分の心は石ではないから動かないという意味だ。涙香が「心が替った」と表現すれば呉禱は反射的に「我心匪石」を連想して加筆した。小さな変更だ。

呉禱は時に日本漢字に引きずられる類似の1例を示す。森川子爵が梅花郎と決闘をすると聞いた初音嬢の台詞だ。

【涙香】初音嬢は驚きて「ナニ決闘 | 夫は了^{いけ}ない梅花さんと決闘などすると聞かないよ[」]第20回93頁

【呉禱】花嬢駭曰。決闘乎。是大不可。従未聞有与裴克羅君決闘其人者。第20章66頁

ハツネは驚いて言った。決闘ですって。絶対だめよ。バイクワラウさんと決闘するような人がいるとは聞いたことがないよ。

涙香の書く「聞かない」は「相手にしない」から「許さない」という意味だ。「決闘するな」という命令形である。呉禱は「聞」だけを見て日本語の意味を取り違えた。ついでながら涙香が使う「|」は「!」の代用だ。

例を挙げて細かな違いを説明した。呉禱の漢訳作品で初出と後の版本のふたつを見ることができる例は多くない。この『棠花怨』はそのひとつだ。漢訳文を比較対照すれば呉禱が丁寧に手を入れている事実がわかる*10。

8 物語の大筋

本書の主要人物は4名だ。カッコ内に漢訳名を添える。

ボルドー出身で金持ちの息子梅花郎（裴克羅）が主人公。彼の名前が涙香の書名になっている。彼が愛する小枝（紗棠）は村津（穆粒珠）伯爵の次女である。その異母姉の初音（花嬢）は梅花郎を熱愛して脅迫することもいとわれない。初音には昔の恋人森川（莫礼稼）という放蕩で身もち崩した子爵が今もつきまとう。梅花郎を目の敵にして何事にも対立する素行不良の悪漢である。

小説冒頭に梅花郎の友人で蟬沢（薛若華）が出てくる。冒頭の人名一覧に掲げられながら彼はすぐに殺される。小さい役割のように思われる。ただし殺人事件で始まる物語の被害者だから重要だということは可能かもしれない。いきさつはこうだ。

村津伯爵との賭博で大金を勝ち取った蟬沢だった。彼は同じボルドー出身の友人梅花郎に道で出会った。用事があるからとその金を梅花郎に預ける。不用心だから梅花郎は見守るつもりで後をつけると蟬沢は誰かに射殺された。犯人らしきものが逃げたのを見て自分が所持するピストルで撃ったが当たらない。結局のところ梅花郎は殺人と追いはぎの犯人と疑われて取り調べられることになる。友人の死体がある。金を持っている。発射して硝煙が残るピストルを所持している。梅花郎にとっては不利な証拠ばかりだ。

友人から渡された金を持ってその後ろをつけていく。一見すると不自然な設定だと思う。しかしそこは涙香（あるいは原作者）なりに理由を考えている。

【涙香】蟬沢が其別荘の近辺へ行くと聞き半は友達を気遣ふの心半は小枝嬢を思ふの情素より今宵小枝嬢に逢れる事とは思はねど浮々と蟬沢に従ひ行けり。第2回15頁

【呉構】私念今夕。紗棠既留別墅。比見薛往。遂亦触縈繫紗棠之情。於是併私情公義二者。窻窻踵薛行。第2章4頁

ひそかに思うに今宵サエダ嬢はすでに別荘にいる。セミザハが行くのを見てサエダを思う気持ちが動いた。そこで私情と公義を合わせて慌ただしくセミザハを追っていった。

「縈繫」は心配する、気にかけるという意味だ。前後の文脈をみて上のように訳した。

「私情」とは小枝を思う気持ちを指す。「公義」とは蟬沢を護衛することをいう。「窻窻」の初出は「忽忽」だ。同じ意味の漢字を入れ替えただけ。

知り合ったばかりだが恋しい小枝が別荘にいる。彼女に会いたい梅花郎の気持ちが友人の後をつけさせた。これはこれで説明になっている。

梅花郎は保釈中の間に身の潔白を証明しなければ殺人犯人にされてしまう。犯人探索が本書のひとつの主題である。もうひとつの主題は梅花郎と小枝の恋愛だ。梅花郎に横恋慕する初音がいる。悪漢森川子爵が絡んで事あるごとに梅花郎と対立衝突する。

梅花郎がクラブの賭場で森川子爵の不正を暴露しようとして決闘の約束をさせられる。猪狩りに参加した梅花郎は森川に狙い撃ちされるが弾は外れた。初音が画策して義理の妹小枝に森川子爵を押し付けようとする。初音が森川子爵をたきつけて小枝の寝込みを襲わせるのは小枝と梅花郎の間を割くためである。

さらに初音は梅花郎を小枝から奪うために小枝の毒殺計画を進めた。

毒物を使用し親しい女性を殺そうとする。一部がよく似た小説が漢訳されている。陳梅卿漢訳クレイ『紅涙影』（1909。原作はバーサ・M・クレイ BERTHA M. CLAY 著“A WOMAN'S TEMPTATION”）だ。

薬物を使用して親しい人物の命を脅かすというのもある。包天笑漢訳『空谷蘭』（『時報』1910-1911）である。底本は黒岩涙香訳『野の花』で原作は同じくクレ

イ著 “A WOMAN'S ERROR” だ。

乳姉妹、異母姉妹が女性同士でひとりの男を取り合うという設定は大衆小説では定石のひとつだろう。漢訳3例だけではなくほかにもあると思う。

最初は父親を含めて周囲の者は小枝が病気にかかったと思った。頭痛と不眠で衰弱していく。医者に見せても原因がわからない。村津伯爵は話す。

【涙香】何でも其徴候から云ふ時は何とか云ふ一種の毒薬で以て徐々殺される病人と同じ事だと云ふけれど夫は何ふも信じられぬ真逆小枝に毒薬を吞せる者が有る筈も無く又小枝が自分で毒薬を吞む筈は猶ほ更ら無し拙者も実は途方に呉れて居る |」第27回130頁

【呉禱】第謂察其徴候。竟与彼為毒薬所中。除徐斃斃者相同。然吾殊不信。紗棠詎有被中毒薬之理乎。若渠自服。尤理之必無。老夫於此。実為之迷惑千万。…… 94頁

その徴候を見れば毒薬にあたって徐々に死んでいくのと同じだと言うのだが、拙者にはどうも信じられない。サエダが毒薬をもらえるわけがあるのか。自分で飲むという理由はなおさらない。拙者はここで実は途方にくれている……

呉禱はほぼ涙香の日本語を直訳している。

初音の計略に気づいたのは森川子爵だ。

【涙香】森川心の裏に頷首きア、初音嬢の巧みは分りたり嬢は妹を毒害し猶ほ其上に父を迄も毒薬にて殺さんとする者なり去れば今の中に父の心を言くるめ小枝に梅花郎を撰ばせて彼れを婿夫の如く我家に引附け置き其婚礼の済まざる中に父と妹を亡き者とし梅花郎を己が手に入れんとする恐ろしき計略に極まれり 第27回131頁

【呉禱】乃頻頻点首。心服花嬢巧計不置。念彼既謀殺其妹。又毒害其父故。故撮合裴紗。使為夫婦。然不及婚期。其父与妹。必偕死亡。乃安然引裴附己。此計誠可驚怖。第27章96頁

(モリカハは) しきりにうなずきハツネの巧妙なたくらみに感心してやまなかつた。その妹を殺害しさらにその父も毒殺しようという考えなのだ。バイクワラウとサエダの仲をとりもち夫婦にさせる。しかし婚期にいたらぬうちにその父と妹のふたりとも亡き者にし、バイクワラウを無事に我が物にするというこの計略は実にびっくりするほど恐ろしい。

呉構の漢訳は涙香の下線部分を省略した。だが大筋をそのまま把握しているといつていい。

初音のたくらみは森川子爵にすっかり気づかれてしまった。では一方の梅花郎はどうしていたか。パリに来たものの小枝は病気で引きこもっていて会えない。そうこうするうち小枝の侍女撫子から手紙がもたらされた。今夜、小枝に危機がおとずれるという。梅花郎が屋敷に急行しようとしたところに初音が登場する。彼女の長い愛情告白、拒否されて脅迫話に転じる。大衆恋愛小説ではよくあることだ。核心に到達する直前の一休止である。

初音が所持する毒薬の入手先は侍女の棗女だった。毒薬で富を築いたスペイン人医者^{ドクトル}の娘である。初音は密かにその毒薬を小枝に投与していた。梅花郎に拒絶された初音は今夜一気に小枝を殺害する決心をした。

【涙香】今までは唯だ医師に見破らるゝを恐れ弱き毒薬にて徐々と殺す事を計みたれど今宵は其手便を變へ一呑にて命を絶つ可き最強き毒薬を瓶に入れ之を隠し持ちて小枝が寢間へと忍び入りしに小枝は先程吞たる水薬の内に棗女が混ぜ置きたる阿片丁幾ねむりぐすりの効験にて前後も知らず眠れるにぞ初音は仕済したりと其寢台に身を寄せて暫し寢息を伺ひしが独りニツコと頷首きて衣囊より彼の小瓶を取りし一滴も外へは溢れぬ様にと先ず硝燈の心を揺立て小枝が顔の上に俯伏し掛り左りの手にて瓶の口を抜き右の手に其瓶を持ち小枝が口へと差附けたり差附けながらも其手先の震へる景色さへなきは女に似気なき其度胸の逞ましきを知る可しア、小枝が命は今瞬きする間をも保ち難し此毒薬を一口吞まば息を継ぐ暇も無く声も得出さで死了る可し危しと云ふも仲々なり 第33回157-158頁

【呉禱】顧前此猶慮為医士所破。先以性緩之藥。除徐殺之。今夜則又改變。以最猛烈之毒藥。隱藏於懷。俾紗棠一咽。立時殞命。万不及救。比入紗棠室。紗棠猶沈睡不醒。蓋適所飲藥水中。有那芝混入之鴉片質料。故昏醉不知人。花嬢見之竊喜。近榻畔。暫候鼻息。獨自領首微笑。於衣囊中取出小罇。先旋轉燈炬。使增光明。儂身俯首。就紗棠枕畔。以左手拔罇口之楔。右手持罇。送至紗棠口際。絶無張皇戰慄之色。尋常男子。猶無其平心静氣。嗚呼。紗棠一命。繫於一刹那間。第33章116-117頁

今までは医師に見破られることを恐れて、まず弱い薬で徐々に殺そうと考えていた。今夜はそれを変えて最も猛烈な毒薬を懐に隠しサエダに飲ませれば瞬時にして命を奪い方が一にも救われることはない。サエダの部屋にするりと入るとサエダはなお熟睡している。ちょうど飲んだ薬水の中にナツメがアヘン成分を混入させたから前後も知らず意識がないのだ。ハツネはそれを見て密かに喜びベッドわきに近づくとしばらく寝息をうかがっていたが、ひとりニッコリ頷くと衣囊より小さな容器を取り出して、さきにランプの芯を回し出し明かりを強くし、身をかがめてうなだれサエダの枕元で左手にて容器の栓を抜き右手で容器を持ちサエダの口のあたりへと差し向けた。慌てたり震える様子もない。普通の男性でも平静でいられるものはいない。アア、サエダの一命はその一瞬にかかっている。

涙香の下線部分を省いた。それ以外は直訳といってもいいだろう。

「仕済し」とは、うまくやってのける、成功する、という意味。呉禱はその結果を重視して「見之竊喜（それを見て密かに喜び）」にした。

「ねむりぐすり」とルビをふった「阿片丁幾」の「丁幾」はチンキ (tincture) のこと。言い直せば「アヘンチンキ tincture of opium」だ。アヘンを主成分とした麻醉薬だから睡眠作用がある。呉禱が漢訳して「鴉片質料」としたのはそれで間違いはない。イギリスでは医療用で使用された歴史がある。前述した包天笑漢訳クレイの『空谷蘭』にも重要な場面でそれが使用されている。

筆者が思うに「女に似気なき其度胸の逞ましき」以下は涙香自身による説明だ。ただの描写から離れて読者の興味を掻き立てるための加筆に見える。英文原作に

はたぶん存在しないのではなかろうか。原作が判明すればわかるだろう。

小枝の命が危機に瀕している。その毒薬投与の現場を押さえて妨害し小枝を救ったのは忠実な侍女撫子だった。撫子は小枝に与えられた薬を化学師に分析してもらっていた。「アルセニック」（159頁）という毒薬（ヒ素）の分子を含んでいるとすでにわかっている。用意周到な下女である。呉構はその毒薬を「一種毒質」（118頁）と簡単に漢訳した。

涙香は流れるような日本語を使用して動きのある場面を活写している。呉構がそれを十分に受け止めて全体を把握しているのは確かなことだ。

それにしても侍女撫子の活躍には目を見張る。初音の悪事をひとりで阻止し、そればかりか物的証拠を用意して事実をあばいてしまう。庶民の侍女撫子が金持ちで悪女の伯爵令嬢初音を恐れずに堂々と対立するのだ。その上で大勝利する。侍女撫子はこの場面においては女性主人公である。

初音は最初居丈高に犯行を否定した。証拠の手紙を認めざるをえなくなるとそれを5千円で買い取りたいと懐柔に転じる。侍女撫子は応じるように見せかけ逆に初音にアメリカ行きを命じて交渉は決裂だ。外で合図を待つ許婚者兵太郎に知らせようと窓に近寄る侍女撫子。それを阻止する初音。ふたりの小競り合いになる。

【涙香】此方は推留め推留らるゝを振払ひ行んとする遣じと争さふ推しつ推されつするうちに初音は長き裳を踏み仆れんと蹠踉くにぞ撫子其隙を得て早くも彼の毒薬を奪ひ取らんとするに此時早く彼の時遅し初音は逃れぬ所と知り忽ち其小瓶を我口に當て餘滴をも残さず唯一息にグイと呑干したれば何かは堪る事の有る可き没[浸]剤の効め誤たず夥だしき血を吐いて其儘仰向様に仆れたり是れ毒々しき初音嬢が終なり倒れし儘にて死果たり 168頁

【呉構】而花嬢挽阻之。互相扭結。不得釈。顧花嬢裳縁甚修。下垂貼地。忽絆足。踉蹌仆於几傍。那茜乘隙。欲奪其藥。而花嬢知万無可逃。突以小罇當其口。格然一声。盡吞入腹。一滴無餘。是藥伝流性之猛速。誠有如花嬢所云者。那茜急俯身欲劫之。則見花嬢。頃刻嘔血數升。手足鼓踏跳動者。再仰天而氣絶矣。126頁

ハツネは引き止め互いにつかみ合って放すわけもなく、ハツネの衣裳の裾が長く地面に垂れていたのふと足を取られて机のそばでよろめき倒れるとナデシコはその隙に薬を奪い取ろうとした。ハツネは逃れることはできないと知るや突然小容器を口に当てるとグイと飲み干して一滴も残さなかった。薬は猛烈に速く流れ込み、まことにハツネが言うとおりのものだ。ナデシコは急いで身をかがめ薬を奪おうとしたが、ハツネはまたたくまにおびたらしい血を吐き、手足をバタバタさせ仰向けになって息が絶えた。

涙香は「没剤（もつざい）」とする。「没薬」のことか。こちらは植物から取れるゴム樹脂を集めたもの。各種毒薬を入手所有していた初音だ。そのうちの毒素最強の「没剤」を指すと考えておく。

呉禱は「没剤」は使わなかった。浸透速度に変えて原文を写している。簡潔な漢訳になっているといえる。なによりも誤訳というべき個所は見当たらない。

この数回は梅花郎を差し置いて侍女撫子の活躍が目立つ。一方の梅花郎には主人公としての役割が最後部分に用意してある。梅花郎と森川子爵の決闘である。ふたりは海の中洲で銃を撃ち合い森川子爵は底なし穴（泥井戸187頁／泥井141頁）にはまり込んで自滅する。

9 回数の違い——涙香41回と呉禱40章

涙香日記は41回ある。呉禱漢訳の40章とは1回分の違いが生じている。漢訳ではどこかを省略したのだろうかと思ふと不審に感じるところだ。

涙香第36回は呉禱の第36章に当たる。梅花郎と森川子爵が決闘をする手順の相談をする場面だ。その呉禱第36章の最後部分に涙香第37回を少量（呉禱漢訳約10行分）繰り込んだ。以下同様に少しずつ内容を移動させている。呉禱漢訳第37章には涙香第38回の漢訳換算して約17行分を、同じく漢訳第38章に約42行を動かした。それで涙香第40回が呉禱漢訳第39章に重なったというわけ。涙香日記の1回分を削除したのではない。呉禱は41章ではなく切りのいい40章にしたかったらしい。

涙香第41回が呉禱第40章に重なっている。死を目前にした松脂取長右衛門（ちやうゑもん／採琥珀之査爾蒙）が殺人事件の真相を告白して物語は大団円をむかえた。

貴族富豪の上流階級の人々を中心として殺人、恋愛、賭け事、狩猟、決闘、毒殺計画などがあやなしてうごめく。庶民の侍女撫子が殺人事件の解明に大きく貢献しているのが興味深いところだ。大衆小説のひとつだとわかる。これくらいの作品であれば清末民初に演劇関係者が目をつけるのが当然ではないか。演劇化、映画化の原作に使われてもよさそうに思う。気がつかないのは筆者だけなのかもしれない。

10 おわりに

以上の呉禱漢訳を読んで思う。彼の特徴は原文に忠実であろうとしているところにある。

ロシア小説（チェーホフ、レーンモントフ、ゴーリキー）、ル・キュー、ドイル、モーパッサン、尾崎紅葉、広津柳浪、英人ブラック、押川春浪の少年少女向けに書かれた冒険小説など分野を問わない。清末民初の漢訳者、たとえば包天笑、陳景韓らが自由勝手に翻訳したのと比較してしまう。彼らは翻訳といいながら日本語作品を利用して自分の創作をすることがある。それらとは基本的に異なる。

呉禱漢訳の一部に加筆、書き換え、誤解があるが全体を見れば底本の大筋を外していない。その真摯な翻訳姿勢は当時としては際立っている。

本『棠花怨』もそれらのひとつである。ただし漢訳『賣国奴』において呉禱が実行した不必要な加筆については別稿で述べる。

【注】

- 1) 阿英編「晚清小説目」『晚清戯曲小説目』上海文藝聯合出版社1954.8／増補版 古典文学出版社1957.9／北京・中華書局1959.5
- 2) 2作品について作者の記述変化を示す。樽目録は『清末民初小説目録』のこと。

博浪椎

棠花怨

-
- 樽目録初 版1988 天涯芳草 呉禱
- 第2版1997 天涯芳草 呉禱
- 第3版2002 天涯芳草^{／注1} 呉禱
- 注1 原本に自注して呉禱2009.4←王中秀ら著作によったもの。この時点で「博浪椎」の底本は不明
- 第4版2011 天涯芳草（呉禱）^{／注2} 呉禱^{／注3}
- 注2（王中秀ら76頁）天涯芳草館主呉禱（王中秀ら88頁）海陽天涯芳草館主人呉君宣中
- 注3（Xilao LI）黒岩涙香『梅花郎』明進堂1890←『棠花怨』の底本が指摘された
- 第5版2013 同 上
- 第6版2014 同 上
- ★陳大康『中国近代小説編年史』1、2014.1。4-5頁。中国天涯芳草館主海陽呉禱宣中←「博浪椎」と『棠花怨』が同一作品だと指摘された
- ★[付日265] 2015.1。雑誌第2期、本文写真あり。「棠花怨」、原訳名「博雅^{マア}椎」。角書不記
- 第7版2015 天涯芳草（呉禱）^{／注4} 中国天涯芳草館主海陽呉禱宣中^{／注5}
- 注4（黒岩）涙香小史訳述『梅花郎』明進堂1890.1.15
- 注5（黒岩）涙香小史訳述『梅花郎』明進堂1890.1.15←『棠花怨』の底本が確認された
- 第8版2016 以降第13版2021 まで同じ
- 3) 王中秀、茅子良、陳輝『近現代金石書画家潤例』上海画報出版社2004.7／2005.9第2次印刷
- 4) 論文初出は2009年。今、樽本「書家としての呉禱」『清末翻訳小説論集（増補版）』清末小説研究会2017.1.15 電字版所収
- 5) 陳大康『中国近代小説編年史』全6冊 北京・人民文学出版社2014.1。4-5頁
- 6) 付建舟『清末民初小説版本経眼録・日語小説卷』北京・中国致公出版社2015.1。略号は[付日]
- 7) 章題を示す。

博浪椎	棠花怨	棠花怨
第1章 與金	授金	第21章 洩謀
第2章 遘狙	狙撃	第22章 夜会
第3章 緹拘	〃	第23章 闖闖
第4章 詰婢	〃	第24章 怨嫁
第5章 閩度	〃	第25章 趣別
第6章 室闖	〃	第26章 窺園
第7章 検証	〃	第27章 譖婢
第8章 姉訴	〃	第28章 評案
第9章 扶隠	〃	第29章 乞援
第10章 判臨	〃	第30章 車給
第11章	野遘	第31章 情敵
第12章	訪査	第32章 覷病
第13章	道聴	第33章 下酖
第14章	情絮	第34章 敗奸
第15章	書召	第35章 仰葉
第16章	博嫌	第36章 誘敵
第17章	諫闘	第37章 尋盟
第18章	獵圍	第38章 島闘
第19章	塗説	第39章 泥瘞
第20章	伏刺	第40章 罪讞

- 8) 「致謝朱勤甫書／鄙人趨訳は書至半忽遘小極而発行者貽書敦趣不獲延擱故第十七章由僕口述而要朱君勤甫為之筆記其自十八章以下訂正之役亦多仗朱君襄助之勞不敢湮没特誌数語藉伸謝悃 戊申端陽晝中謹識」。朱勤甫は未詳。第17章は呉構口述を朱勤甫が筆記したという。
- 9) 芦辺拓・有栖川有栖・小森健太郎・二階堂黎人編著『本格ミステリーを語ろう！〔海外篇〕』株式会社原書房1999.3.4
- 10) 小さな書き換えを指摘する。蟬沢が所持していた金貨だ。涙香「金貨が二百圓ばかり」（36頁）を初出では「実幣二百圓」（18頁）と直訳した。後にそれを「金幣二百磅」（20頁）に変更する。せっかく変更して「磅（ポンド）」ではイギリスになってしまう。

変えたとすればフランスだから「法郎（フラン）」が適切だったのにと惜しむ。

長右衛門の仕事「松脂獵（まつやにとり）」（45頁）を「獵琥珀（コハクとり）」（27頁）に変更する。

書き換えではなく呉構の独自例も挙げる。「梅花さん」（41頁）と呼ぶ。呉構は「さん」にわざわざ「密斯忒（Mister ミスター）」（23頁）を当てた。「密斯忒裴克羅」だ。漢語ならば「先生」あるいは「君」ですむ。いかにも外国原作のように合わせているのも呉構の工夫だ。しかしフランスなのだからここは「monsieur ムッシュー」だろう。そこまでは思いつかなかったようだ。

呉禱漢訳『狭黒奴』

——尾崎紅葉訳『狭黒児』

『清末小説から』第148号（2023.1.1）に掲載。沢本香子名を使用。エッジワース「感謝する黒人」を尾崎紅葉が『狭黒児』に訳した。それにもとづき呉禱漢訳『狭黒奴』がある。清末翻訳界で普通に見られる流れだ。ただし紅葉日訳の原作特定に時間がかかったという経緯があった。エッジワース作品がジャマイカの奴隷制度を扱っているため評論の視点が定まらなかったのも事実だ。小説の主題は友情と恩義の間で揺れる心情である。それを紅葉は受け継ぎ独自の改変を加えた。原作では負傷ですんだ黒人主人公を紅葉は死なせてしまった。恩義に報いるための自己犠牲を強調するためである。呉禱漢訳はほぼ紅葉日訳を直訳しており質が高い。

1 はじめに

呉禱漢訳『狭黒奴』の底本は尾崎紅葉訳『狭黒児』だ。紅葉日訳の底本はエッジワース作「感謝する黒人」である。英文原作→日訳→漢訳という清朝末期では見慣れた翻訳過程を経ている。呉禱は日本語を理解したから自然な流れだ。

簡単に言えば以上のとおり。しかし、ここにはいくつかの注釈が必要である。

ひとつは呉禱漢訳についての事情だ。清朝末期の翻訳小説を研究する人は現在でも少ない。だからこそ過去において誰がどのように把握したのかを知ることは有益だ。

もうひとつは紅葉日訳がもとづいた原作発見の経緯である。だいいち紅葉は原作について説明していない。最初から判明していたわけではなかったという。事

実を明らかにしようとした人がいた。その努力の結果だ。

過去の研究状況を理解することが今後の発展につながると考える。そこから始める。

2 呉禱漢訳『侠黒奴』への言及

紅葉作品の漢訳については中村忠行がはるか以前の1950年に説明している。紅葉日訳『侠黒児』を含めて次のように書いた（割注は開く。以下同じ）。

光緒卅二年には、その『寒牡丹』（原題同じ）と『美人煙草』（原題未詳）が、又これと前後して『侠黒奴』（原題『侠黒児』）が『説部叢書』の一として、商務印書館から発行せられて居り、殊に『侠黒児』の一篇は、『（改良戯劇）義侠記（一名黒奴報恩）』と題して、天宝宮人により脚色せられ『月月小説』第九号（光緒卅三年九月発行）誌上を飾つてさへゐる。71頁*1

光緒卅二（1906）年刊行の3作『寒牡丹』『美人煙草』『侠黒奴』はいずれも呉禱が漢訳した。その『侠黒奴』の原作が紅葉日訳『侠黒児』であることを指摘しているのに注目すべきだ。1950年という時期からいっても早い（『寒牡丹』『美人煙草』については別稿参照）。

『美人煙草』は尾崎徳太郎（紅葉）著と表記する漢訳単行本が実際にある。ゆえに中村は上に含めた。実は広津柳浪「美人菘」が原作だ。それはさておき『侠黒児』が清末に戯曲化されていることにも言及している。当時としても珍しい。

その後にも中村の説明がある。少年文学、すなわち児童文学に焦点をあてた論文だ。その2カ所から引用する。

『侠男児』は、明治廿六年六月、『少年文学』第十九編として、泉鏡花の『金時計』と合綴上梓されたもので、『二人掠助』と共に、紅葉の筆になる少年小説の代表作であるが、華訳者はこれを少年文学として扱つてゐない。といふよりは、むしろ政治小説として、虐げられた民族に対する深

い同情の涙を注ぎながら、これを華文に移してゐる趣きが、訳文自体の上からでも窺へる様な翻訳ぶりである。さうした点に於ても、彼此文学観の相違といつたものが、見られないこともない。70-71頁*2

『月月小説』の九号には、天寶宮人補串の「(改良戯劇)義俠記 一名黒奴報恩」が、掲げられてゐる。既述した尾崎紅葉の「俠男児」を、芝居の台本に脚色したものであるが、脚色者の直接據つたものは、呉禱訳であらう。76頁

誤植はあるにせよ紅葉『俠黒児』が呉禱漢訳『俠黒奴』になったことを重ねて指摘した。

以上を根拠にして樽目録初版(1988)より呉禱『俠黒奴』(1906)の底本は尾崎紅葉『俠黒児』(1893)だと注記している。ただし当時はその原作がエッジワース著だとは知らなかった。

その後、渡辺浩司より英文原作が MARIA EDGEWORTH “THE GRATEFUL NEGRO” (“POPULAR TALES” 1804) だという指摘をもらった。樽目録第4版(2011)に追加記入して現在(第14版2022)にいたる。

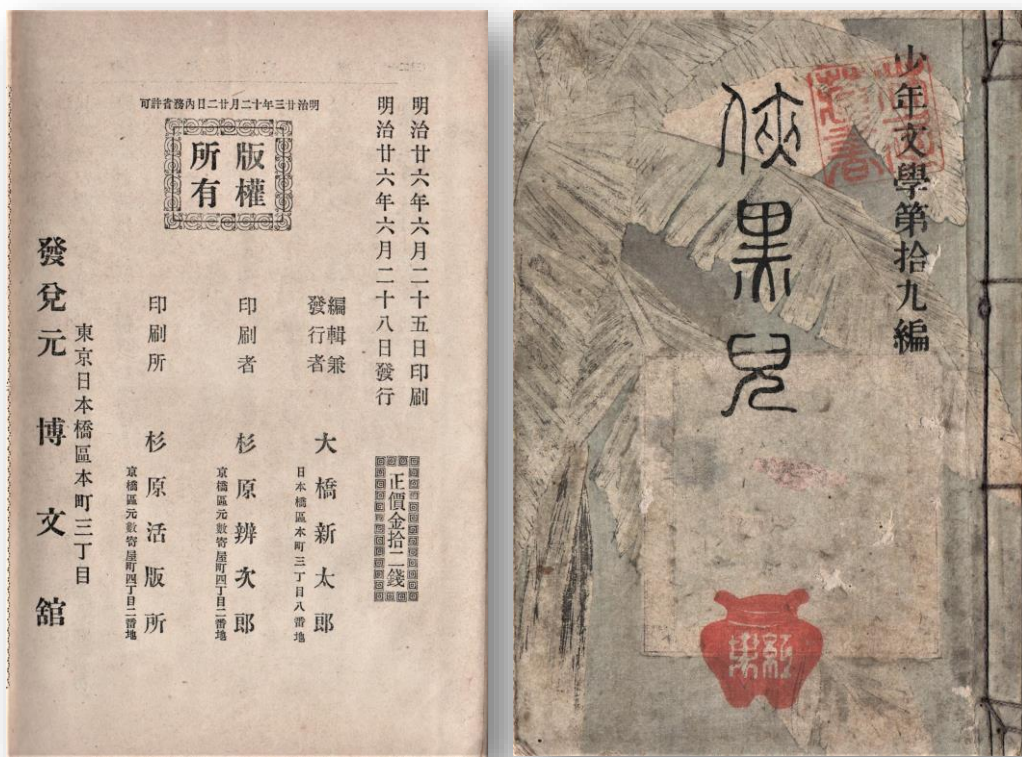
3 紅葉日記『俠黒児』の原作

紅葉山人(尾崎紅葉)『少年文学第19編 俠黒児』(博文館1893.6.28。泉鏡花「金時計」と合冊。挿絵は武内桂舟)である。「少年文学」叢書の1冊に収録された。

原作はエッジワース著「THE GRATEFUL NEGRO」だ。

知ってからそう書くのは簡単きわまりない。しかし、エッジワースの名前まではわかっていたとしても作品名が明らかにされるまでにはかなりの時間が必要だった。『俠黒児』の原作について説明している文章を『尾崎紅葉事典』(2020)*3より引く。簡潔に述べられている。

この作品は、発表当時から「紅葉がものせしエッジワースの『俠黒児』



架蔵 奥付 表紙

あり」（『早稲田文学』明治二六年八月）として知られていた。しかし、具体的にアイルランドの女性作家で、一九世紀のイギリスで広く読まれた児童文学作家の一人である Maria Edgeworth（マライア・エッジワース、一七六七～一八四九年）の“The Grateful Negro”（一八〇二年執筆、一八〇四年刊行）が原作であることを明らかにしたのは、土佐亨「尾崎紅葉「侠黒兎」とエッジワース「恩がえしをした黒人」」（『解釈』昭和四六年（一九七一）年三月）であった。41頁。宗像和重執筆

上に出てくる土佐亨の同題論文には修正稿がある。「紅葉がものせしエツジワールの『侠黒兎』あり」については次のように追加記述した。

さかのぼって調査すると、「早稲田文学」（45号、明治26・8）の「文界現象」

欄の記事「翻訳流行」にく紅葉がものせしエッジワースの『俠黒児』あり>
(鄭澳生) という記述がある*4。

その後大嶋浩もその個所を示した。「鄭澳生「翻訳流行」, 『早稲田文学』
第45号(明治26年8月10日): 302-03. (中略) 「紅葉がものせしエッジワースの
『俠黒児』」あり」と一致する*5。

紅葉『俠黒児』の明治26(1893)年発表から土佐による原作発見は1971年だ。
単純に計算して78年もの時間が経過している。作品によっては原作探索に手間
ヒマがかかるのは普通のことだ。たとえば菊池幽芳日訳『乳姉妹』(1904)があ
る。その底本がシャーロット・M・ブレーム『ライル卿の娘 LORD LISLE'S
DAUGHTER』(1880)だと指摘されたのは2020年だった。116年間も『ドラ・
ゾーン』だと勘違いされていた。

土佐は原作品名(THE GRATEFUL NEGRO)を「恩がえしをした黒人」と翻訳
した。紅葉訳文にある「旦那様、これが御恩返し」(92頁)がもとになっている
と推測できる。紅葉は原作を改変して主人公の黒人を死なせた。土佐はそれを優
先して「した」と過去形を使用したようだ。原作では死んでいない。ゆえに本稿
では冒頭に示したとおり原文にもとづいて拙訳「感謝する黒人」と称する。

4 エッジワース「感謝する黒人」の背景

マライア(マリア)・エッジワース(MARIA EDGEWORTH、1767又1768-1849)
である。

細かいことだが名前の読みがマライアとマリア、また生年が1767年と1768年
の2説がある。明治、大正時代頃にはマリアと表記していたようだ(大嶋2020に
よる)。

説明のひとつは次のとおり。関連部分のみを示す。

エッジワース、マライア(Maria Edgeworth 1768.1.1-1849.5.22)はイギリス
の女性小説家。アングロ=アイリッシュ。476頁。出淵敬子執筆*6

上はマライアで1768年1月1日の生誕とする。

一説は1767年1月1日生まれとあって生年が異なる*7。

前出の大嶋浩は彼女の生年を1768年に訂正した。根拠は Marilyn Butler and Christina Colvin “A Revised Date of Birth for Maria Edgeworth” *Notes and Queries* (Sept. 1971: 339-40) という (49頁。単行本133頁)。筆者未見だがそうなのだろう。

エッジワース作「感謝する黒人 THE GRATEFUL NEGRO」(1804)は『大衆物語集 POPULAR TALES』第3巻(1804)に収録された。以後、多くの版本がある。現在ではネットで読むことができる*8。

作品は西インド諸島ジャマイカを舞台にする。黒人奴隷と白人農園主の対立が基本に設定されている。それを見ればすぐさま奴隷制という単語が頭に浮かぶだろう。現代の視点をもってエッジワースが奴隷制反対の見解を持っていたのではないかと予測すれば外れる。事情は簡単ではない。彼女が生きた時代の事情があるからだ。

エッジワース原作が刊行された当時の歴史的背景をごく手短かに述べる*9。

作品の舞台となっているジャマイカはカリブ海にある島国だ。16世紀にスペイン人が征服すると砂糖キビ農園の労働力として西アフリカから多くの黒人が送られた。17世紀には支配者がイギリス人に替わる。一方で逃亡奴隷たちがイギリス植民地政府に対する反乱をくりかえした。1807年、イギリス議会はアフリカ、ジャマイカ間の奴隷貿易を廃止する。奴隷制が廃止されたのはさらに遅れて1833年のことだ。

その基本になった経済的構造は次のとおり。

イギリスの工業製品がアフリカにおいて黒人と交換される。黒人はカリブ海の農園に送られ砂糖、綿花、インディゴなどの生産に従事させられる。紅茶の嗜好流行拡大により砂糖の需要が増大する。それで獲得された富がイギリスに流入して工業がさらに発展する。これが三角奴隷貿易である。

砂糖などの輸入販売を行なう商人、輸送に必要なとされる船舶、その海上保険、農園で必要とする肥料、農具、食料、衣類の買い付け業務などイギリスの利害関

係者は多数にのぼった。

ここで重要なのはエッジワースの作品（1802年執筆）が発表された1804年という時期だ。それは奴隷貿易が廃止（1807）される以前だった。当時、ジャマイカでは奴隷制度が生きていたことを無視できない。それに対するイギリス人の立場には3種類がある。賛成派と反対派はいうまでもない。その中間に奴隷制度を黙認してそこで労働する奴隷の負担を軽くしようとする穏健派もいた。

該作品の内容から見るとエッジワースはその穏健派に属していることがわかる。

5 エッジワースの奴隷制度に対する考え

原作から該当する部分を引用して説明する。

小説「感謝する黒人」にはふたりの白人農園主がいる。ひとりはおとな派エドワーズだ。

【原作】 This gentleman treated his slaves with all possible humanity and kindness. He wished that there was no such thing as slavery in the world, but he was convinced, by the arguments of those who have the best means of obtaining information, that the sudden emancipation of the negroes would rather increase than diminish their miseries. p.400

この紳士（エドワーズ氏）は、可能な限りの人間性と優しさをもって自分の奴隷に接していた。彼は世の中に奴隷制度のようなものはなければいいと思っていたが、情報を入手するのに最適な手段を持つ人々の議論によって、黒人の突然の解放は彼らの不幸を減らすどころかむしろ増加させることになるかと確信していた。

上には「彼は世の中に奴隷制度のようなものはなければいいと思っていた He wished that there was no such thing as slavery in the world」という表現が見える（紅葉はここを省略した）。これはあくまでもエドワーズの気持ちであって制度そのものに反対しているわけではない。

あるいはエドワーズは奴隷貿易について法律で禁止することにも言及している（紅葉はここも省略した）。

【原作】 If the future importation of slaves into these islands were forbidden by law, the trade must cease. p.403

今後、これらの島々に奴隷を輸入することが法律で禁止されれば、貿易は中止しなければならなくなる。

こちらも仮定の話だ。エッジワースの作品が公表された時にはそれは実現されていない。

小説の中のエドワーズは農園主だ。自分の生活を維持するためには奴隷制度が必要だと認識している。ただ「人間性と優しさをもって自分の奴隷に接していた」。

農園主エドワーズについての説明はそのまま著者エッジワースの思考だと考えていい。そうでなければ重要な登場人物のひとりに設定はしないだろう。

黒人を奴隷制度から突然解放することはかえって彼らのためにはならない。待遇改善をはかる。具体的には、決まった仕事以外に働けば報酬を支払う、あるいは黒人奴隷の小屋の近くに土地を与え1週間に1日その耕作に使用してもよいと許可したことなどだ。小説の中でそう説明している。それらを見れば穏健派に属することが明らかだ。

筆者が注目するのはエッジワースが作品中にほどこした脚注だ。紅葉はここも省略した。児童向けには不必要だと考えたのだろう。エッジワースは当時のジャマイカ状況を理解するために文献を収集した。関連文献を注に紹介して小説の内容が事実にもとづいたことを示している。

一部は次のとおり。

【原作】 Footnote: THE NEGRO SLAVES—a fine drama, by Kotzebue. It is to be hoped that such horrible instances of cruelty are not now to be found in nature. Bryan Edwards, in his History of Jamaica, says that most

of the planters are humane; but he allows that some facts can be cited in contradiction of this assertion.

脚注：「黒人奴隷」はコツェブエによる素晴らしいドラマだ。このような残酷な恐ろしい例が今では自然界に見られないことを願うばかりである。ブライアン・エドワーズは『ジャマイカの歴史』の中でほとんどの農園主は人道的であると述べているが、この主張に反する事実がいくつか挙げられることを認めている。

アウグスト・フォン・コツェブエ (AUGUST VON KOTZEBUE, 1761-1819) は奴隷制廃止論者。原作はドイツ語戯曲 (1796)。英訳「黒人奴隷 THE NEGRO SLAVES」(1800。未見)。エッジワース自身が「残酷な恐ろしい例」と書いている。彼女が作品で奴隷を鞭打つ描写などに該戯曲を利用したかどうか、未見だからわからない。

もうひとりのブライアン・エドワーズ (BRYAN EDWARDS, 1743-1800) は政治家、歴史家。そこでいう『ジャマイカの歴史』とは『イギリス植民地西インド諸島の内政と貿易の歴史 HISTORY, CIVIL AND COMMERCIAL, OR THE BRITISH COLONIES IN THE WEST INDIES』(1793初版)を指す。

研究書からエドワーズについて言及した一部分を紹介する。その訳者中山毅は名前を「ブリヤン」と訳している。

一八世紀末の英領西インド諸島の歴史家であったブリヤン・エドワーズは、二人の富裕な叔父が西インド諸島で砂糖キビ栽培に従事していなかったならば、ウィルトシャーのうらさびれた町ウエストバリで僅かな父親の遺産を頼りに生き、死に、そして忘れられたことであろう、と告白した。

(中山訳153頁)

ブリヤン・エドワーズは、おのれの属するプランター層が途方もない贅沢三昧にふけり、あるいはそれをことさらにひけらかして世人の矚意をかつているという非難を、むきになって否定した。が、その非難の正しいことについては、確かな証拠がある。西インド諸島人の金力については、誰

一人知らぬものはなかった。ロンドンとブリストルには富裕な西インド諸島人の社会が見られた。(中山訳154頁)

以上はエッジワースの脚注に見える記述に関連する説明になっている。

エドワーズはジャマイカで農園を経営したことがあった。ジャマイカが砂糖栽培の植民地として存続するには奴隷貿易を守らなければならないと主張したという。そうすることが経営を維持するためには必要だった。奴隷制度に虐待があることを認めながら改革しつつ存続させるべきだという立場をとる。

なるほど西インド諸島の農園で得た富にエドワーズもどっぷりつかっていた。それでは奴隷制度反対派にはなりようがない。

エッジワースは自分の作品にほかならぬ同姓の「エドワーズ」を登場させている。ここは重要だ。彼女が実在する穏健派のエドワーズの考えを支持した結果であるとわかる。

前述のとおりエッジワースは作品を書くにあたって関係文献を参照した。だから当時ジャマイカにおいて実際に影響力を発揮していた魔術師(呪術師)が小説に出てくるのも不思議ではない。現実にもとづいた小説だから具体的な描写ができた。

しかしジャマイカの奴隷制はあくまでも小説の背景であるにすぎない。作品の主題は別のところある。

6 エッジワース作品の意図

エッジワースにとって作品に重要なのはジャマイカで生活する人々の行動と思考そのものだ。奴隷制を超えた主題がある。すなわち恩義(恩人)と友情(友人)をめぐる葛藤だ。黒人、黄人、白人などの人種の垣根を突き抜けて存在する。人間にとっての普遍的問題だといっている。ただし友情と恩義が信じられていた時代において、と条件をつける。エッジワースはこの主題がより鮮明になるように奴隷制下にある白人と黒人の対立を持ち出した。

作品にでてくる鍵語のひとつは恩義、報恩、感謝の気持ちを意味する

gratitude だ。その形容詞（感謝している）が grateful である。作品題名の「感謝する黒人 THE GRATEFUL NEGRO」で使用される。

エッジワース原作の冒頭にこの gratitude が出てくる。

【原作】 In the island of Jamaica there lived two planters, whose methods of managing their slaves were as different as possible. Mr. Jefferies considered the negroes as an inferior species, incapable of gratitude, disposed to treachery, and to be roused from their natural indolence only by force; (後略) p.399

ジャマイカ島にはふたりの農園主が住んでいたが、彼らの奴隷の管理方法はまるで違っていた。ジェフリーズ氏の考えでは、黒人は劣等種であり、感謝の気持ちを持つことができず、背信行為をしやすく、生まれつきの怠惰から目覚めさせるには力によってのみというものだ。（後略）

残忍な農園主ジェフリーズの考えによれば黒人は「感謝の気持ちを持つことができない incapable of gratitude」。しかし主人公の奴隷シーザーに限ってはそうではない。例外だから題名の「感謝する黒人 THE GRATEFUL NEGRO」である。

作品冒頭から鍵語の「恩義、報恩、感謝の気持ち」が明示される。題名と合わせて考えればこれが主題だと念を押すまでもない。否定語の忘恩 ingratitude も使われていることも言うておく。

恩義の向かう方向は恩人 benefactor だ。それと関連してもうひとつの鍵語が友情 friendship (友人 friend) である。

作品の主要登場人物を簡単に紹介する。

奴隷のシーザーとその恋人クララがいる。友人のヘクターは白人からの虐待に堪え切れない。背後にいる魔術師に操られながら彼は白人皆殺しを主張し同胞と反乱を計画する。その対象にはシーザーとクララのふたりを救済した農園主の穏健派エドワーズが含まれる。

奴隷シーザーは恩義（恩人）と友情（友人）の感情に板挟みになった。彼はど

うするのか。焦点はそこに絞られる。

シーザーは結局のところ恩人エドワーズのために命を投げ出す決心をした。その恩義の感情はヘクターへの友情、恋人クララの愛よりも強い。原作から引用する。

【原作】 Cæsar's mind was divided between love for his friend and gratitude to his master: the conflict was violent and painful. Gratitude at last prevailed: he repeated his declaration, that he would rather die than continue in a conspiracy against his benefactor! p.407

シーザーの心は友人への愛と主人への感謝との間で揺れ動き、その対立は激しく苦しいものであった。しかし最終的には感謝の気持ちが勝って、恩人に対する陰謀を続けるくらいなら死んだほうがまだ、という告白を繰り返したのだった。

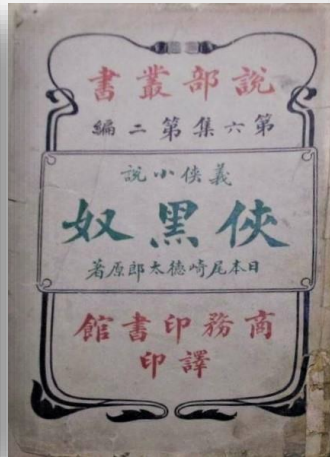
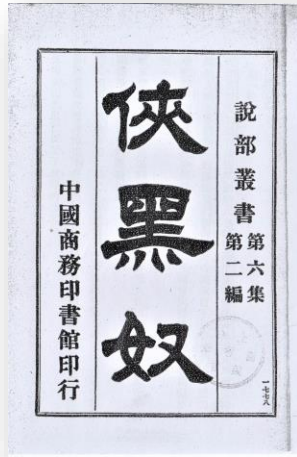
【原作】 The conflict in his mind was violent: but his sense of gratitude and duty could not be shaken by hope, fear, or ambition; nor could it be vanquished by love. p.417

彼（シーザー）の心の中の葛藤は激しかったが、彼の感謝と義務の気持ちは、希望や恐怖、野心によって揺らぐことはなく、愛によって打ち負かされることもなかった。

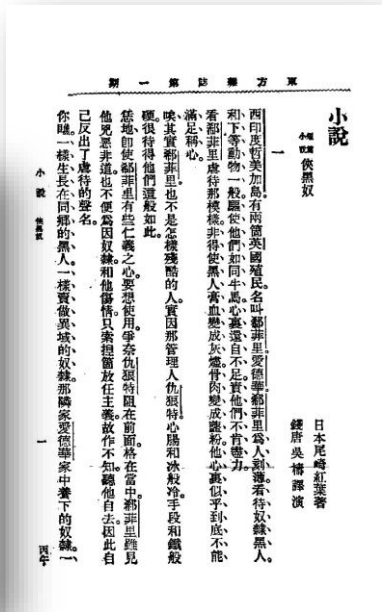
エッジワースは友情と恩義のはざままで苦悩する主人公を作品の中心に設定している。普遍的な問題だ。しかも恩義が友情を凌駕するという方向に定めた。奴隷制度はあくまでも背景にあるにすぎない。紅葉はそれをしっかりと把握して継承した。いくつかの省略、加筆と最後部分の改変はあるにしてもエッジワース小説の基本に沿って翻訳している。

7 エッジワース原作から紅葉日訳を経て呉構漢訳へ

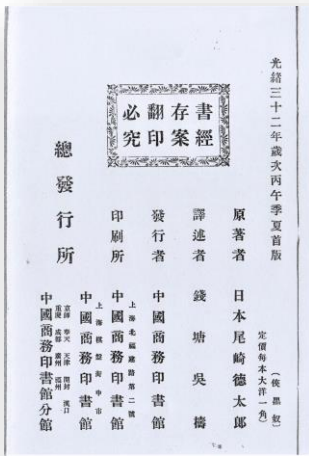
これより原作と紅葉日訳および呉構漢訳を比較対照する。



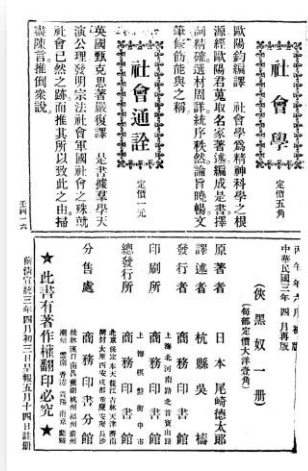
元版 表紙 扉



東方雜誌



元版 奥付



初集 表紙扉 奥付



吳構漢訳は最初『東方雜誌』第3年第1-3期（光緒三十二年正月二十五日-三月二十五日（1906.2.18-4.18））に掲載された。尾崎紅葉著と記述する。のちに「説部叢書」元版系第六集第二編（上海・中国商務印書館 光緒三十二（1906）年歲次丙午季夏（六月）首版。上海図書館所蔵。本稿で使用する）では原著者を尾崎徳太郎と表記し

た。さらに後刷りの「説部叢書」初集第52編（上海・商務印書館 丙午（1906）六月初版／中華民国二（1913）年十二月三版。また丙午年六月初版／中華民国三（1914）年四月再版）などがある。

エッジワース原作は章分けをしない。本稿で使用する1856年版はわずか20頁だ。1804年初版は47頁。版本によって組版が異なるから数字は動く。短篇小説の部類に属する。

紅葉日訳は6（章）に分ける。こちらは挿絵を含み大活字を使用するから94頁になる。紅葉全集第3巻（博文館1904。国立国会図書館デジタルコレクション）では55頁。原作について省略、加筆、改変をしているがその規模は小さい。紅葉日訳は分量的に言えば原作とほぼ同等だ。日本人研究者が紅葉日訳について原作の半分から3分の1に縮約しているという。根拠が不明。呉構漢訳も6章を守って54頁である。

上に引用した原文の冒頭を紅葉と呉構はどのように翻訳したかを見る（ルビ省略。くり返し記号は文字に置き換える。以下同じ）。

【紅葉】西印度じやめいか島に殖民せる、じふえりい、えどうあゝどなる二名の英人ありけり。じふえりいは奴隷の黒人を見ること劣等動物の如く、牛馬に等しく駆役しつ、尚未だ彼等の全力を盡さざるを責めぬ。1頁

上の紅葉日訳を見れば原文を直訳したものではない。あとから登場するエドワーズを前に持ち出している。また「（黒人は）感謝の気持ちを持つことができず」などを省略した。かといって原作から離れたまったくの別物でもない。簡約して翻訳した。

紅葉日訳『俠黒児』という題名が重要だ。「俠」とは信義に厚い、義理堅い、恩を忘れないこと。「黒児」は黒人の若者、男子だ。

「俠」という字をつかっているところから紅葉がエッジワースの主題「感謝する」すなわち「恩を忘れない」を確実に把握したことがわかる。

英文原作は紅葉の時代からほぼ90年昔の物語だ。そこに言及される奴隷制度についての説明は日本の児童には不必要だ、と紅葉が判定したのは納得できる。

もっと重要な問題がある。恩義と友情、それに報恩だ。それを児童に理解させるには最適な作品であると考えた。だからこそ児童文学の翻訳として「少年文学」叢書に抵抗なく収録された。

紅葉は「狭黒児」という作品において奴隷制に反対していたか。そうであってほしいと期待すれば裏切られる。エッジワース原作そのものが擁護派の立場で書かれている。紅葉日訳もそれを忠実に引き写しているからだ。

呉構漢訳『狭黒奴』は紅葉の作品名を踏まえる。恩を忘れず感謝する「黒人少年」を「黒人奴隷」に書き換えただけ。

次に呉構漢訳を示す（漢訳を翻訳するばあい固有名詞は紅葉の用語をカタカナに変更して使用する）。

【呉構】西印度 哲美加島。有兩個英国殖民。名叫邨菲里。愛德華。邨菲里為人刻薄。看待奴隸黑人。和下等動物一般。驅使他們如同牛馬。心裏還自不足。責他們不肯盡力。1頁

西印度ジャマイカ島にふたりの英国植民がいた。名前をジフエリイ、エドウア、ドという。ジフエリイは性格が酷薄で奴隷の黒人を下等動物のように待遇し、彼らを牛馬に等しく駆り立て、それでもまだ満足せず、彼らが力をつくす気がないと責めるのだった。

呉構漢訳は紅葉日訳を直訳していると言っていい。省略もせず加筆もしていない。

エッジワースの奴隷制度に対する態度をエドワーズの描写に見た。そこを紅葉はどう翻訳したか。日本語訳を再度示して対照する。

【原作訳文】この紳士（エドワーズ氏）は、可能な限りの人間性と優しさをもって自分の奴隷に接していた。彼は世の中に奴隷制度のようなものはなければいいと思っていたが、情報を入力するのに最適な手段を持つ人々の議論によって、黒人の突然の解放は彼らの不幸を減らすどころかむしろ増加させることになるかと確信していた。

【紅葉】 えどうあゝどは天性至仁にして、不具なる子に親の慈愛の深きごとく、天賦の権を伸ぶるによし無くして、強者の食となりぬる、箇（この）蒙昧暗愚の民を憐む志衆に超えたり。3頁

【呉禱】 愛徳華那人。生来天性至仁。平日見了盲啞聾跛。身上稍有不全之人。已和爺娘愛惜兒女一樣。道他也是一般人類。却偏不能伸他天賦人權。做了強人的釜中魚。砧上肉。這等殘疾之人民。不可憐却可憐什麼。2頁

エドワアゝドという人は生まれつき天性至仁にして、盲啞聾跛など身体に不具合がある人を見ればまるで親が息子娘を大事にするのと同じようにした。同じ人間であるにもかかわらず、ただどうにも天賦の人權を伸ばすことができずに強盗の餌食（釜の中の魚、まな板の上の肉）になっている、と言うのだった。これら身体障碍の人を思いやらなければ何を憐れむというのか。

紅葉は「奴隷制度」について翻訳しなかった。ジャマイカの農園が奴隷によって成り立っていることを理解しているからだ。その制度そのものについては取り上げる意志は持たないとわかる。日本の児童にとってはより重要なことが別にあると判断しているにほかならない。

紅葉が強調したのはその前半部分にあるエドワーズの性格が慈愛に満ちてこの上なく恵み深いことだ。エッジワースが奴隷制度を小説の背景にしているだけだと見抜いている。呉禱も同じ。ただ紅葉の「蒙昧暗愚の民」という精神面についての表現を呉禱が「殘疾之人民」と身体面に漢訳したのは方向がズレている。

それでも上の部分にほどこした加筆から紅葉の黒人についての認識がにじみ出る。

残忍なジェフリーズは黒人を劣等種（an inferior species）であると考えていた。作品冒頭にそう述べられている。紅葉は原作どおりに「劣等動物」を当てた。呉禱も「下等動物」と訳して同じだ。

上は穏健派エドワーズの考え方についての説明である。慈愛の感情を強調したのはエッジワースのままで問題はない。しかし紅葉は原文にはない「蒙昧暗愚の民」を加筆した。黒人を愚かであると説明したのだ。別の個所でも「人間が愚鈍

だけに、一入（ひとしほ）可哀さうでなりません」（13頁）と紅葉は語句を付け加えている（呉禱漢訳「要知世上愚鈍癡傻の人。終是可哀可憐的」8頁）。紅葉の追加記述によって残忍なジェフリーズと穩健派エドワーズの黒人に対する認識は一致してしまう。

紅葉によるこの描写には根拠がある。エッジワース原作のうしろ部分から持ち出してきた（紅葉はその後ろの部分省略して翻訳していない）。すなわち残忍なジェフリーズが穩健派エドワーズに向かって次のように言い放った。

【原文】 You are partial to negroes; but even you must allow they are a race of beings naturally inferior to us. You may in vain think of managing a black as you would a white. Do what you please for a negro, he will cheat you the first opportunity he finds. You know what their maxim is: 'God gives black men what white men forget.' p.404

あなたは黒人が大好きですが、あなたでさえ黒人は生まれつき我々よりも劣った人種であることを認めざるを得ません。白人と同じように黒人を管理しようと思っても無駄だ。あなたが黒人のために好きなようにやっても、黒人は機会を見つけてはあなたを騙しますぞ。彼らの格言を知っているでしょう。「神は白人が忘れたものを黒人に与える」

穩健派エドワーズはこの発言に対して反論しなかった。「エドワーズ氏はこれらのありふれた意見には何も答えず **To these common-place desultory observations Mr. Edwards made no reply;** 」とある。敢えて無視したとも読める。しかし結果として作者エッジワース自身が見方を黙認したからだといわれてもしかたがないだろう。彼女は黒人を白人よりも「劣った人種」だと考えているのだ。

というように紅葉のこの「蒙昧暗愚の民（愚かな黒人）」という認識はエッジワースをそのまま受け入れて出てきている。紅葉を責めても意味がない。

もうひとつの加筆は「天賦の権を伸ぶるによし無くして、強者の食となりぬる」だ。ほぼ直訳した呉禱漢訳をくり返せば「却偏不能伸他天賦人權。做了強人的釜中魚。砧上肉」である。生まれながら人間として持っている権利が理由もなく妨

げられて強盗のくい物にされていると述べる。

ここはエッジワースを超える紅葉の認識の高さを示している。紅葉は白人も黒人も区別しない基本的な人権があることを主張する。たしかにエッジワースの思考を引きついで黒人に対する偏見がある。それと同時に紅葉が持つ天賦人権観が混在している箇所だ。

奴隷シーザーは命を懸ける

シーザーが穏健派エドワーズに恩義（感謝の気持ち）を抱くことになった経緯を説明する。

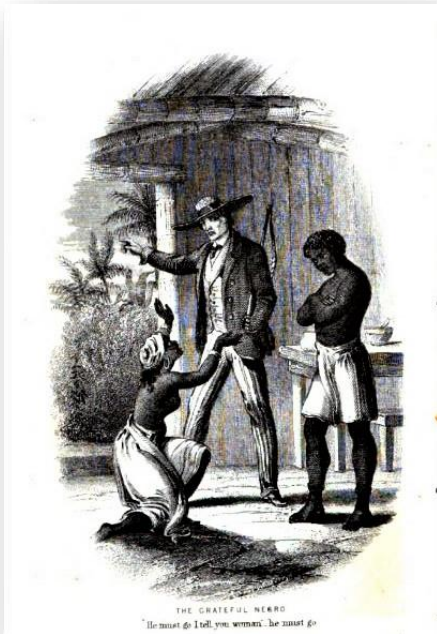
残忍なジェフリーズの農園で働いていたシーザーは他所へ売られるところだった。シーザーの恋人（紅葉日訳では妻）が大泣きしている。

参考として挿絵を4葉掲げる。2葉は残忍な監督デュラントがシーザーを売るとクララに告げている（a1865、b1867。数字は刊年）。同じ構図の1葉は紅葉訳本掲載（c1893）。残る1葉（d1895）はシーザーが穏健派エドワーズに自分たちを買ってほしいと訴える場面だ。

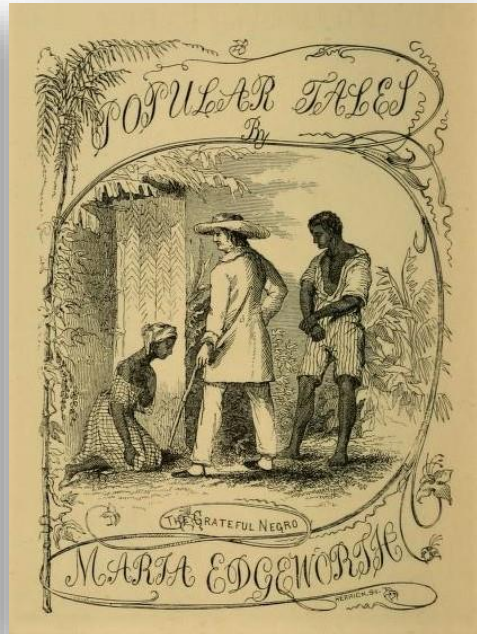
黒人の服装が異なっていることがわかる。初期刊本は半裸だ（a1865）。後に簡単な服装（b1867）から1895年版では裸足であることを除いて白人とほぼ変わらない。出版社と刊行時期によって編集方針が違ったからだろう。紅葉訳の挿絵（c1893。桂舟画）ではシーザーとクララは半裸だ。それを根拠に紅葉の使用した底本がかなり以前のものだと考える人もいるだろう。しかし確定はできない。偶然に一致した可能性もある。原作にはもとから挿絵はないのだ。

通りかかった穏健派エドワーズが事情を尋ねる。その時シーザーから強い申し入れが寄せられた（青色は筆者）。

【原作】 Cæsar now for the first time looked up, and fixing his eyes upon Mr. Edwards for a moment, advanced with an intrepid rather than an imploring countenance, and said, “Will you be my master? Will you be her master? Buy both of us. You shall not repent of it. Cæsar will **serve you faithfully.**” p.402



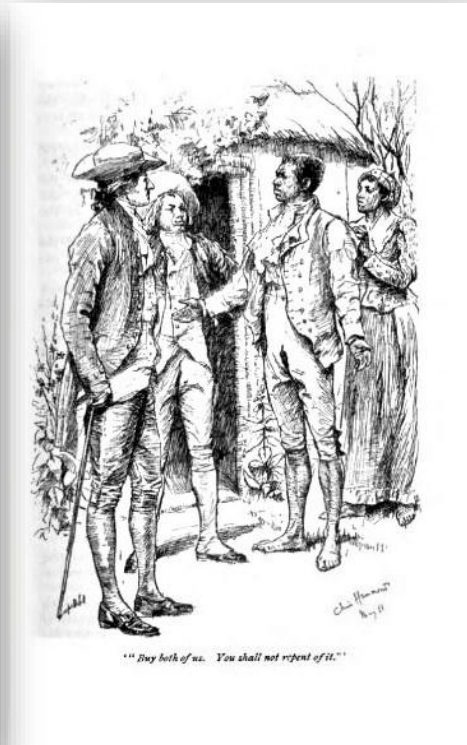
a1865



b1867



c1893



d1895

シーザーは初めて顔を上げ、しばらくエドワーズ氏と目を合わせた後、懇願するというよりはむしろ勇敢な表情で進み出て言った。「私の主人になってくれませんか？ 彼女の主人になってくれませんか？ 私たち両方を買いなさい。後悔はしないでしょう。シーザーはあなたに忠実に仕えます」

【紅葉】今までは声も出ださず、身動きもせざりし志いざあは、此時纔（わずか）に面を挙げ、偷むが如くえどうあゝどの顔を眺めて、其心を読まむとするに似たり。読み得たるか、つつかと進寄りて、

「旦那様、願ひでございます。どうぞ私をお買ひなすつて下さいまし。彼女（あいつ）めも一所にお買ひなすつてやつて下さいまし。其代りには、二人の命は旦那様に差上げました了簡で、どんなにも御奉公いたしまする。

9、11頁

【呉構】先前直到此刻。身子不動口舌不言的西查。這時纔擡頭仰面。偷著看望愛德華面顏。不知想些什麼心事。忽地拔身愛德華那邊走了過去。開口告求。

「老爺。求你老的大恩。總得想箇方法。将我買下。那女子。也求買在一起。俺兩人的性命。一夥兒交給老爺。願生生世世伺候老爺再不改變」5-6頁

今までは身動きせず声も出さなかつた志イザアは、この時ようやく頭をあげ仰向くと何を考えているのかわからないが、つとエドウアゝドに近寄ると訴えた。

「旦那様、あなた様の恩情をおかけください。なんとかして私をお買ってください。あの女子も一緒にお買いくださいますよう願います。ふたりの命はともに旦那様に差し上げます。世世代代にわたって旦那様にお仕え申しあげ変わることはございません」

呉構漢訳は紅葉日訳をほぼ直訳しているから触れない。

原文は「Cæsar will serve you faithfully シーザーはあなたに忠実に仕えます」だ。青色部分の「忠実に、誠実に仕えます」は「命を懸ける」わけではない。エッジワースは「命を捨てる覚悟」までは書いていない。それを紅葉は「二人の命は旦那様に差上げました了簡で」と「命」を強調して翻訳した。両者は違うよう

でいてそうではない。「恩義（感謝の気持ち）」に「命」を直結させたのは紅葉の工夫でもなければ変更でもないからだ。

エッジワース原作には「命を懸ける」男性として最初からこのシーザーと親友ヘクターがいるのだった。ふたりはコロマンティン族だ。同じ船でジャマイカに連れてこられた。苦労を共にし互いに尊敬しあい硬い友情で結ばれている。彼らの性格をエッジワースは次のように説明する。

【原作】 Hektor would sacrifice his life to extirpate an enemy. Cæsar would devote himself for the defence of a friend; p.406

ヘクターは敵を滅ぼすために自分の命を犠牲にする。シーザーは友人を守るために身を捧げる。

シーザーが友人のためには命を懸けるという性格であることを言う。

紅葉はこの個所を少し改変して翻訳した。

【紅葉】 へくとるは慄悍にして乱を好み、志いざあは深沈にして壮武なり。

18頁

【呉構】 海克道為人。猛鷲慄悍。喜動好乱。西查呢。秉性深沈。氣概強壯。

11頁（直訳だ）

エッジワース原作にあつて紅葉が変更したもうひとつの箇所がある。穩健派エドワーズがシーザーを信頼してナイフを与えた。それに対するシーザーの思いが書かれている。

【原作】 but no sooner was Mr. Edwards out of sight than he knelt down, and, in a transport of gratitude, swore that, with this knife, he would stab himself to the heart sooner than betray his master! p.412

しかし、エドワーズ氏が見えなくなるやいなや、シーザーはひざまずき、感謝の気持ちを込めて、主人を裏切るくらいなら、このナイフで自分の心

臓を突き刺す、と誓ったのである。

【紅葉】万が一どんなか事でもあつた時には、一同命を捨てまして、日頃の御恩返しをいたさうと、へい、そんな事を楽しみにしてをります。56頁

【吳禱】万一有什麼事情時候。情願一齊拋擲性命。報答你老一生的大恩。哈嘍。那纔是小人們的快樂咧。33-34頁（「へい」を「哈嘍（ハイ）」とそのまま写して直訳。ゆえにここでは訳さない）

紅葉はナイフ部分を省略した。だが「恩返し=命を捨てる」はエッジワース原作を引き写している。

ここにはもうひとつ紅葉による加筆がある。ジェフリーズはクララが病気であることを知っており仕事を休ませるよう、また医者を遣るから薬を飲ませろと言いつけた（57-58頁）。シーザーはその暖かい言葉に感激してひとり決意を固める。

【紅葉】「いよいよ生きてはゐられね。58頁

【吳禱】「好好。越發不要活了」35頁

ああ、いよいよ生きてはいられない。

これら決死を意味する表現を紅葉はシーザーとエドワーズの出会い部分に凝縮して挿入したといえる。

紅葉による独自の加筆があることをさらに指摘する。

親友ヘクターらの反乱計画を知ったシーザーは苦悩する。秘密を主人に告げれば白人は警戒して同胞の計画は失敗する。そうして親友と友情は失われる。そればかりかシーザーが予想することはもっと恐ろしい。

【紅葉】さては全島の黒人計を破られて、再び白人の囚虜とならむには、我同胞は如何ならむ、其苦艱は死にもなかなか優るべし。59頁

【吳禱】黒人的密計。全然敗露。從此以後。全島の黒人。更做了白人囚虜。比前虐待得更加利害。白人的同胞。果然得計。俺的同胞。這便如何。這等苦楚。真個還是死了強得多。35頁

黒人の秘密計画がすべて露見すれば、それから以後は全島の黒人はふたたび白人の虜囚となり、以前よりも虐待はもっと厳しくなる。白人の同胞が秘密を知れば、俺の同胞はどうなるのか。この苦悩はまことに死に勝るものであった。

紅葉は反乱の露見、失敗後の様子までも書き込んでいる。恩を受ければ自分の命をも差し出す（報恩）。叛逆に失敗すれば復讐される（報復）。報恩と復讐は表裏一体のものだ。紅葉のこの文章はエッジワース原作には見られない（呉構は紅葉の文章をよく漢訳している）。

紅葉はジャマイカにおける白人と黒人の対立状況、奴隷制の厳しさを的確に認識していたといえる。一方の原作者エッジワースはその現実を目を背けていた。何も記述していないからそう考える。

シーザーは恩義を受けたらそれに報いるためには自分の身を犠牲にすることを躊躇しない。友人ヘクターとはもともとそういう関係だ。恩人に対しても同じ思いになる。ゆえに友人と恩人が対立すれば両者の板挟みにならざるをえない。

同様の表現はいくつか見られる。シーザーがヘクターに告白する。

【原作】 He that is now my benefactor—my friend! p.407

あの人は今や私の恩人だ——友人なんだ！

【紅葉】それは、真箇に慈悲深え、善人だつちやねえ。我の大恩人だ。人ぢやねえ、神様だな。25頁

【呉構】啊。真箇是我仏慈悲哩。真箇是善人哩。我的大恩人。你道他人啊。他見直是天神。16頁（直訳だから訳さない）

紅葉は「人ぢやねえ、神様だな」と強調した。シーザーのエドワーズに対する称赞賛美が止まらない。ヘクターにはそれが理解できないし我慢がならない。それでもシーザーは言いつのつた（固有名詞以外の下線は筆者）。

【原作】 Cæsar, unmoved by Hector's anger, continued to speak of Mr.

Edwards with the warmest expressions of gratitude; and finished by declaring he would sooner forfeit his life than rebel against such a master.
p.407

シーザーはヘクターの怒りに動じることなくエドワーズ氏への感謝の言葉を述べ続けた。最後に、このような主人に反抗するならば、自分の命を失うこともやむを得ない、と言い切った。

【紅葉】一杯の水を乞（もら）つたつて恩はやつぱり恩ぢやねえか。こんな事をいつたら、又お前に怒られるか知らねえが、我は真箇に旦那の為には命を捨てる気だから、事が起れば、今までは兄弟分でも敵同士。品に依つちや命の与奪をしめえとも限らねえ。30頁

【呉構】你不知受人一碗飯。求人一盃水。也是人的恩麼。這些話和你講。或是又触犯你的怒。也是難說。但我真箇為了我主人。拋捨性命。也是情願。俺們這多時的弟兄价。須要變為仇敵。道不得箇同室操戈。18-19頁

一碗の飯をもらう、一杯の水を求めても人の恩だとお前は知らないか。こういう事をいえばまたお前に怒られるだろうから言いにくいだが、しかし本当に俺の主人のために命を捨てることになっても本望だ。俺たちは長らく兄弟分だったが敵同士にならなくちゃならない。内輪もめですらないのだ。

「一杯の水」に恩義を感じる。紅葉の説明に呉構は「一碗飯」を加えて対句風に飾った。また紅葉の漢字「乞」に引かれて「求」と漢訳した。呉構漢訳にはそういう傾向がある。

シーザーは友情と恩義の板挟み状態だったが、ヘクターを説得する過程で恩義のために死んでもしかたがないと覚悟した。ここが重要だ。紅葉はこのエッジワースが示した筋道を守ってさらに強調することにした。

恩義に報いる——その具体的方法を紅葉が提出する

紅葉は原作にはない狼の報恩物語を独自に加筆した。

昔、ある医師が山道で狼に遭遇した。襲ってこないのを見れば口を開けて苦し

んでいる。医者は狼の喉に刺さった骨を抜き取ってやった。後日、狼が一振りの剣を加えて「報酬（むくい）」とした（呉構漢訳は「報恩」10頁）。次も紅葉の加筆だ。

【紅葉】情を知らざる人の性を、虎狼ともいふなる悪獣さへ、恩を懐ふことの浅からざる如斯（かくのごとし）。彼等野蛮なりといへとも、非情の木石に同じからざれば、憂きにも、愁（つら）きにも、泣くことゝてはあらざりし、剛勇不敵の志いざあも、此事を語り出でゝは、常に涙を流しけり。

16頁

【呉構】不通靈性似虎狼等悪獣。尚且懂得報答深恩。黒人雖道野蛮。到底還是人類。不是無情木石。那有不識憂。不識愁。不知恩怨之理。瞧啊。剛勇不敵的西查。提起狼劍那件事。暗地裏常自流淚。10頁（直訳しているから訳さない）

紅葉の加筆であるがその思考法（恩義に報いる）はエッジワース原作にもとから存在している。紅葉はそれを児童に向けてより詳細に、より具体的に示した。

エッジワースの記述する「感謝の気持ち」を紅葉は「恩（恩義）」に書き換えてくり返す。「恩を知らなければ畜生だ。我は畜生にはなりたくねえから」（30頁）となる。呉構は次のように漢訳した。「我但知不知道恩怨的乃是畜生。我都不能做畜生般的人（恩と仇を知らないものは畜生だと俺は知っているだけだ。俺は畜生のような人間にはならない）」（18頁）

エッジワース原作のシーザーは自己犠牲を躊躇しない。紅葉はそれを受け継ぎながら独自に、なおいっそう先鋭化させる。

奴隷たちは農園主に虐待されている。ヘクターが首領となって白人皆殺しの計画を立てた。その背後には魔術師エステルが薬物を利用してヘクターたちを扇動し指図しているのだった。コロマンティンは奴隷反乱を指導した部族であることが知られる。魔術師（オビア）は呪術師といっても同じ。対白人反乱の精神的支えとなり同時に指揮もとった（西出4頁）。それがエッジワース原作に登場している魔術師エステルである。

反乱のことを知ったシーザーは恩人エドワーズ一家をなんとしても救い出したいと願った。エッジワースはシーザーが友情と恩義のふたつに挟まれ揺れ動いたとすでに書いている。「死んだほうがましだ」とも言った。そこを紅葉はより具体的な提案という形で読者に示す。紅葉独自の解決策だ。恩人のエドワーズ一家を助けるかわりにシーザー自身の命を差し出すとヘクターに持ちかけたのである。対立した問題を解決するには自己犠牲しかありえないというのだ。次の記述はエッジワース原作には存在しない。

【紅葉】へくとる、無理な事は頼まねえ、我を殺して旦那の一家だけを助けてくれ。不承だらうが身換に志いざあの首を取つてくんねえ。31頁

【呉禱】海克道啊。那没情没理的事。須幹不得。還不如殺殺我。前去幫助我那家主人。你若不允。我也能自己取下我的首級来。19頁

ヘクトルよ、情理のないことはどうしてもできないというなら俺を殺してくれ。そうして俺のあの主人一家を助けてくれ。それがだめというなら俺は自分の首を取ることもできるんだ。

呉禱は紅葉日訳の後半部にある「首」「取」という漢字に頼って漢訳したらしい。日本語に書いてある主語述語の関係を把握できなかった。自分で自分の首を取る、は自殺することだ。「殺せと命じる」と「自殺する」は違う。ただ自分の命を差し出すという点では一致する。

のちに天宝宮人編串「(改良戯劇)義侠記(一名黒奴報恩)」(1907-08)はこの呉禱の誤解を取り入れた。シーザーが自殺する場面を創造したのだ(別稿参照)。

【紅葉】今までの友誼をおもつて、我が一生の願へだから、どうぞえどうあ、ど一家の命ばかりは助^{ママ}すけてくれ。此處でお前の手に懸かれば、旦那への恩報じは出来、お前方への義理も立ち、こんな嬉しい事はありやしねえ。さあ突くなりと、斬るなりと、好きなやうにして殺してくれ。31-32頁

【呉禱】也須念念咱們這多時的交情。啞。愛德華一家性命。總求你們救助。

這時候我的性命。都在你手辺。著啊。快些斬。快些剛。快些莫要容情殺了。

19頁

これまでの俺たちの友誼をぜひ考えてくれ。さあ、エドウア、ド一家の命は助けてくれ。今俺の命はお前の手にあるぞ。それ、早く斬れ、さあ切り刻め。早く容赦なく殺すんだ。

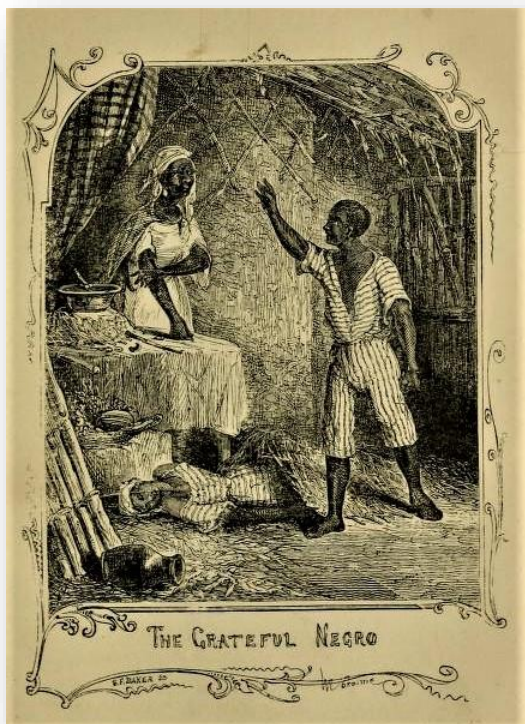
主人への報恩と友人への義理（友情）を両立させるにはどうするか（呉構漢訳では報恩部分がない）。対立を解消して問題を解決するには自分が死ぬよりほかに選択肢がない。この瞬間に紅葉の中でシーザーは死ぬという運命が決定した。そこで読者に予告した。「志いざあは彼（ヘクター）の心の動かすべからざるを知りて、再会を刀刃の間に期せむことの已むを得ざるを覚悟せり」（34頁）である。呉構は漢訳して「西查知道再三勸説。不能動他的心。非得和他刀兵相見。万不能已」（21頁）に直訳した。

エッジワース原作とは離れてしまうのは当然だ。これが紅葉日記の最後部分において原作を改変する伏線となっている。

8 紅葉による改変

妻クララは魔術師エステルに呪術をかけられた（紅葉訳の桂舟画では魔術師エステルを白人の老女に描いている。誤解だろう。原作1867年本の挿絵は黒人の魔術師だ）。反乱の計画は知らされずヘクター側につくようにシーザーを説得する役割を与えられたのだ。ふたりの命はないと脅された。ついでながらひとこと。紅葉は魔術師 **Obeah** を「おびあ」（36頁）、魔法 **Obi** を「おびい」（37頁）と表記する。この単語はエッジワース原作では脚注にのみ見られる。紅葉は脚注を含めて読み込んだことがわかる。

受けた恩に報いる（報恩）はエッジワース原作にある。紅葉はその方向を踏まえながら彼独自の変更を加えた。クララを巻き込んで過激に走らせる。次の会話はエッジワース原作とは遠く離れる。呉構はほとんど直訳しているからそれを添える（29、32頁）。



e1867 魔術師とシーザー、失神するクララ



桂舟画 魔術師とクララ

【紅葉】志いざあは遽に容を正し、声を励まして、（西查忽然正色。厲声敷説。）

「くらゝ、死んでくれ！（「クララ死了罷了）」

「何だえ？（「這是怎麼說……）」（這声氣非情凄切。叫人難聞（注：呉構の追加。その口ぶりは凄絶だったから聞くに耐えなかった））

志いざあは平然として、（西查依旧坦然。）

「我は死ぬ覚悟だ。（「我已預備死咧）」

くらゝの心の半は死せり。（クララ那時。也和半死一樣。）

「お前それはどういふ事情で？（「那箇。到底為什麼事情。……）」

「大恩のある旦那様は殺されねえ。48-49頁（「如此。大恩人。愛德華老爺。就不致被殺了」29頁）

（中略）

「かうして夫婦一處に暮らしてゐる、御恩を私は忘れは志ないよ。（「慥地。

俺夫婦在一夥過活。我也不忘你的恩」（注：你_は他の誤解）

「好く言つた。（「説得好啊」）

「私はお前とならば死ぬよ。（「我若變做你。情願死了罷休」（注：「お前とならば」を「私がお前ならば」と誤解）

志いざあは満足したる気色にて、（西查很為高興。很為満足。）

「死んでくれるか。（「情願死嗎」）

「立派に死ぬよ。（「死了強得多」）

「立派に！ 立派にとは好く言つた。それでこそ志いざあの女房だ。52-53頁（「強！強！強的話。説得更好。那纔真是。西查的妻子」32頁）

エッジワース原作ではクララはあくまでもシーザーの背後に置かれる。シーザーはコロマンディン族で勇猛果敢だ。クララはエボエ族でもとから心優しく内気な人物として設定されている。だから魔術師エスターに操られるままの被害者にすぎない。しかし紅葉はエボエ族を翻訳せずに無視した。そればかりか加筆改変によって夫とともに死を覚悟する意志強固な賢妻に変身させた。戯曲「義侠記」ではさらに変化する（別稿参照）。

最後部分の巧妙な改変

紅葉の考えではシーザーの命は失われるものと決定している。そのために辻褄があうように原作を改変する必要が生じる理由だ。

反乱を実行する直前にヘクターたちは魔術師の小屋に集合した。シーザーはヘクターを説得するためにエドワーズを案内してそこに赴いた。反乱をやめればヘクターの命は助かるという交換条件である。小屋に火が放たれたことに気づいたヘクターは飛び出す。彼の眼に飛び込んできたのはシーザーの姿だ。反射的にナイフを胸に突き立てた。これが原作だ。

【原文】Hector, incapable at this instant of listening to anything but revenge, sprang forwards, and plunged his knife into the bosom of Cæsar. The faithful servant staggered back a few paces: his master caught him in

his arms. “I die content,” said he. “Bury me with Clara.” p.418

ヘクターはこの瞬間、復讐以外のことに耳を傾けられなくなり、前に飛び出しナイフをシーザーの胸に突き刺した。忠実なしもべは数歩後ずさりすると、主人は彼を抱きかかえた。「満足して死にます」と言った。「クララと一緒に埋めてください」

ヘクターがシーザーをナイフで刺したのは目の前にいたからだ。もともとエドワーズを狙ったわけではない。またシーザーが主人エドワーズを危険から守ろうと身を投げ出したのでもない。しかし紅葉にしてみればその偶然を必然にする必要がある。書き換えてエドワーズを前面に突き出した。ヘクターがエドワーズに向かって切りつけたことに改変したのである。呉構漢訳を添える。ほぼ直訳だから訳さない。違うところには注をつける。

【紅葉】へくとるは廬の後なる物音を聴咎めて、突如と躍出づれば、忽ち眼に入る白人種！（海克道忽然聽見屋後漸索声音。出人丕意。撲的跳躍出去。陡的白人種形影。映眼簾之内。……只聽。）

「おのれ！（「我……」）

といひ様小刀を閃かしてえどうあゝどに斬付けむとしたりけるを、（刀光一閃。向愛徳華身上撲来。又聽。）

「へくとる待て！（「海克道慢著」）

と呼びかけたる、志いざあの姿を見ると齊しく駈寄りて、（話声未了。接著西查挺身趕在愛徳華前面（注：志イザアがエドウアゝドの前に立ちふさがったので、とより詳細にした）。海克道又喊。）

「思ひ知れ！（「奸徒。俺知道……」注：俺は知っている、と誤訳する）

と只一突に、心頭深く貫きね^{ママ}[ぬ]。89-92頁（略嗤（注：擬音、ズバ）只下一刀正中西查當胸。）52頁

シーザーが白人をかばったからヘクターは彼を刺した。そこでシーザーの叫びにつながる。

(一九) 少年文



黒 俠 (〇九)



口絵の構造は似ているが細部が違う

【紅葉】「旦那様、これが御恩返し、／くらゝ！（「老爺。這是小人報答大恩」
／又「克拉拉」）」

と一声叫びしが、敢無く息は絶えにけり。92頁（一声哀叫。敢是断了氣。一息全無）53頁

強引な変更だがこれで前後のつじつまが合う。原作を知っているから巧妙だという理由だ。

結 末

エッジワース原作の結末は次のとおり。

シーザーは失血したが致命傷ではなく昏睡状態から蘇生した。クララは魔術師が投与した毒（アヘン剤）の効能が切れて覚醒した。ヘクターが死んだとは書かれていないから生き延びて逃亡したのだろう。殺されたのは農園の残忍な監督デュラントだけだった。穏健派エドワーズは反乱が島の他の地域に広がる前に鎮圧した。残忍な農園主ジェフリーズと妻は全財産を失いイギリスに帰国して没落した云々。

奴隷制度を擁護する穏健派のエッジワースにしてみれば残忍とはいへジェフリーズを殺すに忍びなかった。せいぜいが追放ですんだのは意外なことではない。シーザーは刺し傷から回復したからそれとの兼ね合いもある。

ジャマイカにおける奴隷の反乱は穏健派エドワーズによって鎮圧されたとくり返す。奴隷制度はその後も継続されたということだ。エッジワースは奴隷制反対派ではないから予想された結末である。

紅葉も「じふえりい夫婦は命からがら本国に遁帰りて後は、見る影も無く貧窮して、人



回復したシーザー 見守るクララ

其終を知らずとなむ」(93-94頁)と訳して結びとした。ここに変更はない。エッジワースの結末を受け継いだ。呉禱も同様。「郗菲里夫婦。幸得逃命。遁回国。後來聴説貧窮到万分。連箇影子也不見了」54頁

紅葉の加筆

紅葉は独自にいくつかの話柄、単語を加筆した。狼報恩物語のほかにあるいくつかを示す。

細かなところでは「ぶりゆ山(ざん)」(71頁)がある。呉禱はそのまま「布利由」(42頁)とする。これはエッジワース原作には出てこない。ジャマイカにある最高峰の山ブルー・マウンテン Blue Mountain である。現在ではブルー・マウンテン・コーヒーで有名だ。原作にない山名を出したのは紅葉の知識が確かなものであることを示している。

あるいは魔術師エスターがクララを襲わせた四足ある蛇(76-77頁)だ。「五尺(約1.5メートル)」の蛇足ならばオオトカゲかと思う。この数字か単位(全集でも同じ)は間違いだろう。挿絵を見れば5メートル以上はありそうだ。どのみち魔術師のことだから怪物も取りだす。



紅葉挿絵：蛇にまかれるクララ、シーザーは魔術師を取り押さえる

紅葉は奴隷に白人を「毛唐人」「毛唐」（26頁）と呼ばせている。奴隷が農園主の白人を「毛唐」と罵る。違和感のある箇所である。なぜなら日本では西洋人を蔑視してその呼称を使用するからだ。『狭黒兎』に同時収録された泉鏡花「金時計」がある。日本人を侮蔑し騙した外国人に対して反抗報復する若者を主人公とする。この作品でも外国人を「毛唐」と呼んでいる。

同じ使用法だとすると奇妙に感じる。日本人のいう差別語をジャマイカの奴隷に使わせているからだ。紅葉の目線が奴隷に置かれていることが確認できる。しかしその言葉はシーザーの白人主人に対する尊敬と相反する。主人エドワーズは例外としているというのならばかまわない。

紅葉が追加した「毛唐人」「毛唐」を呉構は「二毛子」（16頁）と漢訳した。この呉構漢訳「二毛子」はもっと奇妙だ。日本語の「毛唐」は漢語では「大毛」「毛子」あるいは「洋毛子」「洋鬼子」という。「二毛子」は西洋人（毛子）の手先になった中国人を指して罵る単語だ。もうひとつは、昔、中国とロシア人の混血児をそう呼んだという。紅葉日訳に中国とロシア人の混血児など存在しない。だからそう理解するのは当たらない。「二毛子」は誤植ではないかと初出『東方雑誌』、また後刷りの初集本を見たがそのままだった。

ジャマイカの奴隷が白人を蔑視したのを漢訳して呉構が「毛子」を使用するのであれば納得する。またそう漢訳すべきだった。しかし「二毛子」はもともと西洋人の手先という意味であって西洋人そのものではない。不適切な訳語だ。この誤訳を根拠にして日露戦争と関連づけて論じることは成り立たない。

気になるといえば言語だ。アフリカから連れてこられたシーザーが農園主のイギリス人と英語で会話している。賢いシーザーだから短期間の間に習得したということだろうか。原作者は説明していない。紅葉も書かない。

それにしてもエッジワースの頭の中にはジャマイカの原住民は存在しないらしい。不思議に思わないこともない。

9 結 論——紅葉改変の結果

エッジワースは奴隷制度を擁護する穏健派に属する。彼女が「感謝する黒人」

において提示したのは恩義と友情の対立だ。それを主題に設定した。シーザーはその間で揺れ動き、最後は恩義を選択して友人ヘクターとの関係を断つ。その代償はヘクターからのナイフの一刺しだ。しかし致命傷でなく生き返った。

残忍な農園主ジェフリーズは「感謝する」すなわち「恩義を感じる」黒人は存在しないと信じていた。しかしシーザーという例外があるではないかというのがエッジワースの主張だ。ゆえに物語は次のように締めくくられる。

【原作】 Our readers, we hope, will think that at least one exception may be made, in favour of THE GRATEFUL NEGRO. p.419

私の読者たちが、少なくとも例外がひとつある、とこの本作「感謝する黒人」を支持してくれるように望みます。

この文章は物語冒頭に示された「黒人は劣等種であり、感謝の気持ちを持つことができず *the negroes as an inferior species, incapable of gratitude*」と完全に呼応している。さらに作品名になっていることは言うまでもない。

シーザーだけが「感謝する黒人」の唯一の例外であるとエッジワースは断言する。彼女は奴隷制度を擁護し黒人を差別しているからその唯一例外を特に顕彰した。彼女にしてみれば当たり前のことだ。現在から200年以上も前に、奴隷制度が存続していた時代に書かれた原作だ。これを忘れるべきではない。当時は常識だったかもしれないが現在は違っている。それだけのことだ。現代の読者がそこに違和感を持つのは不思議ではない。むしろその事実を見ようとしないことの方が奇妙だ。

紅葉はこの最後部分を翻訳していない。ゆえに呉禱漢訳にもない。

紅葉はエッジワース原作を直訳はしなかった。ただし原作の基本構造と大筋は守って物語っているのが事実だ。抄訳ではない。いくつかの小規模な省略、加筆、改変を自由に行なっているから翻案ということになる。

くり返す。紅葉日訳では小さい個所であるにしても重大な変更が1ヵ所ある。それを見逃すことはできない。確認しておく。

エッジワース原作ではシーザーが「満足して死にます I die content」といい

「クララと一緒に埋めてくれ Bury me with Clara」と叫んで倒れはしたが死にはしない。それを紅葉は「旦那様、これが御恩返し」とシーザーに叫ばせ死亡させた。紅葉の変更で物語は報恩という部分で原作よりもさらに劇的効果を発揮したといえる。日本の児童たちに向かって報恩を強調するためには主人をかばうシーザーの死が必要だったからだ。しかしそれによって物語に不具合が生じた。

エッジワースの物語ではシーザーは奇跡的に回復した。また片方の残忍な農場主ジェフリーズも殺されずに逃亡するだけだ。シーザーとジェフリーズの両者をもとに生きさせて釣り合いをとった。ところが紅葉はそれを改変してシーザーは死に、一方でジェフリーズは生きのびさせた。それによりエッジワースの物語世界は平衡を失うことになった。

10 まとめ

エッジワース原作と紅葉日訳を比較対照した。承認継承した個所と加筆改変した部分をまとめる。

1 エッジワースはジャマイカの奴隷制度について擁護する穏健派だ。紅葉はそれを容認する。

2 エッジワースは作品登場人物の残忍なジェフリーズに黒人を劣等種だと認識させていた。穏健派エドワーズも同様だ。紅葉はエッジワースの認識を超える天賦人権説を提示してはいる。しかし結局のところエッジワースの考えに反対はしない。

3 エッジワースは作品の主題を恩義と友情のはざままで苦悩する人物に定めた。奴隷制度は背後に押しやった。紅葉はそれを把握している。ゆえに紅葉日訳は奴隷制について多くを省略する。

4 「感謝する」奴隷のシーザーは命の恩人ジェフリーズのために命を捨ててもよいという気持ちを有する。このエッジワースの設定を紅葉も受け入れた。

5 エッジワースのいう「感謝の気持ち」は「恩（恩義）」と同じ意味だ。それを踏まえながら紅葉はエッジワース原作にはない狼の報恩物語を加筆した。恩義に報いる精神を強調するためである。

6 エッジワースはシーザーに友情を捨て恩義のために死んでもしかたがないと覚悟させた。紅葉はそれを継承してさらに彼独自の変更を加えた。シーザーはヘクターに向かって恩人エドワーズ一家の命を助けるために自分を殺せと要求する。エッジワース原作にはそれほど強い発言は存在しない。

7 エッジワース原作では穏和で消極的な女性クララだ。しかし紅葉は書き換えてクララに「私はお前とならば死ぬよ」と言わせた。それにより紅葉はシーザーが死の方向に進むように一層強めた。

8 ヘクターは目の前のシーザーを反射的にナイフで刺した。それを紅葉はヘクターがエドワーズを狙ったことに加筆改変した。シーザーが死ぬのは恩人エドワーズを助けるためだという理由が必要だったからだ。

9 エッジワース原作ではシーザーは生き返る。紅葉はそれを変更して死なせてしまう。そうなるこそ恩義のために命を投げ出すという論理が完結すると紅葉は考えた。

10 シーザーは生き返り残忍なジェフリーズは逃亡する。原作はそれで平衡を保っている。だが紅葉は報恩論理を優先し強調したかった。そのためシーザーが死ぬという変更を行ない、エッジワースの物語世界を破綻させた。

11 奴隷反乱はエドワーズにより鎮圧された。ジャマイカの奴隷制度は存続するとエッジワースは示唆する。紅葉もそれを受け入れて何も説明しない。

12 反乱が鎮圧された後のことだ。白人から奴隷に対してさらに苛酷な虐待があると紅葉は理解していた。ゆえにそう加筆して説明した。ここは紅葉の優れた加筆だ。原作者のエッジワースは知らぬ顔をして素通りした。穏健派らしい無視のしかただといえる。

11 呉禱漢訳について

呉禱漢訳についていえば紅葉日記をほとんど直訳しているといっている。ゆえに上の「まとめ」はすべて呉禱漢訳に当てはまる。

呉禱漢訳の別作品を見れば組版の体裁については一定していない。段落を無視し、会話もカッコを使わないものもある。その時々によって異なっている。本漢

訳においては段落、会話を示すカッコなども紅葉日記をほぼ忠実に反映している。

(初版で紅葉は終わりカッコ(」)を使用しないが呉禱は使う。後の『紅葉全集』本は終わりカッコを使用)。

引用文で注したように小さな誤解、加筆はある*10。しかし物語の大枠は維持されているのが事実だ。

エッジワース原作と紅葉日記の共通点と異同点をさぐった。さらにそれを呉禱がどのように漢訳したか、その実態を検証した。その結果は本稿に示したとおりだ。漢訳として上質の部類に入る。

ひとこと。

呉禱は紅葉日記『俠黒兎』を漢訳したが自分の意見見解を加筆挿入していない。加筆を実施した漢訳『賣国奴』とは異なる。本漢訳において呉禱の存在はいわば透明だ。別の表現をすれば日本の伝統芸でいう「黒衣(くろご)」である。作業をしているが約束事として観客(読者)からは見えない。清末民初では原作、底本に関係なく勝手に書きかえる訳者が存在する。それらに比べれば黒衣役に徹した呉禱の本漢訳の質は高いと評価している。

漢語論文を読んだ。その中の1篇はエッジワース原作を見ている。そこはとてもよい。ところが原作に書かれていることをそのまま読み取っていない。

漢語論文の論者は原作が「種族平等」と「人道主義精神」を賛美していると誤読する。エッジワース原作は奴隷制度を擁護しているのだからそれはない。前出の土佐は誤解して「人種差別の不当を説き人道主義を唱えるところに原作の主眼があった」(9頁/修正稿67頁)と書いた。それを引用したのではないか。

漢語論文の論者は紅葉日記について「種族矛盾」を強化し「任侠道徳」を宣伝し主人のために殉死する「武士道精神」を賛美しているとまとめる。日本人が改作すれば黒人の死去も「武士道精神」になるということだろうか。突然に「武士道」が出てきていぶかる。こちらについても先例があった。同じく土佐が「壮烈な武士的道義の強調と美化」(9頁/修正稿66頁)と書いた。それと似ている。

紅葉日記において白人の命乞いをするシーザーをヘクターが罵る場面がある。「恥しらず!業曝し!奴等(うぬ)、黒人の面汚し!腰抜野郎の大癡漢(おほだわけ)!」(28頁)。「腰抜野郎の大癡漢!」を呉禱は「二毛子的漢奸……」(17

頁)と漢訳した。そこをとらえて漢語論文の論者は「漢奸(売国奴)」批判をしていると解釈した。そこから呉構漢訳が「黒人奴隷の境遇に同情し復讐の怒りを燃やして共に外敵の侵入を防ぐ」考えを表現していると結論する。

既述のとおり日本語の「毛唐」を「二毛子(西洋人の手先)」にしたのは呉構の誤訳だ。それを無視して後ろの「漢奸(売国奴)」のみを取りだすのは不適切である。ひとつの単語だけを根拠にして漢訳全体をまとめている。拡大解釈である。売国奴批判というのは論者の勝手な認識にすぎない。

紅葉日訳を漢訳したのだから主題も同じく恩義と友情である。その両者に別々の主題を見るのは論者の読み間違いだ。ここにこそ底本とした日訳を正確に漢訳したかどうかを冷静に検討する姿勢が必要とされる。独自の立論を提出しようと急ぐあまり、あってほしい虚像を勝手に作り上げているといわざるをえない。残念なことだった。

別稿「天寶宮人「(改良戯劇)義俠記」について——呉構『俠黒奴』との違い」に続く。

名詞対照表

MARIA EDGEWORTH	紅葉	呉構	備考
Edwards エドワーズ	えどうあ、ど	愛徳華	穩健派農園主←ブライアン・エドワーズから
Abraham Bayley ベイリー	べいれい	貝礼	穩健派監督
Cæsar シーザー	志いざあ	西査	心賢い奴隷、ヘクターの親友、コロマンティン族
Coromantyn コロマンティン	ころまんちん	克洛曼丁17	コロマンティン族
Clara クララ	くらゝ	クララ	シーザーの恋人、妻 エボエ族
Eboe エボエ	×	×	エボエ(イボ)族
Jefferies ジェフリーズ	じふえりい	郝菲里	残忍な農園主
Durant デュラント	ちゆらんと	仇狼特	残忍な監督
Hector ヘクター	へくとる	海克道	奴隷反乱の頭領、シーザーの親友、コロマンティン族
Esther エスター	えすさあ	威斯薩	魔法(毒)使いの老婆、白人退治の元帥
脚注 Obeah オビア	おびあ	悪批巫	魔術師
脚注 Obi オビ	おびい	魔法、法術	魔法

Jamaica ジャマイカ	じやめいか	哲美加	カリブ海のジャマイカ
×	ぶりゆ山 (ざん) 71	布利由 42	Blue Mountain ジャマイカにある最高峰の山

【参考文献】注に示した論文は簡略化して示す。ジャマイカ関係は注9を参照のこと。

中村忠行「徳富蘆花と現代中国文学（2）」1950（注に表示）

中村忠行「清末の文壇と明治の少年文学——資料を中心として——2」1964（注に表示）

土佐 亨「尾崎紅葉「俠黒児」とエッジワース「恩がえしをした黒人」」1971.3.1。村松定孝ほか編『日本児童文学研究』1974（注に表示）

上村真代「マライア・エッジワース“*The Grateful Negro*”：尾崎紅葉『俠黒児』の原作として」『比較文学』創刊号 文化書房博文社1995.9.2、237-257頁

斉藤 愛「異貌の自画像——尾崎紅葉『俠黒児』と Maria Edgeworth, ‘*The Grateful Negro*’」日本比較文学会編『比較文学』第39巻 1997.3.31 電字版 「死をもって完成される自己犠牲の精神である義侠イデオロギー」

大嶋浩編著「日本におけるマライア・エッジワース書誌」2001/2020（注に表示）

李 敏永「尾崎紅葉『俠黒奴』試論——*The Grateful Negro* との比較考察を通して」『藝文研究』第90号 慶應義塾大學文学会2006.6.1。112頁

酒井美紀『尾崎紅葉と翻案——その方法から読み解く「近代」の具現と限界』日本・花書院2010.3.10

趙 霞「二十世紀初留学生訳者特点剖析——以呉構《小説月報》前期（1910-1920）翻訳作品為例」『中国近代文学学会小説分年会暨中国近代小説學術研討會論文集』開封・河南大学文学院2013.9

崔 琦「晚清白話翻譯文体与文化身份的建構——以呉構漢訳《俠黒奴》為中心」『中国現代文学研究叢刊』2014年第3期（総第176期）2014.3.15

文 娟「試論呉構在中国近代小説翻譯史中的地位——以商務印書館所刊單行本為研究視角」『明清小説研究』2018年第4期（総第130期）2018.10.15

荒井由美「呉構についての文娟論文」『清末小説から』第133号 2019.4.1

山田有策ほか編『尾崎紅葉事典』2020（注に表示）

【注】

- 1) 中村忠行「徳富蘆花と現代中国文学（2）」『天理大学学報』第2巻第1・2号
1950.11.26
- 2) 中村忠行「清末の文壇と明治の少年文学——資料を中心として——2」『山辺道』第
10号 1964.1.25
- 3) 山田有策+木谷喜美枝+宇佐美毅+市川紘美+大屋幸世編『尾崎紅葉事典』翰林書房
2020.10.28
- 4) 土佐亨「尾崎紅葉「俠黒児」とエッジワース「恩がえしをした黒人」」解釈学会編
『解釈』第17巻第3号（総第191号）解釈学会 1971.3.1。初出5頁には言及なし。のち
の修正稿は村松定孝+上笙一郎編『日本児童文学研究』三弥井書店1974.10.1所収の61
頁。
- 5) 大嶋浩編著「日本におけるマライア・エッジワース文献書誌」『兵庫教育大学研究紀
要』第21巻第2分冊 2001.2.28 電字版。42頁。単行本は大阪教育図書2020.3.20。34
頁
- 6) 『集英社 世界文学大事典 1』1996.10.25
- 7) 1767年とするのは土佐亨のほかに次の文献がある。

THE HON. EMILY LAWLESS “MARIA EDGEWORTH” LONDON : MACMILLAN
& CO., 1904. p.3. “She was born on the first day of the year 1767, ……（後略）”。

また『岩波 西洋人名事典 増補版』（岩波書店1956.10.16／1981.12.10増補版第1
刷）は「Maria 1767.1.1-1849.5.22」255頁。

『英米文学辞典 第三版』（研究社出版株式会社1985.2.28）は「Edgeworth, Maria
(1767-1849)」373頁。

『児童文学事典』（東京書籍株式会社1988.4.8）は「エッジワース マライア
Maria Edgeworth 一七六七～一八四九 一九世紀のイギリスで最もよく読まれた児童
文学作家の一人」92頁。三宅興子執筆

『岩波=ケンブリッジ 世界人名辞典』（岩波書店1997.11.21）は「エッジワース,
マライア Edgeworth, Maria (アイルランド 1767-1849) 159頁

ハンフリー・カーペンター+マリ・プリチャード作、神宮輝夫監訳『オックスフォー
ド世界児童文学百科』（1999.2.10／6.10三刷）は「エッジワース, マライア EDGEWORTH,
MARIA (1767-1849)」102頁。西村醇子訳

- 8) 『大衆物語集 POPULAR TALES』の版本は次を見た。挿絵のある版本には★印をつ

ける。1804第3巻（193-240頁）、1805、1807、1813、1814、1823、1832、1853、1856（LONDON: SIMPKIN, MARSHALL, AND CO. ほか。399-419頁。本稿で使用
する）、1862、1865★、1866★、1867★、1875、1887、1895★など。初版には挿絵
がない。挿絵を掲げるものは後刷りだ。特に言えば1895★は紅葉1893の挿絵と比較す
ることはできない。刊年が前後するからだ。

9) 以下を参照した。

ラス・カサス著、染田秀藤訳『インディアスの破壊についての簡潔な報告』岩波文庫
1976.6.25

エリック・ウイリアムズ著、中山毅訳『資本主義と奴隷制』ちくま学芸文庫2020.7.10
西出敬一「ジャマイカ・マルーンの遺産とアイデンティティ」徳島大学総合科学部
『人間社会文化研究』第17巻 2009 電字版

川分圭子「奴隷貿易廃止期のイギリス議会と西インド利害関係者」京都府立大学学術
報告『人文』第63号2011.12 電字版

10) 誤解と加筆の例を少しだけ示す。

誤解1：「志いざあは項を丁と拵ち」35頁→「西查故意将脖子望裏一縮。變成丁字形
21頁。副詞の「丁と（ばしと）」が理解できなかった。同じく「婢の額を丁と踢れば
（70頁）とあるが、こちらは「蹙踢一下」（41頁）とした。

誤解2：シーザーはヘクターの仲間になると魔術師に嘘をつく。「今にもへくとるの
見えなば、志いざあが過を悔ひて、同心したるよしを告げ給へ」（84頁）。すなわち魔
術師からヘクターに告げると言い置いたにすぎない。→「西查立誓受戒之後。随回身到
海克道屋裏。告訴他自己悔了過。做他們的同心。海克道更自歡喜」（49-50頁）と実際
に会って告げたと誤解した。

加筆1：「就是華盛頓再生。戈蘭德轉世。对俺來說什麼」9頁。ジェフリーズが自分
の考えを変えないという文脈の中だ。ワシントンとグラントの名前を出した。呉禱は人
名を加筆して強調するつもりだった。グラント（Ulysses Simpson Grant、1822-1885）
は南北戦争時の北軍の将軍、アメリカ合衆国大統領だ。しかし彼はエッジワースの該作
が書かれた時には生まれていない。名前が出てくるはずがないのだ。呉禱はエッジワー
ス原作を知らないからしかたがない。

加筆2：魔術師オピアを説明して「如中国張天師」（22頁）と加筆する。張道陵は奇
術で疫病を退治したと伝わる。また別の個所で「梁山伯（与祝英台）」（41頁）もある。
中国の故事を引用するのはゴーリキー作、長谷川二葉亭訳、呉禱漢訳「憂患余生」

(1907) で鍾馗を出すのと同じ。読者の理解を助けるための注記だ。翻訳の許容範囲内だから非難するのは当たらない。

天宮人「(改良戯劇)義侠記」について

——吳禱『侠黒奴』との違い

『清末小説から』第149号(2023.4.1)に掲載。沢本香子名を使用。エッジワース原作から紅葉日訳を経て吳禱漢訳になる。さらに吳禱漢訳にもとづいて改編されたのが改良戯劇「義侠記」だ。改編者の天宮人は吳禱漢訳の主題を遵守する。ただし小さな改変を加え第2主題ともいうべき反乱の行方を設定した。原作、日訳では蜂起は失敗する。しかし天宮人は成功したことに変更した。清朝末期の時代的雰囲気に影響された側面があるだろう。

エッジワース MARIA EDGEWORTH 作「THE GRATEFUL NEGRO 感謝する黒人」(1804)が原作だ。それを尾崎紅葉が日訳して『侠黒児』(1893)である。そこから吳禱漢訳の『侠黒奴』(1906)ができた。さらにこの吳禱漢訳を底本として戯曲に改編したものが天宮人編串「(改良戯劇)義侠記」(1907-1908)という経過だ。

簡単に言えば以上の流れになる(別稿「吳禱漢訳『侠黒奴』——尾崎紅葉訳『侠黒児』」参照)。

エッジワース原作は恩義と友情の対立を主題とする。奴隷制度はその主題を際立たせるために背後に置かれるにすぎない。紅葉日訳も、それを忠実に漢訳した吳禱もその主題を継承している。戯劇化した「義侠記」も基本は同じであることを指摘しておく。

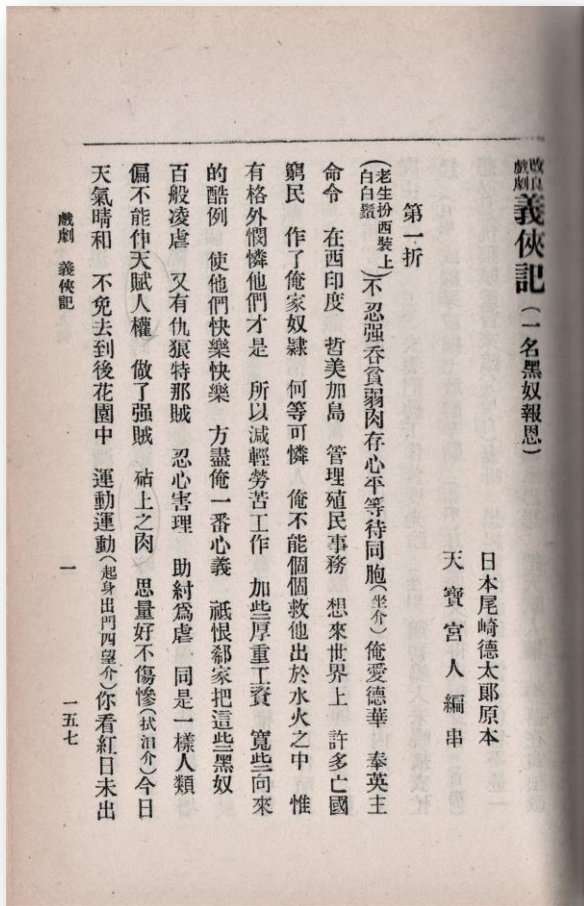
ただし細部は異なる。翻訳者、あるいは改編者による部分的な改変がある。それによって各作品における登場人物の何人かは命運が違ってしまった。つまり主

題は共有するがそれぞれの物語の結末が別物になっている。ここは注目していい。

『月月小説』初出と単行本

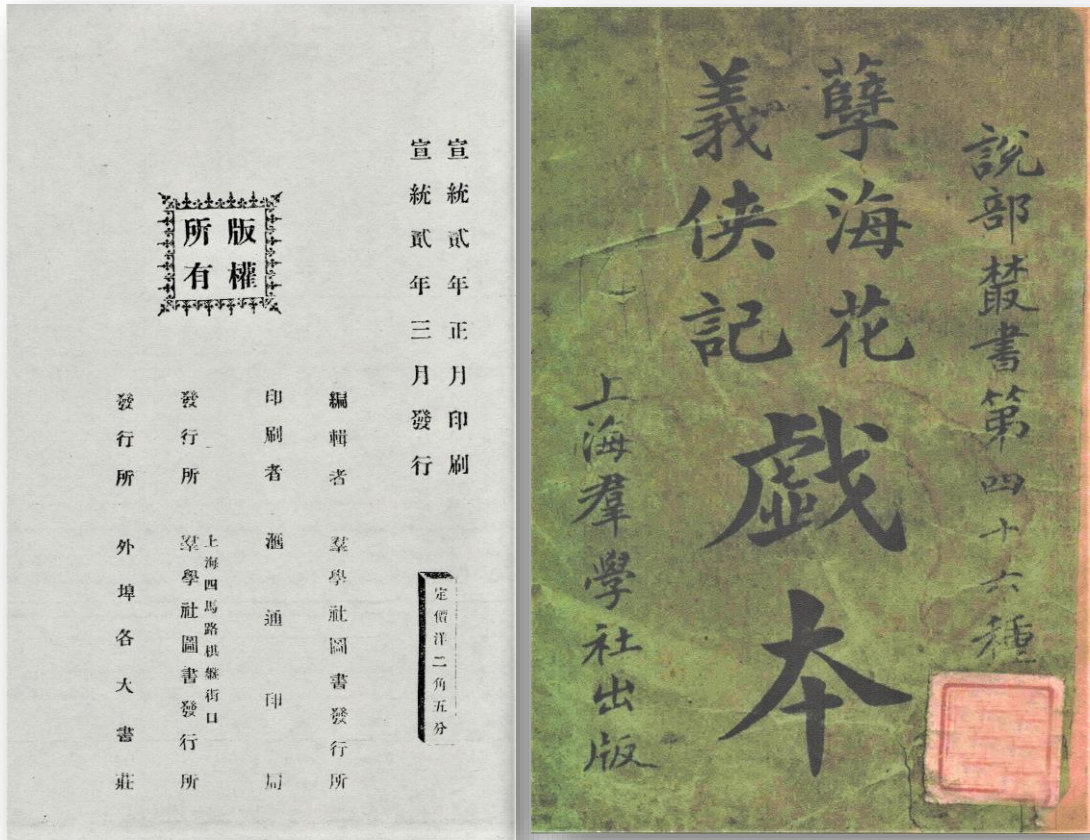
本稿で使用する版本は次のとおり。

(日) 尾崎徳太郎原本、天寶宮人編串「(改良戯劇) 義俠記 (一名黒奴報恩)」
8折 (『月月小説』第1年第9号、第2年第1-2期 (第13-14号) 光緒三十三年九月初一日
(1907.10.7)、戊申 (1908) 人日 (正月初七日) - 二月。第14号の角書は「忠勇戯劇」)



『月月小説』掲載

のちに単行本になった。『孽海花義俠記戯本』(編輯者: 群学社図書發行所、發行所: 上海・群学社図書發行所、宣統貳 (1910) 年三月發行、「説部叢書」第四十六種) だ。



影印本

柱に「月月小説」と表示する。組版と頁数を見れば初出『月月小説』からそのまま抜き刷り合本にしている。群学社は『月月小説』から抽印した単行本をいくつか作成した。そのうちの1種だ。

天寶宮人は詳細不明。樽目録旧版には「天寶宮人(臧崙樵)」と記述する。調べたが臧崙樵とする根拠がない。誤記だと訂正する必要がある(第14版2022で訂正済み)。

呉禱漢訳が底本である根拠

「義俠記」本文には「日本尾崎徳太郎原本／天寶宮人編串」とのみ表示する。どこにも呉禱漢訳とは書かれていない。

尾崎紅葉日訳から天寶宮人が直接戯曲化したように思う人もいるかもしれない。

しかしその使われる単語を見れば呉禱漢訳が底本になっているのは明らかだ。

たとえば人物名は呉禱漢訳を使用している（カッコ内は紅葉日訳。改良戯劇の役柄を添える）。

愛徳華（えどうあゝど。老生）、仇狼特（ぢゆらんと。浄）、西査（志いざあ。小生）、克拉拉（くらゝ。正旦）、海克道（へくとる。浄）、威斯薩（えすさあ。老旦）という具合だ。ただし[●]鄰菲里（じふえりい。丑）は[●]鄰斐里と1字をかえている。あるいは同一文章がある。参考までに紅葉日訳も示す。

【紅葉】天賦の権を伸ぶるによし無くして、強者の食となりぬる。3頁

【呉禱】也是一般人類。却偏不能伸他天賦人權。做了強人的釜中魚。砧上肉。2頁

同じ人間であるにもかかわらず、ただどうにも天賦の人権を伸ばすことができずに強盗の餌食（釜の中の魚、まな板の上の肉）になっている。

【義俠記】同是一様人類 偏不能伸天賦人權 做了強賊 砧上之肉 1頁

同じ人間であるにもかかわらず、ただどうにも天賦の人権を伸ばすことができずに強盗の餌食（まな板の上の肉）になっている。

紅葉日訳の「天賦の権」はエッジワース原作にはない。紅葉による優れた加筆だ。それにもとづいて呉禱が「天賦人權」に漢訳した。それをそのまま改良戯劇でも使用している。

では天寶宮人が使用したのは呉禱漢訳の雑誌初出か後の単行本か。尾崎の名前が手がかりになる。

『東方雑誌』初出は尾崎紅葉と記す。後の商務版「説部叢書」本では尾崎徳太郎に変更した。天寶宮人「義俠記」が徳太郎だからそれを見れば単行本の方を底本としたことがわかる。

本稿では天寶宮人が独自にほどこした改変箇所を中心に見ていく。独特のものがある。

借用また借用

呉禱漢訳をもとにして戯曲に書き換える。つまり底本を借用しての作業である。また、新劇にしたわけではない。伝統劇の粹組みも借用した。借用の2乗になる。

恩義と友情を主題とするのは動かない。戯劇は言うまでもなく実際に出演者が登場して演技する。役者のために台詞と歌詞に書き換える必要がある。天寶宮人はその際にいくつかの部分的な変更を加えた。その目的は戯劇全体をひとつのある結末に導くためだ。いわば第2主題である。あらかじめ言っておくと反乱の結末だ。

「義俠記」は「改良戯劇」と称する。伝統劇から新劇への過渡期に書かれた。なにしろ舞台はジャマイカ島だ。呉禱漢訳『俠黒奴』の読者ならば主要人物のシーザー、クララ、ヘクター、エスターらが黒人であることを知っている。登場するのはイギリス人と奴隷の全員が外国人のみ。戯劇の内容はまったく新しいものにならざるをえない。

それぞれの役柄と説明を原文を引いてそこから抜き出す。

愛徳華 (エドワーズ) 老生、洋装で白いヒゲ (老生扮西装上白白鬚)

西査 (シーザー)、クララ (クララ) 小生と正旦。洋装 (小生正旦扮西裝挽手同上生唱)

仇狼特 (デュラント) 浄、桃色の顔に洋装で短いヒゲ (浄粉面西妝[装]上短鬚)

郝斐里 (ジェフリーズ) 丑 (丑白)

海克道 (ヘクター) 浄、黒い顔に洋装で長いヒゲ (浄黒面西妝[装]上大鬚)

威斯薩 (エスター) 老旦、洋装で手に黄色い旗を持つ (老旦西妝[装]手執黄旂上)

紅葉日訳挿絵の奴隷は男女ともに半裸だ。しかし清朝末期の舞台でそのまま演じるわけにはいかない (紅葉日訳を見ている前提で言う)。全員が洋装という指定である。シーザーとクララについては黒人だという記述がない。生と旦を割り振ったが顔を黒く化粧させるのか。ヘクターが黒い顔をしているが浄だからそこは自然だ。同じ黒顔だとして、生旦と浄は化粧で区別するのか。そこはわからない。

作中では「黒人奴隷 (黒奴)」という単語を挿入している。具体的にどのような顔を作っているのか、上の説明では不足する。かぶり物についても不明。劇中

でシーザーは帽子を取るしぐさをする。英文原作の挿絵本、紅葉日訳本でもシーザーが帽子をかぶっている図はない。一方でイギリス人は帽子をかぶる。「義俠記」だけが例外で違和感が残る。また洋装で伝統劇の付けヒゲだとすれば合わないと思う。登場人物の扮装全体が不鮮明である。

ただ「改良戯劇」と称するのだから上演者に裁量の自由があるだろう。いかような変更にも適応できる。そうなると実際に上演されるとすればどんな状況になるのか予想がつかない。実際に上演されたどうかは不明にしてもだ。

伝統劇の枠組みを使用していると書いたが、見れば役柄を振り当てただけ。

天宮宮人は呉禱漢訳が恩義と友情を主題にしていると正確に理解している。人種を超越している。だから奴隷制度については説明しない。イギリスの三角奴隷貿易についても口を閉じている。「黒奴」「黒種」「白人」を使い両者の対立は残している。そこは呉禱漢訳(すなわち紅葉日訳)の大筋を基本的に継続する。ただし部分的にだが重要な変更をいくつか加えた。冒頭からそれが出現している。

亡国貧民という設定

最初にイギリス人エドワーズが登場して全体の状況を説明する場面だ。

【義俠記】俺愛徳華 奉英主命令 在西印度 哲美加島 管理殖民事務
想来世界上 許多亡国窮民 作了俺家奴隸 何等可憐 俺不能個個救他出
於水火之中 惟有格外憫憐他們才是 所以減輕勞苦工作 加些厚重工資
寬些向來的酷例 使他們快樂快樂 方盡俺一番心義 祇恨鄰家把這些黑奴
百般凌虐 又有仇狼特那賊 忍心害理 助紂為虐 同是一樣人類 偏不能
伸天賦人權 做了強賊 砧上之肉 思量好不傷慘 1頁

私エドワーズはイギリスの主人からの命令で西インドのジャマイカ島において植民事務を管理している。世界の多くの亡国貧民が私の奴隷になって、なんと痛ましいことだと思う。私は個々を災難から救い出すことはできない。ただ彼らにことのほか同情するのである。だから労苦を軽減し、いくらか手厚い報酬を与えて、今までの残忍な例をいくらか緩め、彼らを少しばかり楽しくさせたい。それで私の気持ちを尽くすだけだ。ジェフリ

ーズが黒人奴隷をあれやこれやと虐待するのを憎む。またデュラントという悪党が大層むごく、主人を助けて悪事を行なっている。(奴隷たちは)同じ人間であるにもかかわらず、ただどうにも天賦の人権を伸ばすことができずに強盗の餌食(まな板の上の肉)になっている。

農園の管理者というのが原作では農園主だ。ここで穏健派エドワーズの考えを紹介している。「私は個々を災難から救い出すことはできない」と述べて奴隷制度をなくする意志はもとからないことを明らかにする。彼ら奴隷の負担を軽減する努力をしている云々。呉禱漢訳を踏まえてそのままだ。

ただし異なる箇所がある。奴隷となっているのは滅亡した国の貧民(亡国窮民)だと説明する。アフリカから連れてこられた人々だとは記述しない。亡国はシーザー、クララ、ヘクターの台詞にも見える。

次はシーザーとクララがふたりして掛け合って歌う場面だ。

【シーザー】恨当年吾祖国政教不振 2頁

俺が悔やむのは、以前わが祖国は政治宗教が不振だったことだ。

【クララ】主権落民心散外侮欺凌

主権はなくなり民心はばらばら、外国からは侮られ虐げられた。

【シーザー】只可惜錦江山送人管領

残念なことに麗しい山河は人に管理される場所となった。

【クララ】把一个主人翁反作殖民

主人公を逆に移住民にってしまった。

シーザーが台詞に切り替えてさらに語り継ぐ。

【シーザー】妻呀 想起我們祖国 当初何曾不是一個強国 只恨我們国民 没有国家思想 把天賦人権 旁落在貪狼政府 一座錦繡江山 断送在他們手裏 弄的国破家亡 到了今日 与人家為奴作隸 可慘呀 可慘 2-3頁

妻よ。われらが祖国を思えばかつては強国ではなかったか。ただわれら

国民に国家思想がなく天賦の人権を無慈悲強欲な政府へ向けて投げ捨ててしまった。麗しい山河を彼らに与えて、国は破れ一家は離散するという結果だ。今では人の奴隷となっている。これはあまりにも酷くむごたらしい。

ここにはどこにもアフリカと関係する箇所がない。天寶宮人はふたりが奴隷になった原因を国が滅んだせいに変更した。

シーザーの親友ヘクターの台詞にもそれが出てくる。

【ヘクター】俺 海克道 可嘆祖国滅亡 群生顛沛 流落哲美加島 作人
奴隷 8頁

俺ヘクターは嘆くのだ。祖国が滅亡して皆は窮してジャマイカ島に流れ着き、他人の奴隷になってしまった。

天寶宮人は戯曲の根底に「祖国滅亡」「亡国」を設定した。

ヘクターがシーザーに向かって蜂起に参加するように要請する場面にも出現する。「蜂起して悪人を殺して報復するのだ。お前が心をひとつにして共に国の恥をそそぐように願っている(起義殺賊報仇 還望賢弟努力同心共雪国恥)」(12頁)。ここにも祖国を出している。残忍なジェフリーズの台詞にも「亡国之民」(22頁)とある。また蜂起する人々を指して「亡命党」(31頁)とも呼ぶ。

祖国が滅亡して他人の奴隷になる。勝者と敗者の関係だと設定している。必ずしも黒人と白人の人種対決でなくてもよい。その中身はどのようにも読み替えることが可能である。異民族でも複数国家でもかまわない。民族対立と考えれば清朝末期の実態に合わせて主人が満洲族で奴隷は漢族という関係も成立しうる。「改良戯劇」だから解釈の余地があるという意味だ。

シーザー夫妻は感謝する

話を物語の最初にもどす。

残忍なデュラントは奴隷のシーザーとクララを他所へ売ろうとしていた。通りかかった農園主で穏健派のエドワーズがふたりを5千フラン(仏郎。7頁)を支払

って買い取った。当時はイギリスの植民地だから通貨はポンドだろう。そうしなかった理由は不明。呉構漢訳に具体的な金額はない。天寶宮人の加筆だ。シーザー夫妻はエドワーズに救われたことを感謝し恩義を深く感じた。「感謝する黒人 THE GRATEFUL NEGRO」はエッジワース原作の題名になっている。

シーザーの親友ヘクターは残忍なジェフリーズ、デュラントからの虐待に耐え切れず同胞を集めて反乱蜂起することに決める。彼は魔術師エステーの指導を受けて同胞をまとめた。白人を皆殺しにする計画だ。

シーザーはそれを知って嬉しく感じると同時に悲しむ。白人を駆逐するのは天理だ。しかし自分たち夫婦を救い出してくれた恩人エドワーズに対しては恩に報いると定めている。また仲間に入らないとヘクターとの友情を失うことになる。どちらを取ればいいのか。

シーザーはヘクターを説得しようとした。恩人のエドワーズだけは助けてほしいと懇願する。ヘクターはシーザーを殺したかった。そうしなかったのはシーザーが義のために殺されたとかえって名誉を得てしまうからだ(15頁)。ヘクターは別の方法を考えついた。魔術師エステーに依頼してクララに魔法をかけてもらう。クララからシーザーに反乱集団に入るように言わせた。

シーザーは以前から決心している。恩義のためには死ぬ覚悟だ。友情のためには身をささげる。シーザーは恩義と友情の板挟みになり大きく深く苦悩する。ここは呉構漢訳(すなわち紅葉日訳)を遵守する。

いくつかの改変——変化するクララなど

天寶宮人が細かく変更した個所を見る。

呉構漢訳ではシーザー(コロマンティン族)は妻のクララに死んでくれるかと尋ねた。クララは死ぬと答えた(シーザー「死んでくれるか。(「情願死嗎」)。クララ「立派に死ぬよ。(「死了強得多」))。エッジワース原作ではクララはエボエ族でもとから心優しく内気な人物として作られている。「立派に死ぬよ」などと答えるはずがない。それを紅葉が部族の違いを無視して彼女を改変した。呉構はそのままを漢訳している。

改良戯劇ではさらに書き換えた。クララの方から死ぬと積極的に言い出す。

【クララ】 豈可忘了大恩 17頁

どうして大恩を忘れることができますよ。

【シーザー】 是呀

そうだ。

【クララ】 情願一死 報答恩人

死にましよう。恩返しをしましよう。

【シーザー】 賢妻怎講

賢妻よ、何を言う。

【クララ】 情願一死報答恩人

死んで恩返しをするのです。

【シーザー】 克拉拉君 不愧女中豪傑 不愧俺西查之妻 俺夫妻立定方針
捨身救主 17-18頁

クララよ。さすがに女の中の豪傑だ。さすがにシーザーの妻だ。俺ら夫婦は考えを決めて主を救うために身を捨てよう。

呉禱漢訳よりもさらに強い妻になった。捨て身のクララという天宝宮人による変更は終幕の伏線として機能する。エッジワース原作はもとより紅葉日訳（呉禱漢訳）にも存在しない意外な結末をここで予告している。

そこにいたる直前に呉禱漢訳にはない場面を増設する。

反乱集団が蜂起の日時を確認したあとのことだ。黒人奴隸男女10名が酒瓶を持って登場して歌う。夜時間を示す一更一点から五更五点を使用した数え歌である。冒頭のみ示す。

【義俠記】 一更一点月東升 好不光明 呶呀呀啾呶 好不光明 風来吹滿
一天雲 遮住清明 呶呀呀啾呶 最惨是国民 第7折。33頁

ひとつとせ 月が東に昇り なんと明るい イヤヤトイ なんと明るい
風が満天の雲を吹き寄せ 明るさを遮って イヤヤトイ 最も憐れなのは
国民だ

同様に二更二点は国が亡びた。三更三点は英雄が毒虫を殺しつくすぞ。四更四点は武器を準備し終わって砲火は一斉に鳴りわたるぞ。五更五点は戦いによって敵を殺しつくして黒人に栄光あれ、である。蜂起を直前にひかえて気炎をあげその成功を祈願する目的の合唱だ。革命歌そのものにはしか見えない。

もうひとつの加筆はジェフリーズ夫妻に男女の子供があるとしたことだ。その子供たちをロンドンに学ばせに行かせるというのも天寶宮人の改変加筆である(34頁)。ジェフリーズ一家の平穏さと未来への希望を強調する。一家は歌声を遠くに聞いて黒人たちが月明りに感動して歌っていると考えた。まさか蜂起の合唱だとは思ひもしない。反乱が起きる直前の静けさというわけだ。戯劇らしい緩急をつけてそのまま最後の山場につなげる。

結 末

天寶宮人はヘクターらの反乱集団とデュラントらが闘う場面を追加した(第8折)。役者多数が登場して武闘をくりひろげる。観客が喜ぶように上演時の効果をねらった。

デュラントは捉えられて殺される。残忍なジェフリーズ夫妻は逃亡した。ここは原作どおり。

シーザーはエドワーズ一家を連れてヘクターと対決する。恩人を救って恩返しするのか。ヘクターとの友情を大事にするのか。二者択一を突きつける。天寶宮人はその最高潮へと導くように書き直した。

白人は敵だ、殺さねばならぬとヘクターは主張する。シーザーは恩人を裏切ることは畜生道に墮ちることだと反論する(40頁)。

【シーザー】 唉 不救主人 是為不忠 違背友道 是為不義 這不忠不義之人 俺西查寧死不為 唉 事到其間 還有什麼再說 拚將這一條性命 答報主公 一腔熱血 洒向同胞罷了 40頁

ああ、主人を救わなければ不忠になる。友情に背けば不義になる。俺シーザーはそのような不忠不義の人間には死んでもならないぞ。ああ、こう

なったからには何をいうことがあろうか。このひとつの命を投げ捨て主人に報いよう。いっぱい熱血を同胞に向けてまき散らしてやる。

ト書きに「用刀自刎(ナイフで自分の首を刎ねる)」(40頁)とある。また周囲の者が台詞で「西査自刎(シーザーが自分の首を刎ねた)」という。

「不忠不義の人間には死んでもならない」とは恩義と友情を両立させるという意味だ。それを実現するために全員の目前で自刎してしまう。エッジワース原作、紅葉日訳(呉構漢訳)にも存在しない結末となった。

シーザーは自殺をした。エドワーズ一家はシーザーの犠牲によって命拾いしロンドン行きの船に乗った(41頁)。

エッジワース原作ではシーザーはヘクターに刺されはするが死なずに回復した。紅葉日訳ではそれを変更してそのまま死なせてしまう。それを戯劇の天寶宮人は自殺へとさらに書き換えた。いかにも改編者天寶宮人の独創のように見えるがそうではない。この発想は呉構漢訳がすでに提供していた。改編者はそれを利用したにすぎない。

呉構漢訳の次の個所にある。ヘクターに答えたシーザーの発言である(波下線は筆者)。

【呉構】海克道啊。那没情没理的事。須幹不得。還不如殺殺我。前去幫助我那家主人。你若不允。我也能自己取下我的首級来。19頁

ヘクトルよ、情理のないことはどうしてもできないというなら俺を殺してくれ。そうして俺のあの主人一家を助けてくれ。それがだめというなら俺は自分の首を取ることもできるんだ。

もとなる紅葉日訳は「志いざあの首を取つてくんねえ」である。「さあ、殺せ」と催促したのだ。呉構は日本語の「首」「取」を手がかりにして波下線のように誤訳した。天寶宮人はその誤訳にもとづき前後の辻褄を合わせて実現させたのだ。

一方のクララである。天寶宮人によってクララは積極性を持たせられ捨て身に

なっていた。その伏線が最後に回収される。

【クララ】為報恩奴従夫假誓盟心 今日裏幸保全恩公生命 縦死在九泉下
瞑目甘心 叩頭起望海水將跳去 41頁

恩に報いるために私は夫と誓って約束したのです。本日は幸いに恩人の命を守りました。たとえ死んでもあの世で安らかに満足します。叩頭してから海に飛び込みましょう。

それを目の当たりにしたエドワーズ夫妻が泣く。

【エドワーズ】西查報恩方自刎 41頁

シーザーは恩に報じて自分の首を刎ねたところだ。

【エドワーズ妻】克拉拉殉義又捐軀

クララも義に殉じて身体をささげました。

恩義と友情に引き裂かれたシーザーは自殺した。受動と積極の違いはあるにしても結果として死亡したことは紅葉日記を踏まえる。ただし改良戯劇では意外な変更が加えられた。原作でも紅葉日記（呉構漢訳）でもクララは生きている。ところがこちらは天寶宮人によって入水自殺させられてしまった。

まとめ

主要登場人物についてその生死を一覧表にする。a エッジワース原作、b 紅葉日記（呉構漢訳）および c 改良戯劇の順である。記号の意味は次のとおり。

○生存、△逃亡、×死去、？不明。

人物と物語に分けてまとめる。

	a 原作	b 紅葉・呉構	c 改良戯劇
1 エドワーズ	○	○	△
2 シーザー	○	×	×自刎

3 クララ	○	○	×入水自殺
4 ヘクター	△?	△?	○
5 ジェフリーズ	△	△	△
6 デュラント	×	×	×

原作で 2 シーザーはヘクターに刺されたが蘇生した (○)。紅葉 (呉禱) はそれを恩人エドワーズをかばって死んだことに改変した (×)。改良戯劇ではさらに変更して自殺させてしまった (×自刎)。

3 クララは原作と紅葉 (呉禱) では生き残っている (○)。改良戯劇では自殺させてしまった (×入水自殺)。

4 ヘクターは原作と紅葉 (呉禱) では言及がない。たぶん逃亡したのだろう (△?)。しかし改良戯劇では明らかに勝利者である (○)。

変わらないのは以下の 2 名だ。5 ジェフリーズはイギリスへ逃亡した (△)。

6 デュラントは殺害された (×)。

原作と紅葉 (呉禱) では 1 エドワーズは反乱集団を鎮圧する。ジャマイカ島はもとの奴隷農園が存続することを意味している。ところが改良戯劇ではエドワーズ一家もイギリスへ逃亡させてしまう (△)。奴隷制度の消滅を暗示する。

abc の 3 者とも恩義と友情を主題にしていることは共通する。しかし登場人物の生死結末が以上のように 3 様だ。それにより結末が大きく異なった。

物語の結末を見ればそれぞれの変更点が明確になる。

a エッジワース原作ではシーザーもエドワーズも生きた。反乱は鎮圧されて平常を取り戻した。ヘクターらの蜂起は挫折する。逃亡奴隷となったと推測される。

b 紅葉 (呉禱) ではシーザーが殺されて原作の世界が崩壊した。しかしここでもヘクターの反乱は失敗している。

c 改良戯劇では残忍な農園主ジェフリーズばかりでなく穏健派の農園主ジェフリーズまでもイギリスへ逃亡した。主要人物のうち生き残ってジャマイカ島にいるのは反乱主ヘクターと同胞たちだけだ。つまり黒人奴隷の反乱が成功した。ここがエッジワース原作および紅葉日訳 (呉禱漢訳) とは決定的に異なる。

視点の移動

恩義と友情が主題であることは違いない。しかし改良戯劇ではもうひとつの主題が設定されている。反乱の成就だ。原作、紅葉日訳、底本の呉禱漢訳にはもとから存在しない。

視点をヘクターに移動すれば天宝宮人の意図が明白になる。

ヘクターは反乱を計画している。農園の白人を殺しつくすことが目的だ。彼からみればシーザーは親友だけに邪魔な存在だった。白人に救済されたことを理由にしてエドワーズに感謝し彼ら一家を強く擁護する。自分の命にかえても彼らの生命を救いたいという。だから反乱に参加しようとはしない。魔術師エステーの術も説得も効果がなかった。その反対者の彼が自殺したのだ。ヘクターが自ら手を下したわけではない。同胞を殺害したことにはならないのが重要である。さらにシーザーの妻も後を追った。それを見たエドワーズ夫妻は自らイギリス行きの船に乗って逃亡した。ヘクターにとって結果的に敵対者の全員を排除できたことになる。原作、紅葉日訳（呉禱漢訳）では反乱を鎮圧したのはエドワーズだった。その彼が逃亡している。こうしてヘクターの反乱は大成した。革命成功である。

この反乱集団の視点に立つ遂行経過は天宝宮人が最初から設定していたからできたことだ。

改良戯劇では反乱集団が異民族の支配者を島から追放する。その結末と清末に書かれたことをあわせ考えると清朝政府に対する反乱革命劇だと容易に理解できる。

官憲から目をつけられたばあいの言い訳は用意されている。黒人とイギリス人の争いであって現実の清朝政府とは何の関係もない、である。

観客の反応はどのようであったのか知りたいと思う。しかし実際に上演されかどうかはわからない。

そのかわりに楊世驥『文苑談往』（上海・中華書局1945.4/1946.8再版（影印本））所収の説明「戯曲的更新」から関連部分を紹介する。

改良戯劇の主題について「黒人ヘクターがその主人シーザーのために復讐することを述べる（絛黒人海君為其主西査復仇事）」（62頁）と記述している。シーザー

はヘクターの親友であって主人ではない。楊世驥の勘違いだ。

蜂起直前の合唱についてその歌詞全文を引用している。『月月小説』あるいは群学社本を手元においていることがわかる。その合唱の曲調は滑稽なものだから悲劇の情緒に合わないという。楊世驥はシーザーが自刎しクララが入水した個所に注目して全体を悲劇ととらえている(悲劇的情緒。62、63頁)。それは主題の片方にすぎない。次の説明が興味深い。

裏面暴露黒人受虐待的痛苦，頗有暗示国人努力自強之意，這種嶄新的題材，在中国劇壇上還是第一次發現。62頁

中で黒人が虐待される苦痛を暴露しているのは、我が国民が向上して努力するよとの意味を強く暗示している。このような斬新な題材は中国戯劇界では初めて出現した。

黒人が主人公で恩義と友情の板挟みになり最後は自殺してしまう。それを含めて黒人が虐待によって苦しんでいる。そこから自己強化に努力せよとの暗示を読み取った。楊世驥から見ればこれが「斬新な題材(這種嶄新的題材)」なのだった。第2主題である反乱革命の存在に気づくのにあと一步というところだ。ヘクターに視線を移すという考えは持たなかったらしい。不思議に思う。

崔琦「晚清白話翻譯文体与文化身份的建構——以吳禱漢訳《俠黒奴》為中心」(『中国現代文学研究叢刊』2014年第3期(総第176期)2014.3.15)がある。その中の「九 《義俠記》对《俠黒奴》的再次改写」に注目する。

天寶宮人「義俠記」の主題を「国権の回復を主張し、個人英雄主義を賛美する天寶宮人の改良戯劇(主張恢復国権、賛揚個人英雄主義的天寶宮人改良戯劇)」(40頁)とまとめた。その根拠はヘクターの造形だ。改良戯劇において「ヘクターは国家を心配し個人の安全は顧みない個人英雄主義の形象に改造された」(39頁)ことを根拠にする。主役がシーザーではなくヘクターになっている点を見逃さない。「義俠記」部分は独立して優れた立論だ。最後にヘクターの反乱成功に言及すればさらによかったと思う。

呉禱漢訳デュ・ボアゴベ『車中毒針』

——英人ブラック『車中の毒針』

『清末小説から』第145号（2022.4.1）に掲載。荒井由美名を使用。呉禱漢訳英人ブラック『車中毒針』の原作がデュ・ボアゴベの作品であることを述べる。フランス語原作は、FORTUNÉ DU BOISGOBEY, “LE CRIME DE L'OMNIBUS.” 1881 (IAN McARTHUR による)。英人ブラックが底本とした英訳本にはアメリカ版、イギリス版があるところまで突き止めた。また呉禱が勃拉錫克と誤訳した理由も述べる。

1 問題の所在

呉禱漢訳英人ブラック『車中毒針』（原著者：英国勃拉錫克）に関して問題はふたつある。

ひとつは英人ブラックその人についての理解が深まっていない。なによりも彼が日本に帰化した外国人の芸人であることを知る必要がある。日本語を使用して日本人聴衆に向けて話芸などを披露した。それを速記した単行本が刊行されている。ここを把握しそこねると誤解が起こる。すなわち原作者勃拉錫克と英人ブラックが別人だと誤認する研究者が出てくる。その結果が奇妙なことになるのは必然だ。

もうひとつはもともになる原作の探索が不首尾であった。『車中の毒針』は英人ブラックによる翻案だとの指摘は早くからなされている。これは事実だ。翻案だから原作があるに違いない。しかしその探索に成功した人がいなかった。結論を先にいえばオーストラリア人研究者がネットで言及していた（後述）。それが問

題解決の重要な手がかりとなる。

振り返れば翻案の原作探索が困難だったのが大きい。呉構漢訳『車中毒針』が出てくるまでの状況が完全には解明できなかったという意味だ。

そこで翻訳経過の大筋を最初に説明しておく。

まず「原作」が存在する（前もって少し説明するとその原作はフランス語で書かれた）。その英訳がある。英人ブラックは英訳にもとづき自分で翻案した噺を日本の高座において日本語で「演述」した。今村次郎が「速記」し単行本が出版される。その日本語本を呉構が「漢訳」した。これが基本骨子である。図で示せば次のようになる。フランス語原作→英訳→翻案したものを日本語で演述→速記本→漢訳である。

2 日本の常識

日本において英人ブラックは昔から知られている。以前に作品集『快樂亭ブラック集』（2005）が文庫本で出ているくらいだ*1。その帯には「西洋人落語家が語るエキゾチックな世界」と表示される。その通りである。



ちくま文庫『快樂亭ブラック集』

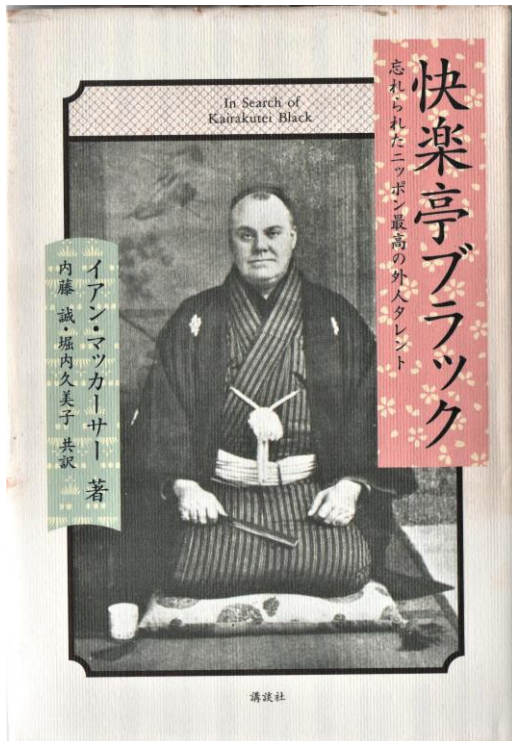
石井ブラック演述、今村次郎速記『車中の毒針』を呉構が漢訳した。このことも中村忠行「清末探偵小説史稿3」（1980）*2が早くから説明している。知っている人にとっては当たり前のことにすぎない。英人ブラックについて中村は次のように紹介した。

石井ブラックは、本名ヘンリー・ジェイムズ・ブラック（Henry James Black, 1857-1923）といひ、帰化英人であるが、日本語を巧みに操り、快楽亭ブラックと号して口座にも上り、人情斬を得意とした。56-57頁

（『車中の毒針』が）翻案ものであることは明らかであるが、原作が何かは詳らかでない。58頁

ひとことつけ加える。英人ブラックは日本で催眠術を公開したことで知られる。

イアン・マッカーサー『快楽亭ブラック』（1992）*3も翻案8篇のなかに『車中の毒針』を含めている。



イアン・マッカーサー著
内藤誠・堀内久美子共訳

また文庫本の伊藤秀雄編『快樂亭ブラック集』の「解説」でも「原作があったと思われるが不明」（486頁）とある。

翻案とはいうまでもなく英人ブラックが当時発表された英文原作にもとづいて書き換えたことを指す。注意を要するのは英人ブラック自身が創作した英語作品、あるいは日本語作品ではないことだ。重要なのは別人の英語本がすでに出ている。本稿ではそれを「原作」という。ただしそこで停止した。原作の探索は進まない。だから説明のしようがなかった。2020年末までのことである。

以上のような状況について中国の研究者が知っているのかどうかはわからない。中村論文が日本語だから読まれなかった可能性が高い。

3 研究情報伝達経路——収集の困難さと理解の不足

基本資料として阿英目録の記述を確認しておく。

[阿英123] 車中毒針 英 勃来雪克著。呉禱訳。光緒三十一年（一九〇五）商務印書館刊。

英人ブラックの漢語表記が阿英目録では上のように「勃来雪克」になっている。これは実物とは異なる著者表記だ。該書の商務印書館「説部叢書」元版（清末）と後刷り初集本（民初）ともに「原著者：英国勃拉錫克」である。訳述者は呉禱でいい。元版は錢塘、初集本は杭県と表示するのが違うといえちがう。1912年に仁和県と錢塘県が合併して杭県になった。それを踏まえた。

上の記述だけを見て「勃来雪克」が日本に帰化した英人ブラックだと説明することは可能だろうか。知識がなければ無理だろう。

呉禱漢訳は日本語本を底本とする。そこから次のように推測することは可能だ。「勃来雪克」が書いた原作を名前の出ていない誰かが日訳した。それを使用して呉禱が漢訳した。日訳者名を書かないのは当時の中国出版界では普通のことだった。ここが出発点になる。「勃来雪克」原作→日訳→漢訳という見慣れた経緯だ。別に不思議ではない。ただし阿英の記述では日訳をした日本人が見えない。普通

の研究者はそこで思考が停止する。あるいは誤解する。「勃来雪克」とは別に日本語訳者が存在すると考える。阿英目録だけ見るとそう思うのもしかたがない。

それにしても阿英目録はなぜ原著者の表記を間違っているのか。阿英は実物をもとにして目録を作成したことで知られる。だからこそ信頼されている。それとも記憶に頼った単なる誤記だろうか。理由は不明だ。

『車中毒針』について言及する論文は多くない。いくつか紹介する。

たとえば張治『中西因縁』（2012）*4だ。中村論文から32年後に出てきた張治著作である。呉構漢訳に対する彼の評価は高い。「翻訳家呉構がいる。彼の訳文は謹厳忠実であり晩清小説翻訳家の多くがそれにおよばない。第一流ということができる（一位翻訳家呉構，晩清小説翻訳家多不如他訳文嚴謹忠実，算是第一流的）」（53頁）。張治の指摘は正しい。

『車中毒針』についての部分を引用する。簡潔に記述して次のとおり。

[張治A53頁] 《車中毒針》是翻譯的一部英国小説，從訳名上看應該是日文転訳来的；

『車中毒針』はあるイギリス小説を翻訳したものでその訳名から見れば日本語から転訳したものに違いない。

呉構の漢訳だと書く。ただし原作者、日本の記述者、角書、出版社、刊年すべて不記だ。清朝末期の翻訳についておおよそのことを述べているだけ。概説だからそのつもりで見る必要がある。

その説明から日本語にもとづいて転訳したと考えていることがわかる。それで正しい。ここには示していない「英国勃拉錫克」原著を日訳したバージョンが存在していると把握する。すなわち上述の英語→日本語→漢語という当時よく見られた道筋である。

張治の認識は基本的に適切だ。ただしその日本語訳については解説がない。その何かわからない日訳をもとにして呉構が漢訳したことになる。簡単に紹介しただけだからそれ以上を求めることは無理だ。張治の高い調査能力をもってしてももともとなった英語原作を見つけることができなかつたということか。

張治は中村論文があることに気づいていないように思える。知っていれば何か説明するだろう。これを見て情報伝播の遅延と不確かさを痛感する。以前ならば中国の研究者が日本語論文を無視するのは普通だった。驚きはしない。今でもそうらしい。

現在のように電腦ネットが世界中に張り巡らされている状況を1980年代に誰が予測しただろうか。清末民初小説研究にまで影響が及んでいる。つまり研究情報が瞬時にして国境を越える可能性があることを示す。ただし前提がある。まず個人をとりまく通信環境の整備が必要だ。さらに自分からネットに繋ぐ意思を持つことが重要である。つないだところで検索の方向をどこに定めるかという問題もあるだろう。研究情報を共有しようにもその考えがなければ実現しない。言語の壁も存在する。特に清末の漢訳は日本語経由の作品がいくつもある。本稿でも扱っている呉構漢訳がまさにそれだ。日本語を理解することが求められる。研究者が少ない原因だ。問題は簡単ではない。

張治論文に関連してひとつの例を示す。原作の実物を確認するためには相応の時間がかかることがわかる例だ。

樽本照雄「林訳シェイクスピア冤罪事件（要旨）」（『清末小説から』第85号 2007.4.1）がネットで公表された。2007年であることを明記する。張治が反応したかどうか。以下に説明したい。

もとの速報内容は次のとおり。林訳シェイクスピアの底本はクイラー＝クーチ ARTHUR THOMAS QUILLER-COUCH (Q) 『シェイクスピア歴史物語 HISTORICAL TALES FROM SHAKESPEARE』（ロンドン1899初版／ニューヨーク1900再版）である。実物2冊（初版と再版）を手元に置いて記述した。原作者名、書名と刊年を明記しているのが重要だ。

この発見は鄭振鐸の林紓批判（1924）を覆す。すなわち林紓は戯曲を小説にかえて翻訳したと鄭振鐸は書いて非難した。後に定説となる鄭振鐸の主張は基本から間違っている。それを裏付ける証拠そのものなのだ。林紓冤罪事件である。

これを素早く取り上げたのは范伯群「原原本本（二題）」（『書城』2008年8月号（総第27期）。また『清末小説』第31号 2008.12.1）であった。

著名な研究者范伯群が書いた文章だから中国の研究者にも周知のことになるだ

ろうと思われた。ところがそうはならなかった。やや意外に思う。

樽本の最新研究は把握していないと書く研究者もいる（劉宏照『林紓小説翻訳研究』上海世紀出版股份公司、上海訳文出版社2011.10。388頁）。たぶん関係論文を入手できなかった。あるいはQ本そのものを見る機会がなかったのだろう。

樽本文章から5年後、范伯群論文から4年後に前出の張治『中西因縁』（2012）が出版された。

張治は林訳「亨利第四紀（ヘンリー4世）」についてつぎのように書く。「叙事体に書きあらため原本の味わいは完全に失われた（改成叙事体完全失去了原本的味道^①）」（183-184頁）。莎劇を小説に書き換えたと説明した。これは林紓に濡れ衣を着せる従来からの見解だ。鄭振鐸が書いて拡散し林紓批判の決定版として学界に定着した。それを88年後の張治も堅持していることがわかる。

ところが張治はこの箇所わざわざ注をつけた。注目する。

[張治A184頁] 注①考林紓幾部莎翁英国歴史劇的訳作，其原本当是1910年前後倫敦出版的《莎翁史事本末》（Historical tales from Shakespeare）一書，作者是 Sir Arthur Thomas Quiller-Couch（1863-1944）。

林紓による数部のシェイクスピア英国歴史劇の翻訳を考察すれば、その原本は1910年前後にロンドンで出版した『シェイクスピア歴史物語』（英文省略）であるに違いない。作者はサー・アーサー・トマス・クイラー＝クーチ（1863-1944）である。

この注釈が奇妙な点はふたつある。

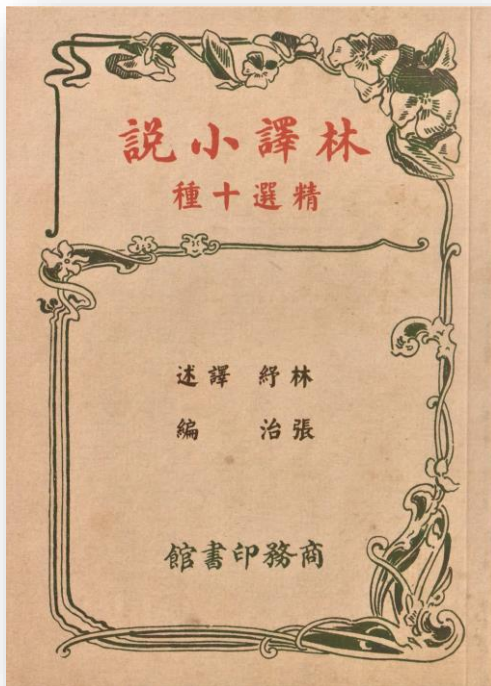
ひとつ。本文で戯曲を小説にかえて翻訳したと書いていることと齟齬が生じる。注では林紓が戯曲ではなくQの小説本を底本としたと説明するのだ。本文と注釈が矛盾しているから奇怪である。整合性が欠けている。

もうひとつ。Q小説本を指摘しながらその刊年を「1910年前後」と書いている箇所だ。この不確かな記述はなにか。Q本そのものを手にしていない可能性はあるだろうか。まさかそんなことはないと思う。張治自身がネットによる英文書物検索に自信を示しているくらいなのだ。入手した当時の書物に刊年が書かれて

いない例もある。刊年不記の版本があることは珍しいことではない（open library、hathi trust 収録など参照）。

張治は独自にQ本を探し出したのだろう。しかし本文を修正する時間がなかったというのも不思議なことだ。無理やり注に追加した印象が強い。著作刊行寸前までQ本について把握をしていないように感じる。説明がないから詳細は不明だ。しかし結果として刊年の記述があいまいである事実は覆いようがない。

それから8年後の2020年によりやく変化が見られた。張治は『林訳小説精選十種』のために「解説」本（2020）*5を書く。そこで林訳シェイクスピア歴史劇の底本を次のように明記した。



[張治20C-70、71頁]（林訳シェイクスピア歴史劇の各題名は省略する）依據的的都是1899年倫敦出版的《莎翁史事本末》（Historical tales from Shakespeare）一書，作者是英国作家、文学批評家圭勒一庫奇爵士（Arthur Thomas Quiller-Couch, Sir, 1863-1944）。^[11]

依拠したのはいずれも1899年ロンドンで出版した『シェイクスピア歴史物語』（英文省略）であり、作者はイギリス作家、文学批評家のクイラー＝ク

一チ（英文省略）である。^[11]

ここでようやく1899年（初版）であると書いた。文章公表の時間を表面から見る限り不明確な表記をした2012年から確定の2020年までに約8年の歳月が経過している。情報の伝達が即座にできるとは限らない。そのことを示す事例だ。

その意味で張治がそちらにほどこした注釈も興味深い。訳す必要はないだろう。

注 [11] 樽本照雄：《林訳イプセン冤罪事件》一文（《清末小説通説》，第86号，2007年[]）；参看樽本照雄：《林紓研究論集》，日本大津：清末小説研究会，2009年版，第81-101頁。80頁

『清末小説から（通説）』から『林紓研究論集』まで示して張治の探索能力の高さを誇示している。すばらしい。ただし次の書籍を追加していればもっとよかった。前出の樽本「林訳シェイクスピア冤罪事件（要旨）」（『清末小説から』第85号 2007.4.1）および『林紓冤罪事件簿』（2008.3.31）また『林紓研究論集』と統合した『林紓冤罪事件簿（統合増補版）』（2017.1.15 電字版）である。（日）樽本著、李艶麗訳『林紓冤案事件簿』（北京・商務印書館2018.7）を加えれば完璧だった。

ひとつ言えば張治は林紓冤罪問題について自分の判断を示していない。慎重に回避したと思われる。どんな事情があるのかは知らない。ついでに張治「【書評】《林紓冤案事件簿》」（『南方都市報』2019.1.17 電字版）があることも書いておく。

電腦とネットの時代だとはいえ結局は個人の意識に帰着する。それによって研究情報収集の困難さが増減するという意味だ。興味を持たない人に情報は集まらないだろう。

李艶麗『晚清日語小説訳介研究（1898-1911）』*6がある。

その「晚清日語小説翻訳書目録（1898-1911）」には『車中毒針』を記録する。組版どおりに示す。

15.《車中毒針》，呉禱訳，中国商務印書館1905

(英) 勃拉錫克, 原作不詳

(日) 石井ブラック (Henry James Black) 述, 今村次郎筆記《車中の毒針》, 三友社1891 170-171頁

李艷麗による上の記述は張治の説明と共通しているように思う。正しい表記の「(英) 勃拉錫克」の名前をあげたところまでは通常だ。「原作不詳」とした箇所注目する。前述のとおり英人ブラックの口述は翻案だという指摘が昔からある。そのことを示しているのだろう。先行文献を把握して堅実である。

「原作不詳」を織り込んでこの記載を筆者なりに解釈する。すなわちイギリス人勃拉錫克の原作不明作品がまずある。それを日本の石井ブラックが翻訳口述し今村次郎が筆記した。

李艷麗は勃拉錫克が英人ブラックの漢訳表記であることを理解している。それを踏まえれば英人ブラックが「原作不詳」の種本にもとづき翻訳口述し今村が筆記した。まさに正解である。

上の記述形式は中国の研究者が現在も利用している昔の樽目録第3版(齊魯書社2002)を参考に行っているのだろうか。昔の目録だがそれから1例を引用する。

c 0244*

車中毒針 (偵探小説)

(英) 勃拉錫克著 呉構訳

中国商務印書館1905.12/1906.4二版 説部叢書三=10

(石井) ブラック (HENRY JAMES BLACK 快樂亭ブラック) 述、今村次郎筆記『車中の毒針』三友社1891.10 [現代898] 『東方雑誌』8:1広告

第3版の記述には誤解を生じさせる要素はない。上4行が記号、書名、原作者と訳者、出版社と刊年を示す。下2行は注釈である。底本と参考資料を記す。

日本語底本に「英人ブラック演述」とある。呉構はそれを漢訳して「原著者：英国勃拉錫克」と誤った。「錫」を当てたのは「ブラック」の「ツ」を「シ」と見間違ったからだ。普通は伯来克、白蘭克などにする。

そうして日本語底本が『車中の毒針』である。中村忠行論文を参照して記入した。間違いようがないと考える。ただし英人ブラックがもとづいた原作は不明のままだからその記述がない。

英人ブラック（本名 HENRY JAMES BLACK）は石井姓の日本女性（名はアカ）と結婚し帰化した。芸名のひとつが快樂亭ブラックだ。くり返す。彼の日本語による演述を今村次郎が筆記して『車中の毒針』となった。それを呉禱が漢訳して勃拉錫克著『車中毒針』という経過である。英人ブラック本には彼がもとづいた原作について説明はない。呉禱が英人ブラックを原作者だと考えたのは当然であった。

翻訳方法が日中で共通している。日本語で「演述」するのを聞いてそのまま「速記」した。林紓のばあいと同じだ。林紓は共訳者が外国語原書を手にして「訳意」「口訳」するのを聞きながら文語文に置きなおして「筆述」した。

英人ブラックの原作についての理解は文娟「試論呉禱在中国近代小説翻訳史中的地位」（2018）*7にも受け継がれた。ただし微妙な変化が生じている。

該論文に「商務印書館所刊呉禱訳作単行本統計表」を掲げる。その該当箇所は次のとおり（217頁）。

書名	版權頁署名	首刊時間	叢書番号	来源
車中毒針	(英) 勃拉錫克原著	1905	説部叢書 1 集30編	1891年三友社出版 (英) 勃来雪克著, 石井ブラック述, 今村次郎筆記《車中の毒針》

「来源」欄に「勃来雪克著」と表記するのは【阿英123】を写したのだと思う。細かなことを指摘する。ここにある「説部叢書 1 集30編」は後刷りの初集第30編を意味する。こちらは民初に刊行された。ゆえに1905年の「説部叢書」はそれ以前の元版であって第三集第十編と表記されなければならない。

元版と初集本では集編番号が違っていることに文娟は気づいていない。その間違いは【編年③930】が「《説部叢書》初集第三十編」と注記した影響を受けているようだ。文娟は日本語カタカナを使用している。そうすると樽目録第3版に「説部叢書 1 集30編」と表記する後刷り版本から適当に引用したのかもしれない

い。典拠を明記していないからどうにでも解釈できる。文献追跡ができないという意味だ。

文娟はさらに次のように説明する。『車中毒針』部分のみを抽出する。

而只署“英国勃拉錫克原著”的《車中毒針》……（中略）……由三友社出版的石井ブラック述、今村次郎筆記的《車中の毒針》……転訳而来。218頁

「英国勃拉錫克原著」とだけ署名する『車中毒針』は……（中略）……三友社出版の石井ブラック述、今村次郎筆記の『車中の毒針』から……転訳したものだ。

この説明と上の統計表「来源」欄を総合すれば文娟の認識は次のようになる。基本のところは英国「勃来雪克」が書いた英文原著がある。それを石井ブラックが日本語で口述し今村次郎が筆記した。さらに呉構が漢訳して署名を勃拉錫克原著と表記した。英語から日本語へ、それをさらに漢語に翻訳したから転訳である。

文娟論文の核心部分は英国「勃来雪克」と石井ブラックを別人に認定しているところだ。来源欄に「(英) 勃来雪克著, 石井ブラツク述」とふたりを並置したからそうとしか理解できない*8。

文娟の説明がほかと異なるのはまさにこの別人説の部分だ。そうではない、というのなら注釈を書く必要があった。具体的に言えば(英) 勃拉錫克原著、(英) 勃来雪克著と石井ブラツク述というそれぞれの関係を説明すべきだ。それをしていないからどうしようもない。間違っていると思う。

4 『車中の毒針』の原作——マッカーサーの示唆

英人ブラックが使用した種本がある。いままで知られていなかった。

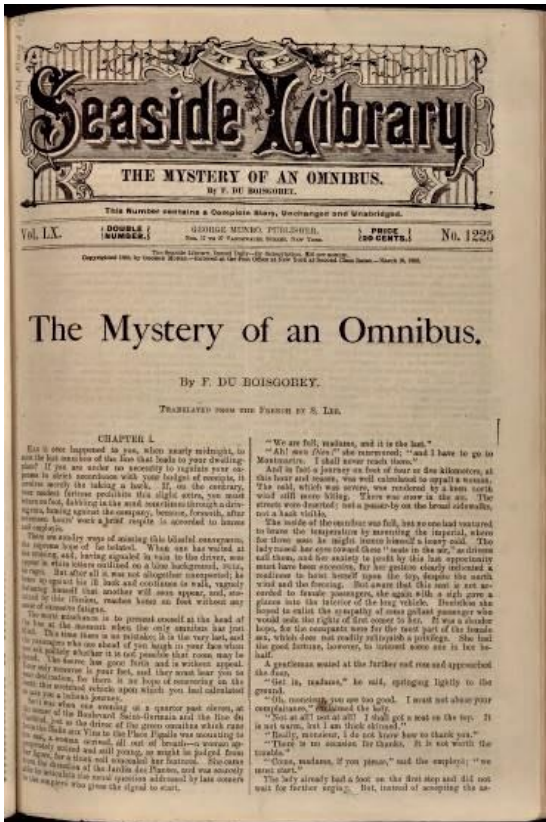
前出『快樂亭ブラック』（1992）の著者であるイアン・マッカーサー（IAN McARTHUR）が彼のウェブサイト Kairakutei Black (<http://henryblack.com.au>) で公表していることに気づいた。

マッカーサーは『車中の毒針』についてフランス原本があることを指摘してい

る。FORTUNÉ DU BOISGOBEY, “LE CRIME DE L'OMNIBUS.” 1881. である。それを踏まえて探索し英訳本を見つけた（文末追記参照）。

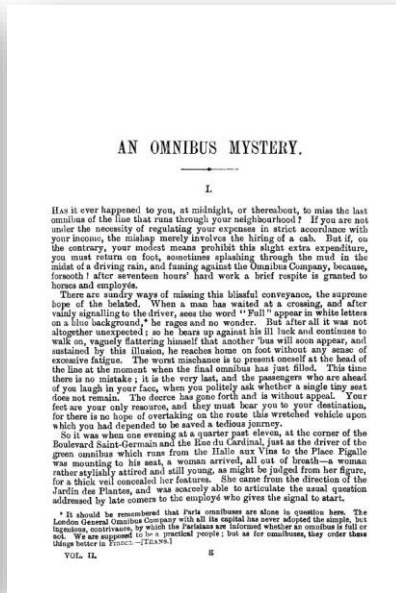
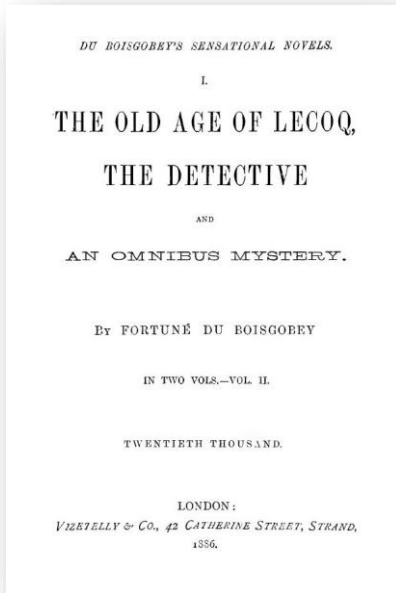
英人ブラックが使用した可能性のあるデュ・ボアゴベ原作の英訳本はアメリカ版とイギリス版の2種類がある。

アメリカ版は F. DU BOISGOBEY 原著、S. LEE 英訳 “THE MYSTERY OF AN OMNIBUS. (乗合馬車の謎)” SEASIDE LIBRARY VOL.60. NO.1225, NEW YORK : GEORGE MUNRO PUBLISHER, 1882. (Library of Congress 所蔵) だ。

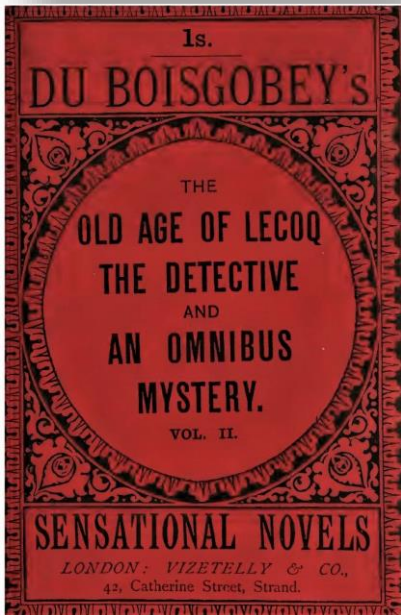


あとで松村喜雄『怪盗対名探偵——フランスミステリーの歴史』（晶文社1985.6／1985.8.15二刷。103頁）に「Le Crime de l'Omnibus（1882）（乗合馬車の犯罪）【英訳】The Mystery of an Omnibus」とあるのに気づいた。といってもこれが英人ブラック『車中の毒針』の原作だとは書いていない。あくまでもデュ・ボアゴベの作品という説明だ。

さらにもうひとつのイギリス版がある*9。FORTUNÉ DU BOISGOBEY 原著、英訳者不記“THE OLD AGE OF LECOQ, THE DETECTIVE, AND, AN OMNIBUS MYSTERY.” Vol.II, LONDON : VIZETELLY & CO. 1886. (影印本あり。また internet archive ほかに所収) だ。全2冊のうちの第2巻に“AN OMNIBUS MYSTERY (乗合馬車の謎)” (129-235頁) を収録する。



扉1と2 (架蔵)



表紙 (ネットより)

以上のほかにも英訳があるかもしれない。英人ブラック速記本（1891）以前の刊行物ということでとりあえず上記アメリカ版（1882）とイギリス版（1886）を底本の候補にあげておく。

どのようなものかそれぞれの冒頭を引用する。

【アメリカ版】 Has it ever happened to you, when nearly midnight, to miss the last omnibus of the line that leads to your dwelling-place? If you are under no necessity to regulate your expensed in strict accordance with your budget of receipts, it involves merely the taking hack. If, on the contrary, your modest fortune prohibits this slight extra, you must return on foot, dabbling in the mud sometimes through a driving rain, fuming against the company, because, forsooth, after seventeen hours' work a brief respite is accorded to horses and employés. p.3

ほとんど真夜中にあなたの住居に向かう路線の最後の乗合馬車に乗り遅れたことがあるだろうか。もしあなたが領収書の予算にしたがって厳密に費用を規制する必要がなければ貸馬車を雇えばいいだけだ。もしその反対に控えめな資力でこのわずかな支出もできないようであれば歩いて帰らなければならない。泥につきり時には雨降る中を（乗合馬車）会社に対して怒りをぶつける。なぜならば、聞いてあきれるが、17時間の労働のあとで馬と従業者には短い休息が与えられるからだ。

【イギリス版】 Has it ever happened to you, at midnight, or thereabout, to miss the last omnibus of the line that runs through your neighbourhood? If you are not under the necessity of regulating your expenses in strict accordance with your income, the mishap merely involves the hiring of a cab. But if, on the contrary, your modest means prohibit this slight extra expenditure, you must return on foot, sometimes splashing through the mud in the midst of a driving rain, and fuming against the Omnibus Company, because, forsooth! after seventeen hours' hard work a brief respite is granted to horses and employés. p.129

真夜中あるいはその時分にあなたの近所を走る路線の最後の乗合馬車に乗り遅れたことがあるだろうか。収入に応じて支出を厳密に管理するの必要がなければその災難は貸馬車を雇えばいいだけですむ。しかし逆に、あなたの控えめな収入がこのわずかに余分な支出を禁止するならばあなたは歩いて帰らなければならない。時には雨が吹き荒れる中で泥をはねながら乗合馬車会社に怒りをぶつける。なぜなら、聞いてあきれるが、17時間の労働のあとで馬と雇用者には短い休息が与えられるからだ。

皮肉を含んだ書きぶりが見て取れる。両者の英訳は単語の使用が異なるくらいで本文はほぼ一致している。英人ブラックがそのどちらを底本に使用したかは今のところ不明だ。なお上の「17時間 seventeen hours」に該当するフランス語は「16時間 seize heures」となっている。

本稿で比較対照する際に主として使用する『車中の毒針』は次の版本である。

英人ブラック演述、今村次郎速記『(探偵小説) 車中の毒針』(三友社1891.10.19。国立国会図書館デジタルコレクション／大川屋書店1891再版。未見)。次も参照する。伊藤秀雄編『快樂亭ブラック集』(明治探偵冒険小説集2 ちくま文庫2005.5.10 所収)。ちくま文庫本は読みやすいようにひらがな漢字などの表現を書き改めている。また原本にある「叙(水石隠士識)」は収録していない。

英人ブラック『車中の毒針』本文の冒頭を引用する。彼の語りがどのようなものか理解することができる(ルビ省略。句読点はちくま文庫)。

【ブラック】日本に人力と云ふ便利の物がございましていづれへ参るにもちよつと人力車へ乗れば早く行かれますが欧羅巴に未だ人力車如き便利の物がございません。尤も日本の人力車支那印度あたりでは当時盛んに用ゐて居りますが。其代り挽く者があつても製造の事が出来ないで皆な日本に注文致して用いております。欧羅巴では人力車の代りに一匹馬の馬車往来に客待致してあり升けれども、馬を使う事ゆゑ人力ほど便利と云ふ訳には参りません。値段は高くて昼間だけ営業いたし最う夜るの九時十時ごろになれば皆な仕舞います。夫故に朋友の処ろへ遊びに参り遅くまで話込んで居れば帰りには市

中乗合馬車に乗るか、歩行で帰るより外に仕方がない。9-10頁

前述の英人ブラック本（以下速記本と称する）は全14回ある。連続講談風で続きものだ。末尾に「次回に続く」があるのは中国の章回小説と変わらない。高座での物語りだから回によっては本題に入る前のいわば前口上、前説、マクラが述べられることがある。

第1回のマクラが上のおりだ。英訳原作は乗合馬車から始まっていた。英人ブラックも乗合馬車（日本の俗称は園太郎馬車）について説明して導入部に設置した。彼の工夫は人力車を引き合いにだしたところだ。英訳原作に人力車があるはずもない。なじみの乗合馬車と人力車を組み合わせてヨーロッパ事情も付加した。日本の聴衆もよく理解しただろう。

高座での語りをそのまま記述している。流暢な話し言葉であることが文面からも了解できる。この冒頭部分を呉構はどのように漢訳したか。

5 呉構漢訳を検討する

本稿で使用するのは次の版本である。

英国勃拉錫克原著、杭県呉構訳述『（偵探小説）車中毒針』上海・商務印書館、乙巳年十二月初版／中華民国二年十二月四版、説部叢書初集第三十編。表紙はリボン文様。電字版

マクラ

冒頭部分（1-2頁）を引用する（傍点傍線省略。以下同じ）。速記本と比較対照すると呉構漢訳が完全に一致するわけではない。少し長い。文章を分割しながら説明する。

【呉構】話説当今世界日進文明。凡是思想学問物質。愈出愈奇。愈有進歩。不但如此。就是人生日用所需。各種東西。也愈覺得十分輕巧。十分便利。如今別的都不題他。單説地方上来往交通頂便利的一宗。

商務印書館發售儀器文具

幼。中。測。體。博。物。
 稚。西。量。操。物。理。
 園。筆。繪。音。標。化。
 用。墨。圖。樂。本。學。
 以上各物爲學校
 館上海總發行所
 館均有發售并有
 如承函索。即行寄贈

乙巳年十一月廿六日
 中華民國二年十二月四日

(車中毒針一冊)
 (每册定價大洋貳角伍分)

★此書有著作權翻印必究★

新舊書經三年四月初三日申報五月十四日註明

總發行所	上海商務印書館
分售處	北京 保定 奉天 煙台 青島 濟南 天津 漢口 廣州 香港 汕頭 廈門 福州 漳州 汕頭 梧州 柳州 貴陽 昆明 蘭州 西寧 成都 重慶 長沙 衡陽 常德 蕪湖 安慶 九江 南昌 杭州 寧波 紹興 嘉興 蘇州 無錫 常州 鎮江 揚州 南通 蕪湖 安慶 九江 南昌 杭州 寧波 紹興 嘉興 蘇州 無錫 常州 鎮江 揚州 南通

說部叢書
 初集
 第十編
 偵探小說

車中毒針

上海商務印書館發行

『車中毒針』說部叢書初集本 表紙 奥付

さて今の世界は日々文明が進みましておしなべて思想学問生活物資がますます珍しくなり進歩しております。それだけでなく人々が日常生活に必要とする日用の各種品物もますます輕妙で十分に便利になったとも感じます。ほかのことは言わずとも交通往来だけでもとても便利になったということです。

ここは吳禱が創作して加筆した箇所だ。英人ブラックはいきなり人力車から始めた。そのまま漢訳すれば中国の読者には理解しにくいと吳禱は思ったらしい。そこで社会全体が進歩し便利になったことを述べて補いそれを人力車につなげる。

【吳禱】就如咱們上海天津的人力車（割注：我国人叫做東洋車）。只用一箇人在前拖著。近處十里二十里地方。不論什麼所在。都能去得。不論什麼時候。也能走得。凡是雇坐過的。沒一箇不稱他輕快便利。只可惜中国地方。還不能

各埠到處通行。這倒是箇憾事了。且說歐州各国地方。別的貨物。都比咱們中國美備。惟有那人力車一宗。倒却不見通行。

我らが上海天津の人力車（割注：我が国では東洋車と呼ぶ）のように前方で人がひとり引っ張りながら近くは10里20里（5km10km）のところへどこへでも行くことができます。時間を問わずに行くこともできる。使ったことのある人ならば軽快便利であると言わない人はいません。ただ惜しいことに中国ではまだどこでも通行できるわけではなく残念なことです。さらにヨーロッパ各国ではほかの商品はおしなべて我が中国よりも十分に備わっているとはいえこの人力車だけは通行してはいません。

速記本では冒頭の次の箇所が相当する。対照するために再度引用する。「日本に人力と云ふ便利の物がございましていづれへ参るにもちよつと人力車へ乗れば早く行かれまするが欧羅巴に未だ人力車如き便利の物がございません」。英人ブラックは日本の事情として語った。吳禱はそれを上海天津に置き換えている。どうしてもそうしたかったらしい。速記本の骨子を把握しながら加筆した。

このあとに続く「尤も日本の人力車支那印度あたりでは当時盛んに用ゐて居りますが。其代り挽く者があつても製造る事が出来ないで皆な日本に注文致して用いております」は漢訳では省略した。ここの日本は排除したのである。

【吳禱】 応酬来往。都須用著馬車。至少要一頭馬。多的兩馬三馬四馬不定。有的說歐州人日常費用。專講浮華。這也可以見得一端了。他們本國人習俗如此。倒也罷了。只是有那些外国去的旅人遊客。如日本中国人。坐慣人力車的。又有勤儉為主的。到他們国裏去。總覺得有些不便。而且車価也太貴。

交際往来には馬車を使わなくてはならん。少ないのは1頭立て馬車で多いのになると2頭立て3頭立て4頭立てと定まっはけません。あるいはヨーロッパの人は日常の費用はもつぱら派手であるという人もいます。それはそうでありましょう。彼らの国の習俗がそういうことであってそれまでのこと。ただ日本人中国人で外国へ行く旅行者は人力車に乗り慣れていますし儉約を旨としているのでそちらに行けばいささか不便でまた車賃が高すぎると感じ

ます。

ここのもとになったのは次のとおり。「欧羅巴では人力車の代りに一匹馬の馬車往來に客待致しており升けれども、馬を使う事ゆゑ人力ほど便利と云ふ訳には参りません。値段は高くて」。基本的に対応しているのがわかる。呉禱による加筆の勢いが止まらない。ほとんど書き換えだといつていい。

【呉禱】還有一層。他們的馬車。大概都在日裏兜載生意。到得夜裏九点鐘時。就一概回行。不再出門兜攬。任是坐客去雇他。也不答应。除非自己備有車馬。纔能遲早任便。但祇那有許多。箇箇備的起馬車呢。既不能自備馬車。

さらには彼らの馬車は大概昼間に客引きをして商売していますが夜の9時になれば皆帰ってしまいます。それ以上客引きはせず客が雇おうとしましても応じません。自分で車馬を用意すればいつでも好きなように使うことはできますがそんなに多くの人々がどうして馬車を用意できるのでしょうか。自分で馬車を備えることはできません。

この速記本は「昼間だけ営業いたし最う夜るの九時十時ごろになれば皆な仕舞います」だ。漢訳はそこを押さえた。それ以降は個人での馬車所有に言及して不可能だと締めくくる。書き換えて長くなっている。

【呉禱】凡遇今天。或是遊玩什麼山水景物。或是訪尋什麼親戚朋友。倘若時候遲了回家。街上就沒有馬車乘坐（割注：街上兜攬客人的上海叫做野鷄馬車）。除了自己步行。再沒別法。這是顯得外国也有不便之處。

もし今日どこかへ物見遊山に行くかあるいは親戚友人のところを訪問し遅くになって帰ろうとしても通りにはすでに馬車はありません（割注：通りで客引きをするのは上海ではヤミ馬車という）。自分で歩くよりほかに方法がありません。これが外国にも不便なところがあると明らかなのです。

この前半は速記本と一致している。すなわち「夫故に朋友の処ろへ遊びに参

り遅くまで話込んで居れば帰りには市中乗合馬車に乗るか、歩行て帰るより外に仕方がない」である。

ただし重要な箇所を呉禱は漢訳しなかった。「市中乗合馬車」を省略したのはどうということだろう。歩くだけしか方法がないとすれば問題が出てくる。『車中毒針』の原題である『乗合馬車の謎』は発生しようがない。毒針を使った殺人事件はまさにその乗合馬車の中で起こるからだ。呉禱による小さな見落としである。マクラについてももう1ヵ所だけ例を示す。第2回の冒頭だ。

【ブラック】西洋では日本を差して美術の国と称づけました、此位み美術に達けて居る国は此の広い世界に御坐いません、西洋にも随分美術を嗜む人も御坐います良い美術家もあると雖も日本では上中下区別なしに總ての物に雅があつて美術の志しを持って居る、只だ西洋の美術日本の美術と大に異つて居る何方が宜いかと問いますれば夫は好々であると答へるより外に仕方がない 23頁

美術をあげてその評価はそれぞれの好みによる。どちらが良いということにはならない。それだけのことだ。しかし呉禱はここにどうしても中国を割り込ませずにはいられない。加筆したのだった。

【呉禱】話說当今地球各国種種学問昌明。内中有一種科学。名叫美術。咱們中国。古時孔聖門下也有這一科。論語上所說遊於藝。這遊藝二字。就是美術的來源。凡是手中製作出来。有声有色。維巧維妙。能夠快人精神。怡人性情的東西。都是美術科中应有的。現今西洋如欧洲英法德意西班牙等国。東洋如中国日本。都於這一科学問很為講究。不過中国後世没有這專門科学。就覺得讓他人占先。若論日本和西洋比較起来。内中也有西洋占勝的。也有日本見優的。常言道。各有所長。各盡其妙。12頁

さて当今地球の各国では種々の学問が盛んです。そのなかのひとつが美術という科学であります。我ら中国には古代孔子門下にもこれがあります。論語でいうところの藝に遊ぶということです。遊藝の2文字こそは美術の来源

です。手で作り出したすべてのもの音あり形あり手の込んだ巧妙なものは人の精神を楽しませることが出来ます。人の性情を和らげるものはすべて美術の中になくしてはならないものなのです。現今のヨーロッパでイギリス、ドイツ、イタリア、スペインなどの国々、東洋では中国、日本ではみなこの学問を重んじております。ただし中国では後世にこの専門科学がなくなっていました。他人に先を越されたと思われれます。もし日本と西洋を比較すればその中には西洋が勝っているものもあり日本が優れたものもあります。よくいうようにそれぞれに長所がありそれぞれが素晴らしい。

もとの速記本では日本と西洋を対比しているだけだ。呉禱はそれに論語を加えて中国事情を述べた。ただし「他人に先を越されたと思われれます」ということになれば挿入するほどでもなかった。中国部分を除けばほぼ底本のとおりでよい。

呉禱は基本的に底本を忠実に漢訳する。英人ブラックについては上記のようにそれが守られていない部分がある。それは呉禱が速記本についてよく理解しているからだろう。呉禱は内容を読んで英人ブラックが聴衆を相手に話を始めて当意即妙であることを了解した。それに自分も便乗して中国の読者に向かって随意に語りかけたというわけだ。話芸であるから中国人によくわかるように改変することが必要だと考えた。

改変といっても部分的なものだ。主としてマクラ部分に手を入れた。事件の流れについては忠実な漢訳である。

『車中毒針』について

本題の殺人事件について簡単に述べる。筋をたどりながら部分的に引用して速記本と呉禱漢訳の実例を見てみよう。

【ブラック】今距る三年前時は二月二十三日仏蘭西の都巴里に於て夜の十二時頃フライ街の角より市中乗合馬車ただいま出やうとする處ろ馭者は台に乗り手綱を手にとりて馬に鞭を当て、走らせやうとする處ろへ婦人が一人駆けて

参り 婦「馬車屋さん一寸待て下さい五性だから乗せてツて下さい []」
車掌「御生憎様最う一這で御坐います []」 10頁

「二月二十三日」と具体的な月日を述べる。しかし原作にはそのような表記はない。「夜の十二時頃」に該当するのは「夜の11時15分 [one evening at a quarter past eleven]」(p.3/p.129)である。

速記本は話者について「婦」「車掌」と書きつける。高座での物語りだから演じ分けているのだ。それを細かく写した。速記者の工夫である。速記本の書き癖なのか閉めのカッコを使用していない。なくてもかまわない。本稿では補っていた。

【呉禱】閑話少説。且説離現在三年前。出一椿奇案。是西曆二月二十三日。夜裏十二点鐘時候。法蘭西巴黎京城。福来街転彎之處。有一輛馬車。車夫坐在車上頭。手裏拿著鞭子。正要叫馬転彎。忽然一箇婦人。劈頭劈面跑過來。对着車夫喊道。噯。兀那車夫小哥兒。請你稍微等一会儿。讓我搭坐了去。車夫道。你老人家真不懂事。俺的車。立刻就要卸下客人回去的。2頁

閑話休題。さて今を去る3年前、不思議な事件が発生しました。西曆2月23日の夜12時にフランスはパリの都フライ街の曲がり角に馬車が1輛ありました。御者が上に座り手に鞭を握ってちょうど馬を出そうとしているところに婦人が真正面から走ってくると御者に向かって叫びました。「アレ、あの御者のお兄さんちょっと待ってください。乗せてやってください」。御者は言います。「お客さん本当にわからない人だね。俺の馬車はすぐに客を下ろして帰らなくちゃならないんだ」

もう満員だというのが速記本だ。呉禱漢訳はそれとは違う。回送すると変更した。それ以外はほぼ直訳に近い。

呉禱は速記本にある話者の表記は採用しなかった。従来からある「○○道」という形を踏襲している。

御者と婦人のやり取りを聞いた乗客のひとりが女性がかawaiiそうだから乗せて

やれという。規則がうるさいからそれはできない、という会話がこのあとに続く。結局、男性客が婦人に席をゆずり自分は御者の隣りに移動する。婦人は男性客に大きく感謝して馬車に乗り込む。そのあとの箇所が速記本と漢訳とでは大きく異なる。

【ブラック】（女性は）お礼を言つて馬車へ乗り今の客人が明けて呉れた場所へ座り、男は馭者台に乗り馭者はエイと馬にステツキを入れて飛び出したが、此の處ろ御馴染の園太郎でも居つて喇叭を吹てお婆さん危険いよーと御陽気に伺へば一愛嬌にもなるが私は生憎喇叭も鈴も持たない、馬車の声色至つて不得手の方で御坐いますから其の辺の處ろは御用捨を願います 13頁

ここにいう「御馴染の園太郎」は四代目橘家圓太郎（本名石井菊松、別名ラッパの圓太郎、1845-1898）のこと。当時人気の落語家だ。乗合馬車の御者が吹くラッパをまねながら口座に上がった。「ラッパの圓太郎」と呼ばれた理由だ。乗合馬車が「園太郎馬車」と俗に言われることにもつながる。

英人ブラックが後半部分で園太郎の実際を紹介しているのが興味深い。園太郎は馬車の御者が声を張るのを声帯模写した。御者はラッパを吹き鈴を鳴らし回りの人々に注意を喚起していたという場面だ。「お婆さん危険いよーと御陽気に伺うのが御者常用のセリフで園太郎がそれをまねた芸風だとわかる。

正岡容^{*10}は「円太郎馬車」の項目でそのセリフを紹介している。「四世橘家円太郎が、高座でこの馬車の真似をして、「おばあさんあぶないよ」と馭者のようにラッパをふいたのでこの名が起った」42頁

本筋とは関係のない実際風景を語りの合間に挿入する。英人ブラックが当時の高座で行なっていた様子が手に取るように生き生きと記録されている。

こういう臨機応変な箇所は呉構にとっては漢訳がむつかしくなる。日本語を書物で学習しただけだ。日本の演芸場がどのようなものかその知識があったか不明である。知っていたとしても日本の芸人のことだ。清末の読者にとってはあまりにも関係が薄い。そこで呉構なりの工夫をした。一般的事情説明に変更したのである。

【呉禱】（那箇奶奶）一脚跨入馬車。那坐客和車夫並坐在車沿上。車夫將韁繩一緊。加上一鞭。那馬很快的駛了去。車夫一面對坐客道。有件事還求你老原諒。這裏若搖起鈴聲。吹起喇叭來。被警察聽了。很為危險。若是白天。正大光明去探望客人。原可用得。可奈如今深夜違章。喇叭和鈴。一樣也沒有帶著。馬車在街上走。很為不便。這些所在。要求你老原諒。看官知道西洋的馬車。不似咱們中国北方的驢馬車子。那樣質樸遲笨。馬車上都裝著一箇手捏喇叭或是銅鈴等類。駛的時候。以便放出聲音。使行路人等知道避讓。只看上海那些車輛。也是如此。如今這位坐客的馬車。只因時候過遲。不得聲響。驚動沿街居民。因此那車夫說這樣話。5頁

（その奥さんは）スッと馬車に乗り込みます。あの客は馭者と馬車のへりに並んで座ると車夫は手綱を引き締め鞭を加えて馬はすぐに走りだしました。御者は客に向かっていきます。「すみませんこつて。ここで鈴の音をさせたりラッパを吹きましてそれを警察に聞かれでもすりゃ危ないんで。もし昼間なら公明正大にお客にご挨拶ということでよろしいんですが今のような深夜ではどうにも違反でしてな。ラッパと鈴は両方ともに持ってきていないんで通りを行くときにゃ不便なもんでがす。そういうこつてお許しのほどを」。さて、知られている西洋の馬車は我らが中国北方のラバ車が素朴で愚鈍であるのとは違う。馬車には手作りのラッパか銅鈴のようなものを備えている。走るときには音声を放出して通行人に避けるようにと知らせる。上海の車輛を見てもそうなっている。今あの客が乗った馬車は時間が遅すぎて音を出して通りの住民を驚かせることが許されない。ゆえに御者はそのように言ったのだ。

速記本に出てくるラッパの園太郎は引っ込めて御者の説明に換えた。内容も追加している。しかも「看官」以下は呉禱自身が乗り出してきて追加した補足説明である。

清末の読者には日本の落語家園太郎は不要だと判断して別人ならばその部分を削除するだろう。しかし呉禱は底本の速記本になんとか忠実であろうとした。読

者の理解を助けるために考えて書き直した。その真摯な翻訳姿勢が伝わってくる箇所だ。しかもその説明は間違っていない。読者は前の箇所からどこにも引っかからずに素直に読み通しただろう。

呉構は日本の有名芸人については書き換えた。といいながら英人ブラックが日本について説明することをすべて削除したわけではない。速記本の記述をなるべく生かして漢訳するのが彼の基本方針だ。次を見てほしい。

【ブラック】日本なれば金の沢山ある婦人を女房に持ちたいと思へば先づ後家さんを騙すより外に仕方がないやうけれども欧羅巴は然うでない、若くてもお金を沢山持参して来る女が幾らもあります。37-38頁

明治時代の高座で語られた話だからそのつもりで読む必要がある。財産を所有する女性が犯罪者の標的になりやすいという一般論だ。しかもそれが物語の伏線にもなっている。

【呉構】若在日本。婦人家雖是有錢。雖是丈夫去世。也不能另外嫁人。那些居心不良的人。除了欺騙於他。就沒有別法。但歐洲却不然。任是年輕。帶着許多錢財復嫁人的婦女。很也不少。25頁

もし日本であれば婦人が金を持っていようが夫が逝去していてもほかに嫁ぐことはできない。よからぬ下心があるやつらは彼女を騙すよりほかに仕方がない。しかしヨーロッパはそうではない。若くてもお金を沢山持って嫁ぐ女性がいくらでもいます。

というわけで遺産相続をする若い女性が犯罪の対象になる。そうして乗合馬車の中で毒針を使用した殺人事件が発生した。そういう段取りである。『車中の毒針』という日本語題名になった理由だ。

金持ちの兄弟がいる。弟が死亡した兄の財産を狙う。兄には遺産を相続する娘がいることがわかり人をやっつけて殺させた。ところが被害者には妹がいて若い画家のモデルをつとめている。その画家というのが乗合馬車での乗客だった。偶然に

凶器である毒を塗った留め針 (pin) をそうとは知らずに拾う。その友人が探偵役になって犯人を追跡する。妹も狙われて命が危ない。

呉禱の漢訳はマクラの部分以外は日訳に忠実である。

題名になっている留め針について原作と英人ブラック、呉禱の翻訳を示す。

【アメリカ版】 a gilt pin, of the kind used to fasten ladies' hats. p.5

婦人の帽子を留めるために使われる金メッキのピン

【イギリス版】 a gilt pin, of the kind used to keep ladies' hats and bonnets in position. p.135

婦人の帽子やボンネットを所定の位置に留めるために使われる金メッキのピン

【ブラック】 真鍮か何ぞで出来た金滅金になつてゐる女の着物を止める針
21頁

【呉禱】 乃是箇黄鍍金造成婦女們衣裳上擱扣的小鍼 10頁

金メッキになっている女性の着物を留める針

呉禱の漢訳は日訳そのままである。ただし「擱」は普通は鼻をかむという意味だ。訳文として不適切な気がする。誤植かあるいは呉禱の使用癖の方言かもしれない。

小さな誤りはある。モーグ (死体公示所) を地名「在摩革地方」 (15頁) と間違ふ。日本訳にカタカナが使用されていれば人名か地名だと判断される。それに惑わされたい。

マクラは除き、本筋について呉禱漢訳には大きな変更はないと考えてよい。

ひとつ気がつくことがある。本漢訳にいて呉禱は日本語音をそのまま漢字に写そうと努力している。

たとえば猫が「ニヤア」という個所は「呢啊哦 (割注：三字連読)」 (19頁) とする。割注にあるように3文字を連続して読めば「ni,a,o」で「ニヤア」だ。漢語の「喵喵」「咪咪」にしてもいいようなものだがそうはしなかった。

日本語を音訳するのは橋名にも見える。「新橋」は「新巴希 xinbaxi 橋」に

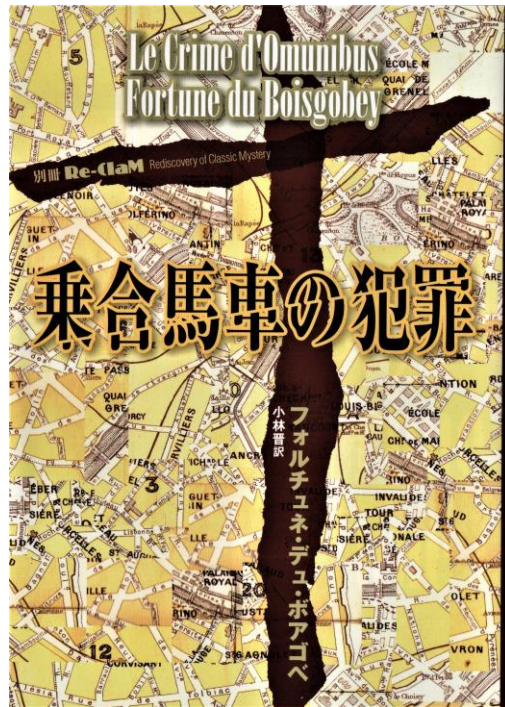
「万代橋」は「曼代mandai 橋」に「日本橋」は「尼ト恩 nibu'en 橋」（68頁／51頁）という具合だ。そのまま日本語漢字を使用すればいいようにも思う。しかし舞台がフランスだから日本語漢字では統一をとることができないという判断だろう。

「登場人物対照表」を掲げる。これを見ても音訳で重なる人物がいる。

「加納」が「葛撓 genao」、「伊藤」が「伊達峨 yida'e」、「一蔵」が「夷蘇 yisu」、「山田」が「夏密丹 xiamidan」、「土屋」が「支梯巫 zhitiya」だ。なるほどそれらの漢字を表面的にながめればフランス人に見えなくもない。呉構が漢訳に工夫をしているという理由だ。この独特な漢訳方法はほかに『賣国奴』（1905）『寒牡丹』（1906）、『寒桃記』（1906）、『棠花怨』（1908）などがある。

【2021.3.29追記】『車中の毒針』の原本が日本語訳されていることを知った。フォルチュネ・デュ・ボアゴベ作、小林晋『乗合馬車の犯罪』Re-ClaM 事務局 2020.3.31。古書山たかし「『乗合馬車の犯罪』解説」に次のように解説する。

「本書は一八八一（明治一四）年に刊行されてから十年後の一八九一（明治二四）年、英国人噺家である快樂亭ブラックにより長篇噺『車中の毒針』として高座にかけられ、単行本化もされているので、日本語への移植としてはかなりスピーディだったといえる」312頁



登場人物対照表

英 訳	英人ブラック	呉 構	備 考
Paul Frenense	加納元吉	葛撓	画家
Binos	伊藤次郎吉	伊達峨	加納の友人、探偵役
Pia	鈴木おのぶ (延)	史緑波	モデル、お勝の妹
Bianca Astrodi	鈴木おかつ (勝)	史姿玉	被害者。母はおとみ（史黛眉）
François Boyer	山田一蔵	夷蘇	お勝、お延の父親、ドイツで死去
Paulet	山田金三郎	夏密丹	金持ち隠居、一蔵の弟
Marguerite Paulet	お高	棠佳	山田の娘
Auguste Piédouche (別名 Blanchelaine)	土屋弥平	支梯亜	三百代言、もと探偵と自称、泥棒
Madame Blanchelaine	土屋の女房	支家的	毒針殺人の実行者
Maitre Drugeon	井上	魏嘉西	一蔵の番頭、ドイツから来た

【関連論文】

小島貞二『快樂亭ブラック』国際情報社1984.8.7

——『決定版 快樂亭ブラック』恒文社1997.8.10

佐々木みよ子・森岡ハインツ『快樂亭ブラックの「ニッポン」』PHP研究所1986.10.6

趙 震「二十世紀初留学生訳者特点剖析——以呉構《小説月報》前期（1910-1920）翻訳作品為例」『中国近代文学学会小説分年会暨中国近代小説學術研討會論文集』開封・河南大学文学院2013.9

【注】

- 1) 伊藤秀雄編『快樂亭ブラック集』明治探偵冒険小説集2 ちくま文庫2005.5.10
- 2) 中村忠行「清末探偵小説史稿——翻訳を中心として（3・完）」『清末小説研究』第4号1980.12.1。56-59頁
- 3) イアン・マッカーサー著、内藤誠・堀内久美子共訳『快樂亭ブラック』講談社1992.9.17／1992.10.2二刷。145頁

- 4) 張 治『中西因縁：近現代文学視野中的西方「經典」』（上海社会科学院出版社 2012.8）
- 5) 張 治「解説」 林紓訳述、張治編『林訳小説精選十種』北京・商務印書館2020.6
- 6) 李艷麗『晚清日語小説訳介研究（1898-1911）』上海社会科学院出版社2014.8
- 7) 文 娟「試論吳禱在中国近代小説翻譯史中的地位——以商務印書館所刊單行本為研究視角」『明清小説研究』2018年第4期（総第130期）2018.10.15
- 8) 次を参照。荒井由美「吳禱についての文娟論文」『清末小説から』第133号 2019.4.1
- 9) 次を参照した。ALLEN J. HUBIN “THE BIBLIOGRAPHY OF CRIME FICTION 1749-1975” PULISHER'S INC. 1979。127頁。DU BOISGOBEY, FOORTUNE (HIPPOLYTE AUGUSTE). 1821-1891. The Mysery of an Omnibus. Munro, 1882./ British title: An Omnibus Mystery (with: The Old Age of Lecoq, the detective, q.v.). Vizetelly, 1885
- 10) 正岡容『明治東京風俗語事典』ちくま学芸文庫2001.2.7

呉禱漢訳ガボリオ『寒桃記』

——黒岩涙香訳『有罪無罪』

『清末小説から』第146号（2022.7.1）に掲載。ガボリオ原作、黒岩涙香訳『有罪無罪』を呉禱が漢訳して『寒桃記』である。涙香が底本にした原作はすでに示されている。しかし可能性のある原本3種類について筆者なりに確かめる。登場人物の名前が手がかりになる。従来からいわれている原作であるにしてもその作業は必要なことだ。呉禱独特の固有名詞漢訳法にも言及する。

1 ガボリオ本と涙香訳

フランスの作家エミール・ガボリオ（ÉMILE GABORIAU、1832-73）作“LA CORDE AU COU”（1873、project gutenberG 所収）がある。原題の意味は「首の縄 ROPE AROUND HIS NECK」。その英訳本を黒岩涙香が翻訳して『有罪無罪』34章（魁真楼書店1889.11.5）*1になった。「仏蘭西小説」と表記する。しかし涙香本には原作者名、原作品ともに記述がない。

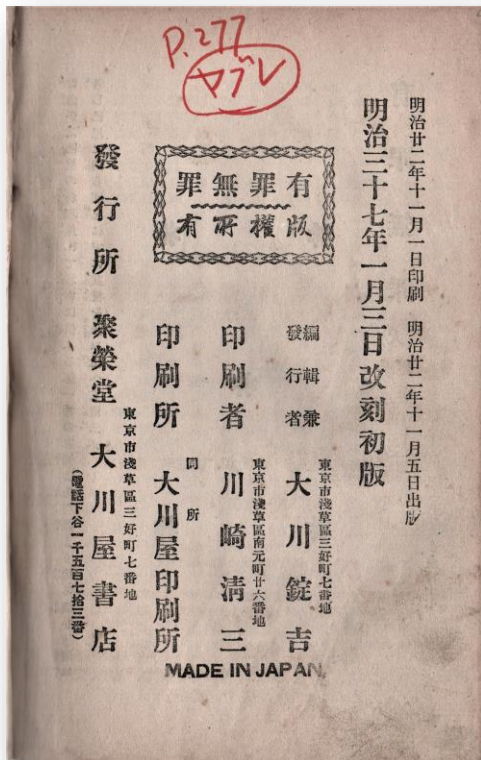
日本において涙香本の底本探索には長い歴史がある。

以前の指摘を簡単に示すと次のとおり（年代順）。

流水1902：「有罪無罪」作者ガブリュー*2

柳田1935：『有罪無罪』、エミール・ガボリオ『伯爵の秘密』、一名『命からがら』Within An Inch of His Life*3

涙香目録1962：Emile Gaboriau（仏1832-1872）（仏蘭西小説）有罪無罪 La



改刻初版 奥付



表紙

Corde au Cou (1873) 英訳 Within an Inch of His Life. *4

伊藤1979：原作は、エミール・ガボリオの『首の縄』（Within an Inch of His Life）*5

以上のとおり。早くからガボリオ作品とその英訳題名が指摘してある。涙香が使用した底本は英訳“WITHIN AN INCH OF HIS LIFE（死ぬ一步手前まで）”（1874）で確定しているようだ。底本はすでに判明していると考えて話を進めることもできる。

しかしここで中村忠行の論文を外すわけにはいかない。

2 英訳3種類

中村が漢訳涙香についてまとめて書いている。その中で呉禱漢訳『寒桃記』に言及する。注目するのは涙香が使用した可能性のある英訳本を3種類あげていることだ。

中村忠行「(ロ) 涙香物の重訳」(1980) *6より抜き出す。呉禱漢訳『寒桃記』が涙香訳『有罪無罪』を使用したことを踏まえる。英訳本を3種あげてつぎのとおり(仮番号、書名訳と収蔵情報を追加した)。

① “IN PERIL OF HIS LIFE (命の危機にさらされて)” LONDON, VIZETELLY & CO. 1882[2D ED] (GABORIAU'S SENSATIONAL NOVELS I)

／1884. hathi trust 所収／NEW YORK: THE PEARSON PUBLISHING CO. (1900)。open library 所収

② “IN DEADLY PERIL (死の危険にさらされて)” TR. BY SIR. G. CAMPBELL, LONDON, WARD, LOCK & CO. 1888

／架蔵は刊年不記

③ “WITHIN AN INCH OF HIS LIFE (死ぬ一歩手前まで)” LONDON, G. ROUTLEDGE & SONS, 1888

／BOSTON: JAMES R. OSGOOD AND COMPANY, 1874. hathi trust 所収／NEW YORK: CHARLES SCRIBNER'S SONS, 1913。project gutenbergr 所収、open library 所収

以上の3件の中で中村が底本だと推測するのは上の①だ。「私案としては“*In Peril of his life*” (Gaboriau's sensational novels I)に見当をつけてみるけれども」(49頁)

資料が不足する時代にその文章は書かれた。だから「見当をつけてみる」という表現になった。3種類も英訳が出ていることはそれほど広く知られてはいないだろう。前述の諸文献には出てこないからである。だからこそ無視はできない。

中村は英文書物を調査するばあいに2次資料を使用していた。ALLEN J. HUBIN “THE BIBLIOGRAPHY OF CRIME FICTION 1749-1975” (PUBLISHER'S INC. 1979)、あるいは英国図書館目録、米国議会図書館目録などだ。

前者 HUBIN 目録には以下のようにある (p.160。比較するため順序を入れ替えた)。

①IN PERIL OF HIS LIFE. LOWELL, 1883

②IN DEADLY PERIL. WARD, 1888.

③WITHIN AN INCH OF HIS LIFE. OSGOOD, 1874; ROUTLEDGE, 1888

中村の提示する刊年がこれとは微妙に異なる。別の2次資料によつたらしい。一般に言われる③“WITHIN AN INCH OF HIS LIFE”以外に①と②の英訳本2種類があるのは重要だ。

本稿は底本とされている英訳本を検討することからはじめる。

3 涙香訳の英訳底本——錦 (ニシア) の謎

上記英訳3種を見て最もわかりやすいのは人名の違いだ。人名が原作とその英訳で異なるのはおかしいと思うだろう。しかしそれが実在する。

本書の中心人物は3名いる。男性ひとりに女性がふたり。簡単にいえば三角関係だ。女性のひとりには夫が伯爵だ。それを数えれば四角関係でもある。

本書の主人公星川武保が放火と殺人未遂の罪に問われる。涙香は英訳にもとづき「姓ホースカーラン、名ヂヤケヤス」と書いている。その英訳とガボリオ原作は同じく Jacques de Boiscoran ボイスコランだ。普通に見て「Boiscoran ボイスコラン」から「ホースカーラン」は少し強引だと思う。涙香独自の表記法といえる。そこからの連想で日本名は星川となつたらしい。

星川の愛人が伯爵夫人ハホイス、日本名を梅姿 (ばいし) という。もとは Geneviève で英訳も Genevieve ジェネヴィエーヴだ。伯爵夫人は countess であつてハホイスとはもともと品詞も違う。ハホイスの由来は不明。

星川の婚約者が「ニシア 錦」である。この呼称が底本確定の決め手になる。

ガボリオ原作は Denise デニスだ。英訳2種も同様デニス。ところが涙香の手になると「ニシア」になっている。ニシアを日本名の「錦」にした。そこはい

い。だがもとはデニスなのだ。デニスとニシアでは一致しない。不思議に思うのが普通だろう。

ところが英訳のひとつに涙香「ニシア」の根拠がある。③ “WITHIN AN INCH OF HIS LIFE” のみは Dionysia デイオニシアと表記する。涙香は名前後半のニシアだけを切り取った。（文末に「人名対照表」を掲げる）

以上によって涙香が使用した底本は “WITHIN AN INCH OF HIS LIFE” であることをあらためて確認した。

4 涙香本の主題

本文に入るまえに本書の主題について説明しておく。

（中江）兆民居士「有罪無罪序」がある。人を有罪にするためには確かな証拠が必要だ。兆民は本書をそのように読んだ。だから「苟も法を学び律を講ずるもの一読せは必ず得る所あらん」と記す。有罪無罪の原理を知るにはこの涙香訳を読めば理解しやすいという。

また涙香自身も「凡例」において解説する（ルビ省略。以下同じ）。

此篇は或る犯罪の露見より説起し其原因を尋ね其罪を糺すまでの事を記したる者なれば則ち西洋にて探偵小説（デテクチウ、ストーリー）と称する者の類なり其主意は唯だ人間裁判の難き事を示し法律家が濫りに法律を使用して輒（たやす）く人の罪を定んとするの非なるを知らしむるに在るなり、法律家の証拠と見做す者未だ必ずしも証拠なりと云ふ可らず軽々しく証拠を信じて無罪の人を罪とするが如きは往々有り勝の事なれば此書を読む者若し自ら省みて法律の苟くも適用す可らず人の罪の苟しくも判決す可からざる事を知らば訳者の幸ひ何者か之に過ぎん 2-3頁

「証拠」といっても絶対的なものではない。真相を示す証拠と偽りの証拠がある。そのふたつを厳密に見極めることが必要だという趣旨だ。作品では弁護人と予審判事が証拠をめぐる水面下の戦いをくり広げる。その結果フランスで話題

の裁判になる。

事件は放火と殺人未遂から始まった。黒戸クロデウス（クロウ）伯爵の別荘が火事になり伯爵は射撃された。物的証拠はもともと少ない。散弾実包が残されているくらいだ。そこで人の証言をどう組み立てるかに比重がおかれる。証言が正しいとしてもそれが事件に直接関係するとは限らない。

目撃者証言が複数あり地方名家の子息星川が拘引される。弁護人はパリの探偵棟田トー、ダー（杜達）を雇い証拠を収集させる。その探偵が園芸好きというのが用意された細かな設定だ。探偵は果樹園つき別荘を捜査してそこが彼の気に入る（この伏線は物語の最後に回収される）。内情を知る人物を探してフランスからイギリスまで捜査範囲は広がる。牢獄にいる容疑者星川と許嫁錦嬢が手紙を交換するのに暗号を使用する（後述）。星川と黒戸伯爵夫人には秘密の関係があった。それを知った伯爵は報復のために星川が犯人だと証言した。その結果、懲役20年の有罪判決が出る。星川側はただちに不服を言い立てた。星川の無罪を証言する新しい証人を探しあてたばかりか、探偵棟田が努力の末に真犯人を突き止めた。黒戸伯爵は死ぬ前に嘘の証言をしたことを懺悔状に残す。こうして星川は放免され錦嬢と結婚する。以上が大筋だ。

小説の地理的規模はかなり広い。また多数の人間が登場してその関係が複雑に交差している。犯罪、恋愛、愛人、暗号、探偵、変装、裁判などの要素を総合した大衆小説である。今読んでも面白い。

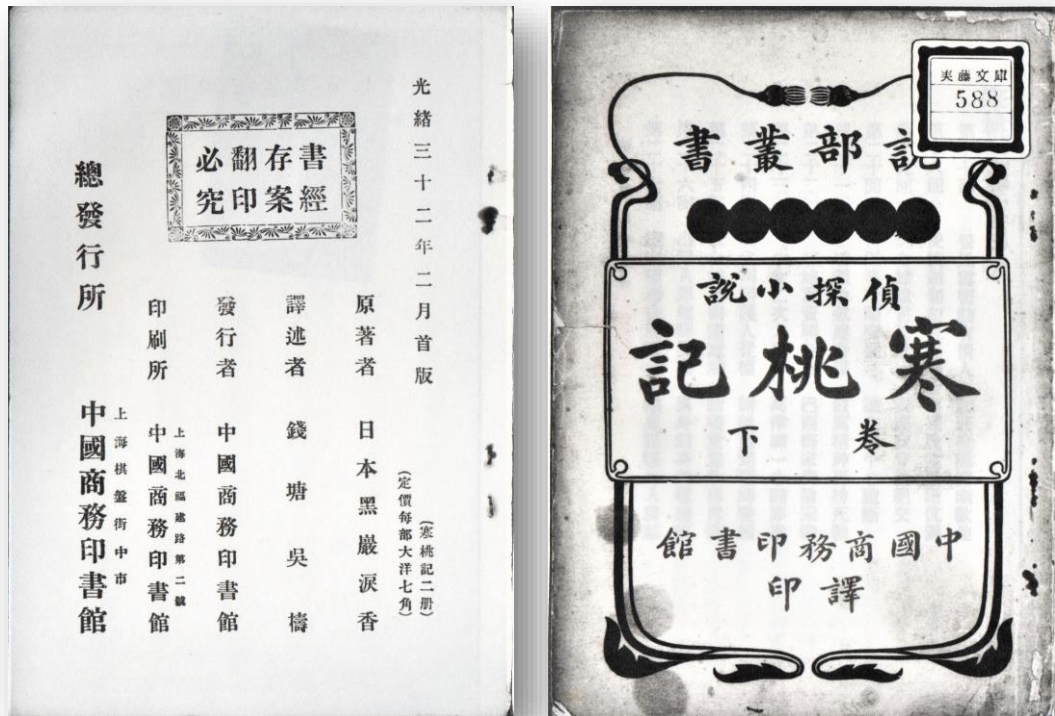
つぎに呉禱漢訳を紹介する。

5 涙香『有罪無罪』から呉禱『寒桃記』へ

（日）黒岩涙香原著、銭塘呉禱訳述『（偵探小説）寒桃記』32回 巻上下 2冊は商務印書館の説部叢書に収録されている。元版と後刷りの初集本だ。「原著」と表記するが「訳」とするのが正確である。とはいいながら前述のとおり涙香本には原作者ガボリオの名前がない。呉禱が涙香「原著」と示すのはやむを得ないだろう。現在の知識をもとにして「原著」は間違いだと批判するのはやりすぎだ。涙香日訳あるいは清末翻訳界の実情を知ればそこまで言うことはできない。

元版の第四集第一編は、上海・中国商務印書館、光緒三十二（1906）年二月首版だ。

その元版下冊が実藤文庫に収蔵される。集編番号の「第四集第一編」を●で塗りつぶしてある。これ以外に見たことがない。どうしてそうなっているのか理由は不明。



のちに初集第31編に編入された。上海・商務印書館 丙午（1906）二月／1913.12四版／1914.4再版などである。

興味深いのは『寒桃記』の底本が涙香訳『有罪無罪』だと判明した過程だ。書名を見る限り両者はなんの関係もない。

呉禱漢訳の題名が日本語作品と類似していれば底本も想像できる。たとえば尾崎紅葉著、呉禱『寒牡丹』（商務印書館1906）がある。そこから長田忠一、尾崎徳太郎『寒牡丹』（春陽堂1901）を探するのは容易だ。あるいは（英）勃拉錫克著、呉禱訳『車中毒針』（商務印書館1905）ならば英人ブラック演述、今村次郎速記『車中の毒針』（三友社1891）だと推測が可能である。

商務印書館發售儀器文具

物理化學器
博物標本模
體操音樂用
測量繪圖器
中西筆墨紙
幼稚園用物

以上各物為學校所必需。本館上海總發行所及各省分館均有發售。并有詳細目錄。如承函索。即行寄贈。

丙午年二月初版
中華民國二年十二月四版

(寒桃記二册)
(每部定價大洋柒角)

原著者 日本 黑巖 淚香
譯道者 杭縣 吳 禱
發行者 商務印書館
印刷所 上海 河南路 北首 寶山路
總發行所 商務印書館
分售處 上海 盤龍 街 中 市
北京 保定 奉天 龍江 吉林 天津 濟南
開封 太原 西安 成都 重慶 安慶 長沙
商務印書館分館
桂林 漢口 南昌 蕪湖 杭州 廣州
漳州 雲南 香港 貴陽 南京 蘭州

★此書有著作權翻印必究★

前清宣統三年四月初三日呈報五月十四日註冊



吳禱漢訳に注目する研究者は多くない。題名の離れた日本語底本を特定することはそれほど簡単ではないことも周知のことだろう。

前述中村論文が淚香『有罪無罪』に言及したのは1980年だった。それより先に指摘した人がいるかと調べた。

近いと思われる文献を示し関係部分を抜き出す（公表年を示す）。

1976 [中島76B-80] 黒岩淚香原作といわれるが未詳*7。

1979 [晩史注14-57] 黒岩淚香（一八六二～一九二〇）訳『仏蘭西小史 有罪無罪』（一八八九）の重訳*8。

1980 [中日870.043] 角書不記、Within an inch of his life、上海商務 1906（光緒32）2冊 19公分（説部叢書）；日訳本名為『有罪無罪』（1889年）；（実588・存卷下）*9

原作「未詳」と書いた中島を引用したのは次の『晚清小説史』訳注があるからだ。未詳から一転してこちらには涙香訳『有罪無罪』をはじめて明記した。もうひとつの『中国訳日本書綜合目録』には英訳題名を記述しているのが新しい。つまり中村論文を含めて各自が独立して呉禱漢訳の底本を探索していたのだと思う。それがほとんど同時期（1979年と1980年）に公表されたということだ。

先行文献の蓄積を統合して樽目録がある。初版（1988）から『寒桃記』の定本は『有罪無罪』であることに加えて英訳題名を添えて注記している。

6 呉禱漢訳『寒桃記』について

呉禱が涙香『有罪無罪』を漢訳書名の『寒桃記』に変更した理由は本書の最後に明らかになる（後述）。彼は涙香訳にある兆民序も凡例も省略した。

本文冒頭を比較対照する（下線は筆者。以下同じ）。それぞれの違いが明瞭だ。

【英訳】FIRST PART—FIRE AT VALPINSON

These were the facts: —

I.

In the night from the 22nd to the 23rd of June, 1871, towards one o'clock in the morning, the Paris suburb of Sauveterre, the principal and most densely populated suburb of that pretty town, was startled by the furious gallop of a horse on its ill-paved streets.

A number of peaceful citizens rushed to the windows. p.5

第1部——ヴァルピンソンの火事

事実は次の通りである。

I.

1871年6月22日から23日にかけての夜、午前1時頃、パリ郊外の主要で最も人口密度の高い美しい町のソーヴェテルでは舗装されていない道を走る馬の猛烈な疾走に驚かされた。

多くのおとなしい市民は窓に駆け寄った。

【涙香】○区長仙田長礼（原名。センデス、チョール）○貴族黒戸伯（原名。クロデウス）○警察長富地（原名。トーミジョン）○豫審判事軽褌（原名。ガルピン）○地名沢部町（原名。サルベチユア）○春辺村（原名。バルピンソン）
千八百七十年とは吾国の明治三年に當る歳にして則ち仏国が独逸の兵に攻られ巴里の都をまでも攻落されたる時なり此翌年と云へば我明治四年の事なる可し七月二十二日の夜十二時も過ぎ孰れの家も寝鎮まりたる頃無整（はだか）馬に打乗り此町を矢の如く馳せ行く一人の農夫あり其蹄の音静なる町の磬石（しきいし）を踏鳴して物凄く響きたれば眠れる人々も目を覚し時ならぬ此の足音何事なるかと店の窓より首を出し見るに 1頁

涙香は原作の部題「ヴァルピンソンの火事」を翻訳していない。また「**These were the facts:** —（事実は次の通りである）」も不必要だと判断したようだ。

涙香は地名と登場人物の名前を本書の各所に記述している。上の下線をほどこした「○区長仙田長礼（原名、センデス、チョール）……」という具合だ。本書ではそのようになっている。涙香の工夫である。

ガボリオ原作英訳と涙香訳を比較すれば、涙香は本文下線部分を加筆したことがわかる。1871年のことを言う前に明治3年云々を付け足した。西洋暦では読者が理解しにくい。1870年は普仏戦争だ。涙香は勝手に普仏戦争を冒頭に掲げたのではない。根拠がある。主人公が志願兵として参加し負傷したことがあると本文に述べられている（68頁／上68頁。涙香／呉構の順）。

英訳の6月を7月に書き換える。馬に乗ったのが農夫だというのは、英訳では後ろに説明される。それを前に移動させた。「ill-paved streets（舗装されていない道）」を「町の磬石（しきいし）」と訳したのは原文から離れる。

細かな加筆と違いはある。ただ全体からいえば涙香は英訳の原意を把握して自分なりの表現に直しているといえる。

呉構漢訳を引用する（傍線省略。以下同じ）。回目「克伯爵火裏遭槍 沈巡官村中勘案（クロ図クロデウス伯爵は火中で銃撃され 沈岱士センデス巡検官は村中で事件の調査をする）」を作った。最後には「且聴下回演説（次回につづく）」と書き入れ

て清末の読者にはなじみの章回小説風である。

【呉禱】話説西歴一千八百七十年、恰當咱們中国同治八年。正是法蘭西国、被德意志国兵打敗節節攻取。直欲打入法京巴黎都城之時。這第二年。當中国同治九年。七月二十二那天晚間十二下鐘、時候恰好夜半。巷柝正打三更。巴黎近處有個市鎮。合鎮人民。都已夢入黑甜。享那睡鄉風味。那時參橫斗轉。万籟無声。月淡如煙。夜涼如水。忽有一條街上。風馳電掣一般。駛過來一頭快馬。馬上騎著一個好似農夫模樣的人。儘著放開繮繩。向前飛跑。沿街鋪戶家人。有幾個被他驚醒。只聽得馬蹄四足和成兩声。撇撇拍拍。跌打著馬路碎石子響。寂靜中帶著凄切声音。覺得狠為詫異。隨有好事的披衣起来。推開二三層楼上窗戶。探頭出望。上1頁

さて1870年といえちちょうど我らが中国の同治八[九]年に当たる。まさにフランスがドイツ兵に打ち負かされ次々と奪い取られフランスの都パリが侵入されそうになった年だ。翌年、中国の同治九[十]年七月二十二日の夜十二時、ちょうど真夜中にパリ近郊のある町では全員が熟睡していた。深夜のことで物音ひとつせず月は淡く煙のようなもやがたちこめ夜はひんやりと涼しい。突然、通りを電光石火のごとく1頭の早馬が駆け抜けていった。農夫のような者が乗っており手綱を緩めたまま飛ぶように走った。沿道の家の人で驚いて目覚めた幾人かは馬の蹄がパカパカと道路の石を砕いて響くのを聞いたただけだ。静まりかえった中で痛ましい音であるのを訝って物好きな者が着物をはおると2階3階の窓を開けて首を突き出して眺めた。

涙香が「明治」を出したから呉禱はそれを「同治」に置き換えた。数字が異なるのは勘違いだろう。

普仏戦争が出てくるから呉禱もそのまま漢訳している。

ついでだからドーゼ作「ベルリン包圍」に触れる。当時のパリを舞台にした短篇小説として知られる。押川春浪の日記が「老愛国者」（単行本収録1912）である。呉禱がそれを「拊髀記（嘆きの老愛国者物語）」（1913）と題して漢訳する。この『寒桃記』より後のことだ。普仏戦争部分がつながる。

情景描写について呉禱の漢訳は加筆して飾る傾向がある。「都已夢入黒甜。享那睡郷風味」はどちらも熟睡していることを示す。対句風にした。同じ意味の異なった表現を重ねることで熟睡が強調される。

涙香訳にはない「参横斗転。万籟無声。月淡如煙。夜涼如水」も4文字で重ねると漢語として安定する気がするのだろう。「参横」はからすき星が横になる、「斗転」は北斗星が方向を変える。深夜を意味する。

早馬の目的はひとつだ。黒戸伯爵の別荘が火事になり同時に伯爵が射撃されたことを仙田センデス（沈岱士）区長に知らせることだった。

呉禱による独特な固有名詞漢訳法について説明しておく。

上の「仙田センデス」についてはカタカナにもとづき漢音訳して「沈岱士 shendaishi」である。中国人風に見えるかもしれないがもとづいたのは「センデス」だ。日本語の「仙田」は使用しなかった。

わかりやすいもう1例を示す。地名で「赤人の辻」（157頁）がある。涙香は説明して「原名、レット、メンス、クロス」だ。漢語に「辻」は存在しない。日本で作成した漢字だからだ。呉禱はそれを「立德門斯那條十字路」（下2頁）と訳した。カタカナの一部「レット、メンス」を音訳して「立德門斯 lidemensi」である。「クロス」は「十字路」に置き換えた。こちらは明らかに外国風の地名になっている。

この方法には同例がある。同じ黒岩涙香訳『梅花郎』を呉禱が漢訳した『棠花怨』（1908。初出は「博浪椎」1907）でも採用される。呉禱は原作者を「（法）雷科」と書いている。なぜそうなのか。「雷科」というフランス人作家は存在しない。ここが彼の独特な固有名詞漢訳法だ。涙香（るみかう）の日本語読みに漢語音を当てて「雷科 leike」にしたのだった。外国風の命名にして涙香から距離を置いた。さかのぼれば登張竹風訳『賣国奴』（1905）ほかがある。

区長は警察長と予審判事をともなって伯爵の別荘に急行した。

軽篋ガルピン（葛爾賓）予審判事を「発審官」とするのはいい。「発審局」は「讞局」とも言う。清代地方政府の裁判所を指す。富地トーマジヨン（杜美薫）警察長はそのまま「警察長」である。しかし仙田センデス（沈岱士）区長を「巡検官」と漢訳するのは少しはずれる。しかし清末に存在しない役所であればそれ

に近い漢語を当てるのはひとつの方法だ。

3名は夜中の3時にまだ炎上中の別荘に到着する。負傷した伯爵はベッドで閑登セグノボス医師（漢訳も閑登）から治療を受けている。そばには伯爵夫人（夫より27歳も年下）が立って心配げな様子だ。

伯爵夫人ハホイス梅姿（漢訳も梅姿）が登場する。品行方正、慈善家、名誉を重んじる貴婦人の手本としてその地方で有名な女性である。

【涙香】其傍らにありて灯火を手に持ち医師の眼に応じ左右に動かせるは是なん伯爵夫人なり三人は其容貌の麗しき中に充分の心配を包み所夫の痛みを身に引受け看病の労を取る有様を見て坐（そぞろ）に酸鼻の思ひをなし……

5-6頁

【呉禱】旁边有一個手裏執著灯台。跟著医生眼光。照来照去。就是伯爵夫人梅姿。三人一眼刮著。就看出夫人面貌。於美麗之中。含蓄著無数焦憂氣色。見他丈夫那樣痛苦。恨不得自己做了丈夫。替他代受勞傷。眼睛裏是珠淚盈盈。幾乎酸著鼻子。簌簌吊下。上6頁

傍らに燭台を手に持ち医師の目にしたがってあちこち照らすその人こそ伯爵夫人ハホイスである。3人は一目見て夫人の容貌の美麗の中に限りない心配の表情を含んでいることを知った。彼女の夫がそのように苦しむのを見て、自分が夫になり彼にかわって傷を負うことができたなら、と目には珠のような涙が溢れて辛く悲しくほとんどハラハラと流れ落ちんばかりだ。

涙香のいう「坐（そぞろ）に酸鼻の思ひをなし」というのは駆けつけた男3名の思いを指す。伯爵の側に燭台を持っている夫人の様子を見て「わけもなく痛ましいと感じた」。「酸鼻」の主語は男たちだ。ところが呉禱は「酸鼻」の主語を夫人に差し替えた。涙がはらはらと落ちそうだという箇所は呉禱の加筆である。涙香が使用する伯爵夫人ハホイス「梅姿」は呉禱も流用してそのままだ。伯爵夫人が夫のことをひどく心配している。これは事件の真相につながる重要な個所でもある。先回りして述べれば伯爵殺害未遂は夫人が行なったのではないかと疑う人がいる。もしそうであるならばあのように心配する様子は見せないだろうとい

う反論になる。

黒戸伯爵が目撃した放火謀殺犯は男であったというだけで人相も服装もはっきりしていない。その証言は後の裁判において特定の人物名を出すことに変更される。そうする理由があった（後述）。

犯人を名指しする証人が太々郎コ、リウ（郭古流）である。孤児でテンカンの持病がある20歳余の男性だ。伯爵夫人の尽力で医者に治療をしてもらったがうまくいかなかった（15頁／上16頁）。太々郎はこの火事で伯爵の娘ふたりを救い出している。彼は星川武保ホースカーラン（賀士倫）が犯人だと証言した。その姓が星川ホースカーラン（賀家村）という土地名になっている。先祖代々の名家侯爵の子息である。

星川は無実を主張するが拘引された。

7 錦嬢の登場

星川は錦ニシア（倪茜霞）と近日中に結婚する予定だった。錦嬢が登場する場面を引用する。星川の母、弁護士大川万英オルガー、マンエー（萬藹）、錦の祖父、親戚が集まって相談する場面だ。錦は星川の無実を信じて話す。

【涙香】「皆さん心配には及びません武保に罪があれば救ふ事も出来ますまいが彼れに罪のない事は私しが存じてみます一昨夜（犯罪の夜）武保は此家へ来る筈になってゐたのを午後四時頃になり捨置難き用事が出来たから今宵は行かれぬと断りの手紙を寄越しました其手紙は全紙に四枚まで長々と書いてありますが武保が若し悪事を計みアの晩人を殺す程なら決してアのような落着た手紙は書けません既に祖父様にも其手紙を見せましたが私しは是が潔白な証據と思ひます、此通潔白な武保ゆえ既に巴里から名高い大川さんも御出になれば心配には及びませぬ心配よりは直様救ひ出す手続が大切ではありませんか」と少女に稀なる氣象を現はし一坐の人を励ませば…… 56-57頁

【呉禱】諸位長輩。毋須著急。總之。賀士倫哥哥如果有罪。也沒有謀救之法。但他實在沒罪。我是知道的。前天（犯罪那天）賀士倫哥哥本約定午後四點鐘

到我家来。後來不知為什麼要緊事。送過一封信来。說今晚不能踐約来到。那封信写得很長。有四張紙之多。他若是為非作歹。那一晚要去殺人。也断没有心思。写出那樣定心精細的信来。家祖父也會看見。那封信是他十分清白。如今又有巴黎頭等有名律師万先生同著前来。這有什麼著急。与其空費著急。還不如趕快設法救出他来。那是最要緊的。倪茜霞說這一番勤勵的話。…… 上
58頁

皆さま方、ご心配には及びません。いずれにしても、ホースカーラン兄さんにもし罪があれば救う方法ありませんが、しかし彼には本当に罪がないことは私が知っています。一昨日（犯罪のあの日）賀士倫兄さんは午後4時に私の家に来るというもとの約束でした。後にどういう緊急の用事かわかりませんが1通の手紙を寄こして、今晚は行く約束を果たせないということでした。その手紙は長々と書いてあり4枚もありました。彼がもし悪だくみをしてあの夜に人を殺すつもりならばあのように落ち着いた手紙など決して書こうとは思わないでしょう。祖父も読みました。その手紙が彼の十分な潔白さの証拠です。今またパリの名高い弁護士オルガーさんにも来ていただきましたから何の心配があらましようか。心配に空費するよりはどうかして早く救い出すことのほうが大切です。ニシアはそう励ますと……

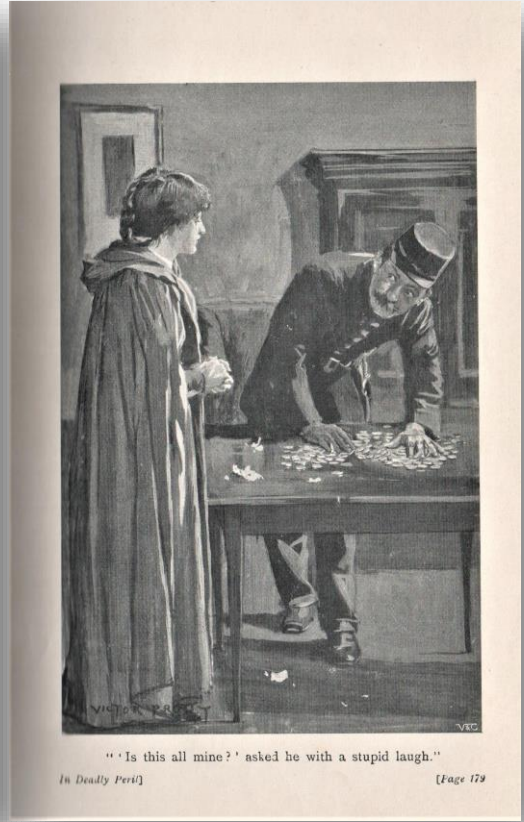
小さい部分の勘違いはある。ふたりが会うのは今夜の約束であって吳禱訳のように「午後4時に私の家に来る」ではない。別の個所で星川が手紙を書いたのが午後4時だとする（68頁／上69頁）。それと合致しない。あるいは手紙の大きさ「全紙」を省略した。細かいことだ。

こういう一見何でもない場面に翻訳者としての姿勢があらわれる。漢訳者によっては勝手に削除、加筆するばあいがある。だが吳禱は普通の話をもそのまま丁寧に漢訳している。ほとんど直訳であるといっている。

獄中の星川は弁解説明を一切しない。伯爵夫人との関係を秘密にしたからからだ。これが予審段階では大きな障害となった。錦嬢は現状打開へと動く。獄中の星川と連絡を取る必要がある。星川へ手紙を渡してほしいと裁判所書記鞭根マチ子一（馬迪廩）に大金を差し出しもした（100頁／上103頁）。



錦嬢と書記鞭根



“‘Is this all mine?’ asked he with a stupid laugh.”
in *Deadly Peril* [Page 179]

牢番に金貨を与える 英訳本②より

8 加筆と暗号通信文の削除

結局、鞭根（馬迪麻）は金を受け取らなかった。しかし手紙の方はどうにかするという。そこで錦嬢は星川への手紙を書く。牢獄の中で星川が所有する書物に空巴くうばあ（空葩）の小説があることを知る。そこで錦嬢は手紙に「武保よ、御身は妾に隠す事なかれ隠さず御身の密事を打明けよ、御身は既に「件の書」を手に入れたるからは誰憚らず充分に返事せよかし」（103頁）と内密に理解できるように書いた。「件の書」とはクーパー小説を指す。クーパー（JAMES FENIMORE COOPER、1789-1851）は実在するアメリカの人気作家。「件の書」は英訳では“*our book*”と強調して表記する。他人には気づかれない書き方であ

って、これは錦嬢が星川へ示したふたりだけの符丁だ。

涙香は読者の注意を喚起するために次のように説明した。

【涙香】今此錦嬢の認めたる手紙にも「件の書」とあるは何事なるや此三字に意外なる意味を含み居る事は後に至りで判然すべし 103頁

【呉禱】如今。倪茜霞信中突有「彼之書」三字。你道是什麼緣由呢。這三箇字。現在莫說。看官們不解。就是說書人也有些孤疑。不能知道仔細。須到後來。纔得分明。這時且暫為攔起。叫看官們猜量猜量。上109-110頁

今、ニシアの手紙の中に突然「あの書」という3字があるが、読者はどういう理由だと思われるか。今は言わないから読者諸君も分からないだろう。かくいう私もいささか疑っており仔細を知ることができない。後に至って必ずや明らかになるだろう。ここはしばらく放っておいて皆様方の推量におまかせする。

呉禱漢訳は涙香訳に似ている。ただし涙香とは微妙に違う。涙香は訳者として「件の書」が何であるかを把握している。種明かしは後でやるという説明だ。涙香本ではそのとおりになった。

しかし呉禱は「説書人」という単語を使って講談読みを思わせて本人も理解していないように書いている。そうして奇妙な結果になる。呉禱漢訳本では「あの書（彼之書）」の謎は最後まで明かされることはない。

星川が牢獄で錦嬢の手紙をどのようにして受け取り返事をどう書いたか。涙香訳には具体的な説明はない。詳細を描写せずとにかく返信があったことになっている。

ところが呉禱はここに大幅な加筆を施して説明した（第11回上112頁・第12回上117頁）。書記だけでは手紙を星川に手渡すことができない。牢番に話を通す必要がある。牢番の妻が牢獄の洗濯を担当しているからそれを利用して星川に手紙を渡し返答をもらったと詳細に述べる。涙香訳には存在しない。

注目するのは星川からの返信だ。涙香は原文に忠実にその手紙がどのようなものかを示す。「（三十一）九、十七、十九、廿三……」（107頁／上削除）と数字

が羅列してあるだけ。暗号文であった。それが「あの書（彼之書）」と関連する。

錦嬢がこの読み方を解説する。元本は例のクーパー本だとわかっている。31はページ数を意味する。次の9は9番目の単語というわけ。暗号通信をするにはこの方法が一番簡単だ。元本を両者で決めればいいだけのこと。別の書物に変更することもできる。他者にはそれがわからない。ゆえに他人にとっては解説が極めて困難である。涙香訳は英訳本の通りに辻褄があっている。

ところが驚いたことに呉構は暗号文を示さない。普通の文面でそれも涙香訳約2頁を4行に圧縮して漢訳している。暗号文にしなかったから錦嬢による解説法の説明は必要ない。すべて削除した。せっかく「彼之書」「空葩」を漢訳したにもかかわらず種明かしはされずじまいとなった。ここの呉構の漢訳処理は不可解である。清末の読者は首をひねっただろう。謎が未解決のまま放置されたからだ。

星川が牢獄にあって弁解説明を一切しない理由があった。前述のとおり愛人関係にあった伯爵夫人の名前をどうしても出したくなかったからだ。錦嬢と結婚することになっていたからなおさらだった。

その錦嬢が今度は牢番に金を渡して手引きしてもらい自ら牢獄に忍び入った。予審の間に弁明しておかなければ公判になると取り返しがつかない。錦嬢は星川に話すように懇願したが彼は頑なに拒否した。具体的な名前も出さず事実を告げようとはしなかった。

星川が態度を変えたのは予審が終了し公判が始まることになったからだ。星川はもうひとりの弁護士真倉マグローイ（穆克蘭）にすべての事情を説明した。

9 星川と伯爵夫人の直接対決

伯爵夫人と愛人関係になった経緯、5年にわたる密会の詳細、最後は関係解消のためにやり取りした手紙をふたりで焼却したのは事件当日だった、火事と射撃は知らないなど、第17章149頁から第21章186頁までが星川の告白だ。呉構漢訳では第16回巻上162頁より第19回巻下31頁が該当する。呉構は削除も加筆もしない。涙香訳に忠実である。

星川の証言はあってもそれを証明する物的証拠が一切存在していない。これが

本事件の最大の問題だ。ゆえに真倉弁護士は星川の言葉を信じようとはしない。注目点は証言を裏付ける証拠の有無である。

小説はこれより様相が一変する。読者は星川の告白によって彼と伯爵夫人の愛人関係を知った。その星川自身は放火と殺人未遂を否定している。弁護士たちは無実の証拠をどの方面に向けていかに探索するのか。星川が犯人でなければ伯爵夫人が犯人か。それとも真犯人は別にいるのか。究明すべき謎を設定して読者の興味をつなぎながら物語は進んでいく。犯人を追及する探偵小説の典型である。

物的証拠が皆無だから公判で伯爵夫人の名前を出すことはできない。大川弁護人を伯爵夫人へ差し向けたがあっさり撃退された。切羽詰まった星川は牢番に話をつけ（ワイロを渡し）て牢獄を抜け出し伯爵夫人と直談判する。

ふたりの話が最初からかみ合わない。その理由はふたりとも放火狙撃の現場を見ていない。にもかかわらず相手が犯人だとお互いに固く信じ込んでいるからだ。推論にたよって非難の応酬をしている。会話の一部を並置して引用する。

【涙香】麗しき夫人の顔も言ふに謂はれぬ驚きと恐れの相を現はし 夫「是は怪しからん一 武「何が怪しからん 夫「人の家を焼き人の所夫を殺した癖に一 262頁

【呉禱】好一個嬌美艷麗的夫人。心裏不知担著多少的驚恐。使盡全身之力。勉強言道。這個實是可怪。下115頁

とてもなまめかしく美しい夫人は心中にどれほどかはわからぬ驚きと恐れを抱きながら全身の力を振り絞りやっとのことと言った。これは実に奇妙な。

涙香の使用する「一」は「！」と同じことだ。「夫」は伯爵夫人を「武」は星川を示す。呉禱はカッコを使用していない。彼は下線部分を省略した。続く箇所と同様の表現があろうともここは漢訳すべきだった。

【涙香】武「手前の口から此己を人殺しの放火のと能くも先ア其様な嘘々しい事が云はれた者だ」 262頁

【呉禱】賀士倫道。打你嘴裏。親口誣我放火殺人咄。為何。……你和我結下

什麼冤讐。為什麼捏造那樣假話。下115頁

ホースカーランは言う。お前のその口から私を放火の殺人のと濡れ衣をさせるというのか。なんということだ。……お前と私にどんな怨みがあるというのか。なぜそのような嘘を捏造するのだ。

星川ホースカーランの反論部分を見る。

【涙香】此横着者め手前自分で我夫を殺したのを知らぬのか、自分で殺して誰がとは何の事だ、手前はナ、己が錦嬢と婚姻する事を聞き嫉さ悔しさに女たるの道を忘れ其婚姻を妨げんため自分で所夫を殺したのだ、先の夜手前に逢った時己は偽りの涙に欺かれ手前の悲みを思ひ遣り迫ては其心を慰めんとて我れ唯だ汝に所夫ある為め汝を娶り得ざるを憾むと気休の言葉を吐いたところ手前は夫を真に受けて妾若し此事を知らば早く自由の身となりし者をと天に手を挙げ祈つた事を忘れはしまい自由の身とは何の事だ即ち夫を殺すと云ふ明白な意味ではないか、コレ女、有体に白状せよ、是でも猶ほ隠す事が出来ると思ふか 263-264頁

【呉禱】兀那淫兇刁惡的梅姿啊。你自己殺了丈夫。故作不知嗎。自己殺了。還道是誰。那是什麼鬼蜮的心計。你因聽見我和倪茜霞結婚。心裏又悔又恨。起了嫉妬。撇了婦女家正道。要阻害我的婚姻。為此自己謀殺伯爵的。那天晚上。我和你見面之時。受了你幾点眼淚的欺騙。瞧你無限悲傷。我倒很為憐憫。意欲將幾句寬解的話。安慰你的心。却歎惜著為你有了丈夫。不能娶你為妻。這也是真情實理。誰道你聽了。道我的話是真。說我若早知如此。早已做了自由自在之身。举手向天。不知祈禱些什麼混帳話。你靈心没死。斷不遺忘。試問你說自由自在之身。那是怎麼講。什麼事。那不是明明白白。起了謀殺丈夫的很[狠]心麼。這箇梅姿。快些招認下來。到得如今。你道還能隱瞞欺騙麼。下118頁

この凶悪狡猾なハホイスよ。手前は自分で夫を殺したのにわざと知らないふりをするのか。自分が殺しておいてまだ誰がやったのかというのか。それはどういう魔物の策略だ。手前は私がニシアと結婚するというのを聞いて

悔やみ怨み嫉妬して婦人の正道を投げ捨て私の婚姻を阻止しようと自分で伯爵を殺したのだ。あの日の夜、私と手前が会った時手前の涙に騙され手前の限りない悲しみを見て私は憐憫をもよおした。なにかなだめの言葉をかけて慰めようと考えたから、汝に夫があるために汝を妻にすることができない、これは本当のことだと嘆き惜しんだのだ。まさか手前がそれを聞いて私のことばが本当ならば、妾がもしそれを早くに知っていたなら自分は自由自在の身になっていたなどと言って天にむけて手を挙げなにやら知らないが愚かなことを祈ったこと、汝の魂が死んでいなければ断じて忘れはしまい。汝がいう自由自在の身とはなんだ。それはどういう意味でなんということなのか。明らかに夫を殺すという決意をしたのではないのか。これハホイスよ、はやく白状しろ。今にいたるも汝はまだ隠し立てして騙すことができると思うのか。

呉禱は「那是什麼鬼蜮的心計（それはどういう魔物の策略だ）」などと少しの言葉を補足しながら涙香訳をほぼ忠実に漢訳している。

ふたりは互いにお前が犯人だと大声で罵りあう。重傷で寝ている黒戸伯爵の耳に届かないわけがない。伯爵が登場する。

【涙香】忽まち入口の外に声あり「コレ待て兩人」と呼留るは正しく黒戸伯爵の声なれば夫人も武保もキヤツと叫び驚いて振返れば瘦衰へし黒戸伯爵右の手に短銃を持ち左の手にて戸を開きつ二人の顔を佶と眺め 伯「先程より残らず聞いた一覚悟を致せ」268頁

【呉禱】忽聽得窗戶外面。来了一声。喊道。這箇慢著。你兩人。原是拆勸阻止的話。兩人一聽。不是別人。乃是克洛凶伯爵声音。兩人哎喲驚叫起来。連忙探頭一望。瘦瘠不堪面無人色的克伯爵。右手挾著手槍。左手推開門朝^{ママ}。兩边看著兩人的臉色。說道。你們所說。我起初就聽得分明。我纔覺著醒悟。下123頁

たちまち窓の外から声が聞こえてきて、これ待て、兩人、と押し留めるように叫んでいるのだった。聞けばほかならぬクロデウス伯爵の声だから兩人

はワッと悲鳴をあげて急いで首を突き出して見れば、ひどく痩せ衰え血の気のない顔をしたクロデウス伯爵が右手に短銃を持ち左手にドアを開いてふたりの表情を見ながら言った。お前たちの話は最初からはっきりと聞いたぞ。わしはようやく目が覚めた。

涙香訳の「覚悟を致せ」は命令形だ。撃ち殺してやるから観念しろ、と星川へ向けた脅しである。ところが呉禱は日本語の「覚悟」に引かれて漢語の「醒悟（目が覚める）」だと誤解した。命令形を無視したということだ。呉禱は日本漢字の字面から連想することがたまにある。その例のひとつだといえる。

伯爵夫人と星川の関係を知った黒戸伯爵は復讐する。裁判で殺人犯は星川だと嘘の証言をすることに決めた。射撃して逃げたのは男だったが誰かはわからない、という最初の言葉をひるがえすのだ。こうして星川には万策がつかた。

公判において事実の認定をめぐるって判事検察官と星川のやりとりがいくつも行なわれた。結局のところ決定的な証言となったのが被害者黒戸伯爵自身のものだ。星川が犯人だと名指したあと別室で死去した（と見えた）。陪審員により星川の有罪が定められ閉廷する。裁判内容で注目すべきは伯爵夫人の名前が出てこないことだ。作者は意図的に伏せた。大団円にもって行くための措置である。

その後、星川と伯爵夫人の会話を盗み聞きしたという証人が登場する。黒戸伯爵が偽証をすることまで述べた。さらにイギリスから証人を連れてきて別荘で密会していたのは伯爵夫人だとのべる。ついには探偵が真犯人を見つけ出した。

最終局面を迎える。加えて死に臨んだ黒戸伯爵が偽証をしたと認めた懺悔状をそろえた。3日後に星川は放免となった。真犯人がつかまったから星川と伯爵夫人の秘密事情は表立つことはなかったのだ。黒戸伯爵の二女も死去し夫人は長女を連れて実家にもどる。それ以後は一切の社会的交際を絶った。星川は錦嬢と結婚し、星川を犯人だと徹底的に追及した軽褓予審判事はアフリカのアルジール（アルジェ Algiers）へ左遷された。

涙香が英訳から削除した個所がある。探偵は真犯人を捕まえる際に犯人によってナイフで2刺しの傷を受けた（p.210）。彼がパリの果樹園つき別荘を自分のものにした代償である。涙香訳にこの部分がないから呉禱漢訳にも存在しない。

涙香が翻訳しなかったのはそればかりではない。真犯人が終身重労働 (hard labor for life p.212) の刑に処せられたことも書いていない。普通に考えれば真犯人を尋問する過程で星川と伯爵夫人の秘密は明らかになったはずだ。しかし作者自身がそれを記述したくなかったのだろう。その事実を伏せたままで作品を完了させた。涙香の翻訳にもとから言及のない理由である。

本作品の最後は元探偵棟田の桃で締めくくる。次のとおり。

【原作】 Et Goudar, jardinier pépiniériste, vend les plus bells pêches de Paris.

また苗木屋のグーダーはパリで最高の桃を売っている。

【英訳】 And Goudar, in his garden and nursery, sells the finest peaches in Paris. p.212

そうしてグーダーは自分の庭や種苗園でパリで最高の桃を売っている。

【涙香】 探偵棟田は辞職して林町の別荘に引移り菓物の手入に余念なし巴里の料理屋にて珍客に供ふる第一等の寒桃は此別荘より出る者なり看客若し巴里に到らば忘れず其桃を味ひ給へと爾云ふ。316-317頁

元探偵棟田トー、ダー（杜達）は星川の別荘を入手し趣味の果実園育成に力を注いだ。これが伏線の回収である。英訳では「最高の桃」だが涙香はそれを「寒桃」に置き換えた。呉禱はさらにもう一ひねりする。

【呉禱】 偵探杜達。特地辞了職。移住在巴西街的別荘。種植果物為樂。那莊子上有一種桃子。很為珍貴。巴黎酒飯館裏。恭敬上客。作為貴品的第一等寒桃。就出在那莊屋之內。別處生產甚少。看官們若有一天前往巴黎。切莫忘記。嘗嘗那寒桃的風味。訳書的人。因為有這一段因縁。留下一点古跡。因此取書名為寒桃記云。下171頁

探偵トー、ダーはわざわざ辞職してハヤシ町の別荘に移住すると果物を植えて楽しんだ。その別荘には珍しい桃があった。パリのレストランでは常連客をもてなすための貴重な第一等の寒桃とされるが、この別荘から出るもの

であって他所での生産ははなはだ少ない。読者諸君がもしパリに行くことがあればけっして忘れずにこの寒桃の風味を味わってみたい。訳者はこの一段があるゆえにその痕跡を留めんがため書名を『寒桃記』とするのである。

中村（49頁）は上の箇所を引用して呉禱漢訳『寒桃記』の由来だと指摘している。

『寒桃記』はもとの涙香訳『有罪無罪』よりも優雅な命名ではある。ただし同じく呉禱漢訳『寒牡丹』と「寒」が共通してまぎらわしい。実際に取り違えている記述がある。

10 結 論

細かく見れば呉禱漢訳が涙香訳の不備を正している箇所もある。黒戸伯爵の娘はふたりいる。長女はマーサで二女はバーサだ。涙香訳はどういうわけか長女と二女を同名の「雅子」にする。しかし呉禱は長女を「美紗」とし二女には「葩若」を当てて区別している。細かいがここは涙香訳よりもすぐれている。

呉禱が暗号通信文の箇所を省略したのは残念なことだった。それがあれば暗号小説としても成立していた。しかしそれらを除いて全体を見れば一貫して涙香訳に忠実な漢訳だ。

この長篇探偵小説を大きな破綻もなく大筋を変更することもなくまとめて漢訳した呉禱の手腕は高く評価できる。

人物対照表

原作	英訳	涙香	呉禱	備考
Sénéschal	Seneschal	センデス、チヨール 仙田長礼	沈岱士	区長
Trivulce de Claudieuse	Trivulce Claudieuse	クロデウス 黒戸	克洛因／ 齊克家	伯爵
Daubigeon	Daubigeon	トーミジヨン 富地	杜美薫	警察長
Galpin-Daveline	Galpin	ガルピン 軽篋	葛爾賓	予審判事

Geneviève	Genevieve 2/Genevive	ハホイス 梅姿	(克) 梅姿	伯爵夫人
Tassar	Tassar	タサース 田沢	笄若士	貴族。梅姿の実家
Seignebos	Seignebos	セグノボス 関登	関登	過激医者
Berthe	Berthe	バーサ 雅子 (長女と同名)	葩若	伯爵二女。星川の娘
Cocoleu	Cocoleu	コ、リウ 太々郎	郭古流	目撃者。テンカン 81 頁
Jacques de Boiscoran	Jacques de Boiscoran	名ヂヤケヤス 姓ホースカーラン 星川武保	賀士倫	主人公、梅姿の愛人
Ribot	Ribot	リポー 利吉	李波	証人
Gaudry	Gaudry	ゴードリー 郷太郎	敖德利	証人
Courtois	Courtois	コーチス お幸	顧斉氏	証人
Chandoré	Chandoré	シヤンドア 山堂家	倪家	錦の家
Denise	Dionysia 1/2/Denise	ニシア 錦	倪茜霞	星川武保の許嫁
Méchinnet	Méchinnet	マチ子一 鞭根	馬迪竊	判事書記
Antoine	Anthony	アンソニー 案蔵	韓索	星川武保の下僕
Manuel Folgat	Manuel Folgat	姓オルガー名マンエー 大川万英	萬藹	弁護人
Grand-père Chandoré	Grandpapa Chandoré	直家/55 頁	倪友嘉	錦の祖父
Francis Burnett	Francis Burnett	マルセツト 英人丸瀬	英国人馬士徳	星川武保の友人、また星川が使用
Michel	Michael	ミチエル 道次	米泰爾	門番の息子
Blangin	Blangin	フランキン 蘭太郎	福狼根	牢番
Colette	Colette	お稲	綺奴	蘭太郎の妻
Frumence Cheminot 2/同上	Trumence	ツルメンス 鶴之助	祝蛮斯	牢番
Cooper	Cooper	くうばあ 空巴	空葩	小説家
Magloire Mergis	Magloire	マグローイ 真倉	穆克蘭	代言人。弁護人
Suky Wood	Suky Wood	スーキー、ウート 薄木歌	荷丹	英人下女
Goudar	Goudar	トー、ダー 棟田 (田棟)	杜達 (達杜)	パリの探偵
Barousse	Barousse	ハラウス 原白	郝羅士	探偵
Marthe	Martha/158 頁	マーサ/241 頁 雅子 (二女と同名)	美紗	伯爵長女

Domini	Domini	タミナイ 民内	湯美那／ 銘納	裁判長 判事
Du Lopt de la Gransière	Gransière	ホール 堀	藿羅	検察官 判事

【注】

- 1) 国立国会図書館デジタルコレクション所収。初出は『絵入自由新聞』1888.9.9-11.28 連載。未見。架蔵本にも表紙に仏蘭西小説、涙香小史訳とある。楽栄堂、大川屋書店 1889.11.5／1904.1.3改刻初版
- 2) 緒方流水（維獄）『青眼白眼』鳴臯書院1902.6.2／1902.8.10再版。160頁
- 3) 柳田泉「黒岩涙香翻訳小説目録」『書物展望』第49号 1935.7.1。44頁
- 4) 坂本由五郎、小澤明子「黒岩涙香」人見圓吉『近代文学研究叢書 第19巻』昭和女子大学1962.12.20。460頁
- 5) 伊藤秀雄『（改訂増補）黒岩涙香その小説のすべて』桃源社1979.5.15。25頁
- 6) 中村忠行「清末探偵小説史稿——翻訳を中心として（3・完）」『清末小説研究』第4号 1980.12.1。48-49頁
- 7) 中島利郎「晩清の翻訳小説——華訳日文小説編年目録初稿」2 関西大学大学院文学研究科院生協議会『千里山文学論集』第16号 1976.10
- 8) 阿英著、飯塚朗＋中野美代子訳『晩清小説史』日本・平凡社 東洋文庫349 1979.2.23
（注は中島利郎）
- 9) 実藤恵秀監修、譚汝謙主編、小川博編輯『中国訳日本書綜合目録』香港・中文大学出版社1980

呉禱漢訳『寒牡丹』

——尾崎紅葉『寒牡丹』

『清末小説から』第144号（2022.1.1）に掲載。尾崎紅葉『寒牡丹』の原作が何であるかは判明していない。ロシア貴族の男性が女性に性的暴行をはたらいた。ロシア皇帝の裁定でその後の両者に奇妙な関係が生じる。衝撃小説とっていい。呉禱はそういう小説を漢訳した。同時代人の発言を紹介しながら漢訳の中身を検討する。

1 紅葉『寒牡丹』

本稿で取り上げる呉禱漢訳『寒牡丹』の底本は次のとおり。

尾崎徳太郎、長田忠一著『寒牡丹』（春陽堂1901.2.6。初出『読売新聞』は未見）は本文に秋濤居士、紅葉山人を著者とする。

著書のどこにも翻訳だとは明記されていない。しかし原作があることは知られている。その原作については不明のまま。

山田有策ほか編『尾崎紅葉事典』（2020）*1には次のように説明する（渡辺麻実執筆）。

「原作は未詳」（35頁）。該作品の問題点をあげて「それらを評価する上でも、原作の特定、翻案・改作箇所を検討が課題となる」（36頁）という。

原作が不明だと紅葉が手を加えたか改変したかが確定できないという意味だ。紅葉は『侠黒児』において結末を書き換えたことがある。ケガですんだ主人公の黒人を死なせた*2。

紅葉と並記されている長田秋濤が原作あるいは翻訳を提供したのだろうか。詳



架蔵

細は不明。「秋濤訳、紅葉校」と記述する「近代書誌・近代画像データベース」もある。本稿では共訳としておく。

秋濤については秋山勇造「長田秋濤」（1998）^{*3}に詳しい。それによると秋濤は幼時よりフランス語を学び留学をしている。またイギリスのケンブリッジ大学でも学んだ。フランス語と英語に堪能だという。秋山は秋濤翻訳の2大特徴を次のように説明する。「一つは翻訳の文体がほとんどすべて言文一致体であったこと、もう一つは彼の翻訳がすべてフランス語からの翻訳であったことである」174頁

秋山論文は酒井美紀『尾崎紅葉と翻案』（2010）^{*4}に影響を与えたかもしれない。酒井は『寒牡丹』に言及して次のとおり（アラビア数字を使用する）。

「『寒牡丹』（長田秋濤と共訳）／明治33年1月1日～5月10日／『読売新聞』全95回。原作・原作者未詳フランス小説か」（33頁）

酒井が「フランス小説か」と推測した根拠は秋山論文ではなかろうか。秋濤が

フランス語を使用して翻訳したという知識があるからだろう。違っていたら申し訳ない。

現在のところ外国作品を秋濤と紅葉が共訳したということしかわからない（略称は紅葉訳）。

紅葉訳に使われる単語にひとつの傾向がある。添えられたルビ（カッコに入れる）などの例を示す。

カタカナ表記の傾向

紅葉	英語	フランス語
聖彼得堡（セントピイタ アスブルグ）	Saint Petersburg	Saint-Pétersbourg サンペテルブーグ
チヤアチ	church	église
友誼（フレンドシツブ）	friendship	l'amitié
卓子（テエブル）	table	table タブレ
窓帷（カアテン）	curtain	rideau
檻車（キピトカ）	culprit car	voiture coupable
庖人（コツク）	cook	cuisiner
新聞（ニュース）	news	nouvelles
シオウル	shawl	châle
ラムプ	lamp	lampe ラン
リウマチズム	rheumatism	rhumatisme ルーマチ
ピストル	pistol	pistolet ビストレ

カタカナ表記の使い方を見れば英語だ。秋濤がフランス語から翻訳し英語読みのルビを振った。あるいは紅葉が校閲して英語風に変更したか。どちらの可能性もある。原作が不明だから事実はわからない。秋濤がフランス語からしか翻訳しなかったというなら矛盾している。ロシアの地名が出てくるのは事実だ。しかし詳細に描写されるわけではない。秋濤が資料提供して紅葉が創作する。その可能性はまったくないのだろうか。手がかりがないから判断に迷う。

また田中彌十郎が秋濤著作には他人による下訳が多いことを指摘している。「秋濤の著作に代訳或は下訳が多いことは昨年の本誌（注：書物展望）にも一寸述べたが、最近直接その事に當った彼の門下生伊藤重次郎氏にお会ひして詳細を聞くことを得た。彼の下請文章家としては二六新報記者だつた故鍋田永村氏があ

り、この人は漢文調の名文家であつた。伊藤氏はこの鍋田氏よりはやゝ遅れて秋濤の下訳を仰付けられたらしい」（15頁）*5

そうであれば原作の探索は一層の困難がともなうだろう。

本稿ではとりあえず原作不明のままにして記述する。

紅葉が原作について表現などに独自の手を入れたことはありうる。ただし（原作があるとして）物語の大筋は守っているだろう。小説全体の構成を見ると破綻した個所がない。基本の設定は原作のままだという印象を筆者は感じる。原作が見つければその時に考え直す。

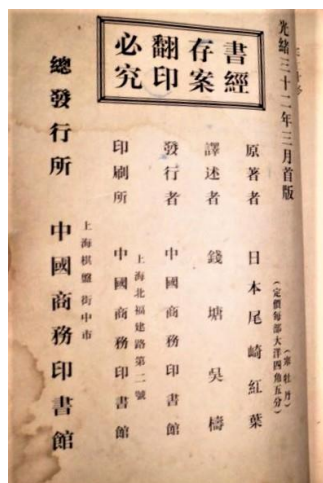
ということで紅葉翻訳とそれを底本にした呉構漢訳を比較対照して検討する。

2 呉構漢訳

（日）尾崎紅葉著、錢塘呉構訳『（哀情小説）寒牡丹』は商務印書館「説部叢書」に収録された。

2種類ある。ひとつは元版でもうひとつは後刷りの初集本だ。ふたつを簡単に示す。

1 元版 上下巻：上海・中国商務印書館 光緒三十二（1906）年三月首版
説部叢書第四集第十編（孔夫子旧书网）



2 初集本 上下巻：上海・商務印書館 丙午（1906）年三月初版／中華民國二（1913）年十二月三版 説部叢書初集第41編



本稿では2の初集本を使用する。

吳構漢訳は紅葉日記本に記載される長田忠一（秋濤居士）を省略した。漢訳の表記から原作者は尾崎紅葉ということになる。日本人の紅葉がロシアを舞台にした恋愛小説を書いた。吳構はそう理解していただろう。

『寒牡丹』という題名から寒冷地の女性を主人公にしていることはわかる。最後に主人公が高貴、富貴の寒牡丹になることを暗示するのかもしれない。しかしその印象は作品の冒頭を読むことによって打ち碎かれる。

もともと大衆恋愛小説である。性的暴行を受けた被害者（庶民階級）が加害者（貴族階級）に恋愛感情を抱きそれが成就する。始まりがはじまりだからいわゆる衝撃小説だ。その結末を指して紅葉は寒牡丹だといいたいらしい。

原作の題名は『寒牡丹』ではないだろう。英語で cold peony フランス語の pivoine froide では書名にはなりにくいと想像する。原作は内容から見ても具体的な別の題名があるはずだ。それを日本語に翻訳する際、すこしひねって『寒牡丹』という日本風の題名にしたと思う。

両本の章題（回目）を抜き出して対照する（ルビ省略。以下同じ）。紅葉本は1

冊。呉構漢訳は2冊で彼は回目を2文字にまとめた。紅葉訳の内容をほぼ要約して簡潔に表現している。両者の各章対照表を見れば完全に一致しているわけではないことがわかる。巻下では日訳を分割して漢訳した箇所もある。しかし内容は基本的に同一だ。

巻 上

1 雪中の狼藉	第1回 遇奸（悪漢に会う）
2 不幸の盃	第2回 喪母（母を亡くする）
3 背の冷汗	第3回 行私（私心）
4 掌上の人形	第4回 悔罪（罪を悔いる）
5 一万五千ルウブル	第5回 拒金（金を拒否する）
6 老の歎願	第6回 謁邸（屋敷に参上する）
7 門前の一瞥	第7回 靚讎（仇を見る）
8 驚天動地	第8回 索犯（犯人捜し）
9 結婚の刑	第9回 婚刑（結婚の刑）
10 財産目録	第10回 濁富（汚れた富）
11 文中の秘密	第11回 発簡（手紙を見つける）
12 勤儉貞淑	第12回 莅郷（田舎へ来る）日訳215-223頁 を第13回へ移動

巻 下

13 恐怖と寒さと	第13回 乞命（命を助けて）
	第14回 拯孤（孤立から救う）
14 村の記録	第15回 得書（書信を得る）
	第16回 述案（事件を語る）
15 兇険の相	第17回 索御（御者を探す）
16 窮命の淵	〃
	第18回 誘供（自供を誘う）
17 減水の量	〃
	第19回 村鬩（村の騒ぎ）

18 御神の審判	〃
	第20回 案発 (事件が暴かれる)
19 令聞嘖々	〃
20 賢婦忠僕	〃
	第21回 赴配 (流刑地へ赴く)
21 特赦の天使	〃
	第22回 遇恩 (恩赦になる)
	第23回 返環 (指輪を返す)
22 燈下の指環	〃
	第24回 圓鏡 (元の鞘へもどる)
23 配所の雪	〃
大団円 花の都路	〃

漢訳作品を検討する前に清末同時代人の発言を見ておく。

覚我(徐念慈)「余之小説観」(1908)*6だ。該文で同じものを別々に漢訳してそれぞれに題名をつけていることを言う。その例のひとつとして『寒牡丹』をあげた。すなわち「寒牡丹之即彼得警長」である。『寒牡丹』が『彼得警長』と同一作品だと発言したのだった。

しかしこれが間違いであることは中村忠行「晚清に於ける虚無党小説」(1973)*7が指摘している。

『徐兆璋雑著七種』(2014)*8に記録がある。次のとおり。

寒牡丹二卷 商務印書館本 光緒三十二年三月出版／日本尾崎紅葉著、錢塘
呉構訳。／記俄国聖彼得堡栢列基伯爵夫人事。407-408頁

栢列基は誤植で柯列基が正しい。書名を掲げて内容が「セントピイタアスブルグのクレキ伯爵夫人の事を記す」というだけ。細部には立ち入っていない。

寅半生「小説閑評」(刊年不記)*9は『寒牡丹』を取り上げてかなり詳しく紹介している。珍しい。文章の前半で粗筋を述べ後半が寅半生の感想だ。本稿にお

いて対応する部分に【寅半生】と記してそのつど引用紹介する。

版元の商務印書館が書目提要を発表している。付建舟『晚清民営書局発行書目』(2016)*¹⁰に収録された『商務印書館書目提要』(1909.九改定7版、説部叢書、哀情小説、提要、装成一木箱)から引用。本文が粗筋の紹介になっている。その部分のみを翻訳する。

言情小説 寒牡丹 二冊 四角五分／俄国仕官出遊，見良家女子劫而汚之，女訟得直，俄皇判某取女為妻，情事淒麗，可興可觀。201頁

ロシアの仕官が遊びに出かけ良家の女性を略奪して汚辱する。女性がただちに訴えるとロシア皇帝は某にその女性を娶るように判定した。内容は凄絶にしておもしろく読み応えがある。

性的暴行の被害者が加害者と結婚させられる。商務印書館による要約はそこを前面に押し出した。該小説の中心だと主張しているのだ。

あらためて粗筋を述べながら紅葉日訳と呉構漢訳を比較対照する。固有名詞の後ろに「／」を使用し漢訳を示すことがある。

3 「紅茶屋」から始まる

冬のロシア聖彼得堡(セントピイタアスブルグ)で物語がはじまる。有名な料理屋「紅茶屋(べにぢやや)」が客でにぎわっている。おりからの寒気の中で客たちはさすがに引き上げてしまった。その部分を紅葉は一気に描出する。どのような文章か見てみよう。あわせて呉構漢訳も示す(下線筆者。頁数の「上」は巻上を示す)。

【紅葉】扱此夜の寒気は格別で、然云ふ晩には例のトロイカを飛して飲みに来る紳士が多い、座敷は皆塞つて、燈影衣香の間に笑語の声は湧くが如く、興酣に、楽を極めざる處も無かつたが、十時過より寒威の俄に募つた為各宴を撤して、十二時頃には客は大方起つて了つた。5頁

【呉構】且説這一晚的寒氣。格外来得兇。凡遇冷天。那些乘坐忒雷架前来飲酒的紳士。越見得比常加多。座滿盃空。擁擠得没有插足之地。只覺燈紅酒綠衣香鬢影之間。笑語喧譁声音。和雷霆波濤般洶湧。真是人間天上。長樂未央。直過了十点鐘。纔大家一齊撤宴。到得十二点将近。纔漸漸一起一起走了出去。上3-4頁

呉構漢訳は口語（白話）によるほとんど直訳になっている。紅葉訳よりも少し詳しくした下線部分もある。

「座敷は皆塞つて」を「座滿盃空。擁擠得没有插足之地（座席は満ち盃は空に、混みあって足を差し入れる余地もない）」とした。紅葉訳に「燈影衣香の間」とあるのを「燈紅酒綠衣香鬢影之間」と書かずにはいられない。「燈紅酒綠」はきらびやかな灯りと美酒を「衣香鬢影」は美女を形容するという。

呉構による加筆して紙幅を取っている個所がある。後に蕾又親子がロシア皇帝に拝謁する場面だ。実例として参考までに注に引用しておく*11。

「紅茶屋」に来る男性は紳士だが女性は娼妓のみである。そういう種類の料理屋だ。この説明が事件の背景を説明している。

紅葉訳は「紅茶屋事件」という。詳しくいえば「紅茶屋婦女暴行事件」と称するのがふさわしい。ロシア近衛士官3名による女性凌辱事件である。

蕾又幌尾（らいさ ほろお／麗查 霍洛華）18歳（後19歳）は非職軍医の娘でピアノ教師をしている。「非職」とは職務に従事していないこと。休職というか。現役ではない軍医と理解する。

ある冬の夕方、ピアノ稽古から家路に急いでいた彼女は泥酔した近衛士官3名により誘拐され聖彼得堡の場末にある「紅茶屋」に連れ込まれた。

酒に酔ったうえの犯行だから誰が読んでも憤激するだろう。下は寅半生の感想だ。引用文の登場人物名は紅葉訳をカタカナ表記にして使用する。

【寅半生】柯列基等三人，本系貴族，并非風狂之輩，觀其后任罪不辭，毫无推諉，人品可知，特為酒所誤，幾使毀家辱身，甚矣，酒之為害烈矣哉！ 485頁

クレキら3人はもとの貴族であり気が狂った輩では決してない。その後は罪を認め責任逃れをすることもなかったところを見れば人品がわかる。酒のために特に誤り家を犠牲にし自身の名誉を傷つけてはなはだしい。酒の害は激しい！

寅半生は呉城らが後に事件の揉み消しを計ったことは無視している。犯行を結局は酒のせいにした。

娘の家では両親らが帰宅を待っている。帰宅した蕾又は自分が被害者となったことを告げる。

事件発生時間はほぼ12時を過ぎた頃だ。時刻を取り出す。

紅茶屋の客が引いたのは「十二時頃（十二点将近）」（5頁／上4頁）、士官たちが女性を拉致しようとしたのが「十二時（十二下鐘）」（7頁／上5頁）という。拉致現場は「寂しき町の氷る真夜中（奈何這万籟寂闌鬼神出現的冰雪深夜之中）」（10頁／上7頁）でこれらは士官たちの感覚だ。娘の帰宅を待ちわびる両親が聞くのは「時計は此時十時を打つ（自鳴鐘。已鏗鏗打了十下）」（16頁／上11頁）「折から聞こゆるチャアチの鐘は十時半（那時剔搭剔搭の自鳴鐘。已到十下半）」（18頁／上12頁）。後に事件の概要を貴族たちに向けて説明する陸軍参謀長は「夜の七時頃（夜間七下多鐘）」（41頁／上27頁）とする。

事件当事者と警察の記録が時間的に一致しない。小説そのものが時間を前後させて説明しているためだ。あるいはそれぞれの記憶が混乱しているといってもいい。数字を細かくあげたのは呉構が底本に忠実であることを示すためだ。数字を入れ替える漢訳があるから気になっている。

紅葉訳の「チャアチ」はいうまでもなく教会を意味する。呉構は勘違いして時計の「剔搭剔搭（チクタク）」にした。日本語のカタカナ表記について呉構は時々誤訳をするその1例だ。それ以外は時刻について齟齬はない。ついだから勘違いの例をひとつ示しておく。紅葉訳に「薬袋も無い事言はしやるな」（315頁）がある。「益体もない」の当て字だ。「でたらめをいうな」という意味である。呉構はそれを「你說没有薬袋麼（薬袋を持っていなかったと言うのか）」（下53頁）にする。日本語漢字の「薬袋」をそのまま流用して中身を理解していなかつ

た。些細な間違いである。

4 肉体と精神

帰ってきた蕾又は父母に訴える。



謂はうやう無き不幸

【紅葉】残念なのは女の効無さに、其奴の為に名誉を傷けられて了ひました。体は然して汚されましたけれど、此の精神は、父様、母様、些も穢れずに潔白で居ますから、どうぞ堪忍して下さいまし。24頁

【吳禱】想今生今世被那一個兇人損害了声名。再也不能洗雪。但兒身体雖被汚辱。這精神心臟。却对著父親母親。一些也不漸[慚]愧。依然潔白無瑕。還求兩老暫時忍耐則箇。上18頁

思えばこの世において悪人のために名誉を傷つけられてしまい、もう恥をそそぐことはできません。しかし私の身体は汚されましたけれどこの精神と心は父様母様に対しまして少しも恥じることはありませんし依然と潔白無傷でいますからどうぞ暫時のご堪忍をお願いいたします。

「効無（かひな）さ」とは力を尽くした結果が出なかったという意味。呉禱漢訳にそれに相当する言葉は見えない。

紅葉訳の「父様、母様」は蕾又による呼びかけである。呉禱は「對著父親母親（父様母様に対しまして）」と修飾構造に変換した。かけ離れた漢訳ではない。ほぼ直訳とっていいだろう。

漢訳には問題はない。ただし別作品では採用している日本語の改行、カッコなどの記号（!と……は除く）は本漢訳では使用していない。日訳にある会話を示すカッコは話者名のつぎに「道」「問」「答」を置いて代用した。改行しないのはページに活字の空白を生じさせないための措置だろう。

商務版「説部叢書」は小冊子風にまとめるのが基本である。呉禱漢訳も全体を圧縮して上下2冊にまとめるための工夫だと考えられる。

性的暴行を結果として自分で防御できなかったことを悔やむ。蕾又は自分自身を責める。しかし原作者が巧妙なのはそこで蕾又の肉体と精神を分離させたところだ。それが「此の精神と心は……少しも恥じることはありませんし些も穢れずに潔白で居ます（這精神心臓……一些也不漸[慚]愧。依然潔白無瑕）」という台詞になっている。

蕾又が精神の潔白を堅持して自分の肉体に傷を負わせた犯人を追及していく。これが小説前半の主題である。具体的にいえば何か。「復讐」である。事件後に蕾又たちの取った行動を描写することが主要な内容なのだ。

蕾又は父に自分の決心を訴える。

【紅葉】父様、私は自分の不束から身を汚しまして、何とも申訳は御座いませんけれど、自ら犯した罪ではないのですから、どうぞ御勘辨なすつて、娘の蕾又に生恥を搔せた復讐をなすつて下さいまし。私は此の復讐を為なけれ

ば生きては居りません、又此の復讐を為さない内は私は決して死にませんから！ 27頁

【呉禱】父親啊。兒因為自己不好。以致汚辱身体。兒実無話可説。但這罪却不是兒自己犯的。還要求兩老宥恕。暫時忍耐。替女兒麗查大大的雪恨報讐。兒若不能報這箇讐。再也不願生存在世。但這讐不曾報復之時。兒却也不甘立時就死… 上17-18頁

お父様、私が不十分なために身体を汚してしましましてまことに申し訳がございません。しかしこの罪は私みずからが犯したものではありませんからお許しくださりしばしご堪忍ください。娘のライサ [麗查] のために恨みを晴らし復讐を大いになさってくださいまし。私はもしこの復讐ができないならばもうこの世に生きていくつもりはありません。といってもこの復讐をしないうちは私は即座に死ぬということもありません…

呉禱漢訳は紅葉日訳をほぼなぞっている。

呉禱による独特な人称漢訳方法がある。主人公の名前は蕾叉（らいさ）だ。呉禱は漢訳においてそれを流用していない。日本語読みをそのまま、あるいは近い漢音で写す。紅葉の蕾叉には漢字で麗查を当てた。「リーサ」ならば「らいさ」に近い。幌尾（ほろお）を漢訳して霍洛華はそのままだ。ほかの登場人物にも日本語音にもとづいた漢音で文字を当てる。暴行事件の主犯でありロシア皇帝の勅命によって蕾叉の夫となる呉城（くれき）は柯列基である。呉禱は時に「柯」1字で中国風の姓として使用もする。中国化とは違う独特の方法だ。その方法を採用する複数の作品がある。

5 復讐——階級の対立

復讐を誓った蕾叉は泣き寝入りすることなく警察署へ告訴状を提出した。犯人は近衛士官だとわかっている。一般庶民が貴族階級の人間を告訴した。「相手は国民の上流たる貴族（国民上流的貴族）」（92頁／上31頁）だ。しかも性的暴力の被害者というところが重要である。自ら名乗り出て貴族階級を恐れない。

ある日、呉城伯爵夫人（柯伯爵夫人）宅で貴族たちが集まっていた。その場で陸軍参謀長の口から事件の概要が伝えられた。概略を聞いていたのは犯人のひとり呉城中尉（伯爵。呉城伯爵夫人は伯母）にほかならない。呉城はひとりでは反省の心情告白をしている（50-53頁／上31-32頁）。しかし仲間と一緒にだと別のことを言う。

【紅葉】何とか工夫して法律の制裁だけは免れたいと考へて居るのだが、計は有るまいか。56頁

【呉構】想箇什麼法子。能免掉法律的處分。你們想想看。沒有妙策麼。上34頁

なんとか工夫して法律の処分を逃れられないか。みんな考えてくれ。妙策はないか。

呉城の個人的反省は仲間の共有するものにはならない。そこで彼らは貴族としての面目体面（貴族の体面 79頁、貴族全体の体面 92頁）を守ることを前面に押し出し関係者に手をまわして事件をもみ消そうとした。貴族階級の傲慢さを見せつける部分である。原作者がそのように書いている。仲間の姉（公爵夫人）に頼み込み警視総監に圧力をかけて調査を中止させる。

警視総監がいった「被害者の其の娘の名誉は何と遊ばします御考で（那苦主的声名〔あの被害者の名誉は〕）」（83頁／上47頁）に対する公爵夫人の返答はこうだ。

【紅葉】那樣娘の名誉も何も有るもので御座いませうか！金さへ与れて遣つたら、其を持参に奈何なと形付くのです。欲いほど金を取せて遣ります。

83-84頁

【呉構】那種女子。還管得什麼声名麼。大不了給些銀錢。使他好好地遣嫁罷了。他要多少。就給他多少。還有何言。上47頁

あのような娘にどのような名誉があるのでしょうか。せいぜいが金をくれてやっとうまく嫁にやるだけのこと。欲しいだけやります。それ以上い

うことはありません。

醜聞を金で抑え込もうとする。貴族階級の間人間が一般庶民に対して示す蔑視はこれほどまでにひどい。それがよくわかるように原作者は描写している。

一方で贖罪金を義捐金と称して1万5千ルブル（一万五千盧布）を届けに来た。口封じのためだ。ところが蕾又と父の幌尾親子は受け取りを拒否する。あくまでも犯人たちに復讐する考えだ。親子は最後の望みをかけて慈愛深い呉城伯爵夫人に訴えた。呉城伯爵夫人は甥が犯人であることを知らない。

6 結婚の刑——新しい段階が展開する

とうとうロシア皇帝皇后が直接の判断を下すまでに至った。その結果、呉城中尉と蕾又は結婚すること（結婚の刑／婚刑）、犯人3名の全財産は新婦蕾又に譲ること、また3名は西比利亜（サイベリア／西伯利亚）に追放されることになった。その部分を引用する。

【紅葉】陛下は御声高く、

「其方此娘と結婚を致せ。」

此の意外なる宣告を受けた呉城中尉は自失するばかりに呆れ惑うたのである。

157頁

蕾又が犯人3名のうち誰が主犯かわからないと答えた。そこで皇帝は最年長者と最も富んでいるものは誰かと質問する。呉城が該当したから彼を指名してその勅令が下された。

【呉構】皇帝随高声道。就著你和這姑娘結婚。柯列基聽了這意外御斷的話。

恍惚著沒了擺怖[佈]。只呆呆地不言不語。上86頁

皇帝は声高く言った。そちはこの娘と結婚を致せ。クレキはこの意外なご判断を聞くと呆然としてなすすべもなく、ただぼんやりと言葉もなかった。

呉構漢訳は改行もカッコも使用しないから上のようになる。ほぼ直訳だと考えてよい。

被害者と加害者を強制的に結婚させる。ゆえに目次の章題は「九 結婚の刑（婚刑）」である。「聖断の名の下に結婚の暴刑に處せらるる（欽奉聖断受那結婚暴刑）」（160頁／上88頁）とも説明する。

財産剥奪とシベリアへの追放を免除するかわりに結婚するという選択肢もありえた。しかし原作者はその3件ともに同時進行させるという展開にわざとしたわけだ。

犯人3名が処罰される。その処罰が財産没収とシベリア追放だけならば蓄又の復讐は即座に完結してしまう。それがライサ父子にとっては本来の目的だったからだ。その時点でこの復讐物語は終了せざるを得ない。

物語を終わらせないために原作者が考え出したのが「結婚の刑」である。無理やり結婚させたからその後につながる。また財産が蓄又に移譲されたからそれをどうするかの問題も生じる。原作者のこの新工夫は作品を成立させるためのものだ。よく考えている。

該作品の重要点はこの「結婚の刑」に置かれている。これを契機に物語は後半部に続いていく。

道徳的に正しい間違いという判断の範疇を飛び越えていると知る必要がある。それを強要するのが皇帝だから異議を唱えるわけにはいかない。原作者はそのように作っている。いかにも大衆小説らしい。意外な展開になるよう意図的に組み込んでいるのだ。

くり返すがこの婚刑は小説の重要点であり不可欠な要素だ。これがあるからその後も話は展開していく。ここには紅葉による変更はないと考える。小説の中盤で紅葉が独自に書き換えれば後半を創作しなくてはならなくなる。しかし小説の結末まで大筋に破綻は見られない。ゆえに原作がもともとそうなっていると考えられる。

寅半生もこの部分に興味を示す。関連する2カ所を引用しよう。

【寅半生】御断結婚一節，実為千古奇聞，不特身受者出諸意外，即閱者亦無不驚以為異，所謂怨耦者非耶？ 485頁

勅令による結婚の部分は実に前代未聞の珍しい話である。被害者だけが意外に思っただけではなく読者も奇妙なことだと驚かないものはいないだろう。いわゆる不幸なつれあいではなかろうか。

【寅半生】以仇人為夫婿，況又虚挂其名，成礼後即充發而去，麗查心中，何等境界。妙在写来却落落大方，不露圭角，而一種怨恨情形，時流露於不言之表，此是筆墨善於写生處。485頁

かたきを夫にするもそれは名前だけの虚偽であり結婚が成立するとそのまま流刑となった。ライサの心中はいかなるものであったか。優れているのは描写して鷹揚で才気を外に現わさない、しかし怨みの状態は時に物言わぬ表情に露わとなる。ここの文章は描写がうまくいった個所だ。

吳構漢訳には著者として紅葉の名前しか記していない。寅半生は著者が紅葉だと信じて疑わなかっただろう。中国人読者も「結婚の刑」は意外に感じた。原作者の意図は成功したといえることができる。

蕾又は西比利亜へ追放となる直前の呉城中尉と言葉を交わす。ここには後半の物語を準備するきわめて大事な意味が付与される。蕾又の心理状況を説明して次のようにいう。

【紅葉】蕾「此度は陛下の思召を以ちまして、過分の御沙汰に預りましたので御座いますが、私は決して箇様な結果を望みましたのでは御座いません。何も彼も実に意外で、……………」

呉「然し、御満足で御座ませう。」

蕾「いいえ、決して是迄に貴方をお困め申す心は無かつたので御座います。今と成りましては恐れながら陛下の御聖断が酷に過ぎまするやうに私は考へますので。」165頁

【吳構】今番雖則奉陛下諭旨。但未免辦得太過。我是断不想望有這樣的結果。總而言之。都是出於意外。……柯列基道。是啊。你却称心滿意了。麗查道。

哎呀。我实在没有存心。要害你到這樣。我只想這回陛下斷的。真是過於嚴酷罷了。上91頁

この度は陛下の詔令を受け賜りましたが、しかしあまりにも苛酷にすぎます。私は決してそのような結果を望みませんでしたのでございます。結局のところ意外でありまして……クレキは言う。そうですか。貴方はご満足でしょう。ライサは言う。いいえ。私は本当にあなたをこうまで困らせるような考えはなかったのでございます。陛下のご判断が残酷にすぎるとは私は思うだけでございます。

復讐を誓っていた蕾又の発言にしては後退した印象を与えているように見える。そうではない。ここが転換点である。

「陛下の御聖断が酷に過ぎます」とは何か。加害者3人の全財産を蕾又に移譲する。加えて西比利亜へ追放する。決定的なのが「結婚の刑」だ。

蕾又が望んでいたのは加害者3人を見つけ出し処罰することだった。ゆえに皇帝の判定が下された瞬間に蕾又の復讐は完結するはずだった。ところがあらたに加害者と結婚という状況が降りかかった。その新しい展開に蕾又が心理的負担を強く感じていると原作者は言いたいのだ。

裁判により「兇行者を罰しまするやうに（照例辦那罪犯）」（118頁／上64頁）

「唯私の名誉を傷け、私の将来を害した者を罰して下さいますれば、それで十分なので御座います（只求將那傷損小女子名誉。阻害小女子前程的人。照例懲辦。那已是十二分的滿意）」（122頁／上66頁）である。

法律に照らせば軽い判決が下されるだろう。それで十分な復讐になる。ただ皇帝の判断はたぶん勳位剥奪、財産没収となることが事前にすでに示唆されていた（123頁／上67頁）。蕾又は自分の受けた苦しみはそれらに劣らないと主張した。彼女はその程度の結果になることをあらかじめ了解し覚悟をしている。

ところが実際に下されたのは彼女の予想を大きく超えてしまった。流刑、財産移譲とそれに加えて加害者との結婚である。財産没収ならば国家の問題であって蕾又とは関係がない。ところが移譲となれば自分に関係してしまう。個人的な復讐は完結したにもかかわらず蕾又自身に大きな責任が降りかかってきた。それで

「酷に過ぎます」という発言になる。

蕾又の予期しない厳罰により彼女の意識に変化が見られる。そのように書いているのは原作者にほかならない。

原作者は以後、復讐を終えた蕾又の心境の遷移転回を用心深く別の場所にも配置する。この小説を成立させるためにはそうすることが必要なのだ。

蕾又が呉城伯爵の不在にあって伯爵家の管理を堅実に行なうなかで予想しない形で披露される。別荘に赴き亡き伯爵夫人の肖像画を見て蕾又は祈る。「願はくは、妾が斯の心の誠に愛でて、速に吾夫をして、其憎悪を去りて、妾を憐れましめ給へ。（願母親愛我這一点誠心。快叫丈夫除去憎嫌我的心念。翻成憐我愛我噯）」207頁／上115頁

直訳になっているから日本語には訳さない。続く描写が蕾又の心根を告白している。

【紅葉】 実に蕾又は其の心の底に如此く夫を思ふのであつた。彼は廉潔自ら持ちて、苟も伯爵の勲位を恋はず、伯爵の財産を念はぬのではあるが、呉城伯爵其人をば忘るる能はざるので、彼の三名の中の誰と異き縁を結んだか、其は未だに知られぬのであるが、彼は自ら何故とも覚えずして、他の二人は今に到る迄も憎きに、独り呉城中尉のみは吾夫と定められざりし先より既に媿（いと）しらしいのであつた。207頁

【呉構】 看官們不知。麗查心裏。却如此思恋他的丈夫。他玉骨冰心。既不想伯爵的爵位。又不愛伯爵的家財。只一心一意不能拋忘柯列基一箇人。他也不知三人中。到底那一箇和他結下孽緣。只可怪那李薩兩人。他心裏至今還是厭惡。独有柯列基。從那不曾配婚為夫之前。早已起了一团愛情。不能自己。到得如今。更把前事忘在九霄雲外。但知我是柯列基的妻子。柯列基是我的丈夫。這箇情形。連自己也不知什麼原故。 上115頁

読者のみなさまはライサが心の底にこのように彼女の夫を思っているとは知らないであろう。彼女は美しい骨で透明な心を持つすばらしい容姿であったが伯爵の爵位を望みもせず、また伯爵の財産を愛してもいない。ただ誠心誠意クレキその人を忘れることができない。結局のところその3名の中の誰

と罪の縁を結んだのか彼女は知らなかった。ただレイザウフとサワゲノのふたりだけは恨みに思い彼女は心の中で今でも嫌悪するのだが、独りクレキだけは結婚させられ夫となる前よりすでに愛情のかたまりが湧きおこっており自分でもどうしようもなく現在ではさらに以前の事を天空の彼方に忘れてしまっていたただ自分はクレキの妻でありクレキは自分の夫であることだけが分かっている。この状況は自分でもなぜなのかはわからないのだった。

下線部分は呉構の加筆である。ここにはっきりと蕾又が呉城のことを愛しているとした。読者に念を押したのだ。

原作者は物語全体を把握して意図的に操作しながら記述している。恋愛小説は最後に両人が結ばれてこそ成立する。これらの描写は物語の大団円へ収斂するように原作者が注意深く設定したいくつかの伏線のひとつなのだ。

以上が全24（最終は大団円）のうちの前半12章（回）である。

つけ加えれば呉構は紅葉訳第12章の215-223頁を漢訳して次の巻下第13回へ移動させている。

7 呉城の問題

蕾又が別荘に滞在中、地方の有力者波斯野（ペルシヤの）夫人が訪問してきた。彼女は好印象を持ったから地方の住民も同様に警戒心を解くことになる。蕾又は領内において病人に薬を施し、貧民に衣食を供給するなどの慈善を志した。

そこに住む呉城の妹絵蓮もそれに感激しシベリアの兄に賞賛の手紙を送った。妹が褒める、家僕が賞賛する。それらの手紙を読んだ呉城は怒りを燃やした。

【紅葉】不和なれども骨肉の妹、他人なれども累代相恩の不破瀬まで、我が七生の怨敵たる匹夫に心を翻し、言を揃へて吾前に其の讃辞を呈する無面目、余と謂へば侍難き人情かなと、彼を念ひ、此を思ひ、呉城は足擦を為て口惜しがるのであつた。219頁

【呉構】愛蓮雖和我不和。終是我的胞妹。福華斯雖是外人。也累代受我家厚

恩。誰想他們。霎時變了心腸。親信著我七世冤讐的惡婦。把那不入耳的讚辭。送到我耳邊。呈到我眼下。原來骨肉家人。也是這般難靠。別的人更何消說得呢。柯列基左思右想。又恨又悲。到得末了。只落得數聲長歎。一言不發。下
4頁

エレンは自分とは不和だが結局は妹だ。フハセは他人だが累代我が家の恩を受けている。その彼らがにわかになんか心変わりをしたとは誰が想像しようか。我が七生の怨敵である悪婦を信じあの不愉快な讚辭を自分の耳元に送り込み自分の目に触れさせようとは。骨肉の家族ではあるがそのようでは信頼しがたい。ましてや他人が何をいっておるのか。クレキはあれこれ思い恨んで悲しんだ。ついには長い溜息をついて一言も発しなかった。

妹と家僕がともに蓄又を賛美することに呉城は反発を強める。ここには犯人であるという罪の意識はない。そう描くのが原作者の意図だ。呉城が他人の助言を受け入れて考え直すとすれば物語は別の方向に進むだろう。あくまでも被害者ぶって蓄又を恨み続ける嫌味な貴族の呉城でなくてはならない。

呉城による上の心情吐露の意味はなにか。問題の所在が蓄又から呉城に移動していることを表示している。

被害者（麗查）は許したが加害者（呉城）が許さない。この奇妙な関係が発生した。これを維持することがこの小説の後半を動かす原動力となる。

【紅葉】彼は己の飽くまで夫を愛するに引易へて、伯爵の飽くまで己を愛せざるを知るのであつたから、253-234頁

【呉構】料想我雖是那様愛他。他必定還永遠不愛我。下22頁

自分はいくまでも彼を愛しているとはいえ彼が自分を永遠に愛さないのを考えれば、

蓄又は呉城を愛し呉城は蓄又を憎悪する。この状況は物語が終了する直前まで続く。その対立はどのように消失するのか。それはまたいつなのか。読者はそこに注目するように原作者は導いている。小説の大団円であるだろうとは容易に予

想がつく。

8 蕾又伯爵夫人

伯爵夫人となった蕾又についてすこし遡って述べる。蕾又は伯爵邸に赴いた。

【紅葉】 其後蕾又は屢ば伯爵家を見舞つて、夫の手沢ある器具を眺めたり、蔵書を取り出したり、又折節は老实なる不破瀬を召して昔語を為せなどして、当時の身上では其を消遣と為るのであつた。194頁

【呉構】 自此以後。麗查常常到丈夫柯列基家。查看監督。遇著没正經事情。有時看望丈夫親手製辦的器具。有時繙閱架上的蔵書。又或独自心煩。喚過誠実忠良的老家人福華斯。和他談講談講從前的往事。上107頁

不破瀬（ふはせ／福華ス）は伯爵家の家人総代であり20年も呉城に仕えていた家僕である。呉構は「誠実忠良の老家人（誠実忠実な老家僕）」と説明を添えた。それ以外は紅葉訳のまま。

続けて蕾又について呉構による少しの加筆がある。紅葉訳には存在しない。

【呉構】 除了這些。以外也没甚消遣。至於什麼宴会。什麼嬉遊。什麼講演。什麼跳舞。一概辭絶不到。也不像是高等婦女社会中人。更不合伯爵夫人的体統。上107頁

それらのほかにはどのような時間の過ごし方もない。宴会、旅行、公園、ダンスなどはすべて断って参加しなかったから高等婦女社会の人らしくなかったし伯爵夫人としての格式にも合わなかった。

この部分を加えることによって蕾又の堅実な生活態度がはっきりと理解できる。庶民の生活習慣を貴族階級に持ち込むという原作者の考えがより明確になっている。説明を増やした方がよいと呉構が判断すればそのように補筆する。直訳からは離れるが間違いではない。呉構の漢訳は上に見る通り細部にわたって考えてい

る。行き届いているといえる。

蕾又は夫のいない邸宅と財産3人分の管理をする仕事に着手した。

彼女が直面して実践した事を簡単にまとめて紹介する。

1 夫となった呉城伯爵へ必要品および金銭を西比利亜に送り届ける。ほかの2人にも同様の措置をした。

2 呉城家の経済を把握し収入を増加させた。

3 呉城伯爵には妹絵蓮（ゑれん／愛蓮）がいる。絵蓮の息子が不審な急病になったのを蕾又は処方ほどこして助けた。蕾又は軍医の娘であったから術を学んで医学知識があったのだ。

4 絵蓮の夫圓磯生（まるそふ／馬羅叔）は変死していた。絵蓮が犯人だと噂される。蕾又はそれが冤罪であることを証明した。謎を解く探偵を思わせる行動を見せる。

いずれもが蕾又の無欲無心から出てきた実際活動である。寅半生はそこに注目して言及する。

【寅半生】麗查整頓門庭，不愧為賢婦，觀其前却金一事，即非尋常女子所能有此氣概。自後一切作為，求之古今列女伝中，何可多得？ 485頁

ライサは（伯爵の）家庭を整えて賢婦というに恥じない。金を断ったことを見ても尋常の女性がそのような気概を持つことはできない。後の一切の行為は古今の列女伝に求めて多くあるであろうか。

「金を断った」というのは蕾又が呉城伯爵邸に入ってその財産を私物化しなかったことを指す。

蕾又のとった行動の数々が邸宅および関係者ばかりでなく地方住民全員の警戒心を解いていった。ついには彼女に対しての高い評価が定まる。

【紅葉】元を糺せば非職軍医の娘の蕾又であるが、今は堂々たる呉城家の伯爵夫人、而も篤行と才識とを以て一郷の輿望を負へる其の貴人 277頁

【呉構】原来休職軍医的女兒麗查。如今做了堂堂柯列基家伯爵夫人。品行才

識。都成一郷模範。下34頁

もとは休職軍医の娘ライサであるが今は堂々たるクレキ家の伯爵夫人である。品行才識ともに一郷の模範となった。

蕾又個人に対する評価が上がるということは問題の焦点が呉城自身に移っていることを明確に示唆する。呉城の心境に変化は生じるのか。読者はそれを固唾を呑んで見守ることになる。

9 急展開

『寒牡丹』の基本になっているのが「被害者が許し加害者が許さない」という奇妙な男女関係であることは述べた。それを示す本文も引用した。もうひとつ示す。蕾又が絵蓮の冤罪（夫を毒殺した）を晴らしたあと呉城に対する自分の心情を告白する言葉だ。

【紅葉】私は最も愛して居ります。御神と皇帝とが賜はつた夫で御座いますから、私は何處までも其人に随ふべき義務が有ると信じます。然し、爰に一件謂ふに謂はれぬ心懸と申すのは、お話を致しますのも実は可耻いので御座いますが、彼の御三人の中で、私に対する罪の有るのは誰方だやら、其が今に知れませんが御座います。と申すやうな訳で御座いますから、殿様が少しも私をお思へ下さらんのは、或は子細の有る事では無いかと、然う考へますほど私は熟く情無いので御座います。330頁

【呉構】我怎能不愛他。這是神主和皇帝陛下賜給我的丈夫。我任到何時。任往何處。也該有終身隨從他的義務。因此我心間有一件難以形容的心事。雖和姑娘説來。實也万分可恥。他們一夥兒三人之中。究竟在我身上犯罪的是那一箇。我至今也不曾明白。為了這箇伯爵或者始終懷疑不願留戀於我。這其間我怎能得知。若果然這般。我不是石沈大海。終身没有一点指望麼。下62頁

私がどうしてその人を愛さないことができますか。神と皇帝陛下から賜った夫でございますから私は何時までも何處までも終身その人に従う義務

があるのでございます。ここに私の心に形容しがたい懸念がございましてあなたにお話しするのまことに恥ずかしいこととございますが、彼ら3人の中でわが身に対する犯罪をおかしたのは誰なのか私には今もってわからないのでございます。それで伯爵が始終私を疑い思いをおかけにならないのではないかと。そのあたりのことは私にはわからないのでございます。もしそうでありましたら大海に石が沈むように私には音沙汰もなく一生すこしの希望もないのでありましょうか。

「殿様」とは蕾又の夫である呉城を指す。

蕾又の心は呉城に傾いてしまっている。いうまでもなく本小説における男女関係の究極的解決には相手である呉城の心境変化が必要だ。中心課題はすでに蕾又から呉城に移動しているとくり返す。大衆恋愛小説の結末は男女ふたりが結ばれるのが定型である。どのように描写説明してそこまで持って行くか。原作者の腕の見せ所とっていい。

2年を経てある知らせがある。西比利亜にいる呉城ら3人はチフスに感染しているという。蕾又は哀願の末に入手した特赦状を携えずさま不破瀬を連れて西比利亜に向けて馬車を飛ばした。ふたりの献身的な介護により呉城はようやく病床を離れることができるまでになった。しかし呉城は心情としてどうしても仇敵蕾又を許すことができない。加害者が被害者面をし続ける。ロシアの貴族が傲慢自分勝手に庶民のことなど何とも思わず敵対な態度をとっていることが原作者によって描写されている。

10 ひとつの手続き

蕾又をかたくなに拒否敵視する呉城であった。それでも病後の回復につれて蕾又に対する呉城の考えにも変化がきざす。蕾又と一緒にいると呉城の心は和らぐのだ。彼の考えを徹底的に変えるためには形式的ではあるにしてもひとつの手続きを必要とした。原作者が創造したのは離婚である。

以前に呉城が離婚のことを不破瀬に相談したことがある（371頁／下84頁）。そ

れも伏線のひとつだ。読者は予感したのであろうか。

呉城は帰郷後の計画を蕾又にたずねた。彼女は田舎へ引っ込んで一生を送ると返事する（379頁／下88頁）。そうして蕾又が離婚を要求する。

【紅葉】見ると、蕾又はいつか俯目に成つて、得も謂はれぬ胸の思を萎るる風情であつたが、其のまま餘は言はずして、彼の結納の指輪（リング）を抽取つて呉城伯の前に差出したのである。381頁

【呉構】只見他俯首垂肩。那風情宛轉。像是胸頭有說不出的難言。不知怎樣纔好。忽然陡的將手上帶著的指環。褪下來。撲的放在柯列基面前。下89頁

見ると彼女はうつむいて肩を落とし、えもいわれぬ風情であつてまるで胸に言い出すことのできぬ言葉があつてどうしてよいかわからないようだった。にわかに指につけていた指輪を抜き取るとクレキの面前にポイと放つたのだつた。

呉構が「撲的放在柯列基面前（クレキの面前にポイと放つたのだつた）」と漢訳したのは間違いだ。紅葉日訳は「差出した」のであつて「ポイと放つた（撲的放）」のではない。蕾又の呉城に対する従来態度からしてあり得ない所作だと知るべきだ。

【紅葉】蕾「其は貴方へ御返納いたしますで御座います、どうぞお収め下さいまし。」381頁

【呉構】麗查這纔開口道。這東西如今奉還。伯爵請收下為是。下89頁

ライサはそこでようやく口を開き言った。これはただ今ご返納いたします。伯爵、どうぞお収めくださいませ。

呉城は蕾又が渡そうとした財産計算表は勅命に背くと受け取りを拒否した。ところが同じ勅命である結婚指輪の方は受領した。離婚の申し出を承諾したという意味だ。明らかに勅命に違反している。

離婚してから呉城の方に変化が生じてきた。呉城個人の心理的变化を原作者は

綴っている。

勅命による結婚を一度は破棄する必要があった。その後、精神的に自由な環境において恋愛感情を発露させる。小説を大団円に導くためにはそういう手続きが不可欠だ。そう原作者は考えた。ここに紅葉の手による変更があるだろうか。原作は破局したままで終わるのか。しかしそれでは大衆小説として成立しない。あくまでも主人公の女性にとっては当時の考えで結婚して平和な家庭を持つのが到達点でなければならない。

【紅葉】 向來段々と世話に成り、苦勞を為せた挙句否応言せず離婚まで為て見れば、一生忘れじの憎悪も怨恨も痕無く消え去つて、彼は今蕾又に対して何等の介然たる者もあらぬ。始て雲を排いて月を看たる呉城伯は、月の麗しさを識つたので、憎む可く、嫌ふ可き蕾又は、敬す可く、愛す可き蕾又の誤解なるを漸く曉るのであつた。388-389頁

【呉構】 (柯列基) 覺得麗查不在面前。很為沒趣。這箇心想一起。不想把從前一生不忘的憎嫌怨恨。都消滅了。大有雲開見月景象。把箇可憎可嫌的麗查。翻做可敬可愛。下92頁

(クレキは) ライサがいなければ面白くなかった。この考えがひとたび起きると以前の一生忘れじの憎悪怨恨はすべて消え去り雲が開いて月をみるようなもので、憎むべく嫌うべきライサは敬すべく愛すべきものに変身した。

「一生忘れじの憎悪も怨恨も」部分を見れば呉城が加害者であることをすっかり忘れていて。貴族階級の人間が自分を特別な存在であると無意識に思っているのだ。著者がそのような人物に造形していることを忘れてはならない。

原作者にとって離婚は行なうべき手続きをやったという認識であろう。しかし小説作品として成功しているかどうかの判断は読者にゆだねられる。無理やり辻褄を合わせたという感覚、すなわち違和感が残れば問題だ。

特に蕾又の次の発言は問題にする人もいるだろう。

【紅葉】 雷「いいえ、取だ事を有仰います。私は決してお怨み申すなどと云

ふ事は御座いませぬのですから、然やうな御心配は御無用に遊ばしまして。却つて私こそ心にも無く針ほどの事を棒に致して、御名誉を傷けましたのみならず、那云ふ憂き目をお見せ申しましたのは、皆私の不束から為しました業で、今と成りましては何と申上げて宜いのやら、どうぞ御勘辨遊ばして下さいまし。」394-395頁

【呉構】哎呀。伯爵說的没来由的話。我断没有怨伯爵的事情。伯爵何須多心呢。我不但傷害伯爵声名。連伯爵遇見那樣不幸。枉受那樣刑罰。全然我的罪過。如今只求伯爵恕宥。下95頁

いいえ、伯爵のおっしゃることには根拠がございません。私は決して伯爵をお怨みもうすことはございませんのです。伯爵はどうぞお気を回されなきように。私は伯爵の名声を傷つけましたのみならず伯爵にあのような不幸にあわせてしまいあのような刑罰までむだに受けさせてしまったのは全く私の過ちでございます。どうぞ伯爵のお許しをいただきとうございます。

被害者が加害者に謝罪するというのを許さない読者もいるはずだ。しかし原作者にしてみればそれに至るまでに十分に説明し手は打ってあると考えているだろう。

呉城はあの夜の事を告白した。「嘗て酒興の上で貴方を苦めたのは私です！（那乗著酒興。欺侮夫人的。正是我啊！）」（395頁／下95頁）

それにしても蕾又が事件後に見せた妥協を知らず犯人に復讐するという強い決意はなにだったのか。読者の中にはそう思う人もいるはずだ。くり返すがここに至るまで原作者はいくつかの伏線を張ったことはすでに述べた。すべては原作者の意のままに筋を運んでいる。紅葉が独自に変更した可能性はないと感じる。

聖彼得堡へもどる馬車の中である。

【紅葉】（呉城は蕾又を抱き起し）有無を言はせず彼の環（リング）を其指に穿した。396頁

【呉構】一面將麗查全身抱起。抓過他的手指。將指環依旧替他套上。下96頁
ライサを抱き起し彼女の指をつかむと指輪をもとのままにはめた。

【紅葉】 吳「どうぞ其は改めてお受け下さい、どうぞ、どうぞ。私が前非を悔い、罪を謝し、而して貴方への恩を返す其が証であります。私は最愛の妻として一生貴方を棄てません。貴方も一生私を忘れずに……………」」

396-397頁

【吳構】 只求你。……只求你。……我已悔改前非。向你謝罪。這就是立意報答你恩情的証據。你是我最敬最愛的妻子。終生終世。也不敢拋忘了你。你也此生世。莫捨棄了我。…………… 下96頁

どうぞ……。どうぞ……。私が前非を悔いあなたに罪を謝します。これがあなたへの恩を返す決意の証拠です。あなたは私が最も敬愛する妻です。一生捨てることはありません。あなたも一生私を捨てることのないように……………

大団円である。こうして馬車は聖彼得堡の駐車場に到着した。

車中の再婚儀式について納得しなかった人のひとりが寅半生だ。ここに苦言を呈している。

【寅半生】 柯列基為女而充軍，一腔怨恨，自未能遽積。惟福華斯告之，不信，愛蓮告之，不信，至隻身尋夫，竭力調護，仍不能感動，卒至離婚，可為匪石難轉矣。何以轉闊如此易易？此處似嫌太率。鄙意到家后，宜實行離婚，女還產獨處，怡然自得。当由愛蓮知恩報恩，竭力斡旋，大費一番周折，然后破鏡重圓，則結局較為有味。況有柯夫人可用，有福華斯可效力，儘可欲擒故縱，欲合故離，騰挪變化，做一篇大好文章。作者見不及此，惜哉。485-486頁

クレキは女のために流刑となり満腔の恨みは自分ではにわかに取り除くことができなかつた。フハセが話しても信じない。エレンが話しても信じない。(ライサが) 単身で夫を探し当てて全力で介護したがそれでも動かすことができずついには離婚にいたる。石ではないから転がらないのだ。ところがどうしてたやすく転向したのであろうか。ここはあまりにも軽率であったようだ。愚見によれば帰宅したのちに離婚をすればよかつた。女性に一人住まいさせれば心が和らいで満足するだろう。そうしてエレンが恩返しのために全

力で仲裁し手数を大いにかけた後に夫婦が元の鞘にもどる。そうすれば結末が味のあるものになっただろう。さらにはクレキ伯爵夫人（クレキの伯母）がいて役立つシフハセにも効力がある。しっかり捕らえるためにはまずわざと放す、結合させるためにわざと離れさせる。場所をかえて変化をつける。そうすれば素晴らしい作品になったであろう。作者にはそれがわかっていない。惜しいことだ。

あっさりと結末を迎えたことが寅半生には許容できなかった。もっと時間をかけて元鞘にすべきだったと提案している。作者（紅葉）の理解が不足していると批判してまでいる。苦情を述べたくなるほどよく書けている小説ということだ。

11 結 論

『寒牡丹』が性的暴行で始まるのは不幸なことだ。そこにどこまでもこだわる読者もいるだろう。その人にとっては作品の印象は悪い。解放感につながらないところが大衆小説らしくない。そう思う人も存在するはずだ。

一方で男女の恋愛小説の一変種だと受け取る読者にとっては違和感はそれほどないと思う。判断の分かれる個所だ。

しかし原作者からすれば作品を成立させるためにはその事件がどうしても必要だった。

ロシアの庶民の娘が貴族階級の近衛士官と出会う機会が普通にあるだろうか。かなりむつかしい。貴族は貴族同士で、庶民は庶民同士で生活圏を共有するだけ。日常生活において階級の違いは乗り越えられない。階級差を前にしては恋愛関係が発生する可能性はほとんどないといっている。

バーサ・M・クレイ BERTHA M. CLAY（本名シャーロット・M・ブレイム CHARLOTTE MARY BRAME、1836-1884）という作家がいる。紅葉の『金色夜叉』は彼女の“*Weaker Than a Woman*”を『不言不語』は“*Between Two Sins*”から影響を受けているという（堀啓子）。

中国でも彼女の漢訳は人気があった。クレイ名あるいはブレイム名義原作の漢

訳作品を名前だけあげてみる（樽目録参照）。

『懺情記』（1905）、『一束縁』（1906）、『醋鴛鴦』（1908）、「古王宮」（1908-09）、『紅涙影』（1909）、『空谷蘭』（刊年不記、1911?）、『乳姉妹』（1916）、『僵桃記』（1921）など。ほかにも原作不明の漢訳がいくつかある。

ブレイムはいくつかの作品において貴族階級に乗り込もうとする庶民階級の女性を描いている。階級差のある男女の出会いを工夫した。学校で見知る、貴族の邸宅で働いていた親がいた。関係をたどって若い娘が貴族の邸宅に入って恋愛が発生するという小説だ。

ブレイムが創作した女性は個人意志あるいは関係者の入れ知恵により、はたまた自分は知らずに貴族の屋敷に行く。いくつかの変形を作った。邸宅に入った後はやりたい放題をする女性を描く。それに対する静謐な女性を配置して対照の妙を演出するばあいもある。

『寒牡丹』の女性主人公が階級の壁を乗り越えて行くという構造はクレイ作品と似ている。しかし決定的に異なる部分がある。性的暴行事件によってふたりが知り合う箇所だ。その設定は独特のものである。復讐を求めた結果が相手の流刑、財産移譲、結婚の刑につながる。皇帝の命令で伯爵夫人になった。伯爵邸に入ったが自由奔放にふるまうことはない。堅実に財産を管理して地域の慈善医療にも心を配る。最終的に相手の愛情を獲得する。

女性主人公に艱難辛苦をあたえ彼女がそれをどのように克服するかを描写する。恋愛小説としての構成はしっかりと作られている。

呉構の『寒牡丹』は口語（白話）を使用して基本的に優れた漢訳である。

人名対照表

紅葉	呉構	備考
蕾又（らいさ）幌尾（ほろお）	麗查 霍洛華	18歳。19歳117頁。非職軍医の娘。ピアノ教師。皇帝の命令で呉城と結婚させられ伯爵夫人となる
呉城（くれき）中尉	柯列基 参将	暴行の主犯、伯爵夫人の甥
霊象府（れいざうふ）伯	李召夫 参将	暴行犯のひとり、姉の阿茅淳（あぢぬ／夏狄那）

		公爵夫人に警視総監筆絡を依頼
沢毛野（さわげの）子爵	薩開那 参将	暴行犯のひとり、伯父は大臣
呉城伯爵夫人	柯伯爵夫人	呉城の伯母。歎願を受け付ける。ライサ父の歎願を皇帝に取り次ぐ
繰布（くりぬの）将軍	克利努 将軍	警視総監
絵蓮（ゑれん）	愛蓮	呉城伯爵の妹 12年前夫圓磯生（まるそふ／馬羅叔）は変死 小鞠野（こまりの／科馬利奴）に在住
利喜三（りきさ）	列幾	絵蓮の息子
不破瀬（ふはせ）	福華斯	伯爵家の家人総代
諸座（もろざ）	穆羅若	圓磯生殺害の犯人
鷲利（わしり）	華息利	圓磯生に仕えていた馭者、圓磯生殺害の共犯者
波斯野（ぺるしやの）夫人	貝繡娜	地方の有力者
近小野（ちかうの）	季柯那	リウマチズム患者、圓磯生殺害犯人を告げる

【注】

- 1) 山田有策+木谷喜美枝+宇佐美毅+市川紘美+大屋幸世編『尾崎紅葉事典』翰林書房 2020.10.28
- 2) 荒井由美「呉構についての文娟論文」『清末小説から』第133号 2019.4.1
- 3) 秋山勇造「長田秋濤」『埋もれた翻訳——近代文学の開拓者たち』新読書社1998.10.20
- 4) 酒井美紀『尾崎紅葉と翻案——その方法から読み解く「近代」の具現と限界』日本・花書院2010.3.10
- 5) 田中彌十郎「長田秋濤の著作」『書物展望』13巻3号1943.3.1。なお田中が調査したという「秋濤著作年表」が次に収録される。長田秋濤遺稿『函南録』教育科学社1943.7.10。これには「寒牡丹（秋濤紅葉共訳）明治三十三年一月 読売新聞」（39頁）とある。
- 6) 覚我（徐念慈）「余之小説観」『小説林』第9期 戊申（1908）年正月
- 7) 中村忠行「晚清に於ける虚無党小説」『天理大学学報』第85輯 1973.3.21。143頁
- 8) 徐兆璋著、蘇醒整理『徐兆璋雜著七種』南京・鳳凰出版伝媒股份有限公司、鳳凰出版社2014.3 中国近現代稀見史料叢刊 第1輯
- 9) 寅半生「小説閑評」『遊戯世界』第1-18期／阿英編『晚清文学叢鈔・小説戯曲研究卷』北京・中華書局1960.3上海第1次印刷／台湾・文豊出版公司1989.4影印本。484-486頁

- 10) 付建舟『晚清民営書局發行書目』上下冊 哈爾濱・黑竜江教育出版社2016.12
- 11) 吳禱が原作者（紅葉）にからめて加筆している。「看官。若是俺們中国旧時説部。凡是遇見什麼進宮引見欽審要案那些事。必有一場大大的叙述鋪排。使看官們十色五光天花乱墜。但如今做這部小説的人。他生在立憲政体国中。像俄羅斯那樣專制政体政治敗壞之國。君主雖則威風。他心裏並不羨慕。以為万万不如他自己国中制度。要好得多。所以将那專制君主的威嚴頭赫。什麼九重天子。什麼天下一人的俗套話頭。一筆抹煞。不願意提起。這就是和別的小説不同之處。看官們。也須領会這一番意思不可輕略看過。」上85頁

呉禱漢訳モーパッサン『五里霧』

——上村左川訳「五里霧中」の原作

『清末小説から』第145号（2022.4.1）に掲載。沢本香子名を使用。モーパッサン作品を英訳したものを上村左川が日本語訳した。それにもとづいて呉禱が漢訳するという経過である。呉禱の漢訳は基本的に日本語を尊重して忠実だ。しかし本漢訳は最後に変更を加えた。英訳モーパッサンには偽作があることにも触れる。

漢訳されたギ・ド・モーパッサン（HENRI RENÉ ALBERT GUY DE MAUPASSANT、1850-1893）の小説は清朝末期と民国初期では数の上ではっきりと差が出ている。清末では多くない。

陳景韓（冷血）が日本語から重訳した「義勇軍」（1904）、同じく呉禱『五里霧』（1907）がある。漢訳者名不明の「将母同」（1909）、周作人「月夜」（1909）くらいだ。

民初になると重版を含めて100点前後に急増する。

1914年以後から雑誌『小説月報』『小説大観』『礼拝六』『小説海』『新青年』などに掲載された。短篇であるというので新聞にも見える。その状況からいえばモーパッサン人気が大きく上昇した。

本稿では清末に発表された呉禱漢訳モーパッサン『五里霧』について説明する。呉禱だから日本語訳を底本にしているのは間違いない。

該作品のばあいも経路が少し複雑だ。図式すると次のようになる。フランス語原作→英訳→日訳→漢訳である。

呉構漢訳が上村左川の日記を底本にしているのは事実だ。問題は左川がもとづいた英語重訳本にある。作品集に贋作が混入しているという。左川の翻訳は大丈夫なのか。

1 上村左川について

モーパッサン作品の英訳にもとづいて日本語訳したのは上村左川（かみむらさせん）だ。

左川について詳細は不明である。大町桂月（芳衛）「上村左川を弔ふ」（1905）*¹によれば土佐佐川町生まれ。号左川は生地になむ。博文館編集者を長く勤めた*²。英語、漢学、国語に通じ、漢詩、短歌、新体詩をよくしたという*³。

単行本の奥付には「上村貞子」と表示するものがある。これが本名であるらしい。「貞子」は「ただし」と読むのかどうかはわからない。大町桂月の追悼文が遅くとも1905年以前に公表されている。そこから1905年には亡くなっていると思われる。ただし1910年に上村左川訳『母の恋』が刊行されるのと合致しない。理由は不明。

左川は英語に通じていたからドイル*⁴、ホーソーン、ポーを翻訳したのはわかる。ほかにはフランス、ロシアの作品がある。それらは英訳に基づいた重訳だと考えていだろう。

左川翻訳のモーパッサン作品は以下のとおり*⁵。原作と英訳題名を補った。

「死人の秘密」『女学世界』明治35.3、／LA VEILLÉE, 1882（お通夜）
／英 A DEAD WOMAN'S SECRET（第11巻）

「五里霧中」『太陽』明治35.4、／MONSIEUR PARENT, 1885.11.10-11.12（バラン氏）／英Monsieur parent（第3巻）／3rd ser.／短篇集 *MONSIEUR PARENT* 1886

「水辺の森」『文芸倶楽部』明治36.7、／UNE PARTIE DE CAMPAGNE, 1881.4.2, 4.9（野あそび）／英 a country excursion（第6巻）

「兄弟」上下『文芸倶楽部』明治36.9、10、／[山川93-338] PIERRE

ET JEAN (ピエールとジャン) 1888／英 Pierre And Jean

「大佐の意見」『太陽』明治37.8、／LES IDÉES DU COLONEL, (大佐の考え)／英 THE COLONEL'S IDEAS (第6巻)

興味深いのは左川が使用した英文底本だ。日訳が公表される前後の英文単行本も少数だが見た*6。しかし「五里霧中 (パラン氏 MONSIEUR PARENT)」を収録しているのはやはり限られてくる。該当するのは「アフター・ディナー・シリーズ THE AFTER-DINNER SERIES」だ。日本ではよく知られており「食後叢書」または「食後双書」と称せられる。この叢書については必ずといっていいくらいに田山花袋の文章が引用される。花袋がモーパッサン短篇集の英訳本を注文し受け取って喜んだという内容だ。

2 「アフター・ディナー・シリーズ」について

モーパッサン短篇集が「アフター・ディナー・シリーズ」の名前をつけられて全12巻が刊行された。明治時代に日本へ輸入されたものだ。花袋の回想『東京の三十年』(1917)*7が有名だ。そのうちの「丸善の二階」から冊数に関する部分のみを引用する。そこに注目するのは冊数について後の研究者が違うことを書いているからである。記述が一致しないのには理由があるはずだ(傍点筆者。以下同じ)。

安いシリーズで、汚い本であつたけれど、それが何んなに私を喜ばしたであらう。ことに、この十二冊の『短篇集』の日本での最初の読者であり得るといふことが、堪らなく私を得意がらせた。私は撫でたりさすつたりした。

280頁

花袋が入手した叢書(シリーズ)は「十二冊」だったと書いている。そこを確認しておく。

丸善関係で木村毅の文章を紹介する。示す数字が違うのだ。

木村毅『丸善百年史』上巻（1980）*8は次のように説明している。

この年の「学鑑」にいくらか注意すべき事として、モウパッサンとマクス・ノルダウの「デゼネレーション」の一頁広告が、しかも見開きになつてのせてあることを挙げ得る。626頁

わが自然主義運動は田山花袋が震源地と云つてよく、その花袋がモウパッサンへの傾倒もつとも深かつたのである。彼は *After-Dinner Series* という十一卷の短篇集英訳ができたことを、丸善の目録で知ると、矢もたてもたまらず、つとめ先の博文館から著書の稿料の先借りをし、雨をおかして駆けつけて買いとった感激の思出を語っている。626-627頁

確認しておくが花袋は12冊と書いていた。それを木村毅は11巻（冊）と説明している。

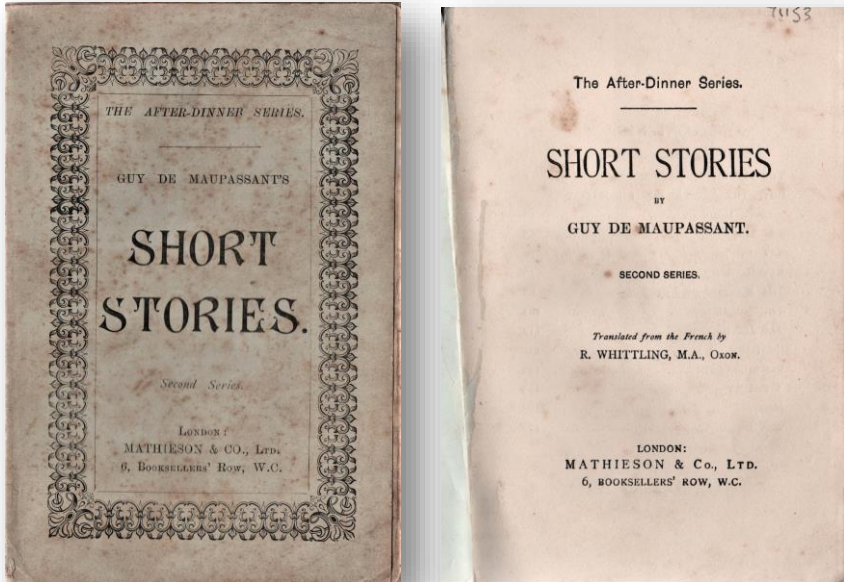
その広告文は次のようなものだという。「SHORT STORIES of Maupassant / *After-Dinner Series*, 11 vols. *Pedlar and other Stories; A Lady's man; A Woman's Life: Each……50 sen*」（627-628頁。The *After-Dinner Series* の表紙写真を掲げている）

その広告文を見ればたしかに「11巻 11 vols.」とある。そこは置いておいてこの広告の内容が奇妙なのだ。収録作品に疑問符がつくからである。“*Pedlar*”は第11巻ではなく第12巻収録だ。しかも“*A Lady's man*”と“*A Woman's Life*”はこのシリーズには未収録なのだった。広告だからそのままを信頼することはできないだろう。

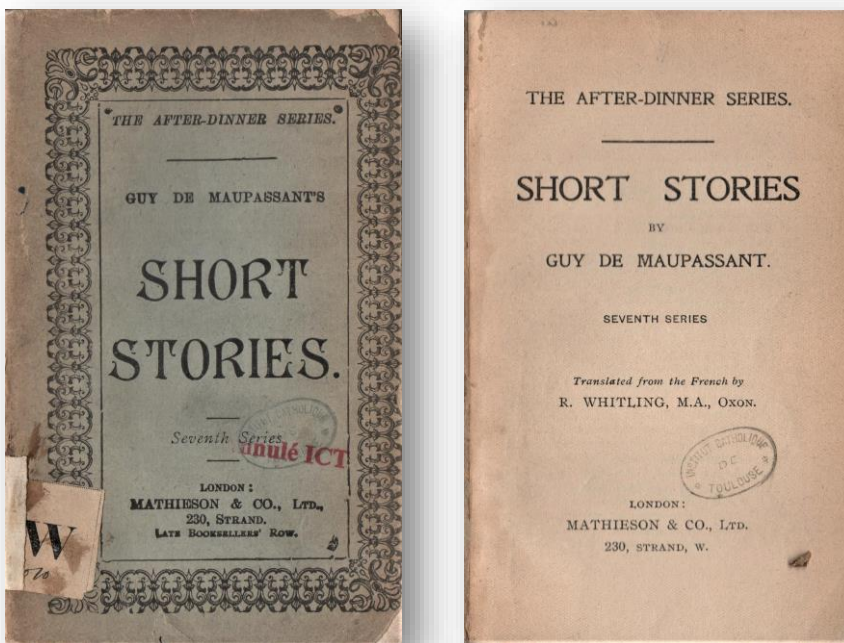
それでも冊数についてはそれを根拠にしたものか木村毅は英訳短篇集シリーズが「十一巻」あると書いた。くり返すが花袋が回想した「十二冊」とは明らかに異なる。

日本では長らく全11冊だと考えられていたそうだ。シリーズ第11巻の表紙には「第11巻、叢書最終巻 *ELEVENTH AND LAST SERIES*」とある。上の広告と同じだ。そう書いてあるから全11巻で完成したと誰しもが思うだろう。国立

国会図書館所蔵本も第11巻までだ。確定しているように考えたのも無理もない*9。
ところが実は全12巻あることが指摘されている*10。花袋が回想したとおりの
第12巻(冊)が存在したのだった。



第2巻 表紙と扉



第7巻 表紙と扉

さてこの短篇英訳シリーズの第2巻と第7巻を見本として示す（架蔵）。

第2巻表紙 “THE AFTER-DINNER SERIES. / GUY DE MAUPASSANT'S / SHORT STORIES. / Second Series. / LONDON: MATHIESON & CO., LTD. / 6, BOOKSELLERS' ROW, W. C.”

第7巻表紙はほぼ同一。ただし巻数が “Seventh Series.” と書店の住所が “230, STRAND, / LATE BOOKSELLERS' ROWS.” で少し異なる。

第2巻扉に英訳者名を記述している。「オクスフォード大学文学修士R・ウィットリング R. WHITTLING, M. A., Oxon.」である。ただし第7巻では “WHITLING” だ（後述）。

山川篤はこれについて次のように説明する。

[山川93-118] 訳者はどの巻でも扉に、/ Translated from the French by R. Whittling, M. A., Oxon. / と断わってあるから問題ない。オクスフォード大学修士リチャード・ウィットリングである。しかし刊行年がどの刊にも記されていない。最終の第十一巻でも同様なのである。

気になるのは最終を第11巻にしているところではない。「R.」について「リチャード」をあてた。なにか根拠があるのだろうか。説明はない。

3 英訳短篇シリーズの訳者について

「アフター・ディナー・シリーズ」全12巻のうち10巻までの訳者はウィットリングだ。本稿では第10、11巻の訳者は問題にしない*11。

ウィットリングはいい。ただしその英文綴りに2種類がある。WHITTLING と WHITLING としているものが存在するのだ。確かに細かい。TT と2字を重ねているのが T 1字に変化している。第2巻と第7巻では確かにそうだ。ほかの典拠は注にまとめておく*12。

英訳者についていちばん詳細に記載するのは筆者が見た限りで国立国会図書館所蔵目録の表記だ。「Whitling, Robert Charles Storrs」とする。この表記はそ

Translated from the French by
R. WHITLING, M.A., OXON.

第2巻

Translated from the French by
R. WHITLING, M.A., OXON.

第7巻

れ以外で見かけない。図書館員が独自に調査したと推測する。

ネットで検索すればチェルトナム大学 (CHELTENHAM COLLEGE) の記録に該当する人物が見える。

ロバート・チャールズ・ストーズ・ウィットリング (1844-1898) はオックスフォード大学文学士を経て牧師になった。チェルトナム大学に勤めていもいる (1881-84)。

Rev. Robert Charles Storrs Whitling, B. A. St. John's College, Oxford. B. A. (New Inn Hall) 1871. Curate of Combe St. Nicholas, 1870-75; of Curland, 1871-78. Vicar of Otterford, Somerset, 1875-80. German Master, Military and Civil Department, Cheltenham College, 1881-84. "CHELTENHAM COLLEGE REGISTER 1841-1910", EDITED BY ANDREW ALEXANDER HUNER, LONDON: G. BELL AND SONS, LTD. 1911. p.47 open library 所収

CHARLES HENRY JEAFFRESON, M.A. (*See under 1868*).
REV. ROBERT CHARLES STORRS WHITLING, B.A. St. John's College, Oxford. B.A. (New Inn Hall) 1871. Curate of Combe St. Nicholas, 1870-75; of Curland, 1871-78. Vicar of Otterford, Somerset, 1875-80. German Master, Military and Civil Department, Cheltenham College, 1881-84.
DOBREE CHARLES WICKHAM, B.A. Educated at Sutton Valence School

「アフター・ディナー・シリーズ」では肩書を「M.A. 文学修士」とする。上の経歴に「ドイツの修士 German Master」とある。同一人物であるならば「B. A. 文学士」のあとに文学修士号を取得したとわかる。

というわけで訳者の姓は“WHITLING”だとする。

4 偽作の混入

「アフター・ディナー・シリーズ」で怪しいのは偽作問題があることだ。

ウィットリングが英訳した10冊のなかに偽作が混入しているとの指摘がある*13。

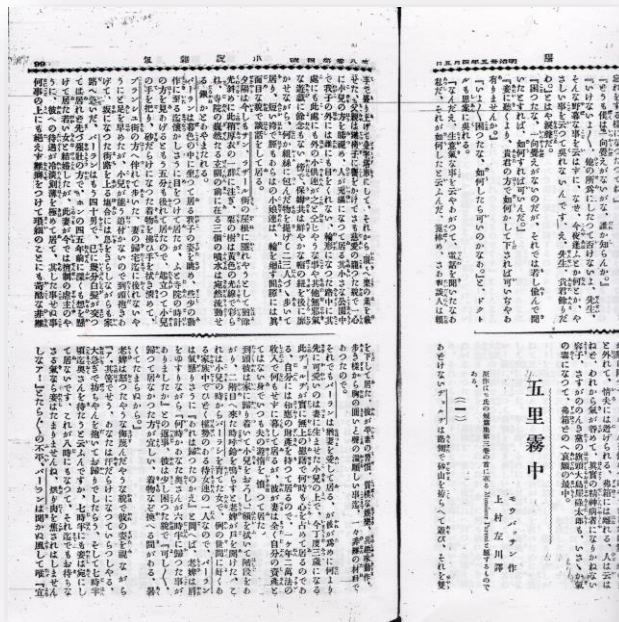
偽作をモーパッサン作品として日本語翻訳することは正しくない。しかし明治時代にその事実が知られていないのであれば判断のしようもないだろう。偽作をもとにした作家論あるいは作品論は成立しない。簡単な理由だ。これは日訳についての別問題になる。

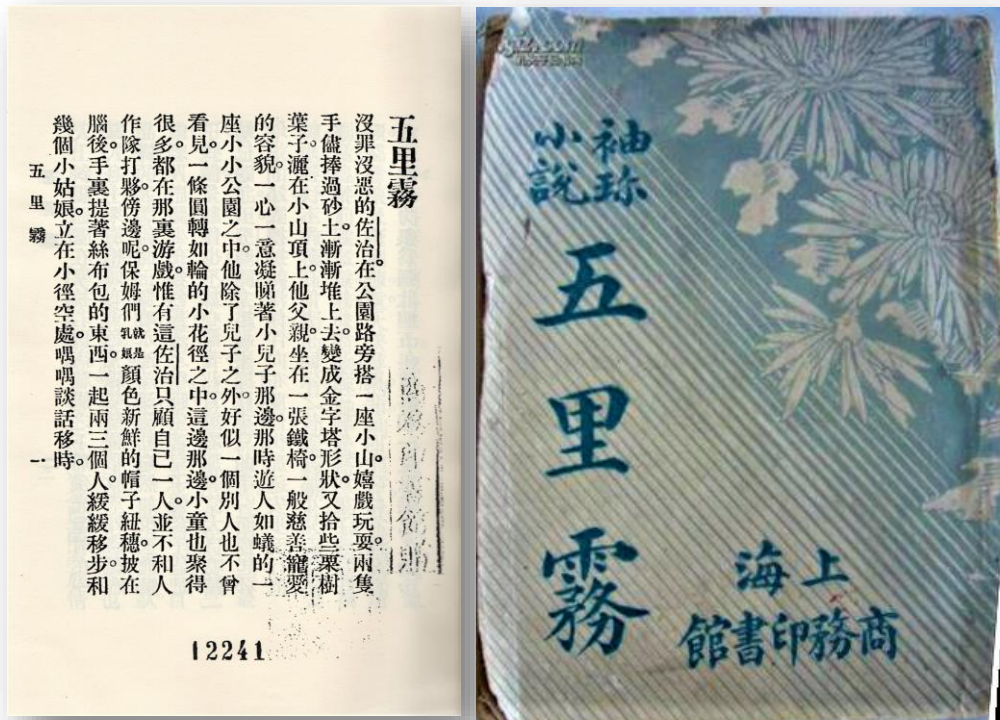
上村左川が使用した英訳は偽作ではない。モーパッサンの「パラン氏」である。本稿において偽作問題は扱わない。

5 呉構漢訳と左川日訳

本稿で使用する日訳漢訳のバージョンは次のとおり。

底本：モウパッサン作、上村左川訳「五里霧中」『太陽』8巻4-5号1902.4.5-5.5





本文は影印本 表紙は孔夫子旧書網より

漢訳：日本上村左川原訳、杭県呉構重訳『五里霧』上海・商務印書館 丁未（1907）年七月初版／中華民國二年十一月三版／中華民國十四年七月五版、袖珍小説（影印本には奥付なし）

袖珍小説影印本には奥付がない。その刊年は樽目録によった。

左川の使用した底本について検討した。「アフター・ディナー・シリーズ」の中の1篇であると結論づけた。だが左川は日訳の冒頭においてそう説明しているのだった。

原作はモ氏の短篇集第三巻の首に在る *Monsieur Parent* と題するものである。98頁

「モ氏の短篇集」がまさしくモーパッサン「アフター・ディナー・シリーズ」を指す。「パラン氏」はその第3巻首に収録されている。左川の書いているとお

りだ。ただし呉構はこの部分を漢訳していない。

英訳の「パラン氏」を左川は「五里霧中」と訳した。「八方塞がり」と読み替えたわけだ。「出口なし」としても同じ。

左川日訳「五里霧中（パラン氏）」は「一」と「二」の前後に分かれる。

前半をまとめる。年金で高収入のパランは妻を娶った。しかし金目当ての妻はパランを邪険にあつかう。パランにとって最愛の3歳の息子だけが妻とのいさかいに疲れた自分の慰めだ。ところがパランを育ててくれた家政婦が告げる。妻には愛人がおりパランの息子はその男の子供だ。その愛人とはパランにとっては古くからの親友でもあった。妻と愛人が抱擁しているのを目の当たりにしたパランは彼らを追い出した。

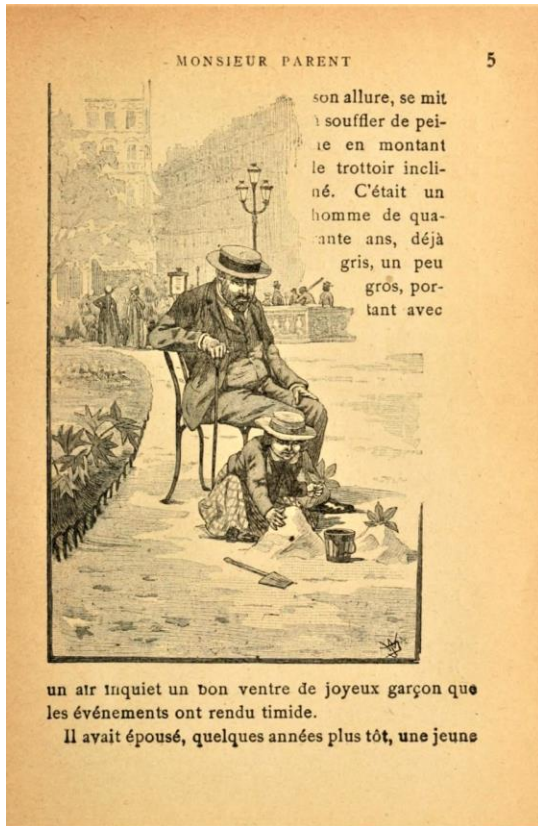
後半はこうだ。ひとり残ったパランは再び独身生活をはじめた。息子を想い焦燥と不安に責めさいなまれる。毎日ビヤホールで食事をとり酒に溺れる生活が5年間続いた。散歩していると偶然に妻と愛人および背の高くなった息子を見かけた。さらに数年後、勧められて列車でパリの近郊に気晴らしにでかけた。そのレストランで3人を目撃した。息子は頬ひげをたくわえている。妻と子供に分かれてから23年間にわたって味わいつくした苦痛だった。ついにパランは彼らと対決する時を迎えた。パランはどう反撃するのか。

小説冒頭を比較対照する。日訳漢訳の傍線、日訳のルビは省略した（以下同じ）。

【左川】あどけないヂョルヂは道側で砂山を拵らへて遊び、それを雙手で盛り上げて金字塔形にして、それから頂へ栗の葉を載せた、父親は鉄椅子に腰をかけてさも慈愛の籠った貌で一心に小児の方を睥視め、人が充満になつて居る其小さな公園中で我子の外には誰にも目をくれない、98-99頁

【呉構】没罪没悪的佐治。在公園路旁搭一座小山。喜戲玩耍。両隻手儘捧過砂土。漸漸堆上去。變成金字塔形状。又拾些栗樹葉子。灑在小山頂上。他父親。坐在一張鉄椅。一般慈善寵愛的容貌。一心一意凝睇著小兒子那邊。那時遊人如蟻的一座小小公園之中。他除了兒子之他。好似一個別人也不會看見。

1頁



パランと息子*14。

フランス語原作の「小さい Le petit」が「小さい、かわいい Little」に英訳された。それを左川は「あどけない」に日訳すると呉禱は「無邪気な〔没罪没悪的〕」に漢訳した。基本は押さえている。日訳「道側で」を呉禱が「公園路旁」と「公園」を補っているのも場所がそうなのだから間違いではない。

ここで呉禱漢訳を日本語に翻訳しないのは左川日訳を直訳しているからである。40歳のパランはすでに白髪がまじっている。4、5年前に結婚して現在は息子のジョルジュを溺愛している。だが妻はパランを嫌い、なにかにつけてなじるのだった。

【左川】パーランはもう四十男で、已に幾分白髪が交つては居れど先づ強壯の方で、ホンの四五年前に深くも想を懸けて居た女と結婚したが、此妻が今では擅制の虐主のやうに、彼への待遇が冷淡刻薄を極めて居て、其した事せぬ事何事の上にも絶えず難癖をつけて瑣細のことにも苛酷な非難を下して居

た、彼が平素の習慣、質樸な娯楽、其趣味動作、歩き様から胸の円いと声の温順しい事迄、一々非難の材料であったので。99頁

【呉禱】 可知巴蘭年以四十。雖略有幾分白髮。幸虧精力很為強壯。四五年前。終和一位思恋以久的少女成婚。不料妻子到得家中。忽變成十分專制的暴虐。待他極為冷淡。又極刻薄。重大緊要的事。倒也罷了。任是極瑣屑細微。也要向他駁難。務求苛刻。連他平素生来的習慣。質樸的歡娛。行走的模樣。言語的聲音。一切万種動作。全供他妻子做了駁難憎嫌的材料。2-3頁

「此妻が今では擅制の虐主のやうに」を呉禱は「思いもかけず妻は家に入ると突然に十分專制的な虐主に変わってしまった（不料妻子到得家中。忽變成十分專制的暴虐）」とした。妻の態度変化が激しいことを強調したのだ。言葉を付けくわえて説明がわかりやすくなった。

「其した事せぬ事何事の上にも」は「重大緊急なことならいざ知らず（重大緊要的事。倒也罷了）」と書き換えた。

「胸の円いと」は漢訳では無視した。

以上のいずれも許容範囲内の変更であるといえる。呉禱漢訳はほとんど直訳になっている。誤訳はない。

呉禱は底本の文章一部分を漢訳してあとは省略する（下線は筆者。以下同じ）。パランに注意された家政婦が立腹してドアを乱暴に閉めて出て行った。ジョージがドアの音を真似する個所だ。

【左川】 最初は呆れ返つて居たヂョルヂは面白さうに手を叩きだして、頬を膨らせながら精一杯大きな息を込めてバーンと戸の閉った音の真似をした、それから父親は色々のお伽噺を聞かせたが、心中思ふ事があるので断えず噺の筋が間違ひ、訳が解らないので小供は呆れて眼を大きくした。101頁

【呉禱】 第一個小小佐治。先自發了呆。11頁

最初ヂョルヂはぼかんとしていた。

ジョージの無邪気な所作と父パランの狼狽を対比させて説明している個所だ。

その日誌は小説の本筋にとって不必要だと呉禱は判断したらしい。

家政婦ジュリーは意を決した。主人に向かい女主人の不貞を告げる。

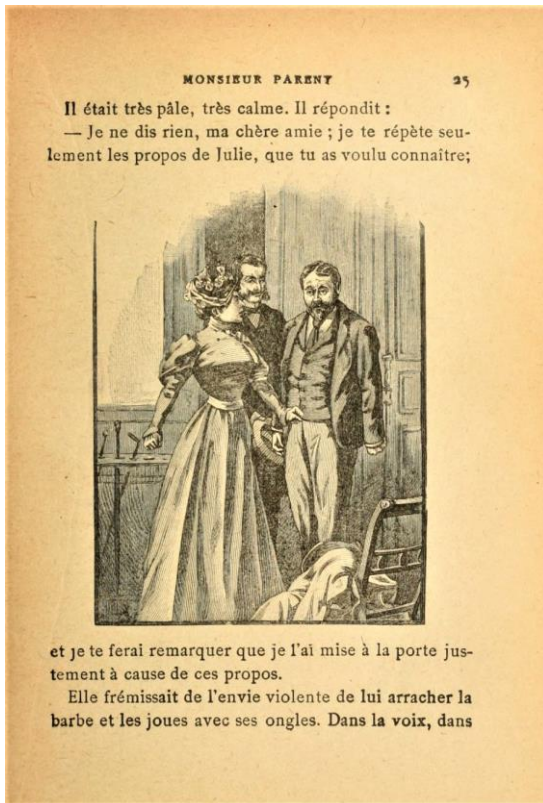
【左川】 イエ旦那、妾はもう何もかも云はねばきゝません、今迄久しいこと奥さんはリムウザンさんと不義をして居るですよ、戸の後で幾度も兩個が接吻するのを妾は見ました、リムウザンさんに若しお金があつたら、奥さんは屹と貴下と夫婦になりはしなかつたです、何んな工合で結婚しなさることになつたか覚えて居なさるなら、一伍一什の事情が判りませう 102頁

【呉禱】 我如今不論如何。再也不能不説。主婦夫人。和林佑純先生。幹了不仁不義的事。業已多時。不止一日一月了。我在門後。親眼見他兩人。接了好幾回吻。林佑純先生。倘若有錢。夫人断然不和你老結為夫婦。他為了什麼。我是知道著。莫説這些兒。別的任是大小事情。我一五一十全然知覺。須瞞不過我。14頁

私は今どうあろうと言わずにはいられません。奥さんはリムウザンさんと不仁不義のことをしているのですよ。それも長い間、一日一月のことではありません。私はドアの後ろでふたりが幾度も接吻するのをこの眼で見たのです。リムウザンさんにもしお金があつたら奥さんはきっと旦那様とは夫婦にはならなかつたです。あの方が何のためだったのか私は知っております。そればかりかほかのどんな事も私は一部始終をすべて知っていますから隠し通すことはできはしないのです。

家政婦がいう「何んな工合で結婚しなさることになつたか」とは金に引かれて結婚したことを意味する。呉禱は「他為了什麼（あの方が何のためだったのか）」と理解している。ただし次が異なる。左川は「一伍一什（いちぶしじう）」を使用して「判りませう」とパランに全部の事情を分からせようとした。しかし呉禱は「一五一十」とそのまま漢訳に利用しながら知っている主体を家政婦に取り換えた。細かな部分だ。本筋からは離れていない。

まことに赤裸々な告発である。事実を事実として知らせる。パランには反論のしようがない。彼は逆上して自分を育ててくれた主人思いの家政婦を追い出した。



左から妻アンリエット 愛人リムーザン
パラン

息子が他人の子かもしれない。こうしてパランは疑惑と苦悩とに責められることになる。

呉禱は左川をほぼ忠実に漢訳しているが除去する部分もある。下線部分は一致する。しかしそれ以外を呉禱は漢訳しなかった。そこを「漢訳なし」と示す。

【左川】毎日時々刻々の間唯此悽しい秘密を発見さうとばかり焦ることであらう、そして無邪気な小児、嗟其懐かしい小児をも、此劇しい苦痛で骨髓を抉らるゝ心地せずには最早見ることを得せぬのである、我愛し且は憎むべき其子と共に茲に生活し、此家に留るの外がなからう然うだ結局は此子を憎むやうになるは必定、嗟何たる苛責！寧そリムウザンが確かに此子の父と極つてしまつたなら、却て心も安らぎ不幸と苦痛にも慣れ得られることであらうが、何方とも判らないのは実に耐へ難き苛責である！判らないで、それを何時も知らうと焦り、断えず煩悶しながら、而も此子、他人の子を時々接吻し

て伴れて歩いたり、抱いて行つたりして 108頁

【吳禱】他天天時時刻刻。只焦慮縈縈。要想發覺這件凄慘的秘密事情。那天真爛熯的小兒。噯。可憐啊可憐。（漢訳なし）如果真是別人的兒子。我這時時向他接吻。時時抱著遊行。恰為何來。37頁

彼は毎日時々刻々この凄惨な秘密を發見しようとただ絶えず焦るばかりだった。あの無邪気な子供。ああ、可愛いかわいいあの子。（漢訳なし）もし本当に他人の子だったら私が時々接吻したり時々抱いて歩くのはほんとうに何だったのだ。

左川日訳はパランの一人称で思考している。吳禱は三人称に変換して途中で一人称に切り替えた。取り除けた個所の「寧そリムウザンが確かに此子の父と極つてしまつたなら」を引き抜いて「如果真是別人的兒子（もし本当に他人の子だったら）」に取り入れた。こういう削除操作が漢訳を全体から見れば短縮する結果となる。

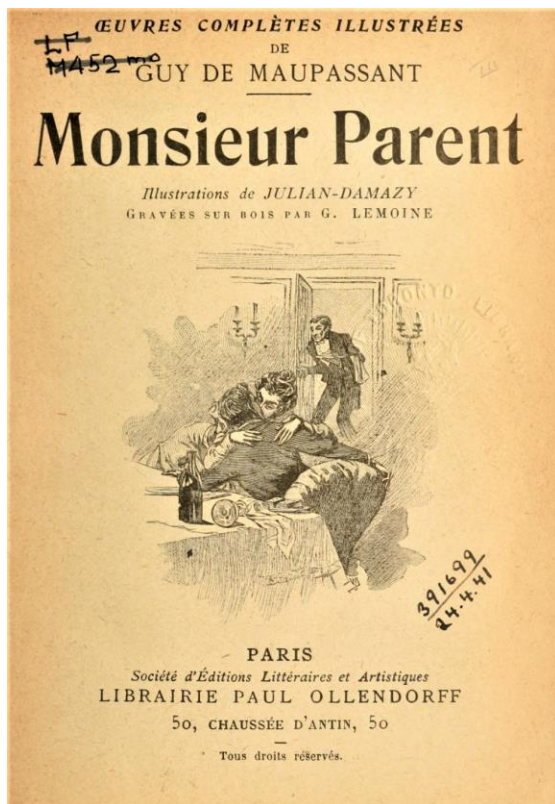
パランは息子についての事実をどうしても認めたくはなかった。しかし決定的出来事がパランの目前で出現していたから自分の誤りを思い知ることになる。家政婦の代わりを探しに行くといつていったん家を出た。しばらくしてパランが戻ってきた。

【左川】姦婦が常の柔しい輕蔑の貌で笑ひながら、男の側に寄り添うて肩に手をかけた、煙突の處の鏡の前であつたので、時計の後にも丁度全じやうな男女が寄り添うて居る姿が見られた。／此時何とて両側の耳に入るものは無く、鍵の音も戸の開く響も少しも知らなかつたが、アンリエットは俄に声を揚げて両手でリムウザンを突退けた、見れば前にはパーランが突立て血相變へて此方を睨んで居る、110-111頁

【吳禱】那姦婦發出一股柔情。又帶著輕藐形容。只是憨笑。隨走近男的身旁。將手搭在他肩上。地位正在立鏡之前。時鐘之後。看著好似男女兩人。扭結在一處模樣。／那時心神迷惑。什麼東西。也不入兩人耳朵裏來。那些開鎖聲音。開門氣息。更是一些不曾聽見。不意思利愛特。忽地揚聲高喊。兩手突然將林

佑純一推。離得老遠。慌乱之中。張眼一看。只見巴蘭矗立在面前。臉上變成紫血一般。向這辺睨看。45-46頁

その姦婦は柔らかくて軽蔑の様子で無邪気に笑って男のそばに近寄ると肩に手をかけた。ちょうど姿鏡の前の場所で時計の後ろにも男女のふたりが絡まっている様子が見られた。／その時、心神は混乱しふたりの耳に入るものはなにもなかった。鍵を開ける音もドアの開く気配さえまったく聞こえなかったがアンリエットは不意に声をあげ大きく叫ぶと両手で突然リムザンを押しのけ遠ざけた。慌てる中、眼を見開いてみればパーランが面前に突っ立って血相を変えてこちらをにらんでいる。



呉禱が除外したのは左川訳にある「煙突の處の」くらいのものだ。呉禱が付けくわえたのは「心神迷惑」だ。それらを除けばほとんど直訳とっていいだろう。パーランはリムザンに跳びかかる。アンリエットが夫の首をつかむ。大騒動のあとパーランはふたりを家から追い出した。

妻は残酷な事実をパランに向けて捨て台詞にする。

【左川】 妾は我子が要りますよ、あなたにはあの子を伴れる権利はない、あなたの胤ではないんだもの……判つたか？あの子はあなたの子ではない、リムウザンさんの子だよ 112頁

【呉禱】 我定要我的兒子。你須沒有帶那孩子的權利。這須不是你的骨血。……你知道麼。那孩子不是你的兒子。乃是林佑純先生的兒子。49頁

本漢訳において呉禱は会話を示すカッコ記号は使用していない。しかし「……」の箇所はそのまま利用していることがわかる。

ここまでが左川日訳の前半だ。呉禱は前後を分かたずひとつづきにする。

パランは再び独身生活を始めた。彼を悩ませたのはやはり父親問題だ。ジョルジュの父は本当にリムーザンなのかという疑惑が払拭できずに苦悩し煩悶する毎日だった。

モーパッサンはパランが苦悩する様子を長々と描写する。それが本作品の主題でもある。主人公が23年間の長きにわたって悩み続けることが結末のどんでん返しには必要だからだ。それが彼の小説作法である。

煩悶の具体例を示す。

【左川】 リムウザンが小児に対しての挙動を想出さうと、不愉快で暑つくるしい思いをしながら、床の中で幾度となく寝返を打つたが、素振と云ひ貌付と云ひ、物の云ひ方寵愛の仕方迄、何一つ疑しいやうなことは能う想出さない、母親の方といへば、これは小児の上はさして頓着して居なかつた位であつた若し密夫の胤であるものなら必らずもつと秘蔵にしたのだらう、して見れば両個は唯復讐と悪意で、其交情の邪魔をした面当に自分とあの児とを引分けたものであらうと思ひ、翌朝は法官の許を訪ひ其助力を借りてゾルヂを取返さうと覚悟を極めたが、さう決心したかと思ふと復直ぐに反対の方へ考へてしまふ、96-97頁

【呉禱】 巴蘭睡在牀中。幾次三番。輾轉反側。想到後來。除非我和那孩子試

験試験。纔見分明。(割注：中国是用滴血之法) 明天早晨。且到法官那裏。求他帮忙助力。将佐治奪取回来。剛剛決定心腸。忽又轉了別念。 53-54頁

パーランは床の中で幾度となく寝返りを打ったが、あとで私とあの子供を試験してみるほかない、そうしてこそはっきりすると考え着いた(中国は滴血の法を使用する)。翌朝は法官のところへ行き助けてもらいヂョルヂを取り返そう。そう決心したかと思うとすぐに別の考えに変わるのだった。

下線部分が左川日訳と呉禱漢訳がほぼ一致する。呉禱は底本が描写するパーランの思考の行きつ戻りつする状況は無視してしまった。そのかわりに中国伝統の「滴血の法」を挿入した。昔の中国では親族であるかないかは血を使用して判別したという。親族を疑われるそれぞれの人物の血を真水に注入する。混じりあえば親族認定がされるという方法だ。伝来の方法を小説に挿入すれば読者には親族問題であるとはっきりと理解できる。そう呉禱は判断したようだ。ここはモーパッサン原作からも左川日訳からも遠く離れてしまった。

呉禱は日本語のカタカナは読むことができる。しかしその意味を理解しないことがある。『車中毒針』では出てくる「モーグ(死体公示所)」を地名「在摩革地方」(15頁)と間違った。それと同じく本作でも「ビーヤホール」(98頁)を「一家大旅館。名叫批亜忽爾」(56頁)と漢訳して大ホテルの名前に取り違えた。あるいは「ブラットホーム」(101頁)を地名「泊拉忒忽姆」(68頁)に誤解した。さらには「アンリー四世堂」(102頁)というホテルレストラン名を「恩利地方」(70頁)と地名にした。細かいところだ。

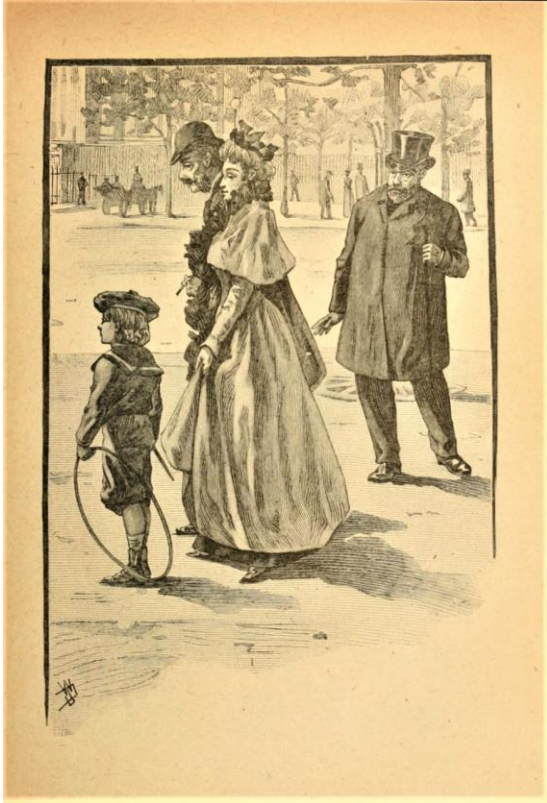
ついでだから呉禱の訳し癖らしきものも書いておく。なぜだが原文のスープをパンに置き換える。

本漢訳において「スープ」(108頁)を呉禱は「麵包(パン)」(35頁)に書き換えた。別作品を見れば日本柳川春葉原著、杭県呉禱訳述『薄命花』(上海・商務印書館 丁未(1907)年六月初版/中華民國六(1917)年四月六版 袖珍小説)がある。ここでも「スープ」(97頁)とする個所を呉禱は「麵包(パン)」(5頁)に変更した。

パーランは一日をこのビヤホールで過ごすことになった。毎日、食事をしコーヒ

一、ブランデーを飲む。途中で散歩をしてまたブランデー、アブシンス（アブサン）を楽しむ。閉店になるまでそこで時間をつぶすのだ。

そうして5年が経過した。ということは3歳のジョルジュは8歳だ。パランは偶然にこの3人を通りで見かけた。その時の様子を描いた挿絵を示す。



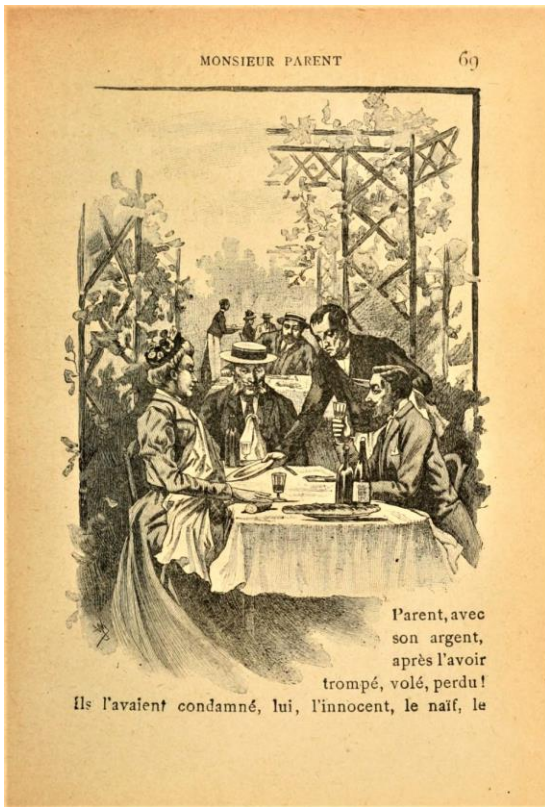
パランは3人を見かけた

溺愛していたジョルジュは背が高くなっている。パランは子供を抱き上げて逃げ出そうと一瞬考えた。偶然にぶつかった様子を装ったがジョルジュからにらまれる（日訳99頁／漢訳61頁）。パランはコソコソと退散するほかない。あれほど愛していた息子は自分のことをまったく知らない他人だと考えている。子供は腹立たしげに睨んだのだ。人間関係が断絶していることを示す。これが数年後に発生する破局の伏線にもなっている。

女性店員に勧められてパランは気晴らしのためパリからサン・ジェルマン（サン＝ジェルマン＝アン＝レーのこと）に行くことにした。汽車で到着すると景色を堪能した。「回想すれば今迄二十ヶ年の間、飲食店で過ごした変化なき無趣味の悲し

い歲月！」（101頁）だ。呉禱は記号を含めて逐次訳をしている。「回想従前。那二十年以来。在酒飯館裏。度那没趣没味不生不死的淒涼歲月！」（69頁）である。

食事をしようとレストランに入る。そばで見知らぬ3人の客が食事をしている。パランはその声を聴いて察知した。アンリエットたちだ。（挿絵の手前左からアンリエット、リムーザン、給仕、息子のジョルジュ。パランは後ろの正面に座って彼ら3人を凝視している）



パランは回想して怒りを抑えきれない。

【左川】彼等は此質樸單純な陽気な人間を、全く孤独の悲境に陥れ、街道の敷石と酒店の帳場との間のみで忌はしい一生を過させ、精神の苛責、肉体の苦艱、辛酸悲痛のあらん限りを嘗めさせたのである！（大きく中略）今其三人の者は直ぐ眼前に並んで居る、斯程迄心を悩ませる其三人！102-103頁

長くなるので途中を略した。その全体は約650字足らずである。これを呉構はすべて投げ捨てた。とても惜しいと思う。ここで述べる具体的な憤激があつてこそ最後にパランが感情的に爆発する衝撃度を強めるからだ。

それを指して次の「是迄の苦痛と落胆の数々」でまとめた。そこは左川日訳の通りにしている。

【左川】 パーランは是迄の苦痛と落胆の数々を悉く想起して、奮激しながら其様子を睥視たが、103頁

【呉構】 巴蘭登時把從前的苦痛恐懼。一起一起籠總兜上心来。漲満了一肚子氣憤。冷眼看他們模樣。72頁

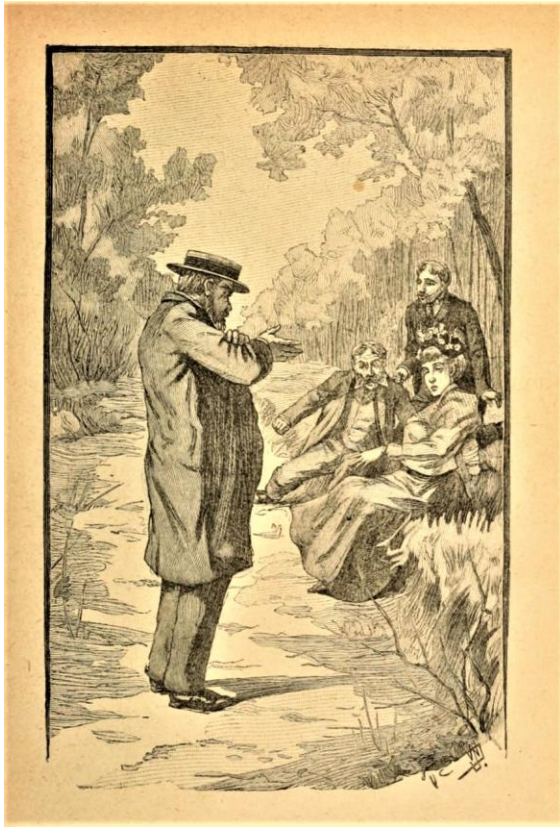
パーランはただちに昔の苦痛と恐怖がひとつひとつぼんやりと混じりあつて心がふさがれてしまうと全身に憤激を満ち溢れさせながら冷ややかに彼らの様子をながめた。

パランは食事を終えた3名のあとをつけた。パランは彼らを目の前にして叫んだ。これまでの経緯、自分の名前がアンリ・パランであり息子の名前がジョルジュ・パランであること、アンリエットは妻だし、その3人はパランが支給する金で生活していること、妻とリムーザンの関係、妻がパランの金を目当てにして嫁いできたことなどを並べ立てた。

最後はパランによる止めの台詞だ。

【左川】 さア、返事をしろ……嬢は知らない……賭でもしやう、彼奴は知らない……いゝや……何うしたつて知らない……両方へ全衾をして居たんだ！ハハハ……ジョルヂ手前にも知れない、俺から上の事は判らない……何うしたつて判らない……さアその阿母に問うて見ろ……阿母も知らないぞ……俺も知らない……手前が勝手に極めれば可い……然うだ、父親は俺だか彼奴だか、手前が勝手に極めろ……何方とでも極めろ……左様なら……もうこれで済んだ済んだ……此後若し阿母が手前に言て聞かすと云ふことになつたら

俺に来て知らせろ、コンチナン旅館に居るから……知れたら嬉しい……左様なら……皆さん沢山お楽しみ…… 105-106頁



パランが暴露する

【呉禱】快些回答啊。妻子不知道。任是賭賽什麼也好。那厮不知道。……呀。為什麼不知道。兩邊都是共枕同衾。哈哈。誰也不知道。噲。佐治你也不知。為什麼不知。你問問阿母瞧。……阿母也不知。難道俺也不知。你若能幹些便好了。父親究竟是俺啊。還是那厮啊。你通些靈性。任是誰人。也不妨老实講。若是恁地。如今這事又是不了。又是不了。從今以後。若你母親有話告訴你。你須前來告俺。…… 80-81頁

早く答えろ。妻は知らない。賭けてもいいぞ。あいつは知らない。……ヤ、なぜ知らないか。両方と同衾していたんだ。ハハ、誰も知らない。ケ、ジョルヂ、お前も知らない。なぜ知らないか。お前の母親に聞いてみる。……母親も知らない。俺も知らない。お前がもし決めることができればいいじゃないか。父親は結局のところ俺かそれともあいつか。お前の頭が回れば誰だろ

うと正直に言ってもいいのだぞ。そういうことだから、この事はもう終わりだ、終わりだ。今後、もし母親がお前に話すことがあるということになったらお前は俺に知らせに来いよ……

呉禱漢訳では「……」の使用が左川よりも控えてある。底本で記号がそのように使用してあるのはパランの喋りを写したものだからだ。激しい怒りもって考えながら力強く追及する口調を創出した。日訳はそれを忠実に反映している。漢訳は一致はしていない。

左川日訳の「俺から上の事は判らない」というのはわかりにくい。フランス原文は“tu ne le sauras pas, pas plus que moi (お前は知らない、俺以上に)”だ。英訳は“you will not know any more than I do (お前は俺以上のことは知らない)”となる。それを知れば左川の日本語につながる。

日訳の「左様なら」は別れの言葉だ。フランス語原文で“Bonsoir”、英訳で“Good evening”である。「こんばんは」あるいは「おつかれさん」でもいいだろう。ところが呉禱は日本語音と漢字に引かれて「そういうことだから」と理解した。それが漢訳の「若是恁地」に該当する。呉禱が日本語の漢字を勘違いすることは多くはないにしてもあることはある。

以上のところを見れば呉禱は底本の部分をいくらか省略をしながらほぼ忠実に漢訳しているといっている。

ところが最後の最後になって呉禱は勝手に筋を書き換えるのだった。

6 重大な改変

パランは3人との対決で大いに疲労を覚えた。パリにもどりいつものピヤホールに向かった。

【左川】 (パーランは) 生まれてない事、此晩には全く酔ひ顔てしまつて、到頭家へ担ぎ込まれるに至つた。106頁

パランにとってはそれ以後も悔恨と懊悩に襲われる地獄の日々が続くのだ。モーパッサンは残酷なまでにその苦悩をパランに強要する考えだった。

呉禱の書き換えを見る。

【呉禱】誰知他死期已到。当晚酒喝酒喝的過多。就此一醉身亡。只索由館中人将屍首擡到家中。安排殯殮。82頁

彼（パラン）の死期がすでに来ていたことを誰が知ろうか。その晩、酒を飲みすぎてしまいそのまま死亡した。旅館から人をよこしてもらい死体を家に担ぎ込むと納棺出棺の手配をしたのだった。

パランを死なせてはモーパッサンの残虐さが生きてこない。ここは生き延びさせるべき個所だ。

呉禱は誤判断したというほかない。ほとんど忠実な漢訳であるだけにこの結末の変更は残念なことだと思う。

重要な箇所を書き改めることがあるのは呉禱の別作品『銀鈕碑』（1907）にも見える。ペーラの亡骸を納める棺桶に銀モールを飾るのが原作だ。呉禱はそれを「銀鈕子（銀ボタン）」に変更した。そこから漢訳題名を『銀鈕碑』にするという大胆さだ。レールモントフ作、矢崎訳「当代の露西亜人」からは離れてしまう。呉禱漢訳の登張竹風訳『賣国奴』がある。最後部分に大きく加筆してゾーダーマンの作品世界を破壊したことも書いておく（別稿あり）。

日本語訳を直訳するのが呉禱の基本的な翻訳姿勢だ。しかしそうではない箇所もある。

モーパッサン原作の「パラン氏」は夫と妻、父と子、また愛人との複雑な人間関係問題を赤裸々につづっている。いわば心理小説である。清末の読者にどのように受け止められたのか。それを証明する当時の評論文はなさそうだ。

ひとつの資料になりそうなのは新聞広告だ。出版元の商務印書館が出稿した。次の広告の句読点は陳大康が施したもの。

【編年⑤2574】『中外日報』「上海商務印書館又新出小説九種」光緒三十三年

八月二十五日

上海商務印書館光緒三十三年七月出版，日本上村左川原訳，杭県呉構重訳／此書叙巴蘭受愚于其妻恩利愛特，後始覚悟，憤激衝突，卒子身以醉死。描摹口吻惟妙惟肖，読之洵足解頤。袖珍洋装式，售大洋一角五分*15。

(内容のみを翻訳する) 本書はパーランがその妻アンリエットからバカにされ後によく悟り憤激して衝突し最後はひとり酔って死ぬ。描写口調は絶妙で読めば十分に笑うことができる。

描写の巧みな点を前面に押し出して広告した。たしかに呉構の漢訳はその個所に見せ所がある。ただし笑うことができる作品ではないように思う。商務印書館の広告文書き手とは感覚が異なる。

呉構は本漢訳でも見事な口語訳を披露している。これが清末という時代に出現しているのに注目すべきだ。同時代の林紓が文言文を用いて翻訳作品を出版しているのと自然に比較したくなるだろう。大多数の漢訳者が文言文を使用していた時代なのだ。呉構はのちの五四時期前後から提唱される白話に先駆けて口語訳を実践している。無視すべきではない。その側面については評価する価値が大いにあるといたい。

登場人物名対照表

英 訳	左 川	呉 構	備 考
Henri Parent アンリ・パラン	アンリー、パーラン	恩利巴蘭	主人公、年金生活者
George Parent ジョルジュ・パラン	ヂョルヂ、パーラン	佐治巴蘭	息子
Henriette アンリエット	アンリエット	恩利愛特	妻
Paul Limousin ポール・リムーザン	パウル、リムウザン	巴烏爾林佑純	親友、妻の愛人
Julie ジュリー	ヂュリー	仇利	家政婦

【注】

- 1) 大町桂月(芳衛)「上村左川を弔ふ」『我が文章』日高有倫堂1905.12.25。41-46頁。
のち『人間と自然』東亜堂書房1915.11.27。237-243頁。いずれも国立国会図書館デジタルコレクション所収
- 2) 李艶麗『晚清日語小説訳介研究(1898-1911)』(上海社会学院出版社2014.8 国家対外文化交流研究叢書)が江見水蔭『自己中心明治文壇史』博文館1927(筆者未見)から引用する(150頁)。博文館の編集者として名前が見える。
- 3) 国立国会図書館デジタルコレクションに収める書籍を引く。
上村左川編『時事論説文範』博文館1898.11.22(日付に訂正あり)。奥付編者は上村貞子
上村貞子編『新撰日本地理問答』博文館1902.1.26(日付に訂正あり)
上村左川編『新撰和英文典問答』博文館1904.10.3(月日に訂正あり)。奥付著者は村上貞子
アルフォンス、ドーデー(表紙扉ドオデエ)作、上村左川訳『母の恋』東京国民書院1910.7.15(ALPHONSE DAUDET 原作 JACK 1876。MARY NEAL SHERWOOD 英訳 JACK. 1877)
- 4) 左川訳ドイルは漢訳された。滑震記「(滑震筆記之一 短篇)黄面」『時報』光緒30.6.23-28(1904.8.4-9)。ARTHUR CONAN DOYLE “THE YELLOW FACE” 1893.2(劉徳隆)英文と上村左川訳「再婚」(『太陽』第7巻第13号1901.11.5)を参照して漢訳した。
- 5) 次を参照した。川戸道昭+榊原貴教編「明治翻訳文学全集」新聞雑誌編31、32 大空社1997.10.28、1999.12.3
- 6) つぎのようなものがある。すべて open library 所収
『オッド・ナンバー』JONATHAN STURGES 英訳 “THE ODD NUMBER / Thirteen Tales by Guy de Maupassant” NEW YORK: HARPER & BROTHERS, 1889。13篇を収録。Monsieur Parent を含んでいない。
1902年以前の刊行でなければならない。ゆえに次の書物は該当しない。
GUY DE MAUPASSANT 著、英訳者不記 “THE COMPLETE SHORT STORIES OF GUY DE MAUPASSANT : TEN VOLUMES IN ONE” NEW YORK: P. F. COLLIER & SON CORPOLATION, 1903
M. WALTER DUNNE 英訳 “THE WORKS OF GUY DE MAUPASSANT” 1903
英訳者不記 MONSIEUR PARENT AND OTHER STORIES “THE WORKS OF GUY

DE MAUPASSANT” VOLUME II, NEW YORK: BIGELOW, SMITH & CO. 1909

- 7) 田山花袋『東京の三十年』博文館1917.6.18（日にちの訂正あり）。国立国会図書館デジタルコレクション所収。また同じく、田山録弥『花袋全集』第11巻 花袋全集刊行会1923.7.24。364頁
- 8) 木村毅「第二編 第十三章 ケンペエルとシーボルト 四 モウパッサン」『丸善百年史』上巻 1980 ウェブサイト丸善出版
- 9) 山川篤「第四章 「ジ・アフター・ディナー・シリーズ」及びこれをめぐる二つの疑問について」『花袋・フローベール・モーパッサン』駿河台出版社1993.5.10。115-134頁。略号は〔山川93〕。第1-11巻の細目を収録する。11巻完結と考えたから第12巻は未収録。また偽作問題には言及がない。
- 10) 牧義之「英訳モーパッサン短篇集「食後叢書」に関する考察：新出第十二巻をめぐって」『北の文庫』42、2005.8 電字版。略号は〔牧05〕。
- および牧義之「英訳モーパッサン短篇集「食後叢書」に関する考察（承前）：翻訳から見る第十二巻の存在」『北の文庫』47、2008.2 電字版
- 11) 参考までに〔牧05-3〕は「（第十二巻の）訳者は十一巻と同じハシニガン（D. F. HANNIGAN）である」とする。
- 12) WHITLING 説が正しいだろう。通し番号を振る。

○WHITLING 説—————

①英国図書館（British Library）目録「Short Stories ... Second Series / translated from the French by R. Whitling., London : Mathieson & Co, [1896, 97]」

②同 上「Short Stories : ninth series / tr. from the French by R. ^マWhitling.」Guy de Maupassant, 1850-1893.[S.I.] : Mathieson,[n.d.]

③外国図書館（Georgian Catholic Foundation）目録「Short stories. Fifth series : Translated from the French by R. Whitling, M.A., Oxon」注：オックスフォード大学文学士

④〔山川93-118〕Translated from the French by R. Whitling, M. A., Oxon. 、オックスフォード大学修士リチャード・ウィットリングである。118頁。

なお〔牧05-6〕注10が「第一巻から第十巻までの訳者は、オックスフォード大学修士リチャード・ウィットリングである」とするのは〔山川93-118〕から引用したものか。

⑤足立和彦は Robert Whitling とする。足立和彦「メズロワ、リシュパン、ザッハー＝マゾッホ——英訳モーパッサン「偽作」の調査報告」大谷大学西洋文学研究会『西洋文

学研究』第34号 2014.6.25。略号は[足立14]

⑥足立ウェブサイト「モーパッサンを巡って」。Short stories by Guy de Maupassant, translated from the French by R. Whittling, M.A., Oxon, coll. “After-Dinner Series”, London, Mathieson, n. d. 12 vols.

○WHITTLING 説—————

⑦『慶應義塾図書館洋書目録』1906「Maupassant, G. de.—Short Stories, translated from the French by R. Whittling, (the after-dinner series), London B 521 1」45頁。
googlebooks 所収

13) 参考文献は次のとおり。

大西忠雄「モーパッサン偽作一覽表」日本比較文学会『日本比較文學會會報』12、
1958.1

秋山勇造「モーパッサン」『埋もれた翻訳——近代文学の開拓者たち』新読書社
1998.10.20。272-310頁

前出の足立和彦「メズロワ、リシュパン、ザッハー=マゾッホ——英訳モーパッサン
「偽作」の調査報告」2014

14) 挿絵はすべて次による。GUY DE MAUPASSANT “MONSIEUR PARENT” PARIS:
LIBRAIRIE PAUL OLLENDORFF (1899) open library 所収

15) 同様の広告を引用しておく。[付晚上209-210]『商務印書館書目提要』1909.九改定7版
「言情小説 五里霧 一角五分／巴蘭受愚于其妻，後始覺悟，憤激衝突，卒子身以醉死，
描摹口吻惟妙惟肖，讀之洵足解頤」

呉禱漢訳『美人煙草』について

——広津柳浪「美人菘」

『清末小説から』第144号（2022.1.1）に掲載。荒井由美名を使用。広津柳浪の「美人菘」を呉禱が漢訳した。学費を打ち切られた男女の大学生を主人公とする。男性の学業を援助するため自らは退学してタバコ屋を開店した。男性はそのおかげで大学を卒業できた。ところが同級生から彼女の悪い噂を聞いて面と向かって罵る。柳浪の口語体恋愛小説を呉禱がどのように翻訳したかを検討する。

1 誤記からはじまる

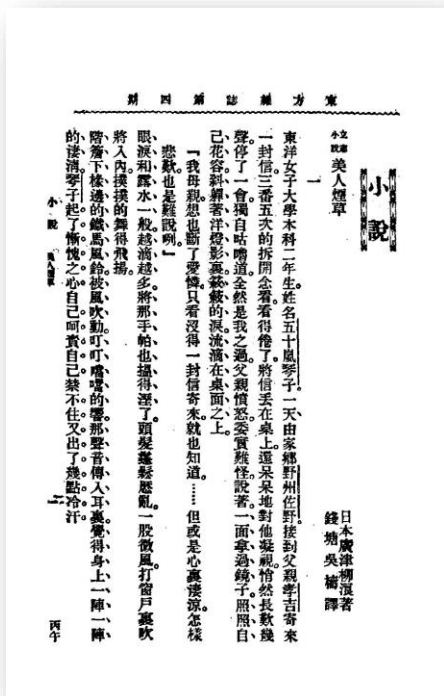
呉禱漢訳『美人煙草』の原作者について誤記がある。雑誌初出と後の「説部叢書」所収本の記述が異なるという珍現象だ。版元の商務印書館編訳所による不注意あるいは手違いである。いくつかのうちのひとつだ。

雑誌の記載は次のとおり。

日本広津柳浪著、錢塘呉禱訳「（立志小説）美人煙草」8節 『東方雑誌』第3年第4-7期 光緒三十二年四月二十五日-六月二十五日（1906.5.18-8.14）

ここには広津柳浪と確かに書いてある。

ところが該作が商務印書館の「説部叢書」に収録された時、異変が発生する。原著者名を別のものに差し替えた。のちの研究者は初出雑誌よりもこの「説部叢



本文



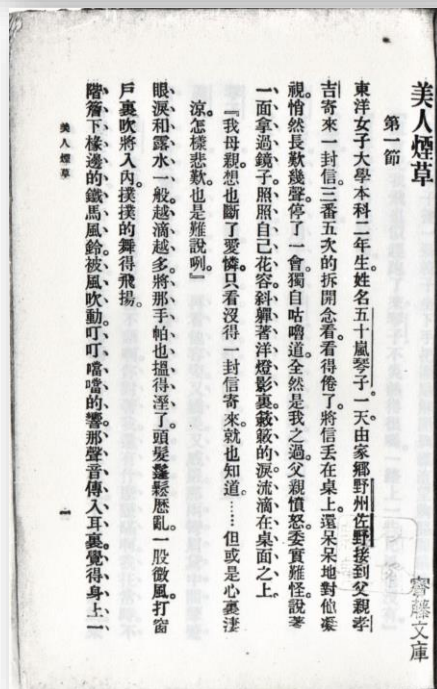
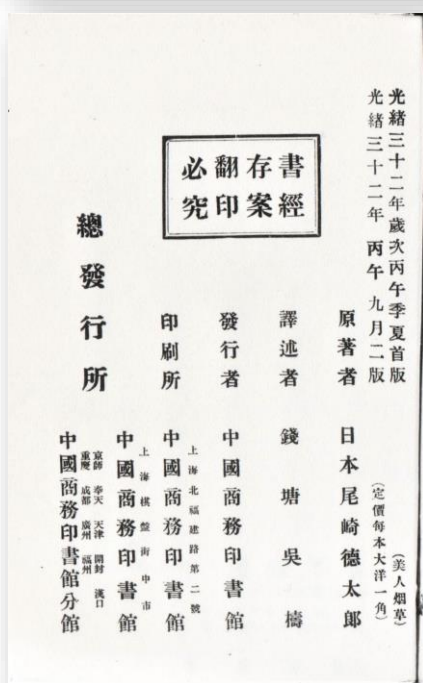
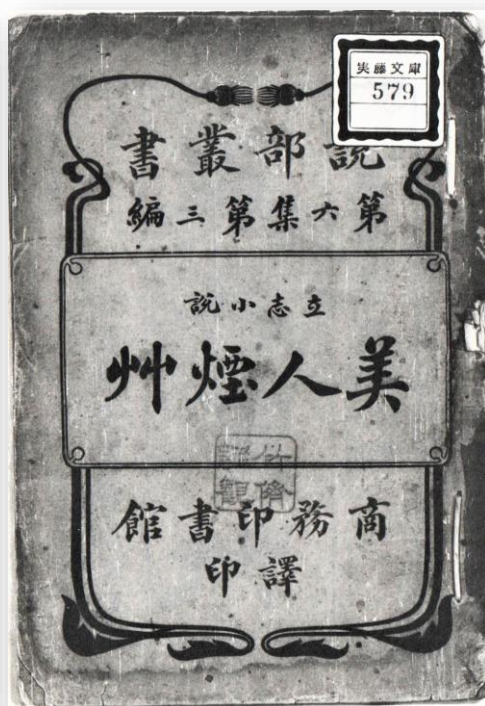
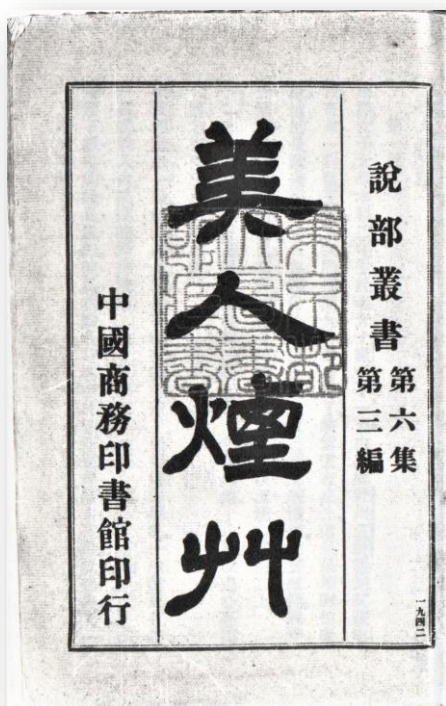
雑誌表紙

書」本の記述を引用することが多い。その理由のひとつは阿英目録にある（後述）。

日本尾崎徳太郎著、錢塘吳構訳『（立志小説）美人煙草』上海・中国商務印書館、光緒三十二年歲次丙午季夏首版／光緒三十二年丙午九月二版、説部叢書第六集第三編

雑誌掲載では本文にあった原作者、漢訳者を奥付に移動させた。それはいい。しかしもとの原作者広津柳浪を変更して尾崎徳太郎（紅葉）にしたのだった。なぜ変更したのか。誤植ではすまない。間違っている。意味が不明である。

上の「説部叢書」は元版だ。全十集で各集は10編。集ごとに第一十編の数字を割り当てる（初集本と区別するために漢数字を使用している）。つまり第一集第一編から第十集第十編までの全100編構成である。だから該作には「第六集第三編」と番号が振られる。二版の表紙はタンポポ文様だし扉は初版のものを使用してい

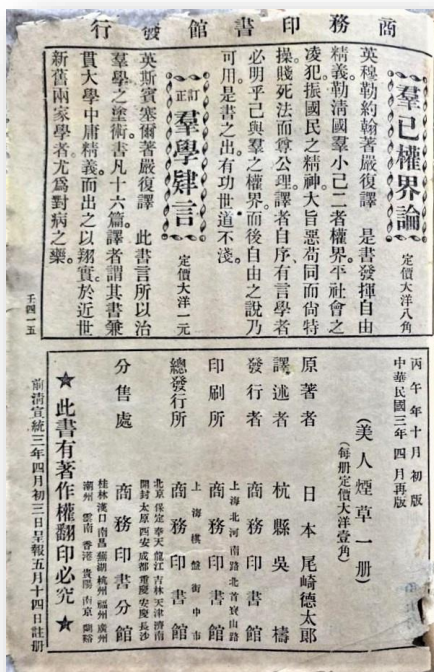


美藤文庫 奧付 扉 表紙

る。写真を見ていただきたい。

元版十集は再編成されて初集と改称する。表紙はリボン文様に変更。同時に全100編を通し番号に振り直した。「初集第53編」だ（元版と区別するためにアラビア数字を使用する）。訳者については元版の「銭唐」が「杭県吳構訳」となる。民国になって名称が変わっただけ。

初集本のもうひとつの問題は奥付の「丙午年十月初版／中華民國三年四月再版」とある個所だ。



初集本 奥付 表紙

この初版刊年が違う。元版には「丙午季夏」とあって旧暦六月だ。初集ではそれを旧暦十月に誤記している。どうしてそうなるのか。こちらも理解不能である。

当時の商務印書館編訳所は刊年についての管理が厳密ではない。発行年月の記載は出版社として明確に把握するものではないのかと訝る。どこか抜けている。原作者を別人にしたのもその例のひとつである。

商務印書館本では別に似たような2例があることを述べておく。こちらも雑誌

初出から後の「説部叢書」に収録する際に発生した。

例1：原作者不記、訳者不記「空谷佳人」（『東方雑誌』第3年第8-13期 光緒三十二年七月二十五日-十二月二十五日（1906.9.13-1907.2.7））だ。これが元版の「説部叢書」第七集第三編（1907）に収められたとき「英国博蘭克巴勒著、商務印書館編訳所訳」と新しく記述した。もともと原作者不記にもかかわらずどこから博蘭克巴勒を取り出してきたのか。不思議でしようがない。

しかも阿英目録は「英 博蘭克巴勒著、林紘訳」（127頁）と記録した。書物には林紘訳はどこにも書いていない。阿英による誤記である。さらに続けて「又東方雑誌本」と記述した。まるで初出の『東方雑誌』にも原作者と林紘の名前があるかのような印象を与えることになった。この間違いは21世紀になっても威力を発揮した。

それについて馬泰来は「林紘翻訳作品全目」（『林紘的翻訳』北京・商務印書館1981.11. 98頁）で「已検原書，翻訳者実皆為商務印書館編訳所（原書を点検したが翻訳者はすべて商務印書館編訳所となっている）」と述べた。阿英が「林紘訳」としたのは誤りだと「遠まわしに」説明したのだ。阿英に対する馬泰来の尊敬度の高さをうかがうことができる。

馬泰来の指摘がある。にもかかわらずほかならぬ阿英が該漢訳を林紘としたから影響力が強い。彼の学術的権威は以前から相当に大きい。その結果この誤りが流通した。いくら阿英目録の間違いだと指摘されても耳をかさない人がいる。実物で確認する気がないのだ。

その例を近くは上海書店出版社編『林紘訳文全集』第11冊（上海書店出版社2018）に見ることができる。馬泰来が訂正してから37年後のことだ。該全集に雑誌を影印したものを収録した。そうしたのは林訳だと思い込んでいるからだろう。だが事実は林訳ではない。そういうことをするから「全集もどき」だと評される。利用者からいえば間違いだと知って使用すればいいだけ。

ついでに述べれば注目すべきは古二徳が漢訳者を甘永龍だと明記したことだ（「《深谷美人》罕见林訳与《空谷佳人》訳者考辨」『清末小説から』第117号 2015.4.1）。

さらに「説部叢書」で提出された原作者の博蘭克巴勒は架空の人物だという説もある。書名の「空谷」を翻訳して BLANK VALLEY とした。さらに漢字を

あてて著者は「博蘭克巴勒」である*1。

例2：(日) 押川春浪著、中華呉禱直中訳『(冒険小説) 侠女郎』(『小説月報』3巻10-11号 1913.1-2.25)である。これも「説部叢書」2集第47編(上海・商務印書館1915.5.26/10.14再版)に収録されると(日) 押川春郎^{アツ}著と誤記された。通音するが漢字が違う。誤記にしても無神経だ。なんだろうか。

さて『美人煙草』について版元の記述が一致しないから後の研究者も戸惑う。それに加担したのはここでも阿英目録だといっている。

美人煙草 日本 尾崎徳太郎著。呉禱訳。光緒三十二年(一九〇六) 商務印書館刊。又東方雜誌本。132頁

上の記述について説明する。「刊」とは単行本として出版されたという意味だ。日本尾崎徳太郎著、呉禱と記述したものが1906年に出た。ここでは「説部叢書」を省略している。阿英は角書と叢書名(小本小説、欧美名家小説、袖珍小説など)は目録に採録していない。それに続けてここでも初出の『東方雜誌』を掲げる。読者は雑誌も尾崎徳太郎となっていると思うだろう。初出雑誌は広津柳浪であったと注釈をつけなければならなかった。阿英の採用した編集方針の問題だ。いまさら注釈が必要だったといっても手遅れだが。

2 呉禱漢訳『美人煙草』の寅半生評

寅半生「小説閑評」(刊年不記、1906?)*2に説明がある。呉禱漢訳を4種類とありあげて説明したそのうちの1種がこの『美人煙草』だ。作品の粗筋と感想を述べている。『美人煙草』刊行直後の文章だといっている。以下のとおり。本文のみ翻訳する。

[立志小説] 美人煙草 日本尾崎徳太郎原著 錢唐呉禱訳述 商務書館印行
是書凡八節。敍私立大学学生吉見義久与女学科学学生五十嵐琴子相契、若無
学費、勢将黜業。琴子自願力任苦工幫助吉見、私^{アツ}在源兵衛村開設煙草鋪、賺

錢以供吉見学費衣服等用。二年後、吉見卒業、因被友人金原掲破、並添設汚蔑等語、遽形反目。及查明原由、互和認罪、而琴子已決意守貞不字云。

前半写琴子為成就学業起見、力任艱苦、深情款款、那得不使吉見五体投地、迨金原証明来歴、陡然決裂、為琴子者、其何以堪？終身不字、人謂其立志可嘉、而実則其勢有不得不如此者。501-502頁

本書は全8節。私立大学学生吉見義久は女学科学生五十嵐琴子と意気投合していたが学費がなくなれば学業をやめざるをえない。琴子は吉見を助けるために自ら願ひ出て苦しい仕事につくことにした。源兵衛村で個人のタバコ屋を開き金を稼ぎ吉見の学費衣服などの費用に提供した。2年後、吉見は卒業したが友人金原に告発され中傷のことばを加えられたためにわかには仲たがひした。のち原因を明らかにして互いに誤りを認めた。しかし琴子は操を守り嫁がないとすでに決意していた。

前半は琴子が学業成就のために大きく努力する。情け深く心がこもっている。どうして吉見が地にひれ伏さないでいられよう。(後半は)金原が素性を明らかにしたので突然に決裂してしまった。琴子としてはどうしてそれに堪えられようか。一生嫁がないことにした。人はその志を賞賛すべきだが、しかし実のところ趨勢はそうするしかなかったのだ。

「女学科学生」は誤植だと思う。原作は「東洋女子大学の本科二年生」だ。漢訳の「女学」は「女子大学」また「科」は「本科」とするのが正しい。

寅半生は前半で小説の流れ全体をまとめた。登場人物は琴子と吉見のふたりを中心に、琴子を取り巻く学生金原たちがいる。正しく理解していることがわかる。そのあとで寅半生の読後感を述べる。主人公が琴子であることを把握しているのがよい。琴子に対する他人の悪意による中傷が吉見との感情的なもつれとなり破局につながったと説明する。

原作者を尾崎徳太郎と間違っている。寅半生が読んだのがそう表示する「説部叢書」本だからだ。初出の『東方雑誌』に言及していないからそちらは見えていないのだろう。

3 柳浪「美人菘」と呉禱漢訳

広津柳浪（本名直人、幼名金次郎、1861-1928）は長崎市で生まれた。旧制外国語学校でドイツ語を学び帝国大学医科大学予備門に入ったが興味もなく病気のため廃学する。小説を発表した後に博文館に入ると尾崎紅葉を知り硯友社同人となった。作品の一部は深刻小説、悲惨小説と呼ばれて知られる*3。

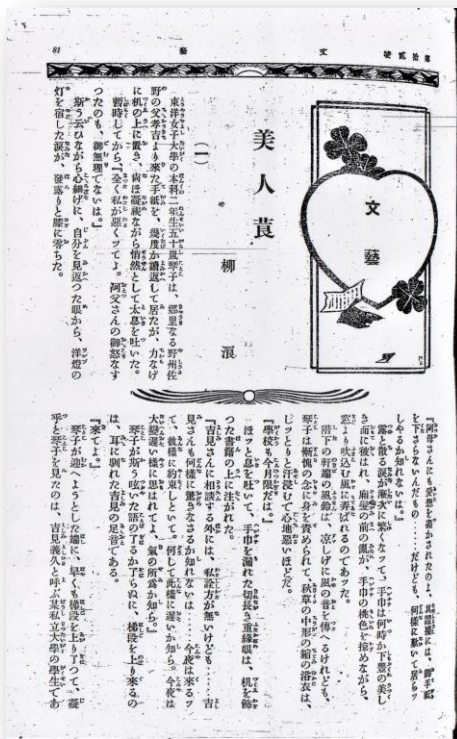
田山花袋は柳浪と硯友社の人々について次のように書いている。関連する2カ所から引用する*4。

かれ（川上眉山）はかれが多年一緒に歩いて来た紅葉、水蔭、漣、柳浪、思案、そういう人たちに多くの不満を抱き、どうかしてその古い駄洒落、場当たり、結構、通俗から脱しようとした傾向は、当然の結果として、かれを硯友社同人の勢力から遠ざけて行くような形になって行った。硯友社同人の中では、柳浪も継子であったが、眉山君もまた後には継子扱いをされるようになった。224・225頁

三十年間、私を見て来た日本の文学者の交遊では、紅葉を中心にした硯友社が一番賑やかで面白そうであった。かれらは一緒に飲み、語り、かつ伴れ立って旅行した。しかしその交遊なり旅行なりが、興味を中心にしたもので、互に啓発したり互に励まし合ったりするものでなかったことは事実である。かれらの旅行は駄洒落と道楽と興味との旅行であった。これが即ちその交遊が面白そうに見えたり思われたりするところで、単に対面的に過ぎなかったのである。眉山君などは、後にはその交遊の愚なることを度々私に滴した。271頁

硯友社同人になった柳浪は花袋から見るとそのような立ち位置だったらしい。つまり硯友社の人々と肌が合わなかったと理解する。

（広津）柳浪「美人菘」（『太陽』第11巻第12-13号 1905.9.1-10.1）は2回に分載された。最初の1と2（章）が前半である。後の3-8（章）で完結だ。



東洋女子大学学生の五十嵐琴子は某私立大学学生吉見義久と相思相愛の仲だった。それが原因で琴子は親から学資を止められることになる。吉見は亡父の旧友に住居を提供され学資を出してもらっていたがこちらも素行不良を理由に放逐となった。双方ともに経済的な理由で切羽詰まるのだ。

作品冒頭の柳浪と吳禱漢訳を比較対照する（ルビ傍線省略。以下同じ）。

【柳浪】東洋女子大学の本科二年生五十嵐琴子は、郷里なる野州佐野の父孝吉より来た手紙を、幾度か読返して居たが、力なげに机の上に置き、尚ほ凝視ながら悄然として太息を吐いた。

暫時してから、『全く私が悪くツてよ。阿父さんの御怒なすつたのも、御無理ではないは。』 81頁

【吳禱】東洋女子大学本科二年生。五十嵐琴子。一天。由家郷野州佐野接到父親孝吉寄来一封信。三番五次的拆開念看。看得倦了。将信丢在桌上。還呆呆地对地凝視。悄然長歎幾声。停了一会。独自咕嚕道。全然是我之過。父親憤怒。委實難怪。1頁

東洋女子大学本科2年生五十嵐琴子はある日、郷里野州佐野から父孝吉が
寄こした手紙を幾度も開いて読んで疲れてしまった。手紙を机の上に置くと
呆然としてそれを眺めながら悄然と幾度か嘆息した。しばらくしてからひと
りつぶやいた。全く私が悪いの。お父さんが腹を立てるのも本当にもっとも
だわ。

呉禱は本作について固有名詞は日本語のままを使用している。こちらの原作は
柳浪の創作であり舞台は日本だからだ。外国作品のばあいは普通にカタカナ表記
が出てくる。それを漢訳する必要があるのとは事情が異なる。

上の漢訳を見ればほとんど直訳とっていいだろう。改行を無視し独白をカッ
コで括らなかつたくらいの違いだ。

琴子は父から学費停止の手紙を受け取った。吉見義久は亡父の友人麻見から住
居と学資を支給されていたが追い出された。義久の「素行が修まらんから」（83
頁）というのがその理由だ。呉禱漢訳はそれを「我自己品行不正（私自身の素行が
悪い）」（6頁）とした。ここではそこまで止めて具体的に記述しているわけ
ではない。

続く部分で説明がある。すなわち「二人の間に情交は、既に二年近く続き来た
つた」（83頁）だ。この「情交」とは親密な交際よりも一般的に肉体関係を指
すと考えてよい。呉禱は「你道他兩人是怎样情形。原来心投意合。私下定情。已
有兩年以来（彼らふたりはどのような状況かといえどもとから意気投合しひそかに結婚の
約束をしてすでに2年になる）」（7頁）とする。柳浪よりも控えめな漢訳にしたこ
とがわかる。

琴子と義久は双方ともに学資などが停止するところまで追い詰められた。その
理由はふたりが保護者に秘密で交際しているからだ。金がなければ兩人ともに生
活していくことができない。

ふたりが相談した結果はこうだ。琴子は大学を退学しひとりで働く。義久は琴
子の援助を受けて学業を続け卒業を目指す。琴子が下宿を出たあとに豊多摩郡高
田村内源兵衛村にタバコ屋が開かれ美人煙草との評判がたった。以上が前半部だ。

ここで注目すべきは琴子が行なった義久に対する説得である。義久は学業をや

めて田舎で終生土いじりをするという。琴子はそれに反対して自分の意見を理路整然と述べる個所を見る。

【柳浪】吉見さん、貴方は御郷里で、一生土掘を為てお終りでも、貴方の御父さまにお済みなさること。貴方は常も私に何云ツて居らしツて、父は終に不遇にして世を去つたから、僕は父と二人前の仕事を為て、父の名も揚げるんだツて、始終私にお話しなすつた事よ。貴方、彼は好加減な事を言つて居らツしつたの。ま、左様ですか、麻見さんが保護して下さらなきやア、貴方はもう何も出来ないツて——御自分の力では、もう何も出来ないツて、御自分から御自分を捨て、御了ひなさること。私は其様方ぢやないと思ツて、よ。私女ですけれどもね、貴方の様に失望しやアしなくツてよ。84-85頁

【呉禱】吉見兄。你回到家郷。種田掘土。過此一生。你也須想想你老大人的人身世。你怎樣常對我說。道我父親一生不得意。抑鬱去世。我一身兼著父親的事。定然要替父親揚名。這話可有麼。你既說了那樣話。却原来是信口胡言。並不想著實去做。如今。麻見先生不能保護贍養於你。你却什麼也不能作為。你自己的力量。原来什麼也不能作為。只索自己拋捨自己。落得箇自暴自棄罷了。我却想不到你是那樣人材。我雖是女子。也不致於那樣失望短氣咧。10頁

吉見さん、あなたは郷里に戻って畑を作り土を掘ってそんな一生を過ごすのかしら。あなたのお父様の境遇を考えなけりやなりませんよ。あなたはいつも私にどうお話しなすっていたか。僕の父は一生満足できず悶々として世を去ったから僕はまったく父親と二人分の仕事をして父親に替わって名を揚げるんだとおしゃっていたわ。そうでしょう。あなたはそうお話しなすつたのはでたらめで本当にやる考えはなかったのね。いま麻見さんが貴方を保護養育してくださらなきゃ、あなたは何もできないなんて。ご自分の力では何もできないって、ご自分からご自分を捨ててしまつて自暴自棄になるなんて、私はあなたがそのような人だとは思ひもしくつてよ。私は女ですけれどもそのような失望短気にはならなくつてよ。

まず柳浪の文章が言文一致であることに注目する。琴子の話し言葉そのままに

記述していることがわかる。

それを漢訳した呉禱もまた白話文を使用して柳浪日文を生き生きと写し取っている。見事というほかない。

1919年五四前後に文学革命派が白話文を提唱したのは中国学界では定説になっていて有名だ。しかしそれよりも約10年以上も前に呉禱が軽々と白話文を使いこなした漢訳を公表している。この事実を見逃すことはできない。すなわち白話を主張した胡適および周氏兄弟を含む当時の文学革命派は呉禱による多くの訳業を無視している。

たとえば阿英『晚清小説史』（1937／1955）は呉禱の翻訳について次のように書いている（傍線省略。[]は1955年版）。

（林訳小説）俄国的作品，雖也有六部，全成於辛亥革命之後。這一缺典[点]，在当时也有人補足了它。如吳禱，他從日文轉訳了萊芒托夫的銀鈕碑（一九〇七），溪崖霍夫（按即柴霍甫[契訶夫]）的黑衣教士（一九〇七），……（後略）

1937年280頁／1955年184頁

就訳家方面説，除林紓而外，有幾個人是很值得注意的，如吳禱，他的訳作有薄命花，寒桃記（日本黒岩涙香），車中毒針（英国勃来雪克），寒牡丹（日本尾崎紅葉），銀鈕碑，黑衣教士，美人煙草（日本尾崎徳太郎），五里霧，俠黒奴（日本尾崎徳太郎），俠女奴（日本押川春浪），選本雖亦有所失，然其在文学方面的修養，却相当的高。1937年281頁／1955年185頁

日本語に翻訳しないのは基本的に書名と原作者を挙げているだけだから。ただ「作品の選択には行き届かないところはあるにしてもその文学方面の修養は相当に高い」と評価していることがわかる。「選本雖亦有所失（作品の選択には行き届かないところはあるにしても）」は『車中毒針』が探偵小説であることに不満を感じていることを意味する。また漢訳の内容に踏み込まないから呉禱の白話訳がすばらしいことはわからない。

阿英は別に「翻訳史話」（1938／1981）*5を書いてロシア文学の翻訳者として呉禱を紹介している。そこから作品などの部分を拾う。

「憂患余生」（1907。231頁）、『銀鈕碑』（1907）「訳文也是用白話所写成」（233頁）、芳草館主人『虚無党真相』（1907。238頁。芳草館主人が呉禱であることを知らない）、「契訶夫之得来東土，也不能不感謝他的舌人呉禱」『黒衣教士』（1907。240頁）など。

呉禱が白話を使用したこと、またチャーホフを中国に紹介したことを阿英は賞賛する。それ以上に詳細は説明しない。「しない」というよりも説明「できない」のだ。なぜならば呉禱が底本としたのは日本語だからだ。阿英は日本語を理解しなかったから一步踏み込むことができなかった。

琴子は義久に説得を続ける。というよりも琴子自身が決意したことを述べるのだ。

【柳浪】吉見さん、貴方御自分の御力をお信じなさらぬこと。何様な艱難にでも打勝つて決心さへあれば、何にでも成つてくものだと私思つてますのよ。今後は貴方も私も保護者を失つたのだし、学資の給与者は無くなつたのだし、自分で働いて学問を為て行く外に道はありませんのよ。ねえ、そうでせう。私もう覚悟を極めたんですは。私は働らけるだけ働らいて、貴方の学資を拵へたいと、私覚悟を極めましたことよ。85-86頁

【呉禱】吉見兄。你自己不能把定自己的心力。我想不論怎樣的艱難。只索決定心腸向前猛進。断没不成功之理。從今以後。我和你都是失了依賴保護的人。都是沒了学費。想来想去。除了自己劳苦做活去求學問。再沒別法哪。可是咧。我已定下主意。拵著我身儘有的力量。做那些劳役苦工的事。賺下錢來。将来做你的学費旅資。我是決定主意了。11頁

吉見さん、あなたはご自分の気力をお持ちではないの。どのような艱難でもただ決心して前に向かって猛進すれば成功しないはずがないと私は思っていますのよ。今後、私もあなたも頼れる保護者を失つたのですから学費もなくなりました。どう考えても自分で苦勞して働いて学問をするほかにありませんの。もうほかに方法はないんですわ。そうでしょう。私はもう考えを決めました。私の身を捨ててありったけの力をつくして苦しい仕事をしてお金を稼ぎそれであなたの学費旅費にしたいと私は考えを決めましたことよ。

呉禱漢訳において琴子は肉体労働をも厭わない。その必死な姿勢を明確に述べている。独身女性であれば実家に避難するという方法が普通はあるだろう。しかし琴子はそうではない別の道を歩こうというのだ。しかも自分で働いて恋人が学業を続けることのできるように資金援助をしたいと申し出ている。こういう志を立てた女性が主人公だから呉禱漢訳の角書は「立志小説」である。琴子はまさに自立した女性として描かれている。同時期に似た筋の小説を呉禱は漢訳している。学費援助のために働く女性が登場する「新魔術」（『新世界小説社報』1906-07連載）であることを指摘しておく。

豊多摩郡田村の源兵衛村にタバコ屋が開かれた。主人は20歳前後の美人だ。界隈の軍隊、学校に知られて店は繁盛した。「美人煙草」と呼ばれる所以である。

学生の大内、瀧山、金原らがタバコ屋美人の琴子に懸想する。琴子と一緒にいるのは召使の老女お友（阿友）だ。彼女が琴子についてありもしない経歴を学生に話すものだから誤解が生じて混乱する。さらに琴子自身がタバコ屋を開いていることを義久に隠している。隠すことが義久にとってよいという琴子の考えだったのだろう。ところが秘密にすることで疑惑に転化してしまう。これが悪評を生じさせ美人煙草は地獄煙草店になった。後に琴子と義久の間にゴタゴタが持ち上がる原因である。やや不自然な設定だとは思う。だがその不自然さに成立している小説なのだ。

義久が卒業すれば琴子は借家をして家庭を持つことを考えていた。ところが義久と同期の金原という学生が琴子を見知っていた。彼女の素性が「美人苺のお琴（美人煙草的阿琴）」異名を「お嬢お琴（阿娘、阿琴）」という娼婦だと告げる。次は金原の言葉だ。

【柳浪】いや、人違ぢやないか。僕は決して彼顔を忘れない、断言しても可い、確かに早稲田の奥に苺の店を出して居る、お嬢お琴と云ふ淫賣、110頁

【呉禱】呀。人必不錯。我再不忘了他的面相。確然在早稻田煙草店裏。名叫阿琴。是箇賣淫婦。54頁

呉構の漢訳は「お嬢」を省略した以外は直訳になっている。

金原の理屈はこうだ。婦人の職業が増えており会社の書記でも日給50銭を得るのは容易ではない。普通は30、40銭の日給にすぎないのに琴子は義久に学資、下宿料、雑費小遣いまで十二分の資金を提供している。正当な職業であるわけがない。しかも琴子は仕事も住所も秘密にしている。よく考えてみるがいい。

卒業証書を持って義久は琴子の待つところに戻ってきた。金原を同道している。金原をみた琴子は顔色を変える。そら見ろ、琴子は僕（金原）を忘れずにいる。義久は金原の言葉を信じて琴子を罵る（下線は筆者）。

【柳浪】『穢れた婦人て、何人の事なの。』と、琴子は口惜さに涙含みながら膝を進めた。

『貴女は其を問ふのか。』と、義久は涙含んだ眼に琴子を見据えて、『何人の事でもない、美人葎のお嬢お琴と云ふ醜業婦、』『えつ、醜業婦ですつて。』と、琴子は義久よりも金原を屹度見た。

『お琴さん、早稲田方面の学生間で、何人も知つて居る事実だからね。』

114-115頁

【呉構】『卑汚的婦人。這是什麼人的東西』

琴子。一時分辯不得。含著一包淒涼眼淚。雙膝跪在塵埃。那邊金原已是挿嘴。

『阿琴、姑娘。早稲田那邊學生們。任是誰也知道。可是真麼。』 64頁

「けがれた婦人て誰の事なの」と琴子はしばらく何のことか分からなかった。悲しい涙を含みながら膝をちりの中にかがめた。そこに金原が口をはさんできた。

「お琴お嬢は早稲田方面の学生たちは誰でも知っている。本当だからね」

下線をほどこした日本語を呉構は漢訳しなかった。義久が琴子に「醜業婦」と直接投げかけることを避けた。婚約者がその単語を口にするのはあまりにやりすぎだと考えたものか。しかしここは義久自身から「醜業婦」という言葉を琴子に投げつけるところに衝撃度が増す個所だ。これがあって結末につながる。

義久に拒否された琴子は怨みのあまりに気を失い医者手に渡された。

結末はあまりにも突然にあっさりと訪れる。

義久が調べてみれば琴子についての醜聞はなかった。商売、住所を秘密にし義久を寄せ付けなかったのには理由がある。琴子を独身者と思わせて客の興味を引くための方法だった。お友（琴子の老召使）の発案である。それは当たってタバコ屋は繁盛していたのだ。さらに開店の資金は琴子の母親から最後の涙金として入手したものだとも知られた。

結末部分を引用する。義久に根拠のない悪評を吹き込んだ張本人の金原が関係している。

【柳浪】金原は容易く瀧山等の悪評を信じて、夫に盡せし琴子を陥いれたのを慚愧する餘に深く琴子等に謝し、其罪を償はんが為に、更めて二人の中に立ちて月下氷人たらん事を乞うた。義久は琴子と旧盟を温めるに勿論異存はなかつたけれども、琴子は決然として謝絶して、一生独棲に終るべく決心したと云ふ事である。116頁

【呉禱】金原呢。轻信那瀧山等人糟腓人的歹話。無意中誣陷琴子。幾乎含了終身不白之冤。及至探聽分明。万分慚愧。再三向琴子賠礼。又因要贖取前罪。意欲介紹兩人之中。做箇現成月下氷人。使他們諧成鸞鳳。義久是不必説。願和琴子重締旧盟。再無二説。不料琴子因受這番羞辱。反倒回復断絶。決定主意不願婚嫁。竟自終身守貞不字云。68頁

金原はといえば、あの瀧山らが人を侮辱する悪口を軽々しく信じ無意識に琴子を陥れほとんど一生晴らすことのできない冤罪を着せてしまった。ここに至り探って明らかになったため慚愧にたえず再三琴子にわびを入れその罪を償うためにふたりのなかを取り持ち媒酌人になって彼らを仲睦まじい夫婦にすることを欲した。義久は言うまでもなく琴子と前の約束を回復することを願うもう二言はないといったけれども、思いもかけず琴子はこのたびの侮辱を受けたことによりそれを拒み、嫁入りしたくないという考えを決め、とうとう一生操を守り嫁がなかったという。

上の引用を見るかぎり呉禱の漢訳はほぼ原文に忠実なものとなっている。間違

いがないというわけではない。煩雑なので注にまとめた*6。しかし多くはないことをいっておく。

呉構がすぐれているひとつは柳浪の「美人菘」という作品を選んだことだ。主人公の琴子は男性に尽くし奉仕する女性である。いかにも旧来の女性のようにだが基本的に違う側面がある。すなわち琴子は職業を持ち経済的に自立する女性であることだ。柳浪は明治時代という状況も織り込んだ。当時の女性がひとりて自活するためには職業の選択が多くなかった。極端なばあいは娼婦に直結する。その背景があるから学生たちが美人タバコ屋琴子のことを噂し悪評を広めたのだ。尽くした男性に裏切られる。信じてもらうことのできない悔しさに卒倒するほかない。しかし許す一線を越えた男性に対してひとりの女性として断固と拒絶する姿勢を示す。明治時代に生きるひとりの新しい女性を活写している。

もうひとつの特色は漢訳が白話文（口語）であることだ。前述したように白話が提唱される以前から実践していたのが呉構だった。そこを無視してはならない。

【注】

1) 参考文献。

樽本照雄「いくたびかの阿英目録6」『清末小説から』第114号 2014.7.1

—— 「清末翻訳小説雑考——いくたびかの阿英目録（選）」『清末翻訳小説論集（増補版）』清末小説研究会2017.1.15

—— 「自爆する日中の研究者たち1——清末小説と林訳をめぐって」『清末小説から』第130号 2018.7.1

2) 寅半生「小説閑評」『遊戯世界』第1-18期 一部初出未見。阿英編『晚清文学叢鈔・小説戯曲研究卷』北京・中華書局1960.3上海第1次印刷。台湾・文豊出版公司1989.4影印本

3) 次を参照した。伊狩章編「年譜」『明治文学全集』19「広津柳浪集」筑摩書房1965.5.10。また『日本近代文学大事典』第3巻144-146頁

4) 田山花袋『東京の三十年』岩波文庫1981.5.18

5) 阿英「翻訳史話」『小説四談』上海古籍出版社1981.12。末尾に1938年とある。

6) 誤解あるいは改変がある。

【柳浪】大内は勧められるまゝ、腰を卸して、／『其敷島を一袋貰はう。』／『はい。』と、老女は葺の敷島を取つて遣る、／『剰余はお前に上げるよ。』／『どうも度々済みませんね。』と、老女は二十銭銀貨を押戴いて、直ぐに奥へ行つたが、98頁

【呉禱】大内答応著。坐了下去。開口問。『可有敷島煙麼。給我一支則箇〔それを1本くれ〕。』／老婦答道。『是。』随取幾支遞給過去。大内接了。將剰下的仍給老婦道。／『這餘下的奉送与你。』／老婦随向裏邊而行。23-24頁

タバコ「敷島」1箱を呉禱はバラ売り1本と漢訳する。中国の風習に合わせたのかどうかはわからない。「二十銭銀貨」を省略した。

金原が義久にあてた「端書（はがき）」（102頁）を「一封郵便」（35頁）と書き換えた。

省略がある。柳浪「思や限なし、逢や果しなし、のぼる恋路に峠なし」（106頁）を呉禱は漢訳しなかった。「峠」は日本国字だから訳しようもない。

呉 禱 漢 訳「新 魔 術」

——大沢天仙『催眠術』

『清末小説から』第143号(2021.10.1)に掲載。神田一三名を使用。本書に収録するにあたり副題「大沢天仙『催眠術』」をつけた。(日)大沢天仙著、金為+呉禱合訳「新魔術」は最初『新世界小説報』に掲載された。のち単行本になる(1907)。「新魔術」とは「催眠術」を意味する。催眠術を利用した推理小説というのがその内容だ。清末ではそれに角書の「科学小説」をつけることがあった。掲載誌が揃わないままに原稿を書いた。入手困難だと考えたからだ。後に不足分を偶然に入手したので書き直した。

呉禱漢訳「新魔術」について述べる。ただし筆者の手元にある作品掲載雑誌は影印本だ。奥付はあつたりなかったり。かろうじて第1、2期の目次に刊年を記述する。それ以外は不明だ。発行年月日については2次資料から引用して補う。本稿で示す略号については樽目録第13版(2021)を参照してほしい。

漢訳「新魔術」

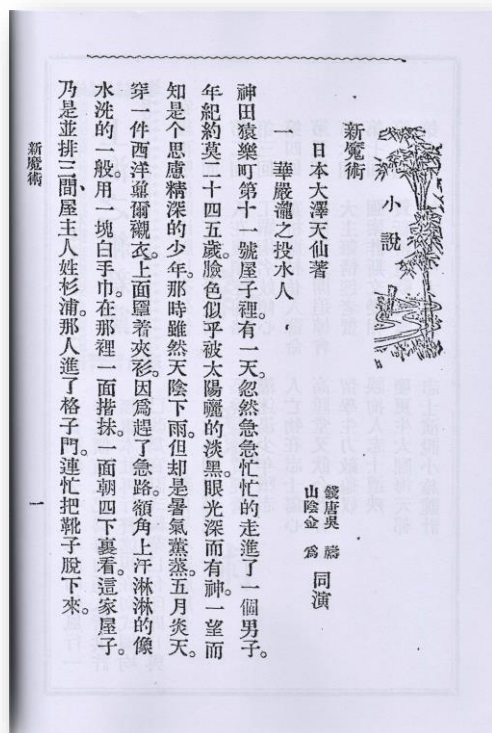
(日)大沢天仙著、金為+呉禱(禱)合演「(科学小説)新魔術」は雑誌『新世界小説社報』に掲載されたあと単行本(1907、未見)になった。後の単行本については言及のある論文、目録から引用して注に示す*1。

雑誌初出は呉禱を「呉禱」と誤植する。著訳者名などは初回のみ掲載だ。雑誌では訂正されることはなかった。また雑誌連載時には角書はつけられていない。合演とある。呉禱は日本語を理解するから漢訳の実行者だろう。金為(鶴笙)

の役割についてはよくわからない。金為は英語原作を漢訳している（『新恋情』1906）。また彼の名前は吳禱の別作品に出ていることはある。ただし人物の詳細は不明。

吳禱漢訳の底本は大沢天仙（興国）『催眠術』（文禄堂書店1903.12.1 国立国会図書館デジタルコレクション所収）である。

雑誌連載の状況を見る。該小説は全30（章）で構成される。日本語本と漢訳の章題を並置した。刊年は【編年③】を、章題は【付日181、183】も参照した。ページの通し番号も記す。



影印本

『催眠術』と『新世界小説社報』連載の「新魔術」

第1期（号）丙午五月廿五日（1906.7.16）、日本大沢天仙著、錢塘吳禱^{ワカ}、山陰金為同演

（1）華嚴の瀧の水泡 一 華嚴瀧之投水人 1頁

- | | | |
|-----------|--------|--------|
| (2) 一枚の名刺 | 二 名刺一枚 | 5頁 |
| (3) 一大疑問 | 三 極大疑団 | 9頁 |
| (4) 飛んだ災難 | 四 飛来災難 | 14頁 |
| (5) 学資の補助 | 五 補助学費 | 19-20頁 |

第2期 (号) 丙午六月廿五日 (1906.8.14) / [編年③1057] 第2期、光緒三十二年七月十九日 (1906.9.7) [大康18-750]同左

- | | | |
|-------------|------------|-----|
| | 五 補助学費 | 21頁 |
| (6) 美人中の美人 | 六 美人中之美人 | 24頁 |
| (7) 一葉の写真 | 七 写真一集 | 29頁 |
| (8) 蒼い顔に凄い笑 | 八 蒼然之気凄然之笑 | 33頁 |
| (9) 墮落でも | 九 墮落 | 37頁 |

第3期 刊年なし / [編年③1093] 第3期、光緒三十二年九月初十日 (1906.10.27) [大康18-753]同左

- | | | |
|--------------|----------|-----|
| | 九 墮落 | 41頁 |
| (10) 腸は最う腐つた | 十 肝腸腐敗 | 41頁 |
| (11) 慾の深い男 | 十一 急色児 | 45頁 |
| (12) 隣室に一人の客 | 十二 隣室之一客 | 51頁 |
| (13) 是れも催眠術で | 十三 是亦催眠術 | 54頁 |

第4期 刊年なし / [編年③1122] 第4期、光緒三十二年十月二十一日 (1906.12.6) [大康18-757]同左

- | | | |
|-------------|----------|-----|
| | 十三 是亦催眠術 | 59頁 |
| (14) 母へ送る書面 | 十四 寄母之書面 | 59頁 |
| (15) 六万円 | 十五 六万圓 | 64頁 |
| (16) 意外の事実 | 十六 意外之証據 | 69頁 |
| (17) 大門の非常線 | 十七 大門之被捕 | 72頁 |

第5期 刊年なし / [編年③1143] 第5期、光緒三十二年十一月二十八日 (1907.1.12) [大康18-759]同左

- | | | |
|-----------------|----------|-----|
| | 十七 大門之被捕 | 75頁 |
| (18) 白髪 of 老人です | 十八 白髪之老人 | 77頁 |

- (19) 無頼の凶賊 十九 刁頼之悪賊 81頁
 (20) 男爵武内綱宜 二十 武藤之分金 85-90頁

第6期 刊年なし／[編年③1176]第6期、光緒三十三年正月十五日
 (1907.2.27) [大康18-760]同左

- 二十 武藤之分金 79頁 (ページ数を誤る)
 (21) 暗中の銃声 二十一 暗中之槍声 80頁
 (22) 検事潮山浪夫 二十二 検事潮山浪夫 84頁
 (23) 殺人強盗犯 二十三 殺人之盗犯 92頁

第7期 刊年なし／[編年③1219]第7期、光緒三十三年三月二十一日
 (1907.5.3) [大康18-763]同左

- 二十三 殺人之盗犯 105頁 (ページ数を訂正)
 (24) 感謝の涙 二十四 感謝之涙 107頁
 (25) 催眠術の効能 第二十五章 催眠術之功效 111頁
 (26) 本統の唾 第二十六章 本来生就之唾子 116頁
 (27) 催眠術の見世物 第二十七章 親見催眠術之人 120頁

第8期 刊年なし／[編年③1242]第8期、光緒三十三年四月二十九日
 (1907.6.9) 畢[大康18-763]同左

- 第二十七章 親見催眠術之人 117[121]頁
 (ページ数を誤る。数字を補足する)
 (28) 共犯者の証人 第二十八章 同犯之証人 120[124]頁
 (29) 驚く可き事実 第二十九章 可驚之事実 125[129]頁
 (30) 牛が淵 第三十章 牛淵 129[133]-135[139]頁

章題の漢訳はほぼ一致する。「(4) 飛んだ災難」の「飛んだ」は「とんでもない」という日本語だ。漢訳するなら「横禍」「可怕的災難」くらいだろう。それを呉構は「四 飛来災難(降りかかって来た災難)」とした。間違いではないが日本語の漢字を頼りにしていることがわかる。

登場人物名は(20)「武内」を「武藤」に、銀行事務員「桐淵」を「相淵」(45頁)に変更したのを除いてそのままである。

雑誌連載といっても当時は作品ごとに通し頁数を振る。だからその数字が第6期と第8期において連続していないのは奇妙だ。第6期の間違いは第7期で訂正したにもかかわらず第8期で再度誤る。そうなった理由はわからない。単なる振り違いか。

天仙の原作名『催眠術』は呉禱漢訳題名の「新魔術」そのものだ。催眠術が魔術だと考えられていた時代の物語である。

天仙原作と呉禱漢訳

原作者の大沢天仙（本名興国、1873-1906）は江見水蔭門下。北海道で仏門に入る（『日本近代文学大事典』第1巻 1977.11.18. 254頁）。

伊藤秀雄『明治の探偵小説』（晶文社1986.10.25）によれば天仙の『催眠術』は涙香『銀行の賊』より影響を受けたという（19頁）。なお同書には明治28年頃に英人ブラックが催眠術公開したともある（250頁）。彼に関連して呉禱はブラック演述『車中の毒針』を漢訳したことを記しておく（『車中毒針』商務印書館1906）。

粗筋は次のとおり。

華厳の滝に不審者の投身があったことから物語は始まる。会社の金を横領したと疑われた社員の杉浦成政が行方不明であるのと偶然一致する。妹のお若（漢訳は阿若）は心配した。2階を借りている潮山波夫（同郷で兄の友人。明治法律学校の生徒にして昼間は文部省の雇書記）は探しに行ったが無断欠勤をしたため勤めを解雇された。お若は潮山の学費を貢ぐため待合「喜久井」の女中になる。彼女に言い寄る客の原田弘文（本名は蒲原源次。催眠術師。変装名人の大盗賊）は催眠術を使いお若を自分のものにする。銀行の金庫破りも原田が催眠術をかけて他人にやらせた。彼こそがすべての犯罪の黒幕なのだった。後に東京地方裁判所検事となった潮山が事件に介入して全貌を明らかにした。お若の兄も原田の手にかかって自殺させられていたのだ。催眠術を解かれたお若は潮山と結婚して大団円となる（後述）。

会話を主体とし軽快な筋運びで読みやすい。犯罪小説に催眠術を組み合わせているところに特色がある。

一言添える。恋人の学費のために若い女性が働くという箇所は広津柳浪著、呉

構訳「美人煙草」（『東方雑誌』1906）に似ている。

冒頭部分を掲げる（ルビ省略、繰り返し記号は文字に直す。以下同じ）。

【天仙】神田猿楽町十一番地の唯在る路地を、忙しげに入つて来た男がある。年齢は漸く二十四五であらう、色は日に焼けて浅黒いが、其が如何にも男らしくて、特に眼の涼しいのが際立つて好く見える、思慮の深さうな青年で、雨あがりの蒸熱い五月の天に、子ルの襯衣の上に二子の衿を着て路を急いで来た額の汗を、皺くちやな白手巾で一撫で拭いて、長屋の三軒目の、杉浦といふ家の格子戸を入つて、投げるやうに靴を脱捨てた。1-2頁

【呉構】神田猿楽町第十一号屋子裡。有一天。忽然急急忙忙的走進了一箇男子。年紀約莫二十四五歲。臉色似乎被太陽曬的淡黑。眼光深而有神。一望而知是個思慮精深的少年。那時雖然天陰下雨。但却是暑氣薰蒸。五月炎天。穿一件西洋鞞爾襯衣。上面罩着夾衫。因為趕了急路。額角上汗淋淋的像水洗的一般。用一塊白手巾。在那裡一面揩抹。一面朝四下裏看。這家屋子。乃是並排三間、屋主人姓杉浦。那人進了格子門。連忙把靴脫下來。1頁

ある日、神田猿楽町第十一号の部屋に慌ただしく入ってきた男がいる。年齢はおおよそ24、25歳であろう。顔色は日に焼けて浅黒いが目つきは落ち着いて非凡であり、一目見て思慮深い青年であることがわかる。その時は空は暗く雨が降って蒸し暑い五月の夏の日、ネルのシャツを着て上に衿を羽織り、道を急いできたために額には汗が滴り落ちてまるで水洗いしたようなのを白いハンカチで拭きながら周りを見た。その部屋は3間並んでおり主人は杉浦という。男は格子戸を入れて急いで靴を脱ぎ捨てた。

呉構漢訳の句読点について説明する。引用文には上に示したように句読点「。」を一字分使用した。実際には「裡」などのように傍点であつて文中に「。」があるわけではない。本稿では便宜的に使用していると理解してほしい。

「子ル」はフランネル (flannel) のこと。襯衣と組み合わせて柔らかく軽い毛織物のシャツを指す。漢語には「法蘭絨」という表記がある。呉構はあえて「鞞爾 (ネル)」と音訳した。「二子の衿」とは双子織による縦じまの織物だ。日本

独特の事物を漢訳するのはむづかしい*2。「夾衫」を使って裏地のついた袷にした。夏の袷は季節が違うからそれだけで暑い。単衣を持たない貧しい青年だとわかる。

中から出てきたのは「色の白いふつくりとした顔の愛くるしい妙齡の娘である」。呉禱はほぼ直訳して「容華絶代。体格溫柔。原来是一位妙色芳齡的少女（容貌は秀でており身体つきはふっくらとした妙齡の娘であった）」である。

続くのは会話だ。ふたりだけだし女性言葉で書き分ける。話し手が誰であるかわかるから天仙はわざわざ書かない。

『妾、兄さんかと思つてよ』

『未だ帰らないか』

『未だ……………!!!』 2頁

清末の小説翻訳界ではまだカッコ類を使用することは普及していなかった。話し手を明示したあとに「曰」「道」「説」などを記して会話であることを示す。それが普通のことだった。ところがこの呉禱漢訳は従来とは違う。

『呀。我只當是哥哥回来呢（あれ、お兄さんと一緒だとばかり思ってよ）』

『怎麼。他還沒有回来嗎（おや、まだ帰らないのか）』

『可不是呢。還沒有…………（そうなんです。まだなの…………）』!!! 2頁

天仙と同じく『』を使用して会話を示す。新しい試みだ。ゆえに呉禱は会話の直前に解説した。「以下一問一答不復標出人名（以下の一問一答は人名を表示しない）」。逆に言えば説明を必要とするくらいに新奇な表記だったということだ。新奇なだけに印刷所の職人が組版段階でカッコを植字し忘れる個所も生じた。あるいは一部では従来どおり「説」を使った箇所もある。新趣向だが全面的には統一できていないという意味である。

天仙の原文がカッコで会話して話し手を明示しない別の例を示す。言葉使い、また前後関係から間違いようがないと思う。そこを呉禱は誤解するから意外に感

じる。

潮山がお若の兄を探して文部省を無断欠勤した。それで免職になった場面の会話だ。念のために話者を注記する。

【天仙】『あんな役所などは、奈何だつて可いんだ』←潮山

『而して是れから先は、奈何して学校へ行らつしやるの』と、氣遣はしげに眉を顰めて訊ねた。←お若 17頁

勤めを減になったのだから学校の授業料はどうするのか、とお若が心配をして口に出した。そこを呉構は以下のようにした。

【呉構】『文部省的事。究竟怎麼樣呢（文部省のこと、どうなさるおつもりなの）』←阿若の台詞を創作する

『那個且莫管他。我且先到学校裡去一趟再講（そんなことなどはいいんだ。まず学校へ行ってみよからの話だよ）』←後半を潮山の台詞と間違ふ

ひとつは先に出てくる日本語の「奈何だつて」だ。これを漢語の「奈何（どうするのか）」と同じだと勘違いする。漢語の「怎麼樣」になった。それにつられて次の「奈何」は無視した。

もうひとつは日本語にある女性言葉のひらがな表記が呉構には判断できなかった。

日本の漢字に引かれ、ひらがなの微妙さに気づかない。そのふたつを見て呉構は日本語教科書によって独学したのではないかと疑ふ。

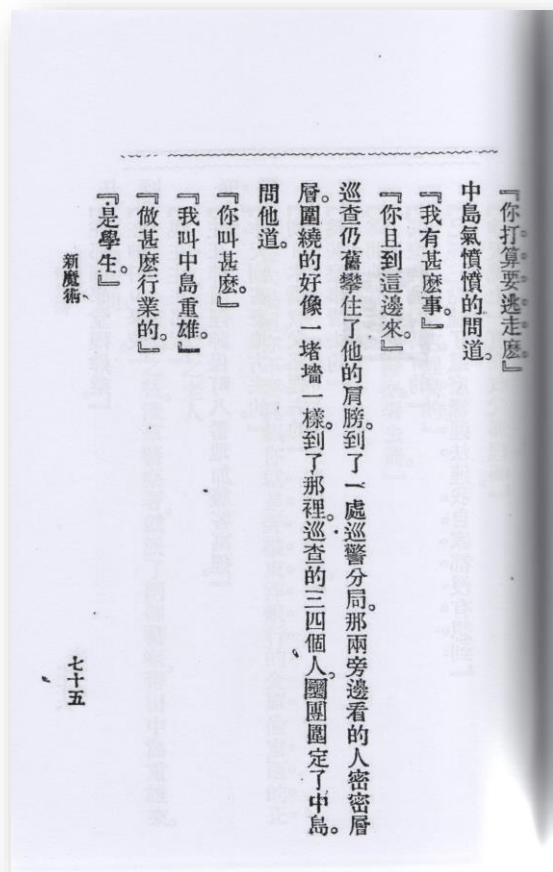
人物を取り違えたから天仙の日本語から離れてしまった。いうまでもないが小さな勘違いだ。大筋に影響を与えない。珍しいからここに取り上げた。それほど多くの間違いがあるわけではないことを記しておく。

それはさておき清末の印刷物でここまで改行する漢訳小説も珍しい。当時の刊行物は基本的にページに空白が生じることを嫌うからだ。前述のとおり句読点の「。」も1字分は取らせない。傍点にするのが普通だ。

日本語原文の改行、会話記号などをそのまま写そうという吳禱（あるいは編集者）の努力は記号の「……」を使う個所にも見える。また印刷所の鴻文書局活版部は西洋由来の感嘆符「！」を使用する例がなかったらしく活字を持たない。「|」と「、」を合字させるといふ工夫も行なっている。また「？」についても造字した（8頁）。

本作における組版上の特徴は改行をほどこし会話をカッコでくくることだ。現在では当たり前だが清末の刊行物に見るのは珍しい。それでも句読点の1字分使用は実現していない。印刷界の強固な習慣までは突き崩せなかった。

改行の実際を見るために後半部分から引用する。催眠術にかけられた学生が意識もなく銀行の金庫破りを手伝わされた。手配されており巡査にとがめられてもめる場面だ。日本語原作78頁に対応する雑誌第5期の漢訳75頁である。天仙、吳禱の順に示す。



【天仙】『コラ、逃げるかッ』

【呉禱】『你打算要走麼』

【天仙】『僕に何用です』／

中島は憤然として問ふた。

【呉禱】中島氣憤憤的問道。／

『我有甚麼事』

【天仙】『此方へ来い』

【呉禱】『你且到這邊来』

改行、カッコともに原作とおりに漢訳している。版面全体が白く見えるのがわかる。直訳だから翻訳しない。

続く説明部分にはわずかな変化がある。

【天仙】肩先を捕へた儘、五十間の派出所へ連れて行つた、続いてワイワイと人の山。

巡查は三四人、中島を圍んで尋問を始めた。

【呉禱】巡查仍舊攀住了他的肩膀。到了一處巡警分局。那兩旁邊看的人密密層層。圍繞的好像一堵牆一樣。到了那裡。巡查的三四個人。團團圍定了中島。問他道。

巡查は彼の肩をつかんだまま派出所へ行つた。その周りは見物人がびっしりと圍んでまるで垣根のようだ。そこにつくと巡查三四人が中島を取り圍んで尋問した。

ここの呉禱漢訳は原作の改行を無視した。「五十間」は約90mだ。「間」は中国の度量衡にはない単位だから呉禱は省略したのだろう。それ以外はほぼ直訳とっていい。

【天仙】『お前の名は何ちふか、あァ』

【呉禱】『你叫甚麼』

【天仙】『中島重雄』

【呉禱】『我叫中島重雄』

改行してセリフをいう形態も呉禱は忠実に写した。改行だけ見てもこの呉禱漢訳はゆったり組んでいるのが目立つ。少しの引用だが呉禱の漢訳姿勢がよくわかると思う。

大団円を引用する（下線は筆者）。

【天仙】芝明舟町に門構の家を借りて、水いらずの夫婦暮は、検事潮山浪夫とお若とである、其家庭の睦じさは、人も羨むほどである。144頁

【呉禱】当時就在芝明舟町的地方。借了一所大宅子。辦了喜事。配成夫妻。從此以後。検事潮山浪夫和他的夫人阿若。兩口子琴瑟的和諧。閨房的樂事。家庭的雍睦一直到如今。人都欽慕稱贊他。可見婚姻自有前定。原田宣告了死刑。也是善惡到頭終有報。人又何苦像原田枉做壞人呢。135頁

芝明舟町に邸宅を借り結婚式をあげて夫婦となった。それ以後、検事潮山浪夫と彼の夫人お若はふたりとも仲睦まじく、閨房の楽しみ家庭の穏やかで睦まじさは今に続いており人も羨むほどである。婚姻は以前から決まったものであったことがわかる。原田は死刑を宣告され。これも善惡は結局のところ報いがあるということだ。原田のようにわざと悪人になる必要もない。

天仙原作を直訳しただけでは不足すると考えた。呉禱は因果応報（下線）部分を付け加えた理由だ。

催眠術

天仙原作は催眠術を基本に置いて構成されている。だからこそ題名が『催眠術』なのだ。

潮山波夫が催眠術についてお若に説明する。その一部を引用したい。天仙「(26) 本統の唾」とそれに対応する呉禱「第二十六章 本来生就之唾子」である。

【天仙】これは今から三百年ばかり前に、独逸の医者メスメルといふ人が、此法を發明したから、最初はメスメルズムといつた、其れより次第に研究されて、技術も非常に進歩し、今ではヒポノチズムといついて、盛に西洋で流行してゐる。121頁

【吳禱】這是三百年前。有一個法国医生。名字叫做麦斯麦魯。發明出来的。起先就用他的名字。叫這個法兒做麦斯麦魯入。隨後次第研究。這個法術非常的進歩。現在又替他起個那兒。叫做黑坡挪基入。西洋各国到處盛行了。116頁

メスメルズムは「麦斯麦魯入」、ヒポノチズムは「黒坡挪基入」だ。日本語カタカナの「ム」は漢訳して「入」で統一したとわかる。

ドイツ人のメスメルを吳禱はなぜだかフランスの医者（法国医生）に変えた。誤解だ。それ以外は直訳になっているから翻訳しない。

催眠術を利用した実験についていろんな例を述べる書物がある。井上圓了『妖怪学講義』合本第4冊（心理学部門 哲学館1896.6.14増補再版）などで紹介があるのは周知のことだろう。天仙も先行する書物から借用している。

【天仙】独逸にアルベルト、モールといふ人があつた、此人が五十三歳の婦人に催眠術を施した事がある、其時、婦人の両手を高く上げさせて、お前さんの手は最う下らないのだと言つて、首肯かして置いてから、手を下へ垂げて御覽といふと、垂げやうと思つて、其婦人は、一生懸命に力を入れたが、奈何しても手は垂がらなかつた。122-123頁

【吳禱】従前德国摩爾地方。有一個人名字叫阿東彼得。他曾經用催眠術試驗過一個五十三歲的女人。叫女人的兩隻手。高高的举起来。他就对這個女人說道。現在你的兩隻手。可是已經不能拖下来了嗎。這個女人对他点点头。果然兩隻手拖不下来。他又对女人說道。你如果想要把手拖下来。儘可以随你的便。那個女人就果然毫不費力的拖下来了。117-118頁

モールという人名を呉禱はなぜだかドイツの地名（摩爾地方）にしてしまった。間違うところではないと思う。理由は不明。

筆者が下線を施した箇所は呉禱による加筆である。訳せば「彼はさらに婦人と言った。あなたが手を下ろしたいと思うのであればそうできます。その婦人は果たして力をまったく入れることなく下ろした」となる。施術者の言うがままになると強調したかったらしい。それら以外は直訳だからこちらも翻訳しない。

この事例は次の書籍に掲載されてもいる。竹内楠三『（学理応用）催眠術自在』（1903）*3の「第2編 第9章 催眠術の実例」第2例に見える。

次は余（モール）が五十三歳の婦人に試験を施したのである。（中略）余は婦人の手を持ち上げた、元の通り高く上がつて居る。そこで余は婦人に、「お前の手は下がらないのだ」と言い聞かせて置いて、自分で手をおろして見よと命じたが、婦人は力を入れて其れをおろさんと努むるけれども、どうしても下げることは出来ないで、手は矢張り元の通り高く上がつて居た。56-57 頁

天仙の作品以前に催眠術の実例を説明する著書が複数で存在したものと思う。

呉禱漢訳「新魔術」（雑誌1906-07／単行本1907）の重要な構成要素は催眠術だ。催眠術といえば同じく呉禱漢訳『薄命花』（1907）*4がある。呉禱が同時期に漢訳したふたつの作品が催眠術を主題としているのもおもしろい。催眠術に興味を持っていたとわかる。

それとは別に、日本語表記のとおりに行を施し、カッコを使用して発話部分を括る新しい試みを呉禱が実行したことは高く評価されてもいい。

【注】

- 1) (日) 大沢天仙著、山陰金為+錢塘呉禱合訳『新魔術』30章 上海・新世界小説社 [編年③1248]標 “科学小説”、光緒三十三年（1907）四月出版[大康18-875]同左。四月 但日期不詳

【編年③1462】再版、光緒三十四年（1908）正月出版

【付日181】表紙奥付写真あり。奥付は訳述者：新世界小説社記者、光緒三十四年正月初旬再版／光緒三十四年正月月中旬発行。説明して版權頁署新世界小説社光緒三十三年（1907）正月初版とする

- 2) 日本の「袴（はかま）」は漢訳して「外衣」に、「火鉢（ひばち）」は漢語の「風扇」（3頁）に変えた。「五所紋の縞の羽織」は紋付の縞（ろ）だから夏用の羽織だ。呉構はこれを「一条用五縞綵絲織成的羽緞兵児帯」（25頁）と5色の糸で織りあげた羽二重の兵児帯にする。地名の「日暮里（にっぽり）」を文章だと考えて「斜日銜山」（46頁）と漢訳した。暮れかかる日が山に隠れようとしているという意味だ。長文の手紙を見て「忠臣蔵よろしくといふ長文句」（62頁）とは義士のひとり大高源五が母親にあてた書状を指す。それを「俗語説得好。真人不露相（俗語でいう、能ある鷹は爪隠すだ）」（59頁）と漢訳した。
- 3) 竹内楠三『（学理応用）催眠術自在』大学館1903.3.5。国立国会図書館デジタルコレクション所収。また [googlebooks](#) 所収。1903.3.5／4.8三版
- 4) （日）柳川春葉著、杭県呉構訳『薄命花』上海・商務印書館1907.6／1917.4六版 袖珍小説。底本は柳川春葉「虚無党の女」『太陽』10巻11号1904.8.1。原作は WILLIAM TUFNELL LE QUEUX, “THE SOUL OF PRINCESS TCHIKHATZOFF（チカツォフ公爵夫人の魂）”（短篇集“STOLEN SOULS” NEW YORK AND LONDON: FREDERICK A. STOKES COMPANY, 1895 所収）

呉禱漢訳『侠女郎』

——押川春浪著「女侠姫」

『清末小説から』第142号（2021.7.1）に掲載。荒井由美名を使用。押川春浪「（冒険小説）女侠姫」を呉禱が漢訳して『侠女郎』だ。初出が『少女世界』であるところからわかるように春浪原作は日本の少女を対象として書かれた。世界へ雄飛する英雄を描いて少年少女を精神的に鼓舞する目的があったとわかる。それを呉禱はどのように漢訳したかを述べる。

1 はじめに

呉禱宣中訳「（冒険小説）侠女郎」は最初『小説月報』（1913）に掲載された。その後、商務印書館の「新訳」本（1915）、「説部叢書」2集本（1915）に収録（後述）。そのほかの版本については樽目録を参照されたい。

その底本は押川春浪「（冒険小説）女侠姫（ちよきやうひめ）」である。初出は『少女世界』2巻3-12号（1907.2.1-9.1）連載、後に単行本『（英雄小説）大復讐』所収（1912）*1。

春浪『大復讐』には4篇の短篇小説が収められている。「（英雄小説）大復讐」「（冒険小説）女侠姫」「（探検小説）幽霊小家」「（巴黎奇談）老愛国者」（原作はALPHONSE DAUDET “LE SIÈGE DE BERLIN” 1873）だ。

呉禱は「幽霊小家」を除いた3作品を『小説月報』第3巻10号（1913.1）から第4巻第3号（1913.7.15）に発表した。漢訳名はそれぞれ「大復讐」「侠女郎」「拊髀記」である。「幽霊小家」も呉禱が漢訳して「学生捉鬼記」（未発表）だ

ろうと渡辺浩司は指摘する。正しいと思う。

2 春浪作と吳禱訳

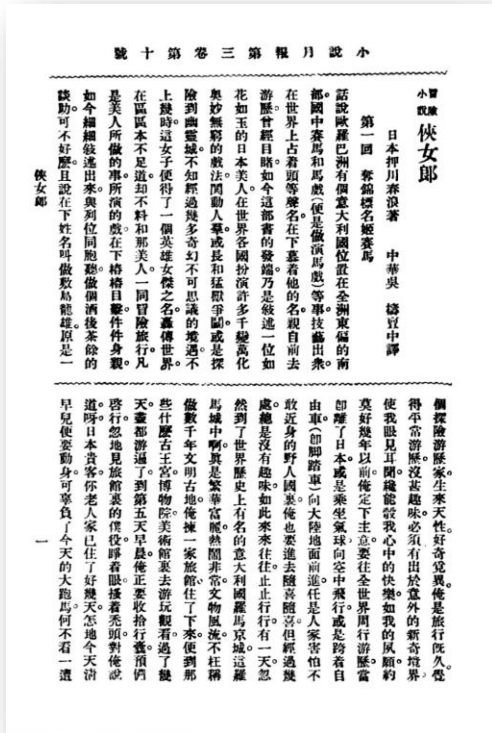
本稿はこの両作品を比較検討する。使用する版本は略号を使用して以下のとおり。

【春浪】押川春浪「(冒険小説)女侠姫」『(英雄小説)大復讐』本郷書院1912.9.21所収。国立国会図書館デジタルコレクション所収。欠損部分は『春浪怪著集』第4巻(大倉書店1918.3.15)を参照した。挿絵は『少女世界』より。

【吳禱】(日)押川春郎[浪]著、杭県吳禱訳『(冒険小説)俠女郎』8回。表紙はリボン文様、上海・商務印書館、中華民國四年(1915)年五月廿六日初版/四年十月十四日再版、説部叢書2集第47編(架蔵)

吳禱漢訳の原作者名が問題だ。最初は正しかったものを後にどういうわけか誤る。





初出『小説月報』

初出『小説月報』では原作者を日本押川春浪と正確に表示している。ところがのちの単行本で押川春郎と誤植する。通音するから「新訳」本に収録する際に誤記した。また「説部叢書」2集でもくり返す。たまにそういうことがある。

押川春浪（本名は方存、1876-1914）、冒険小説作家。雑誌『冒険世界』『武侠世界』で主筆をつとめた。

春浪の作品は中国でも人気がある。陳景韓、包天笑、徐念慈、吳弱男、湯紅絨女士などの漢訳が出ている。

春浪の作品題名は「ぢよきやうひめ」と記すように「女侠／姫」という区切りだ。「女」と「姫」が重なるが侠気のある美女という意味である。それを吳構が漢訳して「侠／女郎」とした。例をあげれば吳構訳『侠黒奴（義侠の黒人奴隸）』と同じ。義侠の美少女だから春浪の命名と異ならない。文中には「侠女」と書いていることも言うておく。

アラビア数字を用いて各回の回目を対照する。春浪の『大復讐』目次だけ（本文にはない）にはカッコ内にさらなる説明をしているからそれも示す（ルビ省略）。

一部の繰り返し記号は文字に置き換える。[] は目次の表記。以下同じ）。

- | | |
|---------------------------------|--|
| 1 伊太利の日本美人
(競馬場に貴女の騎手が) | 第1回 奪錦標名姫賽馬
優勝牌を勝ち取る美女の競馬 |
| 2 浪子姫と[の]一万弗
(「数千の銀貨を空中へ) | 第2回 散銀幣侠女猶龍
銀貨を散布する義侠の美女は龍の如し |
| 3 陰山の美[しき]少年
(短剣を抜き放つて身構へた) | 第3回 殲暴客黄衫義憤
暴徒を倒し少年は義憤にかられる |
| 4 幽霊城探検
(何だか白いものが動いて) | 第4回 探絶陰翠袖単寒
要害を探検して少女は薄衣だ |
| 5 自然に動く巨岩[石]
(岩の下から人間の首がスツと) | 第5回 走燐火岩石飛空
鬼火が起こり岩石が動く |
| 6 片眼怪賊と金剛石
(絶世の美人を捕へて喰ふ) | 第6回 穿隧道金鑽耀彩
トンネルを抜けるとダイヤが輝く |
| 7 魔境に美しい歌の声
(極く淋しい音調で若い女の) | 第7回 子夜鬪歌名姫出険
真夜中に歌くらべをして美女が危機を脱出 |
| 8 大評判と大歓迎
(顛末を数千字の長文電報に) | 第8回 国民興頌侠女蜚声
国民は喜び称えて義侠の美女は名をとどろかせる |

呉構の漢訳は春浪の回目そのままではない。もとの意味をくみながら独自に章回小説風の回目にした。事実第2-7回の最後は「且聴下回分解」と決まり文句だ。「名姫／侠女」「馬／龍」「黄衫／翠袖」「岩石／金鑽」などが対になっている。

春浪原作は雑誌『少女世界』に連載された。そこからわかるとおり少女を主人公にした冒険小説だ。小桜浪子姫の冒険を同行した敷島龍雄（別の個所で高浜という。春浪の書き間違い）が報告する形を取っている。

作品冒頭に小説の粗筋をまとめている。引用する。

【春浪】競馬と曲馬で名高い伊太利国で、私は実に面白い事を見た、之れが

此物語の発端で、花の様な日本の一美人が、外国で千変万化の活劇を演じ
 [、]或は猛獣と闘つたり、或は幽霊城を探険したり、それはそれは不思議な
 境遇を経て、遂に日本女子の勇名を天下に轟かしたと云ふお話[は] [、]私
 [は]図らずも其美人と冒険旅行を共にして、一々目撃した事を、今敬愛する
 日本の少年[女]諸君に向つてお話し申すのです。62頁

【呉構】 話説欧羅巴洲意大利国。位置在全洲東偏的南部。國中賽馬和馬戲
 (便是做演馬戲) 等事。技藝出衆。在世界上占着頭等声名。在下慕了他的名。
 親自前去遊歷。曾經目睹。如今這部書的发端。乃是敘述一位如花如玉的日本
 美人。在世界各国扮演許多千變万化奧妙無窮的戲法。関動人群。或長[是]和
 猛獸争闘。或是探険到幽霊城。不知經過幾多奇幻不可思議的境遇。不上幾時。
 這女子便得了一個女英雄之盛名。轟伝世界。在区区本不足道。去不料和那美
 人。一同冒険旅行。凡是美人所做的事。所演的戲。在下椿椿目撃。件件躬親。
 今且細細敘述出来。与列位同胞聽。做酒後茶餘的談助。可不好麼。1頁

さてイタリアはヨーロッパの東南に位置しており、国中は競馬と曲馬(曲
 馬を演じる)などの技芸は抜きん出ていて世界で筆頭の名声を占めています。
 私はその名に憧れて自分で遊歴して目撃したのが今この物語の発端で、花の
 ような玉のような日本の美人が、世界各国で幾多の千変万化、不思議で際限
 のない手品をやってみせ群衆を騒がせ、或は猛獣と闘つたり、或は幽霊城を
 探険したり、数知れぬ奇異で不可思議な境遇を経て、遂にその女子は女英雄
 の名声を獲得し世界に大いに伝えられたことを述べるのです。些細なことな
 がらはずもその美人と冒険旅行を共にして、およそ美人がなした事、演
 じたことを私は一々目撃し体験しており、今それを同胞諸君に詳細に述べる
 ことにいたします。酒茶のあとの話題ともなればよろしいかと。

呉構は春浪の原文を把握しながら少しの補足説明を加えている。ただし結びの
 個所を書き換えた。

「今敬愛する日本の少年[女]諸君に向つてお話し申すのです」が原文だ。雑誌
 が『少女世界』だから読者は「少女」である(単行本で「少年」に変更した)。想
 定する読者に呼びかけてその文章となった。

ところが呉禱はそれを無視して「列位同胞（同胞諸君）」に置きかえた。これは少年少女を含むといっても苦しい。なにしろ「做酒後茶餘的談助（酒茶のあとの話題ともなれば）」と書き直した。慣用句だといっても一応大人の読者を対象としているのが明らかだ。

児童読み物のままでは不都合だという判断らしい。商務版「説部叢書」は成人、少なくとも文字を読むことのできる人向けの海外文学漢訳シリーズという基本設定だ。そう考えれば書き換えがあっても不思議ではない。ラム『シェイクスピア戯劇物語』を林紓らが漢訳して『吟辺燕語』（1904「説部叢書」所収）になっているのは有名だ。ラム本が児童向けに書かれたことを知る清末の知識人がいた。それを理由に『吟辺燕語』に対する評価は低かったともいう。当時あった偏見に対抗するためにも呉禱なりの工夫をしたと思われる。

「在下（わたし）」を使うところは章回小説風の名残りがあふ。ただ別の個所では「俺」「我」を使うのはほかの漢訳と同じだ。原文の「千変万化の活劇」を漢訳して「扮演／戯法」では「手品」になる。手品のような活動をしたという意味であればかまわない。

また漢訳全体からいえば改行しない。春浪作品で会話を示すカッコを使用せず発言者のあとに「道」を置く。

3 加筆の例

ローマでの競馬大会に出場するイタリア人リミニー姫と日本人小桜浪子姫を説明する（67頁）。ふたりを対比描写して呉禱は原文にない表現を加筆した。ローマの人々が品評しているというのだ。

【呉禱】大家預先評論他們的長短高下。什麼嫣紅姹紫。魏白姚黃。一個是玉葉金枝。牡丹富貴。一個是鸞壽鳳侶。芍藥風流。6頁

みなは彼女たちの優劣をあらかじめ品評しました。色あでやかな白と黄のボタンとか、ひとりは高貴な家の子女でボタンの富貴があり、もうひとりは夫婦になればシャクヤクの風流があるなどです。

「姚黄」は黄色のボタンをいう。知られているのは「魏紫」で薄紅色のボタンを指す。「魏白」はそれのもじりだろう。原文に美女がでてくれば呉構の頭の中には自動的にスラスラと漢語の慣用句が噴出するという状態であることがわかる。春浪の「女侠姫」に対応して呉構の『侠女郎』が出てくる個所を引用する。

【春浪】天性極めて義侠の心に富んで、強を挫き弱を救ふ事も毎々あるので、女侠姫と云ふ栄名をさへ得て居る由、68頁

【呉構】又加生来天性。很重義侠之心。最喜鋤強扶弱。扶危濟困。拯救人家艱難之事。也不止一回。因此上。人都尊敬他。加他一個侠女兒名。惹得遠近皆知。無人不曉。7頁

さらに加えて生来の天性で義侠の心を重んじ、好んで強きを挫き弱きを助け、危険にさらされ困難におちいった人を救うなど他人を難事から救助することも度々あるので、人々は彼女を尊敬して義侠の女子と呼んでいることは皆が知っており理解しない人はいないのです。



呉禱は「侠女児」を使用する。「侠女郎」としてもいい個所だ。「鋤強扶弱」だけだと不安定に感じるらしく同じく4文字の「扶危濟困」を補う。対句風にしたらしい。

春浪の原作は児童向けに理解しやすい文章で書いている。呉禱は対象読者を大人に拡大した。原文の大筋は把握しながら成人でも読むに耐えるように表現に手を加えた。文章を装飾したのが呉禱による工夫だという。その結果が漢訳に見える加筆の傾向になった。

4 日本人礼賛

競馬で優勝した浪子を見て敷島は踊りたくなるほど喜ぶ。

【春浪】私は日本人で、この外国の土地に來り、数万の外国人の取巻いて居る中で、日本の美はしき浪子姫の勝つたのを見たのですもの、私は本当に日の丸の扇をサツと開いて、踊りだしたくなつたです。71頁

【呉禱】看官可知俺は日本人。來到外邦地界。夾在好幾万外国人之中。親眼瞧見日本美人浪子得了勝。俺怎不要揚揚得意。称雄頭煥起來。覺得滿場無数的人。都隱隱替俺日本国旗争色哩。9頁

読者諸君もご存知のとおり私は日本人で、この外国の土地に來て数万の外国人にはさまれて、自分の目で日本の美人浪子が勝つたのを見たのですから私が得意満面で旗頭になって叫びだすなというのが無理な話で、満場の無数の人々が私の日本国旗のためにひそやかに競ってくれていると感じたのですよ。

「日の丸の扇」を漢訳して「日本国旗」に置き換えた。同一物ではないが、かといって外れてはいない。

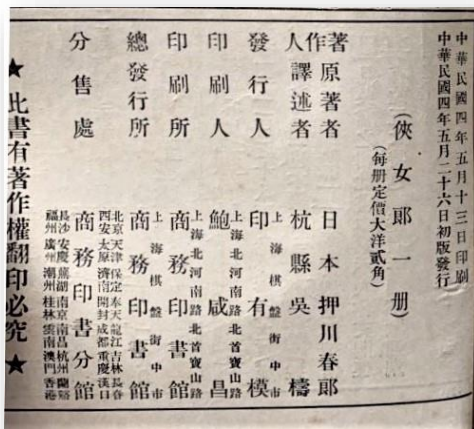
日本女性が本場のイタリア競馬において優勝する。なんと誇らしいことだろう。海外に雄飛して冒険の成果をあげる麗しい女性が主人公だ。春浪の原作はそれを描いて児童に高揚した気分を与えることを目的とする。なにかといえば日本、日本人を出現させているところにその意図がおのずと露出している。

日本人読者はそれを受け入れるだろう。しかし清末の人々もそうであったとは限らない。ある作家は日本という単語に過剰反応した。たとえば包天笑は日本の破天荒生「空中戦争未来記」にもとづき同名の漢訳を発表した（『月月小説』1908）。原作に出てくる日本を露骨に排除しイギリスに置き換えた事実がある。

そういう風潮が当時の清末に一部存在していた。欧米の原作を日本語経由で漢訳するばあいそれほど問題は生じない。しかし上の「女侠姫」は日本を前面に押し出すからそれについて拒否感を抱く人もいるだろう。

また現代の中国学界には研究者が発言しにくい政治的敏感な空気があるのではないか。「俠女郎」という作品名は挙げてても具体的に内容まで言及する人はいないように思う。

しかし当時の吳禱は頓着しなかった。またそれを雑誌に掲載した商務印書館も気にしなかった。



孔夫子旧書網より



5 商務印書館の合弁問題

商務印書館といえば日本の金港堂との合弁問題だ。両社は実質約10年間（1903.11.19

[旧暦光緒二十九年十月初一日]・1914.1.6) にわたって合弁会社となっていた。

呉禱漢訳「俠女郎」が掲載された『小説月報』3巻10-11号(1913.1-2.25)はちょうど金港堂との合弁撤廃にむけて交渉していた時期に当たる。金港堂の所有株を商務印書館が買い取る。1株の価格をいくらに評価設定するかという交渉作業には時間がかかる。

該作品はその後、商務版「新訳」(1915.5.26)、「説部叢書」2集第47編(1915.10.14再版)に収録された。まさに完全中華資本に回復したことを宣伝していた最中だった。そのことと日本の作品を「説部叢書」に収録することは別の事柄だと考えられていたようだ。

商務印書館は金港堂との合弁解消を記念して「説部叢書」初集本(リボン文様)を再版した(1914.4)。合計100編だ(元版第一集に収録していた日本の『佳人奇遇』と『経国美談』はすでに別作品に差し替えられている)。それに含まれる日本語からの漢訳22種はそのまま継承した。変更はない。

金港堂との合弁会社ではなくなったからといって「説部叢書」から日本作品を排除はしていない。2集以降も数は多くはないにしても日本語作品を収録している事実がある。このことは商務印書館と金港堂の合弁が双方に利益をもたらした友好的な事業であったことを証明している。もともと対等な合弁だったから文字通り両者の協力があって実現したものだ。その後も金港堂の原亮三郎と三井物産の山本条太郎(ふたりは姻戚関係にある)は商務印書館首脳陣との友好的交流を保っていた。

合弁破棄の理由は経済的なものではない。あるいは内部で人的関係の対立があったというわけでもない。主として社会的な風潮による。異民族による支配から脱して中華民国が成立した。民国に出現した中華書局は商務印書館に勤務していた人々が抜けて組織した会社だ。商務の内部事情に詳しかったから日本の金港堂と合弁会社であることを攻撃の理由にした。そうするのが有効だとわかっていた。清朝末期に圧倒的に使用されていた商務印書館編集の教科書だ。それを民国になっても児童に使用させるのか。中華書局はそう主張して商務印書館の教科書を批判した。新聞広告を連日のように打って大々的に宣伝非難したのだ。商務印書館の経済基盤である教科書部門を攻撃されたのだから会社にとっては大打撃である。

それが商務印書館をして金港堂との合弁を撤廃する方向に突き動かした。

商務印書館は日本金港堂の資本を回収した。しかしそれとは別に翻訳小説についていえば日本語を経由するものが少なくなっていく傾向の萌芽がすでにあった。

先に「説部叢書」初集に22種の日本語作品があることを指摘した（そのうち呉禱漢訳は6種）。その中で純粋な日本の創作に絞れば7種でしかない*2。ほかの15種は欧米の作品が原作だ。たまたま日本語に翻訳されていた作品だったということだろう。欧米の原作から直接漢訳するようになればわざわざ日本語経由にする必要がなくなる。簡単な理由だ。

ということで呉禱漢訳『侠女郎』の公表は商務印書館と金港堂の合弁解消とは直接の関係はないと断言している。

6 「数千の銀貨を空中へ」

日本とイタリアの美少女ふたりは競馬の優勝賞金1万ドルの紙幣を持って銀行で1ドル銀貨に両替した。ローマ西南の貧民街で善良なる人々に慈善をするためだった。その方法というのは次のとおり。浪子の台詞だ。

【春浪】然し何の様な方法で領けたら宜いか、何うも餘り面倒な事は好みませんから、いろいろリミニー姫と相談した上、一万弗をば盡く一弗の銀貨に替へて持つて来ました、それをあの広場の側の小高い丘に登つて撒きますから、此街の人々は其下に集り、決して互に争ふ様な事をせず、自分の前に落ちたものをば、天より自分に授つたものと思ひ、それを拾取つて楽しく使つて下さい。80頁

【呉禱】但用什麼方法分派纔好呢？若是過於碎煩。又覺不妥。單為這一件。我早已和李小姐商議多次。後來定下万全之計。纔將這一万銀圓。盡數兌下現銀前來。如今咱們就到那空地旁边小山丘之上。將銀圓拋撒下來。你們本街上的人。大夥兒都聚在山丘下面。万不許争執搶奪。只將那跌落在自己面前的。拾取起來。就算是上天賜給你們的。大家快快活活的將去使用罷了。17頁



慈善

しかしどのような方法で分けたらよいのでしょうか。あまりに面倒であればよろしくありませんから、このことについて私はリミニーさんとなんか相談したうえ万全の方法を決めました。あの1万円を尽く銀貨に両替してきました。今から私たちはあの広場のそばの小高い丘に行ってこの銀貨を撒きますから、あなた方この街の人々はみんなで丘の下で、決して争い奪うあうことなく、自分の前に落ちたものだけを拾い、天より授かったものと考えて皆で楽しく使ってください。

今であればこの描写に違和感を抱く人もいるだろう。むき出しの貨幣をばら撒くのはあまりにも品がない。せめて紙幣を直接手渡しするくらいがいいのではないか。

だが明治時代は違ったようだ。慈善の方法といえば一般的にはそれくらいしか考えつかなかった。春浪にしてみてもふたりの美女が銀貨を撒きちらす方が視覚的に動きがあってよいという判断なのだと思う。雑誌の挿絵もそれに合わせて描いている。呉構もそのまま漢訳しているから彼にも異存はなかったようだ。

7 冒険のはじまり

浪子とリミニーを紹介したこの2回までが物語の導入部である。敷島はその後ヨーロッパを巡りアフリカのモロッコ（摩洛哥）にやってきた。道中の汽船でフランス人からモロッコの幽霊城で幽霊を見たと聞いてそれを確かめようと思ったからだ。

そのフランス人は敷島にむかって「日本の紳士高浜君（日本紳士高浜君）」（85頁/21頁）と呼びかける。呉禱も訂正せずそのままだ。名字が違う。ここは敷島でなくてはならない。どういうわけか原作者も漢訳者も気づいていない。奇妙に思う。もう1カ所ある。春浪97頁も「高浜」と誤記する。だが呉禱30頁は「先生」を使用し誤りを回避した。こちらの間違ひは『春浪怪著集』579頁で「敷島」に訂正している。

モロッコの山中で遠くに見えたのは馬に乗った「黒い洋服を着た年若き旅人であった（穿一身黒色衣服。也是一位年少旅行之人）」（89頁/25頁）。そこにふたりの山賊が出現して襲った。敷島は救援のために馬をとばす。若い旅人は武芸を心得ているらしく苦戦奮闘しているところに飛び込んだ。活劇部分を分割して対照する。

【春浪】斯くと見るより私はヒラリと馬を飛下り、疾風の如く其場に駆け着けて、物をも云はず鉄拳握り固め、したゝに一賊の横面を拳飛ばし、足を揚げて他の一賊を蹴飛ばした、90頁

【呉禱】俺離開還有幾丈來遠。撲的跳下了馬。如旋風般跑到那邊。衝入重圍。提起拳頭。向一個強盜側面打將入去。又飛起一脚。踢右首一個強盜。26頁

私はまだ数丈ほど遠かったがヒラリと馬を飛び降り、疾風のごとくそこに走りより囲いを突破すると拳を振り上げて強盜の横面を殴りつけ、片足をあげて右のもうひとりを蹴り上げた。

呉禱は「衝入重圍（囲いを突破する）」と加筆した。それ以外はほぼ直訳してい

る。

【春浪】この不意の助太刀には山賊共も驚いたのだらう、忽ち振返つて私を見付けると、今度は美少年の方を捨て、猿の如く喚き叫んで左右から私に打掛かつて来るのを、私は柔道撃剣には達して居るので、『此様な奴、何人でも来い。』と平気であしらひ、隙を見て一賊の襟首を引掴み、眼より高く差上げて、力任せに彼方へ投飛ばせば其奴は空中に筋斗うつて、底も知れぬ谷底の水の中へ落込んだ。90-91頁

【呉構】兩個強盜。出其不意。見少年來了救援。不覺吃了一驚。一轉頭瞥見了俺。登時撇了少年。一声呼嘯。如猴子叫喊一般。兩邊圍困將來。直奔向我。俺素來懂得柔道擊劍之術。也不慌張。指著兩人說道。這厮們任是誰人。也能打得。兩盜見我心平氣和著說話。正在留神細聽。這個檔兒。他們不由得稍為疏懈。俺乘著一個空隙。出其不備。一把抓住一個強盜的領襟。忒的提將起來。高過俺眼角之上。使出氣力一擲。將那厮一個筋斗。拋入空中。噹碌碌滾跌到山谷底下万丈深淵的河水裏去了。26頁

強盜2人は少年に不意の救援が来たことに驚き、振り返って私を見るとだちに少年を捨て、大声で叫ぶと猿のような叫び声をあげて左右から私を囲んで向かってきた。私はもともと柔道撃剣の術に通じているので慌てず兩人を指さして言った。こいつらが誰であろうとやっつけることができるぞ、と。強盜2人は私が平静に話すのを注意深く聞くその瞬間、ふと彼らに隙が生じたから私はそれに乗り意表に出て強盜の襟首をつかみヤッと持ち上げ眼よりも上の高さから力任せに投げつけ、そいつにもんどりうたせて空中に放り出すとワーッと谷底の底も知れない川の中に落ちていった。

呉構は日本文にない「忒的（ヤッ）」「噹碌碌（ワーッ）」という漢語を補足してより動的な表現を作っている。

【春浪】之を見て他の一賊は、こりや敵はぬと一目散に逃出すを、逃がすものかと背後から突飛ばせば、其奴も谷底へドボンと落込んだ、此谷底は非常

に深いから、彼奴等は再び出て来る事が出来ぬだらう。91頁

【呉構】還有一個。見俺這般擺佈。明知敵我不過。心裏一慌。意欲逃遁。俺翻過身來叱一聲你望那裏走。飛起右脚一踢。只聽得撲通一聲。也一式無二的落在山谷底下。享受黃泉幸福而去。這山谷底下。非常深沈。那廝們再也不得出現了。26-27頁

もうひとり私のこのやり放題を見てかなわないとわかると大慌てで逃げ出そうとするのを私は身をひるがえして怒鳴りつけ、どこに逃げるか、と右足をあげて蹴りつければこれもドボンと音がして同じく谷底に落ちこんであの世の幸福を享受しに行ったのだ。この山の谷底は非常に底深いからあいつらは再び出てくることはできないだろう。

単に谷底に沈んだというだけではない。呉構はそこに「享受黃泉幸福而去（あの世の幸福を享受しに行った）」を補足して春浪よりもおもしろい。

動きの多い活劇部分を翻訳して十分だといえる。呉構の見事な漢訳を上への引用に見ることができる。

少年とばかり見えたのは男装した小桜浪子だった。



8 幽霊城探険

浪子がひとりでモロッコに来たのは行方不明になっているリミニーを探すためだ。敷島は浪子と一緒に探索する。秘密のトンネルを抜けて幽霊城内に入り込み隻眼の怪獣（片眼怪賊120頁／独眼賊47頁）と闘う（途中で虎に襲われる場面がある。

呉構は春浪原文にない1頁におよぶ長い加筆を行なっている。50頁)。監禁されていたリミニーを探し当てて救出した。だが後ろに隻眼の怪獣たちが追いかけてくる。前に虎が待ちうけている。そういう恐怖の窮状を切り抜けての大団円である。

リミニーが誘拐された理由というのが奇妙なものだ。敷島の説明は次のとおり。

【春浪】彼等は或る迷信を抱いて、両眼の完全な者でも盡く其一眼を潰し、又た屢ば絶世の美人を捕へ、五十日間果実のみを喰はせて幽囚した後、その美人を殺して肉を喰ふ時には、百歳の寿命を保つと信じて居るので、120頁

【呉構】他們向來有一種迷信。凡是生來兩眼完全的。個個將一隻眼。硬行毀損。使他潰爛。單留一眼。又捕捉有姿色的美人。捉去之後。先囚禁五十天。這五十天之內。只許吃食菓子。別的食物。一些也不得上嘴。到了五十天期滿。然後將美人殺了。將肉來吃。吃了美人肉。說是能活上一百歲的長壽。47頁

「五十天」をくり返して少しくどいがほぼ日本語原文のままだから訳さない。春浪のいう冒険小説とは怪奇的要素を含んだものと理解できる。

怪獣の犠牲になりかけたのがリミニーだった。なぜリミニーだったのかという説明はない。春浪の作品を成立させるためには必要な設定だ。たとえばローマの競馬大会で目をつけられたなどの記述を補足して関連づけてもいい個所だろう。無視しているのは不可解である。それとももとが児童向けの小説だから理屈は必要とされていないというわけか。

物語の大筋は複雑ではない。行方不明になったイタリアの美人を日本の美女と男性が救助しに行く。それだけのことだ。盗賊、虎、怪物との戦いが活劇的要素を加えて読者を楽しませる。原作者の意図が最初からそうになっている。だから肉体的動きはあるものの物語全体の展開が一本調子で曲折の面白みが減少している理由だ。

春浪原作の不足は置いておく。呉構の漢訳は加筆気味の傾向はある。成人向けの小説にするために加筆するなど彼なりの工夫をしているのは評価すべきだろう。漢訳もほぼ原文どおりの優れたものだ。

人名対照表

春 浪	呉 構	備 考
敷島龍雄	敷島瀧雄	探険旅行家。別の個所で高浜という
高浜	高浜	日本の紳士。85頁＝呉構21頁★春浪の勘違いだろう 97頁の「高浜」→呉構30頁では省略
小桜浪子姫	小桜浪子小姐	178歳、小桜伯爵の令嬢
リミニー姫	李美宜小姐	178歳、金髪、リミニー侯爵の姫君
ペサロー伯	貝若羅伯爵	貴族で馬主

【注】

1) 参考文献は次のとおり。

岡崎由美「武侠の黎明——押川春浪と近代中国武侠小説」蘆田孝昭教授退休紀念論文集
編集委員会『蘆田孝昭教授退休紀念論文集 二三十年代中国と東西文芸』東方書店
1998.12.12

渡辺浩司「《拊髀記》の原作」『清末小説から』第105号 2012.4.1

目黒 強「明治後期における『少女世界』にみる良妻賢母規範をめぐるポリティクス——
—<お伽小説>と<冒険小説>を事例として」『神戸大学大学人間発達環境研究科研究
紀要』11 (1)、2017.9.30 電字版

2) 書名のみを掲げる。『(偵探小説) 橘英夫』(町田柳塘『橘英夫』)、『(科学小説)
秘密電光艇』(押川春浪『海底軍艦』)、『(冒険小説) 世界一周』(三宅驥一『世界
一周の率先マゼラン』)、『(義侠小説) 血蓑衣』(村井弦斎『両美人』)、『(写情
小説) 鬼士官』(小栗風葉『鬼士官』)、呉構漢訳『(立志小説) 美人煙草』(広津柳
浪『美人萇』)、『(政治小説) 珊瑚美人』(三宅彦弥『珊瑚美人』)

呉禱漢訳「大復讐」

——押川春浪「復讐」

『清末小説から』第147号(2022.10.1)に掲載。沢本香子名を使用。押川春浪『大復讐』には4篇が収録されている。そのうちの3篇を呉禱が漢訳して公表した。短篇小説「大復讐」と同名の呉禱漢訳を検討する。漢訳『侠女郎』と「拊髀記」については別稿あり。

はじめに

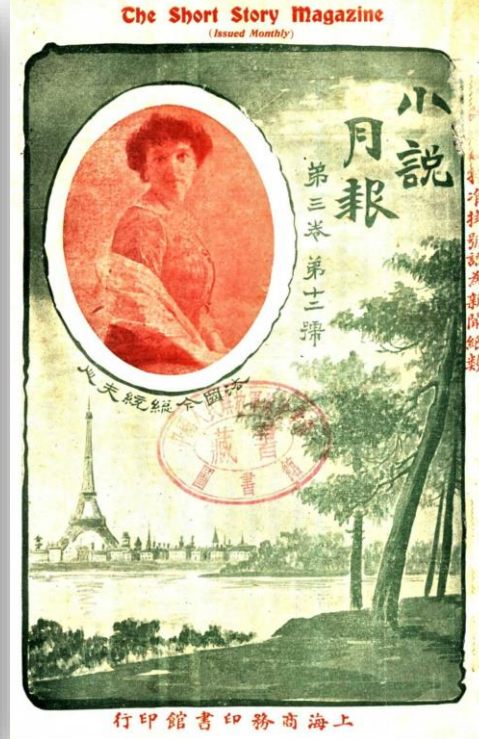
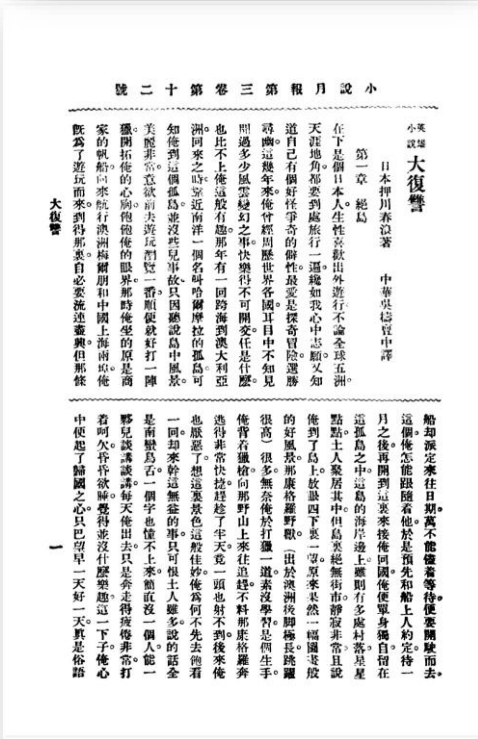
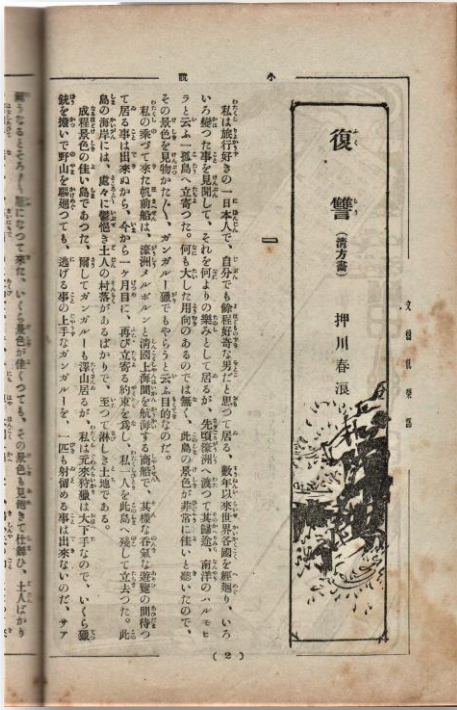
本稿では日本押川春浪著、中華呉禱宣中訳「(英雄小説)大復讐」『小説月報』3巻12号(1913.3.25)を検討する。

呉禱が使用した底本については岡崎由美と渡辺浩司がすでに指摘している(参考文献)。

押川春浪「(英雄小説)大復讐」(『(英雄小説)大復讐』本郷書院1912.9.21所収。国立国会図書館デジタルコレクション)だ。初出は「復讐」(『文藝俱樂部』第13巻第10号 博文館,1907.7.1。架蔵)である。

雑誌初出の「復讐」を単行本に収録したとき「大復讐」に改題した。呉禱漢訳も「大復讐」とする。底本に使用したのは単行本『大復讐』であることは指摘のとおりだ。該書所収の4篇から呉禱はほかに「老愛国者」を「拊髀記」(1913)に、「女侠姫」を「侠女郎」(1913)に漢訳して合計3篇がある。

ほかの呉禱漢訳で日本人が関係する作品を見れば黒岩涙香が実質2種、尾崎紅葉が2種だ。あとは1種類のみ。次のとおり。柳川春葉、石井ブラック、高須梅溪、田山花袋、原抱一庵、広津柳浪、薄田斬雲、中内蝶二、登張竹風、上村左川、



大沢天仙、嵯峨の家主人（矢崎鎮四郎）、長谷川二葉亭、坂口横次郎。訳者不明が2種ある。

以上のような漢訳状況だ。春浪作品（ドーデ原作を含む）を底本にして3種類もあるのは多い方だろう。単行本『大復讐』所収の4篇ともに漢訳している（内1篇は未発表。渡辺浩司論文参照）。呉構の好みに合っただろう。

内容からいえば角書のとおり「女侠姫」は冒険譚だ。本稿の「大復讐」は英雄譚とする。いずれも少年少女向けに書かれた。「老愛国者」はドーデ「ベルリン包囲」である。その角書は「巴黎奇談」だが老人の妄想的冒険譚といえなくもない。少年少女と老人が同じだと考えれば確かに冒険という点で一致する。

目次の比較対照

雑誌初出に章題はない。単行本化の際に追加した。

春浪著（[]は目次との異同個所）と漢訳の章題を対照する（ルビ省略。以下同じ）。目次の記述が複数箇所違うばあいは次行に書く。

春 浪	呉 構
1 南洋一孤島——双眼鏡を出して眺めた	第1章 絶島
2 漁村の少年——露子と二人で町へ出た	第2回 漁村
3 無念の血涙——荒波叫ぶ海中へ真逆様[に]	第3回 舎生
4 甲板の偉丈夫——汝の生命を余に呉れぬか	第4回 遇救
(目次) 甲板の怪傑——汝の生命を余に与へよ	
5 復讐復讐！——奈翁にも負けぬ英雄となつて	第5回 勸業
(目次) 復讐！復讐——奈翁を凌ぐ英雄となれ	
6 二十万金——今日汝の生命を返す	第6回 成功
(目次) 二十余万金——今日汝の生命をも返す	
7 第一南洋丸——力雄君と私は叫んだ	第7回 遠郷
8 異様の光景——遥かに見える一艘の難破船	第8回 拯難
(目次) " ——遥かに一隻の難破船が	
9 嗚呼わが敵——構はぬ案内して貰はう	第9回 憐讐

(目次) 我敵！我敵—— //

10 故郷の山河——力雄君の顔を見上げてニツコリ 第14[0]回 普濟

(目次) // ——顔を見上げてニツコリ

春浪は同一書籍内の目次と本文表記を一致させる努力を行っていないように見える。細かいことは気にしない質らしい。呉構はそれらを2文字でまとめた。

春浪作のおおよそ

春浪は「ハシガキ」において「大復讐」を指して「男性的の真の復讐を書いた積りで」と述べている。では「真の復讐」とはどういうものか。

世界各国を旅行している「私」がその見聞を紹介するという設定だ。春浪の『大復讐』所収4篇のうち「幽霊小家」を除くほかの3作はそういう形式にしてある。

「私」の古い知り合い中藤力雄が今では第一南洋丸の船長になっている。久しぶりに再会した彼が自らの波瀾万丈な経歴を語る。

力雄は南海の一漁村の旧家に生まれた。両親に死別すると財産のすべてを村第2の旧家曲田剛蔵に横領されてしまった。困窮する力雄を助けたのが老人島崎達馬だ。露子という孫娘がいる。露子と一緒に例年の祭礼に行った。その際に曲田親子から暴力を受け傷つけられた力雄はくやしきのあまり海に身を投げる。偶然にそれを救助したのが雲井輝武（航海者、呑海王）だ。呑海王は乗船している第一濠洲丸において20年間の鍛錬努力を12歳の力雄に約束させた。力雄は曲田親子に復讐する目的を持って奮励し15年が経過する。彼は刻苦勉励のすえひとりの偉丈夫に成長した。恩人島崎に送金することも忘れない。それでも呑海王に預けた蓄えも20万円（金）という膨大なものになる。呑海王は資本を提供して力雄に独立事業を起こさせる。そのように自分の過去を語った力雄がこれから実行するのが20年来の復讐だ。その内容とは故郷の漁村に帰り曲田が奪った家に百倍する雄大な家を建てて見返すことだった。曲田親子に精神的打撃を与えることを主目的とする。今まさに実行しようとしている。それに立ち会うのが「私」である。

故郷の漁村に近づいたところで難破船を発見した。救助する前に年来の仇敵曲

田親子であることがわかった。助けたあとに出身を隠し知らぬ顔をして聞けば故郷の漁村は大火事、大津波により零落したという。村にもどった力雄はどのような復讐をするのか。「私」はかたずをのんで一緒に行った。故郷の惨状を目の当たりにした力雄は自分の20万円（金）を漁村復興のために寄付した。それが力雄の復讐だった。そこに恩人島崎老人が隣村からやってくる。一緒にいるのは嫣然と一笑する露子だ。

力雄の個人に向けての復讐は故郷を再興する援助に昇華してなしとげられた。これが春浪の考える「真の復讐」である。

世界を視野にいれて貿易事業にまい進する力雄にとって個人的復讐はすでに意味を失っていた。春浪は少年少女に向かってそういいたいのだ。

春浪作と呉禱漢訳

春浪作と呉禱漢訳の冒頭を示す（くり返し記号は文字に直した箇所がある。以下同じ）。呉禱の漢訳状況を知るためだ。

【春浪】私は旅行好きの一日本人で、自分でも余程好奇な男だと思つて居る、数年以来世界各国を経廻り、いろいろ変つた事を見聞して、それを何よりの楽みとして居るが、先頃濠洲へ渡つて其帰途、南洋のハルモヒラと云ふ一孤島へ立寄つた。何も大した用向のあるのでは無く、此島の景色が非常に佳いと聴いたので、その景色を見物かたがた、カンガルー獵でもやらうと云ふ目的なのだ。2頁

【呉禱】在下是個日本人。生性喜歡出外遊行不論全球五洲。天涯地角。都要到處旅行一遍。纔如我心中志願。又知道自己有個好怪爭奇的僻性。最愛是探奇冒險。選勝尋幽。這幾年來。俺曾經周歷世界各国。耳目中不知見聞過多少風雲變幻之事。快樂得不可開交。任是什麼。也比不上俺這般有趣。那年一回跨海到澳大利亞洲。回來之時。靠近南洋一個名叫哈爾摩拉的孤島。可知俺到這個孤島。並沒些兇事故。只因聽說島中風景。美麗非當。意欲前夫遊玩瀏覽一番。順便就好打一陣獵。開拓俺的心胸。飽飽俺的眼界。1頁

私は日本人で、生来旅行を好み世界各国はもちろん天の果て地のはてまで

も一度は旅行するのが私の念願である。自分でも怪奇なことを好む性癖があることを知っているし、なんといっても探険冒険が好きだから僻地を選んで訪れている。ここ数年来私は世界各国を周遊して聞いたこともない、なんだか風雲変幻の事柄を見聞すれば楽しくてしょうがない。なんであれ私のこの興味とは比べることができないのだ。先頃オーストラリアへ渡ってからの帰途、南洋のハルモヒラという一孤島に立ち寄った。私はこの孤島に来て用事があるわけでもないことはわかっていたが島の風景が非常によいと聞いたのでちょっと見物のついでに狩りをして度量を広げ視野を満足させようと考えた。

日本語を漢訳すれば普通は原文よりも短くなるものだ。直訳したばあいである。ところが上の呉構漢訳では日文よりも文章量が増えている。原文を踏まえながら説明を増やしていることによる。日本語底本を基本的に堅持している。だから翻案ともいいにくい。

例を示せば単に「旅行好き」という日本語を漢訳して「生来旅行を好み世界各国はもちろん天の果て地のはてまでも一度は旅行するのが私の念願である（生性喜歓出外遊行不論全球五洲。天涯地角。都要到處旅行一遍。纔如我心中志願）」と詳細に説明する。そこまで増量しながらこの「カンガルー」は省略した。漢語「袋鼠」2文字ですむところだ。その不均衡さについていささか意外に感じる。もっともその後で音訳して「康格羅野獸（出於澳洲後脚極長。跳躍很高（オーストラリアにて後脚が非常に長く、高く跳躍する）」と「野獸」を添えた。カッコに説明をしたのは当時「袋鼠」は一般的ではなかったのだろうか。

狩りはうまくいかず暇つぶしもできず「私は二十世紀の俊寛島流しもどきで」（3頁）と嘆く。平家に対する陰謀を計画したと島流しになった僧俊寛は日本ではよく知られる。しかし呉構は俊寛の名前を省略してここでも少し長い。

【春浪】イヤ飛んでもない場所へ来たものかなと私は二十世紀の俊寛島流しもどきで、頻りに閉口頓首して居ると、2-3頁

【呉構】不想俺竟来到這個有翅難飛的處在好似犯了大罪。断了二十世紀新定

的流刑。発配到這荒島裏来一般。恁地想着。覺得一肚子的雄心。都拋往九霄雲外。只是唾着嘴。低着头。好不叫人掃興味。2頁

翼があっても飛び越せないこんな場所に意外にも私はやってきたのか、まるで大罪を犯して20世紀の新しい流刑に処せられこの荒れ果てた島に流されたようだ。そう思えば心中一杯の勇壮な心持ちはすべて天空のかなたに飛んでいったように感じて、ただ口を開け頭を垂れてとても興ざめた思いをさせられるのだった。

直訳ではない。「俊寛島流し」は意図的に書き換えた。中華民国の読者は知らない。割注を使用する、あるいは訳者自身が文中に乗り出してきて説明する方法もあった。しかし吳禱はここでそうはしなかった。

書き換えたが原文から遠く離れているわけでもない。吳禱は内容を把握し大筋はそれに基づく。ただし部分によっては上のように文章表現について自筆による加筆と書き換えを行なっている。

加筆といえ各回の終わりは章回小説風にした。第1回「看官們留神聽著便了。看說出什麼話來（皆さまお気をつけてお聞きください、いかがなりますやら）」だし第2・9回は「且聽下回分解（さて次回につづく）」である。春浪作品にそれがあるはずもない。

曲田父子とその仲間から袋叩きにあい傷を負った力雄が口惜しく思い入水をする個所を比較対照する。吳禱は登場人物の名前を春浪のままに使用している。

【春浪】今日剛蔵親子等に、云ふに云はれぬ恥辱を受けた事が身を切られる程口惜しく、力雄少年は最う無念と悲しさとの為に胸は一杯になり、あゝ寧そ一思ひに死んで仕舞つたならば、恩人にも苦勞を掛けず、此口惜しさも悲しさも消えるであらうと、少年は思ひ迫つてふらふらと、岬の絶端に踰踉めき寄り、荒波叫ぶ海中へ真逆様に飛込んだ。18-19頁

【吳禱】心裏上上下下。又是愧悔。又是氣憤。又是憂愁。想到無路可通的地歩。便嘆口氣道。天哪。我不如死了。倒還乾淨。那恩人的德惠。也顧不得答報了。我身上的悲傷怨念。也從此消滅了。恁地一想。便搶上幾步。跑到岬角

盡頭。撲的望那蒼茫淼渺的海中。飛跳入去。便成了力雄一生的結果。不知力雄死後如何。且聽下回分解。10頁

恥じと悔やみ、憤慨と憂愁で胸は一杯になり、行くことのできる道がないことを感じて嘆息して言った。ああ神様、いっそ死んでしまったほうがかえってさっぱりする。あの恩人からの恩恵に報いられなくなるが、そうすれば私の悲しみと怨念も消滅するだろう。そう考えると足を速め岬の先に駆け寄ると広々とした海の中にドボンと飛び込んだからそれが力雄一生の結果（死去）になってしまった。さて力雄の死後はいかがなりますやら、次回につづく。

春浪は少年力雄が海に飛び込むところで筆を止め次回につなぐ。死んだかどうかは説明しない。それが普通だ。物語は力雄の復讐譚だからここで終わるはずがない。日本の読者は知っている。

一方、呉禱はそれを一段と衝撃的に描写した。なにしろ「力雄死後如何」と書いて力雄を死なせたのだった。

そこからどう挽回するかが呉禱の腕の見せ所となる。

【呉禱】話説力雄自尋短見。投入海中。料想早与波臣结伴。万無生還之理。也不知他死了多少時候。耳边忽聽得有人呼喚。陡然一驚。醒了過來。10頁

さて力雄は自殺するため海中に飛び込んだからすでに魚と連れになった（死んだ）と思う。万が一にも生き返る道理はない。死んでどれくらい経ったかわからないが耳元で人が呼びかけているのが聞こえたからびっくりして意識がもどった。

「也不知他死了多少時候（死んでどれくらい経ったかわからない）」である。すでに死亡している状態から無理やり生還させる力技を見せつけば民初の読者も驚くだろう。呉禱がそうした理由はどこかにあるはずだ。

もとなる春浪はそこを述べて次のとおり。「それから何時間絶つたかは知らぬが、力雄少年は耳許で頻りに呼ぶ人声がするので、フト正気に復つて眼を開け

て見ると」(19頁)

注目点は「何時間絶つた」だ。呉禱はこの「絶つた」に惑わされた。ルビで「た」が振られているようにここは時間が「経つた」の意味で使われている。それを呉禱は漢字に引かれて「絶つ」すなわち「自殺して命を絶つ」と誤解したようだ。呉禱漢訳には多くはないがそういう例を見かける。

小さな単語について触れておく。力雄と露子が見に行った祭礼には御輿(神輿)が出て子供たちが担ぎまわっている。春浪は「樽天王」(13頁)と書く。「樽御輿」ともいう。子供が担ぐように空き樽で作った(挿絵のものは本物だからそれとは異なる)。呉禱は日本への留学経験はない。日本語書物だけで学習したと思われる。ゆえに御輿を見たことがなかったか。あるいは知識として知っていても当てはまる漢語が思いつかなかった。そこで使用したのが「吃食担子」(7頁)だ。これでは食べ物売りの担ぎ荷である。漢語では「神轎」という。しかし宗教的慣習から見てもそれを大勢で担ぐ行事はなかったと推測する。どのみち呉禱は「神轎」を使用しなかった。



春浪快著集2 国立国会図書館デジタルコ
レクション

力雄が吞海王の言いつけ通りに刻苦奮励する。その様子を描写するのに呉構は原文にない中国の故事を挿入した。

【呉構】自己鞭打自己。策勵自己。好比那中華晋代匡衡鑿壁偷光。列国蘇秦讀書刺股。14頁

自分で自分を鞭打ち励ますのは、中華晋代の匡衡が壁に穴をあけて隣家の灯火で読書した、あるいは列国蘇秦が眠くなると錐をモモに刺して読書したようなものだ。

原文にある「^{ナポレオン}奈翁／^{ほうたいかふ}拿破崙」「^{ほうたいかふ}豊太閤／^{ほうたいかふ}豊太閤」も漢訳する。だが民初の読者にはそれに加えて伝説の逸話を示す方が理解しやすい。追加したといえばゴーストの小説に出てくる人物カインの容貌を説明して絵図の鍾馗を示唆したことがある（呉構訳「憂患余生」1907）。直訳するだけで説明しないのは読者に不親切だという考えだろう。確かにそれを補助にすれば効果が期待できる。同じやりかただ。割注で説明したと考えればよい。

さらにいえば春浪には金額として「二十万円（金）」が出てくる。力雄が手にした15年間の報酬だ。呉構はそれを「二十万銀円（銀）」とする。また具体的にトランク2個に詰めた「金貨」（37頁）は呉構によって「銀円、銀錢」（26頁）に変えられている。銀本位制の時代だからそうする方が読者には理解しやすい。いずれも漢訳にともなう許容範囲内の操作だと判断する。

力雄が難破船を発見して救助に向かい、そこで見た人物について次のように説明した。ふたりの会話だ。両者ともに表記のままに示す。

【春浪】力雄君は沈痛極まりなき声で、

『わが仇、剛蔵と鹿蔵！』

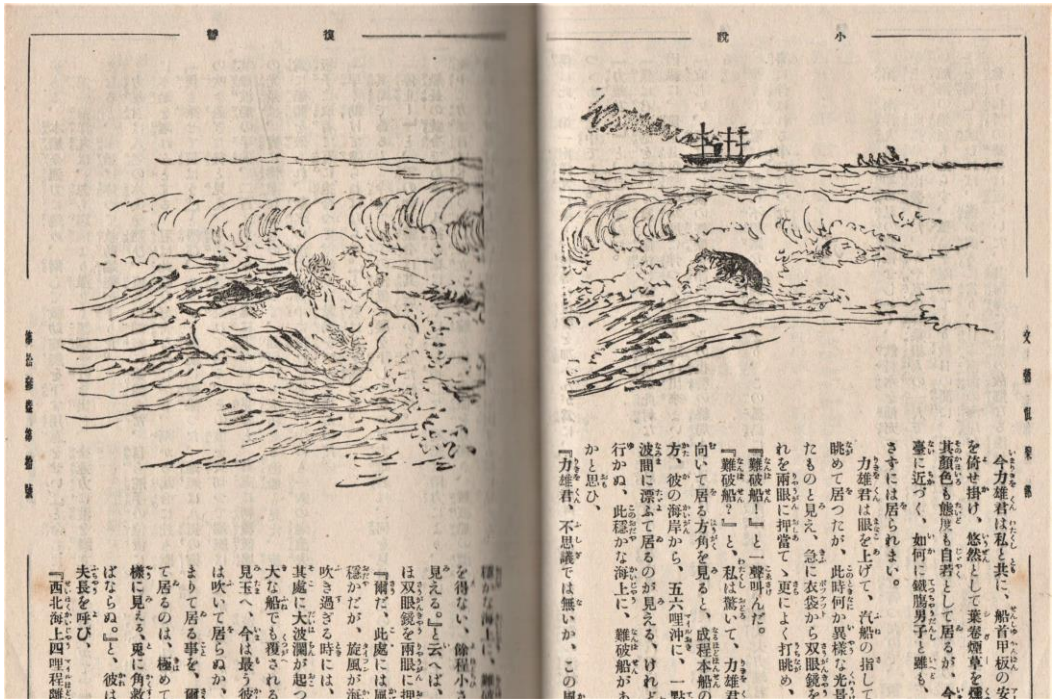
『何、剛蔵と鹿蔵、どれが？』

『あの板子に縋着き、互に抱合つて、救助を呼べる二人の漁夫！』

斯く云つて両眼を閉ぢたが、47-48頁

【呉構】力雄這纔發出万分沈痛的声音。答道。我的讐人曲田家父子兩個！俺

十分詫異。問道。怎麼。剛藏和鹿藏麼。這是怎？力雄忽地閉著眼道。你瞧那一塊木板上。兩人抱著。大呼救命的兩個漁夫！ 22頁



第 二 卷 第 二 章

文 藝 報

「力雄君、不思議では無いが、この風を得ない、餘程小見える」と云へば、は双眼鏡を兩眼に押し、
「爾だ、此處には風吹き過ぎる時には、其處に大浪瀾が起つ大なる船でも覆される見玉へ、今は最う彼は吹いて居らぬか、まりて居る事を、權に見え、鬼に角救ばならぬ」と、彼は夫長を呼び、
「西北海上四哩程離

今力雄君は私と共に、船首甲板の安を倚せ掛け、悠然として葉巻煙草を煙其顔色も態度も自若として居るが、今臺に近づく、如何に健勝男子と雖も、さすには居られまい。
力雄君は眼を上げて、汽船の指して眺めて居つたが、此時何か異様な光景たものと見え、急に衣袋から双眼鏡をれを兩眼に押當て、更によく打眺め、
「難破船！」と一聲明んだ。
「難破船？」と、私は驚いて、力雄君向いて居る方角を見ると、成程本船の方、彼の海岸から、五六哩沖に、一航波間に漂ふて居るのが見える、けれど行かぬ、此様な海上に、難破船が、かと思ひ、
「力雄君、不思議では無いが、この風

呉禱は原文にある会話部分を示すカッコを使用していない。従来からの方法である「道」を用いて会話であることを示す。また改行しない。

上を見れば日本語のままを漢訳していることがわかる。しいて言えば語順を入れ替え「俺十分詫異。問道（私はとても奇異に思ったから尋ねた）」を挿入したくらいだ。それをしなければ話者の区別がつかないからだとわかる。直訳だからあとは翻訳しない。

力雄は荒れはてた故郷を見て復讐の気持ちが消滅した。彼は出自を明らかにして復興のために20万円を提供する。曲田親子を含めた村人全員がはいつくばっているところに島崎老人と露子が車でやってきた。露子は老人の手を引いて「昔の面影消えぬ美はしき露子、力雄君の顔を見上げて嫣然!!!」（61頁）で終了する。章題に「力雄君の顔を見上げてニツコリ」と採用するくらいに結びとして気に入った表現だ。

春浪は物語の結末をあっさりと描写してそれ以上は述べない。ところが呉禱は

春浪の唐突に見える終わり方では物足りなかった。文章を補足して修飾しないではいられない。

【呉禱】一隻手還携著一位嬌娘。毋消說得。便是桃花依旧春風越發添了幾分嬌艷的露子。他見了力雄。當場沒話可說。只望著力雄臉面。嫣然一笑。露子這一笑不打緊。却把力雄先前那種瘡痕滿目無限淒涼的境地。一霎時恍惚變做陽和煙景。大地回春。覺得天地四周。和他故鄉村落。都是花香鳥語。美滿繁華的景色了。27頁

（島崎老人は）片手でひとりの美しい娘の手を引いている。それは言うまでもなく、桃の花がかわらず春風によって艶やかさをいくらか増した露子だった。彼女は力雄に会ってその場は言葉もなくただ力雄の顔を見て嫣然と一笑するだけだ。露子の微笑みはゆっくりとではあったが、力雄の以前の満身創痍ですべてが物寂しい境遇をいつの間にかぼんやりと暖かなよい風景へと変えた。大地に春がまたやってきて、天地のまわり全体と彼の故郷の村は花が香り鳥の鳴く幸せで繁華な景色になったように思えるのだった。

春浪原作とは反対に老人が露子の手を引いていることにしたのは小さな変更だ。締めくくりの「力雄君の顔を見上げて嫣然!!!」が呉禱によって自由に補足された。気のすむように追加してこれくらいの長さになった。

結 論

呉禱は本作において一部に加筆、書き換えを行なっている。しかし清末民初時期において直訳でなければならないという認識は主流を占めてはいなかった。文芸関係では特にそうだ。省略、加筆、書き換えをほどこした各種の漢訳が混在した時代である。

比較しての程度問題になる可能性もある。細部に分け入り考察する。総合的にながめて基本的に忠実な漢訳であれば高く評価する。それが筆者の立場だ。

呉禱漢訳に少々のお加筆装飾があるくらいは何も支障はない。本筋をたどり物語全体を維持しているからだ。日本語原文にほぼ忠実で上質な漢訳であるというこ

とができる。

【参考文献】

- 岡崎由美「武俠の黎明——押川春浪と近代中国武俠小説」蘆田孝昭教授退休紀念論文集編輯委員会『蘆田孝昭教授退休紀念論文集 二三十年代中国と東西文芸』東方書店1998.12.12
- 吳 燕「『燈臺卒』をめぐる」『清末小説』第33号 2010.12.1
- 渡辺浩司「《拊髀記》の原作」『清末小説から』第105号 2012.4.1
- 「《愛國小説 鴿》の原作／《拊髀記》の原作（補）」『清末小説から』第106号 2012.7.1
- 趙 霞「二十世紀初留学生訳者特点剖析——以吳禱《小説月報》前期（1910-1920）翻譯作品為例」『中国近代文学学会小説分年会暨中国近代小説學術研討會論文集』開封・河南大学文学院2013.9
- 崔 琦「晚清白話翻譯文体与文化身份的建構——以吳禱漢訳《俠黑奴》為中心」『中国現代文学研究叢刊』2014年第3期（総第176期） 2014.3.15
- 文 娟「試論吳禱在中国近代小説翻譯史中的地位——以商務印書館所刊單行本為研究視角」『明清小説研究』2018年第4期（総第130期）2018.10.15
- 荒井由美「吳禱についての文娟論文」『清末小説から』第133号 2019.4.1

呉禱漢訳レールモントフ『銀鈕碑』

——日訳「当代の露西亜人」

『清末小説から』第142号（2021.7.1）に掲載。沢本香子名を使用。俄国萊門忒甫原著、錢塘呉禱訳述『銀鈕碑』（上海・商務印書館1907）には日本語底本についての記載がない。実は嵯峨の家主人訳「当代の露西亜人」を使用している。「ベーラ」部分のみを漢訳してなぜ書名が『銀鈕碑』なのか。その謎を解く。

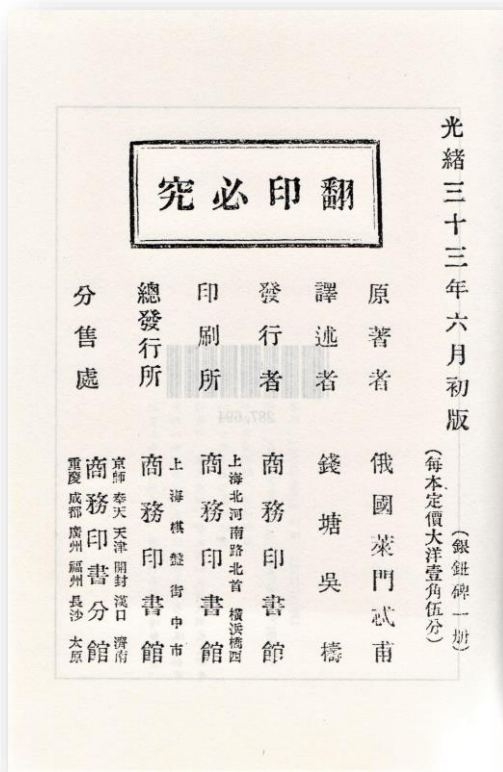
ミハイル・ユーリエヴィチ・レールモントフ（Михаил Юрьевич Лермонтов、1814-1841）の作品が呉禱によって漢訳された。嵯峨の家主人（嵯峨の屋おむろ。本名の矢崎を使用する）による日本語翻訳を底本とする。だが漢訳本に日本人の名前は表示されなかった。

1 呉禱漢訳の底本がわかるまで

俄国萊門忒甫原著、錢塘呉禱訳述『銀鈕碑』（上海・商務印書館 光緒三十三年（1907）年六月初版、影印本）は商務印書館の「袖珍小説」部門に属する1冊だ。阿英は「袖珍小説」叢書と記している。そうなると「説部叢書」叢書と書かなくてはならなくなる。表記の重複は避けたい。ここでは「部門」とした。

商務印書館の目録類を見れば該書に角書「言情小説」の表示がある。しかし実際に角書はなかった。同じ例では呉禱訳『薄命花』をあげることができる。その角書「科学小説」はもともと記載がない。

レールモントフ（萊門忒甫）原著であることは奥付に記してある。そこだけ見れ



奥付 影印本



表紙 孔夫子旧書網より

ば呉構はロシア語から漢訳したと考える人がいるかもしれない。しかし呉構はロシア語を解さない。そのかわりに日本語ができた。

呉構は日本語作品を底本にして漢訳する。名前が明記されているのは柳川春葉、勃拉錫克（快樂亭ブラック）、高須梅溪、押川春浪、^{マツ}国[田]山花袋、尾崎紅葉、黒岩涙香、薄田斬雲、中内蝶二、登張竹風、広津柳浪、原抱一庵、上村左川、大沢天仙、長谷川二葉亭（四迷）などだ。

ところがこの『銀鈕碑』には日本人名がどこにもない。原作についても無記載である。

『銀鈕碑』という作品名だけを見て即座に原作を指摘する人はたぶんいないだろう。ただし最近の清末民初小説目録は日本語底本を記載する。積み重ねられた研究結果を吸収し公表しているからだ。そこから出発して作品論をいきなり始める人もいるかもしれない。それはそれでいい。研究者はそれぞれで興味のありど

ころが異なる。

しかし本稿ではそこに至るまでの過程を無視しない。途中で傾注された原作探索の努力を尊重する。先行文献の助けを得たからこそ探索が可能になったのだ。

ということで呉禱の底本とした日本語訳が判明する経過を復習する。

2 新聞広告など

『銀鈕碑』が刊行されると版元の商務印書館は新聞に出版広告をだした。参考資料にすることができる。本文部分を翻訳する（略号については樽目録を参照のこと。広告文の記号は陳大康による）。

[編年史③1306] 『時報』光緒三十三年七月初十日（1907.8.18）「上海商務印書館続出最新六種小説」

《銀鈕碑》：此書為俄国文豪萊門忒甫原著，本名《当代之人物》，蓋欲發揮当代俄人之性質，特假配邱林之于白愛娜事以代表之。訳筆曲折周至，足令閱者尋繹靡尽。洋装一冊，袖珍本式，定価大洋一角五分。（注：[編年史⑤2457]も同文）

『銀鈕碑』：本書はロシア文豪レルモントフ原著で原題を『現代の人物』という。現代ロシア人の性質を詳述するため特にペチョウリンのベエラに対する事柄をかりてそれを代表させた。翻訳は変化にとみ遺漏がない。読者を何度も尽きることなく十分に満足させるだろう。

単行本が出た直後の広告である（登場人物の名前は日本語底本を使用した）。原作が『当代之人物』だと示しているところに注目する。呉禱漢訳にはその記載がないからだ。この箇所は重要である。上の文章を書いた商務印書館の編集者は漢訳の底本を知っていることがわかる。呉禱に近い存在の人ではなかろうか。ただし日本語訳経由の漢訳だとは明記していない。

漢語の「發揮」は翻訳して「詳述する」としておいた。この新聞広告にはもともと日本語原文がある。底本となった矢崎の文章なのだ。該当する箇所だけを示

す。

【矢崎】右は露国の文豪レールモントフの傑作にして、原名を「当代の人物」と題する小説に御座候、是はレールモントフが、当代の露西亜人の性質を發揮せんと欲して本篇の主人公たるペチヨウリンなる仮説の人物を仮来りて、其性質の中に露西亜人の性質を活現せるものに御座候 97頁

上の文章を見れば次のことがわかる。日本語の「露国の文豪レールモントフ」「当代の人物」を漢訳して「俄国文豪萊門忒甫」「当代之人物」だ。「特假配邱林（ペチヨウリンをかりて）」というのも一致する。「白愛娜（ベエラ）」は漢訳そのものから独自に引いた。広告文の執筆者が工夫したとわかる。

なにしろ日本語の「發揮」を商務印書館の広告に使用してそのまま「發揮」である。日本語の「發揮」は能力などを十分示すこと。漢語はそれに加えて「自分の意見などを十分に表現すること」を意味する。漢訳に流用できる単語だ。

さきに指摘しておけば矢崎のこの前書きは呉構の漢訳では省略されている。上をふまえれば文案者は上の日本語原文を見ていることがわかる（矢崎の文章はあとで全文を示す）。だからこそ商務印書館が自社の目録に原作あるいは底本を記さなかった理由が理解しにくい。

次に示す書目提要にも「發揮」が使われている。内容は一致するから原文のままにしておく。

[付晚上209]『商務印書館書目提要』1909.九改定7版（付建舟『晚清民書局發行書目』上冊 哈爾濱・黒竜江教育出版社2016.12）

袖珍小説（の部）／言情小説 銀鈕碑 一角五分／俄国大文豪著此書借以發揮当代俄人之性質。

ここに角書「言情小説」があるのを見てほしい。くり返すが実物には存在しない角書だ。「發揮」部分は新聞広告と同じ。版元の商務印書館が出したものだから重複しても不思議ではない。

時間が前後するが『銀鈕碑』刊行以後に雑誌『小説林』が掲載した新書紹介も引用する（本文のみを翻訳）。

「新書紹介」『小説林』第5期 丁未（1907）年七月

銀鈕碑 商務袖珍本 定価一角五分／旅客赶高加索山中。途過一中尉。適天雪。同宿一農家中。二人閑談。由中尉談前所經歷奇事。女子白愛娜為喀斯皮梯所劫。受傷而死。因將其情人配邱林所給之銀鈕。嵌於墓碑上。故定為書名。

旅人がカウカス山中を急いでいたとき中尉に出会う。雪になり農家に同宿した。ふたりが雑談するうちに中尉が以前に経験した奇妙な出来事話を話した。ベエラという女性がカズビイチにさらわれ傷を負って死亡した。恋人ペチョウリンが与えた銀のボタンを墓碑に嵌め込んだからそれを書名にした。

こちらでは原作が『当代之人物』であることは述べていない。物語の粗筋を書いて紹介にかえた。カフカス（英語のコーカサス）が出てくるからロシア小説だと予測する読者はいただろう。

それにしても『銀鈕碑』という書名の由来を説明しているのは種明かしである。銀ボタンが嵌め込まれた墓碑だから『銀ボタンの碑』という直接的な漢訳だ。短文でありながら小説の最後部分を明記した。説明する必要があるほど『銀鈕碑』という題名が書き手の興味を引いたらしい。この部分だけを取りあげて最後に説明する。ボタンが漢訳者呉禱の創作であると知れば読者は驚くだろう。

3 後の文学史、目録、叢鈔など

さて先行文献が日訳者と底本をどう記載しているのか。この問題にもどる。

時間の順序でいえば1937年の阿英『晚清小説史』である。

その説明はわずかだ（傍線省略）。「如呉禱，他從日文轉訳了萊芒托夫的銀鈕碑（一九〇七）」（1937年280頁／1955年184頁）のみ。しかし日本語から転訳したと明記しているところにご注目いただきたい。最初に転訳と書いたことを阿英は後に忘れるからだ。言及しなくなる。

次は1938年の阿英「翻訳史話」がここにくる。しかし実際に読むことができるのは1981年になってからだ。後で説明する。

中華人民共和国になって刊行された阿英目録（1954／1957）は次のように記載する。

[阿英158]銀鈕碑 俄 萊門忒甫（萊蒙托夫）著。呉禱訳。光緒三十三年（一九〇七）商務印書館刊。

上の記述は漢訳本の奥付にあるとおりで。カッコ内の萊蒙托夫は阿英が施した。流通する表記を添えた方がわかりやすいという配慮だろう。呉禱が中国で最初に使用した萊門忒甫は普及しなかったということでもある。日訳底本に言及しないのは漢訳本に記載がないからだ。

阿英目録には基本方針がある。創作と翻訳に分ける。翻訳を重視する研究姿勢がよい。作品に記載された事項のみを採録する。単行本のほかに雑誌掲載の作品も目録に収録したのは空前であって画期的な工夫だった。雑誌の時代を反映する新しく正しい方法だ。ただし角書は省いた。また翻訳の原作、重訳（改編）について阿英が独自に注記することはない。逆にいえば、だからこそ圧縮し簡潔な目録1本に結実したということができる。

1950年代に出てきたこの先駆的書目は後世に与えた影響が大きい。該目録に収録された（←ここが重要）創作と翻訳の刊行数を指折れば翻訳の方が創作よりも多いことがわかる。もとづいた資料が阿英目録だけなのだから必然的にそういう結果になる。研究者はこの阿英の主張を信じ続けた。阿英目録そのものに問題があることに誰も気づかなかった。それが事実だ。1998年になって訂正されるまで長年にわたって支持された定説である。それくらいに信頼度が高かった。学界の権威であるといわれる理由だ。それぞれの作品について刊行されたことがわかるだけでも利用価値がある。

『銀鈕碑』の原作は『当代之人物』だと刊行直後に宣伝している。商務印書館の新聞広告で明らかにされたことだ。しかし阿英目録には注記されなかった。その題名が阿英の文章に出てくるのは1961年になってからである。

『銀鈕碑』は阿英編『晚清文学叢鈔・俄羅斯文学訳文巻』（北京・中華書局 1961.10）に収録された。「叙例」の「四」に次のように簡単な説明がある。

萊蒙托夫的小説，也很早就有了中訳本。一九〇七年，呉禱訳的《銀鈕碑》，就由上海商務印書館刊行了。這本小説，和契訶夫的《黒衣教士》，同編在《袖珍小説》叢書裏。差不多經過了二十年，全訳的《当代英雄》才繼續出版。
（後略） 2頁

レールモントフの小説も早くから漢訳本がある。1907年、呉禱が翻訳した『銀鈕碑』は上海商務印書館が刊行した。この小説はチェーホフの『黒衣教士』と同じく「袖珍小説」叢書に収録されている。ほとんど20年を経て全訳『当代英雄』がようやく出版された。

最初に疑問が出てくるのは呉禱漢訳が日本の嵯峨の家主人（矢崎）訳に基づいていることを説明していないことだ。阿英は『晚清小説史』ですくなくとも日本語からの転訳と書いていた。それが抜けている。

同じくチェーホフ著『黒衣教士』も呉禱の漢訳（1907）である。奥付に「原著者：俄国溪崖霍夫、訳述者：日本薄田斬雲、重訳者：錢塘呉禱」と明記されている。日本薄田斬雲訳「黒衣僧」が底本だ。こちらについても薄田斬雲の名前をださない。

両者ともに日本語経由であることをなぜ隠すのか。たしかに『銀鈕碑』には日本人訳者は書かれていない。しかし阿英は転訳だと説明していたではないか（後述）。しかし『黒衣教士』の実物には薄田斬雲訳だと書かれている。ちぐはぐな扱いである。

20年後の全訳というのは次の書物が該当するだろう（傍点筆者。以下同じ）。

1987 [民外2753] 当代英雄 勒・夢托夫著 楊晦訳／上海 北新書局 1930年5月初版 355頁 28開／長篇小説。據英訳本転訳。書名原文：Герой нашего времени*1。

楊晦漢訳の底本は英訳本だと説明している。阿英が「全訳」と書いているのは呉禱の漢訳が部分訳であることをこの時点で承知しているからだ。次の文章ではそれ以前だから部分訳であるという認識を示していない。

前述した阿英「翻訳史話」*2がある。

「第二回 萊芒托夫一頭身手 托爾斯泰兩試新装」と章回小説のような章題がついている。

ここで阿英はレールモントフを最初に中国へ招待したのは呉禱だと書いた。それが『銀鈕碑』である。2万字で完結した物語（用兩万字写完了這故事）がほかならぬ『当代英雄』であるという。ここで奇妙な説明だと感じる。何度も言及しているように呉禱漢訳の底本は矢崎日本語訳だからだ。しかも部分訳であることを指摘していない。

阿英は楊晦漢訳『当代英雄』（1930）の冒頭を引用して呉禱漢訳と対比させた。その結論は次のとおり。

兩本対校，其間有着不少的差異，会使読者們驚奇。可是一般的說起来，在初起的翻譯界，像這樣的差異，已經不是易事了。當時的翻譯界很有趣，除掉私人的訳書以外，書店里往往聘有訳手和潤文的人。先由翻譯手把流行的書訳成中文。再交把那潤文的人去刪潤，然後再出書。翻譯手固未必能沒有錯誤，潤筆者是更不知原文為如何，幾經改動，等到印出書來，簡直不是那麼一回事。這種情形，在當時的小説里，記載得很多。呉禱的訳文如此，已經是很難能的。

234頁

兩書を比較対照してその間に少なくない差異があるから読者たちを驚かせ不思議がらせるはずだ。しかし普通に言って初期の翻譯界はこのような差異はすでに珍しいことではなくなっている。當時の翻譯界はおもしろいことに個人の翻譯書以外には書店が往々にして翻譯者と文章修正者を雇う。まず訳者が流行している書物を漢語に翻譯する。それからそれを文章修正者に手渡し書き換えさせてから出版する。訳者はもとより間違わないとは限らないし修正者はさらに原文がどのようなものかも知らない。幾度かの改変をへて書物が印刷されるとまったくの別物だった。この状況は當時の小説では多くあ

ったことだ。呉禱の翻訳もその例にもれずすでに手の施しようもなかった。

阿英の説明によれば呉禱はロシア語原文から翻訳したと誤解しかねない。勝手に翻訳し商務印書館がそれを別人に渡し書き換えさせた。だから楊晦漢訳とは翻訳内容が異なるという結論だ。

呉禱は日訳から、楊晦は英訳から漢訳している。原作は同じだからといって底本がそれぞれ日本語と英語なのだから差異が生じるのは当然ではないか。

しかもくり返すが部分訳であることにも言及しない。阿英の記述は基本的に正しくない。あるいは説明が不十分であるにつけ加える。

阿英にしてこの理解なのかと少しばかり驚く。『晚清小説史』では日本語からの転訳だと書いていたではないか。そのことをすっかり忘れている。『銀鈕碑』には日本人名がないからといって阿英の説明が正当化されるものでもない。

阿英は最初（1937）から最後（1961）*3まで呉禱がいかなる日本語底本によって漢訳したのか明記しなかった。また部分訳だと明確に書かなかった。阿英はあたかも呉禱が勝手に書き換えたかのように説明したのだ。呉禱にしてみれば濡れ衣を着せられたことになる。

晩清文学研究の権威阿英が断言したから後世まで影響を及ぼすことになった。この説明が国蕊を誤解させたのではないかと推測する（後述）。だからこそ『小説四談』の編集人（阿英の娘婿であった呉泰昌）の責任が問われるだろう。阿英の誤解は訂正する必要があったのだ。

4 明確な指摘

『銀鈕碑』の底本が嵯峨の家主人訳「当代の露西亜人」とであると最初に指摘した文献は何か。筆者の知るかぎり【中日880.012】が早い。

1980【中日880.012】角書不記、Geroi Nashego Vremeni (1840)、(俄) Mikail Yurievich Lermontov、(日) 嵯峨の家主人(訳)；呉禱(重訳)／上海商務【1911年前版】／日訳本名為「当代の露西亜人」

そこに示してある“Geroi Nashego Vremeni”はロシア語では前出のとおり“Герой Нашего Времени”と表記する。『我らが時代の英雄』つまり『現代の英雄』である。これを見れば1907年の初版から1980年までの間、矢崎の日記が底本であったことは一般に知られていなかった。

それを受けて『清末民初小説目録』初版（1988）では次のように記載した。

Y457* 銀鈕碑／（俄）萊門忒甫（萊蒙托夫）著 錢塘吳構訳／上海商務印書館 光緒33.6（1907）袖珍小説／LERMONTOV著「現代の英雄」／嵯峨の家主人「当代の露西亜人」『太陽』1904.4

つづく樽目録第2版（新編 1997）では嵯峨の家主人訳を『太陽』雑誌で確認した。それにより「レルモントフ」「10巻5号1904.4.1」を追加している。

さらに樽目録第3版（新編増補 2002）で「現代の英雄」に注釈の形で「「ベーラ」部分」を追加する。

「ベーラ」部分は以下の目録に依拠している。

1987 [民外2752] 銀鈕碑 萊門忒甫著 吳構訳／上海 商務印書館 1907年6月初版，1914年8月4版 87頁 50開（袖珍小説）／中篇小説。據日記本転訳。本書即《当代英雄》上部的《蓓拉》

ここでようやく「據日記本転訳」と表示した。ただし嵯峨の家主人はない。

『現代の英雄』の「ベーラ」に至るまで以上のような経緯があった。漢訳作品ひとつにしてもなかなか手間と暇がかかっている。

5 嵯峨の家主人

嵯峨の屋おむろ（本名矢崎鎮四郎、1863-1947）は小説家、翻訳家。旧東京外国語学校魯（露）語科を卒業した。二葉亭四迷と交際しツルゲーネフ文学を読んだ

という*4。

雑誌『太陽』はレルモントフ作、嵯峨の家主人訳「当代の露西亜人」と表示して掲載する。この「嵯峨の家主人」は「嵯峨の屋おむろ」のことだ。なぜだか雑誌掲載の署名は「嵯峨の家主人」であって「屋」ではない。別表記のようだがほかでも使用したかどうか詳細は不明。

レールモントフ『現代の英雄』は1839-40年に発表された5篇の小説を集めて構成される。「ベーラ」、「マクシム・マクシムイチ」、ペチョーリンの日誌「タマーニ」、同「公爵令嬢メリー」、同「運命論者」である。

矢崎訳「当代の露西亜人」は「ベーラ」部分のみを翻訳した。全訳ではないことにご注意いただきたい。

該翻訳について年譜類での記述は簡潔だ。参考までに示す。

【清水】明治三十七年（一九〇四） 四十二歳／四月、翻訳「当代の露西亜人」を『太陽』に発表。448頁*5

【杉崎】明治三十七年（一九〇四） 四十二歳／四月、レルモントフ作「当代の露西亜人」（翻訳）を『太陽』に発表。329頁*6

【叢書】明治37.4.1 「当代の露西亜人」『太陽』、レルモントフ作、嵯峨の屋^{ママ}訳。244頁*7

いずれも雑誌掲載時の署名「嵯峨の家主人」については記載をしていない（【叢書】は「嵯峨の屋^{ママ}訳」とする）。

雑誌『太陽』には矢崎の序文がついている。「ベーラ」の梗概を述べる。すでに冒頭の一部は示した。それを含めてあらためて掲げる（ルビ省略。下線は筆者。以下同じ）。呉構はこの「訳者述ぶ」を漢訳しなかった。

【矢崎】右は露国の文豪レルモントフの傑作にして、原名を「当代の人物」と題する小説に御座候、是はレルモントフが、当代の露西亜人の性質を發揮せんと欲して本篇の主人公たるペチョウリンなる仮説の人物を仮来りて、其性質の中に露西亜人の性質を活現せるものに御座候、男主角ペチョウリン

（露国士官）が、女主人公ベエラ姫（亜細亜人種なる酋長の娘）を、寵愛し、翫弄し、且つ泥履の如く履付るの状態は、如何に露国が、東洋諸国に対する、外交政策と相似たる處有るべき歟、斯る巧妙なる懐柔の伎倆と、斯る冷酷残忍なる性質の、露人の性質中に存ずるは、彼国の文豪が、早く五十年の昔に於て、能く發揮仕る處に御座候、若我国当代の政治家、外交家、有志、記者、事業家等、此小説を一読して、能く露人の性質を会得し、直覺する者は、露国の政策及び外交を解決し得る事、猶快刀乱麻を断が如くなるべしと存候、読者願はくは此作を以て、軽々に読過し去らざらん事を、伏て冀ひ奉る 訳者述ぶ」 97頁

作品「ペーラ」の内容は矢崎が要約（下線部分）したとおりだ。ロシア軍人の主人公ペチョーリンがカフカス地方において異民族酋長の娘ペーラを誘拐し来たり「寵愛し、翫弄し、且つ泥履の如く履付（ふみつけ）る」。矢崎はそれを当時のロシアと東洋諸国の関係に置き換えた。そう解説した背景にはすでに始まっていた日露戦争があるのは確かだろう。ロシア人に蹂躪されるペーラに当時の日本を重ねた。

当時のロシア人が抱く異民族に対する軽蔑差別の感情態度を言葉にして露骨に表現している。レールモントフは当時の同世代人から欠陥箇所を集めてペチョーリンを創造し彼が理解するままに描写した。ペチョーリンはロシア人から見れば「現代の英雄」であるかもしれない。ただし「ここにいう英雄とはいまも言うように犠牲者の別名であり」（中村融290頁）という指摘はある。しかし異民族で被害者のチェルケス人娘ペーラにとってペチョーリンは悪漢にほかならない。

6 矢崎日訳と呉禱漢訳

ひとりの旅行作家（姓名不記）がカフカス地方を旅行した。彼はそこに在住する50歳くらいのマクシム・マクシムイチ中尉に出会う。彼はロシア兵駐屯地で1年間一緒にすごした奇人ペチョーリン（25歳前後）というロシア軍士官にまつわる思い出話を問われるままにしゃべった。「ペーラ」と題する1篇はその聞

き書きという体裁になっている。異民族の娘ペーラを中心にその弟、彼女に恋する男、それにロシア人ペチョーリンが絡んで物語が展開する。

ロシア人とカフカスの多種民族（タートル〔韃靼〕はその民族総称）の間には歴史的に複雑な関係がある。それを背景にして物語の最初からロシア人の異民族へ対する強烈な侮蔑が冷静に書かれる（呉禱漢訳の傍線は省略。以下同じ）。

【矢崎】此處等の亜細亞人といふ者は、実に畜生見た様な奴でしてねへ／狡猾な奴等ですよ！ 98頁

【呉禱】這裏各處の亜細亞人。委實是和畜生一般的野奴。／真真是狡猾奸刁的奴才！ 5頁

このアジア人は実に畜生と同じく野蛮なやつでしてね。／本当に狡猾な奴らですよ！

ロシアからみればカフカスの人々はアジア人である。呉禱の漢訳は矢崎日訳を直訳している。

【矢崎】彼奴等は何等の仕事も知りませんねへ、何等の教育にも向ぬ民ですよ、まだ貴君カバルヂンツ人や、チエチエンツ人の方が、餘ツ程此奴等よりは上等ですよ、其は彼奴等は山賊的の貧乏人でこそあれ、其代り自暴自棄の無鉄砲者でさあ、此奴等と来た日には、（中略）真に人夫の外には役に立ぬ奴等ですよ 100頁

【呉禱】這厮們任是什麼事。也不懂得。什麼等級教育。也不曾受過。閣下加巴亭人。和韃靼人。比這厮們。還要高得多。可知這厮們。乃是山賊般貧苦之人。又加自暴自棄。不肯当兵習武。這厮們（中略）真乃除了傭工僱役。毫無用處的蠢才。12-13頁

こいつらはどんな仕事もしりませんね。どんな等級の教育も受けたことがないのでですよ。あなた、カバルヂンツ人や韃靼（タートル）人の方がこいつらよりはよほど上等ですよ。まったくこいつらは山賊のような貧乏人でね、そのうえ自暴自棄で兵隊になって武術を習おうともしない。こいつらは（中

略) 本当に人夫のほかには役立たずの愚か者ですよ。

呉禱は軽蔑語の「厮」を使用して日訳を的確に漢訳している。ただし日本語の「無鉄砲者」を漢字に引かれて「不肯当兵習武（兵隊になって武術を習おうともしない）」と誤解した。日訳の「チエチエンツ人」を「韃靼（タタール）人」にした。後にでてくる「チエチエン地方」（100頁）も「韃靼地方」（13頁）である。

マクシームイチの物語には異民族ふたりの若者が出てくる。アザマートとカズビーチという。このふたりが全体を回転させる主要な役割を担う。

ロシア兵駐屯地の近くに帰順した酋長がいた。その息子がアザマートである。その妹がペーラだ。アザマートは金銭と馬に執着し盗みに平気な若者として描かれる。

ペチョーリンはアザマートに冗談半分に言った。マクシム・マクシームイチが語っている。

【矢崎】「如何だ、お前が若乃父の家畜の中、最良の小山羊を一頭窃んで来たならば、俺はお前に金貨を一個やると、所が如何です貴君、翌日の夜彼奴目小山羊の角を握んで牽て来たでは有ません歟、其様欲張りでした、102頁

【呉禱】「怎麼。你若能將你父親養的家畜之中最好的小山羊竊一頭來。俺立將一個金洋圓給你」呵。你道他如何。第二天夜間。那厮果然握著一頭小山羊的角。牽了前來。你瞧他貪欲大也。20・21頁

「どうだ。お前がもし父親の飼っている家畜の中で最良の小山羊を盗んできたなら俺はお前に金貨を1枚やるぞ」。あなた、あいつはどうしたか。翌日の夜あいつははたして小山羊の角を掴んできたのですよ。あいつの貪欲さの大きさをごらんになってくださいよ。

呉禱は矢崎が閉じ忘れた記号（」）を正しく用いて直訳している。アザマートのこの欲深さがカズビーチの所有する駿馬と自分の姉ペーラを交換することにつながる。用意周到に作られた物語だ。

転換点の最初になっているアザマートが申し出るその提案部分を引用する。

【矢崎】まあ聴け、俺はお前の為なら何でもしてやる、望みと有ば、自分の姉でも盗み出してやる、姉が如何に踊り、如何に歌ふ歟はお前も知て居るで有らう、縫取りなぞは実に巧いものだけ！あの様な妻は、何処を尋ねたつて有はしない、土耳其帝の妻にだつて有はしない……如何だ望まない歟？明日の晩、あの谷の滝の處に待て居ない歟、左様すれば俺は隣の部落へ往くと言て、姉を誘ひ出してやる、而して彼傍を通るのよ……其處へ貴様が飛出せ、姉は直貴様のものだ、如何だ、姉のベエラでも其馬には易られない歟？

106頁

【呉禱】聴著。俺為了你的馬。任是什麼也贈給你。只要能穀遂我願望。就連我姊姊。俺也能竊盜出來給你。俺的姊姊舞得怎樣。歌得怎樣。你是早已知道著。至於鍼術活計等事。沒一樣不巧妙通靈！那樣妻房。想來也沒有找處。任是土耳其皇帝的皇后。怕也沒得那樣……怎麼樣。終究沒了望麼？明天晚間。你可在那谷傍泉水處等待麼。若是恁地。俺只說往近鄰部落去遊玩。將姊姊誘騙出來。使他走過你身旁……你却在那裏跳了出來。俺姊姊從此就屬了你。怎麼樣。難不成俺姊姊白愛娜。也不能換你的馬麼。34-35頁

漢訳は翻訳しない。なぜなら直訳そのままだからだ。記号の「……」「！」「？」も日訳のままに対応させている。見事な漢語の口語訳になっている。呉禱漢訳の見本だ。指摘する箇所はひとつもない。

カズビーチは申し出を断った。そのあとにペチョーリンが同様の誘いをアザマートに仕掛ける。駿馬を自分のものにできる機会を与えてやるというのだ。

【矢崎】宜しい、誓ふとも、屹度お前に得さする、其代りお前とあの馬の代りとして、俺にお前の姉のベエラを得させなければならんぞ、カラギヨウヅがお前の姉の引出物だ、如何歟此交換がお前の氣に叶つてくれゝば宜が

108頁

【呉禱】好好。也要立誓。定要向你得来。並非為別。就是你要那匹馬的酬勞。俺定要得你的姊姊白愛娜纔罷。喀爾鈕齊。乃是你姊姊的筵終贈物（割注：古

時賓客赴宴之後各將出物件來互相送贈)。怎麼樣。這個交易。能如你的心願麼。41頁

よろしい。誓うとも。きっとお前の物にさせてやる。ほかでもない、あの馬の報酬として俺はきっとお前の姉ベエラを手に入れなければならんぞ。カラギヨウヅはお前の姉の宴会後の贈り物（古代に賓客が宴会に参加した後互いに贈り物をした）だ。どうだ。この交換はお前の願いにかなうか。

「カラギヨウヅ（喀爾鈕齋）」とはカズビーチが所有する駿馬の名前だ。日本語の「引出物」は祝い事で招待客に配られる贈呈品である。呉禱は読者の理解を助けるために説明の注をつけた。ペチョーリンはベエラと駿馬を交換できるもの



ベエラ。イスラム教徒の女性でありながら両腕を露出させている不自然さがある



カズビーチがベエラを刺す
ネットから引用

と考えている。レールモントフはそういう風に描写した。それほど常識はずれな人物である。またそれを実行することは異民族アザマートにとっては普通のことだとも示唆する。もともと人馬交換はアザマートが提案したことだった。

アザマートは駿馬を手に入れる。窃盗である。ペチョーリンも姉のペーラを手に入れた。誘拐拉致である。

マクシムイチに問われてペチョーリンは答えた。

【矢崎】私は後でペチョウリンに、何故其様悪い事を企てたと言いましたが、彼がいふには「なあと彼様野育のチエルケス娘が、俺の様な優しい夫を持のは幸福に違ひない、何故なら彼等の習慣からいふと、俺でも矢張夫と言はんければならぬ、其にカズビイチは彼通りの盗賊だもの、其位罰してやらなければ、[]と斯です、108-109頁

【呉禱】我後來又問配邱林。為何要那樣惡事。他答道。哪。那樣野生的楷爾開斯之女。匹配俺這樣優美的丈夫。難道還說不是幸福麼。再者。他們任是怎樣的風俗習慣。俺恰不能胡亂。總須称作丈夫。你瞧。喀斯皮梯乃是那樣的盜賊。若不是恁地科罰於他。…… 42-43頁

私は後でペチョウリンになぜそのような悪い事をしたのかと聞きました。彼が答えているには、あのような野生のチエルケス娘は俺のような優しい夫と結ばれるのがまさか幸福ではないというのかね。おまけに彼らがどんな風俗習慣であっても俺が勝手にできるわけではないから、夫と言わなければならないのだ。ほれ、カズビイチはあのと通りの盗賊だから、もしあいつを罰してやらなけりゃ……

ペチョーリンがいうには略奪であろうがペーラは自分の妻になることが幸福だ。カズビイチが駿馬を奪われるのは盗賊には当然の罰だ。ペチョーリンは異民族の娘に対する蔑視をむき出しにしている。自己だけを中心とした彼の身勝手にわがままな考えはさすがに登場する同じロシア人をも呆れさせた。レールモントフはペチョーリンをそのような人物に創造したわけだ。

自己中心的なロシア人青年が女性を性的に蹂躪する物語は尾崎紅葉『寒牡丹』

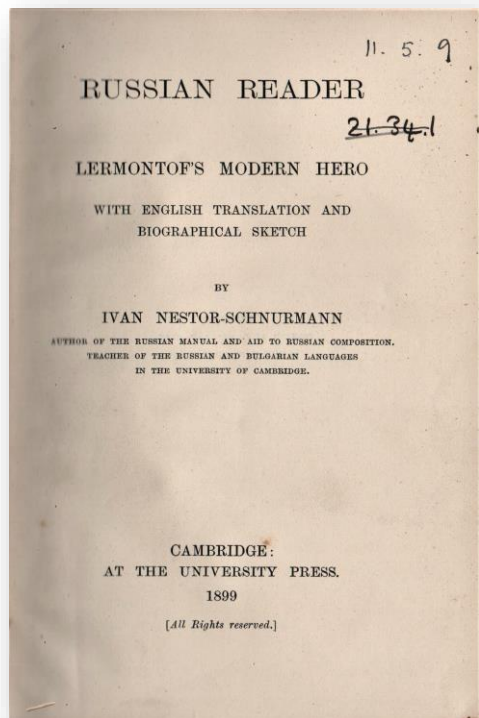
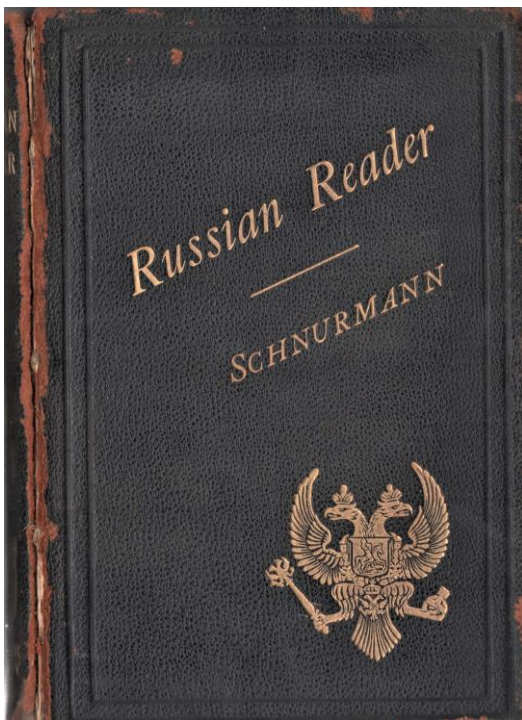
(1901)にも見ることができる。それを漢訳しているのは呉構(1906)であるところが共通する。『銀鈕碑』と呉構漢訳『寒牡丹』は1年違いのほぼ同時期に刊行された。

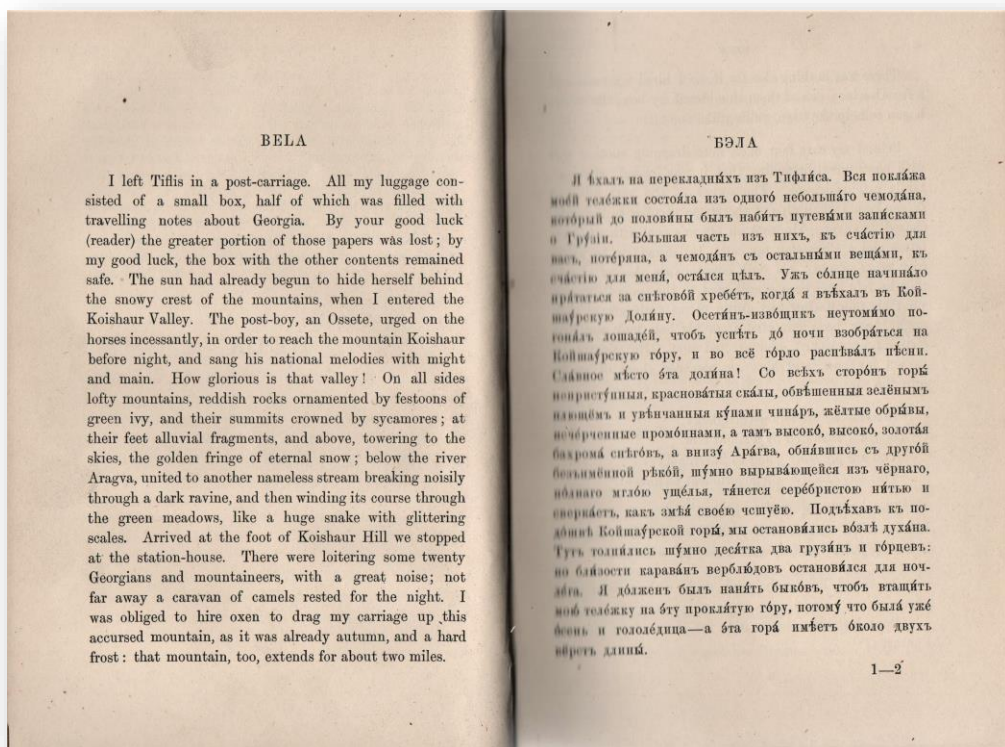
駿馬を奪うように言ったのはベーラの父だろうとカズビーチは邪推した。彼はベーラの父親を殺し馬を奪った。また彼はかねてから好いていたベーラを奪還して逃亡した。ペチョーリンとマクシームイチが追跡しカズビーチに向けて射撃したが逃げられた。その際ベーラはカズビーチに肩を刺されて出血している。彼女は駐屯地に運びこまれる。ペチョーリンとマクシームイチに見守られながら彼女は苦しんだ末に死去した。

問題になるのは漢語の「銀鈕」である。銀のボタンという意味だ。ところがそれは原作および底本とした日訳とは異なる。

7 「銀鈕」の謎

ベーラの遺体を納棺したあとそれに使われた飾り物がある。このロシア語原





作は次のとおり*8。

マクシムイチが語る。

Я пошел заказывать гроб.

棺桶を注文しに行きました。

я обнулъ ею гроб и украсил его черкесскими серебряными галунами.

p.103

(織物を) 棺桶に巻きつけ、そしてチェルケスの銀モールで飾りました。

棺桶を織物で巻いた。そのうゑにチェルケス製の銀モール〔 серебряными галунами〕で飾つたというのが原作だ。「モール галунами」は組みひも、レースでもある。「チェルケс черкесскими」は北コーカサス西部の地名だ。銀モールは恋人ペチョーリンが彼女のために買ったためにおいたものだという説明がある。

参考のためにこの部分の英訳 2 例を示す。

【RUSSIAN READER】 and so I went to have the grave prepared. p.102

ということで、お墓の準備をしに行きました。

I covered her coffin, and adorned it with Circassian silver lace p.102

(織物で) 私は棺桶を覆い、さらにチェルケスの銀レースで飾りました。

【PHILLIMORE】 I went to make arrangements for her grave. p.84*9

彼女のお墓を準備しに行きました。

I wound round the grave, and I adorned it with the Circassian silver lace p.84

(織物で) 私は墓のまわりを巻いて、さらにチェルケスの銀レースで飾りました。

英訳では「grave 墓」と「coffin 棺桶」に分かれた。なぜならロシア語「гроб」には「棺桶」と「墓」のふたつの意味があるからだ。

英訳前者は同一単語を「grave 墓」と「coffin 棺桶」に適宜分けている。後者は「grave 墓」で統一した。「墓のまわりを巻いて」は少しわかりにくい翻訳である。grave は「墓」「死体を埋める墓穴」「墓所」だが「墓石」を含んでいる。墓石であればそれを布で巻くこともできる。

とりあえず上のように (刊年は異なるが) 「墓」にする英訳があることを見ておく。

矢崎は該作品をロシア語原文から日本語に翻訳した。該当する箇所は次のとおり。

【矢崎】私は直墓標を誂ひに参りました

私は絹の小布を少し持て居たので、其で彼女の墓標を纏ひ、尚其上を、曾てべ[べ]チョウリンが彼女に與し銀のチェルケス紐^{ひも}て飾ツて遣ましたが、121 頁

矢崎は **рпоб** を「墓標」つまり墓碑にした。ロシア語原文に解釈の余地があるという判断だろう。矢崎が旧東京外国語学校でロシア語を学んだという事実がある。そこで得た学識と前後の文脈からして墓標を選んだと考える。

墓標にしたから問題が発生する。「誂ひ（注文し）」に行くとは葬儀屋があるのが前提だ。それにしても簡単に入手できるのか。大きさについても、また石か木かも不明だ。あるいはひとりで持ち運びができるくらいに小さいのか。そういういくつかの疑問が出てくるのはしかたがない。棺桶であれば突然の需要に応じることができるように既成のものが置いてあるかもしれない。作者レールモントフはそこまで詳細に書く気はなかった。

参考のために日本語翻訳から3例を示す。

1928中村白葉「わたしは棺を注文に出掛けて行きました。／わたしはタルマラーマ（割注：一種の絹織物。ペルシャ、トルに産す——訳者）のきれを持つてみましたので、それで彼女の棺をくるみ、グリゴリー・アレクサンドロキ"ッチがやはり彼女の為に買つてやつたチェルケスの銀モールでそれを飾りました」64頁^{*10}

1950北垣「で、わしはそのまま棺桶をあつらいに出かけちやつたのです。／こいつ（タルマラーマの切れ）で棺桶をつつんで、チェルケス出来の銀モールでそれに飾りをつけてやつたのです」76頁^{*11}

1981中村融「そのまま棺桶の注文に出かけてしまいました。／それ（ペルシャ織のきれ）を棺にかぶせ、（中略）チェルケス製の銀モールでこれを飾ってやりました」76頁^{*12}

以上はいずれも棺、棺桶にしている。わかりやすい。

矢崎の翻訳を含めて共通する箇所がある。同一人物（話し手）が棺桶（矢崎は墓碑）を「絹の小布」でつつみ「銀のチェルケス紐」で飾った。この2組の表現は書かれているままに理解できたはずだ。

ところが呉禱はこの部分について把握しにくいと感じたらしい。単語を書き換え彼独自の文章を作り上げた。その原因は矢崎が「墓標」「紐」としたところに

ある。呉禱は後者の「紐」という日本語漢字に引きずられた。

棺桶を布切れでつつみ、それに加えて銀ヒモで飾った。そのうえでペーラの遺体を納棺する。翌日、小川のほとりに運んで行って埋葬した。そういう順序だ。矢崎が翻訳したように棺桶のかわりに墓碑が先に出てくるとその手順が乱れる。しかし墓碑が小さいのであればそれでもかまわない。曖昧な部分が残るという意味だ。

以上を参考にして呉禱漢訳を見る。呉禱は矢崎の日訳を生かしながら独自の修正をほどこした。納得のいく筋道をつけようと苦心している（漢訳にある割注は開く）。

【呉禱】没有別法。惟有走過去。向那女子墓碑之前（割注：墓碑先已建設了）參拜禱告一回。恰好我帶着一條絹織小帶。就將來纏在女子墓碑之上。再看上面。早有配邱林給與他的楷爾開斯銀鈕子。嵌飾在那裏。86頁

ほかにどうしようもないので行くしかなかったのです。彼女の墓碑（割注：墓碑はすでに建てられていた）に参拝し祈りをささげました。私はちょうど絹織の細ヒモを1本持っていたのでそれを彼女の墓碑に巻きつけました。そうしてその表面を見ると、かつてペチヨウリンが彼女に与えたチエルケスの銀ボタンがそこには嵌めこまれていたのですよ。

矢崎が「墓標」としたから呉禱はそれを「墓碑」と漢訳した。日訳がそうなのだから漢訳は間違いではない。

矢崎訳にある「誂ひに」は「注文するために」という日本語だ。これから購入しようという日本語を呉禱は無視した。そればかりかすでに墓標が立っていることに変更している。突然でてくる墓碑では説得力がない。つじつまを合わせるために割注で「墓碑はすでに建てられていた」と加えた。

原作も日訳も名詞と動詞の単語がそれぞれ対応している。「切れで／つつむ」「ヒモで／飾る」の2種類だ。

呉禱は前者の「切れで／つつむ」は無視した。そのかわりに日訳の「絹の小布」を漢訳して「一條絹織小帶（絹織の細ヒモ1本）」と書き換えた。ヒモだから「つ

つむ」ではなく「纏（巻きつける）」とする。結果として日訳の「ヒモで／飾る」をここで使用したことになる。

矢崎日訳の「チエルケス紐」が残る。この日本語「紐」を呉禱は「鈕子（ボタン）」に置き換えた。

漢語の「紐 niu」は「鈕 niu」と同音だ。しかも「紐」には「ヒモ」と「ボタン」のふたつの意味がある。ヒモを結んでボタンにする伝統的なやり方だ（飾り結び）。そこから混同したのではなかろうか。

呉禱は「紐」という漢字に引かれた。漢訳では「ヒモ（一條絹織小帯）」はすでに「巻きつけ（纏）」ている。だから日本語「紐」を漢語「鈕子（ボタン）」に変更した。固形のボタンだから自然に「嵌（嵌めこむ）」という動詞を使用することになる。

呉禱は日本語の漢字に寄りかかって翻訳することがある。時たま誤解する理由だ。しかしこのボタンを嵌める部分は呉禱が自分で判断して創造した。独特な解釈である。

ベーラが死ぬ前にペチョーリンは墓碑を用意しそれに銀ボタンを嵌め込んだ。そう改変する方がペチョーリンのベーラに対する深い愛情を示すことができる。小説的により大きな効果があると呉禱は考えたようだ。

呉禱によるせつかくの工夫だが成立しにくい。銀ボタンが引っかかる。なぜボタンなのかという理由がない。ペチョーリンがベーラに銀ボタン1個だけを与えた。愛情の象徴かなにか、記念のためだったというのか。呉禱は説明していないから理解しにくい。しかも墓碑に銀ボタンがあらかじめ嵌めこまれていたことにしたのも無理がある。ペチョーリンが事前にそれを回収していなければ実現できないからだ。話の筋がとおらないのである。

それよりも重大な齟齬があることに気づく。ベーラの墓碑がすでに設置されていたことにした箇所だ。この時点でベーラは死去した直後である。埋葬は翌日に行われる。主の存在しない墓碑を参拝してどうするのか。その矛盾に呉禱は気づかなかった。

ここは矢崎日訳どおりにすべきだった。絹の小布で包み、ペチョーリンが買っていた銀ヒモ（モール、レース）で飾った。その後には葬られた場所に設置する。

そうであってこそ自然だ。

やはり問題になるのは呉禱が墓碑を立てていることにした部分である。

ベエラはイスラム教徒だから土葬にする。埋葬したその上に墓碑を置くのが普通だ。しかし呉禱は割注をほどこして先に墓碑を設置してしまった。河辺に埋葬することを予定して墓碑を置いたと説明するだろうか。少々苦しい。

呉禱の漢訳は基本をいえば日訳に忠実である。これは違いない。ただし小さいところでズレが生じてしまうことがある。それが上の例だ。

呉禱は銀ボタンを創作した。だから彼にしてみれば漢訳題名を『銀鈕碑』としたのは自然な処置だ。しかし矢崎日訳から離れてしまうから具合が悪い。せめて名前を使用した『白愛娜』ならば内容と合致した。また『当代之俄羅斯人』にすれば日訳そのままになったのものと惜しむ。矢崎日訳の「訳者述ぶ」には「当代の人物」も「ベエラ」も出てくる。呉禱がそこを省略したのは彼自身による改変を踏まえてのものなのか。そこはわからない。

呉禱は底本題名を生かした漢訳名を採用する。ただし日訳の「虚無党の女」を漢訳して題名を『薄命花』にした例がある。日訳題名から遠い。そういう題名を見れば『銀鈕碑』が特別に突飛だというわけではない。当時の読者は誰も気にしなかっただろう。

雑誌『小説林』の新書紹介者は題名の由来を書いて関心の高さを表わした。注目される題名には以上のような事情があった。

8 補 足

呉禱漢訳『銀鈕碑』については阿英が『晚清文学叢鈔・俄羅斯文学訳文巻』の「叙例」で簡単に紹介したことは述べた。漢訳そのものは該叢鈔に収録されている。レールモントフ作品の漢訳が1907年に刊行されたということについては各種目録、文学史などには一般的に触れられる。しかし作品の内容に言及する文章は少ない*13。

連燕堂『二十世紀中国翻訳文学史 近代巻』（2009）*14第十一章に「第四節 呉禱の幾種名著翻訳」がある。『銀鈕碑』の冒頭を現代語訳である翟松年『当代

英雄』（1987）と比較対照するのは方法的に間違っている。ここは矢崎日訳を使用すべきだった。「呉氏の訳文は同様に精彩があり基本的に正確だ（呉氏の訳文同様精彩，并且基本準確）」（285頁）と書いても説得力がない。これについては崔琦の指摘がある*15。

たまたま国蕊論文（2016）*16を読んだ。論文題名に呉構も『銀鈕碑』も含まれない。気づかなかったのはそのためだろう。主題ではないからしかたがない。ただし『銀鈕碑』の内容に一部触れていて珍しいと感じる。その箇所を次に引用する。

最早訳介中国の“多余人”小説は萊蒙托夫的《当代英雄》，由近代著名訳者呉構経日文訳述，取名為《銀鈕碑》于1907年出版發行。只是，因為呉構的大量刪改、使訳作完全脱離了“多余人”主旨而成為一部徹頭徹尾的言情小説。這一方面反映了當時的翻譯風氣，同時也從側面表明呉構及當時文壇還不具有“多余人”小説的類型意識。43頁

中国に最も早く紹介された「余計者」小説はレールモントフの『当代英雄 [現代の英雄]』である。近代の著名な訳者呉構によって日本語を経て漢訳され題名を『銀鈕碑』として1907年に出版された。ただし呉構による大量の添削により翻訳を「余計者」の主旨から完全に離脱させ完膚なきまでの恋愛小説にしてしまった。ここには当時の翻訳風潮が反映されており、同時に呉構と当時の文壇にまだ「余計者」小説の類型意識がそなわっていなかったことを側面から明らかにしている。

「余計者」小説としてレールモントフ『当代英雄』を取り上げている。問題は下線部分だ。そこを見てほしい。「因為呉構的大量刪改（呉構による大量の添削）」という箇所である。これはどういうことだろうか。読者に誤解を与えかねない解説だ。

国蕊の説明によれば呉構がもとづいた日訳底本は『現代の英雄』全訳のように読める。その日訳全訳に対して呉構は大量に削除し書き換えた。それが『銀鈕碑』だとしか理解できないだろう。ここが奇妙なのだ。

国蕊は日本語を理解する。陳景韓（冷血）作品について日本語底本を明らかにして日本語で論じていることも知っている。

しかし呉禱がレールモントフ作品を大幅に添削しているという指摘には同意し兼ねる。

国蕊は重要ではないと考えてか説明をしていない。呉禱の漢訳が嗟哦の家主人の日本語訳にもとづいていると一言触れるべきだった。そうすれば誤解は生じなかつた可能性もある。

本稿で明らかにしたように呉禱の『銀鈕碑』はレールモントフ『現代の英雄』の全訳ではない。「ベーラ」部分を矢崎の日訳によって漢訳した。その部分訳をつかまえて「大量に添削している」というのは当たっていない。それとも「ベーラ」部分も「大量に添削している」というのだろうか。それは違う。矢崎日訳をほぼ直訳している。誤解部分があるにしても漢訳としては上質であることは断言することができる。

ゆえに国蕊が論文の結論部分に次のように書くのは間違いだと考える。

“多余人”小説于1907年首次被訳介進中国，最初經歷了主題改訳、主題弱化等坎坷的訳介路程。46頁

「余計者」小説は1907年に初めて中国に翻訳紹介されたが、最初は主題の改訳、主題の弱化などのでこぼこな翻訳紹介の過程を経たのである。

1907年だと特定しているから呉禱漢訳にほかならない。「主題改訳、主題弱化」とするのは書き過ぎだ。そうなった理由は前述阿英の記述が原因ではなからうか。阿英は呉禱漢訳が日本語にもとづいていたことを途中で忘れた。訳者が勝手に手を加えていたと述べた。阿英の誤解である。国蕊は部分漢訳であった事実を指摘すべきであった。

「ベーラ」部分だけであったとしてもレールモントフ作品の早期漢訳なのだ。それも上質な漢訳であるときり返す。清朝末期において呉禱のほか誰がレールモントフの該作品を漢訳したというのだろうか。

まとめる。

レルモンツフ作、嵯峨の家主人（矢崎）「当代の露西亜人」（『太陽』1904.4.1）が日本で発表された。その全訳が出たのはそれから16年後のことだ。露西亜ミハイルレルモンツフ作、高坂義之訳『現代の英雄／長篇小説』（越山堂1920.4.30。底本はドイツ語。国立国会図書館デジタルコレクション）である。

一方の俄国萊門忒甫原著、錢塘呉禱訳述『銀鈕碑』（上海・商務印書館 光緒三十三年（1907）年六月）は矢崎日訳を忠実に漢訳したものだ。それから13年後に全訳の刊行は俄国萊芒勒夢托夫著、楊晦訳『当代英雄』（上海・北新書局1930.5。底本は英語）が刊行された。

部分訳から全訳までに至るには日本（16年後）中国（13年後）ともにそれくらいの時間が必要だった。以上の中でロシア語原本を使用したのは矢崎日訳しかないのだ。注目すべきだろう。

それぞれに時代の要求がありそれに応じて供給がある。最初から全訳を求めるのは過大な要求だと思う。

清末翻訳界の状況を正しく認識するためには負の側面ではなく正の側面を取り上げるほうが生産的だ。はるか昔の五四時代にあった清末翻訳小説批判から脱却してこそ公平な評価につながる。

人名対照表

原文	英訳	矢崎	呉禱
Максим Максимыч	Maxim Maximich	マクシム、マクシムイチ	馬克新馬克新伊梯
Григорьем Александровичем Печориным	Gregory Alexandrovich Pechorin	グリゴウリ、アレクサンドルヴィチ、ペチヨウリン	格里古利亞歷山大維梯配邱林
Бэла	Bela	ベエラ（ベエラ）	白愛娜
Казбича	Kazbich	カズビイチ	喀斯皮梯
Азамат	Azamat	アザマアト（アザマト）	亜若馬忒

【注】

- 1) 孔夫子旧書網の写真によると俄国萊芒托夫著。
- 2) 阿英「翻訳史話」『小説四談』上海古籍出版社1981.12。末尾に1938年とある。関連して謝天振「中国翻訳文学史：実践与理論」『中国比較文学』1998年第2期 1998.5.15
- 3) 「翻訳史話」は阿英没（1977）後の1981年に公表された。文末に「1938年」と表示がある。執筆年かと思う。雑誌などに公表されたのかどうか詳細は不明。年からいえば1961年以前に含まれる。
- 4) 柳田泉「嵯峨の屋おむろ伝聞書」『明治文学全集』17「二葉亭四迷／嵯峨の屋おむろ集」筑摩書房1971.11.30。415頁。また『随筆 明治文学2 文学篇／人物篇』谷川恵一他校訂、平凡社2005.9.14。296頁
- 5) 清水茂編「年譜」『明治文学全集』17「二葉亭四迷／嵯峨の屋おむろ集」筑摩書房1971.11.30
- 6) 杉崎俊夫『嵯峨の屋おむろ研究』双文出版1985.2.28
- 7) 野々山三枝「二 著作年表」昭和女子大学近代文学研究室『近代文学研究叢書』第62巻（矢崎嵯峨の屋）昭和女子大学近代文化研究所1989.6.5 資料編
- 8) IVAN NESTOR-SCHNURMANN “RUSSIAN READER : LERMONTOF'S MODERN HERO” CAMBRIDGE: AT THE UNIVERSITY PRESS. 1899 英露対照
- 9) MIKHAIL IUREVICH LERMONTOV著, JOHN SWINNERTON PHILLIMORE 英訳“A HERO OF NOWADAYS”, LONDON : THOMAS NELSON AND SONS. LTD. [1920] open library 所蔵
- 10) 中村白葉訳『現代のヒーロー』金星堂1924。初出未見。岩波文庫1928.3.20
- 11) 北垣信行『現代の英雄』日本評論社1950.1.10世界古典文庫146
- 12) 中村融訳『現代の英雄』岩波文庫1981.4.16
- 13) 魯迅との関係でレールモントフ『現代の英雄』を説明する次の著作がある。北岡正子『魯迅文学の淵源を探る 「摩羅詩力説」材源考』汲古書院2015.6.30。309-318頁。ただし当然ながら呉禱漢訳に触れているわけではない。
- 14) 連燕堂『二十世紀中国翻訳文学史 近代卷』天津・百花文藝出版社2009.11
- 15) 崔琦「呉禱の翻訳活動与日本《太陽雑誌》」『清華大学学报（哲学社会科学版）』2013年増1期（第28卷）、2013。92頁
- 16) 国蕊「“多余人”類型小説的近代移入及魯迅の本土化重構」『魯迅研究月刊』2016年2期、2016.2.29

呉禱漢訳ズーダーマン『賣国奴』

——登張竹風訳『賣国奴』

『清末小説から』第147、148号（2022.10.1、2023.1.1）に掲載。荒井由美名を使用。本稿はふたつに分かれる。

前半は刊年問題だ。呉禱が底本にしたのは登張竹風訳『賣国奴』（1905）でこれが基準になる。漢訳は『繡像小説』連載と後の商務印書館「説部叢書」に収録された。しかしその刊行年月の記述が混乱して誤解が生じている。漢訳は竹風日記より先に公表された。あるいは単行本は雑誌連載より先に刊行された。いずれも常識ではありえない事柄だ。『繡像小説』の発行遅延があることと「説部叢書」本奥付に見える刊年の誤記を指摘して誤認を解く。

後半で呉禱漢訳を検討する。呉禱は基本的に底本どおりに漢訳している。しかし最後部分に大幅な加筆をした。登場人物たちの後日譚を付け加えたのだった。召使いで奴隷だった百合のために石碑を建てて観光地にした。それは『賣国奴』の世界を破壊する余計な創作だ。楊鳳鳴論文を追加した。なお文末の「追記」を参照のこと。

呉禱漢訳『賣国奴』の原作をたどっていくとズーダーマン『猫橋』になる。ヘルマン・ズーダーマン（HERMANN SUDERMANN、1857-1928）はドイツの劇作家、小説家。原作名は“DER KATZENSTEG”（1888又1890）だ。

日本ではドイツ語原作から登張竹風が日訳して『賣国奴』とした。清末の呉禱は竹風日記を底本にして漢訳題名も同じく『賣国奴』だ。この翻訳2種類をめぐっていくつかの未解決問題がある。

そもそも最初の漢訳には呉禱の名前がなかった。さらには底本にした日訳者竹風の名前も初期の段階で記述されていない。明示されるのには時間差がある。こ

れに初出掲載誌『繡像小説』の発行遅延がからんでくる。今でも言及されることはほとんどない事柄だ。おまけに単行本の後刷りには初版刊年の記述間違いが見られる。複雑な事情が重なっていることさえ意識にのぼりにくい。今にいたるまでいくつかの謎が放置されたままだ。

漢訳の検討をはじめる前に作品が発表された経緯を整理する。事実の認識に混乱があるからだ。それを解決してからののはなしになる。

1 呉禱漢訳『賣国奴』の公表経過

呉禱漢訳『賣国奴』は清朝末期から民国初期にかけて版を重ねて刊行された。その過程を述べる。

作品公開の大きな流れは次のとおり。最初は商務印書館が刊行する雑誌『繡像小説』が連載した。そのあと同じ版元の商務印書館が出版する「説部叢書」元版と初集に収録される。

初出雑誌から単行本になる。清末民初において普通に見ることのできる公表経過だ。雑誌掲載で終わる作品が多い。そういう状況にあって単行本で発行されたのは読者の好評を博したからだ。

それぞれについて解説する。

『繡像小説』連載

德国蘇徳蒙原著「賣国奴」16回は『繡像小説』第31-33、37-48期（刊年不記）に連載された。

雑誌初出では目次に「德国蘇徳蒙原著」とあるのみ。本文にも登張竹風と呉禱の名前は見えない。氏名不明の人物がドイツ語から漢訳したような印象を与えている。漢訳では底本にはない回目16回分を新しく付加した。

もうひとつ。掲載誌である『繡像小説』第31-48期には刊年の記載がもとから欠けている。それに気づいている研究者は多くない。

『繡像小説』は半月刊である。創刊は「癸卯（光緒二十九年）五月初一日（1903.5.27）」だと目次に記述した。当時の新聞広告などで出版記録を確認すればそれがほぼ事

繪像小説第三十一號目錄	南亭亭長著
文明小史	繡像
第三十五回	講撫院書生受氣
泰西歷史演義	遇貴人會黨行凶
第二十九回	湖上製船修軍人資格
海上布廠振國民精神	蘆園著
負曝閒談	繡像
第二十四回	擺架子空添一夜忙
鬧標勁浪擲萬金產	荒江釣叟著
月球殖民地小說	繡像
第十三回	拔寶刀夢破天因獄
揮彩筆安排島國圖	繡像
第十四回	
探蠻洞喜獲金鋼石	倚胡牀代抹薄荷冰
京話演述英報日記	承前
童子軍傳奇	合隊
第三回	時調唱歌
愛國歌	繡像
回頭看	美國威士原著
第八回	論名家讀廿紀新書
睡園友溯百年舊侶	日本青軒居士原譯
珊瑚美人	自由不死萬歲齊呼
第八回	相見還羞寸心如結
賣國奴	德國蘇德蒙原著
第一回	述戰事人民悲慘瀕
述戰事人民悲慘瀕	瀕



賣國奴

第一回 述戰事人民悲慘瀕 罵男爵情跡鎮離奇

話說西歷一千八百十四年間其時正是歐洲有名豪傑拿破崙皇帝威風掃地之際他放出驚天動地手段要奪取法蘭西的君位無奈各國羣起而攻不能如願不得已大家會議纒結了和平條約須知拿破崙生長在地中海當中一箇孤島名叫科士嘉是法國一箇默默無名的人民只因他體魄剛強性質英毅自從跳出孤島到了歐洲之後就如大鵬展翅鯉魚翻波攪亂得全歐中原湯揚鼎沸幾乎踏成平地玩弄各國如掌上丸球烽火連天噉聲震地及至大事不成功名不就鎗聲匿跡浪靜風平這纒歐洲還是歐洲百姓仍是百姓時局漸復了舊觀那些被傷痍被刺殺被屠戮的冤命殘魂流著鐵血漸得了溫和之氣咳一將功成萬骨枯古人的話真有這箇情景何況是功未成呢放開眼睛一看則見到處墓門高拱墓壘的枯草無邊那瑟瑟寒風荒荒斜日吹到遊人身上怎不叫人心腸冷成冰呢但則如今面子上看看已經不拉達海峽西半的海口起北邊到瑞威國的北境止早已喜躍歡呼聲震天地那些輕

中國商務印書館印行

実であることが理解できる。

創刊号から第12期までは目次に発行年月日が記された。しかしその記載どおりに出版されたわけではない。事実は早くも第3期あたりから刊行が遅延しはじめた。第12期の記載は「癸卯（1903）九月十五日」だが実際に発行されたのは翌年「甲辰（1904）正月末」になった。発行遅延が理由なのだろう、第13期より刊行月日を掲載しなくなる。

ところが刊年不記と発行遅延の事実は学界において広く認知されるにはいたっていない。

それに大きな負の影響力を及ぼしたのが清末文学研究の権威阿英だ。彼は『繡像小説』全72期は半月刊が維持されたと断言したのだった（1958）*1。

研究者の多くが阿英説を受け入れた。あくまでも半月刊が守られたと考えて（その事実はないにもかかわらず）最終の第72期は「丙午三月十五日（1906.4.8）」に発行されたと信じた。阿英が説明したとおり、奇しくも該誌主編李伯元の死去が「丙午」だ。伯元が死亡した旧暦「三月十四日」と雑誌の終刊（推定）「丙午三月十五日」が偶然に一致する。研究者は阿英説を疑わなかった。

それ以降、各種資料、目録、解説文などは刊年不記の実態を無意識に隠蔽した。阿英の記述を反復したのである。学界においては1980年代までこの誤った説明が定説となっていた。

それでもある目録は記号を使用して発行年月日がないことを明記する*2。

具体的には次のとおり。該誌の第12期は「1903年11月3日（癸卯九月十五日）」だが第13期は「1903年11月〔癸卯十月〕」（1105頁）と書き分けた。（ ）と〔 〕を弁別して精細な編集姿勢を示したのである。ただし目立たない措置だから利用者はそれに気づかない。表面上は厳密な処理ではあった。しかし示した年月はもともと根拠のない推測年月だ。間違っているから定説を打破することにはつながらない。いっそのこと記入せず空白にしておくほうがよかった。

その阿英説を正面から否定したのが張純（1985）*3だ。『繡像小説』の発行が遅延していた事実を提起した。新しい発見がある優れた論文だ。ただし学界は彼の発言を完全に無視した。その後もあいかわらず阿英説を流布し続けたのである。

発行年月日について正確に把握できないその結果はどうなったか。事実ではな

い刊年を信じ込んだから『賣国奴』にも影響が及んでいる。

基準となるのは竹風日訳『賣国奴』の刊年「明治37（1904）年9月15日（旧暦八月六日）」である。

ここではいくつかの問題点を指摘しておく。重複するのはご了承ください。

「賣国奴」第1回を掲載した『繡像小説』第31期は「甲辰七月初一日（1904.8.11）」とする。連載終了の第48期は「乙巳三月十五日（1905.4.19）」という。いずれも雑誌には記載のない偽りの年月日だ。

必然的に『繡像小説』の掲載（1904.8.11）と底本になった竹風日訳『賣国奴』刊行（1904.9.15）の時間関係が逆転する。日訳より前に漢訳が約1ヵ月も先行して公表されたという認識が出てくる。きわめて異様だ（誤解1）。前提が誤っていることが理解できていない。

さらに、その『繡像小説』連載（1904）よりももっと先行して呉禱漢訳単行本（1903）が出版されたという。通常は雑誌連載の後に単行本化されるという過程を経る。その前後が入れ替わっているからおかしい（誤解2）。

最後に「説部叢書」所収の『賣国奴』が問題だ。後刷り本奥付の記載（1903）は竹風日訳（1904）よりも前に刊行されたことを示す。漢訳単行本が日訳底本に先行する。誰しもが奇妙だと感じる（誤解3）。

以上の諸説を箇条書きにしてまとめる。作品の公表時期をめぐる誤解である。竹風日訳および呉禱漢訳の雑誌掲載と単行本、この3者の関係だ。

誤解1：『繡像小説』連載は底本となった竹風日訳刊行よりも以前だ。

誤解2：呉禱漢訳単行本は『繡像小説』連載よりも先に刊行された。

誤解3：呉禱漢訳単行本は竹風日訳に先んじて出版された。

以上の3点はいずれも出版時期に関連している。漢訳の公表が底本の日訳刊行よりも早いという信じられない認識になっている。

誤って考えられたのには理由がある。清末民初に出た各種刊行物の刊年記載が原因だ。疑問が提出されているにもかかわらずいまだに回答がなされていない。言い換えて訂正されていないというのが適切だろう。それについての詳細を次に

述べる。

漢訳公表の時間問題は些細なことだと思う人がいるかもしれない。たとえばある匿名中国人はネット上に「日本人写点東西大驚小怪的（日本人の書くものは、なんでもない事に大騒ぎする）」（2021.9.16）と書き込んだ。その「なんでもない事」に気づかず自国の文学史上で一大冤罪事件にしたことを理解する知識と能力が不足している。残念なことだった。

学術上の誤解は小さなことでも正されなければならないと筆者は考える。

竹風単行本と『繡像小説』の掲載——発行遅延説

問題のひとつは竹風日記の刊行と『繡像小説』に掲載された呉構漢訳の時間的關係だ。何気なく見ると漢訳の方が底本よりも先に公表されている（誤解1）。普通そういうことはない。

あらためて解説する。

前述のように『繡像小説』の刊年が記されなくなった事実がある。しかし以前はあくまでも推定の発行年月日を使用されるのが常識だった。それを根拠に考えると異常な状況が存在すると誤認する。

問題解決の手がかりは『繡像小説』の発行が遅れていたという事実だ。

「賣国奴」を掲載した該誌第31期が実際に刊行されたのは「乙巳（1905）二月」である。表：『繡像小説』掲載の「賣国奴」を掲げる。

年 月 日	繡像小説	繡像小説 実際	賣国奴	その 他
癸卯1903十月				× 呉構『賣国奴』説部叢書元版十月←誤記
				登張竹風「賣国奴」『明星』1904. 4. 1*4
甲辰1904七月初一日	第31期推定			
七月十五日	第32期推定			
八月初一日	第33期推定			登張竹風『賣国奴』1904. 9. 15（八月六日）
十月初一日	第37期推定			

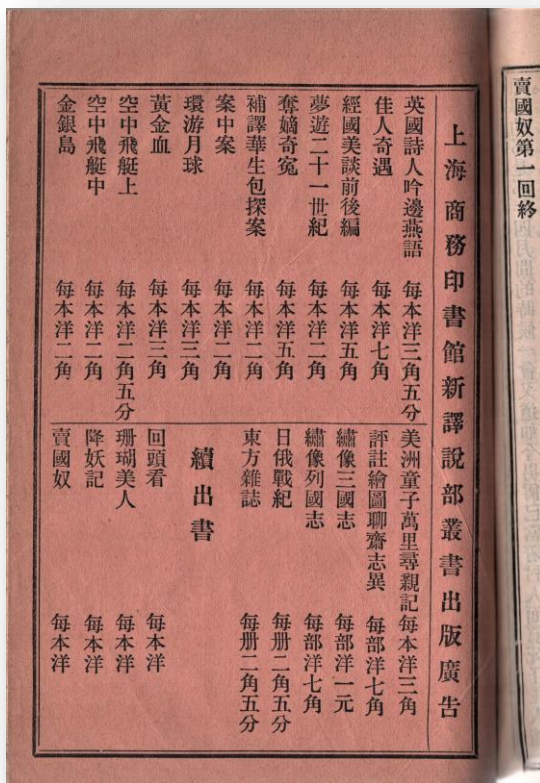
十月十五日	第38期推定				
十一月初一日	第39期推定				
十一月十五日	第40期推定				
十二月初一日	第41期推定				
十二月十五日	第42期推定				
乙巳1905正月初一日	第43期推定				
正月十五日	第44期推定				
二月初一日	第45期推定	第31期乙巳1905二月	第1回	出版広告の「続出書」に『賣国奴』あり	
二月十五日	第46期推定				
三月初一日	第47期推定	第32期	三月	第2回	
三月十五日	第48期推定				
四月		第33期	四月	第3回	
六月		第37期	六月	第4回	
〃		第38期	六月	第5回	
七月		第39期	七月	第6回	
〃		第40期	七月	第7回	
八月		第41期	八月	第8回	
〃		第42期	八月	第9回	
〃			〃	第10回	
九月		第43期	九月	第11回	
十月		第44期	十月	第12回	
十一月		第45期	十一月	第13回	(呉樺)『賣国奴』説部叢書元版十一月首版
〃		第46期	十一月	第14回	
十二月		第47期	十二月	第15回	
〃		第48期	十二月	第16回	

従来、理由なく考えられてきた「甲辰（1904）七月初一日」よりも約半年の発行遅延が生じている。複数新聞の刊行広告などを資料にして推断しているから事実をほぼ反映しているだろう。ついでに言えば、陳大康も同じ手法を使い推定年

月を提示する。

この時間差約六ヵ月を見れば呉構が竹風日記にもとづいて漢訳する時間はあったことになる。日記があつて呉構が漢訳した。当たり前の経緯だ。

なお『繡像小説』の該期には「上海商務印書館新訳説部叢書出版広告」が掲載された。その「続出書」に『賣国奴』が連なっている事実注目いただきたい。雑誌連載開始時に単行本として刊行される予定がすでに決まっていたということだ。それは同時に「賣国奴」が『繡像小説』に掲載された時点で単行本はまだ刊行されていない証拠のひとつとなる。



『繡像小説』第31期広告

雑誌連載を経て単行本になるのが基本だ。ただし『賣国奴』のばあいは『繡像小説』の連載が完了する少し前に単行本が出版されたという違いはある。つけ加えれば『繡像小説』の組版をそのまま「説部叢書」に使用した⁴⁵。組版がすでに存在する。単行本化されるのに時間がかからなかったのも理解できる。

商務版「説部叢書」の『賣国奴』 1——元版系

商務印書館の「説部叢書」は刊行時期により先の①元版系と後刷りの②初集本系がある。

「説部叢書」収録『賣国奴』の問題は刊年記述に一部不具合、すなわち誤記があることだ。

順番に記述する。

①元版「説部叢書」の第二集第六編（初集と区別するために集編番号は漢数字を使用）

元版系は筆者の知る限り初版、再版、三版の3種が出版された。

(a) 「首版」がある。初版と同じ意味だ。表紙はタンポポ文様、德国蘇徳蒙原著と記される。角書「軍事小説」はない。山陰金為鶴笙父「賣国奴題詞」、本文の角書は「説部叢書」。奥付の編訳者は中国商務印書館編訳所となっている。刊年は光緒三十一年（1905）十一月首版（上海図書館所蔵。表紙は孔夫子旧書網より）。

初版には角書と呉構の名前が見えない。また登張竹風についても表示はないことに注目する。漢訳単行本では初版本の刊年が基準になる。

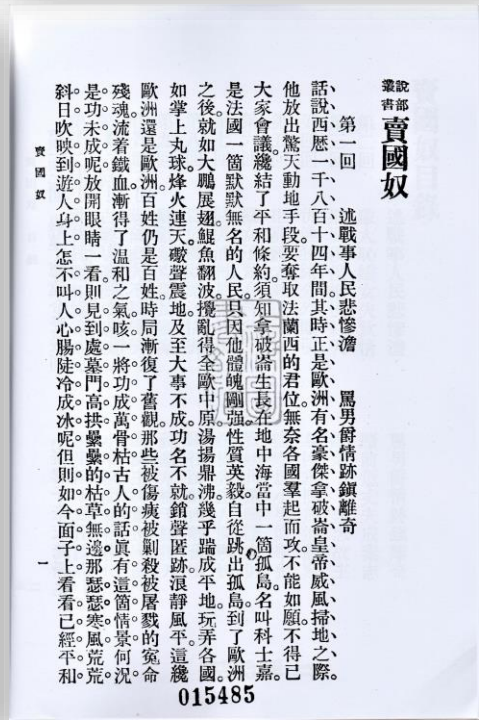
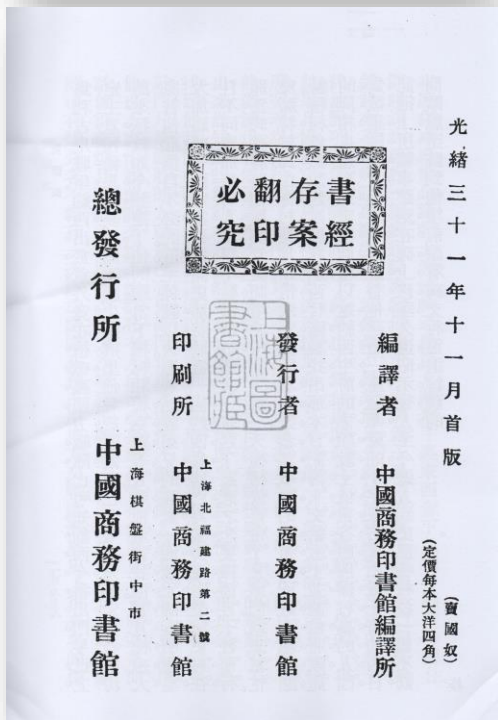
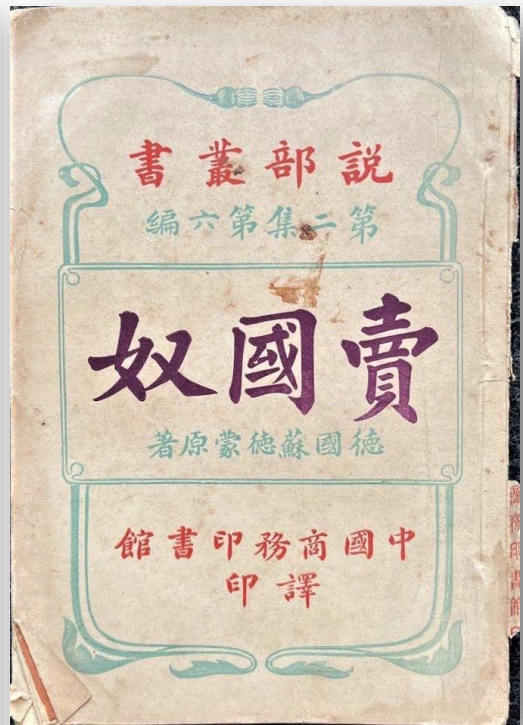
(b) 再版がある。中村忠行が論文で紹介した*6。

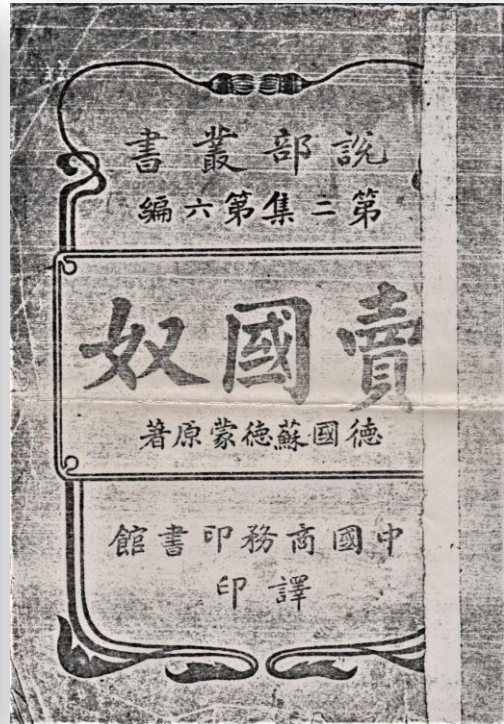
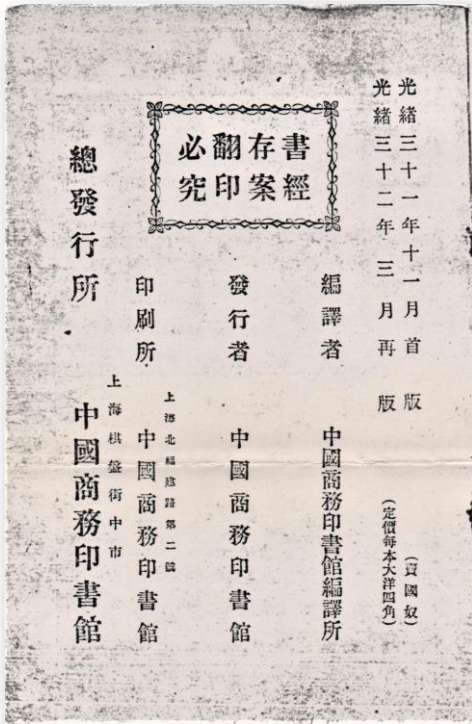
細部は初版と同じ。角書なし。奥付は「編訳者：中国商務印書館編訳所、総発行所：上海・中国商務印書館、光緒三十一年（1905）十一月首版／光緒三十二年（1906）三月再版」だ。

「首版」についての発行年月記載を再版でもくり返している。ここは重要だから下線をほどこした（下線筆者。以下同じ）。

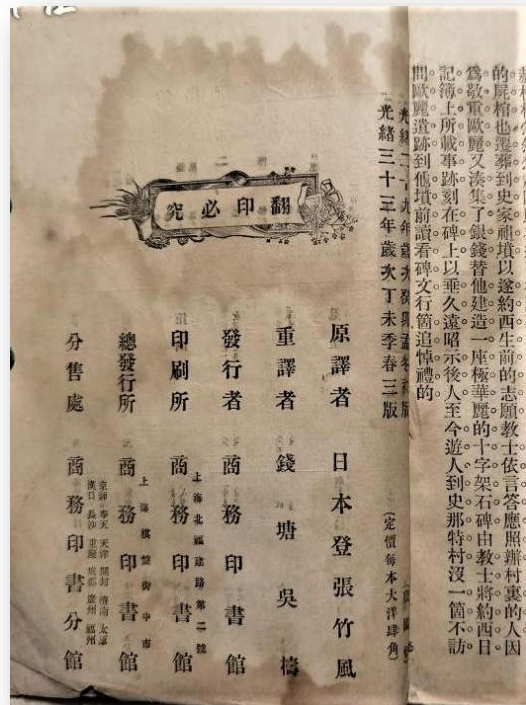
「説部叢書」が訳者を「商務印書館編訳所」とするのは意味があると中村忠行は書いた。買い取り原稿、あるいは商務印書館編訳所の所員であることを示しているという。そうかもしれない。

ただし『繡像小説』掲載の別の漢訳では呉構の名前を出している。また「説部叢書」でも同様だ。ゆえに『賣国奴』の「説部叢書」元版（aとb）においてのみ呉構ではなく商務印書館編訳所とするのは不思議に思う。次の元版系三版（c）では一転して呉構名を明記するからなおのことだ。表記が一貫していない。理由は不明。





再版



三版奥付 孔夫子旧書網は表紙なし

(c) 三版がある。付建舟が写真を掲載する(461頁)*7。

その表紙写真を見ると初版、再版と同様にタンポポ文様だ。また角書がないことも変わらない。

ただし以前とは大きく様変わりした箇所がある。表紙の德国蘇徳蒙原著が消滅している。付建舟も説明して「未署原著者」とする。さらに奥付を「原訳者：日本登張竹風、重訳者：銭塘呉構」と変更した。以前にはなかった竹風の名前を出したのが新しい。また中国商務印書館編訳所のかわりに、ここではじめて呉構が登場する。総発行所も「中国」をつけない商務印書館である。

奇怪なのは奥付に刊年を示して「光緒二十九年(1903) 歳次癸卯孟冬初版／光緒三十三年(1907) 歳次丁未季春三版」と記述した前半部分だ。

すでに首版(初版)で「光緒三十一年(1905)十一月」を確認している。再版も同じだ。それにもかかわらず三版においてなぜだか初版刊年を下線部で示したように「光緒二十九年(1903) 歳次癸卯孟冬初版」と変更した。一致しない。光緒三十一年であるところを二十九年とし、旧暦十一月を十月(孟冬)へと書き換えたのだ。これでは刊年が実際よりも二年も早まる。初版が実在するのだからこの三版の年月は誤りとせざるをえない。

三版のこの表示が誤解の2と3を発生させる原因のひとつである。漢訳単行本発行が1903年ということになる。そうすると『繡像小説』連載(実際は1905年)および底本の竹風日訳(1904年)よりも先行する。これには誰も驚くはずだ。

陳大康のばあい

大型清末小説年表がある。陳大康『中国近代小説編年史』全6冊(2014)*8だ。実物の雑誌、単行本にもとづき編集したという。刊年について月日まで記載して詳細だ。出版広告を収録して史料的価値が高い。規模の大きさからいっても空前と断言していい。

その年表から呉構漢訳『賣国奴』の関係部分を抜き出し下に示す(カッコ内を補足した)。

[編年②662] (光緒二十九年^{??}(1903)十月) 標 “軍事小説^{??}”、16回、原訳

者：日本登張竹風、重訳者：錢塘^{??}呉禱、上海^{??}商務印書館、《説部叢書》
初集^{??}第十六編と誤る [大康18-828]未収録

[編年②820] (『繡像小説』第31期、光緒三十一年(1905)二月)開始連載、共
16回、署“德国蘇德蒙原著”、商務印書館翌年^{??}(1906)出版此単行本時署
“原訳者：日本登張竹風；重訳者：錢塘^{??}呉禱”

[編年③920] (首版、光緒三十一年(1905)十一月)未収録 [大康18-848]未収録

[編年③976] (光緒三十二年(1906)三月)再版、説部叢書不記 [大康18-854]
同左。三月但日期不詳、説部叢書不記

[編年③1227] (光緒三十三年(1907)三月)三版、説部叢書不記 [大康18-873]
同左。三月但日期不詳、説部叢書不記

上の年表を解説すれば次のようになる。

呉禱漢訳『賣国奴』は1903年に初版が出た。『繡像小説』連載後に再版が
1906年に、三版が1907年に刊行された。

一見するとどこにも不審な個所はない。しかし「説部叢書」の刊行経過を知る
人ならば瞬時に見破るだろう。首版(初版)の位置([編年②662])が正しくない。
それぞれについて確認する。

[編年②662]で初版の出版年月を「光緒二十九年^{??}(1903)十月」にした。だ
がそれが実在するとは寡聞にして知らない。あるというのならば後刷りではない
「光緒二十九年十月」初版本そのものを提示すべきだ。

陳大康がそう誤認した原因を推量すれば、初版を把握しなかったからだ。三版
の間違った奥付表記を信じた。そうとしか考えられない。付随して再版の把握も
問題になる。

また初版には角書「軍事小説」はない。明記するのは後刷りの初集本からだ。
さらに登張竹風と呉禱の名前は掲げられていないのが事実である。ないものを掲
げた、というよりも気づかなかつたのだろう。初版に実在しないものを記述する
のも三版の奥付と初集本にもとづいたとわかる。

同じく初版にはある「德国蘇德蒙原著」を上記入していない。これも三版に
よっている証拠になる。

「説部叢書初集⁷⁷第十六編」で「ママ」とした箇所は基本的知識に問題がある。清末の「説部叢書」は元版第二集第六編であって後刷りの初集第16編とは区別する必要がある。それを混同しているという意味。誤った「説部叢書」の表記を陳大康が後の自著で（説明せずに）削除したことも付け加える。

【編年②820】の『繡像小説』第31期刊行を推定して「光緒三十一年（1905）二月」とするのは正しい。しかし初版を1903年刊にしたから雑誌連載と逆転する。「翌年⁷⁷（1906）出版此単行本」はどの版を指すのか不明確だ。初版を把握していないから間違った記述にならざるをえない。

【編年③920】の「未収録」はあるべき「光緒三十一年十一月首版」を取り落としたことを示す。ここから陳大康が初版を見ていないことがわかる。入手しているのであれば記述しない理由を明らかにする必要がある。

【編年③976】の再版表示を見ると当然のように疑問が生じる。陳大康はそこで「再版（光緒三十二年（1906）三月）」を提出した。ここは正しい。ゆえに再版奥付にある「光緒三十一年十一月首版／光緒三十二年三月再版」を見ているはずだ。しかしこの前半下線部に記してある「光緒三十一年十一月首版」は抹殺した。なぜなのか疑義が残る。三版の誤った記録を全面的に信用して再版の正しい方は考慮しなかった。不適切である。結局のところ『賣国奴』初版を見ていないらしいから判断の根拠が不明になったとくり返す。

「説部叢書不記」と注記したのは文字どおりの意味。初版を「初集⁷⁷第十六編」と記述した。再版、三版も同様だからその表記は不必要だと判断したと思われる。もともと誤解しているからそれがなくてもかまわない。

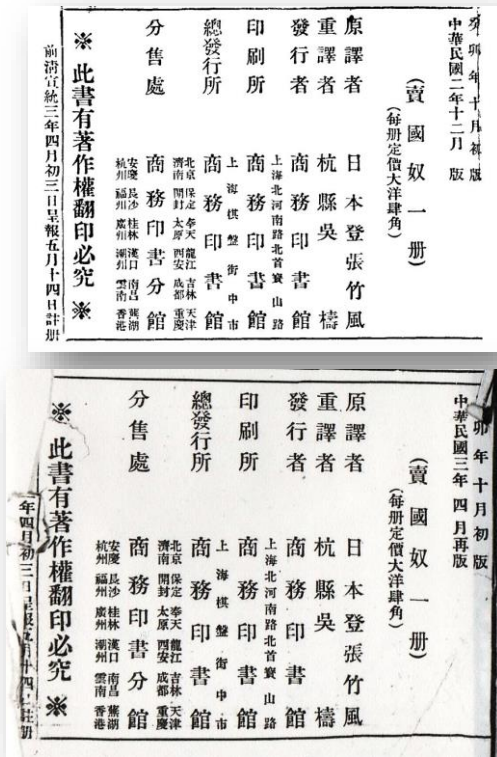
【編年③1227】三版は奥付後半の「光緒三十三年（1907）三月」のみを提出した。三版にある正しくない前半の初版刊年を信じて【編年②662】に配置した。実在しない1903年初版をあたかも見ているように書いたのはよくない。

陳大康は元版系三版の誤記を信用した。理由は不明だ。ゆえに再版の正しい奥付はどうして無視したのかという質問にもどる。基準を持たないから迷走したとしかいいようがない。

以上を見てわかることがある。『賣国奴』元版系初版が試金石となり後刷りの記述間違いをあぶり出すという事実だ。

商務印書館「説部叢書」の後刷り初集本が初版について異なる刊年を記すことがある*9。その記述を信用するのは危険だと以前から言っている。初版はやはり初版を見なければ確定できないと知るべきだ。

元版系「説部叢書」は原著者、日訳者、漢訳者の表記を出し入れしながら、光緒三十一（1905）年から三十三（1907）年まで毎年重版を行なっている。読者から歓迎された証拠である。



商務版「説部叢書」の『賣国奴』2——初集本

次が後刷りの初集本だ。中華民国になって刊行された。「説部叢書」元版系三版の誤った記述はこの初集本に引き継がれた。ゆえに誤解はより強固になった。

②初集本「説部叢書」の初集第16編（元版と区別するために編番号はアラビア数字を使用）

「説部叢書」元版全十集一百編は名称を変更して初集全100編になった。表紙も元版のタンポポ文様から初集本はリボン文様が変わる。以下、2集100編、第

3集100編（統一表紙ではなくなった）、第4集22編となって終了した。

初集本の『賣国奴』は原作者の「德国蘇徳蒙」は表示しない。「原訳者：日本登張竹風、重訳者：杭県呉構」とある。

こちらが元版系三版と違うところは角書に「軍事小説」をつけたことだ。また以前の「錢塘呉構」は「杭県呉構」になる。錢塘から杭県に改称されたことをふまえる。

筆者のしている初集本2種の刊年を示す。

癸卯年（1903）十月初版／中華民國二年（1913）十二月版

癸卯年（1903）十月初版／中華民國三年（1914）四月再版（実藤文庫）

ここでも初版の刊年を「癸卯年（1903）十月」と誤記している。元版系三版の誤りを引き継いだ。ゆえに誤解3が発生する。誤記によって発生する誤解だから整合性がないのも当然である（刊行一覧を参照）。

刊行一覧 **黄色**は誤記を示す

	角書	原作者	日訳者	漢訳者	刊年1	刊年2
	軍事小説	蘇徳蒙	登張竹風			
繡像小説	×	○	×	×	×	
元版第二集第六編						
初版	×	○	×	中国商務印書館編訳所	光緒三十一年十一月首版	
再版	×	○	×	中国商務印書館編訳所	光緒三十一年十一月首版	光緒三十二年三月再版
三版	×	×	○	錢塘呉構	光緒二十九年十月初版	光緒三十三年三月三版
初集第16編						
版	○	×	○	杭県呉構	癸卯（1903）十月初版	民国二年十二月版
再版	○	×	○	杭県呉構	癸卯（1903）十月初版	民国三年四月再版

中村忠行ほかのばあい

中村忠行は元版と初集本の複数版本を見ている。それらを総合して漢訳と日本語底本の時間関係を説明した。いくつか引用する。

どう見ても華訳の方が竹風訳より早く出版されているのだ。3頁*10

説部叢書の後刷である初集本は、奥附に「光緒癸卯（29）初版／民国三年四月再版」……これは、同書館の原簿に基き書改めたものであろう。而して、その訳出が光緒二十九年にあったということは、上記説部叢書本の上梓以前にも、別行の一本が出版されていたことを示す。3-4頁

そうしてその初印は、初集本の奥附にある様に、光緒二十九年であったに違いない。4頁

かうした出版物の中には、例へば上記『賣国奴』の如く、原典たる登張竹風訳より華訳の方が先に出版されるといふ、常識では一寸考へられない様な珍本も存在するのである。28頁*11

中村は元版系初版を見ていなかった。そのために初集本にある「癸卯年（1903）十月初版」刊行に惑わされたと思われる。

1903年に商務印書館は日本の金港堂と合弁会社になった。そういう特別な背景がある。呉禱漢訳『賣国奴』の刊行が竹風日訳よりも先行した（ように見える）理由を中村は両社合弁の事実からめて考えた。合弁問題に詳しく中村は金港堂が竹風日訳を事前に商務印書館に渡したと示唆したのだ。しかし刊年間違いだからその説明は成立しない。

もうひとつは別人の説明だ。

初集本の奥付記載にもとづき初版が「癸卯（1903）十月」だと信じると『繡像小説』掲載との関係も奇怪なことになる。

前述のとおり「賣国奴」を掲載した『繡像小説』第31期の刊年は「甲辰（1904）七月初一日」だと思い込まれていた。

これに存在しない初版「癸卯（1903）十月」を重ねる人もいる。誤解2を引き起こす理由である。漢訳単行本が1903年刊でそれ以後の1904年に『繡像小説』掲載となった。それをそのまま見て『賣国奴』は『繡像小説』連載前に単行本が

出ており当時の刊行物として珍しいと述べた*12。『賣国奴』についていえばその説明も成り立たない。

まとめる。『繡像小説』は発行が遅延していた。また単行本の刊年を「癸卯年（1903）十月初版」と記載するのは正しくない。そこを把握すればすべての謎は解ける。

2 中村忠行が登張竹風を指摘する

ゾーダーマン『猫橋』が竹風日記『賣国奴』になり呉禱漢訳『賣国奴』に結びつく。今では周知の事実だ。しかし最初から判明していたわけではない。さかのぼっていけば単純なことではないことがわかる。だいいち呉禱漢訳『賣国奴』に言及する文献が少ない。

阿英編『晚清小説史』（1937）*13には「德国有 呉禱訳 蘇德曼 賣国奴（繡像小説）」（281頁／185頁）とあるのみ。原作者表記は「蘇德蒙」だ。それを阿英は「蘇德曼」と書いた。実物のままではなく現代漢語の表記を採用した。『繡像小説』掲載だから呉禱と竹風はもとから記載されない。それを表示したのは後刷りから呉禱のみを採取したからだ。竹風は無視した。ここには刊年もなければ後の「説部叢書」もない。概説だから詳細を求めてもむだなことだ。

中華人民共和国になってから刊行された阿英目録（1954／1957）の記載を見る。

[阿英160] 賣国奴 德 蘇德曼著。 呉禱訳。 光緒三十一年（一九〇五） 商務印書館刊。

阿英目録は翻訳作品を収録したのが画期的だった。ただし原作についての注釈はつけない。それが彼の編集方針だ。

こちらも「蘇德曼」と書く。後の「説部叢書」元版系初版の刊年を提示したのが以前とは異なる。

刊年を「三十一年（一九〇五）」とするから初版を見ていることがわかる。ここでも初版に存在しない呉禱訳が出てくる。後刷りの表示を混入させた。ならば

登張竹風の名前も出すべきだがこちらでも黙殺した。

阿英目録の特徴のひとつは雑誌掲載の作品も収録したことだ。残念ながら『賣国奴』については『繡像小説』が初出であることは示していない。前著『晚清小説史』と比較していくつかの不備があるということだ。

呉構漢訳『賣国奴』の底本が竹風日訳であることを指摘した研究者は中村忠行である。関連する箇所をいくつか引用する。

[中村50-82] 登張竹風訳の『賣国奴』（原作は、ゾーデルマンの『猫橋』KATZEN STEG⁷⁷)が呉構によつて重訳せられ(割注:光緒廿九年商務印書館発行の『説部叢書』の一)たり^{*14}

[中村51-88] 中には呉構訳の『賣国奴』（割注:登張竹風訳『賣国奴』すなはちゾーデルマンの『猫橋』)の様に、かなりの成功を収めてゐるものもある^{*15}。

[中村53-40] ゾーデルマン『猫橋』。登張竹風訳による。同(光緒)廿九年^{*16}。

[中村64-81] 『賣国奴』（ゾーデルマン原作・登張竹風訳『賣国奴』一九〇五年^{*17}。

中村は『繡像小説』、「説部叢書」元版、初集本の記述を総合して説明した。

『繡像小説』の写真を所有していたという。竹内好の所蔵本を作品別に写真撮影したと聞いたことがある。当時、『繡像小説』全72冊の原本を所有していたのは澤田瑞穂だがそれとは別だ。

刊年に「光緒廿九年(1903)」と「一九〇五年」を混在させている。決め手になる元版系初版を把握していなかったとわかる。

德国(ドイツ)蘇徳蒙(ゾーダーマン)原著、原訳者:日本登張竹風、重訳者:銭塘呉構などから竹風日訳『賣国奴』が導き出されたと思う。竹風訳の書名『賣国奴』を呉構がそのまま使用したからわかりやすい。

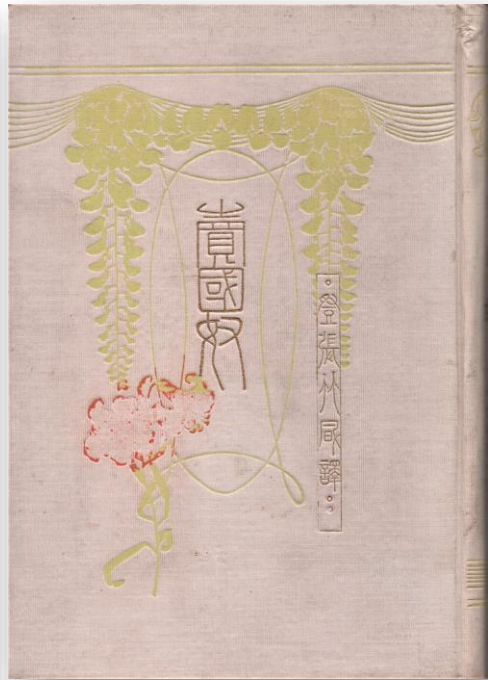
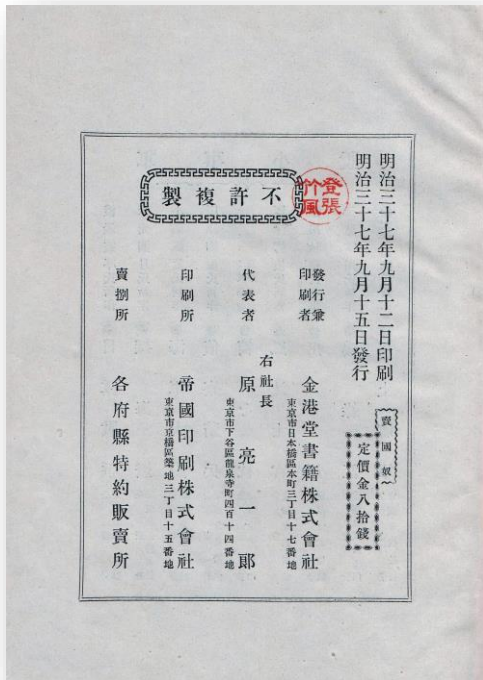
それにしても中村の指摘は1950年だ。時期的に見てきわめて早い言及というべきだ。それ以後の論文は中村の指摘を踏襲することが普通になった。

3 竹風訳『賣国奴』

原著者不記、登張竹風訳『賣国奴』（大序+15+大団円 金港堂書籍株式会社1904.9.15）である。登張竹風（本名信一郎、1873-1955）はドイツ文学者、評論家*18。

原著者、原作の記載はない。ただし原著者については後の『明治文学書目』（1937）*19に記載がある。

（軍事小説）賣国奴 訳ズウデルマン著 三十七年九月 金港堂 菊版三九〇頁 219頁



いうまでもなくヘルマン・ズーダーマン（HERMANN SUDERMANN）著“DER KATZENSTEG”だ。

竹風訳『賣国奴』が抄訳であることは言われている。またある人は「登張訳は翻案の要素が強く」*20と述べる。しかし翻案は言い過ぎだ。本稿文末に「賣国奴固有名詞対照表」を掲げる。ドイツ語原文*21に出てくる固有名詞をはじめか

ら順に拾い、それに小宮豊隆日記（以下、原作というのは豊隆訳を指す）と竹風日記および呉構漢訳を対照させた*22。

竹風が省略したものは空欄になる。省略以外を見れば記述された固有名詞が順序どおりに対応していることがわかる。すなわち井伏鱒二が行なったような話の前後を入れ替えるとか加筆などの改変は基本的になされていない。

竹風日記が原文を省略した部分はある。たとえば「その八」206頁に続くべき原作の第12章（正保と百合のふたりが降誕祭を祝う。豊隆訳273-299頁）を削除する。しかしそれを除けば原作をほぼ忠実になぞっているのが事実だ。従来からいわれる抄訳と称するのが妥当だろう。

その竹風日記にそのまま対応するのが呉構漢訳だ。竹風が日記した個所は呉構もたいがい漢訳している。「たいがい」というのは呉構の漢訳方法としてややもすれば文章を修飾する方向に流れがちという傾向があるからだ。また加筆、書き換えが強い箇所もある。おいおい見ていく。

竹風日記の題名は『賣国奴』だ。筆者からすればどこか違和感がある。

ドイツ語原題は『猫橋』という。敵のフランス兵を「猫橋」に案内して間道を抜け、味方であるはずのドイツ兵を背後から攻撃させた。その土地の人々からすれば賣国奴だ。それはほかならぬ主要人物ボレスラフ（偽名バウムガルト中尉）の父親を指す。だからベアトリス・マーシャル（BEATRICE MARSHALL）は英訳題名を『レジーナ、または父の罪 REGINA OR THE SINS OF THE FATHERS』とした。ここの父親は複数形だ。ボレスラフの父だけとは限らない。主要登場人物にはそれぞれ父親がいる。英訳を重訳した井伏鱒二訳は『父の罪』（1924）とした。さかのぼれば小宮豊隆はドイツ語から翻訳して『罪』（1914）だ。小宮はその「序」で「私は初め是を『親の罪』とする積りでゐた」と述べる。『父の罪』と同じだ。後の生田春月は『猫橋』（1939）で原題のまま。いろいろある。

余計なことだが題名について一言。竹風訳に出てくる語句にもとづき別案として提出すれば『賣国奴の子』（384頁）でもよかったのではないか。だいいち『賣国奴』という書名では政治小説、歴史小説のような印象を受ける。竹風日記には佐々醒雪「序」がありそこで「軍事小説」と書いている。原作がナポレオン戦争を背景にしているから誤りではない。商務印書館「説部叢書」初集本が角書

を「軍事小説」とするのはそれによるのだろう。ただし作品の実質は恋愛小説の要素が強いから題名との落差が大きい。そこを指して違和感があるという。

4 呉構漢訳『賣国奴』

漢語には「賣国賊」「漢奸」という単語がある。しかし竹風『賣国奴』について呉構は題名を変更せずにそのままを使用した。

呉構漢訳の題名は作品によって異なる。一部を示す。

黒岩涙香の『有罪無罪』を『寒桃記』に、同じく涙香『梅花郎』を「博浪椎」あるいは『棠花怨』とか、または柳川春葉「虚無党の女」を『薄命花』へ、さらには嵯峨の家主人「当代の露西亜人」を『銀鈕碑』などと大きく変換させた。一方で元の作品に近い題名にするばあいもある。たとえば英人ブラック『車中の毒針』は平仮名を抜いた『車中毒針』とする。『賣国奴』は底本のままだ。各作品により柔軟に命名している。統一方針があるわけではなさそうだ。

呉構による独特の固有名詞漢訳法について説明する。時間的に見ればこの『賣国奴』あるいは『車中毒針』が早い使用例かもしれない。

主要登場人物を見るとわかりやすい（カタカナ表示は小宮豊隆訳を使用しドイツ語も示す）。

男性主人公はポーランド系の名前を持つドイツ人ボレスラフ、フオン、シユランデン (Boleslav von Schranden) だ。竹風は日本風に砂田保正 (すなだ やすまさ) を当てた。シユランデンという音から連想し砂田になったと思う。呉構が拠っているのは竹風日記のみ。だから日本語読みの「すなだ」を漢音で写して「史拿[那]特」に、「やすまさ」は「やす」から「約西」にした。日本語音を漢訳したということだ。つまり竹風の砂田保正の漢字表記そのままは使わなかった。シユランデンの父親は賣国奴だ。ゆえに彼は外地にあつて偽名を使用した。その偽名バウムガルト (Baumgart) 中尉は竹風によって山園 (やまぞの) 中尉になる。呉構はそれを音訳して「雅曼」だ。これも前半の「やま」にあてたもの。

女性主人公はレギーネ、ハツケルベルク (Regine Hackelberg。マーシャル英訳では Regina) という。竹風は百合 (ゆり) にした。呉構はそれを漢音訳して欧麗で

ある。音訳であって中国化したわけではない。

同様の漢訳方法を採用した漢訳作品にはのちの『寒牡丹』（1906）、『寒桃記』（1906）、『棠花怨』（1908）そのほかがあることを指摘しておく。

竹風日記の大序

竹風はドイツ語原文をどのように抄訳したのか。まずそれから見ていく。竹風日記を理解するために冒頭部分を引く。ここだけ参考として小宮豊隆と生田春月の日記も掲げる（ルビ省略。くり返し記号の一部は文字になおした。以下同じ）。

【原文】 Der Friede war geschlossen. Die Welt, mit welcher der Korse ein halbes Menschenalter hindurch Fangball zu spielen gewagt, hatte sich wiedergefunden.

和平が成立した。コルシカ人が長年にわたって手玉に取ってきた世界は再び姿を現わしたのだ。

【豊隆】 和約が結ばれた。世界は、かのコルシカ人から十余年の間ぶつ通しに大けない玩具の代にされてゐた世界は、再び自分自身を見出した。1頁

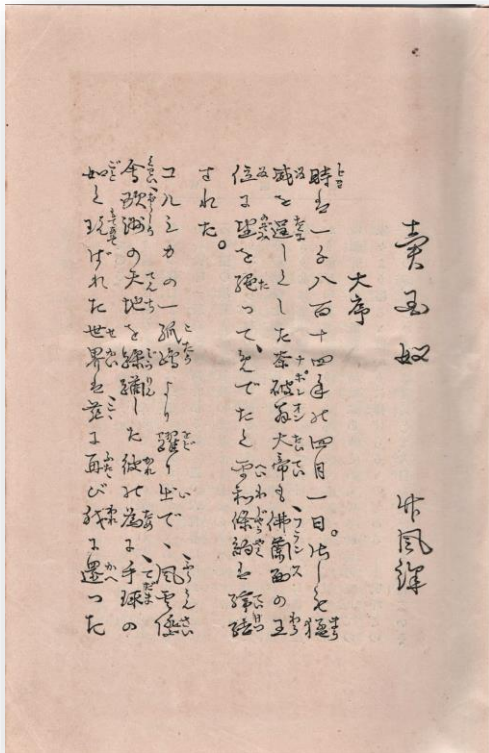
【春月】 平和条約が結ばれた。（訳者註。一八一四年の和約）多年、かのコルシカ人（ナポレオンのこと）におもちやにされてゐた世界は、やうやく自分にかえる事が出来た。9頁

原文のコルシカ人は春月が注しているようにナポレオンをさす。全歐洲がナポレオンによってかき回された状況を説明した。以上が原文だ。

竹風日記を見る。「賣国奴 大序」が冒頭1頁にある。竹風の手書きをそのまま印刷していて珍しい。

【竹風】 時は一千八百十四年の四月一日。さしも猛威を逞しくした奈破翁大帝も、仏蘭西の王位に望を絶って、めでたく平和条約を締結された。／コルシカの一孤島より躍り出で、風雲際会、歐洲の天地を蹂躪した彼の為に、手球の如く玩ばれた世界は、茲に再び我に還った（注：以上手書き）のである。

1-2頁



ここを見る限り原文どおりとはいかない。年月を加筆して説明した。ただし拿破翁、平和条約、コルシカ、手球、我に還った、を共有して全体の意味は伝えている。つまりナポレオンによる歐洲の戦争と彼の願望失敗がもたらした平和条約締結、さらにナポレオンの出自を加筆しながら歐洲がもとに戻ったことを述べる。

竹風日記の冒頭原稿は変体仮名を使用して必ずしも読みやすいものではない。それを吳構はどう漢訳したか。

【吳構】話說西歷一千八百十四年間。其時正是歐洲有名豪傑拿破崙皇帝威風掃地之際。他放出驚天動地手段。要奪取法蘭西的君位。無奈各國群起而攻。不能如願。不得已大家會議。纔結了平和條約。須知拿破崙生長在地中海當中一箇孤島。名叫科士嘉。是法國一箇默默無名的人民。只因他體魄剛強。性質英毅。自從跳出孤島。到了歐洲之後。就如大鵬展翅。鯤魚翻波。攪亂得全歐

中原。湯揚鼎沸。幾乎踰成平地。玩弄各国。如掌上丸球。烽火連天。砲声震地。及至大事不成。功名不就。銷声匿跡。浪静風平。這纔歐洲還是歐洲。百姓仍是百姓。1頁

さて西暦1814年というのは正に歐洲有名の豪傑ナポレオン皇帝の威光がなくなる際であった。彼は驚天動地の手段を繰り出してフランス王位を奪取しようとした。いかんせん各国が一斉に立ち上がり攻撃したために彼の願いはかなわず、しかたなく會議により平和条約をようやく締結したのだった。知っておかなければならないのはナポレオンは地中海の一孤島コルシカに育ったフランスの無名の人だ。彼の身体と精神力、性格の剛毅さによってのみ孤島から飛び出して歐洲に来てから後は、大鵬が羽を広げて高く飛び、大魚が波を翻すように歐洲全域を攪乱し、煮えたぎるほどに大混乱させ、ほとんど平地になるほどに踏みつけた。あたかも掌中のボールのように各国をもてあそび、戦火はいたるところに及び砲声は大地を震わせたが、大事と功名は成就せず、鳴りを潜め静まりかえった。それでようやく歐洲は歐洲になり国民はもとの国民になったのだ。

呉禱は竹風日記をたどりながら少しずつ加筆していることが一目瞭然だ。ナポレオンについて不案内かもしれない清末の読者に知識を補足し供給した。修飾して「大鵬展翅。鯤魚翻波」、「湯揚鼎沸。踰成平地」、「烽火連天。砲声震地」、「大事不成。功名不就」、「銷声匿跡。浪静風平」のように4字句が自然に出てくるのも呉禱らしい。

続く文章も見ておく。

【原文】 Zerschunder, zerfetzt, aus tausend Wunden blutend, mit Schachtfeldern besät wie mit eiternden Schwären, halb Kirchhof und halb Trümmerstätte - so fand sie sich wieder.

砕け散り、ズタズタになり、千の傷から血を流し、化膿したただれのような穴に覆われ、半分は教会の墓地、半分は廢墟のような場所となっていたが——そうして自分を取り戻したのだ。

【豊隆】皮を剥かれ、ずたずたに引裂かれ、幾千の傷口から血が流れ、瘡蓋になりかけた吹出ものの様に方々に戦場が散ばつて、半ばは墓地半ばは廢墟——かく世界は再び自分自身を見出したのである。1頁

【春月】皮を剥がれ、引裂かれ、無数の傷口から血が流れ、化膿しかけた腫物みたやうに、彼處も此處も戦場だらけになつて、半ば墓地、半ば廢墟と云つた有様で——世界は我れにかへつたのである。1頁

「そして自分を取り戻したのだ」とここでも歐洲が自己回復したことを重ねて述べる。上で見るようにそれは後ろに置かれるが次に引用する竹風日訳は前にも置いて強調した。

【竹風】然り、世界は再び旧に復したのであるが、裂かれ、切られ、屠られたその傷口よりは、まだ生温かき血が流れつゝあるのではないか。嗚呼、一将功成り万骨枯る。我に還つた世界は、唯到るところ寺院の墳墓と、破壊無残の光景とを見るのみであつた。2頁

「嗚呼、一将功成り万骨枯る」はいうまでもなく竹風の加筆だ。呉禱がそれをそのまま使用していることを次に示す。

【呉禱】時局漸復了旧觀。那些被傷痍被剿殺被屠戮的冤命殘魂。流着鉄血。漸得了穩和之氣。咳。一将功成万骨枯。古人的話。真有這箇情景。何況是功未成呢。放開眼睛一看。則見到處墓門高拱。累累的枯草無辺。那瑟瑟寒風。荒荒斜日。吹映到遊人身上。怎不叫人心腸陡冷成冰呢。

政局はようやく元の姿にもどつた。傷つけられ、討伐され、虐殺された無実の命と魂は黒い血を流しながらようやく穏和な状態を得たのである。ああ、一将功成り万骨枯るという古人の言葉には本当にその情景が込められている。ましてや功が成っていないのだからなおさらのことだ。目を開けてちょっと見れば、いたるところ墳墓の入り口は高く突きあがり、積み重なつた枯草は果てしなく広がっている。吹き渡る寒風と物寂しく傾いた太陽が、人々の身

体に吹きつけ照らすのだから、どうして人の気持ちを急に冷やし凍えさせないであろうか。

上の部分も言葉を加えながら、それでもほぼ竹風日記にもとづいている。ただしそれ以後もそうというわけではない。

原作は凱旋した若者たちを志願獵騎兵、コザツク兵、いわゆる国民兵の3種類に分類する。竹風はそれを略して「義勇兵」と「国民兵」のふたつにした。義勇兵は意気揚々と帰還する。一方の国民兵については原作にある疲労困憊した様子は翻訳せず、わずかに「彼等の前には裂けた喇叭のやうな声が響きわたり」（4頁）と抑えて翻訳描写した。

呉禱は清末の読者には兵士の2分類すらも必要ではないと判断したようだ。本文中に訳者自身が出てきて次のように概括して説明する。

【呉禱】看官。你道德国當軍人的。何等英武威嚴。何等纏綿情趣。這等軍人。上了戰場。自然是心悅誠服。情願粉身碎骨。博得箇千古留芳了。須知這班軍人。是為了祖国。從前受過法国欺侮。含着莫大恥辱。結成不共戴天之仇。箇箇都想替祖国争光。對祖国效死。這纔起了同仇敵愾的心。殺得敵人大敗。幾乎亡種滅国。一國之中。養了百十萬偌好的軍人。怎不叫人愛煞羨煞呢。如今他們大家奏凱還鄉。3頁

読者のみなさんは、ドイツで軍人になった者がどのように雄々しくりりしいか、どのように優しく情緒があると思われるだろうか。これらの軍人は戦場にあつて当然に喜んで服従し、力の限り努力することを望み、そうして悠久の名声を残すことができるのだ。知らなければならないのは、これらの軍人は祖国のために、以前にフランスから侮蔑を受けたことがあるから極めて大きな恥辱を抱いて不倶戴天の敵となつて、一人ひとりが祖国のためにがんばろうと考え、祖国に対して命を捧げて尽力する。そうして同じ敵に共通の敵愾心を燃やすから、敵を殺して大敗させ、ほとんど国を滅ぼし民族を滅ぼすことになつた。国にそのように素晴らしい軍人を百万ほど擁しているのだから、どうして愛さず羨まないでいられようか。ただ今、彼らはみなで勝利

の凱歌をあげて帰郷するのだ。

ここはまったくの呉禱による加筆説明だ。ドイツ兵の勇猛果敢さを賞賛する方向に大きく傾いている。これは後の個所で日清戦争当時の清国兵について負の注釈を加える伏線となる（後述）。

呉禱は締めくくりに古詩から引用する。「酔臥沙場君莫笑、古来争[征]戦幾人回（酔って戦場に寝てしまっても君よ笑ってくれるな、古来いくさに出て行って幾人が生還したというのだろうか）」（王翰「涼州詞」）。西域に出兵した軍人の悲壮な心情をドイツ兵に重ねた。当然ながら竹風日記には存在しない語句だ。呉禱なりの工夫である。読者になじみの語句を使用することが外国小説についての理解を助けるという判断であろう。

竹風の冒頭「大序」は物語の歴史的背景をまとめて説明したものだ。戦争の痛手が出征者だけでなく一般人の心にも及ぼした荒廃を述べて物語の予兆とする。呉禱はそれをさらに圧縮して書き換えた。本文に早く入ることを選択したといってもいい。

以上がいわば導入部である。次から物語が始まる。

山園（バウムガルト）中尉と砂田（シュランデン）男爵

1814年8月の酷暑の中、ドイツ灰出村のある農家には戦場から帰還した若者たちが集まって酒とタバコをやっている。戦争の傷痕が彼らの身体に残っていた。

【竹風】戦の名残は弾痕刀傷にあはれを留めて、腕にはまだ繃帯を施して居るものも二三人。7頁

【呉禱】身上還留着争戦的記念旧跡。不是彈子穿過的洞。就是刀鋒斫過的傷。或則頭上。或則身上。或則手脚。傷處不一。都用帶子繃裹着。但若要找我們中国打仗的兵。都在後面背脊受傷的。却一箇也沒有。（割注：甲午之役中国与日本戰敗兵勇之傷皆在後腦後脊後膀後腿等處始知中国兵勇未戰即逃之故）

身体にはまだ戦争の記念痕が残っており弾丸が貫いた穴でなければ刀で切られた傷であった。頭上に、身体に、手足にと傷ついた個所は同じではなく

すべて繙帯が巻きつけてある。もし我らが中国の闘う兵士の中にさがせば、いずれも後ろの背中に傷を負っており（そうでない者は）ひとりもない。（割注：甲午之役（注：日清戦争）で中国は日本と戦い敗れた。兵卒の傷はすべて頭の後ろ、背中、肩の後ろ、腿の後ろなどの個所だ。それで中国の兵卒は関わらずにすぐさま逃走したのが理由だと知られたのだった）

竹風は兵士の弾痕刀傷あるいは腕の繙帯を述べただけだ。呉構はそこにこと細かく補筆した。そればかりか下線部のように竹風日訳にあるはずもない日清戦争時に見えた中国兵卒の負傷までつけ加えた。

ドイツと清朝では軍事制度そのものが異なる。しかも80年前の歐洲におけるナポレオン戦争とアジアの日清戦争（1894-95）を同一視するのは不適當だという意見もあるだろう。しかし呉構にしてみれば表面的な傷跡から見える兵卒の資質の差異に言及せざるをえなかった。これより前の個所で呉構は要約してドイツ兵を賞賛した。それと対をなしているのがここに見る中国兵の怯懦な有様を嘆く加筆である。

一座の中に陰鬱な容貌の青年がひとりいる。山岡（バウムガルト）中尉という。灰出（ハイデ）村の農夫たちと生死を誓う義兄弟となって戦争に参加した。仔細があるらしく自分の経歴については口を閉ざしたまま行方をくらませた。フランス軍の捕虜になったという噂もあった。傷を負いながら生還し久しぶりに再会できたというのに解職の辞令をもらうために先を急ぐという。

話題は近隣の砂田村に住んでいる砂田男爵（本稿では父親を指す）のことに移る。名前が村名になるほどの有力者だ。

【竹風】先づ一人が口を開く。／「俺は砂田村の人達が、あの大地主の殿様を如何したか、早く聞きたくてならない。」／山園中尉は、息を凝して余念もない。18頁

砂田（スナダ）村はシュランデン村を指す。彼についてはそのいわくつきの過

脊。或。則。手。脚。傷。處。不。一。都。用。布。帶。子。繙。裹。着。但。若。要。找。我。們。中。國。打。仗。的。兵。都。在。後。面。背。脊。受。傷。的。却。一。箇。也。沒。有。
甲午之役中國與日本戰敗兵勇未戰即逃之後故
脊後勝後腿等處始知中國兵勇未戰即逃之後故

去がこのあと明らかにされる。竹風のいう山園（ヤマゾノ）とはバウムガルトのこと（呉構漢訳を訳すときは竹風の表記をカタカナで使用する）。ここでは山園中尉はあくまでも砂田とは無関係という設定なのだ。ところが呉構はそこをなぜだか書き換えた。

【呉構】有一箇人說道。雅兄是史拿特村人。請問那大地主男爵現在怎樣了。雅曼閉眼凝思。並不言語。独自靜坐着。9頁

ひとりが話した。ヤマゾノさんはスナダ村の人ですよ。あの大地主の男爵は現在どうなっているんですか。ヤマゾノは目を閉じてじっと考え、決して話すことはせずひとり静かに座っている。

山園（実はボレスラフ砂田保正）はその出身地が砂田村であることを仲間には秘密にしている。それを「雅兄是史拿特村人（ヤマゾノさんはスナダ村の人ですよ）」と暴露しては物語の筋運びが不自然になる。砂田村とは無関係を装っている人間に男爵の様子を質問してどうするのか。ただ呉構の考えでは山園の出自について後で動転の告白があることの予告としたかったのかもしれない。しかしそれは無用なことだった。

村民は砂田男爵の屋敷に放火した。それには動機があった。村民のひとりが語る。

【竹風】御聞き及びでもござりませうが、村民挙つて、大叛逆人の男爵、仏探たる男爵、賣国奴たる男爵に愛想をつかした段ではござらぬ、不俱戴天の仇敵と狙つて、そもや七年このかた、赤兒までが唄ひまする歌といつば。

砂田の殿様、犬畜生よ、／天罰、地罰、人の罰、
毎日のやうに唄ひまする声は、天地も轟くばかり。神様も感納ましましてか願の半分は御聴き届けに相成つて、つい二三日前殿様は頓死で往生すると、怨は枯骨にまで及びましてな、村の衆の誓が恐ろしいではござらぬか。死骸をそのまま邸の中へ、蠅も集れ、鳥もつゝけ、葬はするな、というのださうで。死んだ跡まで犬畜生でござるてや、ハハハハ。21頁

【呉禱】 你們可知道村裏的人。都恨那大逆不道的男爵。法国奸細的男爵。私通外國的男爵。結成不共戴天的仇敵。要置之死地。況且七年已來。從老的起。到懷抱的小孩。都唱着曲子道。史拿特男爵狗畜生。天罰地罰人也罰。從早到晚。一片呀呀喳喳的聲音。連天地也被他們轟小了。誰知天神也不容他。兩三天前。他竟死了。咳。這怨氣真是及於枯骨哩。村人的呪詛。不可怕麼。屍首停在屋子裏。蒼蠅也哄着。老鴉也啄着。死了以後。那模樣還是箇狗畜生。哈哈哈哈哈。10-11頁

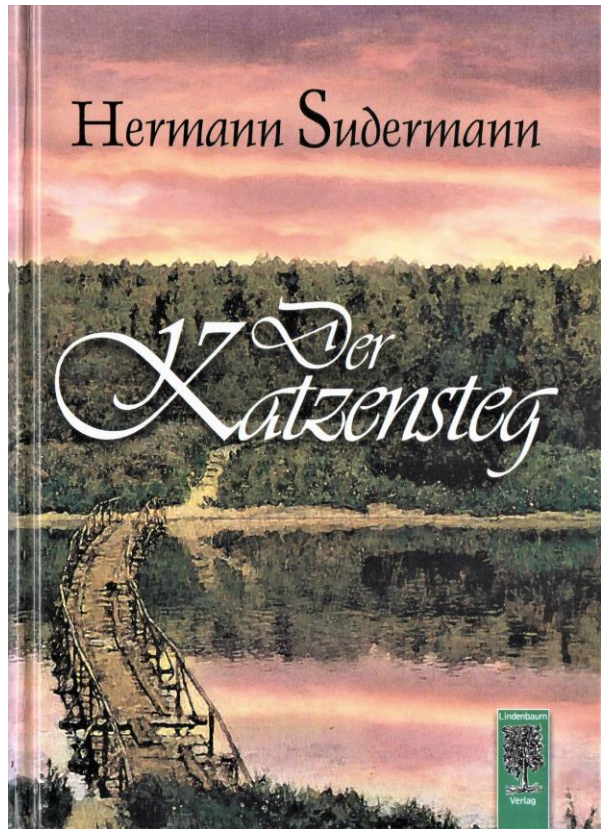
ご存じのとおり、村人全員はあの大逆無道の男爵、フランスのスパイの男爵、外国と密かに通じた男爵を怨み不倶戴天の敵となして死地に追い込もうと、この7年以來は老人から抱かれた子供まで皆が歌ったのは、スナダ男爵は犬畜生よ、天罰、地罰、人の罰、というもの。朝から晩まであたり一面のワーワーギャーギャーという声によって天地は圧倒されたのでした。あにはからんや神も許したまわず23日前に男爵は往生してしもうた。ああ、怨みは白骨までに及びましてな、村人の呪詛はなんと恐ろしいではありませんか。死骸は屋敷の中に留め置き、蠅はたかり鴉もついばみ、死んだあとのあの様子というのもやはり犬畜生でありますな。ハハハハ。

竹風の「仏探」というのは「フランスの探偵」すなわち呉禱漢訳の「法国奸細（フランスのスパイ）」にほかならない。何の理由から敵国フランスのスパイ、ドイツにとっての大反逆者、賣国奴となったのか。山園中尉（砂田保正）とそれがどういう関係にあるのか。読者は疑問を持つだろう。段階を追ってそれを記述して解きほぐすのが作者の手法である。

『賣国奴』は長篇小説だ。本稿で呉禱の漢訳を検討するに当たり主としてふたつの事柄を中心に置く。ひとつは「賣国奴」の理由となった「猫橋事件」だ。もうひとつは主人公保正とその召使い、奴隸である百合との関係である。

砂田城攻撃＝猫橋事件——呉禱の誤解1

猫橋が登場する。村人はおどけた調子で事件の概要を説明した。



猫橋の風景 ▲1937映画

ドイツ語本表紙▶

【竹風】そもそも猫橋と申しまするは、これ即ち千八百七年砂田男爵が砂田城を占領致しましたる仏蘭西兵の手引を致して、普国（プロシヤ）兵の背後を衝きましたる独逸有名なる名所古跡の一で御座りまする。砂田城攻撃の事は申す迄もなく御案内の筈。そんじよそこらの曆にも出て居りまするぢや。

22-23頁

把握すべきことがある。フランス兵が砂田城を占領した事実だ。ここが出発点である。

男爵が居住する城島は吊り橋^{*23}でつながる。猫橋はこちらの橋とは別の場所にある。少数の人間しか知らない抜け道だ。事件の後に「独逸有名なる名所古跡」となった。さらに誇張して、曆にも書かれている有名事件だとふざけたのだ。

ご注意ください。「砂田城」とは砂田男爵が居住する城島を指す。猫橋を渡って間道を抜ければ砂田村の外れに到達する。フランス兵はそれを利用してプロシア軍の後ろから不意を突く。猫橋がどこに通じているか具体的な地名はあげられていない。後の説明でどこかわかる。すなわち砂田村から離れた林の中に十字架を立てた小山がある（267頁／呉構125頁）。プロシア兵のいた場所だった。ここがフランス兵により急襲された。猫橋から山沿いに行った到着点だと理解できる。後に墓地とされた。

この位置関係を竹風日記のままに理解する必要がある。くり返せば、男爵の居住する城島から猫橋を抜けて砂田村の外れに出る。そこがプロシア兵の背後だ。

ところが呉構漢訳ではその地理感覚が混乱している。それには理由があった。竹風日記の「砂田城攻撃」という表記である（後述）。

砂田男爵の城が敵のフランス兵に占領された。それだけならば普通にあることだろう。特異なのは男爵が敵国フランス兵を指導して、味方であるプロシア兵の背後を襲撃させたことだ。それにより多くのプロシア兵が死亡した。男爵は脅迫され強制されたのではない。自分の意志と判断によって積極的にそうした。男爵はフランスにとっては協力者、ドイツにしてみれば賣国奴である。砂田村の人々にとっては城主が裏切り者となった。

竹風はその事件を「砂田城攻撃の事」と称した。砂田城を拠点としてプロシア

兵の背後を攻撃した事件という意味だ。前後を読めば誤解のしようがない。ここは豊隆訳「シユランデンの不意撃（ふいうち）」（23頁。Schrandener Überfall。マーシャル英訳は Schranden invasion）の方が分かりやすい。本稿では出発点を重視して「猫橋事件」と称する。

しかし呉禱はこの「砂田城攻撃」という漢字表現に引き付けられた。そうして砂田城そのものを攻撃したと誤解した。誤認にもとづいて無理に漢訳したから意味不明になった。

【呉禱】那猫橋。本是德国有名勝跡。當一千八百七年。史拿特男爵。帶領着仏蘭西兵。占領史拿特城。衝擊我兵之背。那箇地方。就屬了敵人。攻擊史拿特城的事。就是男爵領導的。那是那年四月間的時候。11頁

その猫橋はもともとドイツの有名な名所旧跡でありましたが、1807年にスナダ男爵がフランス兵を引き連れてスナダ城を占領し我が兵の背後を攻撃したので、そこは敵のものとなったのであります。スナダ城攻撃のことはすなわち男爵が指導したもので、その年の4月のことじゃった。

1807年のことだというのは竹風日記そのままだ。「四月」は呉禱の加筆（注：54頁にある五月初五日と一致しない）。竹風にある「曆」は省略した。

注意してほしい。砂田城はもともと砂田男爵の所有なのだ。その名がついている所以である。

竹風日記の後半部分にある「砂田城攻撃の事」をそのまま漢訳した。表面的にはそれで間違っていない。つづく「就是男爵領導的（すなわち男爵が指導したものの）」もいい。

問題は前半部分だ。呉禱は竹風の「砂田男爵が砂田城を占領致しましたる仏蘭西兵の手引を致して」の漢字を拾った。「砂田男爵」「砂田城」「占領」「仏蘭西兵」「手引」を組み合わせる。つまり平仮名の「しましたる」を無視した。これに「砂田城攻撃」をからませて訳文の前後を入れ替えた。

「史拿特男爵。帶領着仏蘭西兵。占領史拿特城（スナダ男爵がフランス兵を引き連れてスナダ城を占領し）」とする。男爵がフランス兵を導いて自らの砂田城を占

領したという。それは違う。占領させたのではない、城島は先に占領されていたのだ。事実と地理的位置が異なっている。男爵がフランス兵に自分の城を占領させるのは奇妙だ。また猫橋がドイツの有名な名所旧跡になったのは「猫橋事件」発生以後のことだった。もともと有名であったわけでもない。呉構の漢訳はどう考えてもおかしい。呉構は「猫橋事件」についてそれ以降も一貫して誤認する。

フランス兵を実際に案内したのは男爵の召使い、奴隷である百合（レギーネ Regine/欧麗）だ。保正は後にはその百合本人から当時の状況を聞き出している。おなじ場面の別説明だからここにまとめて紹介する。

男爵は百合に命じた。城にいるフランス兵を案内して猫橋を抜けて行かせよ。次が百合の証言だ。

【竹風】（男爵の）『其方は仏蘭西のお方を一時間内に猫橋から山伝に案内することが出来るか。』とのお尋でございませう、私は仏蘭西の方々が、御城に参つてからは乱暴ばかり致して居ましたので、もうもう怖くて怖くて、泣き出しましてでございます。205頁

男爵の居城を占領したフランス兵はやりたい放題だった。女中を追い回し百合もその暴力的対象になりかねないという状態である（原作「城にゐる仏蘭西人の日の立て方は恐ろしい程で、女中を隔々に追ひ廻したん[り]なんかするのです。私は手籠にでも遭ひはせぬかと夫を恐れました」豊隆訳271頁。注：「日の立て方」は時間の過ごし方）。ここの「御城」は男爵の居住する場所（城島）にほかならない。フランス兵が来てからそういう状態だった。ましてや乱暴なフランス兵の道案内をすること自体が百合にとっては恐ろしい。女ひとりだから何をされるかわからない。案内役を嫌がったのも当然だ。

ところがここでも呉構は勘違いする。

【呉構】又問我道。你能夠在這一点鐘以內。領了法蘭西兵過猫橋去麼。我想法蘭西無数軍人。若是進了城。一定要擾乱擄掠。做出凶暴行為。那豈不可怕麼。當時我竟哭了出來。96頁

お前はこの1時間以内にフランス兵を案内して猫橋を通っていけるか、とお尋ねになりました。フランスの無数の軍人がもしも城に入りましたらきっと攪乱掠奪して凶暴な行為をするに違いないと思いました。どうして恐ろしくないはずがありましよう。その時、私はとうとう泣き出してしまいました。

竹風日記の「御城に参つてから」は当時の状況を述べている。それを呉構は「若是進了城（城に入りましたら）」と未来の仮定形に漢訳した。竹風の「砂田城攻撃」を誤解してそれから逃れることができない。

この誤解が生じた原因は竹風日記の用語のほかにもう1カ所ある。村外れでプロシア兵の前出墳墓を見た保正が過去を想像する場面だ。百合は黒装束のフランス兵を手引きしてここまでやってきた。報奨金を手にして帰路についた時だ。

比較するために原作から豊隆訳を引用する。微妙なところで竹風日記が異なるところを説明するためだ。

【豊隆】夫から、人々が女を放したとき、罪障の酬金を隠囊に入れて独りで帰路についたとき、——如何に射撃の音、太鼓の轟き、火薬の稲妻、不意に襲はれたものゝ死の叫び——如何に此等のもの——恐ろしいフーリエの隊——があゝの女を近くにゐたゝまれなくしてしまつたことだらう。382頁²⁴

「フーリエの隊」とはローマ神話の復讐の女神たち（*furies*）を指し「怒り」を表わす。原作には場所の明示はない。なくても猫橋を抜けて出た最終到達点（砂田村の外れ）で戦闘が行なわれたことは自然に理解できる。レギーネは男爵の城からやってきた。そこにまたもどっていくのだ。

竹風日記は原作とほとんど同じだ。1カ所（傍点筆者。以下同じ）を除いては。

【竹風】大罪惡を犯した賃錢を貰つて、百合が踵を返したとき、既や殷殷たる砲彈の響きは城内に起つて、太鼓の音、硝煙の電、主客相搏（う）つ大叫喚は手に取るやうに聞えて、不意討を喰つた普国兵が無念の悲鳴は殊に

百合の耳を貫いたであらう。百合は恐しさ怖さに身も顫へて、夢中に走って帰ったのであらう。269-270頁

百合がフランス兵を案内し終わったあとの出来事だ。注目点は竹風が加えた「城内」である。不意打ちの場所を竹風は「城内」だと書いた。原作にはない。 unnecessaryな加筆だ。書き加えるならばせめて「村外れ」であればまだよかった。

この「城内」が呉禱を惑わした。先に「砂田城攻撃」という表現もあった。それを合わせて竹風日記に出てくる「城」はすなわち砂田城だと思い込んだ。「城内」だから男爵の居住する城の内部で戦闘が発生したことになる。

【呉禱】及至受了那錢袋。欧麗返身回家。已聽見城裏火光冲天。砲声震地。兩国的兵。戦闘呐喊。後來德国兵打敗。悲喚哀鳴。欧麗想早已嚇得魂不附体。126頁

あの錢袋を受け取るとユリは身を翻して家にもどろうとした時、城内で火の手が天を衝き、砲声が地面を揺るがし、両国の兵が闘い大声で叫び、後にドイツ兵が負けて悲鳴をあげるのが聞こえた。ユリはもうびっくりして肝がつぶれた。

「錢袋」とはフランス兵を手引きした百合への報奨金だ。呉禱の矛盾、勘違いは百合が家に帰る（回家）を上「城裏」とは別の場所としたところからもわかる。百合が帰るべき先は男爵のいる城だ。その城が戦場になるのは矛盾する。

不合理さは別の個所で加筆した部分においてさらに露わになる。呉禱にしては珍しい誤解のくり返しだと感じる。

百合の証言という加筆——呉禱の誤解2

呉禱はこの猫橋事件にこだわった。後の第13回において竹風日記にはない大幅な書き加えをして事件を蒸し返す（146-148頁）。呉禱の創作である。

フランスの羅徳（ラツール）大佐（羅斯忒參將）がやって来た。フランス兵の司令官だ。大佐の名前は竹風日記に出てくる。約西（ヤスマサ）が「お前は彼らを

城に案内してどこに行ったのか（你領他們進城。到什麼地方呢）」（147頁）と欧麗（ユリ）に問う。ここからすでに誤っている。

【呉禱】只得出去。領他們過得猫橋。到了城門外邊。法兵不許我進城。那時城裏也是法兵。城外也是法兵。真是進退兩難。急得要死。躲在樹林叢中。一声也不敢響。147頁

しかたなく出かけて彼らを案内して猫橋を抜けて城門の外につきました。フランス兵は私が城に入るのを許しません。その時、城の中もフランス兵で城の外もフランス兵です。本当に進退窮まるとても焦りました。林の茂みに身を隠して一声もよう上げませんでした。

猫橋を抜けて城の入り口の外についたという。方向が逆だ。しかも城の内外がフランス兵であふれているというのはどういうことか。竹風日記に城がフランス兵に占領されたという個所があった。呉禱にはその記憶が混入してこういう矛盾した記述になっただけらしい。プロシア兵の背後を撃つはずだったではないか。その兵はどこにいるのか。不思議に思わなかったのか。ここを理解するのはむづかしい。

茂みに隠れていたところをフランス兵に見つかりスパイだということで切り殺されかけた。しかし右肩に白十字を縫いつけた黒い衣裳を着ていたためフランスの味方だと認定された。その黒衣裳は砂田男爵が百合に着させたものだ。フランス兵が行ったあとも茂みに隠れている時だった。

【呉禱】只聽得城裏一片吶喊槍砲之声。像是我們德国兵。和法兵兩面交戰模樣。又看見火光融融。照到半天裏。我想這種情景。老主人在家。定要遇難。放心不下一團勇氣。也管不得法兵不法兵。拔起身來。望城裏就走。城門口無數法兵守着。因見我穿着黑衣記号。果然並不阻攔我。我一直跑到這裏。只見你家左近一箇法兵也沒有。依旧和太平無事一般。毫不像外邊有什麼亂事。老主人安然在屋裏踱來踱去。正在想什麼念頭。我剛要進門。只見那箇法国兵官。立在門外。遞給我那箇錢袋。147-148頁

城内いっばいに大きな叫び声、銃砲の音が聞こえまして、我らがドイツ兵とフランス兵の双方が交戦している様子です。さらに火の手が赤々と中空を照らすのが見えます。私はこうなると大旦那様はきっと危険な目にあっておられると思いまして心配で、勇気を振り絞ってフランス兵であろうがなかろうがかまわないと考え、起きあがると城へと行きました。城門には無数のフランス兵が警護していましたが私が記号のある黒い衣裳を着ているのを見るとまったく妨げようとはしませんでした。私がここに走りついでみると若旦那様の家の付近にはひとりのフランス兵もおらず、昔ながらの平和で外の騒乱は嘘のよう。大旦那様は平穩に、何かお考えのようで部屋の中を行ったり来たりしておいでです。私が入ろうとするとあのフランス士官が入り口の外に立っていらしまして、私にあの錢袋を手渡したのです。

城の内外はフランス兵だと言っていた。ところがいつの間にやらドイツ兵が出現して戦っている。戦闘の真っ最中だというのに城門にフランス兵が一杯になって何もしていないというのもおかしい。しかも男爵の居場所は城内のはずなのに戦闘とは関係なく平穩無事だ。報奨金はすでに受け取っている。それにもかかわらずフランス士官がまたも百合に錢袋を手渡した。不思議な説明である。

城から猫橋を抜けてプロシア兵の背後を襲った。その事実が重要であって位置関係に取り違えがあっても小さい問題だと考える人もいるだろう。しかし呉構の日本語理解力はかなり高いと筆者は思っている。小さい勘違いかもしれないが前後で辻褄が合わないのは、やはり不適切だ。

猫橋で事件が起きたのは7年前である。それ以来、男爵はフランスにドイツを売った賣国奴と罵られることになった。砂田保正がなぜ山園という偽名を使用しているのかという謎解きだ。賣国奴の子であることを隠すためだった。

男爵は村民から犬畜生と徹底的に憎まれる。城島の屋敷が焼き払われた。そうして23日前に男爵は急死して教会での埋葬が牧師によって拒否されているという状況だ。そこに帰還したのが男爵の息子保正である。

原作では男爵が倒れたとき村の指物師（棺桶も作る）の娘レギーネと一緒にい

たことを述べる。だが竹風はそこを翻訳しなかった。ゆえに男爵の召使い、奴隷で同時に愛人を兼ねていたレギーネが竹風日記に登場するのは少し後になる。

百合（レギーネ）の登場

保正の同郷人で彼をとりまく人物の中に親しかった女性がいる。老僧（牧師）の娘ヘレネ（Herene／藤子ふちこ／福萸）だ。保正が賣国奴の子になってから藤子は彼との交際を断わってきた。

男性の知り合いは宿屋の息子フェリツクス（Felix／目賀田利吉めかた りきち／梅克戴 黎克）である。長じて保正を目の敵にした。父は村長になる。

保正および藤子と利吉の人間関係について作品は多くの紙幅を割き記述する。しかし藤子と利吉は物語の脇役にすぎない。

レギーネ（Regine／百合ゆり／欧麗）こそが物語のもうひとりの主人公だ。すでに出てきている。本稿では保正と百合の関係を中心に述べる。

竹風日記に百合が最初に出てくる場面を示す。藤子が保正に会ったとき故郷の消息を伝えた。例の「猫橋事件」を説明している。

【竹風】……手紙の趣に由りますとね、貴君のお父さんが暗夜霧のあるときね、仏蘭西兵の手引をなすつて、あの猫橋ね、あれを通らして、独逸軍の不意討をなすつたんですつて。それからね、あの指物屋の娘で百合といふ子があつたでせう、あのほら。絨毛（ちづれつけ）の、小柄の、学校に一所に往つたでせう、あの百合が、まあ、道案内をしたんですと。それでね、世間ではもう、お父さんのことを、賣国奴だ人非人だと言つて、お父さんのお仕事をするものも無いし、今に御邸に火を放けるつて、大騒動なんですと。39-40 頁

文体からして藤子が保正に直接話して聞かせたものだとわかる。

猫橋が出てきた。フランス軍を導き猫橋を抜けてドイツ軍の背後に案内したのは顔なじみの百合だという。それを命じたのは保正の父砂田男爵だ。上記の「あの指物屋の娘で百合といふ子」から「学校に一所に往つたでせう」は見知った百

合についての説明であることは明らかだ。「お父さんのお仕事をするものも無いし」とは屋敷の仕事を引き受ける村民は誰もいない、つまり村民は賣国奴の男爵を見放し、一切の協力をしないという意味。これには後の男爵葬儀も含まれる。当時は屋敷に放火するぞと村人が大騒ぎをしている。

次に示す呉構漢訳は藤子が保正へあてた書付に変更してある。ゆえに竹風のよくな口語ではない。また中には勘違いが混じる。

【呉構】……蓋據家郷来信。言令尊於某日黑夜烟霧漫天時。為仏蘭西兵内応之郷[嚮]導。引敵偷渡猫橋。出我兵之不意。大肆掩襲。蓋城中有木器舗主人之女名欧麗者。其髮拳。其人似孩童。由隧道潜往一学校之旁。欧麗即受雇引導者也。外間偵悉此事。皆詬令尊為賣国奴。与禽獸無異。惟妹意令尊當不至有此事。今尊邸亦被火焚。同付一燼。城中騒乱不堪。21頁

国元からの手紙によりますと、あなたのお父さんがある日の暗夜、霧がたちこめた時に、フランス兵に内通し敵を手引きしてこっそり猫橋を渡らせ、我が兵の不意を打って大いに急襲したといます。城には家具屋の娘でユリという名前の、巻き髪で子供のような者がいて、トンネルを抜けて学校のそばを秘かに行かせるのにそのユリが雇われて道案内人になったそうです。世間ではそれが知られると皆はあなたのお父さんを賣国奴、禽獣と違わないと非難しています。しかし私はあなたのお父さんがそのようなことをなされたとは思いません。今はお屋敷も焼かれ燃え尽きて、お城は大騒ぎです。

竹風は「指物屋」と書いている。指物師で棺桶も作っているのが百合の父親だ。家具大工だと考えれば「木器舗」すなわち家具屋でもかまわない。しかし別の箇所(30頁)で「木工師」と漢訳しているから統一するほうがよかった。

呉構漢訳は竹風日訳にもとづいている。それは確かだ。しかし下線部分的に誤解がある。

竹風日訳にある「学校に一所に往った」前後は百合の過去についての説明だとくり返す。保正と藤子は子供の頃より百合と顔見知りだった。その説明を呉構は「猫橋事件」当日のことだと受け取った。だから「学校に一所に往った」では具

合が悪い。「由隧道潜往一学校之旁（トンネルを抜けて学校のそばを秘かに行かせ
る）」と書き換えて不意打ちの道順のように漢訳した。もともとトンネルは存在
しない。

「お父さんのお仕事をするものも無いし」も屋敷の炎上*25についても元の竹
風日訳からは少し外れている。ただし猫橋に案内したのは百合であったという部
分は正しい。漢訳に小さな誤解はあっても清末民初の読者は受け入れるだけ。比
較の手段を持たないから気にしなかつただろう。

竹風はゾーダーマン原作の細部を削除しながら大筋を把握して抄訳している。
その中から百合が出てくる部分をいくつか拾い上げる。

百合と褒賞金——解釈はひとつではない

保正は父親の死去を知り故郷の砂田村にもどった。指物師が掲げる棺桶の看板
を目にしてそこの娘百合を思い出す。

【竹風】嗚呼その時のあの娘が、仏蘭西兵を手引したばかりでなく、父の最
後まで城中に住んで、父にかしづいたとは、何とした不思議な事であらうと
男爵は思案に暮れた。56頁

【呉禱】須知従前の欧麗。那裏会做法蘭西兵の内応嚮導。後來不知怎樣。住
在城中。和他父親連[聯]絡一氣。纔受他父親使喚。替他父親幫忙。實在奇怪。
想不出箇道理。31頁

なんとあの時のユリが、どうしてフランス兵に内通し手引きすることにな
ったのか、後にはなぜだか城中に住んで父親と気脈を通じ、父親に使われ、
父親の世話をするなど、実に奇妙なことでわけがわからなかった。

竹風日訳にある「男爵」は保正を指す。百合についての消息は部分的に提示さ
れる。竹風日訳では藤子が故郷からの便りの中で紹介するのが最初だった。子供
の頃の知り合いだといっても男爵の息子と指物師の娘だ。本来は人的関係など生
じるはずもない。ましてや百合が男爵の屋敷に入ったのは保正が故郷を離れて叔
母の家へ移ってからだ。「猫橋事件」が起きたといっても噂に聞くのみ。保正が

屋敷の内情を知らないのも無理はない。それでも伝わってきた消息によれば事件後は屋敷に男爵がひとりだけ居住し百合が世話をしているという。読者は伝聞からはじまって徐々に詳しい内容を知るという段取りである。

保正は焼け落ちた自分の屋敷にもどって来た。庭で穴を掘っている女性がいる。百合である。その穴は遺骸を収納するためのものだった。教会の牧師（ヘレネの父親）がありえないことに男爵の遺体埋葬を拒否したからだ。村民らもそれに同調している。それほど売国奴というわけだ。

こうして焼け残った家屋で保正と百合の不可思議な生活が始まった。

保正は百合にそれまでの経緯を問うた。百合が答えて、男爵の屋敷に来たのは指物師である父に命令されたからだ。すなわち父親に捨てられた。15歳の時だった。そこにフランス兵がやってきた。男爵の命令で百合はフランス兵を猫橋に案内した。その時案内賃としてもらった大金は百合の父が持って行ってしまった。大金について百合は次のように返答した。竹風日記である。

【竹風】父が取つてしまいましたのでございます。父はそんな事とは露存じませんで、全く私の身を汚された、不義賃と思つて居りましたので、直ぐと持て参りましたが、手に余る程の金貨でございました。67頁

竹風は「全く私の身を汚された、不義賃」と書いた。「父はそんな事とは露存じませんで」とあわせ考えれば、与えられた大金はフランス兵を案内した報酬ではないことになる。父親は百合が男爵家に拘束のうえ召使い、奴隸、愛人にされた不道德な代金だと考えて持ち去った。敵兵を案内した「汚れた金」とする原作とは異なる。ここの呉禱漢訳はさらに不思議なものだ。

【呉禱】那箇我絲毫也不知道。人家全然推在我身上。我想這種不義之財。誰要拿他。我家也很有些金錢哩。36頁

それ（金額）については私は少しも知りません。人が私に押し付けたものです。私はこんな汚らわしい金など誰がもらうもんかと思ったのです。私の家にもお金はありますから。

まず百合の父親が出てこない。父親が持って行っていないのならその大金はどうなったのかと疑問が生じるが答えていない。おまけに自分の家に金があるというのは百合の台詞としては怪しい。まるで男爵家と自分を一体化しているように読める。事実として男爵を養うために百合は屋敷の金を使用しているにしてもだ。

男爵と百合

「猫橋事件」後、男爵家の使用人は百合を除いて誰もいなくなった。村人は通りで百合を見つけると殴りかかる、石を投げつける。それを避けて遠方まで足を運んで食料を高値で購入せざるをえない。そういうことならどうして屋敷を出て他所へ行かなかったのかと保正が質問する。「それでは先の御前様が、飢死を遊ばしたろうではございませんか（71頁）（這樣。老主人不要餓死了麼（37頁））」というのが百合の返事だった。

父親に捨てられた百合には行き場所がない。そういう考え方もある。しかし単なる召使い、奴隸であればそうまでして世話をする必要も義務もない。屋敷の金を持ち出して逃亡すればよい。男爵を飢え死にさせるわけにはいかない、という百合の言葉には内実はそれだけの関係ではないことを暗示する。あくまでも暗示であって明記しない。竹風は性的表現を避ける傾向がある（後述）。

原作では次のようになっている。「『ぢやあ、あの方を飢え死させるんですか』と女が聞いた。——さうして不意に真赤になった。さうして慄々（をどをど）心配さうにつけ足した。『殿様を』」（豊隆訳87頁）。竹風は「不意に真赤になった」という個所を省略したから百合の心情が見えなくなった。

保正の百合に対する心情の変化

百合ひとりで男爵を埋葬するという。それを聞いた保正が賞賛の気持ちを抱く。

【竹風】御前様の唇には、賞讃の言葉が浮かんだ。嗚呼、この世にも珍しい忠実——何の躊躇もなく、何の憚るところもなく、唯、その御主のために、千度百度も死地に入つて、怨む気色も見えない、この忠実は、たしかに賞

讃の価を有して居る。その忠義に免じて、父を葬るまでは、此處に留め置いてやらうと、保正は心を決した。76-77頁

「御前様」は保正を指す。保正は百合が持つ無私の忠実さを賞賛する。埋葬が終わるまで百合が屋敷内に居住することを許すことにした。

【呉構】 約西聴罷。心裏称讚不已。暗想這等忠心誠實的人。世間実在難找……他也不疑心。也不害怕。為了主人盡心竭力。千回百回。入了死地。一些也没有怨恨。如今還要代我埋葬父親。還在這裏並不拋丟而去。39頁

ヤスマサは聞き終わると心の中で賞賛してやまなかった。これほどの忠実な人間は世間には実に得難いとひそかに思った。……彼女は疑わないし恐れもしない。主人のために全力をつくし、何度も死地に入って少しも恨まない。今は俺に代わって父親を埋葬したい、ここにいて決して置き去りにはしないという。

竹風が施した「——」に呉構は「……」を当てて記号を合わせている。彼が下線部で勘違いした理由は簡単だ。日本語の「此處に留め置いてやらうと」の主語が保正であることを把握しそこなったからである。「保正は心を決した」と明示されている。不思議なことになぜだか訳文の後半は百合が主体で記述されていると思った。細かなことに違いない。そこ以外の漢訳は正しい。

父親の葬儀は砂田の牧師と村民から拒否されている。保正はしかたなく灰出村にいる軍仲間で義兄弟の谷口（エンゲルベルト Engelbert／檀柯）たちに来てもらい大騒動のなかで埋葬を執り行なった。それがすめば百合の扱いが問題になる。用済みだとして城から追い出す考えもある。それを悟った百合が問う。

【竹風】 「あの、私は此城を出ますんでございますか。」／と問うた。心配と苦痛とに色蒼ざめた顔は、血に染んで凄いと美しい。142頁

保正が百合のことを「美しい」と記述するのだ。ただの邪魔者扱いではなくな

っている。小さな表現が積み重なっていく。

【呉禱】問道。我不是出了城的麼。約西看他臉色。帶白轉青。又焦急又苦痛的模樣。及至約西对着他看。立刻又轉了飛紅。不肯擡頭正視。68頁

私は城を出るのではないのですか、と問うた。ヤスマサが彼女の顔を見れば白から青に転じ、焦りと苦痛の様子がある。ヤスマサが彼女を見ているのですぐに顔を赤らめ、頭をあげて正視しなかった。

呉禱は竹風の「すぐに顔を赤らめ（立刻又轉了飛紅）」は漢訳した。しかし肝心の「凄いと美しい」を訳していない。保正の心情が変わったことを取り落とした。

竹風日記にはその後ろにもうひとつ「美しい」が出てくる。他所へ行けばいいだろうという保正の問いかけに次のように百合は答える。

【竹風】「他とは何處へ参るのでございます。」／再び心配の色はその美しい面に浮ぶ。142頁

【呉禱】別處。到那裏去呢。臉上更為凄切。那種景色。實在叫人可憐。69頁
他所とはどこへ参るのでございます。顔はさらに物悲しくなりその様子は実に憐れを感じさせる。

竹風にある「美しい」という言葉には意味がある。保正の百合に対する感情、すなわちただの召使い、奴隷であったものがこの瞬間に変容したことを示唆する。

呉禱漢訳の「可憐」では近いが読者に訴える力が弱い。「美しい」に該当する単語がないからその転変を感じ取ることができない。ただし次の個所があるから読者は理解するだろう。百合は城を追い出されたら濠に身を投げて死ぬという。

【竹風】百合はいかに鈍で、いかに無作法な女であらうとも、彼は遂にこの世界に於て、保正が唯一の味方ではないか。／保正は遂に百合を城外に放逐するのを断念した。143頁

【呉禱】咳。這歐麗本是一箇愚鈍不知道理之女。却能恁地幫助約西。任你苦到怎樣。他依旧恋恋不捨。看来在当时世界上。除了他。也沒第二箇人是約西的知己了。69頁

ああ、このユリはもともと愚鈍で道理を知らない女ではあるが、そのようにヤスマサを助けることができ、どのように苦しい目に会おうとも彼女は変わらずに捨てようとはしない。考えれば当時の世界において彼女を除いてはヤスマサを知る者はいないのである。

保正にとって百合は唯一無二の存在になった。呉禱は上記竹風日記の後半部分



猫橋に立つ保正 洗濯をする百合
署名は「S.W」。渡部審也画

「……放逐するのを断念した」は省略した。

保正と百合は同居しながら最初はほとんど口をきかない。主人と奴隷という設定だから百合は保正を避ける傾向に置いてある。両者の関係が変わるとというのが先に示した保正の言葉「美しい」であったりする。きわめて微妙な描写を続けるのがズーダーマンの筆法である。

そのひとつが竹風が記述する次のような場面だ。夜中に保正は猫橋に立った。そこから川で洗濯している百合を見つける。

問いただせば村人の襲撃を避けて夜中に洗い物をするという。百合が保正に懇願する。村人を脅すのに鉄砲を撃てばかえって反撃をくらう、それだけはやめてほしい。百合が道理のある発言をするものだから保正は感心した（この部分は呉構漢訳にない）。

【竹風】「成程、其方の言ふ通りだの。では其方に免じて、下の奴等を怒らすことは止さう。」／百合は始めて主人の親切な言葉を聞いた。月の光に照らされた、その顔は紅くなつた。156頁

「下の奴等」は村民のこと。「其方に免じて」が意味する「百合のために」という個所が重要だ。主人から思いもかけず我が身を案じる優しい言葉をかけられた。百合はその意外さに感動する。こういう何気ない描写の積み重ねが両者の変化を表わしている。

ところが呉構漢訳ではそうになっていない。少し前の、鉄砲を撃ってくれるなど百合が懇願する部分から怪しげなことになる。竹風日誌と呉構漢訳を対比対照してその食い違いを示す。

【竹風】御前様が鉄砲をお放ち遊ばしますと、下の者までがいつ何時でも鉄砲を持つて居るやうになりますから、私がお城の外へ出ますと、直に撃ち殺され了（ちま）ひませう。私はまたお城の外へ参らない訳には参りません。

155頁

保正が百合の身を案じて鉄砲を持ち出せば、それが逆に村民の暴力を引き出すことになる。手を出さないでほしい。城外へ買い物に行かなければ日常の生活が維持できない。死活問題だという説明だ。百合の話はもっともなことである。保正が百合の理屈の通った返答に「不思議の感に打たれた」（156頁）のも当然だろう。

竹風の日本語訳文はむつかしい部分はない。普通の日本語だ。呉禱にしてみれば何の問題もないと思われた。しかしなぜだか訳文に関係なく作文して迷走する。どうやら呉禱は上の後半部分の漢字を拾ったらしい。鉄砲、城、外、出、撃、殺、了などだ。

【呉禱】……他們帶着手槍。偏偏不打別人。只要找我。單苦我不出城。我想我橫豎顧不到你。不如我出了城。讓他們打死了。也罷哩。73頁

……奴らが鉄砲を持つのは別人を打とうとしているのではなくて私だけを探して、私が城から出ないように苦しめているだけなのです。私がどのみち御前様のご面倒を見ることができないのでしたら、城を出て行って彼らに殺された方がいいかもしれないと思います。

百合は保正に仕えるためにあくまでも城の外へ出て物資を購入しなければならない。また彼女にはさうしようという強い意志がある。それが竹風日訳だ。自分が殺されないようにするために鉄砲は使ってくれるなという要望なのだ。それを呉禱漢訳では百合が絶望して自棄を起こしてしまった。これでは保正も何のことかわからない。混乱に拍車がかかる。

【呉禱】照你說來。我把你調開到別處去。他們再不至和你為仇了。歐麗怨聲怨氣道。你調我到別處去。是什麼意思呢。73-74頁

お前の言うとおりで俺がお前を別の場所にやれば、奴らはもうお前の敵ではなくなるな。ユリは不満らしく言う。私を他所にやるとはどういう意味でございますか。

「百合のために」対策を練るというのは共通する。そこはいい。保正は百合を守るために村人を怒らせる鉄砲は使わないと了承しただけだ。それですむ話にすぎない。だから呉禱が「我把你調開到別處去（俺がお前を別の場所にやれば）」などと加筆したのは不必要だ。前部が間違っているから後部とのつじつまがあわない。

また竹風日記の「始めて主人の親切な言葉を聞いた」「その顔は紅くなった」（156頁）を漢訳しなかった。清末民初の読者にとってヤスマサとユリの関係がはっきりしない。

呉禱漢訳は基本的に日記に忠実だ。ゆえに上のような齟齬をきたす部分があるとかえって目立つ。

ただし竹風日記にあるがまを呉禱は漢訳して次のようにもある。保正が百合に、話をしないのは嫌ったり憎んだりしているわけではないと慰める場面だ。

「百合はハラハラと涙を翻（こぼ）した」（157頁）を「欧麗不言不語。已簌簌掉下涙来（ユリは何も言わずにハラハラと涙をこぼした）」（74頁）と漢訳して正しい。

百合の表情

竹風日記には恋愛感情をあからさまに描写する箇所は多くない。保正はわずかに「美しい」と思う。百合については「顔は紅くなった」くらいのもの。ほのめかすという表現が妥当だ。竹風日記ではそういう作風の物語である。

保正は百合が冬着を持たないのを見て「其方が凍えては俺が済まん」（177頁）「你凍了。我可不管（お前が凍えては俺がどうして知らん顔をできるか）」（84頁）という。

【竹風】百合は何とか言はうとしたが、言葉が口に出ない、顔は紅くなった。

177頁

【呉禱】欧麗默然不答。臉上起了一陣飛紅。84頁

ユリは黙ったまま答えず、顔をさっと赤らめた。

顔を赤らめるのがユリの喜びを表現する。それが愛情に結びついている。

保正が百合の容貌を見直す場面がある。買出しからようやく帰ってきた。夕食の給仕をする彼女は新しい上着を着ていた。その姿を見て保正が思う。

【竹風】洋燈の傘の間から百合の姿を垣間見た保正は、さすがに吃驚したのである。まるでその人とは思はれぬばかり、気品も備はつて、眩いほど麗しい。彼女はもはや汚ない浅間しい下婢では無いのである。その挙動の高尚さは貴婦人といつても恥かしくないほどで、媚を含んだその容貌は生れ変つたかのやう。げに馬子にも衣裳とやら、況して百合は天性の麗質。今までの汚ない衣を脱ぎ棄て、今宵を晴れと着飾つた新粧には、表衣一枚は廉いものである。181-182頁

保正が今まで見ていた百合は「汚ない浅間しい下婢」だったということだ。見直してそこにいるのは「天性の麗質」を備えた百合である。「晴れ(ハレ)」は非日常を意味する。ここでは「晴れ着」を日常(ケ)に着用したことになる。「馬子にも衣裳」とともに竹風の表現であつて原作にはもちろん存在しない。

【呉構】話説約西燈光之下。見了欧麗面貌。你道怎的要驚呢。原来欧麗這時的顔色風采。全然變了樣子。和前幾天大不相同。好似換了一副骨相。又有豊情。又有気格。可當得秀麗二字。一些也不含糊。兀的闌珊疲闌的下婢。那模樣竟變成高尚美妙的婦人。看哪。欧麗生來本非陋質。如今脱却旧服。換了新衣。今宵又闢起新妝。披上外套。三日不見。怎不教人刮目相看呢。86頁

さてヤスマサが灯りのもとでユリの姿を見てなんと驚いたことか。ユリのこの時の表情風采はまったく変わっていた。数日前とは大いに異なりまるで人品が入れ替わったように感情豊かで気品もある。まさに秀麗という2文字が当てはまり、いささかのあいまいさもない。あのように落ちぶれて下卑た下女だったものが高尚で美妙的な婦人へ変わったのだ。御覧じろ。ユリは生まれつき悪い資質ではない。今は古い服を脱ぎ捨て新しい衣裳に着替えた。今宵はさらに新しく着飾り上着もおっている。3日会わなければ別人で、感動しないわけがない。

竹風日訳にほぼ沿った漢訳だ。竹風が使用した「馬子にも衣裳」という日本語表現は省略した。

百合の相貌が変化していることが保正の意識を動かす。召使い、奴隸という位置からの脱皮といってもいい。

百合の「赤くなる」がここでも出現する。百合は保正に褒めてもらいたかった。

【竹風】『其方は新らしい衣裳を着て嬉しいかね。』／云つて欲しい事をきつぱり言ひ當てられたので、百合は頸の辺まで紅くした。182-183頁

【呉構】你可是穿了新衣裳歡喜麼。不料這句話。說得歐麗從額角上起。直到頸邊。都紅了起來。87頁

お前は新しい衣裳を着て嬉しいか。この予期しない言葉にユリは額の端から頸のあたりまで赤くした。

竹風がせっかく「云つて欲しい事をきつぱり言ひ當てられたので」と訳している。褒めてもらいたかったのが実現したという意味だ。それを呉構は「不料這句話（この予期しない言葉）」としたのは間違いになる。それ以外の部分（重要な百合が「赤くなる」）が忠実な漢訳になっているから惜しいと思う。

保正は百合との会話のなかで回想する。子供の頃に百合に何か与えたものはないかと質問した。

【竹風】百合は火のやうに紅くなつて、…… 191頁

【呉構】歐麗漲紅了臉。…… 89頁

ユリは顔を真っ赤にして、……

百合が赤くなるのを積み重ねていく。あくまでも控えめである。

性的表現の抑制、削除

先に清末民初の読者にとって、保正と百合の関係がわかりにくいと書いた。ふ

たりが精神的に徐々に接近していく様子をゆるゆると記述している。そういう原作だからなおさらだ。加えて竹風は性的表現の暗示、描写をなるべく避けて翻訳した。読者はますます理解がしにくいことになる。

百合は保正の父親砂田男爵に仕えていた。召使い、奴隷である。しかしそればかりか愛人でもあった。それを垣間見せる部分が原作にはある。

保正は百合に以前はどこで寝ていたのかと問うた。その答えは次のとおり。「女は慄々した眼つきを天井のある寝台の方へ投げた。『貴方は御存知でございませう』と女は口籠つた。夫から耻かしさに押しつぶされて女は両手を顔へ當てた。／勿論彼は知つてゐた。——唯一の瞬間でも夫を忘れることが出来たなら！」（豊隆訳243頁。「天井」とは天蓋のこと）

百合は男爵と寝台を共にしていた。ここの暗示は誰にでも理解できる。ところが竹風日訳ではその部分を削除した（185頁）。日訳にないから呉禱漢訳にも当然存在しない（88頁）。

保正は百合に「猫橋事件」の後に起こった火災の夜について問うた。百合は証言を拒否した。保正は怒り百合につかみかかる。ふたりは揉み合う。原作では『俺は女の絞め殺さうとするのか、夫ともキスをしやうとするのか』（豊隆訳371頁）が挿入されている。つかみ合いの最中のことだ。「彼は溜息と共に女の方へ屈んだ。さうして——女の口の上にキツスした。／女は声高く悲鳴を上げた、彼に嚙りついた、さうして自分の歯を彼の唇の中に噛み込んだ」（豊隆訳373頁）

竹風はこの引用部分を見捨てた。底本にないから呉禱も漢訳しようがない。性的表現が消去されたからただのケンカで終了してしまった。

保正は牧師の娘藤子に未練を残しながら百合をおいて砂田城を出た。彼がポーランドの一僻村からもどってきたのはそれから3ヵ月後のことだ。ナポレオンがエルバ島から脱出したからプロシア軍人に徴集令が発令されていた。保正は上官として兵士に集合を命令する。村長の息子利吉は上官の保正に盾をついた。保正は彼を刀で制裁したうゑに拘束した。そののち出征までの数時間前に保正は百合と会った。旦那様の帰還を待ち続けていたという百合と綺麗に手入れされた花園を歩く。

【竹風】……（保正が）横から百合を眺むると両の頬には曇が懸つて、憐れな面影が見えながら、覆へども覆はれざる心の嬉しさは、見る見る雲を破つて顔一面の薄紅。314頁

【呉構】只向著欧麗呆看。欧麗自己也覺好笑。禁不住臉上起了一陣微紅。
145-146頁

（ヤスマサが）ユリの方をぼんやり見ると、ユリもおかしいらしく思わず顔がさっと赤くなった。

百合は保正に褒められて喜びを感じる。顔が赤くなるのは百合の自然な愛情表現だ。

ふたりの関係はそれで終了する。結局のところ性的な結びつきはない。いわば精神的恋愛のままなのだ。主人と召使い、奴隸というだけ。百合は父男爵の愛人だったが、保正はそれにも至らない。

百合が父親に殺される

保正が藤子の手紙に誘われて外出するという。百合は本能的に危険と不安を感じて激しく反対した。保正はそれを無視して藤子に会いに行った（呉構はふたりの関係についての長い説明を加筆している。166-169頁）。事件が起こったのはその後のことだ。村長は息子利吉が保正によって痛めつけられたばかりか軍法会議にかけられることに怨みを抱いた。村長は百合の父茂助を扇動して保正を射撃させようと猫橋へ追い立てた。猫橋で保正の帰りを待っていた百合は父親の銃弾に射貫かれて川に転落した。戻ってきた保正は川から百合の遺体を引き上げ屋敷の庭に埋葬したのだった。百合が男爵（保正の父親）のために掘っていたあの穴である。保正は百合のことを考えた。

【竹風】彼は曲らず、拗戻（くね）らざる天衣無縫の自然児の一人であつた。炉辺の哲学、人為の法則等が、未だその勢を逞うせざる大昔の樂園にのみ育つべかりし自然生は、百合の一生にも譬へられるやうである。何人にも妨げられず、何者にも強ひらるゝことなく、善にもあれ、悪にもあれ、唯々自然

と同化する児童の天真爛漫は、また百合の一生涯であらう。379-380頁

【呉禱】他意志既没有什麼堅強。本心也没有什麼軟弱。是天生就一團天真爛漫之氣。也不知有善。也不知有惡也。不知有高也。也不知有低。但隨着心之所之。快快樂樂的過。好如初出懷胎的嬰兒。古語道得好。人之初。性本善。他長到偌大年紀。依旧抱着初生的本性。一些也不拋離。外界的境遇人情。一些也不能攙入。這莫說是輕年女子。就是那些英雄豪傑的丈夫。也不容易修練到這箇地步。179頁

彼女の意志は強靱というものでもなかったが、また本心も軟弱というものでもなかった。天然の天真爛漫の気に満ちており善も悪も、高い低いも知りはない。ただ心のおもむくままに楽しく過ごす。まるで生まれたての嬰兒のようだった。古語にいう「人の初め、性のもと善」なのだ。彼女は長じていい年齢になっても依然として生まれたままの本性を抱きながらそれから少しも離れようとはしなかったし外界の境遇交際はまったく介入することができなかった。これは年若い女子はいうにおよばず、英雄豪傑の男子でさえ容易にたどりつく境地ではなかった。

百合が天然の天真爛漫さを持っていたことを指摘する。いわば自然児ということだ。呉禱漢訳は直訳にはなっていない。しかし竹風日記の意味は把握している。

保正は百合を埋葬し終わった。灰出村から兵士たちが彼の指揮を受けるためにやってくる。保正は彼らと砂田村の兵士を率いてそのまま出征していった。噂によれば彼は里具泥（リグニー Ligny/利古尼）の戦争で戦死したらしい。

『賣国奴』はこうして完結した。

5 呉禱による文末の加筆

ところが呉禱はそれで終わらせなかった。竹風日記ではいくつかの事柄が決着をつけられないまま放置されたと彼は考えたらしい。保正に率いられた兵士たちが出征した後の事情、すなわち後日譚を長々と加筆している（183-188頁）。

その内容をまとめて以下に紹介する（竹風の用語を使用）。

1 利吉は軍法会議にかけられ禁錮10年の罪になるところを保正の取りなしで放免になった。利吉は心を入れ替えた。

2 義兄弟の谷口が保正に過去の事を質問した。なぜご尊父のことを説明してくれなかったのか。とても話せる状況ではなかったから偽名を使っていた。諸君は砂田村での父の葬儀を行なってくれた恩人だ。

3 谷口は百合のことを聞いた。保正は自分の日記を取り出した。それには百合のことが仔細に記録してある（檀柯一看。乃是日記簿。上面将欧麗的事仔仔細細載明。185頁）。谷口たちは感嘆した。

4 百合の埋葬はどうしたのか。城の庭に一時的に葬っている。将来は教会にある先祖伝来の墓に納めるつもりだ。

5 村長は息子の利吉が軍法会議でどうなったか心配した。人を遣って探らせると保正が救ってくれたことを知った。村長は保正に感謝した。

6 教会の牧師が村長を呼んで相談した。娘の藤子が利吉と結婚したいという。利吉が戦争から帰ってからの話にする。後にそのとおりになった。

7 娘の百合を射殺した茂助は後悔から恐怖を感じ発狂してしまった。牧師は彼を精神病院へ送り店は閉めさせた。茂助は病院で一생을過ごした。

前に示したリグニー（リニー）の戦争部分を竹風日記から引用する。物語の締めくくりである。

【竹風】恐らくは、里具泥の戦争で名誉の戦死を遂げたのであらう、と云ふ噂である。390頁

リニーの戦いとは1815年6月16日にナポレオンがドイツ軍と戦い最後に勝利した戦争だ。保正はそこで戦死したという風の便りである。原作は「彼はリニーで戦死したと云ふ噂である（Bei Ligny soll er gefalledn sein.）」（豊隆訳508頁。マーシャル英訳は“*It is supposed that he fell at Ligny.*”）だ。物語は突然断ち切られたように終了する。それが作品の余韻をかもし出す。

しかし呉構漢訳はそうには終わらせない。上に見ているように補足がつづいている。保正の戦死についても同様だ。

【呉禱】且説約西和檀柯等効力沙場。積得戦功不小。這時德国的後備軍。在欧洲很有些声名。不料有一次德法两国。在利古尼地方交戦。欧洲歴史上很有名的。称利古尼戦争。約西出於意外。竟在槍砲裏頭。力戦陣亡。可知約西今番出門。早已立定主意。預備馬革裹尸。断不願生還郷里。188頁

さてヤスマサとタニグチらは戦場で尽力し、その積んだ戦功は小さいものではなかった。その時、ドイツの後備軍は欧洲にあつて名声を高めていた。はからずもドイツ、フランス両国はリグニーにおいて交戦した。欧洲歴史上に有名なリグニー戦争という。ヤスマサには意外なことだったが、銃砲のなかで奮戦して戦死した。ヤスマサは今度の出征にあたり早くから考えを定めていたことが知られる。戦死するつもりで、生還することは断じて願わなかったのだ。

竹風日記では噂だった。しかし呉禱は実際に見て来たような説明をした。しかも保正の死の決意までも追加している。

加筆は続く。

8 谷口と利吉は保正の遺骸を探し出し回収し、砂田城に運んだ。牧師は正式な葬礼を執り行ない先祖の墳墓に葬った。村長を先頭にして砂田村民は彼を祭った。

9 谷口は保正が百合のことを記述した日記を取りだして牧師に渡した。

10 百合の遺骸も砂田家の墳墓に改葬した。

呉禱による以上の加筆は『賣国奴』という作品には不必要なものだ。

呉禱は最後に意外な展開を披露する。筆者が驚き落胆した箇所を示す。

【呉禱】村裏的人。因為敬重欧麗。又湊集了銀錢。替他建造一座極華麗的十字架石碑。由教士將約西日記簿上所載事跡。刻在碑上。以垂久遠。昭示後人。至今遊人到史那特村。沒一箇不訪問欧麗遺跡。到他墳前讀看碑文。行箇追悼礼的。188頁

村の人々はユリに敬意をはらうために金を集めて彼女のためにとっても華麗

な十字架の石碑を建造した。牧師がヤスマサの日記に記載がある事跡を石碑に刻ませた。永久に残し後人に明示したのである。今にいたるまで遊覧客はスナダ村に来るとユリの遺跡を訪ねない人はひとりもおらず、彼女の墓前に行き碑文を読んで追悼の礼を行なうのだった。

本書の題名『賣国奴』が示している。国を裏切った人物にまつわる物語だ。賣国奴男爵の息子というだけで非難される保正の苦悩と反抗する行動を記述する。召使い、奴隷である百合は賣国行為を実行した女性にほかならない。保正と百合のふたりは「賣国奴」という単語で結びつく。

百合は保正に尽くす無私存在だ。ふたりの純愛を主題にする小説であってその背後に「賣国奴」の烙印がついてまわる。ゾーダーマンはレギーネ（百合／欧麗）にふさわしい結末を用意した。保正は彼女の遺骸を手厚く心を込めて丁寧に自宅の庭に葬ったのだ。それで十分ではないか。呉禱はなぜそこで踏みとどまらなかったのか。大いに疑問である。

呉禱漢訳にはいくつかの小さな誤訳がある*26。また呉禱が必要だと考えた個所には加筆もほどこした。「猫橋事件」については位置的勘違いもする。そういう欠陥はあるにしても竹風日訳を基本的には忠実になぞっている。そこが呉禱のよいところだと筆者は評価する。

清末民初時期では翻訳に訳者の創作を組み込んだ翻案風の作品も刊行されたことはある。しかし呉禱漢訳はそれらとは違うと判断している。だからこそ本漢訳にある最後部分の大きな加筆は見逃すことができない。

最後部分に後日譚を付加したのは漢訳としてやりすぎだ。翻訳の基本をはずれるからである。

よりもよって百合の十字架石碑を建てて観光遺跡にするとはどういうことだろうか。呉禱は百合に対して感情的に同情し肩入れしすぎた結果だろう。庭に埋葬された百合をそのままにしておくに忍びなかった。かわいそう過ぎると思ったからだ。それにしても観光遺跡にするとは。まったく想像をこえる余計な書き加えだ。

呉禱漢訳よりも先行する周氏兄弟の作品に似たものがある。魯迅「斯巴達之魂」

(1903)、周作人「狭女奴」(1904)だ。兄魯迅が「斯巴達之魂」で創造したスパルタの女性英雄セレナがいる。スパルタの常識を覆して彼女に自殺させた。それにより魯迅はスパルタの世界を破壊した。弟周作人は漢訳して「アリ・ババ物語」の女奴隷モルギアナに幸福な結末を与えなかった。書き換えて行方不明とした。そうしてアラビアン・ナイトの世界を破壊した*27。

両作品ともに女性が鍵を握っている。それが原因となって問題が発生した。

呉構漢訳も女性レギーネが引き金である。呉構が百合について創作した後日譚は周氏兄弟が行なった作品世界の損壊に匹敵する。

賣国奴固有名詞対照表 数字は頁数。網羅していない

原作	豊隆	竹風	呉構
Korse	コルシカ人	奈破翁ナポレオン大帝	拿破崙皇帝
		コルシカ	科士嘉
Gibraltars	ジブラルタル	ジブラルタル	支伯拉達
Nordkap	ノルドカプ	那威ノルウエイ	瑙威国
Bourbonen	ブルボン		
Robespierres	ロベスピール		
Talleyrands	タレイラン		
Kosaken	コザツク		
Heide	ハイデ村	灰田はいで村	海蝶村
Steinschen	シュタイン		
Dannigkow	ダニコーフ	蓮華寺れんげじ	蓮華寺
Baumgart Boleslav von Schranden	バウムガルト中尉 ボレスラフ、 フオン、シユランデン 140	偽名ノ山園やまぞの中尉 砂田すなだ保正やすまさ ×	雅曼 史那特 約西
Platen	プラーテン		
Litauern	リタウエル人 リタウエン人 410		
Bülowschen	ビューロー		
Marnestrom	マルネ河	園根まるね川ノ河 219	瑪爾奈河
Weichsel	ワイクルセル	和意比世留わいひぜる	槐若河
Königsberg	ケーニヒスベルク 16 キョーニクスベルク 38	王城	京城 ×柏林京城 誤り
Karl Engelbert	カール、エンゲルベルト	谷口たにぐち 16,117,131	檀柯
Johann Radtke	ヨハン、ラートケ	世羅せら	薛崙
Felix Merckel	フェリツクス、メルケル	目賀田めかた利吉りきち	梅克戴 黎克

呉構漢訳ズーダーマン『賣国奴』

Schranden	シユランデン	砂田すなだ	史拿[那]特
Peter Negenthin	ペーテル、ネゲンテイン		
Masurschen	波蘭土ぼーらんど		
Katzensteg	カツツエンシユテツヒ 22 カツツエンシユテヘヒ 197	猫橋ねこぼし 22	猫橋
böhmischen	ボヘミヤ 30		
Arkansas	アルカンサス		
Götz	ギヨツツ 32	老僧らうさう	基督教士
Helene	ヘレネ	藤子ふぢこ	福萋
Pregelstrom	プレーゲル 47		
Bonaparte	ボナバルト 48		
Regine Regine Hackelberg	レギーネ レギーネ、ハツケルベルク 407	百合ゆり	欧麗
Latour	ラツール大佐 56	羅徳らとく大佐	羅斯忒 参将
Litauens	リタウエン	一僻村	一箇冷僻的小村
		ハムレット 51	
Hans Hackelberg	ハンス、ハツケルベルク	寺島てらしま茂助もすけ 寺嶋茂助 334	穆斯克
Diana	デアアナ 71 デアアーナ 494	デアアナ 59	戴婀娜
Gnäd'ger Junker	Gnädiger Junker 80	御前様 65	小主人
Gnäd'ger Herr	殿様 der Gnädiger Herr		
Herr	Herr		
Bockeldorf	ボツケルドルフ 88	鹿野しかの村	稀客村
von Schön	フオン、シエーン 93		
Amalie	アマリエ 99 アマーリエ 218	女中 竹たけ 324、女中 332	僕婦 徳坤
Marianne	マリアンネ 108		
Hans Eberhard von Schranden	男爵ハンス、エーベルハル ト、フオン、シユランデン	男爵砂田すなだ正猛まさたけ	男爵史那特 嗎達
Sellenthinschen Schwadron	ゼレンテイン中隊 138		
Grafen Dohna	ドーナ伯爵 146		
Madonna	マドンナ 194		
Hagars	ハガール 197		
Furien	フーリエ神 205		
Hoffmann	ホツフマン 216		
Weichert	ワ"イヒエルト 217		
Kazabeika	カツアベイカ 238		
Evastochter	イヴの娘 239		
Sultan	スルタン 262/犬		
v. Krotkeim	フオン、クロートハイム 300	黒上くろかみ郡長	郡長克洛干
Marmont	マールモン 315		

呉構漢訳ゾーダーマン『賣国奴』

von Kleist	フオン、クライスト将軍 315	栗田くりた大将	柯黎丹提督
Therouanne	テルアンヌ河	照名てるな河	台爾那河
Mortier	モルチエール		
Napoleon	ナポレオン 316		
Blücher	ブリュツヘル元帥	元帥	元帥
von Schack	フオン、シヤツク小佐	佐々木ささき中佐	薩士坤遊撃
von Wolzogen	フオン、ヴォルツオーゲン少佐 318		
schlesischen Landwehr	シユレジエン		
Konitz	コーニツツ 322		
Stargard	シユタールガルド		
Wartenstein	ワルテンシユタイン 304,323	待石まついし町 287,409,412	慕義(莪)街
Friedrich Wilhelm	国王 フリードリツヒ、キルヘルム 325	普国王維廉キルヘルム	德国皇帝王維廉
Virginus	井”ルジニウス 339		
Kain	カイン 354		
Furienheer	フーリエ 382		
Prometheus	プロメトイス 398		
Metternichschen	メテルニツヒ 399		
Quadrille	カドリール		
Liekewoschen	リエケヴオ 405		
Elba	エルバ 411	エルバ島 278,290	愛爾巴島
Nichel Grossjohann	ミヒエール、グロスヨハン 423	大川おおかは至いたる	霍家華
Franz Malky	フランツ、マルキー	丸木まるき倉助くらすけ	馬倫基
Emil Rosner	エミール、ロースネル	茨木いばらぎ美代吉みよきち	伊博拉
Ostern	オーステンの祭		
Born	ボルン 450		
Bichler	ビツヒラ		
Leonore Prohasca	レオノーレ、プロハスカ		
Ligny	リニー508	里具泥リグニー	利古尼

【参考文献】

石崎 等「『虞美人草』の周辺——漱石とゾーデルマン」『跡見学園短期大学紀要』第11

号 1975.3 電字版

徐 從輝「談周作人的一組佚文」『新文学史料』2013年第3期（総第140期）2013.8.22

徐從輝編『周作人研究資料』上下巻 天津人民出版社2014.1 中国現当代作家研究資料叢書

- 吳 曉樵「周作人对晚清德語小説訳作《賣国奴》的評価」『新文学史料』2014年第4期
(総第145期) 2014.11.22
- 文 娟「試論吳構在中国近代小説翻譯史中的地位——以商務印書館所刊單行本為研究視
角」『明清小説研究』2018年第4期(総第130期) 2018.10.15
- 荒井由美「吳構についての文娟論文」『清末小説から』第133号 2019.4.1

【注】

- 1) 阿英『晚清文藝報刊述略』上海・古典文学出版社1958.3／中華書局編輯所編輯、北
京・中華書局1959.8上海第一次印刷。「半月刊。李伯元主編。始刊于光緒癸卯（一九〇
三）年五月，至丙午（一九〇六），因伯元逝世休刊，共行七十二期」17頁
- 2) 上海図書館編『中国近代期刊篇目彙録』（2）1900-03年分 上海人民出版社1979.10
- 3) 張純「關於清末《繡像小説》半月刊的終刊時間」『晚清小説研究通信』第1号 1985.4
張純「關於《繡像小説》半月刊的終刊時間」『徐州師範学院学報』1986年2期 1986.6.15
- 4) 楊鳳鳴「吳構与契訶夫——從《黑衣教士》看吳訳受到的日本影響」『東方翻譯』2013
年第6期(総第26期) 2013.12。「日本登張竹風訳的《賣国奴》于1904年4月連載在《明
星》雜誌上，同年9月15日，金港堂書籍株式会社出版該訳本の單行本」19頁。この説明
は正しくない。なぜなら『明星』には連載されていないからだ。訳本内容を圧縮して章
回しただけ。1回の掲載にすぎない。別稿「登張竹風「賣国奴」の雜誌『明星』掲載に
ついて」を参照のこと。
- 5) 行数字数とも同一。ただし雑誌連載の都合で行送りが異なる。第2回の2ヵ所が單行
本18頁で漢字が入れ替えられただけ。9行「福呀」→「福萸呀」。11行「令福萸」→
「令他」
- 6) 中村忠行「吳構訳『賣国奴』その他」『中国文芸研究会会報』第24号1980.7.28。登張
竹風の子息正實所蔵の再版本を示している。
- 7) 付建舟『商務印書館《説部叢書》叙録』北京・中国社会科学出版社2019.8
- 8) 陳大康『中国近代小説編年史』北京・人民出版社2014.1。略称[編年]②③。[大康
18]は陳大康「附録1 近代日報小説資料長篇」「附録2 近代小説專刊資料長篇」
「附録3 近代翻譯小説資料長篇」『中国近代小説史論』北京・人民文学出版社2018.3
国家哲学社会科学成果文庫
- 9) 1例をあげる。日本尾崎徳太郎著、錢塘吳構訳『（立志小説）美人煙草』上海・中国

商務印書館、光緒三十二年歲次丙午季夏首版／光緒三十二年丙午九月二版、説部叢書第六集第三編（実藤文庫）がある。それが初集第53編奥付では「丙午年十月初版／中華民國三年四月再版」になる。元版の「丙午季夏（六月）」が後刷りの初集で「丙午年十月」に変更された。

- 10) 中村忠行「呉構訳『売国奴』その他」『中国文芸研究会会報』第24号 1980.7.28
- 11) 中村忠行「清末探偵小説史稿——翻訳を中心として（3・完）」『清末小説研究』第4号 1980.12.1
- 12) 關文文『晚清報刊上の翻訳小説』済南・齊魯書社2013.5。「而《繡像小説》所登載的《小仙源》、《珊瑚美人》、《回頭看》以及《夢遊二十一世紀》、呉構翻譯的《賣国奴》則是在連載之前就有了商務的單行本。將單行本自行拆開在雜誌上連載，在當時的刊物中比較罕見，也說明了這些翻譯小說的受重視程度」62頁。注：「夢遊二十一世紀」が該当する。
- 13) 上海・商務印書館1937.5／修正版。北京・作家出版社1955.8北京第一版（1958.3北京第二次印刷）ほか
- 14) 中村忠行「徳富蘆花と現代中国文学（2）」『天理大学学報』第2巻第1・2号 1950.11.26
- 15) 中村忠行「晩清に於ける文学改良運動」『国語国文』第21巻第1号 1951.12.15
- 16) 中村忠行「政治小説に於ける比較と交流」『文学』第21巻第9号 1953.9.10
- 17) 中村忠行「清末の文壇と明治の少年文学——資料を中心として——2」『山辺道』第10号 1964.1.25
- 18) 長谷川泉編「年譜・登張竹風」『明治文学全集』40「高山樗牛／齋藤野の人／姊崎嘲風／登張竹風集」筑摩書房1970.7.30／1984.2.20初版第四刷
- 19) 村上浜吉著作兼発行人『明治文学書目』村上文庫 1937.4.30／飯塚書房1976.7.10影印
- 20) 塩野加織「翻訳からの出発、あるいは翻訳へのお出発——井伏鱒二訳『父の罪』論」『日本近代文学』第85集 2011.11.15 電字版。30頁の注14
- 21) LINDENBAUM VERLAG GMBh, 2005、電字版 BERLIN, 2016 版を使用。BERLIN: 1889 project gutenberg 所収。また次がある。STUTTGART, 1892 hathi trust 所収。BOSTON: D. C. HEATH & CO. 1899 open library 所収
- 22) 参考にした日本語訳は竹風を除いて次のとおり。
ズウダアマン著、小宮豊隆『罪』博文館1914.12.8。背と本文は「罪（カツツエン／シユテーヒ）」197頁も。22、49頁は「カツツエンシユテツヒ」

ズウデルマン著、井伏鱒二訳『父の罪』聚芳閣1924.9.10初出未見。『井伏鱒二全集』
第28巻 筑摩書房1999.12.25

BEATRICE MARSHALL 英訳 “REGINA OR THE SINS OF THE FATHERS” 1895
/LONDON, NEW YORK: JOHN LANE, 1898 project gutenberg、open library/
1904 hathi trust

ズウデルマン著、生田春月訳『猫橋』新潮文庫1939.8.22。底本は1928年二百十版とい
う。

23) 竹風日訳は「吊橋」57頁。豊隆訳は「刎橋」68頁。原文は“Zugbrücke”。マーシャ
ル英訳は“drawbridge” p.52。跳ね橋の意。

24) マーシャル英訳を参考までに示す。

And afterwards when they let her go, and she had made her way home alone, with
the wages of her sin in her pocket — how the cracking of bullets, the beating of drums,
the clouds of gunpowder, the death-shrieks of the massacred, must have followed her,
galloping at her heels like an army of furies ! p.260

25) 砂田城炎上の年次について原作に1807年と1809年の2説がある。竹風もそれを踏襲し
ており統一はしていない(48頁と319頁)。同じく呉禱は26頁と149頁。

26) いくつかあるうちの2例のみを指摘する。

「阿弥陀に冠った軍帽」8頁→「頭上戴着亜弥陀軍帽(アミダ軍帽をかぶって)」5頁。
「阿弥陀に冠る」とは後ろ下がりにかぶること。助詞の「に」が理解できなかったよう
だ。「アミダ軍帽」という名前の帽子にした。

「一同四方山の物語をしたとき」11頁→「同上薬門山講話的時候(ヨモ山へ行って物
語をしたとき)」6頁。「四方山の物語」はさまざまな話をする事。それを「ヨモ山」
という地名にした。

27) 樽本「魯迅「斯巴達之魂」について」『清末小説』第22号 1999.12.1。のち『清末翻
訳小説論集』2007.5.1、『清末翻訳小説論集(増補版)』2017.1.15 電字版所収。

樽本「周作人漢訳アリ・ババ「侠女奴」物語」『清末小説』第26、27号 2003.12.1、
2004.12.1。のち『漢訳アラビアン・ナイト論集』2006.6.1、『漢訳アラビアン・ナイ
ト論集(増補版)』2017.1.15 電字版所収。

【追記2022.10.1】陳鵬安(浙江财经大学日文系)の博士論文「呉禱翻訳研究」(北京師範

大学、2020.6審査通過）があると知らされた（2022.1）。現在も見っていない。『清末小説から』に掲載した（する）呉構関係の日本語論文は該博士論文とまったく関係がないことをここに明記する。

登張竹風「賣国奴」の雑誌『明星』掲載について

清末小説研究会ウェブサイト2022.9.21に掲載（一部修正）。登張竹風「賣国奴」が雑誌『明星』に掲載されたと指摘する文章がある。あたかも『明星』連載後に単行本になったという印象を与える。『明星』掲載の「賣国奴」は内容要約にすぎない。1回だけの掲載であるのが事実だ。楊鳳鳴の別論文について追加した。

登張竹風「賣国奴」が雑誌『明星』に「連載」されていたという誤解がありません。「連載」とカッコで括ったのはそれが誤りだからです。

文娟『前『五四』時代的文化符号：商務印書館与中国近代小説』（桂林・広西師範大学出版社2021.6）に次のような複数の記述を見受けます。簡単な内容ですから翻訳はしません。

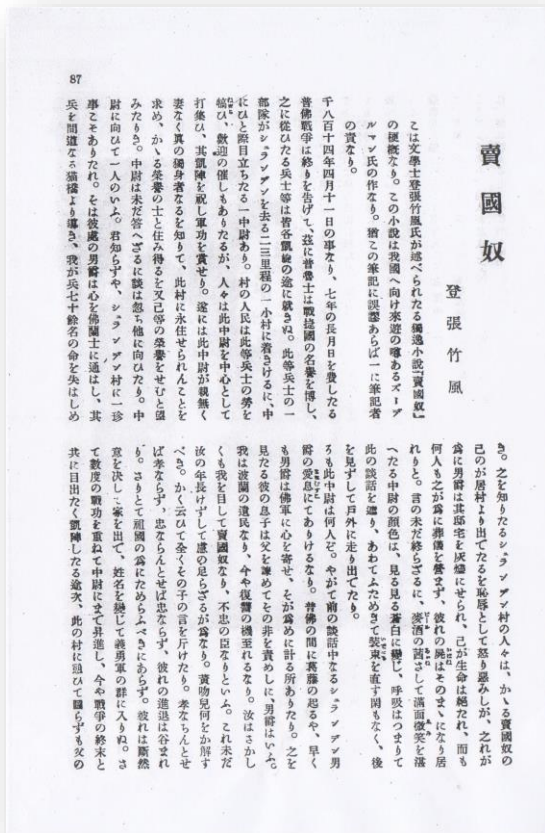
「根據樽本照雄《新編増補清末民初小説目録》中的著録，登張竹風所訳《賣国奴》于1904年4月在日本《明星》雜誌上連載，同年9月15日金港堂書籍株式会社出版単行本」115頁注①。（樽本注：樽目録第3版からその後の第14版にも『明星』の記載は一切ありません。上の前半部分の記述は誤りです。24頁注②、66頁注②も同様）

「吳禱所訳的《賣国奴》転訳自登張竹風の日記本，其訳1904年4月在《明星》雜誌上連載的時候，所使用的標題則“賣国奴”，而同年9月15日金港堂書籍株式会社出版的単行本也是這個題目」117頁

「（徳）蘇徳蒙著，登張竹風訳《賣国奴》，1904年4月《明星》連載」206

頁

「例如《賣国奴》這部德國小説の日文訳本，1904年4月日本《明星》雜誌上連載，單行本在同年9月15日出版，而出版商正是金港堂書籍株式会社」
207頁



登張竹風「賣国奴」『明星』創刊第五年紀念特別刊行桜花号 明治37年第4号 1904.4.1（国立国会図書館所蔵 複製版）

いずれも登張竹風日訳『賣国奴』が先に日本の雑誌『明星』に「連載」され、そのあと単行本になったと記述しています。雑誌連載後に単行本になるのはよくあることです。

しかし文娟は「連載」と書きながら明細を示さない。実物で確認していないと

わかります。

しかも典拠を明らかにしていません。調べると楊鳳鳴「吳禱与契訶夫——従《黒衣教士》看吳訳受動的日本影響」（『東方翻訳』2013年第6期（総第26期）2013.12）に次のようにあります。「日本登張竹風訳的《賣国奴》于1904年4月連載在《明星》雜誌上，同年9月15日，金港堂書籍株式会社出版該訳本的単行本」19頁。また楊鳳鳴「近代中国文学翻訳中的日本影響——以吳禱為例」（太原・山西大学碩士論文2014.6.1。こちらは文娟該書「参考文献」の198に収録。436頁）の8、24頁にほぼ同じ語句があります。しかし文娟は関連個所に典拠を明示する注釈をつけていません。無断借用だといわれてもしかたがないでしょう。

たしかに登張竹風「賣国奴」は『明星』（明治37年第4号 1904.4.1。国立国会図書館所蔵）に掲載されました。ところがそれは竹風が口述し筆記者が記録した翻訳の内容要約にすぎません。

「こは文学士登張竹風氏が述べられたる独逸小説『賣国奴』の梗概なり。この小説は我国へ向け来遊の噂あるズーデルマン氏の作なり。猶この筆記に誤謬あらば一に筆記者の責なり」とあるとおり。1回完結の短文です。これをもって日本語翻訳というのは無理があります。ましてや訳文の全部が「連載」されたわけではありません。

以上の実情を見れば『明星』掲載後に単行本『賣国奴』になったと説明することは不可能です。そう明記しておきます。

漢訳ドーデ「ベルリン包囲」

——呉禱、竊名、胡適

『清末小説から』第149号（2023.4.1）に掲載。民国初年にドーデ「ベルリン包囲」を漢訳した呉禱、竊名、胡適の3名がいる。それぞれについてその底本を特定し翻訳内容を検討する。

1 はじめに

アルフォンス・ドーデ（Alphonse Daudet、1840-1897）「ベルリン包囲 Le Siège de Berlin」（1873）がある。ナポレオン1世時代に胸甲騎兵だったジューヴ老大佐が主人公だ。彼は愛国精神に凝り固まって妄想を発揮し周囲の人もそれを助長する。悲喜劇短篇小説だといっている。

中華民国初期に3名が該作を漢訳した。呉禱「拊髀記（嘆きの老愛国者物語）」（1913）、竊名「老将愛国談（老将愛国物語）」（1916）、胡適「柏林之圍（ベルリン包囲）」（1914）である（記述の都合で発表年順にはしていない）。漢訳題名は違うが同じドーデ作品だ。1913年から1916年までという短期間に同一作品の漢訳が3作も出た。

単にドーデ作品が漢訳されたように見えるかもしれない。現在の感覚からいえばフランス語から直接翻訳されたと考えるのが普通だろう。

しかし清末民初では事情が異なる。呉禱、竊名、胡適ともに理解する外国語はフランス語ではない。呉禱は日本語だし胡適は英語だ。「老将愛国談」の漢訳者は周瘦鵑だという指摘がある（後述）。周瘦鵑（あくまでも仮定として）であれば

英語だ。そうするとドーズの該作品はフランス語以外の言語を経由して漢訳されたことになる。

本稿は各漢訳の底本を特定することを目的とする。日本にはすでに先行文献がある*1。それらを参照している。「老将愛國談」と周瘦鵬の関係についても検討対象とする。

2 呉禱のばあい

呉禱漢訳は次のとおり。(日)押川春浪著、中華呉禱宣中訳「(歴史小説) 拊髀記」(『小説月報』4巻3号 1913.7.25)

そこに明記されているように春浪作品が底本となっている。しかし具体的作品名は明らかではなかった。渡辺浩司がそれを解決した。

渡辺が指摘したその作品は押川春浪「(巴黎奇談) 老愛國者」(『(英雄小説) 大復讐』本郷書院1912.9.21。国立国会図書館デジタルコレクション所収。初出は角書なしの「老愛國者」『中学世界』第10第6-7号1907.5.10-6.10。国立国会図書館所蔵)だ。新しい発見がある論文を読むのは楽しい。



押川春浪「老愛國者」『中学世界』
第10巻第6-7号 明治40 (1907.5.10-6.10)

これにはもうひとつ奥に別の事実が秘められていた。春浪著作年表*2にも書かれていないことだ。すなわち春浪作品は翻訳だった。原作はドーデ「ベルリン包囲」である。春浪は英語ができた。英語訳にもとづいて「老愛国者」が書かれたと考えてよい。

手順としてドーデの英訳、春浪日訳および呉構漢訳を比較対照する。必要に応じてドーデ原作（刊年不記と桜田佐日訳（1936／1987）を参照）を示す。英訳はエジエット（1895）、マッキンタイア（1900）およびアイヴス（1909）を使用する。それらの詳細は注にまとめる*3。

呉構漢訳を知るためには春浪よりもさかのぼってドーデ原作が必要だ。冒頭を示し桜田訳を添える。

【ドーデ】 Nous remontions l'avenue des Champs-Élysées avec le docteur V..., demandant aux murs troués d'obus, aux trottoirs defonçés par la mitraille, l'histoire de Paris assiégé, lorsque un peu avant d'arriver au rondpoint de l'Etoile, le docteur s'arrêta, et me montrant une de ces grandes maisons de coin si pompeusement groupées autour de l'Arc de Triomphe;

《Voyez-vous, me dit-il, ces quatre fenêtres fermées là-haut, sur ce balcon? Dans les premiers jours du mois d'août, ce terrible mois d'août de l'an dernier, si lourd d'orages et de désastres, je fus appelé là pour un cas d'apoplexie foudroyante. p.47

【桜田】 私たちは医者の方さんと一しょにシャンゼリゼーの大通りを登りながら、砲弾に穴をあけられた壁や、散弾に破壊された歩道に、パリが包囲された当時の思い出を尋ねていた。エトワルの広場に出る少し手前まで来ると、医者は立ち止まって、がい旋門の周囲に集まっている華麗な大きい角の家の一つを指さして語りだした。／あのバルコンの上に閉まった四つの窓が見えるでしょう？ 八月の初め——例の騒ぎや災難に悩まされた去年の八月のことです——私は急性卒中症の患者があって、あそこへ呼ばれました。49頁

名前のない人物が一人称で語りはじめる。その人が昨年8月にパリ包囲を体験したV医師から当時の出来事を聞くという構成になっている。

医師の名前は頭文字で「V」と示される。略称のみ。後で引用するが春浪は医者の名前を「ベルナア」と名付けた。創作だ。Vernard かなどと勝手に詮索しても意味はない。呉禱はそれを忠実に漢訳して「貝爾鼈」とする。この部分だけを先取りすれば竊名は「仏安民」と作った。英訳にはないからこれも竊名独自の漢訳である。それらに比較すれば胡適が「V」に漢音を当てて「衛」とした。読者にとって「衛」は姓のひとつにあるから理解しやすかったかもしれない。

参考までに該当部分の英訳2種を掲げる。

【エジェット】 WE were retuening up the avenue of the Champs ^マÉlysées with Doctor V., asking him about the walls riddled with shells, the pavements torn up by grape-shot, in fact, the history of the Siege of Paris, when, just before we got to the Place de l'Étoile, the doctor stopped, and pointing out one of those handsome corner houses grouped around the Arc de Triomphe, said: —

“Do you see those four closed windows up there, over the balcony? In the early day of the month of August—that terrible August of the year '70—so charged with storms and disasters, I was called in there to a frightful case of apoplexy. p.603

【マッキンタイア】 WE ascended the Avenue des Champs-Élysées with Doctor V—, reading, upon those walls pierced with shells and sidewalks dug up with grapeshot, the story of the Siege of Paris. Just before we reached the Rondpoint de l'Étoile, the Doctor paused, and pointing out to me one of thouse great corner-houses which face the Arc de Triomphe with such a pormpous air, he said,—

“Do you see those four closed windows up there over the balcony? In the early part of the month of August of last year, that awful month full of

storm and disaster, I was summoned to that apartment to ateed a severe case of apoplexy. p.42

【アイヴス】 WE were going up Avenue des Champs-Élysées with Dr. V—, asking the shell-riddled walls, and the sidewalks torn up by grape-shot, for the story of the siege of Paris, when , just before we reached the Rond-point de l'Étoile, the doctor stopped and, pointing to one of the great corner houses so proudly grouped about the Arc de Triomphe, said to me:

“Do you see those four closed windows up there on that balcony? In the early days of August, that terrible August of last year, so heavily laden with storms and disasters, I was called there to see a case of apoplexy. p.245

英訳3種ともに用語の一部が異なっているだけ。全体はほぼ同一でドーデ原作のまま。日本語には翻訳しない。違うと言えばエジレットが英訳した時間表記だ。ドーデ原作では「昨年8月」だ。マッキンタイアもアイヴスも「昨年の8月 (August of last year)」と直訳している。しかしエジレットだけは原作にない「(18) 70年の8月 (August of the year '70)」と明確化する。史実ではあるが忠実な翻訳とはいいいにくい。

物語自体が一人称の語りになっていること、およびドーデ原作が昨年8月の話だとしていることを重ねて言うておく。

先に春浪と呉禱の章題を比較する（アラビア数字を使用。ルビ省略。以下同じ）。

- | | | | |
|---|---------|-----|-------|
| 1 | 巴里の古びた家 | 第1章 | 巴黎之旧家 |
| 2 | 老人と令嬢 | 第2章 | 弱女之承歡 |
| 3 | 勝利の幻影 | 第3章 | 戦勝之幻影 |
| 4 | あゝ偽手紙!! | 第4章 | 偽書之怡親 |
| 5 | 最後の日 | 第5章 | 城破之末日 |

ドーデ原作は短篇だから章分けをしていない。春浪はそこに雑誌初出から工夫

をほどこした。

その部分は原作から離れて自由に創作している。呉禱は日訳を忠実に反映しさらに漢字5文字に揃えた。

こちらにも冒頭部分を引用する。ドーデ原作、英訳ともに存在しないことが書かれていることがわかるだろう（下線は筆者。一部のくり返し記号は文字に直した）。

【春浪】私が仏京巴里に滞在して居つた時分の事である、知己になつた多くの人々の中に、医学博士ベルナアと云ふ人があつた、普仏戦争の時巴里籠城をした一人で、半白の老人だがなかなか面白い人物だ。／或日のこと私は此博士と連立つて散歩に出て、一昔前普仏戦争の名残を留めて、今でも弾丸の痕の残つて居る城壁や、爆発弾で砕かれた巨石などを左右に眺めいろいろ籠城当時の話を聴きながら、有名なるエトワール街の曲角まで来ると、博士は急に歩行を停めて、前方の凱旋門に近く、小高い場所に立つて居る一軒の古びた家を指し。／『御覧なさい、あの城楼の右方に、窓の盡く鎖つて居る石造の二階家があるでせう、あの家に就いて一つの悲惨なる話があるです、此静かな場所に一休みして、ゆるゆる其話を致しませう。』と、217-218頁

下線部分が春浪の加筆、書き換えだ。春浪『大復讐』収録の「大復讐」と「女侠姫」は旅行好きの日本人男性が自身で見聞したことを物語る。だからドーデ原作が一人称の語りで始まるのと不思議に一致していて違和感がない。ドーデ作品の語り手が春浪の作ったパリ滞在中の日本人男性（語り手）と重なるという意味だ。日本の読者は「老愛国者」もほかの作品と同じように日本人男性の体験談として受け入れたらう。まさかドーデ原作だとは思ひもしない。

前述のとおりドーデでは「V」医師だが春浪は彼に「ベルナア」の名前を与えた。またアイヴス英訳を示せば「大砲散弾に引き裂かれた歩道（sidewalks dug up with grapeshot/the sidewalks torn up by grape-shot）」箇所を春浪が「爆発弾で砕かれた巨石」とするのも異なる。「歩道」を「巨石」に訳したのは奇妙だ。

しかも春浪はさらに説明して「凱旋門に近く、小高い場所に立つて居る一軒の

古びた家」とした。パリの小高い場所といえは少し離れるモンマルトルだろう。それではエトワール広場での凱進行進を見るのはむつかしい。ジューヴ老大佐はフランス軍の凱進行進を見物するためにだけ凱旋門が間近に見える石造りの建物の一室に引っ越したのだった。春浪の書き方だとその前提が崩れる。

もうひとつ春浪の書き換えがある。パリ籠城（包囲）を「一昔前」のことにした。一昔前の戦争でありながらいまだに破壊部分が残っているとするのは不都合だとは考えなかったらしい。

ドーデでは「去年の8月（mois d'août de l'an dernier）」（p.47）となっている。昨年のことだからこそ生々しい損傷現場のままなのだった。

マッキンタイアとアイヴスの英訳は両者ともにドーデ原作と同じ。“August of last year”と同文だから区別がつかない。それを春浪は無視した。はるか過去に起こった物語にしてしまった。またエジェットの「70年の8月」とも一致しない。

春浪日記には以上のように部分的な加筆、書き換えはある。しかしドーデ原作の基本的構造は動かさない。直訳ではなく独自の解釈をほどこした翻案混じりといったところだ。

呉禱漢訳を見る。

【呉禱】話說俺僑寓法京巴黎之時。所交接的朋輩很多。知己的也不少。內中有一位医学博士。名叫貝爾竊。當普法爭戰時候。普軍圍攻巴黎。萬分緊急。正當援盡糧絕之時。貝博士也在城中。受過這番困苦。如今已變成一個頹白老人。却是極有趣味瀟灑不羈的人物。那一天。俺和博士蕭閑無事。出外遊行。見城壁上留著許多砲彈殘痕。和開花彈炸碎下來的大石塊。便覺從前普法爭戰情景宛然如在目前。好不傷懷悵觸。起了無窮今昔之感。眺望一回。一面緩緩踱走。一面又聽見博士講述守城時候情景。及至來到巴黎著名的愛德華街拐角上。貝博士忽地停了脚步。指著靠近前面凱旋門。有個地勢略高的處在。一所旧家房屋。說道。你瞧著。那城樓右邊有一所純用人工鑿石建造窗櫺盡行鎖閉的二層樓房屋。這戶人家。當時有一段極悲慘的事情。如今這地方曠闊幽靜。老夫且將那原因始末。對你追述一番。遣遣愁懷。做

個酒後茶餘的談助。説著。1頁

さて私が仏京パリーに滞在していた時のことだ。交際した友人は多く知り合いになった人も少なくはなかったが、その中に医学博士がいてベルナアといった。普仏戦争の時、プロシア軍がパリーを包圍してとても切迫したことがあった。ちょうど援助も食糧も絶えた時、ベルナア博士もそこにおいて困苦を味わったのである。今では白髪まじりの老人になっているがとてもおもしろく屈託のない非凡な人物だ。その日、私と博士は気晴らしに散歩に出かけて城壁に残る多くの砲弾痕や炸裂弾で砕かれた大石を見て、以前の普仏戦争の情景があたかも目前にあるかのように感じ大きな悲しみに触れ、限りない今昔の感情が沸きおこった。左右をながめゆっくりと歩いて博士が籠城当時の様子を話すのを聞きながらパリーの有名なエトワール街の曲がり角まで来るとベルナア博士は急に歩みを止めて前方の凱旋門に近い小高くなった場所に古びた一軒の家屋があるのを指さして言った。ごらんなさい。あの城楼の右方に人工石だけで建造した、窓のすべて閉まった二階建ての家屋があるでしょう。あの家の人についてとても悲惨なことが当時ありました。この広くて静かな場所でわたしめがその原因始末をばお話をいたしましょう。愁いをはらしくつろぎ時の話の種にでも、と言いながら。

呉禱は春浪の日本語訳をほぼ忠実に漢訳している。「ベルナア（貝爾竊）」「エトワール（愛徳華）」も対応する。一軒家になっているのもそのまま。ただし少しの加筆がある。「去年8月」の物語であるにもかかわらず春浪が省略して「一昔前」とした。それが呉禱の誤解を発生させた。「半白の老人だ」というのを「今では白髪まじりの老人になっている（如今已變成一個頰白老人）」と時間の経過を長くしてしまった理由だ。

だから「老夫」と老人の一人称にもしている。また呉禱は伝統的説話に慣れているから「做個酒後茶餘的談助（くつろぎ時の話の種にする）」と常用句を不用意に使用してしまった。これから語る話の内容がパリ包圍の悲惨な状況であることを忘れている。不釣り合いである。

その老大佐がフランス軍の敗北報道を知って意識を失って倒れた。V医師が彼を診察した。フランス軍は負け続けている。その事実を知れば精神的に打撃を受けるだろう。症状が悪化する可能性がある。孫娘とV医師は嘘の情報を老大佐に与えることにした。

ナポレオン1世時代に胸甲騎兵だったジューヴ老大佐はフランスの大勝利を信じている。それだけに頼って老大佐の精神と身体が維持されているのが実情だった。プロシア軍に敗れていることを隠しとおそうとする孫娘は春浪により「アリーア」と名付けられた。ドーデ原作に名前はない。孫娘は従軍している父からと偽り、祖父へあてた手紙も自作する。

プロシア軍がパリに進撃してくる現実過程をそのままフランス軍のベルリン侵攻妄想に置き換えるというのがドーデ原作の骨格だ。パリ包囲がすなわち老大佐にとってはベルリン包囲となる。

フランスの勝利を確信する老大佐が見ているものは部屋中に飾った過去の栄光を証明する品々である。自分が従軍したナポレオン戦争関係と当時の記念品ばかりだ。老大佐の精神内部は見ることができない。それを説明するために目に見える具体的な物品を代わりに示すのがドーデの記述方法だ。底本確定に関係するその箇所を示す。比較をするために二重下線をほどこした。

【ドーデ】 Des portraits de maréchaux, des gravures de batailles, le roi de Rome en robe de baby; puis de grandes consoles toutes raides, ornées de cuivres à trophées, chargées de reliques impériales : des médailles, des bronzes, un rocher de Saint-Hélène sous globe, des miniatures représentant la même dame frisottée, en tenue de bal, an robe jaune, avec des manches à gigots et des yeux clairs; pp.52-53

【桜田】 元帥たちの肖像や、戦争の版画、子ども服を着たローマ王、それからぶんどり品の銅器で飾られた大きながんじょうなテーブル。テーブルの上には、メダルだとか、銅像だとか、丸いガラスぶたの中に入ったセント・ヘレナ島の岩石などという帝政時代の遺物、そでのふくらんだ黄色いローブの舞踏会の服装の、目の澄んだ縮れ髪と同じ婦人を描いた、いくつ

もの密画が載っています。54頁

「子ども服を着たローマ王 (le roi de Rome en robe de baby)」はナポレオン2世を指す。その肖像画が知られている。ナポレオンその人の肖像ではない理由は不明。

筆者が注目するのは二重下線をほどこした「丸いガラスぶたの中に入ったセント・ヘレナ島の岩石」だ。ナポレオンはセント・ヘレナに流刑となりそこで没した。英訳も見る。

【エジェット】 Portraits of Narshals, engravings of battles, the King of Rome in a baby's robe; then large stiff consoles, ornamented with copper trophies, laden with Imperial relics, medals, bronzes, a stone from St. Helena, under a shade, miniatures— all representing the same lady, becurled, ball costume, in a yellow dress with leg-of-mutton sleeves, and bright eyes— p.605

【マッキンタイア】 Portraits of marshals were there, engravings of battles; there was a picture of the *King of Rome* in baby robes. There were tall stiff consoles ornamented with trophied brass, and loaded with imperial relics, medallions, bronzes; there was a bit of the rock of St. Helena under a glass globe; there were numerous miniatures always representing the same lady, in ball-room costume, in a yellow robe with leg-of-mutton sleeves, a pair of bright eyes glancing from beneath her carefully curled locks. pp.46-47

【アイヴス】 Portraits of marshals, engravings of battles, the King of Rome in a baby's dress, tall consoles adorned with copper trophies, laden with imperial relics, medals, bronzes, a miniature of St. Helena, under a globe; pictures representing the same lady all becurled, in ball-dress of yellow, with leg-of-mutton sleeves and bright eyes; p.252

英訳はほぼ同じだ。ただし1カ所が微妙に異なる。下線部分だ。

マッキンタイアは「丸いガラスの中にセント・ヘレナ島の岩石のかけらがおい
てあった」とする。ドーデ原作のままだ。しかしアイヴスはそれを「丸いガラ
スの中にセント・ヘレナ島の小型模型」と英訳した。アイヴスを使用した
「miniature」には「小型模型」いわゆるミニチュアと「細密画」の意味がある。
しかし「丸いガラス (a globe)」で覆われているのだから「小型模型」である。
岩石のかけらと小型模型では同じものにならない。

そこをエジェットは「ランプ傘 (a shade) の下にセント・ヘレナ島の石」とし
た。「丸いガラス (a globe)」と一致するわけではない。

以上の細かい描写は作品の進行にはたいして影響を及ぼさない。重訳のばあ
いは省略されることもある。

【春浪】室内にはナポレオン一世の肖像画、その他戦勝将軍の画像、戦利
品の長剣、昔の武功を語る勲章など 236-237頁

春浪は全文を削除はしなかった。ナポレオン1世にした。原文にはない「戦利
品の長剣」に入れ替えた。肝心の「セント・ヘレナ島の岩石」がない。底本判定
の手がかりがここでは失われた。

春浪の改変のひとつは老大佐の息子すなわち娘の父が戦死したことを加筆した
ことだ(245頁)。フランス軍が破れているのだから娘の父親も死去したことは
推測できる。ドーデはあからさまにはしなかったのを春浪は念押しした。

春浪は最後部分も書き換えている。イエナの鼓が鳴りシューベルトの凱進行進
曲が聞こえる。老大佐が凱旋門に見たのはフランス軍ではなくプロシア軍隊だ
った。衝撃を受け「武器を取れ、プロシア軍だ」と叫んで倒れて死んでしまう。

英訳を示す。

【エジェット】 And the four Uhlans forming the advanced guard saw
yonder on the balcony a tall , old man wave his arms, totter, and fall, rigid.
This time Colonel Jouve was really dead. p.606

前衛の4人の槍騎兵がバルコニーの向こうで背の高い老人が腕を振るってよろめき、硬直して倒れるのを見た。この時、ジュール大佐は本当に死んでしまった。

【マッキンタイア】 and the four uhlands of the advance-guard, looking towards the balcony above, could see the majestic figure of an old man reeling, his arms outstretched. He fell heavily. This time the shock had indeed proved fatal. Colonel Jouve was dead. p.52

前衛の4人の槍騎兵が上のバルコニーの方をながめると、堂々とした老人が両手を広げてよろめいているのが見えた。彼はどさりと倒れた。このたびの衝撃は本当に致命的なものであった。ジュール大佐は死んだ。

【アイヴス】 and the four uhlands of the vanuard saw up yonder, on the balcony, a tall old man wave his arms, stragger, and fall. That time, Colonel Jouve was really dead. p.259

前衛の4人の槍騎兵がむこうのバルコニーを見上げると背の高い老人が両手を広げてよろめいて倒れた。その時、ジュール大佐は本当に死んでしまった。

我在傍
言語。
明天入
敵到他
明先鋒
也入巴
帶領幾
到得未
知平日
我我不
名天佐
帶數襄
且坦然
一分美
必反倒
先什麼



十五

吳禱漢訳 凱旋見物に準備する老大佐と孫娘



これぞ我備の軍、暫の頃樹るの臨ち怒！勇震る地天は聲吼しし行
賢定やまの思はる勝と。一方の門庭、はれ傷に逸氣らなき銀時と
め成てん敵の地は輝ゆる世に天は光の戦、軍軍四着勝るけ掛な
る。その時、何れは人雲さし、山花と、知將老此の。ち

春浪日訳

「This time (このたび)」「That time (その時)」とわざわざ書くのは老大佐が物語冒頭でフランス軍敗北の知らせを聞いて倒れた前例があるからだ。そこを示す。

【エジェット】 he fell thunderstruck p.603

雷に打たれたように倒れた

【マッキンタイア】 the sudden shock prostrated him p.42

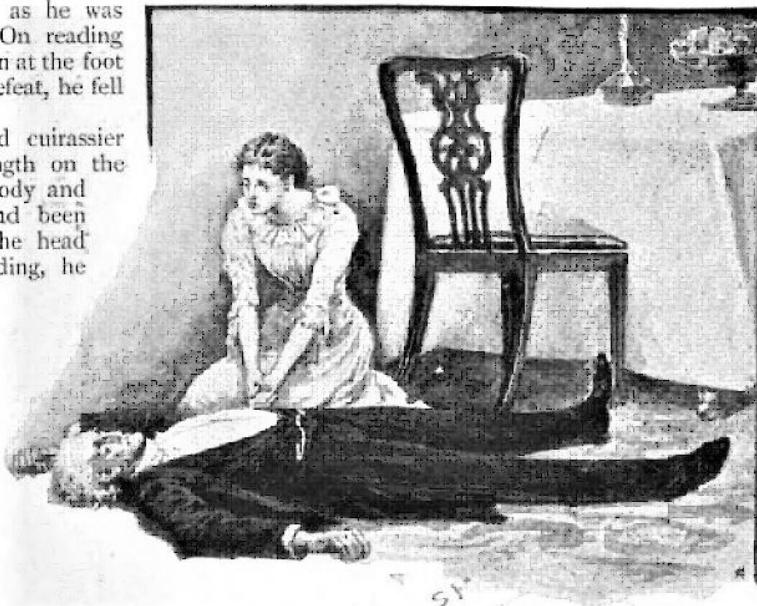
突然の衝撃が彼をなぎ倒した

【アイヴス】 he fell like a log p.246

彼は丸太のように倒れた

ドーデ原作は「稲妻に打たれた (il était tombé foudroyé)」(p.48)だ。それからするとエジェット「雷に打たれたように倒れた」とマッキンタイアの「衝撃が彼をなぎ倒した」がそのままだ。

ie to him as he was
n table. On reading
f Napoleon at the foot
lletin of defeat, he fell
uck.
id the old cuirassier
at full length on the
face bloody and
if he had been
low on the head
ib. Standing, he
ve been
lying, he
mense.
tiful fea-
rb teeth,
head of
te hair,
he was
ghty, he
ce sixty
. Near
r knees,
grand-
She so



“THE OLD CUIRASSIER WAS STRETCHED AT FULL LENGTH.”

エジェット英訳挿絵 横たわる老大佐と見守る孫娘

アイヴスの「丸太のように倒れた」では自分で倒壊したように見える。勢いが違う。前2者のあきらかな外部からの強い圧力に比較するからだ。倒れるのは同じだが熱量に差があるように感じる。

以上を見て春浪日訳と呉構漢訳を示す。

【春浪】何か叫ぼうとしたが其邊もなく、朽木を倒すが如く床に倒れて仕舞ったのである、呼べども答えは無い、呼吸も全く止まった様だ。222頁

【呉構】要想嚷叫上天。也来不及。只聽得撲嗆一声。猶如砍倒枯草朽木一般。跌倒在地 3頁

神様と叫ぼうとしたが間に合わずドスンと音がしてまるで枯草朽木のようになり床に倒れてしまった。

老大佐の倒れ方だけを見れば春浪日訳はアイヴス英訳の方に近いような気がする。どちらかといえば、という程度だ。十分な手掛かりにはならないことはわかっている。

最後は春浪による独自の加筆だ。

【春浪】『祖父様！』と、美しき令嬢は老人の死骸に抱き着いたが、弾丸其前に落つれども起上らぬ、見れば鮮血は滾々として流れて居る、抱き起せば短剣は自ら其心臓を貫いて居つた。／***／以上ベルナア博士は語り終り、最後に沈痛極まりなき一語を加へて、『貴君は日本人、日本を愛するでせうそれと同じこと、仏蘭西人は仏蘭西を愛します、何うか愛国の熱誠を有する者の為に、一滴の涙を灑いで下さい。』／斯く云ひつゝ静かに立上り、凱旋門の遙か北の方角を指して、／『あの蒼鬱たる森の彼方、老愛国者と美しき令嬢が、永久に眠れる墳墓へ行つて見ませう。』（おわり）
249-250頁

春浪はベルナア博士と会話をしているのが日本人だという設定にした。それに合わせて結末を取ってつけた。

『大復讐』に収録する小説はいずれも愛国心の鼓舞を主調とする。本作品でも「愛国の熱誠」を強調したわけだ。

それにしても春浪が孫娘を自殺させてしまったのには驚く。孫娘はそのようには行動しないのではないか。ドーデ原作を知っているから違和感の方が強い。

だが春浪はそうする必要があると判断したから改作したのだろう。日本の読者は孫娘の自殺に理解を示したのか。疑問に思う。

呉禱漢訳の該当部分を次に引用する。

【呉禱】麗娃叫声祖父啊！抱著老大佐的屍骸。牢結不放。任是砲彈子颼颼在身傍。一絲也不動。我湊近一看。只見涇涇地鮮血迸流。只道他是中了砲彈。連忙抱起一看。誰知一支短劍。插入胸間。直向心窩穿貫而入。這時麗娃臉上反顛得淺泛桃花。紅潮薄暈。似乎十分喜樂。格外美艷咧!!!貝爾竊博士對我說罷。這一番事跡。末了兒又說一句極沈痛的話道。足下是日本人。定然愛著日本。和俺法蘭西人愛著法蘭西一般。如今聽了這樣一位愛国的老人。想必感痛悲傷。也要灑下幾点英雄之淚咧。說罷。靜悄悄立起身來。遙指著凱旋門北方角上一個處在。又淒然道。你瞧名邊樹林蓊鬱之中。正是愛国老人紀艾波和他孫女麗娃永睡長眠的墳墓。每當夕陽西下。將近黃昏。我兀自恍惚看見老人歛顏笑靨的形容。和麗娃冰肌玉骨妬月羞花的面貌。（完）16頁

呉禱漢訳は春浪日訳のほぼ直訳となっている。「ほぼ」というのは下線部分を加筆しているからだ。

死んでしまった老大佐に抱き着いた孫娘が起き上がらない。医者が見れば孫娘は短剣で自ら心臓を貫いていた。そういう場面だ。砲弾が近くに落ちたというだけでは不足だと呉禱は考えた。「彼女は砲弾に当たったと言うと（只道他是中了砲彈）」を補足して強調した。

孫娘の様子を描写しないではいられない。「この時アリーの顔はかえって薄っすら桃色にそまって紅潮してかすんだように、まるで十分に楽しそうに格別に美しかったのですよ!!!（這時麗娃臉上反顛得淺泛桃花。紅潮薄暈。似乎十分喜樂。格外美艷咧!!!）」

最後部分も春浪のように「永久に眠れる墳墓へ行つて見ませう」とは提案しない。書き換えをさらに改変して呉禱は医師の回顧にした。「夕陽が西に沈み黄昏ちかくになるたびに、私はやはり老人の笑顔にえくぼの様相とアリーアの美しい肌と月も羨み花も恥じてしまう容貌をぼんやりと目の当たりにするのです（毎當夕陽西下。將近黄昏。我兀自恍惚看見老人歡顏笑靨的形容。和麗娃冰肌玉骨妬月羞花的面貌）」

呉禱は老大佐の妄想に加えて話し手の幻想を追加したということになる。

3 竊名のばあい——周瘦鵑か？

春浪「老愛国者」は道が翻訳して「老将愛国談」になっている。このことを指摘したのも渡辺浩司だ。新しい見解である。訳者「道」について渡辺は周瘦鵑だと推測した。

その根拠のおおよそを示せば次のとおり。

周瘦鵑「磨坊主人」（『小説月報』第3巻第9号 1912.12.25）がもとになる。それが于潤琦編『清末民初小説書系・愛国巻』に収録されて署名が「道」だ。ゆえに「“道”＝周瘦鵑と考えられる」。

重要だからくり返す。周瘦鵑の作品が于潤琦編集本に収録されて「道」と署名される。同一作品に表示する「道」は周瘦鵑である。理屈は通っている。以上を見る限り道「老将愛国談」は周瘦鵑の漢訳だといっている。

しかし渡辺は同時に懸念を表明する。「ただ、先に発表されたと思われる小説月報誌で、本当の姓“周”と字“瘦鵑”を名乗り、後出と思われる《愛國英雄》下編で、“道”という筆名に改めたのは不思議な感じがする」（『清末小説から』第106号2012.7.1. 16頁）。慎重で合理的な判断だと思う。一応の結論に独自の疑問符をつけたと理解する。

以上を読んで、不審点があるにしても私は疑問に思わなかった。つまり渡辺のいうように「老将愛国談」の訳者は周瘦鵑だと考えていたのが正直なところだ。

本稿を書く準備段階で検討した。道と周瘦鵑の関係がどこかおかしい。手元にあるいくつかの資料をならべてみてそのことを確信するにいたる。

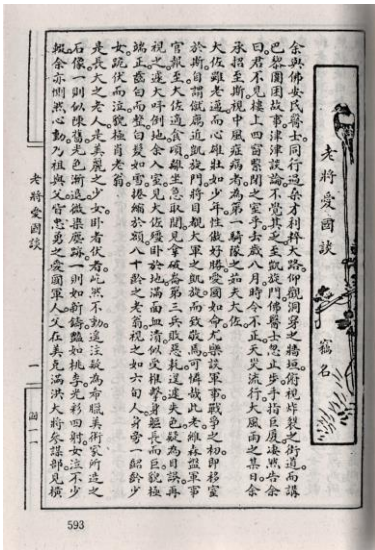
現在判明している範囲内で該作品が転載された順序を図式にして示す。

竊名「老将愛國談」（『小説名画大観』所収）→道「老将愛國談」（『愛国英雄』下編所収）→道「老将愛國談」（于潤琦編『清末民初小説書系・愛国卷』所収）

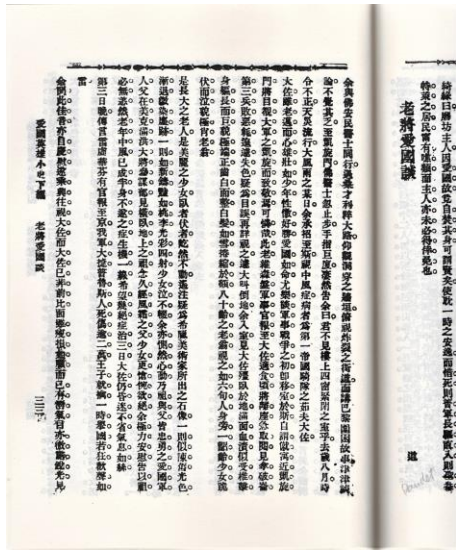
一目瞭然だ。そうして問題の所在をつきとめた。

最初に漢訳をした人は「竊名」だった。ならば于潤琦が典拠とした「『愛国英雄』下編」が「道」に変更したのか。ここが肝要だ。確認する必要がある。

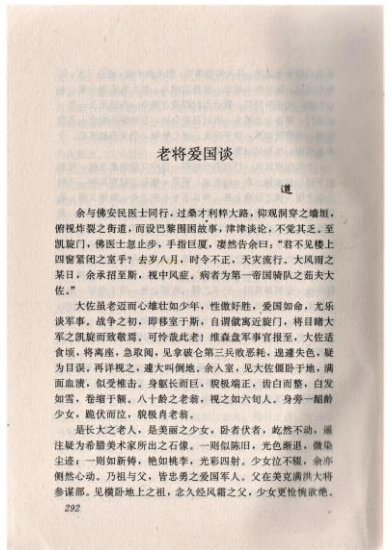
于潤琦本のいう「『愛国英雄』下編」は次に示すように『愛国英雄小史』が正式書名だ。以前は該書を見ることができなかった。影印本を入手してみてもよく署名が「道」となっていることが確認できた。



竊名



→道



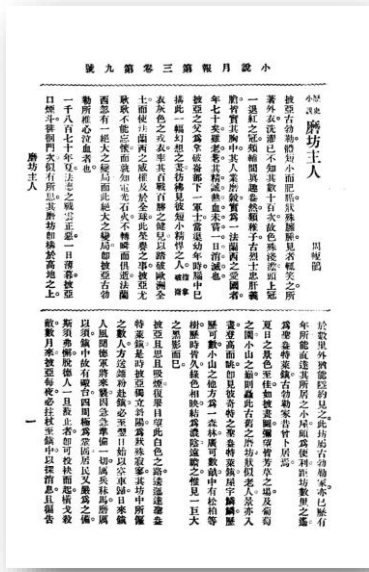
→道

署名について図式化する。竊名（『小説名画大観』所収）→道（『愛国英雄小史』所収）→道（于潤琦編『清末民初小説書系・愛国卷』所収）

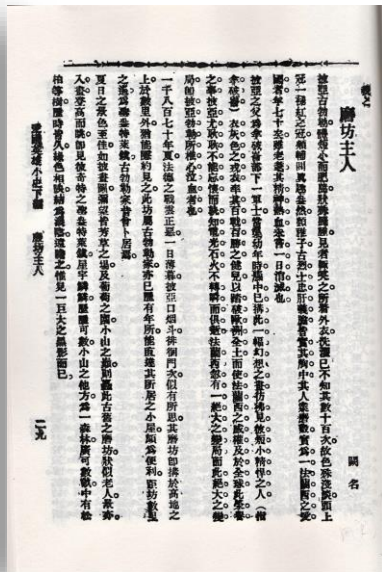
最初は「竊名」だったものが『愛国英雄小史』収録の際になぜだか「道」と変更された。それを于潤琦が継承したということになる。

先に示した「磨坊主人」についても見ておこう。これも発表順に図式化する。

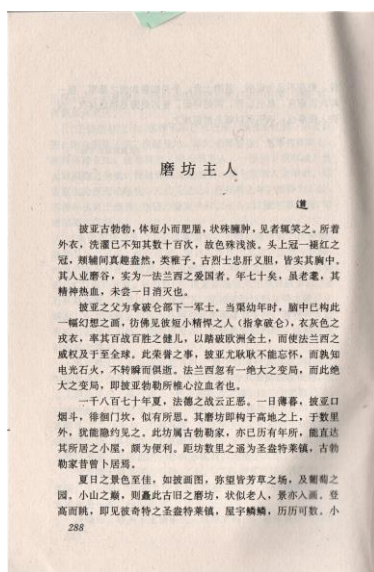
署名だけを示す。



周瘦鵬



一関名



→道

周瘦鵬（『小説月報』初出）→一関名（『愛国英雄小史』所収）→道（于潤琦編『清末民初小説書系・愛国巻』所収）

『愛国英雄小史』に収録された「磨坊主人」の署名は「一関名」なのである。作者不明であるという意味だ。「佚名」と同じ。該書を編集する際になぜかは知らないが『小説月報』にある周瘦鵬の名前を失った。そうして処理した結果が「一関名」表記だろう。

于潤琦がさらに奇妙な編集を行なった。彼は「一関名」とあるそれを「道」と誤記した。どこから持ってきたのか不明だ。事実にもとづいていない。二重の誤りである。典拠不明のため信頼を喪失する。署名が「道」ではないから「道＝周瘦鵬」とはならない。

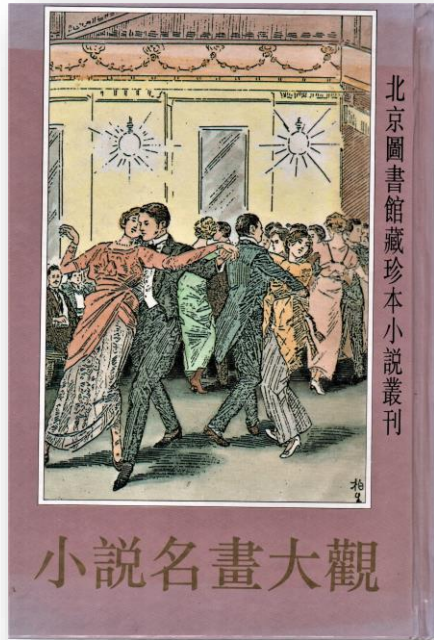
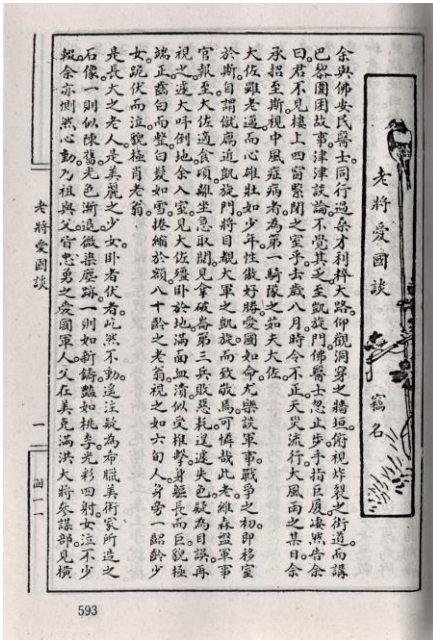
「磨坊主人」について写真を添えて整理し確認する。署名だけの変化をまとめると次のようになる。周瘦鵬→一関名→道（于潤琦による）だ。本来は周瘦鵬と明記すべき作品である。少なくとも使用した『愛国英雄小史』にある「一関名」を写すのが当然だった。それを于潤琦が勝手に「道」と書き換えたと確かめておく。

調べてみれば「道」を作者名とするのは『愛国英雄小史』に限る（合計2例）。ほかの単行本、雑誌には見ることができない。もともと根拠があやふやだった。というわけで「磨坊主人」と「老将愛國談」の著者は関係がなくなる。

ついでに言えば王智毅『周瘦鵑研究資料』（1993）は周瘦鵑の筆名をいくつか掲げるが「道」は収録しない。

「老将愛國談」には次の2種類がある。于潤琦本は含めない。

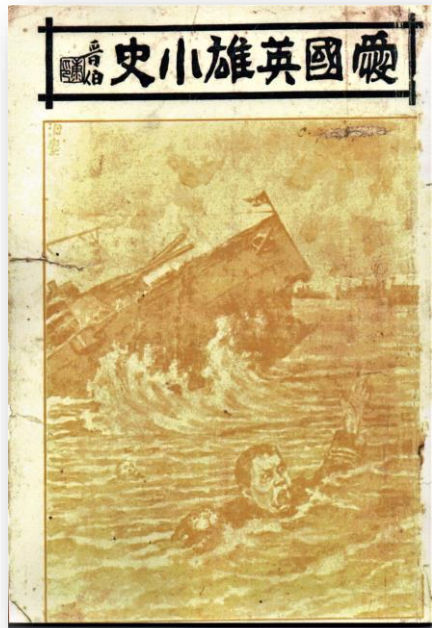
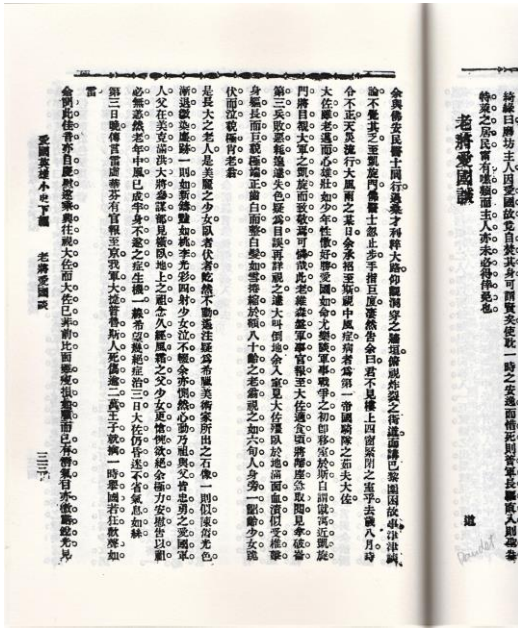
- 1 竊名「老将愛國談」胡寄塵編『小説名画大観』上海・文明書局、上海・中華書局1916.10／北京・書目文献出版社1996.7影印 北京図書館蔵珍本小説叢刊。角書なし。目次は「愛国類」、分類して「愛国小説」。



- 2 道「老将愛國談」王瀛洲編纂、吳綺縁評点『愛国英雄小史』上海・交通図書館1917.8.1、名著小説一千種第一類／[樽本C]奥付なし。35頁が欠。

『小説名画大観』で補うことができる。

注：[付三12] 奥付写真の刊年は中華民國六年八月一号初版。孔夫子旧書網に写真あり。奥付写真は中華民國七年八月一号初版／中華民國八年二月一号再版。再版本は初版の刊行年を誤る。



1の署名は「竊名」、2は「道」となっている。該小説を収録した『小説名画大観』と『愛国英雄小史』はともに編集本だ。それ以前に初出があるのではなかろうか。しかし今それを探し当てていない。

「竊名」名の作品は『小説名画大観』に6篇を収録する。周瘦鵬の作品は別に17件ある。作品は重複しない。

本稿に着手した頃は周瘦鵬の作品だと考えていた。だから次のように書いて説明を継続するつもりだった。

周瘦鵬は英語を理解した。漢訳した当時を回想して次のように述べている。「私が理解したのは英語だけだったからその他の各国名家の作品は英訳から転訳したものにはすぎない（由于我只懂得英文，所以其他各国名家作品，也只有從英訳本轉訳過來）」*4

その後を展開していけば周瘦鵬漢訳は春浪日訳とは無関係だと述べることになる。

ところが実物で確認すれば周瘦鵬ではなく竊名ということがわかった。これを意表外のことだという。ふりだしに戻る。本稿は今後、作者を詳細不明の竊名として説明する。周瘦鵬とは別人だと考える。

渡辺は呉禱「拊髀記」が春浪「老愛国者」にもとづいており、さらに「老将愛国談」と同一だと指摘した。作品内容についてだけ見るならば、それは正しい。

注意をする必要があるのは翻訳の経路だ。呉禱は春浪日訳を漢訳した。これはそのとおり。もうひとつの竊名は日訳に関係なくドーデの英語訳を底本とした。出てきた結果が偶然ドーデの同一作品であったことになる。

冒頭を引用すればそれがわかるだろう。

【竊名】余与仏安民医師。同行過桑才利粹大路。仰觀洞穿之牆垣。俯視炸裂之街道。而講巴黎圍困故事。津津談論。不覺其乏。至凱旋門。仏医士忽止步。手指巨厦。凄然告余曰。君不見楼上四窗緊閉之室乎。去歲八月。時令不正。天災流行。大風雨之某日。余承招至斯。視中風症病者。為第一騎隊之茹夫大佐。 国11オ

私は仏安民医師と一緒にシャンゼリゼ大通り行きながら穴のあいた壁を仰ぎ見、爆破された歩道を下に眺めてパリ包囲の物語をして興味津々で疲れを感じなかった。凱旋門に来ると仏医師はふと立ち止まり大きな建物を指さして痛ましそうに私に語りだした。あの建物のきっちり閉まった四つの窓の部屋が見えませんか。去年の8月、時節がよくなく天災が流行した大雨風のある日、私はそこに呼ばれて卒中患者を診たのですがそれが第一騎兵隊のジューヴ大佐でした。

竊名はV医師を「仏安民」と独自に作った。地名の省略はあるもののそれら以外はほとんど英訳どおりに漢訳している。春浪日訳とは関係がない。

底本が英訳だと考える小さな根拠がある。フランスの将軍マク・マオン (Mac-Mahon) だ。「h」は読まない。しかし竊名は「マクマホン」と英語読みして「美克満洪」である。

春浪日訳で取り上げたいいくつかの比較例を竊名漢訳でも見ておく。

老大佐が卒中になった場面から。以下の英訳は重複するから日訳のみを引用する(以下同じ)。

【エジェット】 雷に打たれたように倒れた。603頁

【マッキンタイア】 突然の衝撃が彼をなぎ倒した。42頁

【アイヴス】 彼は丸太のように倒れた。p.246頁

【竊名】 遽大叫倒地。国11オ

急に大きく叫ぶと床に倒れた。

ここだけ見るとアイヴスに近いが。ただし短文だから決め手にはならない。

手がかりは乏しい。あの室内にかざられた記念品の「丸いガラスの中にセント・ヘレナ島の岩石」だ。竊名はそこを省略している。

アイヴスではなさそうな個所もある。フランス軍勝利の報道が届いた。意識を回復した老大佐が「勝利！」と2度くり返した。医師はそれを受けて発言する。

【エジェット】 Yes, Colonel, a great victory! p.603

そうです、大佐、大勝利です！

【マッキンタイア】 Yes, colonel, a great victory! p.44

そうです、大佐、大勝利です！

【アイヴス】 ナシ p.248

【竊名】 余告之曰。誠然大佐。我軍大捷。 国11ウ

私は言った。そうです大佐、我が軍の大勝利です。

この竊名漢訳はエジェットとマッキンタイアのままだ。アイヴスでは省略されたから一致のしようがない。上の小さい例ではあるがアイヴス英訳は漢訳底本の候補からはずれる。

物語の最後部分を示す。

【エジェット】 前衛の4人の槍騎兵がバルコニーの向こうで背の高い老人が腕を振るってよろめき、硬直して倒れるのを見た。この時、ジューヴ大佐は本当に死んでしまった。606頁

【マッキンタイア】 前衛の4人の槍騎兵が上のバルコニーの方をながめる

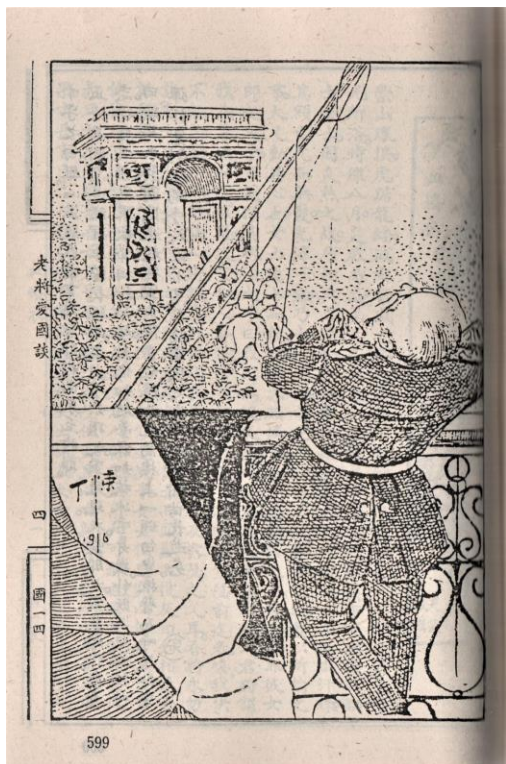
と、堂々とした老人が両手を広げてよろめいているのが見えた。彼はどさりと倒れた。このたびの衝撃は本当に致命的なものであった。ジューヴ大佐は死んだ。52頁

【アイヴス】前衛の4人の槍騎兵がむこうのバルコニーを見上げると背の高い老人が両手を広げてよろめいて倒れた。その時、ジューヴ大佐は本当に死んでしまった。259頁

【竊名】徳軍前隊。當能隱約見高樓上一頌白叟。振臂而呼。忽如中彈。仆身倒地。嗚呼。大佐不忍目睹國民之失敗。而遂謝世長逝矣。国14ウ

プロシア軍の前衛は高い建物の上に半白の老人が腕を振りまわし叫んでいたのが突然弾に当たったかのようにどさりと倒れたのがぼんやりと見えた。ああ、大佐は国民の失敗を見るに忍びず、ついに死んでしまったのだ。

竊名は「不忍目睹國民之失敗（国民の失敗を見るに忍びなかった）」を書き足した。



竊名漢訳

老佐の倒れ方といっても微妙な表現だ。エジェットの「硬直して倒れる」とマッキンタイヤの「彼はどさりと倒れた」が近いように思う。アイヴスの「よるめて倒れた」よりも力が入っていると感じるからだ。竊名が補足して「忽如中弾。仆身倒地（弾に当たったかのようにどさりと倒れた）」と記述したのと重なる。

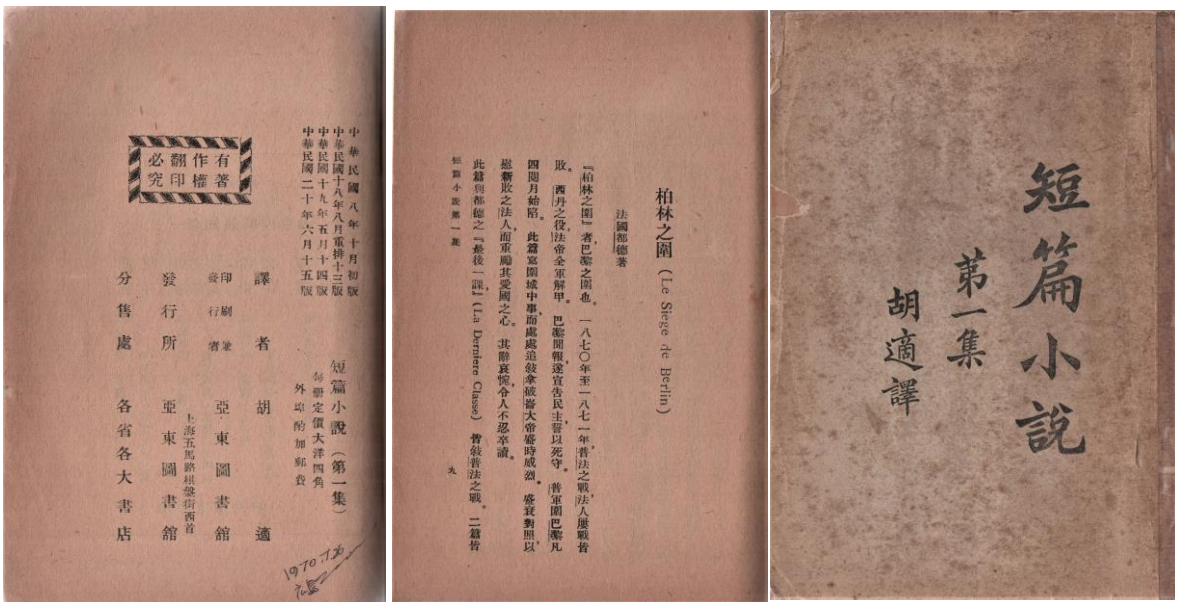
竊名の漢訳はアイヴス英訳よりもエジェット英訳あるいはマッキンタイヤ英訳を底本にしているように思う。

4 胡適のばあい

胡適漢訳ドーデ「最後の授業」についてはすでに論文がある*5。

胡適漢訳「最后一課」はドーデのフランス語原文ではなくレイノルズ (Francis J. Reynolds) 英語訳本 (1910) を底本に使用した。マッキンタイヤ英訳でもアイヴス英訳でもなかった。

胡適漢訳の各種版本について本稿ではくり返さない。使用するのは胡適訳『短篇小说』第一集 (上海・亜東図書館1919.10/1931.6十五版) であることだけを記す。



奥付

本文

表紙

該書に収録されたのが「柏林之圍」である。英訳についてはすでにマッキンタイヤ英訳であるとも指摘がなされている。レイノルズ英訳は見つからない。

本稿はそれを参照した。漢訳内容を簡単に比較対照しておく。

胡適「柏林之圍」は文言で漢訳されている。原題を“Le Siege^{ママ} de Berlin”と示してあたかもフランス語から直接漢訳したように装う。胡適は自分の漢訳すべについて底本を明記はしていない。それが当時の習慣だった。

『短篇小説』第一集の刊行は1919年だから林訳批判はすでに実行されている。胡適自身が外国語を理解しない林紘を厳しく批判した事実が背景にある。だからどうしても原語からの直訳にしたかったようだ。

胡適の漢訳はアメリカ留学中になされた。とはいえ自分が林訳批判を行なったあとにそれを『短篇小説』に収録した事実は否定できない。その際に文言を白話で書き直そうとは思わなかった。「訳者自序」でひとつ「私のこの10篇は一挙に翻訳したものではない。ゆえに数篇は文言で訳した。いま改訳する余裕がなかった（我這十篇不是一時訳的，所以有幾篇是用文言訳的，現在也来不及改訳了）」（2頁）と説明したのみ。

胡適は白話の使用をすでに主張している。言い訳をするくらいだ、自分の白話主張と文言漢訳が一致していないとの認識はあった。だが時間的余裕がないと言い逃れただけ。自分の主張を自らが実践して実現しようとは思わなかった。反省はしていない。もともと白話を主張する文章を文言で書いた胡適なのだった。主張と実践がずれているということだ。胡適自身がそれを修正するつもりがないことが確認できる。

「柏林之圍」には割り注がほどこされた箇所が複数ある。パリ包圍という歴史的題材だから「一八七〇年八月四日」（11頁）とか「自一八〇四至一八一四拿破帝盛時，是為第一帝国（1804年から1814年までナポレオン皇帝の盛時を第一帝国という）」（15頁）などと説明した。当然ドーデ原作にはない。マッキンタイヤ英訳にもそのような注釈は存在しない。この注は胡適がつけたものだろう。

胡適の漢訳傾向を知る簡単な例を挙げる。フランスの将軍マク・マオン MacMahon を胡適は「麦馬洪」と表記して英語読みである。「最後一課」のアメル Hamel 先生を「漢麦先生」と漢訳したのと同じだ。春浪が「マクマオン」

とし呉構がそれを受けて「馬克蒙」と漢訳したのと比較すれば違いがわかる。

マッキンタイア英訳を再度引用し胡適漢訳冒頭を示す（傍線省略。以下同じ）。

【マッキンタイア】 WE ascended the Avenue des Champs-Élysées with Doctor V—, reading, upon those walls pierced with shells and sidewalks dug up with grapeshot, the story of the Siege of Paris.

私たちはV医師とともにシャンゼリゼ通りを登り、砲弾で貫かれた壁や散弾で掘られた歩道に、パリ包囲の物語を読み取っていた。

【胡適】 余等与衛医師過凱旋門大街，徘徊於鎗彈所穿之頽垣破壁間，凭吊巴黎被圍時之往迹。10頁

私たちは衛医師と凱旋門通りを抜けて、砲弾で貫かれて破壊された壁のあたりをうろつきながらパリ包囲当時の昔をしのんだ。

胡適は破壊された城壁は漢訳したが歩道のほうは無視した。直訳にはなっていない。

英訳3種が細かく異なる個所がやはり胡適漢訳の底本を再確認する手がかりになる。すでに示した老大佐の身の回りにある遺物だ。

【エジェット】 a stone from St. Helena, under a shade p.605

ランプ傘の下にセント・ヘレナ島の石

【マッキンタイア】 there was a bit of the rock of St. Helena under a glass globe p.47

丸いガラスの中にセント・ヘレナ島の岩石のかけらがおいてあった

【アイヴス】 a miniature of St. Helena, under a globe p.252

丸いガラスの中にセント・ヘレナ島の縮小模型

【胡適】 又有聖希列拿島（拿破侖帝幽死之島）之崖石，玻盒盛之。15頁

セント・ヘレナ島（ナポレオン帝が幽閉されて死去した島）の岩石がガラス箱に入れられていた。

エジレットの「ランプ傘」、アイヴスの「縮小模型」に注目して述べた。やはりマッキンタイアの「丸いガラス」「岩石のかげら」に絞られる。胡適がセント・ヘレナ島の岩石を入れた「玻盒」はガラスの箱もの、あるいはガラス蓋とすればマッキンタイア英訳が底本である。

最後にドーデ原作と英訳3種に存在しない文章が胡適漢訳にはあることを指摘しておく。

ある日医者がいつものように老大佐宅を訪問すると孫娘がフランス軍がマイヤーヌを取ったと痛ましい微笑を浮かべて告げた。

【エジレット】 ‘Doctor, we have taken Mayence,’ the young girl told me, coming towards me with a heart-breaking smile, p.604

【マッキンタイア】 ‘Doctor, we have taken Mayence,’ said the young girl, advancing towards me with a heart-rending smile, p.45

【アイヴス】 ‘Doctor, we have taken Mayence,’ the girl would say to me, coming to meet me with a heart-broken smile, p.250

英訳3種ともほとんど同文になっている。heart-breaking、heart-rending、heart-broken と孫娘の心情を表現して共通する「痛ましい」微笑だ。それは嘘であることを意味する。続いてドア越しに老大佐が「ベルリン入城だ」とうれしげに叫ぶのが聞こえる。ここで医師の発言はなされていない。ところが胡適漢訳はなぜだか異なる語句を挿入した。

【胡適】女每奔入室告余曰、『我軍取梅陽矣。』余亦和之曰、『然、余今晨已聞之。』13頁

娘はいつものように部屋に急いで入ってくると私に言いました。「わが軍はマイヤーヌを取りましたよ」。私はそれに合わせて言いました。「そうですね、私は今朝それを聞きました」

マイヤーヌを取ったと嘘をついた。その後の箇所が問題だ。医師が孫娘に同調

して発言する部分を見てほしい。ドーデ原作、英訳3種のどこにもない。それはそうだ。医師が孫娘の嘘を事前に聞いていることなどありえないからだ。だが胡適にしてみれば無理やり口裏を合わせたというつもりかもしれない。

似たような場面はその前にある。老大佐が意識を回復して「勝…利」というのに医師は追従して「そうです、大佐、大勝利です！」と答えた。胡適はそれを「余亦和之曰、『誠大捷也。』」（12頁）と漢訳している。ここからの連想だろうか。

だがこの「私はそれに合わせて言いました。「そうですね、私は今朝それを聞きました）」は同じ語句を部分的に使用して、ありもしない状況を作り上げた。孫娘と医師は嘘をつくことを合意した。それがあからぬから胡適の創作は容認できるという人がいるかもしれない。しかしここでなぜそうする必要のあるのか。だいたい英訳から離脱するのではないか。そこから見ても意味がわからないという。結局のところ胡適は英訳から直訳するつもりはなかったのだ。林訳を激しく批判しておいて自分の漢訳には知らん顔をするのかと鼻白む。

固有名詞対照表

Daudet ドーデ	Ives アイヴス	McIntyre マッキンタイア	春 浪	呉 禱	竊 名	胡 適	桜 田
docteur V..	Dr. V—	Doctor V—	ベルナア	貝爾麻	仏安民	衛	Vさん
Champs-Élysées	Champs-Élysées	Champs-Élysées	×	×	桑才利粹	凱旋門大街	シャンゼリゼー
colonel Jouve	Colonel Jouve	Colonel Jouve	ジシエーブ大佐	紀艾波	茹夫大佐	朱屋大佐	ジューヴ老大佐
Wissembourg	Wissembourg	Wissembourg	ウキツセンブルグ	威勝堡	維森盤	維生堡	ヴィッセンブルグ
Napoléon	Napoleon	Napoleon	ナポレオン三世	拿破崙第三	拿破崙	拿破崙	ナポレオン
×	×	×	孫娘アリア	麗娃	×	×	×
Mac-Mahon	MacMahon	MacMahon	マクマ(ヤ)オン	馬克蒙	美克滿洪★	麦馬洪★	マク・マオン
Reichshoffen	Reichshofen	Reichshoffen	ライヒシオーヘン	萊秀亨	雷虛華芬	雷舒賀墳	ライヒスホーフェン
Bazaine	Bazaine	Bazaine	バーゼン	巴純	白尚	巴遜	バゼーヌ
Berlin	Berlin	Berlin	伯林	柏林	徳京	柏林	ベルリン
Froissart	Froissart	Froissart	フロツサル	溥蒙沙	仏華生	滑黎	フロワサル
Bavière	Bavaria	Bavaria	バアバク	巴白克	勃維亜	巴維亜	バヴァリヤ

漢訳ドーデ「ベルリン包囲」

Baltique	Baltic	Baltic	バルト	巴徳	巴爾地喀	巴羅的	バルチック
Mayence	Mayence	Mayence	メイヤンス	梅秧司	梅盎斯	梅陽	マイヤーヌ
Saint-Hélène	St. Helena	St. Helena	×	×	×	聖希列拿島	セント・ヘレナ島
Sedan	Sedan	Sedan	セダン	水檀	×	西丹	セダン
Porte Maillot	Porte Maillot	Porte Maillot	×	×	×	梅鹿	マイヨーロ
Invalides	Invalides	Invalides	×	×	×	残敗軍人院	アンヴァリード
Buzenval	Buzenval	Buzenval	×	×	×	×	ビュザンバル
l'avenue de la Grande-Armée	Avenue de la Grande Armée	Avenue de la Grande Armée	×	×	×	×	グランド・アルメ通り
Lutzen	Lutzen	Lutzen	×	×	×	×	リュツェン
Tuileries	Tuileries	Tuileries	×	×	×	×	チュイルリー
Milhaud	Milhaud	Milhaud	×	×	×	×	ミヨー
Jena	Jena	Jena	×	×	衣愛那	耶拉	イエナ
Schubert	Schubert	Schubert	×	×	×	許伯	シューベルト

【注】

1) 【参考文献】

岡崎由美「武侠の黎明——押川春浪と近代中国武侠小说」蘆田孝昭教授退休紀念論文集
編集委員会『蘆田孝昭教授退休紀念論文集 二三十年代中国と東西文芸』東方書店
1998.12.12

渡辺浩司「《拊髀記》の原作」『清末小説から』第105号 2012.4.1

—— 「《愛國小説 鴿》の原作／《拊髀記》の原作（補）」『清末小説から』第
106号 2012.7.1

呉 燕「『燈臺卒』をめぐって」『清末小説』第33号 2010.12.1

2) 「押川春浪」の編者名不記「二、著作年表」昭和女子大学近代文学研究室『近代文学
研究叢書』第15巻 昭和女子大学光葉会1960.6.5。30頁

3) 【使用文献】

○ドーデ ALPHONSE DAUDET 原作 “LE SIÈGE DE BERLIN” (“CONTES DU
LUNDI” PARIS: LIBRAIRIE AHPNSE LEMERRE, (1873) 刊年不記) open library
所収

○エジェット EDWIN FRANCIS EDGETT 英訳 “THE SIEGE OF BERLIN”

- (“THE STRAND MAGAZINE” JUN 1895. VOL. IX, 1-6月合冊。1883初訳) hathi trust 所収
- マッキンタイア MARIAN McINTYRE 英訳 “THE SIEGE OF BERLIN” (“MONDAY TALES” BOSTON: LITTLE, BROWN, AND COMPANY, 1900) hathi trust 所収
- アイヴス GEORGE BURNHAM IVES 英訳 “THE SIEGE OF BERLIN” (“ALPHONSE DAUDET'S SHORT STORIES” NEW YORK AND LONDON: G. P. PUTNAM'S SONS, 1909) open library 所収
- ドーデー作、桜田佐訳「ベルリン攻圍」(『月曜物語』1936.2.10/1987.10.6第五十刷)
- 4) 周瘦鵑「我翻譯西方名家短篇小説的回憶」『雨花』1957.6.1初出未見。王智毅『周瘦鵑研究資料』天津人民出版社1993.2。254頁
- 5) 樽本「早期漢訳ドーデ「最後の授業」『清末翻譯小説論集(増補版)』2017.1.15所収

包天笑漢訳クレイ「古王宮」

——涙香訳『古王宮』の原作

『清末小説から』第143号(2021.10.1)に掲載。荒井由美名を使用。涙香小史(黒岩涙香)訳『古王宮』(1900)の底本はバーサ・M・クレイ『わが身との戦い(AT WAR WITH HERSELF)』であることは知られている。それを漢訳したのが包天笑「古王宮」だ。ただし漢訳には涙香もクレイも明記しなかった。単行本にはなっていない。包天笑漢訳と涙香日訳を部分的に比較対照する。

清末民初の翻訳を研究するとき最初に出てくるのが底本特定という難問だ。原作者、原作名を明記しない作品が多い。もうひとつの理由は翻訳の経路が複雑だ。

外国作品から直接漢訳するばかりではない。当時は日本語経由で重訳する作品もある。図式で示せば、外国語原作→日訳→漢訳という順序である。漢訳を扱うとき以前は日訳どまりですませることもあった。しかしやはり遡って外国語原書まで手を伸ばすのが望ましい。それだけ困難度が増加するが。

底本が改編作(第2翻訳または重訳)のばあいは捜査の対象は先へのびて原作にまでひろがる。改編作の底本が西洋の原書であることを言っている。そうしようとすれば手間は何倍にも増加する。なかなか難しいところだ。

先行文献があればそれを手がかりに探索を進めていく。文献が間違っていることも時たま見受ける。別の文書からただ引用して誤ることは普通のことだ。結局のところ実物を手にして自分で判断しなければならない。実物と簡単というが作品それ自体を入手するのに困難が伴う。清末民初の翻訳にはつきものなのだ。

以上は一般論だ。

本稿では包天笑訳「古王宮」について説明する。ただし漢訳されたのが一部分だ。言及するにも限りがある。



明治卅三年七月廿八日印
 明治卅三年八月一日發行

明 野田良吉
 著 野田良吉
 發行 野田良吉
 町田 滋
 東京市京橋區北橋町十二番地

木村吉藏
 印刷者 木村吉藏
 東京市京橋區米女町十番地

英社
 印刷所 英社
 東京市京橋區米女町北番地

發賣元 扶桑堂
 東京市京橋區北橋町十二番地

有所權著作
 譯 淚香小史
 述





1 クレイ原作から日訳と漢訳へ

包天笑漢訳「古王宮」を見る前にその底本とした黒岩涙香日本語訳について説明する。

涙香小史（黒岩涙香）訳「古王宮」は最初『万朝報』（1899.2.26-5.13 54回）に掲載された。翌年扶桑堂より単行本になる（1900.8.1）。

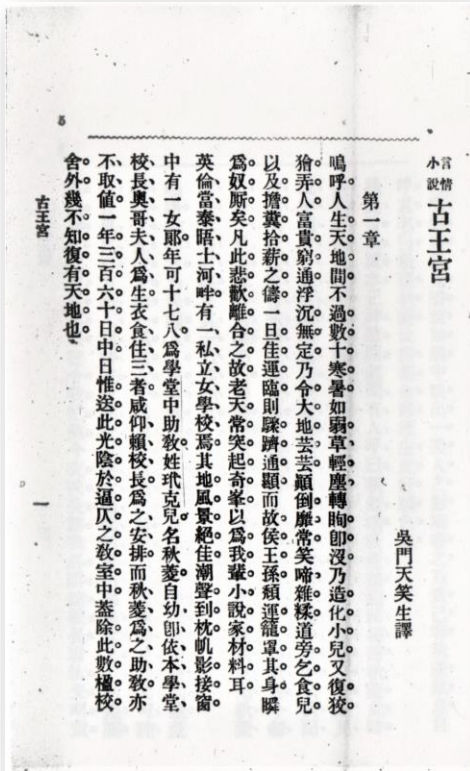
原作については早くからバーサ・M・クレイ BERTHA M. CLAY（本名シャーロット・M・ブレイム CHARLOTTE MARY BRAME、1836-1884）の『わが身との戦い（AT WAR WITH HERSELF）』と指摘されている。現代風に『自分との戦い』としても同じだ。その「自分」はクレイ作品には多い女性の主人公を指す。

クレイ原作に言及した主な人々は次のとおり。緒方流水（1902）、柳田泉（1935）、伊藤秀雄（1979）、中村忠行（1980）たちである。それぞれの説明は

注にまとめる*1。

クレイを指摘した各人の書き方を見ると流水を除いて奇妙な一致箇所がある。流水はクレイ作品を掲げて断言した。しかし柳田は「というものゝのよし」、伊藤「とか」、中村「と言ふ」などと伝聞表現にしている。クレイ本の実物を入手できなかったとわかる。しかし結論をいえばクレイ本で正しい。

涙香訳を底本にしたのが包天笑漢訳だ。涙香日訳と同じく「古王宮」と題する。涙香の原作がクレイ本だからそれと包天笑を直結させて本稿の題名は「包天笑漢訳クレイ「古王宮」」である。



吳門天笑生（包天笑）訳「（言情小説）古王宮」2章 『月月小説』第2年第10、12期（第22、24号） 戊申（1908）十月、十二月

包天笑の名前が表示されるだけだ。該作第2章（第24号掲載）では「笑」のみ

で「訳」の記載が消滅する。涙香とクレイの名も表示されない。表示だけを表面的に見れば天笑の創作作品ということになる。

ただし本文を読めば「英倫」「泰晤士河畔」と出てくる。そこから原作は外国小説らしいとわかる。かといってそれだけで原作者と原作名が浮かんでくるわけでもない。知識を持つ人が中国にはいなかった。阿英目録（[阿英118]）は「古天宮」と題名を誤っているくらいだ。だいいち阿英目録は原作を明記しないのが原則である。そうなる必要とするのはこのばあい記載のある先行文献ということになる。

包天笑の漢訳が涙香『古王宮』だと示唆したのは中村忠行だった。題名が同じところから推測したとわかる。流水、柳田、伊藤らがクレイ作と書いているのを参照したのだろう。あとはそれを確認するだけだ。

2 天笑漢訳と涙香日訳

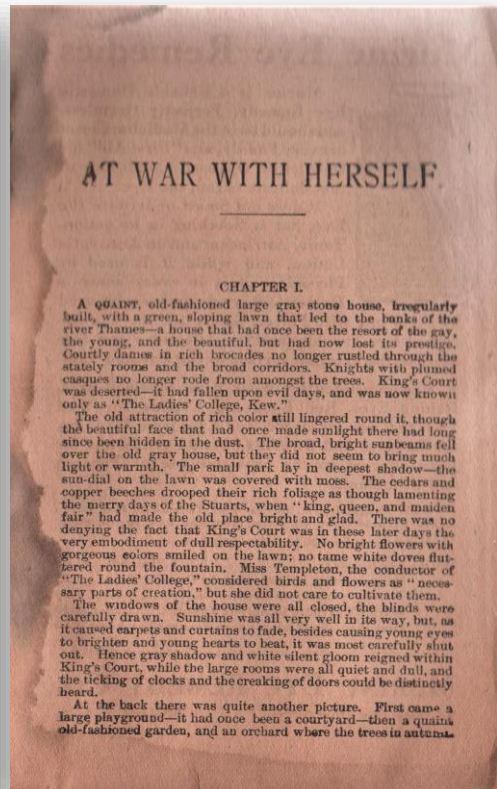
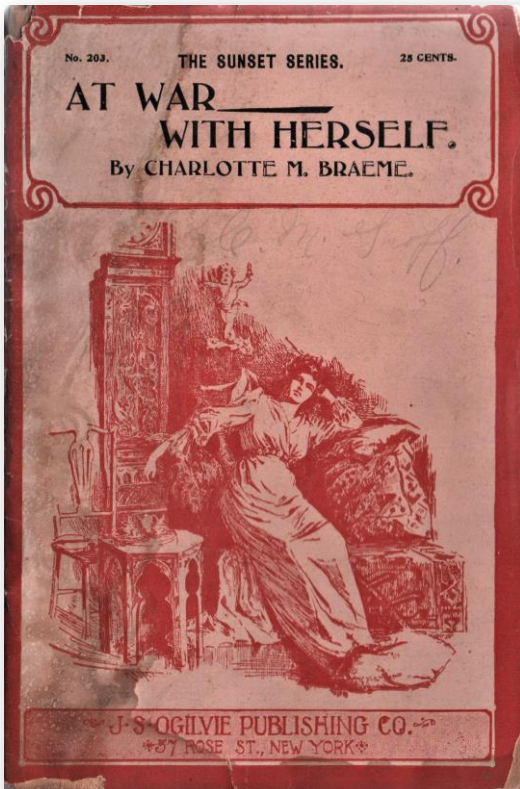
包天笑漢訳は2章が『月月小説』に掲載された。続けての掲載は見られない。のちそれが『冷笑叢談』（上海・群学社図書発行所1913.1/1914.3再版。未見）に収録される。結局のところ包天笑漢訳は完成しなかったようだ。未完のままだから単行本にもなっていないと思う。

筆者が見ているクレイ本は次のとおり。

CHARLOTTE M. BRAEME. "AT WAR WITH HERSELF." J・S・OGILVIE PUBLISHING CO. THE SUNSET SERIES. NO. 203. 刊年不記
(1890s) *2

漢訳と日訳を比較対照した。涙香訳の第5回冒頭部分までを漢訳して中断したことがわかった。

天笑訳「(言情小説)古王宮」第1、2章は涙香の新聞連載と単行本にある小見出しを収録漢訳していない。両作品を対応させると以下のとおりになる。



呉門天笑生訳 第1章

＝涙香の『万朝報』掲載2回分——第1回『水鏡』（1899.2.26）、第2回『重大な用向』（2.27）

天笑 第2章

＝涙香の『万朝報』掲載2回分と少し——第3回『富貴の辛抱』（3.1）、第3[4]回『広き世界に唯の一人』（3.2）、第4[5]回『養女なら子も同然』（3.3）冒頭20行を漢訳7行に圧縮

涙香の新聞連載で回数を間違ったのは不注意からだろう。単行本では訂正されている。

以下においてクレイ原作、日訳、漢訳の冒頭部分を示す。

【クレイ】 CHAPTER I.

A QUAIN, old-fashioned large gray stone house, irregularly built, with a green, sloping lawn that led to the banks of the river Thames — a house that had once been the resort of the gay, the young, and beautiful, but had now lost its prestige.

趣のある古風な灰色石造りの大きな家である。不規則に建てられテムズ川のほとりにつながる緑の傾斜した芝生のあるその家のはかつては陽気で若く美しい人たちの憩いの場所だった。しかし今ではその名声を失ってしまっている。

主人公は家族もなく貧しい女性レオニー・レイナー (Leonie Rayner) だ。彼女が仕方なく身を寄せる女学校を説明することから物語ははじまる。それが涙香訳では様子が異なる。原作にない文章を加筆しているのだ (ルビ省略。[] は単行本、また頁数を示す)。

【涙香】 第一回『水鏡』

世に人の身の浮沈ほど料り難きは莫し、運好くば、今日路傍に飢凍えんとする人も明日は忽ち金衣玉食の身分と為り、運悪[し]くば、長く栄華に誇りし身も一朝にして人の憫みに露命を繋ぐ人と為る、一つは其人々の心柄にも在ることなれど、運不運の一去一來は実に造化の悪戯とも云ふべき歟／説起す、英国テムス河の辺に、餘り繁昌もせぬ私立女学校あり、1頁

飢え凍える人も運がよければ美衣美食 (錦衣玉食) の身分となる。貧しい主人公は親戚の莫大な財産を突然相続することになった。その運命を冒頭にまとめた。読者に作品全体の構造を予告したことになる。続いてテムズ川のほとりにある建物へと筆を運んで原文に戻した。

涙香訳を底本とした天笑漢訳は次のとおり。

【天笑】 第一章

嗚呼。人生天地間。不過數十寒暑。如弱草輕塵。轉瞬即沒。乃造化小兒。又復狡獪弄人。富貴窮通。浮沈無定。乃令大地芸芸。転倒靡常。笑啼雜糅。道旁乞食兒。以及担糞拾薪之儔。一旦佳運臨。則驟躋通顯。而故侯王孫。頽運籠罩其身。瞬為奴厮矣。凡此悲歡離合之故。老天常突起奇峯。以為我輩小説家材料耳。

英倫當泰晤士河畔。有一私立女学校焉。其地風景絶佳。潮声到枕。帆影接窗。

ああ、人はこの世に生まれてわずか数十年のうちに弱い草にへばりついた軽い塵のように瞬時にいなくなってしまう。運命はさらに悪賢く人をもてあそぶ。貧賤と富貴は定着することもなく大地に満ちあふれひっくり返って無常で泣き笑いが混じりあう。道端の乞食と糞担ぎや薪拾いの仲間が幸運にみまわれるとただちに成り上がる。また王侯貴族の子孫であろうと不運がその身に降りかかれば瞬時にして奴僕となる。すべて常ならぬことだからこの世に突然出現する奇怪なことは我らが小説家の材料となるのである。

イギリスのテムズ河畔に私立女学校があった。そこの風景は素晴らしく波音が枕元に聞こえ船の帆が窓に近づいている。

冒頭に運命に翻弄される人のはかなさを述べる。涙香を下敷きにしているのは明らかだ。ただし大筋に沿いながら細部は異なる。天笑が自分にとって手慣れた語句を使用して勝手に文を綴ったもの。翻訳者の自由といったところだ。

天笑が文中に小説家として出現しているのが少し違う。クレイと涙香訳にはない加筆をして作者としての存在を示した。あとはクレイ原作に移動しているのは涙香にならった。定型の波音、帆影を書き加えて読者の理解に訴えかける。

冒頭に登場する人物の名称を対照表にする。

クレイ	涙 香	天 笑
主人公17歳 レオニー・レイナー Leonie Rayner	稲川菱江（伯爵柳園 家女主菱江姫）	（姓）玳克兒（名）秋菱 （柳起士家女主人伯爵秋 菱姑娘）
父陸軍大尉レイナー Captain Rayner	陸軍大尉稲川勇	玳克兒雄存

母アリダ・クレルモン Alida Clermont	倉本敏子	古爾敏恵
校長テンプルトン Miss Templeton	奥谷夫人	奥哥夫人
弁護士クレメンツ Mr. Clements	栗畑賢造	律脱爾（また児）亨士
古王宮管理人ダンスコム Mr. Dunscombe	団桂吾	寶圭利
チャーンリー伯爵 Earl of Charnleigh	柳園伯爵	柳起士伯爵
大尉ポール・フレミング Captain Paul Flemyng	中尉古水保路	中尉哥世勃羅

涙香はレイナー Rayner を稲川にした。「イナ」から「稲」を連想したものか。はっきりはわからない。天笑が稲川を玳克児に漢訳するのも理由不明。涙香も天笑も人名については自由に定めている印象がある。翻訳というよりも底本に沿った翻案という側面が強い。

3 天笑の改編

校長が外出している間、レイナーは散策する。鏡のような川面に自分の姿を認めて独り言をいう場面だ。

【クレイ】 “Ah, if that face belonged to any one else, it would be called ‘very pretty.’ It is fairer than Isabel Gordon's — and they rave about her beauty. Who could find anything to admire in a governess — nay, not even a governess, only a pupil who teaches? I might just as well have been ugly, for all the good my beauty does me.” p.2（中略） “Some sigh for genius, for fame,” She murmured; “I ask for love and money. Let me taste some few of the pleasures of the world;（後略）” p.3

「アア、あの顔が他の誰のものでもないとしたら「とても美しい」と言われるでしょうね。みなが美しいと激賞するイザベル・ゴードンよりもずっと美しいわ。家庭教師、いや家庭教師でさえないただの助教師を誰が尊敬するもんですか」（中略）「愛とお金が欲しい。この世の快樂を少しだけ味わわ

せてください（後略）」と彼女はつぶやいた。

貧しいレイナーがつぶやくその言葉には彼女の置かれた環境と経済的立場が明確に説明されている。「愛とお金が欲しい」に注目する。クレイは主人公が愛情と金銭を欲しているとはっきり書いている。そのふたつから見放されている若い女性だという人物設定である。

次が涙香の文章だ（くり返し記号は文字に変換した）。

【涙香】「何だつて此様に美しく生れたらふ、生徒の中の美人と云ふ那の令嬢よりも此影の方が、余ほど愛らしいのに、ア、お金が無ければ仕方が無い、何時までも助教師だ、校主からは厄介者と云はれ、下僕にまで口穢く呼廻はされる、誰も此顔を、美しいとも、何とも云ふては呉ぬ、生涯助教師を勤るなら、何も綺倆などは要らぬのに」（中略）「一イヤイヤ何うするにも斯するにもお金が先、ア、お金が欲しい、身代とやらが欲しい、貧しく生れるのは人間の一番損だ」第1回 3-4頁

クレイ原作にある「お金が欲しい」には「愛」も挙げているのだが涙香は片方を無視した。「お金が無ければ仕方が無い」「お金が欲しい、身代とやらが欲しい」を重ねて貧困さを強調した。「身代」は大きな富をいう。自分に無関係だから「とやら」と遠い存在だ。その欲望をあからさまにするのは後の遺産相続に関係するからだ。

天笑は漢訳して絞り込んでいる。

【天笑】方夷猶間。偶見碧波如鏡。中映出一美人之影。細審之。乃為己容。秋菱歎息。自呼其名曰。秋菱秋菱。汝運蹇命薄。枉生此好顔色也。3頁

ゆったりとしてふと見ると鏡のような水面に美しい人の姿が映っている。目を凝らせば自分だった。秋菱はため息をついた。自分で名前を呼んで言うのだった。「秋菱よ秋菱、お前は不運であるのに無駄に器量よしだね」

天笑の漢訳には主人公が金銭に執着する箇所が無視されている。そこがクレイ原作と涙香日訳とは異なる。

異なるといえば遺産相続を伝えに来た弁護士についても天笑は変更を行なっている。このばあいは加筆だ。

【天笑】嗚呼。律師者。乃保護人之財産権利。為其職掌。或司人之争訟与継続問題。3頁

ああ、弁護士とは人の財産権利を保護することを職分とする。あるいは人の訴訟と相続問題を執り行なう。

清朝末期には弁護士そのものが一般に認識されていない。天笑はそこから単語の説明が必要だと独自に判断した。作品によってはカッコに入れて注釈とする。あるいは訳者が登場して口を挟む。天笑のこのばあいは地の文に断りなく加筆した。

レイナーの人物確定を終えて弁護士は宣言した。

【クレイ】 instead of being Miss Leonie Rayner, a governess pupil, you are Leonie, Countess of Charnlei, and mistress of one of the finest estates in England. p.6

あなたは教師レオニー・レイナー先生ではなくチャーンレイ伯爵のレオニーであり英国屈指の豪邸の女主人であります。

クレイは簡潔に描写している。「one of the finest estates in England 英国屈指の豪邸」と書くだけで充分だと考えた。ここには涙香のいう「古王宮」はない。それでは説明不足だと涙香は考えて少し加筆した。

【涙香】貴女は最早や此の私立女学校の助教師稲川菱江女では無く全く當国随一の由緒ある家筋柳園伯爵家の當主、菱江姫です、古王宮として知らるゝ英国屈指の莊園、及柳園家に属する財産は悉く貴女の物です 第2回 13頁

「英国屈指の莊園」の別称が「古王宮」ということにした。これが小説題名になっている。ここは涙香独自の説明であってクレイ本には存在しない。

次が天笑の漢訳だ。

【天笑】請姑娘辞此私立女学校助教之職。将請姑娘為本国著名豪族柳起士伯爵家之主人。姑娘當知人人稱為古王宮為英国屈指之莊園。及柳起士伯爵家之財產。悉為姑娘所有也。8頁

あなたはこの私立女学校の助教師をお辞めください。あなたは本国著名の豪族柳起士伯爵家の主人となられますように。古王宮は英国屈指の莊園であると人々が申していることをあなたはご存じでしょう。柳起士伯爵家の財産はことごとくあなたの所有となります。

ここの天笑漢訳は涙香日訳をほぼ忠実になぞっている。

思いもよらぬ突然の富豪宣告にレオニーはうろたえてしまう。

【クレイ】 She buried her face in her hands and wept. The two men looked at her in kindly sympathy, evidently understanding her emotion.

“But what shall I do?” she inquired. “I have never had any money; I am unused to wealth and comfort; my life has been hard and lonely, dreary and dull—how shall I bear this great change?” p.7

彼女は顔を両手に埋めて泣いた。ふたりの男は親切に同情して彼女を見た。明らかに彼女の感情を理解していた。

「でもどうしましょう」と彼女はたずねた。「私はお金を持ったことはありません。私は富と快適さには慣れていません。私の人生はつらくて孤独で、退屈でつまらなかった——この大きな変化にどう耐えればいいのでしょうか」

クレイは富と快適さに関連があると考え。ゆえに金銭問題は個人の人生に重要な意味を持つ。その金銭が無から有に激変するから主人公の心理的不安は増大

した。感情の高まりの結果は泣くよりほかにしようがない。

【涙香】第3回

菱江は顔を両手に埋めて泣けり、栗畑と団の二人は信切気に、気の毒げに、顔と顔とを見合わせたり、頓て菱江は顔を挙げて涙を拭ひ「何うしたら好のでせう、私しは今まで金銭を持た事さへ無く、辛い、淋しい、味気ない境涯に育つて来た者ですのに、不意に此様な事に成つて、ホンに何うして好いか分りません」16頁

涙香訳はクレイ原作そのままだ。人生の基本が金銭によって左右されると認識している。

【天笑】秋菱此時喜極涕零。捧顔而泣曰。我向不知世界所謂富貴財産乃与我事。我乃為天涯一。畸零之人。今乃富貴逼人來。我如何處此乎。10頁

秋菱はこの時喜びが極まり落涙し顔を両手ではさんで泣きながら言った。「世界のいわゆる富貴財産と私が関係するとは私はずっと思いもしませんでした。私は天涯孤独の人間です。今富貴の方が迫ってきたのですからどうすればいいのでしょうか」

天笑は圧縮している。男性ふたりの反応描写は翻訳しなかった。一方で「喜び」を加えた。涙香の「今まで金銭を持た事さへ無く、辛い、淋しい、味気ない境涯に育つて来た者」を「我乃為天涯一。畸零之人」と簡略化して表現した。「金銭」という単語そのものを前面に出すことを嫌ったようだ。

弁護士は遠い親戚に大尉ポール・フレミング Captain Paul Flemyng (中尉古水保路/中尉哥世勃羅)がいることをレオニーに告げる。物語の展開に必要な人物だ。

弁護士たちが帰ったあとにレオニーは自分の内側から喜びが湧き上がってくるのを感じた。これが涙香日訳である。しかしその部分はクレイ原作には存在しない。

【クレイ】原作になし

【涙香】後に姫は[、]今までの当惑の想よりも、形容に言葉なき異様なる嬉しさの、夢の如く浮び起り、身は人間の世界よりフワフワと離れて軽く軽く自から天国に浮き上る如き心地し、恍として身外境遇の如何をも忘れ、酔へる人の如く立尽せしが、…… 第3[4]回 24-25頁

「姫」とは古王宮の主となった菱江を指す。原作にない涙香の加筆である。どうしても菱江の喜びを書き加えたかった。クレイ作のように下女が登場していつものようにレオニーをいじめる前に追加したい内容だった。

【天笑】此時秋菱殆似偌大応接室。不能盛此喜氣。而此身亦飄忽如夢。早離人間世而登天国矣。15頁

その時の秋菱はこれほど大きな応接室でも喜びの気持ちを収容できなかったように、その身体は夢のようにふわふわと浮き上がりすでに人間世界を離れて天国に昇っていた。

下女はレオニーが古王宮の相続人になったことを知らない。いつもどおりの意地悪さでレオニーに應對する。ここで包天笑の漢訳は中断した。

【参考文献】

堀 啓子「黒岩涙香の翻訳小説：Bertha M. Clay 原作の「古王宮」をめぐって」慶應義塾大学藝文学会『藝文研究』第91巻第1号関場武教授退任記念論文集 2006.12 電字版。
使用版本はNew Bertha Clay Library No.78 Street & Smith Co. 1900

【注】

1) 以下のとおり。

緒方流水『青眼白眼』星光社1902.6.2。奥付は緒方維獄（[国会]）。架蔵は鳴阜書院

1902.6.2/1902.8.10再版

[流水161]「古王宮」作者バルサ、エム、クレイ “AT WAR WITH HERSELF.”

柳田泉「黒岩涙香翻訳小説目録」『書物展望』第49号 1935.7.1

[柳田48]『古王宮』、原本バアサ・クレイ女史『わが身との戦ひ』 AT WAR WITH HERSELF というものゝよし。

伊藤秀雄『（改訂増補）黒岩涙香その小説のすべて』桃源社1979.5.15

「原作はバアサ・クレイ女史の『わが身との戦ひ』（At War with Herself）とか」
276頁

中村忠行「清末探偵小説史稿——翻訳を中心として（3・完）」『清末小説研究』第4号 1980.12.1

[中村S4-51]「包天笑訳『古王宮』（『月月小説』第二卷第十・十二期，光緒三十四（1908）年十月・十二月）と，同一書の別訳といふことになる。原作は，バアサ・クレイの『我が身との戦ひ』（BERTHA CLAY：“AT WAR WITH HERSELF.”）と言ふ」51頁

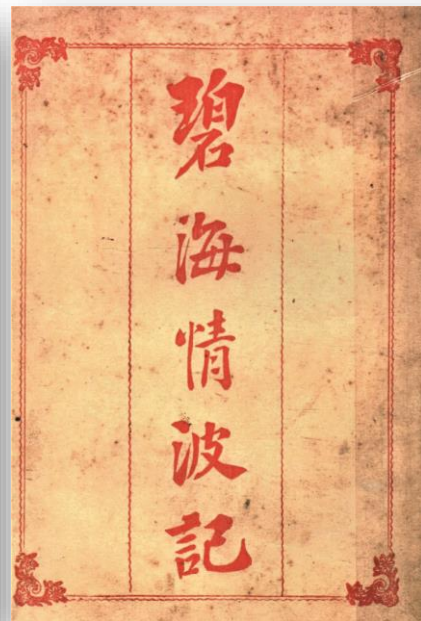
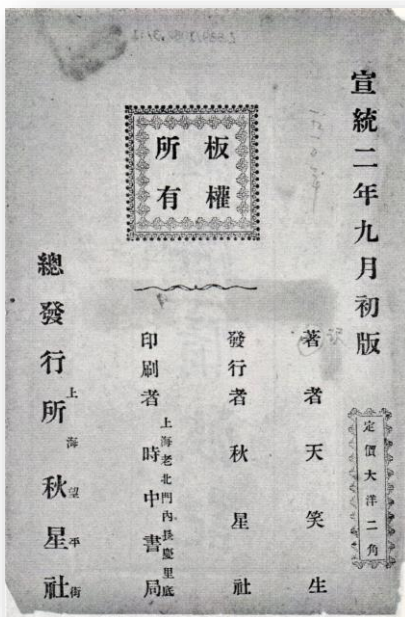
- 2) 雑誌 “Family Herald” 連載（1874.7.27-10.10）未見。[Law12]Graham Law, Gregory Drozd, Debby McNally, *Charlotte M. Bræme (1836-1884)*. Victorian Fiction Research Guide 36[Version 1.1 (May 2012)]

包天笑漢訳ヴェルヌ『碧海情波記』

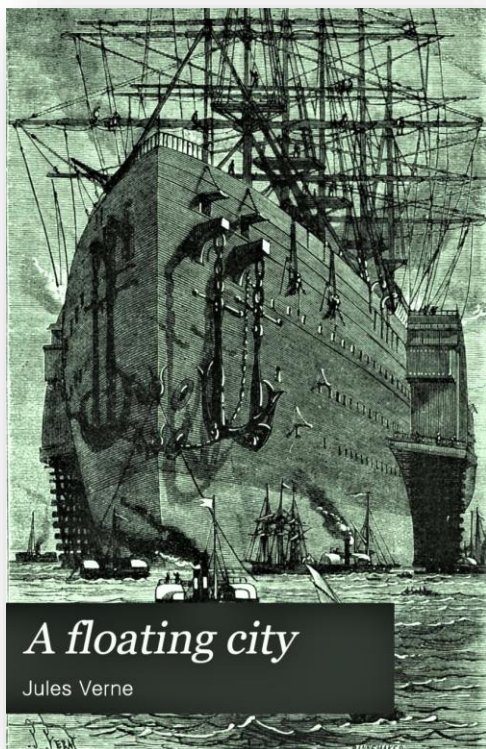
——森田思軒訳「大東号航海日記」

『清末小説から』第147号（2022.10.1）に掲載。包天笑漢訳『碧海情波記』には底本と原作についての記載がない。底本は森田思軒訳「大東号航海日記」だ。太平洋海底ケーブル敷設にも活躍した巨大船舶を舞台にした物語である。さらに探索して原作がヴェルヌ作品（日本語に直訳して『浮遊都市』1895）であることを突き止めた。

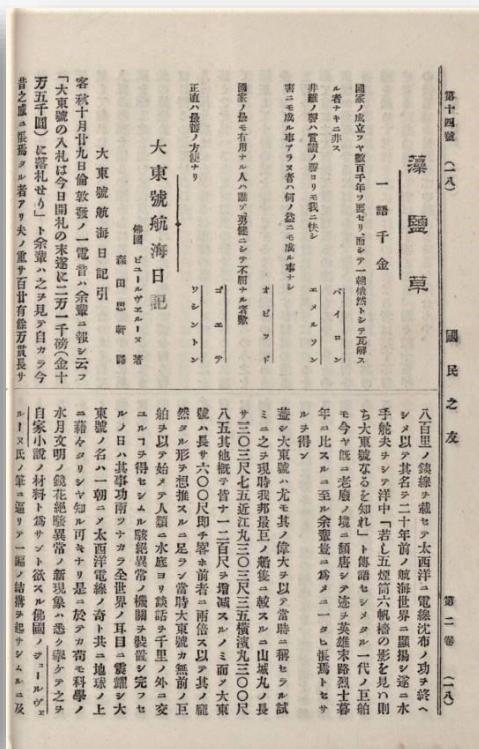
（包）天笑訳『碧海情波記』全7章（上海・秋星社 宣統二（1910）年九月）がある。



影印本 奥付 表紙



英訳本



国立国語研究所所収本

1 底本

本文は呉門天笑生「訳」と示す。奥付は「著者：天笑生」だ。表示が異なる。翻訳か創作のどちらかといえは訳が正しい。ただし翻訳であるにもかかわらず包天笑は原作者、日本語訳者ともに表示しない。筆者の知るかぎり底本を指摘した文献はないようだ。

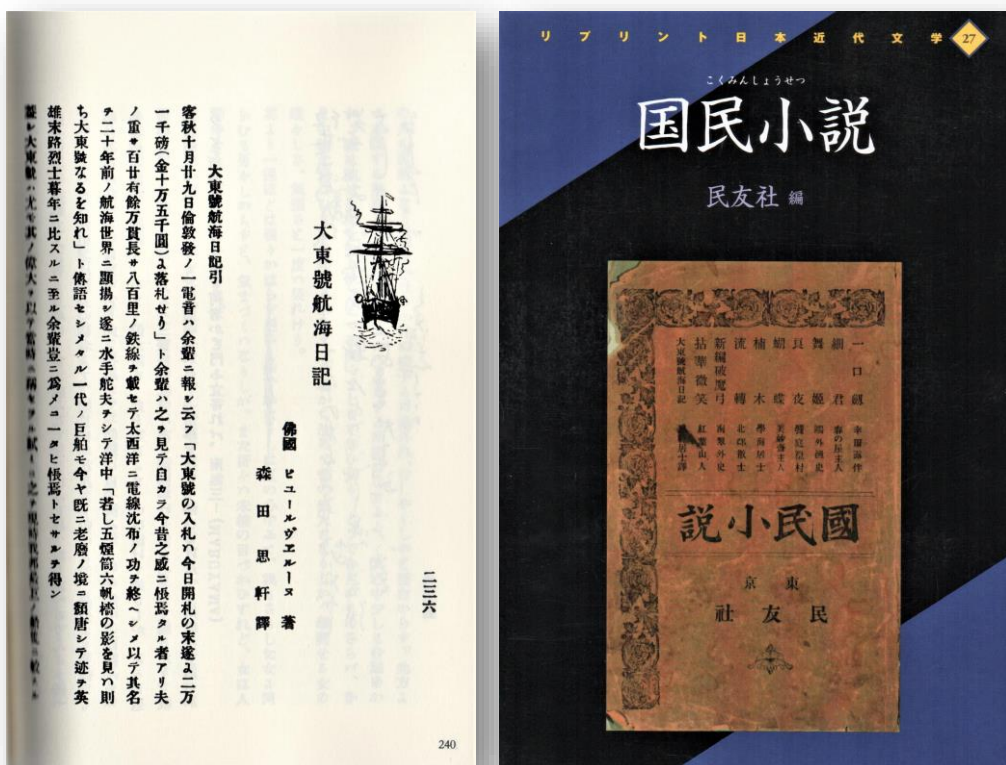
天笑漢訳の底本は日本語訳本である。仏国ビュールヴェルヌ（文中はジュールヴェルヌ）著、森田思軒訳「大東号航海日記」全7回という。

最初は雑誌『国民之友』第14-20号（1888.1.20-4.20。ウェブサイト国立国語研究所所収本を参照）に連載された。原書は英訳 JULES VERNE “A FLOATING CITY” 1874（フランス語 “UNE VILLE FLOTTANTE” 1871）だ*1。

天笑が使用した底本は何か。可能性は複数ある。

ひとつは雑誌『国民之友』の連載だ。天笑は日本で刊行される雑誌掲載の作品を漢訳したことがある。それは『冒険世界』だった。それを見れば『国民之友』も底本候補として残る。初出では登場人物名に英文からの読みをルビによって示す。次の単行本ではそのルビが削除されていることを指摘しておく。

ふたつは『国民小説』第1（民友社1890.10.30。本稿では影印本を使用する）所収のもの。雑誌連載をまとめた。上のおりルビはない。



影印本 本文と表紙

もうひとつは石割松太郎編『思軒全集 巻一』（堺屋石割書店1907.5.1/金尾文淵堂1907.7.1再版）だ。

刊行年からして単行本2種ともに天笑が使用することができた。

ひとつの手がかりを示す。細かい部分だ。ふたりの名前にルビがつけてあるのは初出『国民之友』と全集だ。対照表を作った。

大東號航海日記

大東號航海日記引

客秋十月廿九日論政後ノ一電音ハ余輩ニ報ジ云フ大東號ノ入札は今日開札の末僅ニ二萬一千磅金
 十萬五千圓に落札せりト余輩之ヲ見テ自カラ今昔之感ニ愴然タル者アリ其ノ重ヲ百廿有餘萬圓
 長テ八百里ノ鐵線ヲ敷セテ大西洋ニ電線沈布ノ功ヲ終レシメ以テ其名二十年來ノ航海世界ニ顯揚
 シ遂ニ水手船夫ヲシテ「洋中若シ五洲國民ハ俄儘の影を見れば則チ大東號なるを知れ」傳説セシメタル
 一代ノ巨魁モ今や既ニ老廢ノ境ニ類唐シテ遂テ英雄末路ヲ尋年ニ比スルニ至ル余輩其ノ爲メニ一
 タビ低頭トセザルを得シ
 蓋シ大東號ハ尤モ其ノ偉大ヲ以テ當時ニ稱セラル試ミニ之ヲ現時我邦最巨ノ船隻ニ較スルニ山城丸
 ノ長テ三〇三尺七五近江丸三〇三尺五横濱丸三〇尺八五其他概テ皆ナニ二百尺ヲ増成スルノミ
 而テ大東號ハ長テ六〇〇尺即チ路中前者ニ兩倍ス以テ其ノ體然タル形ヲ想像スルニ足ラン當時大東
 號ヲ無前ノ巨船ヲ以テ始メテ人類ニ水底ヲ開テ其ノ外ニ交スルヲ得セシムル能ク然ルニ其ノ機
 關ヲ裝置シ完テセルノ日ハ其事其功兩ツナカラ全世界ノ耳目ニ當羅シ大東號ノ名ハ一朝ニメテ西洋
 電線ノ奇ト共ニ地球ノ上ニ語々タリシヤ知ル可キナリ是ニ於テカ荷テ科學ノ水月文明ノ鏡花總覽異
 常ノ新現象ハ悉ク畢クテ之ヲ自家小説ノ材料ト爲ナシ欲スル佛國ノ「ロバール」氏ノ筆
 ニ過ラタ一編ノ結構ヲ起シムルニ及ヒタリ是レ本書ヲ以テ作ラバ所ナリ
 支那ノ文藝ヲ言フ者ハ半ムネ之ヲ別テニトナスニ過キス日夕議論日夕叙事面テ西洋修辭家ハ更ニ其

大東號航海日記

三五五

全集本

英 訳 p.105	Wilmore (Scotchman)	O'Kelly (Irishman)
国民之友 第5回	維毛兒ウ井ルモール	王傑礼オーケリー
国民小説 269頁	維毛兒	王傑礼
思軒全集 390頁	維毛兒ウキルモール	王傑礼オーケリー
天 笑 32頁	維墨兒	恩格利

名前が出てくる経過は省略する。問題は漢字の読みだ。振られたルビが底本が何であるのかを示唆しているのではないかと考える。

スコットランド人ウイルモアを思軒が「維毛兒ウ井(キ)ルモール」とするのはよい。維が「ウ井(キ)」、毛が「モー」、兒が「ル」と対応する。またアイルランド人オケリが「王傑礼オーケリー」となるのも日本語では自然だ。オケリに似ている音の漢字を当てた。王「オー」傑「ケ」礼「リー」である。

天笑は「維毛兒」をそのままを利用してよかった。だが「維墨兒」と漢訳した。毛の漢語音 *mao* では日本語ルビの「モー」から離れる。墨の漢語音 *mo*

であれば「モー」になる。ルビの表記が天笑に影響を与えたと考えられる。

次の王傑礼はもっとわかりやすい。オーケリー「王傑礼」については思軒の訳語を引き写さなかった。天笑はまったく異なる漢語「恩格利」を使用した。1字として合致しない。なぜか。それはそうだろう。天笑から見れば「王傑礼」では中国人になってしまうからだ。思軒の「王傑礼」から天笑の「恩格利」が出てくる可能性は極めて低い。その中間にルビの「オーケリー」があってはじめて可能になる。

もうひとつ。Hodges (ホッジス) を思軒は「方爾ホツヂス」とした。しかし「方爾」を天笑が漢語音で fang'er と読めばホッジスにならない。ゆえに天笑は「方爾」を無視して独自に「霍起士 huoqishi」に変えた。これもルビを優先したことを示す。

さらに漢字の細かな違いを見る。初出の『国民之友』第20号該作第7回に「砦然(くわくぜん)」とある。次に収録された『国民小説』ではそれがルビなしで同じ「砦然」になる。『思軒全集』では違う漢字のルビなし「轄然」である。

天笑漢訳では「砦然」を使用した(砦と砦は同字)。以上のルビ使いおよび漢字の例を参照して天笑が使用した底本はルビ付きの初出『国民之友』だと考えていだろう。

天笑漢訳題名の「碧海」は青海原をいう。「情波」は異性への愛情を波にたとえた。たしかに思軒日記は大東号という巨大客船で展開される男女の愛情関係に筋を絞った。また関連して幽霊が出るという噂もある。船上で事故が発生し死人まで出てくる不思議な雰囲気をただよわす話だ。愛情物語に注目した天笑の漢訳題名は日本語訳と乖離しているわけではない。

2 天笑漢訳の改編者表記

天笑は思軒日記からヴェルヌとユゴー作品のいくつかを重訳している*2。それらを見れば天笑が底本に使用したのは日本で単行本になった作品が多い。少なくともヴェルヌ(迦爾威尼)とユゴー(豊俄)についてはそう言える。

不思議なことだが天笑はそれらの漢訳作品の表面に思軒の名前を出さない。

「表面」というのは本文、奥付などを指す。序などで思軒に言及することは除いている。ヴェルヌ原作からいえば英訳が第1翻訳だ。思軒は第2翻訳に当たる。翻訳者は改編者と同じ。第2翻訳（改編）者は基本的に示さないのが天笑のやり方ということが出来る。

思軒の名前を示さないからといって批判するには当たらない。当時は中間の重訳者を記述しなければならないという決まりはなかったのだ。誰も気にしなかったしそれが問題だとも思わなかった。それが当時の中国翻訳界の実状である。

だからといって『碧海情波記』が原作者のヴェルヌ名さえも記していないのはなぜなのか。疑問は残る。

もうひとつ。天笑が単独で漢訳した作品は主として日本語経由だった。日本語を介して外国作品を漢訳するのは天笑がそういう時代に生きていたからだ。ゆえに日本語訳を使用するならばなおさらその名前を明記してもよかったのではないか。だが天笑はそうは考えなかった。思軒のほかに黒岩涙香、破天荒生、木村小舟などを隠蔽している。

さて該作の英訳本は全39章196頁におよぶ。これが思軒日訳では全7回62頁に縮小された。表面を見ただけでこの差だ。相当に省略をした。抄訳である。そうした理由は思軒自身が作品巻末に書いている（後述）。天笑漢訳も全7章であってここは一致する。

3 思軒識

冒頭に「大東号航海日記引」という思軒の説明文がある。「引」は引言、序文を意味する。

ロンドン電を引用して巨船大東号が落札されたと報じる。同時に紹介するのはどれほど巨大な船舶であるかということだ。ジュール・ヴェルヌがその大東号を自叙紀行体の小説にして書いたのがまさにこの作品である。「明治廿一年一月九日函根寓楼溪声山緑ノ間ニ於テ 訳者識ス」と末尾に記す。

天笑は漢訳した際にこの思軒識を削除した。本文中の記述と重複する箇所があるからかもしれない。日訳全部を直訳する気はなかったようだ。ここを削除した

ために原作者のヴェルヌ名が消滅してしまった。

巨船大東号（グレート・イースタン *SS Great Eastern*）はスクリューと外輪を併用する19世紀最大級の蒸気船（SS）である。最初は大西洋航路の客船として就航した。のちにイギリス・アメリカ間の大西洋を横断する海底電信線を敷設（第4回1865年、第5回1866年）して知られる。廃船を経て1867年のパリ万国博覧会を機会にふたたび客船となった。以上のことはヴェルヌの作中で記述されている。

ヴェルヌ自身も該船に搭乗したことがある。その経験を作品執筆に生かしたという*3。

該船は1889年に解体された。思軒の識が1888年だからロンドン電にある落札というのは解体に向けて作業が始まったことの知らせだとわかる。大きな成果をあげた巨大船も進水した1858年から約30年を経て鉄塊になった。

なおヴェルヌ作品は原題を日本語に直訳して『浮遊都市』だ。あるいは『洋上都市』としても同じ。似た題名に『動く海上都市』（原題：L'ÎLE À HÉLICE スクリュー島、1895）また『動く人工島』がある。別作品だ。

4 本文

思軒日記に対応する天笑漢訳を部分的に示す。まず本文冒頭から。英訳、日記、漢訳の順。

On the 18th of March, 1867, I arrived at Liverpool, intending to take a berth simply as an amateur traveller on board the “Great Eastern,” which in a few days was to sail for New York. p.1

1867年3月18日、私はリヴァプールに到着した。数日後にニューヨークに向けて出航するグレート・イースタン号に私的旅行者として乗船するつもりでいた。

【思軒】千八百六十七年（慶応三年）三月十八日に余はリバープールに赴けり是は数日の内に紐育に出帆すへき有名なる大東号に乗込まん心組のありたればなり 238頁

【天笑】一千八百六十七年三月十八日。余赴派白爾。聞數日之内。將有巨船大東号。掛帆向紐約行。嗚呼。大東号者。世界有名之航海巨船也。1頁

1867年3月18日、私はリヴァプールへ行った。数日のうちに巨船大東号が帆を掲げてニューヨークへ向かうことを聞いたからだ。ああ、大東号とは世界に有名な巨大航海船舶である。

日訳、漢訳ともに「余」を使用して一人称小説だ。天笑訳はほかにも「我」「吾」を使用する。思軒はグレート・イースタン号 (the “Great Eastern”) を大東号と直訳した。天笑もそれを踏襲する。

天笑が「掛帆」と漢訳したのは実際に帆を掲げることと出帆、出港をかけている。たしかに大東号は6本マストを有する。帆を使用したことはないと説明する文章もある。ただしヴェルヌ英訳では船長の命令で帆をあげる場面がでてくる (p.52)。その箇所を思軒は翻訳していない。だから天笑漢訳にも存在しない。

思軒は日本年号を注記したが天笑はそれを無視した。清末の読者には関係がないという判断でかまわない。ただし清朝の「同治」で置き換えることもできたはずだ。なぜだかそれはしていない。同じく思軒は文中に出てくる長さ重さ表記に日本の尺貫法を注記する。通貨価値についても同様。天笑はこれらすべてを黙殺した。ただしドル (dollars) 表示について思軒は「弗」とし天笑は「圓」に置き換えた (p.153/289頁/51頁)。天笑に一貫した翻訳基準がないように見える。

大東号は乗客1,200名から1,300名を載せる予定だった。世界各地からの客を描写して次のとおり (日訳のくり返し記号は文字に直した)。

At half-past eleven the tender was hailed, laden with passengers, who, as I afterwards learnt, were Californians, Canadians, Americans, Peruvians, English, Germans, and two or three Frenchmen. p.17

11時半になるとハシケが到着して乗客を乗せた。乗客は後でわかったのだがカリフォルニア人、カナダ人、アメリカ人、ペルー人、イギリス人、ドイツ人そして2、3人のフランス人だった。

【思軒】午前十一時半に至り一雙の端舟至れり是れにて未だ乗込まざる乗客

は悉く到着せり余は甲板に在りて上り来る乗客を眺むるに米国、加那多、白露、南亜米利加、英国、曼国及ひ仏国等各地の人民ソレソレに其の種族に固有なる相貌骨格にて陸続と甲板に群かり立てり 244頁

乗船の様子を説明している。なんでもなさそうな場面だ。単語が並んでいるだけだが思軒の日記に英訳とは異なる部分がある。思軒はカリフォルニア人を訳さなかった。理由は不明。明治時代にはペルーを白露と表記した。当たり前だが二十四節気とは無関係だ。英訳には出てこない「南アメリカ（南亜米利加）」を加えた。ペルーと重複することを気にしていない。曼国は日耳曼（ジェルマン）を略記したもの。思軒は少し加筆しているがほぼ原文どおりとっていい。ただし英訳では続いて列挙される具体的な人名多数についてはすべて切り捨てた。たとえばニューヨークのサイラス・フィールド（the celebrated Cyrus Field of New York）という大西洋電信会社の設立者を含む。思軒は出てくる外国の著名人をそのまま日本語訳することに興味はなかったようだ。そういう意味でも抄訳である。

【天笑】至午前十一点半鐘。乗客悉集於船中。時余方在甲板。見乗客中。有美利堅人。有加拿大人。有秘露人。有南美各人。有法蘭西人。有英吉利与墨西哥人。其種族不同。而其相貌装束。亦随地而異。幾疑於船中開一人種博覧会矣。7頁

午前11時半になると乗客はすべてが船中に集まった。その時私は甲板で乗客を見ていたが、アメリカ人、カナダ人、ペルー人、南アメリカ各人、フランス人、イギリス人とメキシコ人がいた。種族は違うしその相貌服装もそれぞれ異なっておりまるで船中で人種博覧会を開催したかのようだった。

天笑がカリフォルニア人を省略したのは思軒のままだ。「曼国（ドイツ）」人をなぜだかメキシコ（墨西哥）人に漢訳した。勘違いだろう。「人種博覧会」を加筆した。細かい箇所が異なる。

次のような省略例もある。

Lat. 51° 15' N.

Long. 18° 13' W.

Dist. : Fastenet, 323 miles.

ここを見てすぐさま北緯東経と理解する読者はそれほど多くはないだろう。ヴェルヌはこれを説明して次のとおり。

This signified that at noon we were three hundred and twenty-three miles from the Fastenet lighthouse, the last which we had passed on the Irish coast, and at 51° 15' north latitude, and 18° 13' west longitude, from the meridian of Greenwich. p.62

これは正午にアイルランド沿岸で最後に通過したファストネット灯台から320マイル離れた場所であり、グリニッジ子午線の北緯51度15分、西経18度13分であることを意味していた。

大東号の航路を示す部分だ。ヴェルヌにとってその経過を記録することが関心事だった。だが思軒からすれば英訳の説明はあまりにも詳細にすぎる。日本の読者には不必要だと考えた。こういう箇所を省略しつつそれが重なって全体の紙幅が圧縮された。

細かいことだが思軒訳と天笑漢訳では数の表示が一致しない箇所がある。英訳→思軒→天笑の順。

sixty-six horse-power p.21 七十馬力の機関 245頁 → 八十馬力 8頁

fifty of the crew → 水夫五十名許 → 三四十名之水手

killing four sailors, and wounding twelve others p.22 → 四人は即死し拾二人は重傷 246頁→負傷者十二人。受重傷而死者二人。9頁

馬力が英訳66と思軒の70で異なる。天笑はそれを80にするから首をひねる。そのほかは天笑が勝手に数字をいじくったように見える。その改変意図が不明だ。

天笑が日本語を見間違っただけもある（傍点筆者）。

Salt Lake (ソルトレイク) p.149 →ソートレーキ 286頁 →[●]霊脱蘭起 48頁

思軒の「ソー」に該当させるつもりで天笑の「霊」がある。これは日本語カタカナの「ソ」を「リ」と誤解したからだろう。漢字が多く使用されている日本語訳を底本にすると天笑は回想したことがある。漢字を頼りに翻訳したという意味だ。カタカナだけだと「ソ」「リ」「ン」の区別がつかない程度の日本語理解力だったものか。偶然にこの箇所だけかもしれない。細かい箇所だから大筋に影響を及ぼさないのは事実だ。呉禱がブラツクの「ツ」を「シ」と取り違えて勃拉錫[●]克と漢訳したのと同じ。

本題にもどる。

3月26日、抜錨の作業中に船上で事故が発生し死傷者が出た。先行き不安の出港だ。4月9日のニューヨーク到着までの15日間は巨大客船における生活である。

船中で旧知のファビアン・マック・エルウィン (Fabian Mac Elwin) に出会った。思軒は丙敏フヘビヤン、天笑は賓爾敏と訳した。

ファビアンは友人だといってコーシカン大尉 (Captain Corsican / 胡簡コルシカン曹長 / 胡簡礼) を紹介する。彼らはもともと別の汽船に乗る予定だったという。

Captain Corsican and I came to Liverpool with the intention of taking our berths on board the 'China,' a Cunard Steamer,..... p.30

コーシカン大尉と私はキュナード蒸気船会社のチャイナ号に乗船するためにリヴァプールに来ました。

【思軒】胡蘭氏と余は実はキウナード会社の支那号にて米国に渡らんと思ひ設うけりリバープールには至しか……247頁

【天笑】余与胡簡礼君。本欲乘迦那達公司之支那号船。以往美国。10頁

私と胡簡礼氏は本来ならばキュナード社の支那号に乗ってアメリカに行くつもりでした。

この箇所を引用対照するのには理由がある。英訳 the “China” (チャイナ号) を思軒が当時の名称で支那号と翻訳しているからだ。天笑は「支那号」をそのまま受け入れた。支那という単語に違和感を抱かなかったからである。普通に見れば無問題である。

しかし天笑が漢訳した「(科学小説) 空中戦争未来記」(『月月小説』第2年第9期(第21号) 戊申(1908)九月)では扱いが異なっていた。こちらの底本は破天荒生「空中戦争未来記」(『冒険世界』第1巻第5号 博文館1908.5.5。渡辺浩司による)だ。文中に出現する「支那」を削除した*4。考えれば単なる船名と作品の大筋に関わる箇所との違いなのだろう。支那という単語を排除するという基本方針が固まっているというわけでもなさそうだ。

5 思軒日訳の本筋あるいは重点

船上で再会した旧友ファビアンの様子がおかしい。昔はいつも微笑して朗らかだった。ところが久しぶりに会った今は顔色が青く心を病んでいるような様子で鬱々としている。彼は波紋を眺めて「l」「e」という文字が見えるという。

Look at the 'l's' and 'e's' .p.64

→ ソレ l の字、ソレ e の字 256頁

→ 此為 l 字。此為 e 字。19頁

昔の恋人がエレン (Ellen) であることが後で明らかにされる。波間に文字を見るほどにファビアンが精神に異常をきたした理由がある。彼がボンベイ赴任中にある女性 (エレン) と恋仲になった。ふたりともに結婚を希望していた。しかし女性の父親が個人の事情を優先して別人に嫁がせてしまったというのだ。

at Bombay Fabian had known a charming young girl, a Miss Hodges. He loved her, and was beloved by her. Nothing seemed to hinder a marriage

between Miss Hodges and Captain Mac Elwin ; when, by her father's consent, the young girl's hand was sought by the son of a merchant at Calcutta. p.67

ファビアンはボンベイでホッジス嬢（エレン）という魅力的な女性と知り合った。彼は彼女を愛し彼女に愛された。ホッジス嬢とマック・エルウィン大尉（ファビアン）の結婚を妨げるものは何もなかったように見えた。ところが彼女の父親の同意によって彼女はカルカッタ商人の息子に（品物のように）引き渡された。

ヴェルヌ英訳では父親が動いた原因についてあいまいにしか書いていない。「昔からの仕事の問題 an old business affair」であった。推測すれば娘を犠牲にして自分の財産を守ったというのだ。

【思軒】丙敏は孟買に赴任中方爾氏の女と相知る中となり丙敏も真心此の婦人を悦へは此婦人も実意丙敏を慕ひ兩人の相思の情は転た濃やかに成行きしか若し自然の成行きに任せなば兩人は遠からずめで度結婚するに至るへき筈なりしに爰に意外の不幸の起れるは此の婦人は父の意にて俄かにカルコッタの一商人に嫁さねはならぬ切迫となれり 257-258頁

思軒の日訳は英訳のとおりだ。事情急展開の理由についても「素と入組みある事情あり」としている。ただしそのままでは日本の読者には理解されないかと考えたらしく次を加筆した。すなわち「方爾氏は無慈無悲にも其女の精神の幸福を奪去りて之を已[己]れの事務上の欠算の填足しに充てり」（258頁）である。父親は娘を引き渡すことによって商売上の負債を解決しようとしたという意味だ。そう補足することで父親が借金を背負っていることを示唆した。

【天笑】蓋當賓爾敏君在孟買就職時。曾友一女郎。為霍起士家之女。賓爾敏深契此女郎。而女郎亦頗慕賓君。兩心相印。早種此情根於方寸中矣。已[已]而愈親密。即自外人觀之。亦為珠聯璧合。且轉瞬間[間]教堂結婚之令成矣。

孰知好事多磨。中有為之梗者。則此女郎之父也。父之意。蓋欲令其女嫁一加爾各搭商人。20-21頁

さて賓爾敏君はボンベイで勤務中にひとりの女性と知り合った。霍起士家の娘である。賓爾敏は彼女を深く愛すると彼女も賓君をととても愛慕した。ふたりの心はぴたりとひとつになりその愛情は心の中に根をはった。ますます親密で外の人から見ればまさに真珠がつながり玉が合わさるそのままだ。たちまち教会で結婚ということになった。あにはからんや好事魔多し、それを邪魔する者がいた。彼女の父親である。父親の考えは娘をカルカッタのある商人に嫁がせようとした。

天笑は漢訳するにあたり「珠聯璧合」「孰知好事多磨」などの慣用句を用いた。読者にしてみれば理解しやすいものになった。また思軒の加筆箇所を次のように漢訳する。「然則霍起士者。將奪其女精神上之幸福。以填其財界之缺陷（そうして霍起士は娘の精神的幸福を奪いそれでもって財務上の欠損を補填しようとしたのである）」。この部分は思軒日訳を直訳している。そればかりかその前部に少しの加筆もする。「大抵霍起士挙債多。恒取貸於加爾各搭商人（霍起士の借金が多いというのはたぶんカルカッタの商人にいつも借りていたからだろう）」。これを独自に付け加えることによってホッジスが自分の娘を引き渡した事情がより鮮明になると考えた。許容範囲内だ。

ファビアンは精神的に大きな傷を受けた。コーシカン大尉が付き添って気分を変える旅にでたというわけ。

エレンが無理やり結婚させられた相手はハリー・ドレイクだった。賭博師で破産している彼はファビアンとおなじ大東号に乗船していた。しかもエレンを伴っていることは隠している。

ファビアンがドレイクが存在を知れば決闘になる。ファビアンが勝ったとしても殺人者がエレンを妻にすることはできない。そうして決闘になった。

その前にヴェルヌによる伏線がはられていることを指摘する。決闘に使用する武器は剣（swords. p.144／劍。284頁／劍。46頁）だ。ピストルではない。次の雷と関連する。

大東号マニアのピットフェレグ博士は雲団の動きを見て嵐の到来を予測した。そればかりか雷鳴を伴う雷光にうたれて自らの右腕麻痺が快癒した体験を話すのだった (p.151/287頁/49頁)。落雷が鍵語だ。

上陸前の晩餐に乗客の全員が食堂に集まった。それを機に人目につかない甲板で決闘が行なわれた。

ふたりは激しく剣を交わらせた。休息の後、ファビアン優勢に進んでいるように見えたが突然彼は自分の剣を取り落した。万事休す。そこにエレンが飛び込んで来たのだった。

His uplifted blade gleamed as though on fire ; one might have said it was the sword of the archangel Michael in the hands of a demon.

彼の振り上げた剣はまるで火のように輝いていた。あるいは悪魔の手に渡った大天使ミカエルの剣だと言う人もいるかもしれない。

Suddenly a brilliant flash of lightning lit up the whole stern. I was almost knocked down, and felt suffocated, for the air was filled with sulphur ; but by a powerful effort I regained my senses.

突然、鮮やかな稲妻の閃光が船尾全体を照らした。私はほとんど倒されそうになった。空気が硫黄で満たされて窒息しそうになるがどうにか努力して感覚を取り戻した。

I had fallen on one knee, but I got up and looked around. Ellen was leaning on Fabian. Harry Drake seemed petrified, and remained in the same position, but his face had grown black.

Had the unhappy man been struck when attracting the lightning with his blade ? p.162

私は片膝をついていたが立ち上がって周囲を見回した。エレンはファビアンにもたれかかっていた。ハリー・ドレイクは茫然とした様子で同じ姿勢を保っていたが彼の顔は黒くなっていた。

不幸な男は剣で雷を引き寄せて打たれたのだろうか。

ドレイクは自分の握った剣が引き寄せた雷に打たれて死亡した。これが決闘の結末だ。

【思軒】其の手中に握れる剣はビリビリとして顫ひたり／折しも一道の電光の颯然と閃めき来りて砦然たる雷鳴と共に全船を震ひしが非常の響きに余は覺へず其の處に昏倒せり一種の異臭は四辺に満ちて鼻を穿つばかり余は兎角して力を極め僅かに我身を擡げしが始めて己れに復へりて視れば余は片膝を折れる儘そこに跪き居りしなり、四方を看まはせは丙敏は倒んとする惠連を左腕に抱きて突立ちたり、杜令は左手に剣を掲けたる儘元の如く屹立せるか其面は正黒になりてフスぼりたり 295頁

大天使ミカエル部分は省略した。また「全船」「異臭」と単語に細かな違いはあるが無視できる範囲内だ。大体は直訳であるといつていい。

【天笑】乃以手中之劍。望空而劃。忽觸於鉄柱。遽聞砦然一声。電火四迸。作非常之巨響。全船為之震動焉。斯時我已昏倒不省人事。乃微醒。但覺滿船有一種異臭。棘鼻而刺腦。余極力舉我軀。始復其旧。然而吾膝尚踞於地也。舉目四矚。乃見賓爾敏方扶此已倒之菱苓於左腕。而杜蘭其則左手提劍。仍屹然矗立於甲板。其面目則焦黒矣。56-57頁

手中の剣を天空に向けて突き立てるとまるで鉄柱に触れたように突然バンという音がして電気の火花が四方に飛び散りとてつもなく大きく響いた。そのため全船は震動したのである。その時私は昏倒し意識を失った。ようやく気がつくと全船にはある異臭がたちこめて鼻をうがち脳を刺激する。私は力をつくして自分の身体をあげてようやくもとに戻った。しかし私の両膝は地面についたままである。周囲を見回せば賓爾敏は倒れた菱苓をちょうど左腕にかかえている。杜蘭其は左手に剣を持ち甲板に屹然と突っ立っておりその顔面は黒焦げであった。

思軒日記に大天使ミカエルがないのだから天笑漢訳にそれが存在するわけもな

い。この部分は直訳になっている。

6 思軒抄訳の理由

思軒の後記に説明がある。部分的に引用する。

「本書は原名 A Floating City と題し紙数殆と二百ページに及び」「本話のうちに就ても航海中の天気はじめ其他の細事を綴述せる所頗る多し」「其の航海中の細事にして本話に関係なき者とナイヤガラ瀑布一段の記事とを省ふき修めて本話七回と為せり」296頁

思軒の考えによってファビアンとエレンの愛情物語を本話にして的を絞ったと述べている。それはそれでひとつの翻訳の仕方だ。落雷を決闘場面に結びつけて終了としたのは小説の見せ場として優れている。

天笑はこの思軒識と後記を省略した。そのため原作者と原作名が消滅してしまったのは残念なことだった。それ以外はほぼ思軒日記に忠実な漢訳になっているといえる。

固有名詞対照表

英 訳	思 軒	天 笑
the "Great Eastern" グレート・イースタン号	大東号	大東号
the "China" チャイナ号	支那号	支那号
Captain Anderson アンダースン船長	アンドルソン 船長安得孫	船長安得孫
Captain Fabian Mac Elwin ファビアン・マック・エルウィン	フヘビヤン曹長 丙敏	賓爾敏曹長
Dr. Dean Pitferge 博士ディーン・ピットフェレグ	ピット 医学士必度	医学士畢士度
Archibald Corsican アーチボルド・コーシカン	コルシカン 胡簡	胡簡礼
Hodges ホッジス (父)	ホツヂス 方爾	霍起士
Ellen Hodges エレン・ホッジス	エルレンEllen 恵連	蔓苓Ellen
Harry Drake	ハーリードレーキ	

ハリー・ドレイク	皮黎杜令	皮黎杜蘭其
----------	------	-------

【参考文献】

富田 仁『フランス小説移入考』東京書籍株式会社1981.3.27。55、60頁

——『ジュール・ヴェルヌと日本』花林書房1984.6.20

秋山勇造「森田思軒」『埋もれた翻訳——近代文学の開拓者たち』新読書社1998.10.20。

79-113頁

白石静子監修『森田思軒とその交友——龍溪・蘇峰・鷗外・天心・涙香』松柏社2005.11.30。

100頁／「明治21年（1888）1月-4月 ヴェルヌ「大東号航海日記」を『国民之友』に連載。

【注】

- 1) 英訳本は以下を使用する。JULES VERNE “A FLOATING CITY AND THE BLOCKADE RUNNERS” (1876) 1904, LONDON AND NEW YORK : GEORGE ROUTLEDGE AND SONS 英訳者不記 (HENRY FRITH という) open library 所収
- 2) おおよそだけを示す。詳しくは樽目録を参照のこと。

ヴェルヌ（迦爾威尼）原作

○「秘密党魁」『小説時報』7-10期 宣統2.10.1-宣統3.5.15(1910.11.2-1911.6.11)

(渡辺浩司) JULES VERNE “LA MAISON À VAPEUR” 1880。日訳『大叛魁』（思軒居士訳、1890.9.21）からの転訳

○『（地理小説）秘密使者』上下巻 上海・小説林社 上巻1904.6 下巻1904.8 小説林（叢書）

JULES VERNE “MICHEL STROGOFF DE MOSCOU À IRKOUTSK” 1876。英訳 “MICHAEL STROGOFF”。ヴェルヌ著、羊角山人訳述、森田思軒刪潤「盲目使者」『郵便報知新聞』1887.9.16-12.30。改題『警使者』報知社 上1888.5.15／下1891.11.2 (DAVID E. POLLARD)

○『（科学小説）鉄世界』15章 上海・文明書局 光緒29.6(1903)

JULES VERNE “LES CINQ CENTS MILLIONS DE LA BEÛGUM” 1879。英訳 “THE BEGUM'S FORTUNE”。紅芍園主人（森田思軒）訳「仏・曼・二学士の譚」

『報知新聞』1887.3.26-5.10。後、単行本『鉄世界』集成社1887.9。「此書由日本森田思軒本転訳而来」

○『(国民小説)無名之英雄』上中下冊 上海・小説林社 上冊1904.8 中冊1905.3 下冊1905.6 小説林(叢書)

JULES VERNE著、英訳は“FAMILY WITHOUT A NAME”。原作者不記、(森田)思軒居士訳『無名氏』春陽堂1898.9.11

ユゴー(露俄)原作

○『(哲理小説)鉄窗紅涙記』28章 『月月小説』1年1号-2年6期(18号) 光緒32.9.15-戊申6(1906.11.1-1908.7)／上海・群学社図書発行所 宣統2.3(1910)／思軒全集ではない

VICTOR HUGO “LE DERNIER JOUR D'UN CONDAMNÉ” 1829 「死刑囚最後の日」。ユゴー作、思軒居士訳「死刑前の六時間」『国民之友』第309号附録-335号(1896.8.15-1897.2.13)(仏国ウ井クトル、ユゴー著、森田文蔵(思軒)訳『ユゴー小品』民友社1898.6.4所収)

○『侠奴血』 小説林総発行所 乙巳11(1905)／思軒全集ではない

VICTOR HUGO “BUG-JARGAL” 1826。ウ井クトル、ユゴー著、森田思軒訳『懐旧』民友社1892.12.16

3) 「少年小説大系」第13巻 長山靖生編『森田思軒・村井弦斎集』三一書房1996.2.29。
610頁

4) 荒井由美「包天笑「空中戦争未来記」など(下)」『清末小説から』第137号2020.4.1

包天笑漢訳「新造人術」

——原作と底本

『清末小説から』第150号（2023.7.1）に掲載。神田一三名を使用。包天笑「新造人術」の原作が三豊によって指摘された。ヘリングだ。天笑は日訳の閃電子（三津木春影）「(奇中奇談) 神力博士の生物製造」(『冒険世界』第3巻第5号1910.4.20増刊号「世界未来記」)を底本にしたことを明らかにする。春影は原作の前後を入れ替えたりしている。それぞれの挿絵を比較した。春影日訳から天笑漢訳が生まれた証拠のひとつとなる。

1 はじめに

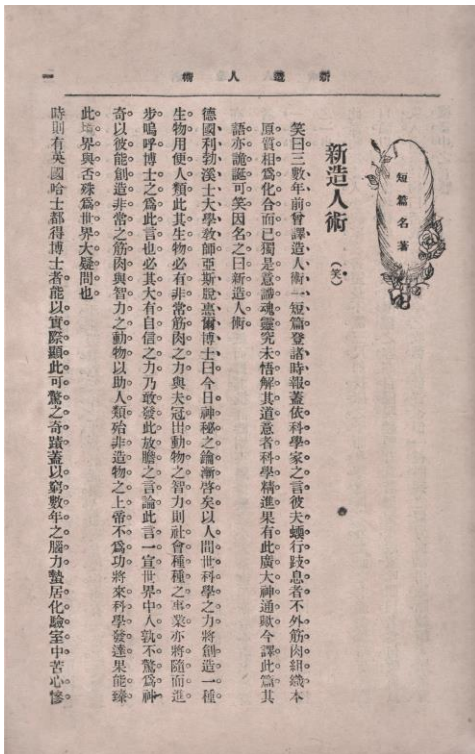
包天笑漢訳「新造人術」（1910）の原作について新発見があった。三豊が指摘してHenry A. Hering “Mr. Broadbent's Information” (Pearson's Magazine, March 1909) という。

念のためカタカナ表記などで補記する。ヘリング (Henry A(u)gustus. Hering、1864-1945) 「ブロードベント氏の報告」(『ピアスンズ・マガジン』1909.3) となる。

天笑漢訳にはもともと原作者も原作名も記していない。漢訳の原作について新しい発見がなされるのはうれしい。探索の困難度が高いからそう感じる。上記のままを清末小説研究会ウェブサイト(2022.2.23)で紹介した。三豊も同日付で自分のウェブサイト「微博」で書いている。そこでは「英国 Pearson's Magazine 1909年3月号」と表記して傍点個所が加えられた(傍点筆者。以下同じ。後述)。

ヘリングは英国の作家。雑誌に多数の作品を投稿しているという説明がある*1。
包天笑は英文原作から直接漢訳しない。主として日本語作品を底本に使用する。
英語作品ならば英語のできる張毅漢、楊紫驊らと共訳することはある。

笑「新造人術」（『小説時報』第6期 宣統二年七月朔日（1910.8.5））である。ご
覧のとおり原作、日訳を明記しない。



首頁



表紙

笑というまでもなく包天笑を指す。彼の名前しか掲げないから一見すると創作だと勘違いしそうだ。しかし天笑自身が冒頭前言で「翻訳して（今訳此篇）」と書いている。底本は日本語だろうと推測できる。

手順として三豊が示した原作を確認することからはじめる。

2 原作の探索

三豊が指摘する『ピアスンズ・マガジン』1909年3月号を探した。

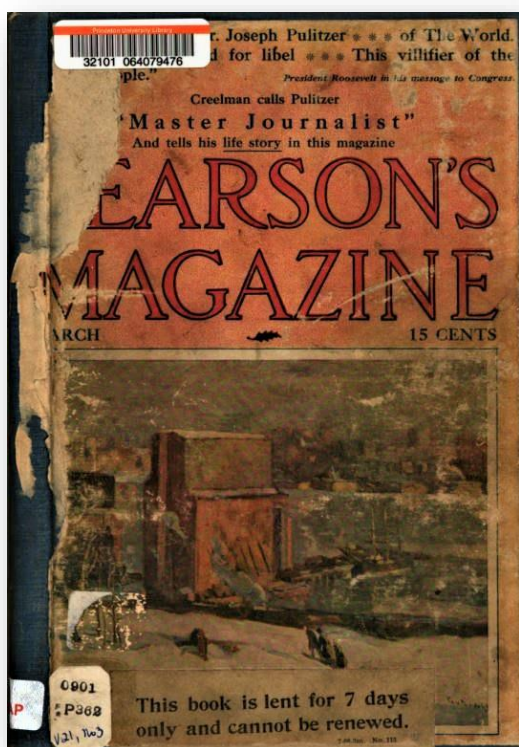
ネットでは比較的簡単にみつかる。ウェブサイトの google books、hathi trust などが該当号を収録していた。

見ると奇妙なことに気づく。そこにはヘリングの作品が掲載されていないのだ。

調べてわかったのは『ピアスンズ・マガジン』が英国で創刊され、のちに米国版も刊行されたという事実である。すなわち英国版と米国版の2種類がある。しかも両誌は同時に刊行されていた。

1909年3月号は英国版と米国版が並存している。ただし刊年が同一であっても収録作品は別物だ。また巻号数も異なる。

筆者がはじめに見たのは米国版（第21巻第3号）だった。ヘリング作品を掲載していないとくり返す。



米国版表紙 作品未掲載

ということで英国版（第27巻第3号）を探した。みつけたのは合訂本である



首頁 タイプライター

(google books 所収)。挿絵はロビンスン W. Heath Robinson だと表示がある。

三豊が説明文で雑誌名に「英国」をつけた理由がこれでわかる。小説が掲載されたのは英国版であり米国版ではないことを指している。厳密に区別している事実をさりげなく記した。

小説内容はおおよそ次のとおり。

小説家ブロードベントが語り主だ。彼のもとに人造人間 (automaton) が逃れてくる。小説家は並外れた知能と記憶力を持つ人造人間の助けを得て歴史大作の執筆にとりかかる。そこに造人主バクスターが登場する。自作の電気装置を操作し電波を飛ばし肉体的に苦痛を加えた。ついに人造人間を連れ帰ってしまった。

ブロードベントがその一部始終を報告したのがこの作品だ。原題が「ブロードベント氏の報告」である事由でもある。

つぎは天笑が使用した日本語底本を探す。

3 底本の探索

ヘリングという名前が判明している。それを手がかりにして會津信吾『日本科学小説年表』（1999）*2を見た。次のように書かれている。

「（奇中奇談）神力博士の生物製造」H・A・ヘリング原作／閃電子訳（冒険世界4増刊）40頁

該誌のマイクロフィッシュが国会図書館に所蔵されていた。年表にあるとおり閃電子「（奇中奇談）神力博士の生物製造」（『冒険世界』第3巻第5号1910.4.20増刊号「世界未来記」）だ。



首頁

さらに横田順爾の著作を見る。そこには閃電子が三津木春影の筆名であることの指摘がある*3。

三津木春影（本名一実、1881-1915）、早稲田大学卒。博文館の雑誌『冒険世界』の編集者兼執筆者となった。翻案「呉田博士」シリーズで有名*4。

春影は英語原作の題名を「神力博士の生物製造」と変更した。「神力博士」とは神業のような力を持った人物、すなわちバクスター卿（Lord Baxter。春影は「バクスターといふ博士」とする。後述）を指す。彼が生物を製造したことを前面に押し出して作品名を書き換えた。たしかに小説の主題は人造人間だ。それに注目すれば春影の改題も納得できる。

メアリ・シェリーMary Shelley作の“Frankenstein”（1831）を思い出す読者もいるだろう。（ ）内に春影日訳を挿入して両者の関係を示す。科学者フランケンシュタイン（バクスター＝神力博士）が作った怪物（生物）と同じになる。ハリウッド映画の影響からか怪物そのものをフランケンシュタインだと誤解する人がいるという。フランケンシュタインは造人主の方である。

また原作の一人称語りではなく第三者が状況説明する形に変更する。原作は章分けしていない。春影はそれを9の部分に分けて章題をつけた。「（一）英国両博士の一大奇蹟」というぐあいである。

4 ヘリング原作と春影日訳、さらに天笑漢訳

前 言

原作は題名の下にある大学教授の発言を引用して前言扱いだ。英語→日訳（ルビ省略。以下同じ）→漢訳の順に示す。

【原文】 “*By specialising it may be possible for science to create a type of animal capable of doing the heavy work of the world-creatures of vast physical strength, coupled with a higher form of intelligence than has been evolved as yet in any animal excepting man.*” —Professor Ostwald, Leipzig University p.266

「専門化することによって、科学は世界の重労働をこなすことのできるある種の動物、すなわち強大な体力を持ち、人間を除くあらゆる動物よりも高い知能を持つ動物を作り出すことができるかもしれない」ライプツィヒ大学オストワルト教授

ドイツのある大学教授がそう予言した。科学的に専門化すれば人間とほぼ同等の動物を人工的に作り出すことができるかもしれない。人造人間が仕事を代わってやってくれることを言う。この小説の主題をまとめた。その言葉通りの人造人間が出現するという予告になっている。

春影は次のように翻訳する。

【春影】独逸ライプツィヒ大学の教授オストワルト博士は曰く『専門的に研究すれば、人間は科学の力に依て、ある一種の生物を創造し得らるゝ筈である。而して其生物たるや、非情なる筋肉の力と、人間を除いで[て]は、今迄のあらゆる動物よりも優れたる智力を以て、社会の種々の仕事を遂行し得べきものである。』と。57頁

この部分は直訳していると言っていい。本文を以上のように始める。ただしその前に春影（あるいは編集者）は小説全体を凝縮する紹介文をつけている。次のとおり。「英国の一博士は自由に活動する生物を人工的に造らんと努力しつゝあり。其実験室より逃走せし奇怪なる生物は、如何に小説家を驚倒せしめしか。」

「逃走せし奇怪なる生物」とはバクスター卿が製造した人造人間（あるいは人工生命体）のことを言っている。人間がそれを作るのは神の領域を犯すことを意味する。欧米ではわざわざ説明しなくても分かっているという前提だ。しかし日本ではその理解はない。ゆえに春影は原文を手短にまとめたうえで原作にはない説明を書き加えた（下線筆者）。

【春影】博士は定めて大に自信する所があつて此大胆なる言説を發表したのであらうが、此を聞いた世界中の驚きは非常である[。]筋肉と智力とを有

して仕事の出来る命のある生物を人間の手で創造する！ 殆ど奇蹟といはねばならぬ神様の働きを人間が奪つたものといはねばならぬ。いかに将来科学が発達するとも此ばかりはまさか実現の出来る道理があるまいと騒ぐ。

57頁

下線部分は春影による加筆である。では天笑はどのように漢訳したか。

天笑もまた翻訳を始める前に序言をつける。彼は清末の読者には特別に説明する必要があると考えたようだ。

【天笑】笑曰。三数年前。曾訳造人術一短篇。登諸時報。蓋依科学家之言。彼其蜷行跂息者。不外筋肉組織。本原質相為化合而已。独是意識魂靈。究未悟解其道。意者科学精進。果有此广大神通歟。今訳此篇。其語亦詭誕可笑。因名之曰新造人術。1頁

はじめに。数年前「造人術」という短篇を翻訳して『時報』に掲載したことがある。科学者のいうところによればそのうごめく動物は筋肉組織はもとより合成したものにほかならない。ただし意識靈魂だけはそれを理解する方法はないのだった。その意味するところは科学が進んでもはたしてこの広大な神通力があるかということだ。今この小説を翻訳したがそのいうところはでたらめで笑うべきものだ。それで「新造人術」と名付けた。

ルイーズ・ストロング原作、抱一庵訳「造人術」——天笑と魯迅

ストロング原作「造人術」について少し説明する。

『時報』に掲載した翻訳は、笑「(短篇小説)造人術」(『時報』1906.5.20)である。

天笑が使用した底本は日本語訳だ。ルイ・ストロング、原抱一庵主人訳「造人術」(『小説泰西奇文』知新館1903.9.10。奥付は著者：原余三郎)という。部分訳である。その原作は Louise J(ackson). Strong “An Unscientific Story” (“The Cosmopolitan” 1903:2)だ。抱一庵は作者名を「ルイ・ストロング」と訳した。今なら「ルイーズ・ストロング」だろう。抱一庵の日記が「造人術」だから天笑

はそれをそのまま漢訳に使用しただけ。

該作品が有名であるのは魯迅が同じ日本語訳にもとづいて独自に漢訳しているからにはかならない。魯迅が関係しなかったならば研究者はそれほど注目しなかったと思う。

米国路易斯託崙著、訳者索子（魯迅）「（短篇小説）造人術」（『女子世界』2年4・5期（16・17期合刊）刊年不記）だ。魯迅も漢訳名に同じく「造人術」を採用した。『女子世界』は刊年不記だが陳大康によれば（[編年③1027]）「周樹人、第2年第4・5期合刊（原16・17期）光緒三十二年五月二十四日（1906.7.15）」という（賈立元260頁注②も同様）。なにか根拠があるのだろう。一方、謝[仁敏13]は第2年第4・5期 刊年不記（実際1906.7上旬）と推測する。

天笑漢訳が先行し魯迅漢訳は少し遅れたらしい。1年違いだからほぼ同時期といていい。別々に抱一庵日訳を漢訳した。それを見れば抱一庵の著作は清末の人々に人気があったらしい。

ストロング作品は人工生命の創造を主題とする。ただし作られた人造人間の形状は当時のアメリカにおいて存在した中国人差別と黒人差別という歴史的事実を反映している。すなわち人工生命は中国人と黒人を合成して邪悪な姿と意識をもつものとして描かれる。英文原作を読んでも気づかなければ理解することはむづかしい。

製造された多数のそれが集団で最後には造人主を襲撃するという物語だ。だからこそ原文は「非科学的物語」と題された。しかし抱一庵は作品の最後までを日訳していない。原作を調べてこそ判明することだ。

ここが重要なところである。抱一庵は最初の部分のみ、つまり人造人間が生成される個所だけを日訳して中断した。人造人間が中国人差別と黒人差別によって成立したところを翻訳していない。

包天笑と魯迅は抱一庵日訳しか読んでいないのだから全体を知る由もない。しかたがなかった。

しかし研究者のばあいは違うだろう。過去において多くの研究者はストロング作品を探索せず魯迅が科学の素晴らしさに感動して漢訳したと的外れな評論をして平気なのだった。魯迅の翻訳は絶賛する。林紓の翻訳は嘲罵する。中国学界に

従来から存在した標準的な評価のひとつである*5。

ストロング「造人術」の日訳は人造人間が製造される過程部分のみを切り取った作品だ。一方のヘリング「新造人術」はすでに完成された人造人間が登場するという違いがある。その形状も両者ではまったく異なる。

翻訳の方向

はなしを「新造人術」にもどす。

春影の日本語翻訳は英文原作どおりというわけではない。前後を入れ替えたり、いくつかの箇所では省略し簡略化している。特に最後部分を見捨てて切り上げている（後述）。

主人公が別荘にいたとき犯罪者が侵入してきたことがあった。警察が犯罪者を捕まえた。その際に主人公の小説家はけがをしてその後1ヵ月も右腕を吊らなければならなかった。小説執筆のためにタイプライターを打つには不便だ。

春影はこの部分は大筋に関係がないと考えたか削除した。だから天笑漢訳にもない。

また最初の箇所では記述の順序を入れ替えたのは日本の読者が理解しやすいように工夫をしたとも考えられる。直訳ではない。多少の削除と書き換えを行なっているのは事実だ。翻案近くまでいっているといってもいい。微妙な日本語訳に違いない。ただし基本構造についていえば英文原作から大きくは乖離していない。筆者はそう判断する。一方、天笑の漢訳は少しの省略を施しながら春影日訳をほぼ忠実になぞっている。

人造人間は半人半羊

人造人間といってもいくつかの形態がある。科学者フランケンシュタインが作った怪物は人間と同型だった。ストロング「造人術」のばあいは中国人と黒人を合体して卑小化したものだ。多種多様で幅広い。

ヘリングが創造したのは次のような人造人間である。

【原文】 It was about five feet high, and had the body of an animal, with

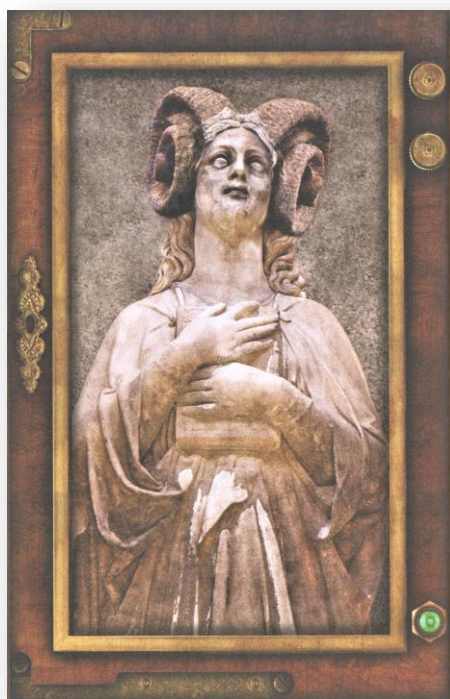
human legs and arms, an animal head with a prodigious cranium, on the sides of which two animal ears stuck grotesquely upward. It was a species of Faun. p.267

身の丈は5フィート（1.5m）ほどで、動物の身体、人間の足と腕、動物のけたはずれた頭蓋骨の頭、その両脇には動物の耳が異様に上に突き出ている。ファウヌス（Faun）の一種である。

「ファウヌス（Faun）の一種」と書いてある。



研究社“NEW ENGLISH-JAPANESE
DICTIONARY”1960。631頁



“STEAMPUNK”所収

ローマ神話に出てくる牧神。上半身は人間、下半身はヤギの姿をして角がある。のちにはギリシャ神話の牧神パンと同一視されたという。普通は半人半羊などといわれる。図を見れば頭と上半身は人間で下半身がヤギだ。頭にはヤギの角と耳がついている。ヘリングの記述するのは「ファウヌスの一種」というから神話の

半人半羊と同じではない。ここは注意点だ。

のちにヘリング作品を収録した作品集には写真のような絵図を添えた*6。それは人間にヤギの角を生やして恐ろしい表情をした生物だ。下半身は描かれていない。これを選択掲載したのは現代の編集者である。ヘリング作品とは関係がない。原作に添えられた挿絵があるからわかる。そちらはまったく異なってやや可愛げのある半人半羊が描かれている。



左上に立っているのがバクスター卿だ。後ろ姿を見せて耳を手で覆っているのが小説家。人造人間があお向けに倒れている。頭だけが角のないヤギ、手足身体は人間のままだ。上下の洋服（小説家の古着）を着て靴下をつけてスリッパをはいている。片方のスリッパは空中に跳ね上げられた瞬間を描いた。

バクスター卿が人造人間を痛めつけている図だ。彼は自作の電気機械を操作して人造人間に苦痛を与えて脅迫するのだった。その電気機械から光線らしきものが発射されている。電波を示しているらしい。逃亡した人造人間を家に連れて帰

るのが目的だ。まわりに散乱している紙がある。それは人造人間が小説家の代筆をしている原稿だ。タイプライターを高速で打ちながら代筆ができるほど知恵の発達した人造人間というわけ。

春陽日訳と天笑漢訳を見る。

【春陽】手と足とは人間通りだが、胴体は動物、それから頭蓋も素晴らしく大きい動物でこゝでをかしい事には頭の左右から羊のやうな二本の長い耳がピヨンと生へてゐる。何の事はない、古来林野牧畜を治め給ふと称せられる半人半羊の神様そのまゝだ。58頁

【天笑】奇哉。奇哉。蓋見其手足確似人類。而身体仍為動物。頭蓋骨似較人類為巨。而頭之左右。聳立兩耳。形同羊角。古来林野畜牧之時代。有此半人半羊之神。今殆見之矣。3頁

怪しやな。その手足を見れば確かに人間に似ている。また身体は動物で頭蓋骨も人間よりは少し大きいようだ。しかも頭の左右にはふたつの耳がそびえ立ち、その形は羊の角と同じだ。古来林野牧畜の時代に半人半羊の神がいたが、今はじめてそれを見た。

原文は「ファウヌスの一種である (It was a species of Faun.)」とある。あくまでも類似の動物だと明記している。それを春陽は「何の事はない、古来林野牧畜を治め給ふと称せられる半人半羊の神様そのまゝだ」とした。「ファウヌス」をそのまま使えば日本の読者は理解しないだろう。ゆえに「古来林野牧畜を……」だと説明を加えて翻訳した。その説明はいい。だが最後の「神様そのまゝだ」と断言しては原文どおりではなくなる。

天笑も春陽をほとんどなぞった。ただし両耳が羊の角と同じ形をしていると漢訳した個所は春陽から離れた。春陽日訳に「角」はない。小さな誤訳である。

春影日訳と天笑漢訳に添えられた絵図も示す。

春陽挿絵は「怪異博士の造つた怪人／機械の如くに活動する怪人出づ」と題する。全体を暗く描いている。発射された電波を目立たせるためかもしれない。絵図の基本構造はヘリング挿絵と同じだ。ただ左右を反転させた。バクスター卿と



キチエムの非常な作進は、遂に人間が人因を造り得ると云ふ事改訂行はれて居る。本誌掲載「新造人術」を以て。

春影日訳挿絵



九 術 人 造 新

此半人半羊之生物。若此番遠走。我國有十分之權利。以責備汝。今力持。平和不加。詞責其意。歸勿遲。也。此生物。辟伏不助。曰。我萬死不願歸也。博士大怒曰。果如是乎。乃自衣囊中出一小箱。斥之曰。若勿懼。汝一身生殺之權。在我掌。操人類之幸。福。惟智。慧。出衆之人。能享之。我何能以汝之故。令我失敗。亦無暇與汝。嗷。嗷。爭論也。

時則博士啓其小箱。之蓋中有電池。而於。極角處。出電線。兩條。乃曰。主人。此。麥。爾。克。尼。式。之。電。氣。機。械。也。我送此電流於人身。必起何種之異變。凡振而彼。乃不動。如石。人可試驗與君觀也。

於是博士乃以電紐一動。而此半人半羊之生物。忽發苦痛之聲。一轉瞬。間。如石人之不能復動。博士乃

箱指此半人半羊之生物曰。彼之靈動。非先發見於耳。鼻。而我之機械。能送此電流於極遠之地。或於手舞足蹈之際。電紐一

天笑漢訳挿絵

人造人間、さらに階段の後方に翼を持つ人体らしきものが描かれる。人造人間の頭部はヤギのつもりだ。右腕が遮って顔の細部が隠れてしまっている。さらに頭部が背景の黒色と重なった。それによりたてがみのある馬に見える可能性が出てきた。身体に下着だけを穿いて転倒している。バクスターが手に持った機械から電波が発射されているのは同じ。ただし散乱する原稿もなければそこにいる小説家も消去してしまった。天笑挿絵は原画を劣化模写した際に階段と有翼人体を省略した。加えて背景の黒色を部分的に残した。だからヤギというよりもどう見ても馬の頭部だ。天笑漢訳では説明しているからいいようなもの見た目は重要だ。

この絵図2点を並列すれば天笑漢訳が春影日訳を底本に使用していることが明白である。

「バックスター」漢訳の謎

細かいことを指摘する。春影が「バックスターといふ博士」と翻訳した個所だ。原文が“Lord Baxter”であることは述べた。本稿ではバクスターを使用している。ところが天笑漢訳では「哈士都得博士」と表記しているのが不可解だ。

Baxter を漢訳すれば例としてバクスター、バスター、百特などが考えられる。それらと哈士都得では微妙に異なる。順序を入れ替えて哈都士得ならばまだ理解できる。そうならば誤植の可能性が高い。その理由は春影がバックスターと表記しているからだ。哈ha (バ) 都du (ツ) 士shi (ス) 得de (ター) と対応する。天笑は促音の「ツ」に漢字「都」を振ったということだ。日本語促音の表記にまどわされた。天笑の日本語理解の程度が見えてくる。といったところで当時の読者は日本語訳も英文原作も知らないのだから問題にはならない。

珍しい例ではない。よく知られた呉禱にも勘違いがある。英人ブラツクを勃拉錫克と誤訳した。その理由はカタカナの「ツ」を「シ」と誤認し「錫」を当てたのだった。

5 結 末

小説家はかねてからスチュアート時代を舞台にした歴史小説を書こうとしていた。それには大量の資料を準備する必要がある。人造人間は食事もせず24時間働く。しかも頭脳にはいくらでも知識を記憶することができて忘れることがない。タイプライターも打つことができる。小説家は助手として人造人間を使って執筆の準備を進めていった。

そこに出現したのがバクスターだ。電気機械 (the Marconi apparantus/春影：マルコニ式の電気機械/天笑：麦爾克尼式之電気機械) を操作して人造人間を痛めつける。個人に固有の震動率に合わせて電流を送れば自由自在に操ることができるという説明だ。上に紹介した挿絵がその場面を描いている。

バクスターは人造人間について小説家が文章にして公表すれば自作の電気機械によって危害を加える(殺す)と脅した。そのまま人造人間を連れて汽車に乗って帰っていった。

春影はここまでを翻訳して物語を打ち切った。最後は「生物が真に創造されるとしたならば、それは果たして人間社会の為め幸か不幸か」（64頁）と字句を創作して締めくくる。天笑はそれを直訳して次のとおり。「嗚呼。創造生物。創造生物。果人間社会之幸乎否乎」（10頁）

読者の中には気づく人もいたのではないか。人造人間が存在することを公表すればバクスターは小説家を殺害すると脅迫したではないか。この物語そのものが小説家自身を殺す理由になる。その矛盾が解決されていない、と。

しかしヘリング原作にはその問題を解決する部分が書かれている。

小説家は仕事が手につかないほど人造人間の行く末を心配する。人造人間がいなければ準備をしている歴史小説を進行させることができないのだった。

小説家が事実を公表すれば死ぬことになる。それにひるまず「ブロードベント氏の報告」を書いた。社会にむけてバクスターが研究室でなにを行なっているかを知らせるのが目的だ。人造人間が見つかる可能性も残されている。その結果、自分が死ぬことになれば当局がその原因を突き止めてくれる。それほど人造人間が小説家にとっては必要な存在だということを強調した。小説家の人造人間に対する深い愛情を吐露して物語は終了する。

春影にとっては作中小説家の個人的願望をそのまま翻訳するつもりはなかったようだ。それよりも抽象的に「人間社会の為め幸か不幸か」と締めくくる方が小説としては適切だという判断だったのだろう。

天笑漢訳は加筆はせず少しの省略があるだけでほとんど春影日記のままだといっている。

【注】

- 1) EVERETT F. BLEILER “SCIENCE-FICTION THE EARLY YEARS” THE KENT STATE UNIVERSITY PRESS, 1990 には次のように見える。HERING, HENRY A[UGUSTUS](1864-) British author. Frequent contributor to the major British periodicals. In later years resident on Jersey, Channel Islands. The Western American local of many of his stories is probably on a literary device in imitation of

the work of Bret Harte. p.358

- 2) 會津信吾『日本科学小説年表』里艸1999.6.30
- 3) 横田順彌『近代日本奇想小説史』ピラールプレス2011.1.20。611頁
- 4) 末國善己「編者解説」三津木春影著、末國善己編『探偵奇譚 吳田博士【完全版】』作品社2008.7.15。476頁ほか
- 5) 次の論文は関連する一部分だ。
 - 熊融[陳夢熊]「關於《哀塵》、《造人術》的說明」『文学評論』1963年第3期 1963.6.14
 - 戈 宝権「關於魯迅最早的兩篇訳文——《哀塵》、《造人術》」『文学評論』1963年第4期 1963.8.14
 - 陳 夢熊「知堂老人談《哀塵》《造人術》的三封信」『魯迅研究動態』1986年第12期
 - 神田一三「魯迅「造人術」の原作」『清末小説』第22号 1999.12.1 (2001年、許昌福によって漢訳された)
 - 神田一三「魯迅「造人術」の原作・補遺」『清末小説から』第56号 2000.1.1 (2002年、許昌福によって漢訳された)
 - 劉 德隆「《造人術》及其翻譯者」『清末小説』第23号 2000.12.1
 - 王 爾齡「魯迅編訳《造人術》的一二補証」陳夢熊『《魯迅全集》中的人和事——魯迅佚文佚事考釈』上海社会科学院出版社2004.8
 - 郭 長海「魯迅訳《造人術》和包天笑訳《造人術》」吳曉峰主編『中国近代文学史証——郭長海學術文集』下冊 長春・吉林人民出版社2005.3
 - 中島長文「「哀塵」一篇は魯迅の訳する所に非ざるを論じ兼ねて「造人術」に及ぶ」『颯風』第38号2005.3.28
 - 宋 声泉「魯迅訳《造人術》刊載時間新探——兼及新版《魯迅全集》の相關訛誤」『魯迅研究月刊』2010年第5期 2010.5.20 電字版
 - 劉禾 (LYDIA H. LIU) 著、孟慶澍訳「魯迅生命觀中的科学与宗教」『魯迅研究月刊』2011.3-4期 2011.4.9-5.6 電字版。英文“LIFE AS FORM: HOW BIOMINESIS ENCOUNTERED BUDDHISM IN LU XUN” (“JOURNAL OF ASIAN STUDIES” VOL.68, NO.1, 2009,2) 未見
 - 謝 仁敏「《女子世界》出版時間考辨——兼及周氏兄弟早期部分作品的出版時間」『魯迅研究月刊』2013年第1期 2013.2.20。魯迅「造人術」の『女子世界』刊年を1906年7月上旬とする。

王家平「魯迅訳作《造人術》的英語原著、翻訳情況及文本解讀」『魯迅研究月刊』2015年第12期 2015.12。神田一三論文を紹介して怪物の背景について言及する。

国蕊「從“世界奇談”到“女子世界”——再議《造人術》的訳介」『魯迅研究月刊』2019年第12期 2019.12.31。喋血生は陳景韓の筆名だという（36頁）。[艶麗14-34頁][艶麗14-75頁]喋血生（即陳景韓）と同じ。魯迅が読んで底本にしたのは『朝日新聞』連載そのものだという。推測であり確証はない。また怪物の背景について言及しない。

国蕊「原抱一庵『造人術』全訳兼両版本校考」『魯迅研究月刊』2020年第3期 2020.4.15。『朝日新聞』掲載2回分を漢訳する。論旨は前出論文とほぼ同じ。

賈立元「第4章第6節 造人、論鬼与“脳電心光”」『『現代』与『未知』：晚清科幻小説研究』北京大学出版社2021.9

符傑祥「誰是“路易斯託崙”？——魯迅訳《造人術》作者考，兼論女作家“失蹤”之謎」『現代中文学刊』2022年第1期（総第76期）2022.2.18。アメリカの女性作家 Louise Jackson Strong の経歴について説明する。H. G. Wells と同時代人だという。怪物の背景について言及しない。また「樽本照雄在文章中就用“他”来称呼，顯然將其誤認為男性作家了」（37頁）と説明をする。男性作家だと誤認していると指摘した。誤り。樽本は論文においてストロングを呼ぶときは「原作者」「作者」「ストロング」とのみ書いている。日本語男性三人称「彼」は使用していない。漢語の男性三人称「他」を使用して翻訳したのは漢訳者許昌福だろう。他人の論文を批判する時は原文（このばあいは日本語）で確認することが必須だ。手を抜いて漢訳ですますことは許されない。

国蕊「上帝頌・造人術・吸血鬼——美国小説 *An Unscientific ^{ママ} story* 跨文化伝播中的變異与重構」『済南大学学报（社会科学版）』2022第4期（総第32期）2022.7.15。ストロング原作について女性と児童を読者に想定して科学技術の進歩を批判し神の權威に疑問を提出する宗教作品だと判断する（批判科技進歩与質疑神權的宗教作品。57頁）。怪物の背景について言及しない。

そのほか多数あり

6) MIKE ASHLEY ed. “STEAMPUNK: EXTRAORDINARY TALES OF VICTORIAN FUTURISM” NEW YORK: FALL RIVER PRESS, 2012. p.16

陳景韓漢訳『俠恋記』

——有明山樵『伯爵と美人』

『清末小説から』第142号（2021.7.1）に掲載。陳景韓漢訳『俠恋記』の底本は有明山樵『伯爵と美人』だ。有明の本名はなにか。これがひとつの謎である。単行本の奥付に記された名前を検討する。日本語原文と漢訳を比較対照するといくつかのズレがある。翻訳からはじまって翻案に変化し最後には漢訳が原作とは関係のない別作品になっていることを指摘する。翻訳者に徹していればありえない。陳景韓が作家であったことと無関係ではないだろう。最後には漢訳が原作とは関係のない別作品になっていることを指摘する。

1 はじめに

冷（陳景韓）「（多情之偵探）伯爵与美人」（『時報』連載1904.6.12-1905.1.31。未見）がある。

陳景韓は日本に留学しており日本語ができた。多くの漢訳は主として日本語作品を底本にしたと考えてよい。

その題名からして使用したのは有明山樵『伯爵と美人』（1897）だとわかる。陳景韓漢訳の新聞連載は後に単行本になった。その際改題して『俠恋記』（1904）である。

本稿は漢訳『俠恋記』を検討する。その前に解決すべき問題がひとつある。

作者の有明山樵とは誰か。いかにも筆名だ。有明には別に『大和撫子』という題名の作品がある。

2 有明山樵『伯爵と美人』と『大和撫子』

刊行年から見れば『大和撫子』（1895）が先行する。『伯爵と美人』（1897）が後だ。次のとおり。

① 有明山樵『（探偵小説）大和撫子』50回、弘文館1895.12.26。奥付は著作兼発行者：西村富次郎。菊香山人「大和撫子序」明治廿八年十二月あり。国立国会図書館デジタルコレクション所収。以下、注記のないものは同様。

② 有明山樵『（探偵小説）伯爵と美人』50回、弘文館1897.6.20。表紙は「探偵小説／日本之偉美人露西亜之貴族／伯爵と美人」。奥付は著作兼発行者：西村富次郎。天外山人「探偵小説／伯爵と美人序」明治三十年六月あり（架蔵）。春江堂 明治42（1909）.9.5の表紙は「探偵小説／伯爵美人」。同じく春江堂 1906.6があるというが未見。

上記2種の小説は題名が異なっているだけで内容は同一である。挿絵も同じ。

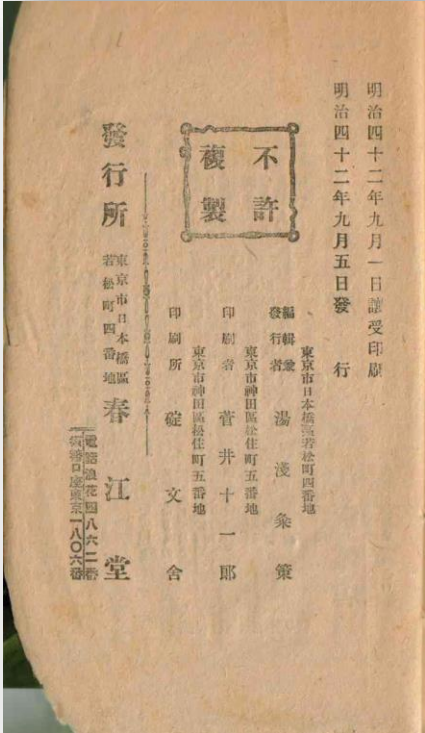
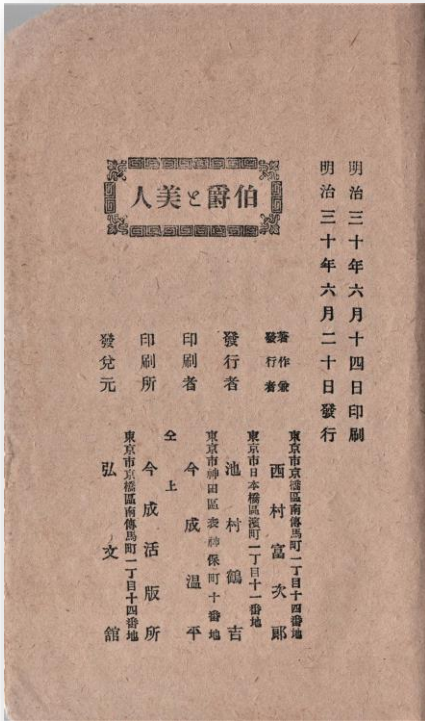
ただし「序」の一部および署名と日付が違う。異同個所のみを引用する（基本的にルビ省略。以下同じ）。

『大和撫子』 「……開明の徳といふべし然ればやまと新聞に連載せし大和撫子は有明山樵の徳にして……」明治廿八年十二月 菊香山人記

『伯爵と美人』 「……開明の徳といふべし然ればこの冊子に載せる伯爵と美人は無名氏其人の徳にして……」明治三十年六月 天外山人記

有明山樵にルビを振って「ゆうめいさんしやう」だ。「さんしやう」は今の表記では「さんしょ」という訛った話し言葉だと思われる。さかのぼれば「ござんしょ」に戻り、そこから元の意味は「有名でございますでしょう」の筆名になる。ただしそのやや滑稽な筆名が小説内容にふさわしいとは言にくい。

『大和撫子』序の有明山樵が『伯爵と美人』序では無名氏其人となる。無名氏其人といいながら著者名を有明山樵と明記する。無名氏という意味がない。「序」の年月を変更したのは出版年月に合わせたためだろう。



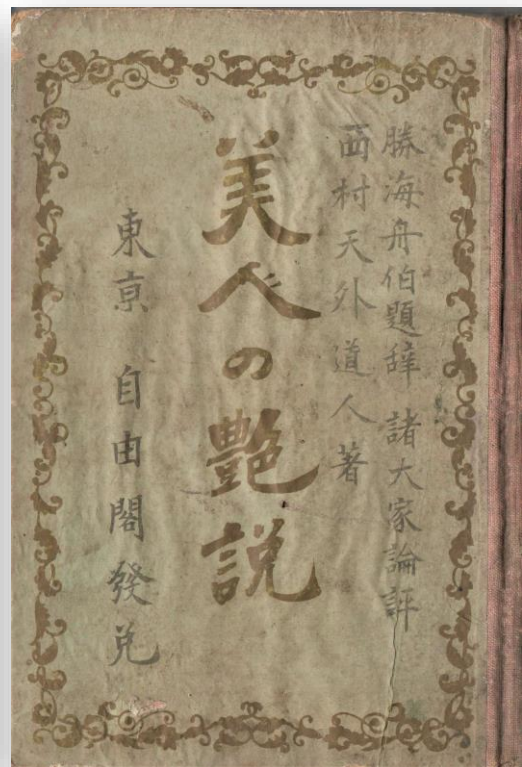
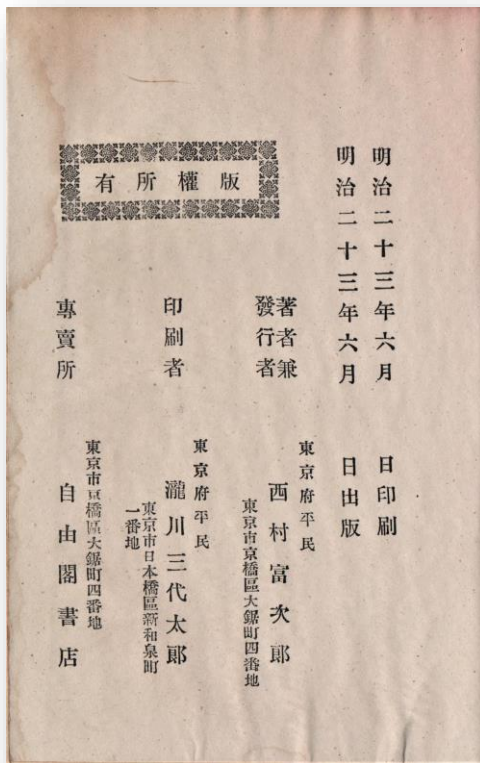
上の箇所以外は同文だ。すると菊香山人と天外山人は同一人物だということになる。両書の奥付には「著作兼発行者：西村富次郎」とあるのを見ておく。

菊香山人で調べれば採菊散人が見つかる。

採菊散人『復讐裏見刃』弘文館 明治29 (1896) .2.5。編輯兼発行者：西村富次郎。序は露の屋菊香記

菊香山人と採菊散人、露の屋菊香がつながる。その大元に西村富次郎がいる。一方の天外山人で探れば天外道人が出てくる。

西村天外道人『美人の艶説』自由閣書店 明治23 (1890) .6。著作兼発行者：東京府平民／西村富次郎 (架蔵)



以上の書籍は「著作兼発行者：西村富次郎」で共通する。版元の広文館と自由

閣書店は西村の住所と同じだ。

これらを総合すれば、菊香山人＝天外山人＝西村天外道人となって西村富次郎に帰結する。有明山樵は西村富次郎の筆名と考えてよい。

ここまではよろしい。少し横道に入る。

この西村富次郎は杉山藤次郎と同一人物だとする書目が存在する。

3 杉山藤次郎と西村富次郎

本名杉山藤次郎、別名西村富次郎と明記する書物である。次のとおり。

村上浜吉著作兼発行人『明治文学書目』村上文庫 1937.4.30／飯塚書房1976.7.10
影印（架蔵）。458頁

藤次郎 杉山藤次郎 【別名】西村富次郎

【号】天外 思海（以上西村） 花のや紅

南柯亭 南柯亭無筆（以上杉山） 蛟龍居士

ここには杉山藤次郎の別名が西村富次郎だと記述してある。「号」の部分では西村と杉山に分けるのがやや不可解だ。同一人物であれば号なども一緒にするのが普通だろう。なぜ2系統にする必要があるのだろうか。よくわからない。また西村の号を思海とするが『（古今列国腕力社会）六雄八将論』（明治22）の著者は杉山思海となっている。記述が一致しない。

杉山藤次郎の著作を紹介した横田順爾*1は別人説を唱えている。2カ所から引用する。

（杉山藤次郎）埼玉県出身、生没年不明。新聞社勤務を経て作家となる。当時（明治十六年～二十年ごろ）東京の神田に在住。本名・杉山藤次郎。号は「蓋世」「奇正」「南柯亭夢筆」「杉山藤」など多数。埋もれた明治小説の先行研究者・石川巖をはじめ、「西村富次郎」という作家と同一人物という記述をしている文献もあるが、おそらく別人と思われる。 138-139頁

それで杉山＝西村同一人物説は、どうなったかという、やはり別人と考えている。悪くいえば、杉山はしたたかな出版者である西村に、うまく利用されたのだと思う。この推測が正しいか、間違っているかも、今後の研究者に委ねるしかない。 190頁

杉山と西村が同一人物であるかどうか。筆者は書物の奥付表記に注目する。

4 住所から見る杉山藤次郎と西村富次郎

書物によっては奥付に著者などの住所を明記するばあいがある。杉山と西村の住所を抜き出してみる。煩雑なので詳細は注に示した*2。

それらの住所表示を杉山と西村それぞれにまとめると次のようになる。

杉山藤次郎は埼玉県人で最初は東京神田に寄宿していた。

1882-83年、埼玉県人／神田区錦町一丁目十番地鈴木善之助方寄留とある。

1884年に神田区五軒町三番地へ移った。

さらに東京府民となって1886-87年も同じ神田区五軒町三番地である。

一方の西村富次郎はもともと東京府民だ。留吉の名前で1883年、東京府民／西村留吉／京橋区幸町七番地高塚兼太郎方同居とある。

同じく1885-86年、西村富次郎の名前を使用して住所は京橋区幸町七番地高塚兼太郎方同居のまま。

1888-90年は京橋区大鋸町四番地に移転。1890年に京橋区新湊町の高藤勢喜方同居。

1894-97年に京橋区南伝馬町一丁目十四番地へ転居。

1897-99年は日本橋区本石町三丁目七番地である。

以上のとおり杉山と西村の住所は一貫して異なっている。

次の3冊で杉山藤次郎（神田区五軒町）と西村富次郎（京橋区南伝馬町）が併記される。交差点とっていい。

杉山藤次郎（杉山蓋世、南柯亭夢筆）『豊臣再興記：仮年偉業』（自由閣 明治20（1887）.12）である。

「著者：東京府平民／杉山藤次郎／神田区五軒町三番地」と並んで「出版人：東京府平民／西村富次郎／京橋区南伝馬町一丁目八番地」（自由閣と同一住所）と書かれる。

西村の住所である京橋区南伝馬町は1894年からのはずだ。それ以前の1887年の書籍になぜ出てくるのか。理由はわからない。

次の2冊は筆名で示される。著者兼発行者：西村富次郎と奥付に明記するから著者は西村だと普通は考える。しかしながら実作者は別人という。これは複雑である。

大天狗哲想戯演、小天狗滑文筆記『滑稽哲学・雷笑演説』自由閣 明治21（1888）.5.15。著述兼発行者：東京府平民／西村富次郎／東京京橋区大鋸町四番地（近代書誌・近代画像データベース。画像あり）

近代書誌・近代画像データベースの目録では該書の著者は杉山だと記録する。次のとおり。

杉山藤次郎著、大天狗哲想戯演『滑稽哲学／雷笑演説』東京自由閣発兌 明治21（1888）.5.15、著述兼発行人：西村富治郎

これには以下のような注釈がついている。「書き入れ：見返し「表標題の字ハ久永其穎〔キエイ〕の筆」「杉山藤次郎といふデモ作者の記本なり／署名の西村富次郎ハ出版屋の主人／当時これ位の原稿料ハ全篇にて七八円位なりと／杉藤より直接聴けり」「小林清親の画ハ二枚にて三円位の時価なりし」（鉛筆書）蔵書印：水野（朱陽方印）本山彦一寄贈」（近代書誌・近代画像データベース。画像なし）

大天狗哲想戯演と称して西村富次郎が著述者となっている。そのことについて「書き入れ」た。「杉藤より直接聴けり」だから杉山藤次郎本人に確認したことがわかる。「西村富次郎ハ出版屋の主人」と明記するから杉山とは別人である。

つぎの書物でも同じ例が見える。

顯尾外（あごをはづし）変説、臍野宿替（へそのやどかへ）筆戯『滑稽自慢演説附討論會』東京 自由閣蔵版 明治22（1889）.3.8、著者兼発行者：東京府平民／西村富治郎／東京京橋区大鋸町四番地

近代書誌・近代画像データベースの目録では以下のように記す。杉山を作者と認定して著者名を書き換えている。

杉山藤次郎著『滑稽自慢演説 附討論会』東京 自由閣蔵版 明治22 (1889) .3、著述兼発行人：西村富治郎／発行元所在地：東京京橋区大鋸町四番地「書き入れ：「実ハ杉山藤次郎記述」（鉛筆書・奥付）」 本山彦一寄贈（近代書誌・近代画像データベース。画像なし）

著者名はもともとが筆名なのだ。それと奥付に見える著述者西村がまぎらわしい。西村の筆名だと誤解されるだろう。そこで事情を知る人による両書の「書き入れ」があるとわかる。杉山に親しい同一人物の手になるものと思う。

こまごまと述べた。結局のところ杉山と西村の住所が一致しない。別人と考えていい。

というわけで本題にもどる。西村富次郎の日本語と陳景韓の漢訳を見る。

5 有明山樵『伯爵と美人』と陳景韓漢訳『俠恋記』

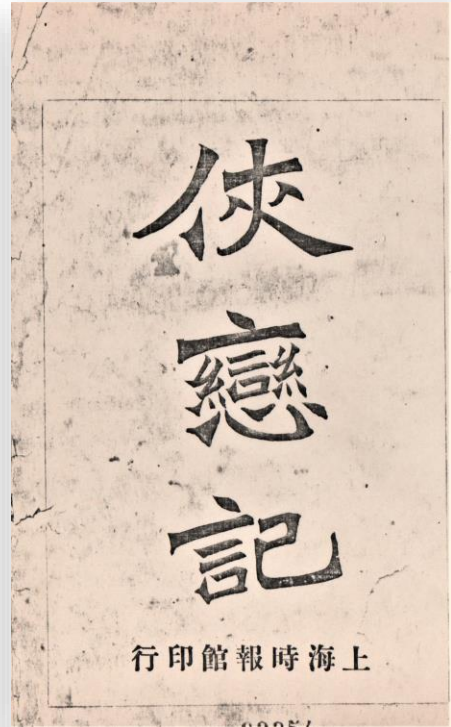
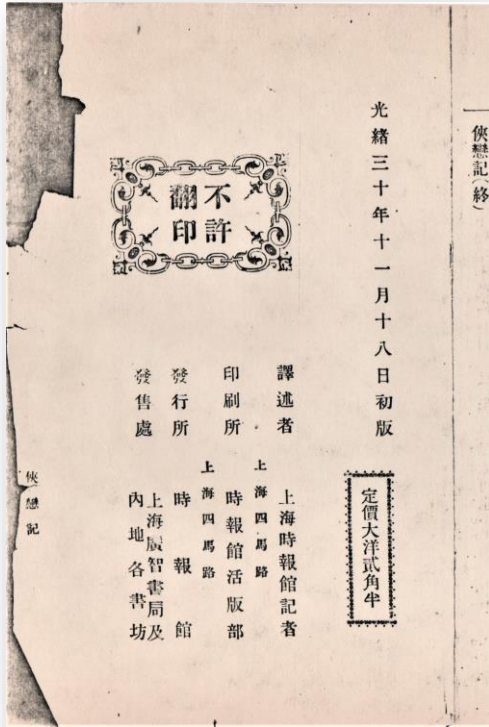
本稿で使用する版本は以下のとおり。略号も示す。

【有明】有明山樵『（探偵小説）伯爵と美人』50回、弘文館1897.6.20、著作兼発行者：西村富次郎

【陳景韓】上海時報館記者（陳景韓）訳述『（多情之偵探）俠恋記』46回、上海・時報館 光緒三十年十一月十八日（1904.12.24）、原作者名不記

有明作品は50回だが陳景韓漢訳は46回という違いがある。内容に合わせて回目を対比させる。

第1回 怪しの使者	第1回 怪客
第2回 千圓の手当金	第2回 千金之俸（省略あり）
第3回 世界一美人	第3回 絶世美人
第4回 大夜会	第4回 跳舞会
第5回 不安心な委嘱	第5回 強盗（警視總監の性格説明を省略）
第6回 美人の情願	



- | | |
|------------|----------------------|
| 第7回 恋の意恨 | 第6回 比劍（日本武士道を加筆） |
| 第8回 決闘の上 | （決闘場面を圧縮。日本の三種特産を加筆） |
| 第9回 決闘の下 | |
| 第10回 入獄 | 第7回 入獄 |
| 第11回 敵は美人 | 第8回 美人実是仇敵 |
| 第12回 王[玉]章 | 第9回 美人之信 |
| 第13回 地下の通路 | 第10回 伯爵之僕 |
| 第14回 伯爵の使 | |
| 第15回 美人の敵 | 第11回 伯爵者美人之敵 |
| 第16回 二個の秘密 | 第12回 兩個秘密 |
| | 第13回 妙！妙！ |
| 第17回 危機 | 第14回 危機動 |
| 第18回 誰だと思ふ | 第15回 誰歟 |
| 第19回 仮粧婦人 | 第16回 仮装美人 |
| 第20回 捕手 | 第17回 遭難 |
| 第21回 思はぬ殺生 | 第18回 殺 |

- | | |
|----------------|-------------------------|
| 第22回 二度の遭難 | 第19回 伯爵之使者又来 |
| 第23回 家宅搜索 | 第20回 搜索家宅 |
| 第24回 伯爵与美人 | 第21回 伯爵与美人 |
| 第25回 露見 | 第22回 破綻暴露 |
| 第26回 大事 | 第23回 美人之使 |
| 第27回 伯爵の素性 | 第24回 伯爵之来歴 |
| 第28回 疑团氷解 | 第25回 美人之来歴 |
| | 第26回 小林之来歴（流盼を加筆） |
| 第29回 頓智 | 第27回 小林与美人 |
| 第30回 玉換 | 第28回 死了 |
| 第31回 大不首尾 | 第29回 玉換 |
| 第32回 車中の会合 | 第30回 馬車中之秘密談話（上） |
| | 第31回 馬車中之秘密談話（下）（秘密を加筆） |
| 第33回 伯爵の正体 | 第32回 非伯爵 |
| 第34回 美人の素生 | 第33回 真伯爵 |
| | 第34回 瓦多娘之出處 |
| 第35回 二度の仮装 | 第35回 囚伯爵 |
| 第36回 宝玉返上 | 第36回 仮伯爵与真美人（省略あり） |
| 第37回 金牌の効力 | 第37回 追…逃 |
| | 第38回 金牌之効 |
| 第38回 美人の捕縛 | 第39回 美人捕縛 |
| 第39回 野心暴露 | 第40回 野心勃勃（加筆と省略あり） |
| 第40回 怪しの悌 | （警視総監宅に監禁されていた青美人は省略） |
| 第41回 捕縛 | 第41回 小林捕縛（省略あり） |
| 第42回 終局乎否乎 | 第42回 終局的勝利畢竟是誰？ |
| 第43回 手術は一つ | 第43回 警察長捕虜 |
| 第44回 天外声あり | 第44回 虚無党（全面書き換え） |
| | 第45回 護照（全面書き換え） |
| | 第46回 火車（全面書き換え） |
| 第45回 旅券のお施与 | |
| 第56[46]回 唯一の目的 | |

第47回 又候換玉

第48回 逢たかりし人

第49回 果して船なり

第50回 大団円

陳景韓漢訳は上で示したように原作者の有明山樵あるいは西村富次郎を出していない。原書にある「序」も省略して物語は始まる。冒頭部分を引用し比較対照する。

【有明】露国聖彼得斯堡は、流石歐洲の大都なり、往来ふ人馳違ふ事、肩相摩し轂相撃つ、雲の如き雑鬧の裡を、押しつ押されつ急ぎ往く一個の男あり身の丈さまで高からねど、相貌麗はしく骨格逞ましく、炯々たる瞳と眦々たる鬚漆より黒く、皮膚の色淡く黄なるは、東洋人とそ知られたり。 1頁

【陳景韓】却説俄羅斯全国地跨欧亜兩洲。他的京城叫做聖彼得堡。這聖彼得堡在歐洲各大國中。也算是一個數一數二的大都會。休説有事時。就是在平日。也是人山人海。車往馬來。有一日正在熱鬧中。只見急忙忙來了一個偉丈夫。生得眉開眼大。鼻直口方。鬚髮全黑。皮膚微黃。看來却是一個東洋人種。

1頁

さてロシア全土はヨーロッパとアジアの兩洲を跨ぎ、その首都はセントペートルスボルクという。このセントペートルスボルクはヨーロッパ各大大国の中でも一二を争う大都會である。なにかあつた時だけでなく平日でも人は溢れかえり車馬の往来が激しい。ある日この雑踏の中にひとりの偉丈夫が急いでやってきた。眉が開いて眼は大きく、鼻はまっすぐで口は四角、ヒゲと頭髪は真っ黒、皮膚はやや黄色で見るからに東洋人である。

有明のいう「轂相撃つ」とは車輪の中央部分（轂 こしき）がぶつかりあうこと。「肩摩撃撃」で往来が激しく混雑している様子をいう。陳景韓はそのまは使わず「人山人海。車往馬來」と言いかえた。漢訳冒頭にロシアの地理的位置を加筆したのと同じく清末の読者に理解しやすいように工夫をしたということだ。

出だしの陳景韓漢訳は逐語訳ではない。しかし日本文の意味を把握した翻訳になっている。

ところが謎のロシア人が日本人徳島顕利（漢訳は小林）に声をかけてからの場面で陳景韓は原文の順序を入れ替える（（ ）に漢訳を示すことがある）。小林についての説明だ。

【陳景韓】他（小林）原是個日本武官。生平最喜探人密事。為人甚是精細。又学得一心武藝。如劍擊相撲等事。件件都精。 1-2頁

彼（小林）は日本の武官であって生まれつき探偵することが得意で、人となりは誠に精密にして武芸の心得があり、たとえば撃劍相撲などにもすべて精通していた。

原文の徳島をなぜだか小林に置き換えた。その必要があるのか疑問が残る。「相撲」に漢訳したが原文は「柔道」だ。有明の原文では次の個所に相当するだろう。少し後に出てくる。

【有明】徳島は胆力あり才気あり、日本特得の撃劍柔道は、ことさらに言ふを用みず、 3頁

徳島（小林）についての説明を前に移動させた。その方が理解しやすいと考えたらしい。

こういう独自の処理方法が陳景韓の漢訳方向を示唆している。つまり有明の小説を材料にして陳景韓が自由に翻訳する。別の言い方をすれば原文に近い翻案である。

陳景韓は有明が会話を示すカッコは使用しない。話者に「道」を置いて区別する。当時の漢訳に見られる方法になっている。ただし1ヵ所だけ「（句）」を使用して会話を示す個所がある（60頁）。

有明山樵『伯爵と美人』の舞台はロシアだ。スペイン人だと称する美人（ワード嬢／瓦多娘）をめぐってロシア人伯爵と警視總監（警察長）が争奪戦をくり広げ

ていた。その果てに美人は双方から命を狙われることになる。ロシア滞在中の日本陸軍中尉徳島顕利（小林）がそれに巻き込まれた。徳島は格闘技、拳銃、外国語に堪能ないわゆる軍事探偵だ。その彼が伯爵と警視總監の追及を逃れて結局は美人（日本人某子爵とスペイン人の娘）を救い出す。

「探偵小説」と称するがその中身は恋愛小説にほかならない。ただ徳島が探偵風の行動をとって活劇、変装、探険するからその角書がある。有明の該作品は最初『大和撫子』と題していた。その美女を中心に見たからだろう。ただしそれでは舞台がロシアであるとはわからない。『伯爵と美人』に改題して想像の幅を持たせた。

6 回数ズレ

先に回目の対照表を掲げておいた。有明が50回で陳景韓は46回だ。漢訳は明らかに原文を省略している。

有明原作の第1回最後の小部分を陳景韓漢訳では第2回冒頭に移動させた。漢訳は最初『時報』に連載されていたから掲載可能字数の関係でそういう処理をしたのかと思う。そこを見れば忠実に漢訳したなら日本語原文より回数が多くなって不思議ではない。ところが事実上減少している。

例えばロシアの警視總監が徳島に特別任務を依頼した際、探偵社会の合図だといって細工した指輪を渡す（7頁）。漢訳ではその関係部分をすべて削除した。なぜなら有明原作ではその指輪が使用されることはないからだ。そのかわり後に同じ役割をする「金牌」が出てくる。それを提示すると秘密結社の協力が得られる。陳景韓は金牌を残したが指輪部分については省略した。そう判断したようだ。それは正しい処理だといえる。

警視總監は徳島に指令を与えた。ある美女の関心を徳島に向けさせろというものだ。大夜会で紹介されたのがワード嬢（別の個所では瓦徳嬢／漢訳は瓦多嬢）だ。徳島と言葉を交わした彼女は大いに興味を示した。その後、徳島は暴漢に襲われるようになる。

ひとりは見知らぬロシア人だ。剣を用いての決闘に持ち込まれた。陳景韓はそ

の決闘場面（日本語原文に2回分）を大きく圧縮して漢訳した。徳島が短銃を出す場面、剣で決闘中にロシア人が徳島に遺書を書けという場面などは省略する。そのかわりに原文にないものを追加している。日本の「三種特産」という。

【陳景韓】日本国共有三種土産。有了這三種土産。纔撐得住了小小三島。這三種土産。合成来就叫做日本国的国髓。又叫大和魂。這三種土産是什麼。第一件就是擊劍。第二件是柔術。第三件是遊泳。這三件事。無論是男是女。是老是少。是文是武。没有一人不学。没有一人不会。学童裡以此三件列入功課。小孩們以此三件當做遊戲。又一種專精此道中人。另外与他取了一個名字。叫做武士道。這武士道到處受人尊敬。人人視之如嚴師慈父。因此就釀成了通国尚武之風。…… 13頁

日本には3種の特産がある。それがあるから小さな3島をようやく支えることができる。この3種の特産を合わせて日本の神髓、あるいは大和魂と呼ぶ。それらは何か。ひとつは撃剣、つぎに柔術、最後は水泳だ。老若男女、文人武人を問わず学ばない者はなく、できない者はいない。学童についてこの3件は授業科目になっている。子供たちはそれを遊戯とする。またその道に精通する人がおり別に名前を与えて武士道という。この武士道は至る所で尊敬され人々は厳しい師匠、慈愛深い父として見る。そのため全国に尚武の風を醸成したのである。……

陳景韓は有明の原文にない武士道について説明した。そうする必要を感じたらしい。自分が持つ日本人に関する知識を清末の読者に伝えたかったということか。

徳島を殺そうと後ろから糸を引いていたのはワード嬢だと警視総監は説明した。ワード嬢の秘密をあばいたのが理由だという。スペイン人ではなく日本人であるというのがそれだ。有明はそう書いている。

秘密というからロシア政府転覆計画とか皇帝暗殺あるいは虚無党に関するものかと思うだろう。ところが美女の出自にすぎない。さらに後にはワード嬢が徳島に直接説明して彼女にはふたりの敵がいるという。伯爵と警視総監だ。先に警視総監が徳島に解き明かしたのは虚言であった。敵に狙われる彼女にとって頼りに

できるのは同じ日本人の徳島をおいてはいない。ふたりは双方から押し寄せてくる妨害を排除してロシア脱出をめざす。

有明は小説をあくまでも恋愛関係という限られた範囲内に設定している。『伯爵と美人』はそういう恋愛小説なのだ。

小説の大筋は以上のとおり。

日本語原作と漢訳を比較対照しながら読んでいくと原文はまったく一致しているわけではない。

次のような改変もある。徳島がワード嬢の元を辞して秘密の通路を抜けていた。前方から伯爵の使者が来た。それと争い倒した。といっても使者が格闘の際に誤って自分のナイフで自分を刺した結果だ。

死体を処置したあと別の伯爵の使者がやって来る。有明の原作では横道に身を隠す。「二度目の使者は神ならぬ身の、斯とも知らで過ぎ去りぬ」(75頁)。使者は徳島に気づかず通り過ぎワード嬢のところへ行った。

ところが陳景韓は「小林当時。又對準伯爵的家人一鎗。登時又将家人打死(小林はその時また伯爵の使者に狙いをつけ発砲し、たちどころに殺してしまった)」(40頁)。これでは徳島(小林)は殺人鬼ではないか。陳景韓の漢訳はやり過ぎだ。

有明原作では伯爵の使いは2人いる。ミチイルとアルコスだ。ミチイルは徳島と闘い死んだ。だから2人目のアルコスがワード嬢に連絡をとりに来た。

だが陳景韓はふたりとも殺してしまったから原作には存在しない3人目の使いを寄こしたことに変更する。その名前もいい加減につけた。ミチイルを斯登にするのは違いうだろう。もうひとは古柏と適当な命名だ。ただし部分的な改変であって大筋が違ってくるというものではない。

陳景韓が細かな改変によってなにを強調したかったのか。ロシア人を無慈悲に2人も殺す日本人徳島という印象操作をしたかったと推測するくらいだ。

ワード嬢は伯爵と結婚の約束をしていた(85頁)。陳景韓はそれを漢訳していない(44頁)。作品名になっている『伯爵と美人』はその婚約がもとになっている重要要素である。ここの漢訳は不十分である。財産と貴族に憧れて野心を持ったがそれが今は心変わりしてしまったというワード嬢の告白なのだった。それを漢訳しないから伯爵と美人の関係が不明確で読者には伝わらない。

ただし別の個所では手を抜いてはいない。伯爵はロシア皇帝の叔父でワード嬢とはドイツで知り合った。

【有明】瓦「伯爵が妾に向つて我と同伴に露国へ行けば、正妃にして遣らう、すると汝は皇族になられるのだ、何もむづかしい事はない、日本の華族の娘といへば、露国の公主に申立ても、決して差支はないといつてね」 92頁

【陳景韓】伯爵自見我後。便要和我。同回俄国去。許我說。到了俄国。便立我為正妃。做了箇伯爵夫人。也沒点辱了我。 48-49頁

伯爵は私と会ったのち一緒にロシアへ行こうといいました。私に約束してロシアに行けば正式な妃にするし伯爵夫人になるのだから決して恥ずかしくはないと。

ワード嬢の話を聞いている徳島は彼の考えを口にする。

【有明】苟しくも日本帝国に生まれた婦人が、歐洲三界をまごついて、猿のやうな連中に、甘々と首尾好く誑かられたり翫具になつて居る話しを謹聴する訳ですもの 93頁

『伯爵と美人』は日露戦争が起こる以前の作品だ。その当時から有明にはロシアに対する侮蔑の感情があつたらしい。陳景韓はこの部分は漢訳していない。

陳景韓が武士道について加筆したことは紹介した。次のような加筆もある。ワード嬢が徳島に委細を説明してふたりでロシアをあとにすることに決めた。その時、ワード嬢は徳島に流し目を送る。

【有明】夫人は流眇にじつと中尉の顔を見遣りぬ、中尉の胸は轟けり、その何の故なるやは中尉自分も知らざるべし 96-97頁

「流眇（ながしめ）」が使われる個所だ。原文わずかに2行半という部分を陳景韓はなんと漢訳1ページ強も分量を増している。

【陳景韓】瓦多娘此時兩眼全神都注在小林的面上。說完之後。便将兩眼向下沈了一沈。轉眼来又向小林轉了一轉。兩個眼珠剛轉到了右眼的眼梢上。左眼的眼頭上。遂又慢慢的沈了下去。這一轉古書上有個名目就叫做流盼。（以下略）

ワード嬢はこの時全神経を集中して両目を小林の顔に注いだ。話し終わると両目を下にちょっと沈めるとまた小林に目を転じるのだった。ふたつの眼球は右眼の目じり、左眼の目がしらに転び、ついにはゆっくりと沈んでしまった。この動きを古書では名前がついていて流し目という。（以下略）

省略した部分では説明がつづく。すなわち流し目には4種ある。恨盼、怨盼、恋盼、流盼と称してそれぞれを詳細に解説するわけだ。小説の大筋とは関係がない。

陳景韓の考えでは恋愛小説なのだからこういう部分にこそ描写を強化しなければならないということだろう。それで日本語原文にないものを加筆した。ここはすでに翻訳ではなく翻案である。

加筆の例はまだある。伯爵と警視總監が秘密の会話を行なう。馬車の中というのが慣習だと説明がある。

陳景韓はその車中の密談という個所に食い込む。密談をなぜ警察長のところ、あるいは伯爵邸でやらないのか。はたまた野外の秘密家という方法もあるではないか、と。

【陳景韓】其秘密的事。分為二類。其一為形質上的秘密。如体格相貌衣服名刺等類。其一為意思上的秘密。如書信言語。…… 62頁

その秘密は2類に分かれる。ひとつは形質上の秘密でたとえば体格、相貌、衣服、名刺などをいう。もうひとつは精神上的の秘密でたとえば書信、言語である。……

こういう悠長な秘密談義をほとんど2ページにわたって長々と続ける。有明の

小説ではロシア伯爵と警視總監が日本人の徳島を殺そうと密談する緊迫した場面だ。その勢いを大きく損ねる陳景韓の加筆であると言わざるをえない。

大筋は踏まえながら陳景韓は自由に細かい変更をし長短の文章を加える。あるいは省略をする。この翻訳姿勢が最後まで続くかと思われた。

ところが大いなる変化、すなわち書き換えが最終部分に生じている。有明原作7回を陳景韓は3回に短縮する。しかも内容を全面的に置き換えるのだ。

7 結末部分を創作する

それは有明「第44回 天外声あり」を漢訳「第44回 虚無党」にした個所から始まった。

有明第44回で警視總監に捕らわれていたワード嬢を徳島が救助する。徳島とワード嬢は一旦隠れ家に逃れた。徳島は伯爵に面会しロシアを出国する旅券（護照）を出すように要求する。その条件に警視總監がワード嬢に惚れているという情報を告げた（第45回）。だが旅券は拒否された。一方で伯爵は警視總監がワード嬢を隠していると考え彼に引き渡しを直接談判する（第56[46]回）。徳島は金牌を手に援助を求めるが果たせず警官に取り囲まれた。得意の変装で警官になりすましてその場を離脱する（第47回）。大夜会に遭遇しそれに参加したある紳士に会う。こちらは金牌の効力によって旅券2人分を依頼することができた（第48回）。旅券を手にした徳島と美佐子は汽船で脱出する手はずだ（第49回）。徳島は追跡してきた警視總監と警官隊に追い詰められた。闘いに勝った徳島は汽船にいる美佐子とともにスペインから日本へと帰還した（大団円）。

徳島が警官隊と闘う大立ち回り場面が最後まで連続する。汽船がロシア脱出の方法となっていることを確認する。

陳景韓は回目を「虚無党」に変更した。そこから彼の意図がうかがえる。政治的な要件を小説に持ち込もうとした。そこが日本語原作と異なる。

有明『伯爵と美人』は恋愛小説だ。一貫してワード嬢をめぐるロシア伯爵と警視總監による争奪戦を物語の基本に据える。敵から美佐子を守るために実際に行動するのが徳島中尉の役割りだ。宮廷内の醜聞あるいは虚無党とはもともと関係

がない。原作のここを押さえておきたい。

陳景韓はそういう有明の執筆方針に最後になって異を唱えた。ただの乱闘で終わるのに不満を覚えたということかもしれない。そこで彼独自の筋展開を行なう。

小林（徳島）とワード嬢は一旦隠れ家に逃れた。伯爵がどれほど権力を持っているかを陳景韓が自ら説明する。ほとんど同年齢のロシア皇帝よりも3倍もある。しかもふたりの仲は悪い。皇帝に対抗するために虚無党に入党した。警視総監はその秘密を小林に探らせようとしたのだった（第44回）。

ここで虚無党が出てくる。皇族の一員が虚無党員であるという陳景韓の奇想天外な思いつきである。小林は出国のための旅券を必要としていた。例の金牌所有者も虚無党であった。そこで伯爵に脅迫状を送り虚無党だという秘密を暴露されなければ旅券を発行しろ、と命じた。伯爵はそうせざるをえない。旅券を入手した小林とワード嬢はシベリア行きの列車に搭乗した（第45回）。

旅券が発行されたことを知った警察長（警視総監）は追っ手を水路と陸路のふたつに分けた。ふたりを乗せた列車を発見したが間に合わず取り逃がした。その列車の酔っぱらった罐焚きが火力を異常に高める。機関手がそれを咎めるとケンカになった。そうしてふたりとも列車から転落してしまう。列車に乗っていた兵士たち、囚人たちはそれを知らない。機関手のいない列車は駅に停車せず突っ走るままだ（第46回）。暴走する車中にある小林（徳島）とワード嬢はどうなるか。

【陳景韓】那小林瓦多娘兩人胸中。自是快樂。但這火車後來。到了那裡去。到了什麼時候纔停。至今尚無下落。 91-92頁

小林とワード嬢の胸中はもともと楽しいものだった。しかしこの列車はこれからどこに行くのか、いつになったら停車するのか。今にいたるも不明のままである。

陳景韓の書き換えは格闘場面を大いに省略した。有明の大団円に比べるとその結末は読者の意表を突く。小林とワード嬢の乗った暴走列車の結末を知らないというのだ。これは現実を超越しており恋愛小説の枠を大きく外れる。見方によればこれはこれで成立しないわけではない。対比するために有明の最後部分を示す。

【有明】船は直ちに錨を抜き、航海幾日、天晴れ浪穏かに、めでたく西班牙に着きしかば早速美佐子が伯母を尋ね、居ること数日、二人は又も打連て、日本への便船に搭じたり、十余年見えざる父上、いかに待詫ておはすらん、相見ん時の嬉しさを、かねてより胸に描けば、自から色に顕はれ、美佐子の顔は春の如し、胸に描ける音に父上のみならんや、美佐子は夜毎何をか夢む、覚来る暁中尉を見ては羞ろめりとぞ 178頁

有明の結末は絵にかいたような大団円であることがわかる。これを見れば陳景韓の提出した結末が異常であって明らかに恋愛小説風ではない。

陳景韓の『俠恋記』は原作をほぼなぞって漢訳するところから始まる。途中で字句を加筆し翻案の要素を持ち込む。ところが最後部分をまったく創作して全面的に取り換えてしまった。

これでは純然たる漢訳ではない。かといって翻案にしては原作の大筋を外している。では創作かといえば最後の3回分のみだからそうでもない。漢訳であり翻案を兼ねて創作まで混合させる。陳景韓はまことに奇妙な作品に仕立て上げた。

人 物 表

有 明	陳景韓	備 考
徳島顕利	小林	日本陸軍予備中尉
バルテスコ (一)	戈拔(警察長)	警視総監、ワード嬢の敵
〃 ボスキー将軍	×	変名
マーガレット、ワード	瓦多	美人才女、スペイン人と称する日本人。伯爵の婚約者、警視総監に狙われる
〃 瓦徳嬢	瓦多小姐	実は日本人某子爵とスペイン人の娘
〃 美佐子	美佐子	
アンドリー安徳理	×	ワード嬢の召使いと称する
ペーター	小厮	ワード嬢の召使い、小男
ミチイル	斯登	伯爵の使者

アルコス	亜立	伯爵の使者
×	古柏	伯爵の使者
伯爵	伯爵	露国皇帝の叔父、ワード嬢を正妻にすると騙す
オットー	×	金牌に服従する男
ゲタ	×	警視総監が雇ったワード嬢のための侍女
バルチヒ	×	警視総監の副官

【参考文献】

李志梅『報人作家陳景韓及其小説研究』華東師範大学2005.4 2005届研究生博士学位論文
 国 蕊「近代翻訳文学中日本転訳作品底本考論——以陳景韓的転訳活動為例」『文学評論』
 2019年第1期 2019.1

【注】

- 1) 横田順彌『近代日本奇想小説史』ピラールプレス2011.1.20
- 2) 杉山藤次郎と西村富次郎。奥付に住所を明記する書籍を列举する。主として国立国会図書館デジタルコレクション所収ほかによる
 - 杉山藤次郎 埼玉県 東京神田区錦町の鈴木方に寄留—————
 - 杉山藤次郎『泰西政治学者列伝』鶴声社 明治15（1882）.5.25。編輯人：埼玉県平民／杉山藤次郎／神田区錦町一丁目十番地／鈴木善之助方寄留
 - 杉山藤治郎（本文は藤次郎）『政談學術演説討論種本』秩山堂 明治16（1883）.5。著述人：埼玉県平民／杉山藤治郎／神田区錦町一丁目十番地
 →神田区五軒町に移転
 - 杉山藤次郎『黄金世界新説』今古堂 明治17（1884）.3。著者：埼玉県平民／杉山藤次郎／神田区五軒町三番地
 - 西村富次郎 東京府 京橋区幸町の高塚方に同居—————
 - 西村留吉『廓独案内』自由閣 明治16（1883）.5.20、編輯兼出版人：東京府平民／西村留吉／京橋区幸町七番地高塚兼太郎方同居（横田順彌「ぼくの調査力を自分で信じて発言するなら、これは杉山（藤次郎）が書いたものではないと断言してもいい」182頁）
 - 西村富次郎『増補難波戦記』自由閣 明治18（1885）.11、編集兼出版人：東京府平民／西村富次郎／京橋区幸町七番地高塚兼太郎方同居

○西村富次郎『絵本参考小栗実記』金盛堂、自由閣 明治18（1885）.12、編集兼出版人：東京府平民／西村富次郎／京橋区幸町七番地高塚兼太郎方同居

○西村富次郎『草履打芸者達引』自由閣 明治19（1886）.3、編集兼出版人：東京府平民／西村富次郎／京橋区幸町七番地高塚兼太郎方同居

○西村富次郎『国姓爺忠義伝』自由閣他 明治19（1886）.12、編集兼出版人：東京府平民／西村富次郎／京橋区幸町七番地高塚兼太郎方同居

○西村富次郎『徳川天一坊実記』自由閣 明治19（1886）.12、編集兼出版人：東京府平民／西村富次郎／京橋区幸町七番地高塚兼太郎方同居

●杉山藤次郎 神田区五軒町—————

○杉山藤次郎（奇正）『拿破崙軍談：通俗絵入』前橋書店明治19（1886）.7、編次者：東京府平民／杉山藤次郎／神田区五軒町三番地

○杉山藤次郎『午睡の夢：軍書狂夫』金桜堂 明治20（1887）.2.3。著者：東京府平民／杉山藤次郎／神田区五軒町三番地

○杉山藤次郎（南柯亭夢筆）『午睡の夢：軍書狂夫』金桜堂 明治20（1887）.5.23再版。著者：東京府平民／杉山藤次郎／神田区五軒町三番地

○杉山藤次郎（杉山蓋世、南柯亭夢筆）『豊臣再興記：仮年偉業』自由閣 明治20（1887）.12。著者：東京府平民／杉山藤次郎／神田区五軒町三番地／●出版人：東京府平民／西村富次郎／京橋区南伝馬町一丁目八番地（自由閣と同一住所）

●奥付は西村富次郎 京橋区大鋸（おが）町 自由閣と同一住所—————

○蛟龍居士著述、夢遊居士校閲『不平哲学』自由閣 明治21（1888）.5.8。著述兼発行者：東京府平民／西村富次郎／東京府下京橋区大鋸町四番地

○大天狗哲想戯演、小天狗滑文筆記『滑稽哲学・雷笑演説』自由閣 明治21（1888）.5.15。著述兼発行者：東京府平民／西村富次郎／東京府下京橋区大鋸町四番地（近代書誌・近代画像データベース）

◎杉山藤次郎著、大天狗哲想戯演『滑稽哲学／雷笑演説』東京自由閣発兌 明治21（1888）.5.15、著述兼発行人：西村富治郎

「書き入れ：見返し「表標題の字ハ久永其穎 [キエイ] の筆」「杉山藤次郎といふデモ作者の記本なり／署名の西村富次郎ハ出版屋の主人／当時これ位の原稿料ハ全篇にて七八円位なりと／杉藤より直接聴けり」「小林清親の画ハ二枚にて三円位の時価なりし」（鉛筆書）蔵書印：水野（朱陽方印）」本山彦一寄贈（近代書誌・近代画像データベース。画像なし）

○ブーランゼー著『一千八百七十年之侵寇史』自由閣 明治21 (1888) .5.13、著述兼発行者：東京府平民／西村富次郎／東京京橋区大鋸町四番地

○俱礼（グレー）著、井上勤訳述『優勝劣敗：猿乃裁判』（発行者：東京府平民／西村富次郎／京橋区大鋸町四番地、福田栄造（略））明治21 (1888) .12.18

○幡溪仙史『日本漫遊・外人膝栗毛』自由閣 明治21 (1888) .12。著述兼発行者：東京府平民／西村富次郎／東京京橋区大鋸町四番地

◎（近代書誌・近代画像データベース。画像なし）に別物あり。阿部秀吉著／幡溪仙史著／自由閣 明治21 (1888) .12。著述兼発行者：東京府平民／西村富次郎／東京京橋区大鋸町四番地

○顯尾外（あごをはづし）変説、臆野宿替（へそのやどかへ）筆戯『滑稽自慢演説 附討論会』東京 自由閣蔵版 明治22 (1889) .3.8、著者兼発行者：東京府平民／西村富治郎／東京京橋区大鋸町四番地

◎杉山藤次郎著『滑稽自慢演説 附討論会』東京 自由閣蔵版 明治22 (1889) .3、著述兼発行人：西村富治郎／発行元所在地：東京京橋区大鋸町四番地「書き入れ：「実ハ杉山藤次郎記述」（鉛筆書・奥付）」本山彦一寄贈（近代書誌・近代画像データベース。画像なし）

○花のや紅『春色三ツ鞆絵』自由閣 明治22 (1889) .6.25。著作兼発行者：東京府平民／西村富次郎／京橋区大鋸町四番地

○花のや紅『恋路の迷』自由閣 明治22 (1889) .9.14。著作兼発行者：東京府平民／西村富次郎／京橋区大鋸町四番地

●西村富次郎 京橋区大鋸（おが）町 自由閣、西村書店と同一住所—————

○西村富次郎『生徒必携・子供教育演説』自由閣書店 明治23 (1890) 4.28。著者兼発行者：東京府平民／西村富次郎／京橋区大鋸町四番地（近代書誌・近代画像データベース）

○西村天外道人『美人の艶説』自由閣書店 明治23 (1890) .6。著作兼発行者：東京府平民／西村富次郎／東京市京橋区大鋸町四番地

○西村富次郎『少年教育明治孝子伝』西村書店 明治23 (1890) .7.21、著者兼発行者：東京府平民／西村富次郎／京橋区大鋸町四番地

○西村富次郎『少年教育歴史はなし』西村書店 明治23 (1890) .8.23、著者兼発行者：東京府平民／西村富次郎／京橋区大鋸町四番地

●京橋区新湊町 加藤勢喜方同居 弘文館と同一住所—————

○西村天外道人『和漢泰西・古今学者列伝』弘文館 明治23 (1890) .12.11、発行者：東

京府平民／西村富次郎／京橋区新湊町四丁目一番地加藤勢喜方同居

●京橋区南伝馬町 弘文館と同一住所

○西村天外道人編纂『日本立志編：偉業龜鑑』弘文館 明治27（1894）.3.10。編輯兼発行者：西村富次郎／京橋区南伝馬町一丁目十四番地

○有明山樵『大和撫子』50回、弘文館 明治28（1895）.12.26。著作兼発行者：西村富次郎／東京市京橋区南伝馬町一丁目十四番地

○採菊散人『復讐裏見刃』弘文館 明治29（1896）.2.5。編輯兼発行者：西村富次郎／東京市京橋区南伝馬町一丁目十四番地（序は露の屋菊香記。やまと新聞に鶯の袖として連載）

○有明山樵『（探偵小説）伯爵と美人』50回、弘文館 明治30（1897）.6.20。著作兼発行者：西村富次郎／東京市京橋区南伝馬町一丁目十四番地

○微笑小史『桜田騒動』弘文館 明治30（1897）.1.2。編輯兼発行者：西村富次郎／京橋区南伝馬町一丁目十四番地

●日本橋区本石町 弘文館と同一住所

○西村富次郎『日本偉人伝』弘文館 明治30（1897）.11.4。著作兼発行者：西村富次郎／東京市日本橋区本石町三丁目七番地 国会図書館書誌情報は「西村富次郎（獲麟野史）著」とする。「獲麟野史識」あり

○獲麟野史『二宮尊徳』弘文館 明治31（1898）.10.25。著作者発行兼：西村富次郎／東京市日本橋区本石町三丁目七番地

○獲麟野史『平賀源内』弘文館 明治32（1899）.2.7。著作兼発行者：西村富次郎／東京市日本橋区本石町三丁目七番地

○礫川隠士編輯『日本新地理問答』弘文館 明治32（1899）.11.25。編輯兼発行者：西村富次郎／東京市日本橋区本石町三丁目七番地

陳景韓漢訳コレリ『新蝶夢』の奇怪

——黒岩涙香訳『白髮鬼』

『清末小説から』第144号（2022.1.1）に掲載。神田一三名を使用。陳景韓漢訳コレリ『新蝶夢』の底本は涙香訳『白髮鬼』である。ただし漢訳は内容を大幅に縮小するばかりか重要な部分も省略している。涙香の名前も出さない。奇妙な箇所が多い。翻訳の体をなしていない。これほどまでに圧縮改変するのであれば漢訳しないほうがよかった。何か勘違いしている。

黒岩涙香の日本語訳『白髮鬼』がある。それをもとに陳景韓が漢訳して『新蝶夢』になった[艶麗10]。さかのぼると涙香訳本にはイギリス原本がある。原作を起点に置いて日訳を第1翻訳（または改編）と称す。継続しているから漢訳は第2翻訳となる。清末民初でよく見かけるイギリス原本→日訳（第1翻訳）→漢訳（第2翻訳）という順序である。

1 陳景韓漢訳がかもす違和感

漢訳と底本の日訳を見て最初に気づくのは書物の厚さが違うことだ。涙香訳『白髮鬼』は新書版で522頁ある。一方の漢訳『新蝶夢』は60頁の薄さだ。判型が異なるとはいえこの厚薄の相違は印象に残る。

文字数をざっと計算してみる。見た目のページ数より事実を反映しているだろう。

概数をいう。底本の涙香訳『白髮鬼』は本文42字×12行×522頁＝約263,088

字だ。ところが陳景韓漢訳『新蝶夢』は本文29字×11行×60頁＝約19,140字にすぎない。

日本語を漢訳すれば普通は減少して約3分の2くらいの分量になる。陳景韓訳が全体で約17万5千字くらいであれば通常だ。つまり『新蝶夢』の判型で約550頁になってもおかしくはない計算である。しかし実際は上のとおり約1万9千字60頁にとどまっている。単純に見れば漢訳全体は日訳の7.2%だ。『白髮鬼』は涙香訳に比較して圧縮しすぎだろう。そうなった理由があるはずだ。

漢訳は本文自体を短縮しながら冒頭に「新蝶夢弁言」を4頁もつけている（後述）。不均衡である。しかも説明して原本がイタリア人作で20万言だがそれを抄訳して1、2万言だという。おおざっぱな数字だ。また原作者はイタリア人だと書きながら漢訳の底本である日本語訳本を隠している。いろいろと疑問点の多い漢訳である。

漢訳を推し進めてどうしてこの薄さになったのか。本稿ではそれを主として説明する。

2 原作と底本

原作者はイギリスの小説家マリー・コレリ（MARIE CORELLI、1855-1924）、題名は『ヴェンデッタ』という*1。

その書名は昔のイタリアで行なわれた復讐、仇討ちを意味する。これが涙香訳『白髮鬼』になったことはすでに緒方流水（1902）*2が明らかにしている。涙香とほとんど同時代の指摘だ。

以後は柳田泉（1935）*3あるいは伊藤秀雄（1971）*4らがコレリ原作説を伝えている。

涙香日訳の初出は『万朝報』1893.6.23-12.29連載という（未見）。

単行本は（ハビヨ・ローマナイ原著）、涙香小史訳述『白髮鬼』初後篇（扶桑堂1894.1.2、1894.2.13。未見）がある。架蔵するのは（ハビヨ・ローマナイ原著）、黒岩涙香（周六）訳『白髮鬼』全107回（明文館書店1919.10.10縮刷第一版／1926.7.5震災後第一版）だ。

大正八年十月十日縮刷第一版發行
大正十五年七月五日(震災後)第一版發行

著者 黑岩周六
發行者 (扶桑社) 町田濱雄
發行所 東京市日本橋區正町九番地 飯島竹次郎
印刷者 東京市京橋區町二十五番地 高橋郁

發行所 東京市日本橋區正町九番地
電話七〇一番・電報四五四番
明文化館書店

縮刷 涙香集第十一編
白髮鬼
定價 金貳圓四拾錢

版權所有

編輯四書集 白髮鬼 第十一篇

黑岩涙香譯

(一)

讀者よ、余は鬼なり、人死すれば之を鬼と云ふ、余は一旦死して生返りたる者なればなり、人にして鬼、鬼にして人、思へば恐ろしき余の鬼生涯、試みに余の故郷なる伊國ネーブル府に行きて伯爵波瀾は如何にせしぞと問へ、異日同音に波瀾は既に死したりと答へん、役場の戸籍帳を檢むるも波瀾は去八十四年の激烈なる悪疫に罹り死したるを知らん、余は即ち其死したる波瀾なり、戸籍上、法律上は全くの死人なれど余は猶ほ生て此世に在り、當年齡二十歳、身體健全の一男子理に此通り筆取りて自傳の鬼生涯を記しつゝ有るなり、顔には男盛の血色を留め、

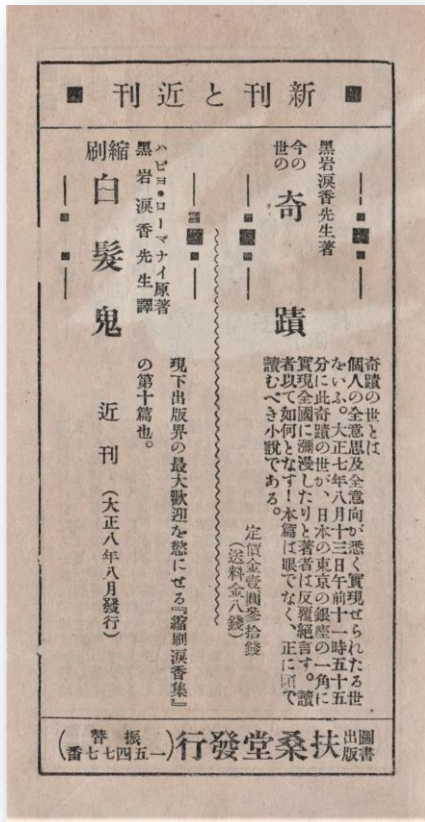
—(1)—

参考までに示せば黒岩涙香著『白髮鬼』（春陽堂1934.7.12、日本小説文庫349。千葉竜雄「白髮鬼について」あり）が国立国会図書館デジタルコレクションに収録されている。

上で「ハビヨ・ローマナイ原著」にカッコをつけたのには意味がある。涙香単行本の前面に押し出して「ローマナイ原著」と表示しているわけではないからだ（後述）。しかし「訳者の前置」で説明はされている。

のちに版元が広告に「ハビヨ・ローマナイ原著」と表示した。涙香訳『（縮刷）噫無情』（扶桑堂1915.9.18／1918.10.3廿三版）に「近刊（大正八年八月発行）」とある。原著者を表立って知らせるのは後になってからのようだ。ただし原著者といながら「ハビヨ・ローマナイ」は架空のものである。

本当の原著者コレリは該日訳本のどこにも記述はないのだった。だからこそ流水の記録に価値がある。



広告1918

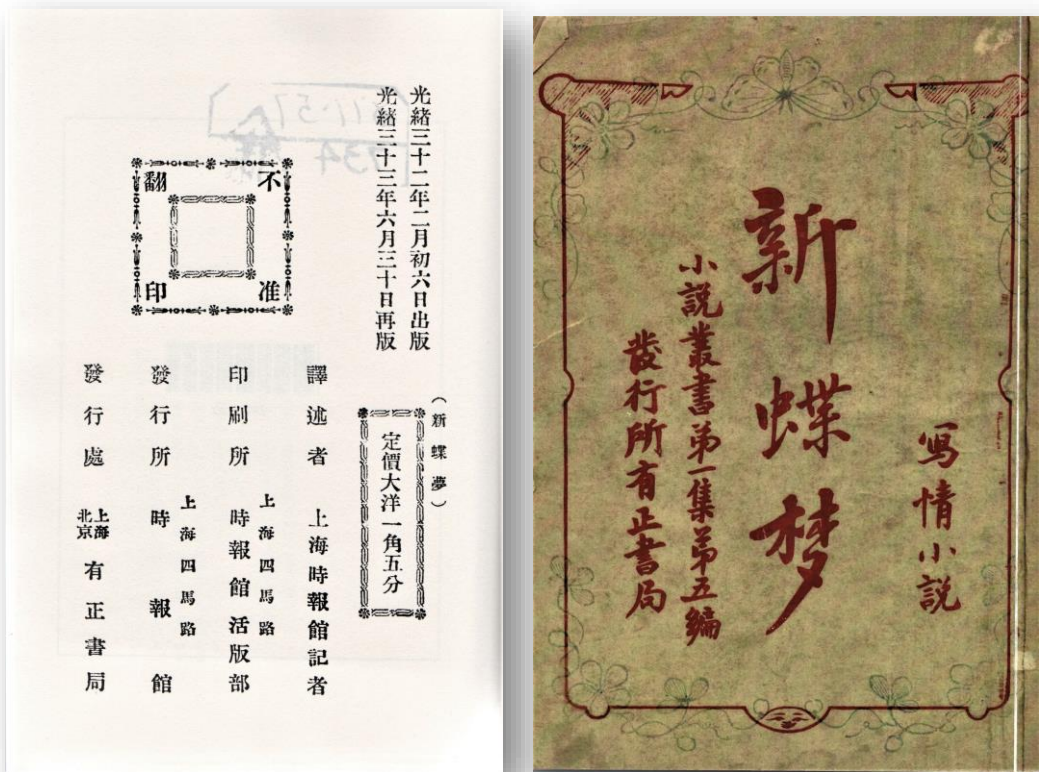
3 漢訳と言及文献

筆者が見ている陳景韓漢訳本は次のとおり。

(意大利)波倫著、冷(上海時報館記者 陳景韓)訳『(写情小説)新蝶夢』上海北京・有正書局 光緒三十二年二月初六日(1906.2.28) / 光緒三十三年六月三十日(1907.8.8)再版 小説叢書1=5(影印本)

『時報』(1905.11.10-12.19)に連載された(未見)。それが上の単行本になった。

涙香日記の漢訳について言及する中国人研究者の文章は多くはない。2本を抜



影印本

き出して示す。その著者はふたりとも日本語を理解する。英語原作と涙香日訳を確実に把握し簡潔に記述しているから選択した。既発表の文献を視野に入れて基本事項を押さえた優秀な論文だということができる。論文名など詳細は略号とともに文末の参考文献にあげておいた。

[艶麗10] Marie Corelli “Vendetta, A Story of One Forgotten” 1886。黒岩涙香「白髪鬼」『万朝報』1893.6.23-12.29。『白髪鬼』初後篇、扶桑堂 1894

[国蕊14] 日訳底本：「白髪鬼」、ハビオ・ローマナイ著、涙香小史訳、扶桑堂、1893。原作：Vendetta, Marie. Corelli

2論文ともに陳景韓『新蝶夢』の日本語底本からその原作まで明記しているの

がよい。

4 原作者名表記の疑問

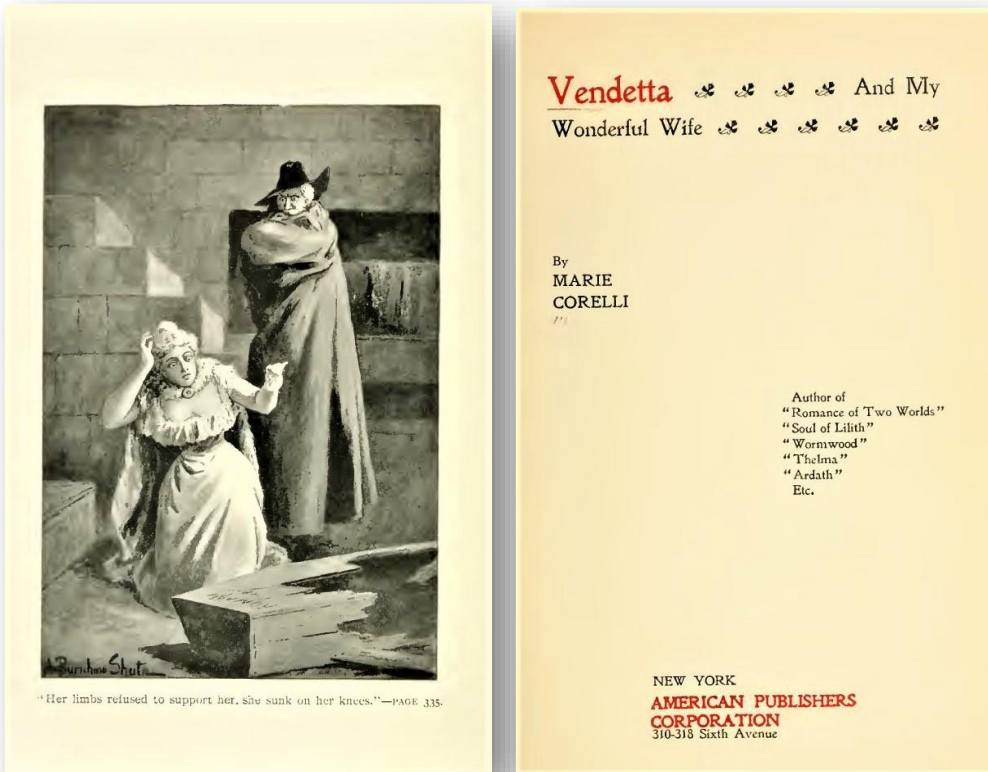
前述のとおり原作者マリー・コレリはイギリスの女性小説家だ。ところが涙香訳では「イタリアのハビヨ・ローマナイ原著」と仮託している。「訳者の前置」にその経緯を述べているからそれを見よう。

死者が生き返るといふ実話だと説明する。それを語る人物が「ネーブル府の貴族、ハビヨ、ローマナイ氏」である。ネーブルは Naples (ネイブルズ/ナポリ) だ。本文の別の箇所では「伯爵ヒリボ理甫ロマナイ羅馬内の一人息子、伯爵ハビヨ波漂」として登場する。

原作が自述の体裁をとっている。ゆえに原著者は「ハビヨ、ローマナイ」である。英語原文は Fabio Romani (ファビオ・ロマーニ) と記す。涙香は本文中で「伯爵はくしやく波漂はびよ」と漢字を当てた。涙香は原文の「ni」を「ナイ」と読む。つまりローマナイだ。

陳景韓はそこをさらに漢訳して「意大利南皮府波侖伯爵」とする。涙香日訳を踏まえているのは明らかである。「ネーブル」は「南皮」に「ハビヨ、ローマナイ」が「波侖」に該当する。分解すれば「波 = Fabio : 日訳の波漂ハビヨ」と「侖 = Romani : 日訳の羅馬内ロマナイ」である。「波」は共通する。そのまま「波漂」を漢訳で使用してもよかった。なぜだかそうはしていない。日訳の「羅馬内」を利用せず「侖」に置き換えた。漢音として「波侖」の方が安定するということか。

涙香は原作者コレリの名前を出していない。陳景韓はもともとコレリのことには知らなかった。しかも作品自体が自伝の形になっている。ゆえに「意大利波侖著 (ローマナイ著)」にした方が漢訳小説として理にかなうという判断だったのであろう。彼が涙香日訳を底本にした別作品もある。その時は涙香小史と記すこともあった。しかし『新蝶夢』のばあいは涙香を示さなかった。理由は不明だ。底本作者名の表記について厳密ではないということはわかる。



挿絵、扉 open library より

5 翻訳の実例

コレリ作の冒頭を見る*5。

I, WHO write this, am a dead man. Dead legally—dead by absolute proofs—dead and buried! Ask for me in my native city and they will tell you I was one of the victims of the cholera that ravaged Naples in 1884, and that my mortal remains lie moldering in the funeral vault of my ancestors.

これを書いている私は死んだ人間だ。法的には死んでいる——絶対的な証拠で死んでいる——死んで埋葬されているのだ。故郷の街で私を探せば

1884年にナポリを襲ったコレラの犠牲者のひとりであり、私の遺骸は先祖の墓場の地下納骨所で朽ちかけて横たわっているとされるだろう。

コレラが原因で死亡した死者がこの作品を執筆しているという設定だ。以下は涙香日記の該当部分。

読者よ、余は鬼なり、人死すれば之を鬼と云ふ、余は一旦死して生返りたる者なればなり、人にして鬼、鬼にして人、思へば恐ろしき余の鬼生涯、試みに余の故郷なる伊国ネーブル府に行きて伯爵波漂は如何にせしぞと問へ、異口同音に波漂は既に死したりと答へん、役場の戸籍帳を検むるも波漂は去八十四年の激烈なる悪疫に罹り死したるを知らん、余は即ち其死したる波漂なり。

涙香は原作にはない波漂（ハビヨ／原作ファビオ）を織り込む。コレラは「悪疫」に置き換えた。それ以外はほぼ原作どおりだ（以下登場人物は涙香によるカタカナ表記とする）。

同じ箇所を陳景韓は次のように漢訳した。

看官、我乃鬼也。我雖在此執筆作文。然我已早死。人死謂之鬼。而況我所遇之人。所見之事。無一非為鬼為蜮。禽獸不如。

読者諸君、私は幽霊だ。私はいま文章を書いているがすでに死亡している。人が死ねばそれを幽霊だという。しかしながら私が出会った人、見聞いたことは畜生も及ばない怪物であった。

底本の大意はおさえている。しかし逐語訳というわけではない。人名も地名もここには漢訳しなかった。

ハビヨは生まれてすぐに母親を失った。17歳の時父である伯爵に死なれて莫大な財産を受け継いだ。色酒博打にふけることもなくただ読書を楽しんだ。

陳景韓漢訳には独自の創作部分がある。彼にとって読書以外では1頭の犬が友

だった。涙香日訳、コレリ原作にも犬のイビスは出てくる。しかし最初に登場するその場所が異なる。底本よりもずっと前部に突然その名前「白虎」を挿入したのだ。

我在家中。除了以書為友之外。還有一頭靈犬。叫做白虎。那白虎是我父親生時。遊歷倫敦的時候。有個朋友送的。生得身長半丈。腰大五圍。十分雄壯。又極靈敏。因此我丟着書時。便和那白虎玩耍。有時出門閒散。也必帶着他走。所以除了書外。那狗便是我第二個朋友。3-4頁

私は家にあつて書物以外に友とするのは1頭の名犬がいる。白虎という。白虎は私の父が生存していた時ロンドンに行ったおりある友人が送ってくれたものだ。身長は半丈、腰回りは5まわりもある。雄壮にして極めて敏捷だ。私が書を置いたときにはその白虎と遊んだ。散歩に外出するときも必ず連れて行った。だから読書以外にはその犬が第2の友人だった。

陳景韓は涙香本を大幅に短縮する。ところがこの犬「白虎」について原文とは違う箇所に加筆している*6。中国の読者は何も思わないだろう。しかし涙香本と比較対照すれば奇妙だといわざるをえない。これには陳景韓の特別な意図があった。結末に直結する伏線にしている。注目箇所だ。

ハビヨの唯一の友人といえる者がいる。貧乏画家で女好きの花里魏堂^{はなざとぎだう}（以下ギダウと称す。原作では Guido Ferrari グイド・フェラーリ／花利）だ。

ハビヨは女性に興味を持たなかった。ところが偶然に出会った歌うたう少女群のなかのひとりを見初めた。それが妻となるニーナ^{ナイナ}（Nina／那稲 7頁／漢訳は「妻」。音訳なし）だ。涙香はここでも原文の「ni」を「ナイ」と読む。以下ナイナを使用する。

コレリ原作と涙香日訳、陳景韓漢訳の該当箇所を以下に抜き出す。

I gazed and gazed again, dazzled and excited; beauty makes such fools of us all! This was a woman—one of the sex I mistrusted and avoided—a woman in the earliest spring of her youth, a girl of fifteen or sixteen at the

utmost. Her veil had been thrown back by accident or design, and for one brief moment I drank in that soul-tempting glance, that witch-like smile ! The procession passed—the vision faded—but in that breath of time one epoch of my life had closed forever, and another had begun! p.12

私は見つめまた見つめ眩惑され興奮した。美しさは人をバカにするものだ！私が不信感を抱き敬遠していたのがその女性というものだった。この女性は青春の一番早い春を迎えたせいぜい15歳か16歳くらいの女の子だ。彼女のベールは偶然か意図的に剥がれ落ちて私は一瞬だけその誘うような視線と魔女のような微笑みに酔いしれた。行列は過ぎ去り情景は消えてしまったが、その一瞬の間に私の人生のひとつの時代が永遠に閉じ別の時代が始まった。

ナイナは15、16歳だとある。ハビヨが彼女に一目ぼれした瞬間である。涙香訳は次のとおり。

余は只管に其中の一人に見入ったり、微妙なる其声にて唱ふ一人、是れ人か是れ天女か群居の中に唯一人輝くばかりに美しき其面影、年十六は既に、十七に未し、何等の眼、何等の唇、古人が毒薬と評せしは猶此女の生まれ出ぬ先なればこそ、然り世間の女皆毒薬にして此女唯一人其毒を消す回春剤か、余は其姿を見るばかりにて二十年来の味き無き浮世より天国に生れ出たる心地せり。手の舞ふも知らず足の踏むも知らず、人の怪みて余の姿を見るも総て知らず、眼中唯だ其可憐なる姿あるのみ。5頁

読者よ、女を悪魔とのみ思ひたる余が、突然女に溺しとは、書も恥しき次第なれど余は餘りの嬉しさに其恥かしさも忘れてたり。この女無かりせば余は生涯木石の如き男にして人の人たる情を知らず、昔の学者に欺かれて終に我過ちを悟り得ずして終りしならん。思へば此女、余が百年の迷ひを覚せたる有難き大智識、拝み崇み奉らずんば有るべからず、実に百聞は一見に如ず唯一度見し美人の顔、忽ちまちに百冊の旧聞を霧の如く搔消したりとは……。

6頁

涙香は直訳にはしていない。原文によりながら加筆しつつ自由に日訳していることがわかる。原文はひとつの時代が終わり別の時代が始まったと書いた。涙香はより具体的に「味き無き浮世」と「天国」に言い換えて読者にはわかりやすくなった。ナイナの年齢を16、17歳と引き上げる。ハビヨは今までの読書がむだであったと気づいた。

陳景韓は涙香日訳を少し圧縮する。

那一群女士中間。有一個直印入我腦裏來的。年紀正在十七八歲。身材面貌。十分秀麗。自我看見了那女子之後。心中恍然大悟道。天下的婦女。都是迷人的。只有這個。是解迷的醒藥。天下婦女的心。都是含着毒的。只有這個。是解毒的回春丹。我自羞了。羞着讀了幾年的書。都悞聽了古人的話。我又自愧了。愧着活了幾十歲。至今纔跳出了古人的圈套。知道婦女的真相。我又自恨了。恨着今日以前。為何不早有今日。使我早享婦女幸福。我心中這樣想。眼中只顧看着那女子。等到後來。那女子早已過去了。7頁

その女性の群れの中に私の脳裏へ直接印象付けたものがいた。年齢はちょうど17、18歳、身体と容貌は十分に秀麗だ。その女性を見てから私は突然に理解した。この世の婦女は人を迷わせるものだ。ただあの人だけが迷いから醒めさせる薬だ。この世の女性の心には毒を含んでいる。ただあの人だけが解毒の治療薬だ。私は自分を恥じた。何年も読書をし続けて古人の言葉を誤って信じていたのが恥ずかしい。私はさらに恥じた。数十歳になるまで生きてきて今ようやく古人の罠から抜け出し女性の真相を知ったのが恥ずかしい。私は恨みもした。もっと以前に今日という日が早くやってきて私に女性の幸福を享受させなかったのが恨めしい。私はそう考えその女性をながめ続けた。気がつけばその女性はすでに通り過ぎていた。

陳景韓はナイナの年齢を17、18歳にして涙香よりもさらに引き上げた。直訳ではない。単語ならば「毒」はそのままだ、「回春薬」は「回春丹」にしなごらほぼ底本の内容を踏まえる。陳景韓独自のまとめ方をしている。

独自といえば上につづく次の箇所は陳景韓の創作だ。

我還是瞪着眼。立在那裏。好像被人施了催眠術的一般。等了一刻。跟我走的那白虎。見我立着不走。他從前面樹林裏跳了回來。我被他一嚇。纔驚醒轉來。纔知道我立出道旁。看了那道路。又想起方纔看見的女子。便又依依不忍遽去。看看天色。已將近黑。沒奈何。只得呼了白虎。沿着道路。沒精打彩的。走了回去。回家之後。心中好像失了甚麼東西似的。又像得了甚麼東西似的。飯也不想吃。茶也不想飲。書也不想看。睡也不想睡。心中眼中只想着方纔的女子。眼睛閉時。宛然那女子。在我面前。狹長長的身兒。尖溜溜的面兒。亮晶晶的眼兒。紅的綠的衣服兒。活潑潑的行動兒。想着他的形容。便又彷彿看着他笑。聽着他唱。翻來覆去。直鬧了一夜。7-8頁

私は目をみはりそこに立ったまま催眠術をかけられたようだった。しばらくして私と一緒にだった白虎は私が立ち止まっているのを見て樹林の中から跳び戻ってきた。私はそれに驚きようやく意識を取り戻し道端に立っていることに気づいた。その道を見て先ほど見かけた女性を思い起こし心残りがしてすぐに行く気にはなれなかった。空の色を見ればもう暗くなりかけている。しかたなく白虎を呼びしょんぼりと歩いて帰った。帰宅してのちの中ではなにか物を失くしたようでもあり得たようでもある。食事をする気にならず茶も飲みたいとも思わない。読書もしたくなく眠りたくもなかった。内心では先ほどの女性のことをただ考え目を閉じればあたかもあの女性が私の目前に浮かび上がるようだ。細い身体、鋭くとがった顔、輝く眼、色とりどりの衣服、生き生きとした動き。彼女の様子を思えばそのまま笑うのを見て歌うのを聞く気がした。くり返しその夜じゅうそういう状態だった。

ナイナに魅入られたハビヨの心理状態を詳細に加筆している。犬の白虎を忘れずに登場させた。

このまま筆を進めれば底本の長さからいって長篇漢訳になるだろうと予想される。それが実際にはこの薄さだ。どこでどうなったのか。

ハビヨはナイナと結婚した。ギダウとも以前通りに親しく3人で楽しい日々をすごすうちに女の子が生まれた。ステラ (Stella/星子/玉児) である。その子に

対するギダウの態度に少しの違和感を抱いたハビヨだった。

そうして在所ネーブル府が疫病の流行に見舞われた。ハビヨは十分用心していたが邸宅からうっかり出たためにコレラに感染して急死した。1884年8月15日(32頁)、27歳の時だ。漢訳は「享年二十歳有五歳。於一千九百零五年。八月十五日」30頁。漢訳時と同時期に生じた事件にしてしまった。日訳底本から逸脱している。

そのハビヨが棺桶の中で覚醒した。先祖代々の墓蔵に埋葬されていることに気づく。

陳景韓漢訳では細かな改変を行なった。墓蔵は漆黒の闇だ。火をともしなければ動きが取れない。火をどうするかが問題だ。涙香は「余は大の喫煙家にて燐寸を衣囊より離せし事なし」(31頁)とした。それを漢訳ではタバコを吸わないと変更する(「我不是吃煙的人」27頁)。漢語で「煙」はアヘンを意味することがある。それを避けたとも考えられる。タバコなしでは墓蔵での灯りに困るから非常用の小箱を所持していたことにした。それにマッチが入っている(「匣内装着幾十株の火柴」29頁)。このような細かな変更が必要であったのかは疑問だ。アヘンと区別するためであれば納得する。

ハビヨはその墓蔵において海賊王カルメロ、ネリ(Carmelo Neri/軽目郎、練/海盜赤劍党 33頁)の財宝を偶然見つけた。秘密の出入り口から外にでると邸宅にもどるまえに衣服を着替えることにした。そこの主人から聞いたのはナイナの悪い評判だった(漢訳では省略)。さらに自分が白髪になっているのを鏡で見て驚愕する。昨日までの黒髪が突然に変化したのだった。白髪鬼の由来である。

イタリア皇帝ハンバート陛下に会うもハビヨであるとは認識されない(漢訳では省略)。食堂で外に行くギダウを見かけた。彼は赤いバラを挿している(それらも漢訳していない)。

陳景韓が涙香を底本にしているのはわかる。ただしいくつかの省略がある。一方で加筆もする。自分の邸宅につくまでに周囲の風景を見ながら妻との往事を懐かしく思い起こす(43頁)。そういう加筆をほどこして語る目的はただひとつだ。ハビヨの死去を悲しんで打ちひしがれているはずのナイナがどのような状態にいるのかを際立たせるための工夫なのだった。

自分の邸宅にたどりついたハビヨは何を目撃したか。ナイナはギダウと親しく抱き合っていた（日訳61-62頁／漢訳46頁）。

She spoke—ah, Heaven! the old bewitching music of her low voice made my heart leap and my brain reel.

“You foolish Guido!” she said, in dreamily amused accents.

“What would have happened, I wonder, if Fabio had not died so opportunely?” p.63

彼女は話した——ああ、まったく！彼女のなじみのある妖艶な音楽のような低い声は私の心を跳躍させ私の頭を巻き戻した。

「おバカなグイド！」と彼女は夢見心地に面白がっている口調で言った。

「ファビオがあればほど好都合に死ななかったとしたらどうなったでしょう？」

家に入る機会を失い隠れて聞くことになったハビヨはその言葉に衝撃を受けた。一方の涙香日訳はこうだ。

声に応じて魏堂が那稲の顔を見上るを持ち、那稲が何と後の句を継かと思へば

「だがネ、魏堂、丁度好い時に波漂が死だから好ツたけれど」64頁

涙香訳の後半部分はほぼ原文どおりだ。次は陳景韓漢訳である。

我耳内忽然又聽得如奏音樂的声音道。幸虧那波倫死了。48頁

私の耳に音楽を奏でるような声がふと聞こえた。「うまい具合にハビヨは死んでしまったわ」

ナイナの声について涙香は「人を酔せる音楽より猶爽やかなる声を洩せり」（63頁）と書いた。陳景韓は前の部分にあるそれをここに取り込んだ。それは偶

然にもコレリ原作と一致した。

6 突然の改変と転換

ナイナとギダウは夫婦よりもなお親しい様子で室内に入っていく。ハビヨは茂みに隠れたままそれを見送った。

これが涙香日訳第15回である。ここからハビヨの復讐が始まる。全107回の残り92回を費やす。彼は富豪チェザレ・オリヴァ伯爵（Count Cesare Oliva／笹田折葉伯爵／漢訳なし）と名乗り黒メガネをかけて行動する。はじめの対象はギダウ、次にナイナの順である。いかにしてナイナとギダウに復讐するか。題名通りの結末にむかうその筋運びを漢訳読者は堪能するはずだった。

ところが陳景韓の漢訳ではこれとは大きく異なる。涙香訳に出てくる笹田折葉伯爵は漢訳には登場しない。なぜなら犬の白虎が突然出現してギダウを喰い殺してしまうからだ。

ナイナとギダウはちょっとした事でもめて大声を出した。それを聞いた白虎が条件反射でとびかかってきたのだ。

他便從樹林底下直跳出來。撲至花利面前。便叫。花利正在煩惱的時候。被他一叫。更動了怒。連忙一手放了那婦人。用脚來蹴那犬。那犬見花利來蹴。知道和他相爭。便更奮勇向前。花利的脚到時。恰好和那犬的口碰了個着。那犬更萬分憤怒。便順勢咬了一口。那花利痛極而號。想要再用那個脚再蹴時。早被那犬一撞。撞倒在地。58-59頁

犬は樹林からとび出るとギダウの面前に突き進んできて吠えた。ギダウはちょうど難儀していた時だったから吠えられてさらに腹を立てた。婦人の手を慌てて離すと足でその犬を蹴った。犬はギダウが蹴ってきたので彼が敵だと知ってさらに突っかかってくる。ギダウの足がちょうど犬の口にぶつかると犬はもっと怒り勢いにまかせとカブリと噛んだ。ギダウはあまりの痛さに大声をあげもういちど蹴り上げようとしたときその犬から体当たりをくらい地面に倒れた。

ギダウと白虎の鬭争にナイナ（ただし漢訳名はない）が混じり込む。椅子から立ち上がって白虎を足蹴にした。

這時花利正在地上乱滾。那犬也在地上乱咬。那婦人雜在中間乱蹴。乱喊。忽然聽得鳥的一声。那婦人也被犬咬着一口。跌倒在地上了。忽又聽得鳥的一声。那花利早已被犬咬着要害處。叫了一声死了。59頁

その時ギダウは地面をやたらと転がっていた。その犬もめったやたらに噛みついてた。その婦人はその間に挟まってめちゃくちゃに蹴りわめきたてた。突然ウツと声が聞こえた。その婦人は犬にガブリと噛まれて地面に倒れたのだった。さらにウツと声がした。あのギドウが犬に急所を噛まれて一声叫んで死んでしまったのだった。

翌日の新聞報道によって同時に傷を負ったナイナは死亡したとわかった。ハビヨは墓蔵で見つけた海賊（赤剣党）の貨幣で世界周遊に出発した。おわり。

長篇小説の入り口にはいったところで突然物語が終了したような感じだ。それにしてもあまりにも唐突だ。これではハビヨの敵討ちを犬の白虎が代行したことになる。主人の命令もなく咬みつくだろうか。白虎の行動にも疑問がわく。翻訳者のすべき事ではない。陳景韓になにがあったのだろうかと不審に思う。

7 包天笑の証言

陳景韓の当時の行為を包天笑が記録している。

包天笑が「空谷蘭」を新聞連載している時だった。その底本は同じく涙香訳『野の花』である。陳景韓に1回の翻訳代金を依頼したところ彼は勝手に筋を書き換えたという実話だ*7。

陳景韓の性格が奇妙だと感じた理由を包天笑は述べている。すなわち陳景韓が日本語小説を翻訳していて随意に書き換えたという事実を挙げる。この回憶録の同じ箇所まさに『新蝶夢』にも言及しているのが興味深い。

包天笑は具体的な作品名は出していない。しかしそれが『新蝶夢』であることを李志梅（2005）、鬮文文（2013）らが指摘している*8。

包天笑の回憶録からその箇所を引用する。

記得他也曾訳一部日文小説，以訳了大半部，不高興訳了，弄出一條狗來，把書中那個主角咬死了。我駭問何故，他說：“他也不是好人，死了就結束了。”他就是有這怪脾氣、……（略）*9

彼（陳景韓）が日本語小説をかつて翻訳した時のことだ。大半を訳し終わったが訳しつづけるのに興味を失った。そこで犬を1頭作り出しその主人公を咬み殺させた。私（包天笑）は驚いてどうしてそんなことをしたのだと問うた。「そいつは良い人間ではない。死ねば終わりになる」と彼はいった。陳景韓はそういう変な性格だった。……（略）

包天笑はその文中で「他就是有這怪脾氣」と同じ語句を2度も使って陳景韓のことを回想している。

陳景韓（冷）と包天笑（笑）はふたりで「冷笑」と表記されることもある。また贗作ホームズ物を競作するほどの仲のよさだ。その包天笑が陳景韓のことを「変な性格だった」というくらい作品については異常だったらしい。

包天笑による興味深い思い出話だ。ただし約半世紀以前のことであることに注意を要する。その全部を事実だと考えると間違うだろう。

包天笑の回想では具体的な漢訳題名は指定されていない。犬が主人公を喰い殺すから『新蝶夢』であっている。

細かいところだが「大半を訳し終わった」というのは正確なのだろうか。上記したとおりの涙香『白髮鬼』の始まり部分だけで中断している。準備稿として大半は翻訳していたが公表したのはその冒頭だけだったという意味かもしれない。

包天笑の記憶は細部で違う。「以訳了大半部，不高興訳了，弄出一條狗來（大半を訳し終わったが訳しつづけるのに興味を失った。そこで犬を1匹作り出し）」といった。後になっていかにも思いついたように犬を出したように述べる。これは事実ではない。なぜなら漢訳の最初部分から犬は登場しているからだ。

すなわち漢訳の結末を見れば陳景韓が涙香訳にはなかった白虎を独自に設定した理由がわかる。彼は最初から白虎にナイナとギダウを噛み殺させる意図を持っていた。

ナイナは「人面獣心の一婦人」（503頁）である。うわべは美女で内面は悪女毒婦だ。コレリ原作はそうしている。涙香はそれを理解した。「彼れは全く美しき皮を以て穢き心を包みたる怪物なり」279頁、「人面獣心」492頁。だから翻訳意図もそのことを描くところにあった。親友であった俗人ギダウも同じく復讐の対象である。ハビヨがどのような方法でその復讐を実行するのか。読者はハビヨが展開する復讐のための大狂言に息をのむ。詳細に描写される過程を読んで楽しむ。

ハビヨは計画を練った。まずギダウを決闘に誘いこんでピストルで射殺した。死ぬ前に自分がハビヨであることを明かしギダウを地獄に突き落とす。復讐のひとつが終了した。ハビヨは別人折葉伯爵になりすましたままナイナと結婚をする。元の夫婦が再度夫婦になるという奇策だ。豪華に行なわれた婚礼夜会の後ハビヨはかねての約束どおりナイナに宝物を見せると呼び出して墓蔵へ導く。自分の正体を明らかにして置き去りにするつもりが天井の大石が落ちてきてナイナを押しつぶした。これでハビヨの復讐は完結だ。船でイタリアを脱出した。原作では南アメリカへ、涙香訳では南アメリカ、メキシコを経て北アメリカに定住したことになる。

あくまでも主人公はハビヨである。ハビヨを騙し愚弄し嘲笑するナイナとギダウだ。この対立関係で作品は構成されている。

ところが陳景韓は重要人物のナイナには漢訳名を付与していない。「妻」「女主人」「婦人」と記すのみだ。名前を与えないというのは陳景韓のナイナという女性に対する嫌悪感を表わしている。それは理解できる。しかしその悪人が主要主人公のひとりだ。重要人物の名前を漢訳しない。これは理解しがたい。

陳景韓は涙香の底本をこれ以上ないくらいに切り刻んだ。わずかに冒頭部分だけに絞り込んで完結するように加筆した。そのやり方は普通の翻訳行為には見えない。

8 陳景韓の弁明

漢訳冒頭に置かれた「(言情小説)新蝶夢弁言」は「告罪」だ。つまり罪を告白するという内容である。

どういう罪か。基本的には「情」を否定する小説『新蝶夢』を漢訳したことを指す。要約する。

情とは破ることができない人類の接着剤(黏液質)である。人間関係を繋ぎこの世界を維持するものだ。しかしその情を否定する小説を漢訳してしまった。これが罪である。しかも婦人を侮蔑(褻瀆を4回使用)したから読者は許さないだろう。自分は婦人を恨んでいるわけではないにもかかわらずこの小説を翻訳した。私の罪である。我が国は翻訳という仕事が大盛況でなかでも小説が特に多い。情を言う(言情)小説が多くの人に喜ばれている。男女の相愛を描くのが言情小説である。ところが私の訳した『新蝶夢』はその情の別面を書いている。言情の勢力を削ぐかもしれない。

陳景韓の言情小説(恋愛小説)についての理解には違和感が生じる。主要登場人物の女性が悪人であってはならないと考えているように読めるからだ。情を描写して仲がよくなければならないのか。それではあまりにも小説家としての許容範囲が狭すぎる。ナイナ、ギダウのように悪人であればあるほどハビヨの復讐は輝きを増す。その道理を陳景韓は了解していない。コレリ原作、涙香日記の意図を把握しそこなったようだ。

この弁明は陳景韓の表面的な告白であるという考えも成立する。つまり偽装だ。ただし全篇を涙香のままに漢訳しおえていればの話だ。悪人の女性を描写しきった。しかし訳者の本音はそうしなくなかった。全訳ならばその言い訳も成り立たないわけではない。

しかし底本を大きく曲げて分量を縮小して提出した。偽装というわけにもいかない。ましてや犬の白虎に復讐の代行をさせるなどもってのほかだ。主人公白髪鬼ハビヨの存在意味がなくなるからである。

題名の『新蝶夢』はよくわからない。涙香の『白髪鬼』は主人公の容貌と経歴

から理解の範囲内だ。それが陳景韓の手になると胡蝶の夢もどきだ。蝶を夢見た自分は胡蝶の夢でないのか。哲学的な問いかけは復讐を主題とする漢訳内容にそぐわない。

陳景韓はなにか勘違いをしたようにも思える。コレリ原作、涙香日本語訳の翻訳としては不適切である。

【参考文献】著者でまとめた。略号も示したが引用しないものも含む。

【艶麗07】李艶麗「二つの『世界末日記』——清末の科学小説と世紀末思潮」『思想史研究』第7号 日本思想史・思想論研究会 2007.3.1

【艶麗10】李艶麗「「日本」の可能性 冷血作品を解読する試み」『年報地域文化研究』第13号2009年 東京大学大学院総合文化研究科地域文化研究専攻 2010.3.31

【艶麗11】李艶麗「晚清俄国小説訳介経路及底本考——兼析“虚無党小説”」『外国文学評論』2011年1期 2011.2 電字版

【艶麗14】李艶麗「晚清日語小説翻訳書目録（1898-1911）」『晚清日語小説訳介研究（1898-1911）』上海社会科学院出版社2014.8 国家对外文化交流研究叢書

【艶麗19】『晚清文学与明治文学關係研究——“人情”与“女性”』上海社会科学院出版社 2019.12

【堀09】堀啓子「二つの「白髮鬼」——涙香と乱歩の翻案をめぐる」『出版学会・会報』第123号 2009.1 電字版「原作は、Vendetta!; or, The Story of One Forgotten というもので、十九世紀末のイギリスの女流作家 Marie Corelliが、一八八六年に発表した作品である。」

【国蕊13】国蕊「陳冷血の翻訳小説における一人称の試み」『九州中国学会報』第51巻 2013.5.11

【国蕊13B】国蕊「陳冷血の翻訳小説『生計』に対する一考察」九大中国文学会『中国文学論集』第42号 2013.12.25 電字版

【国蕊14】国蕊「陳冷血による翻訳小説の底本に関する考察」『跨境:日本語文学研究』第1号 2014.6 高麗大学校日本研究センター 電字版

【国蕊14B】国蕊「「那破命帝后之臨終」と慈禧太后の死：陳景韓の翻訳小説にある報人特徴への一考察」九大中国文学会『中国文学論集』第43号 2014.12.25 竹村則行教授退

職記念号 電字版

[国蕊16] 国蕊「陳景韓対第一人称叙事小説翻訳的探索」『明清小説研究』2016年第4期
(総第122期) 2016.10.15

[国蕊19] 国蕊「近代翻訳文学中日本転訳作品底本考論——以陳景韓の転訳活動為例」『文学評論』2019年第1期 2019.1

【注】

- 1) MARIE CORELLI “Vendetta! or The Story of One Forgotten” Donohue, Henneberry & Co, 1886. 使用する電字版は“Vendetta And My Wonderful Wife” NEW YORK: AMERICAN PUBLISHERS CORPORATION (刊年不記)。表題の別1作品と合本。open library 収録
- 2) 緒方流水『青眼白眼』星光社1902.6.2。奥付は緒方維獄([国会])。架蔵は鳴臯書院1902.6.2/1902.8.10再版。ルビ省略。161頁「▲(廿八)白髮鬼(作者)マリー、コレライ(元作)“Ven Detta.”」
- 3) 柳田泉「黒岩涙香翻訳小説目録」『書物展望』第49号 1935.7.1。47頁「明治二十六年／(情仇新伝)白髮鬼 万朝報(六月一十二月) 全百〇六回、明治二十七年一月(前)、——二月(後)単行、全二冊、原本メリ・コレリ作『ヴェンデッタ』」
- 4) 伊藤秀雄『黒岩涙香その小説のすべて』桃源社1971.10.25。200、205頁。また『(改訂増補)黒岩涙香その小説のすべて』桃源社1979.5.15。200頁「原本は英国メリー・コレリ女史作、『ヴェンデッタ』(Vendetta—復讐の意)。仮託して、ハビヨ・ローマナイ原著という」。205頁「明治二十七(1894)年一月二日(初篇)一二月十三日(後篇)、全二冊、全一〇七回刊行(出版社不記)」。さらに「黒岩涙香著訳書総覧」伊藤秀雄、榊原貴教編『黒岩涙香の研究と書誌』ナダ出版センター2001.6.20。120-121頁
- 5) 次による。MARIE CORELLI “VENDETTA!” NEW YORK: AMERICAN PUBLISHERS CORPORATION (刊年不記) open library 所収
- 6) コレリ原作では the noble black Scotch collie/my dog Wyvis (p.129) として登場する。また涙香日訳では「殊に余が物足らぬ心地せらるゝはイビスと名附る余の愛犬なり、個は余がハイランドの友人より贈られし稀代の名犬にして」(182頁)とある。陳景韓の犬はそれよりもずっと前に登場させていて底本の犬イビスとは直接の関係はない。底本(原作)では犬がナイナに跳びかかって手を傷つけた。それで射殺させたとナイナは

説明した(407頁/p.277)

7) 神田一三「包天笑漢訳クレイ『空谷蘭』について——涙香訳『野の花』の原作」『清末小説から』第141号 2021.7.1

8) 次のとおり。

李志梅『報人作家陳景韓及其小説研究』華東師範大学2005.4 2005届研究生博士学位論文

[志梅博137-138] 這里提及陳景韓翻譯的“日文小説”當是轉訳自日文的意大利小説家波倫的作品《新蝶夢》，講述的是一個婚外情的故事。小説連載到故事情節正展開的階段，便突然衝出一條猛狗，將那對背叛朋友和丈夫的偷情男女咬死了，結局很是突然，原來是有這一段曲折。

鬪文文『晚清報刊上的翻譯小説』濟南・齊魯書社2013.5

[文文141] 包天笑『鈞影樓回憶錄統編』より引用して以下の部分について文文は指摘をする。「記得他也曾訳一部日文小説，已訳了大半部，不高興訳了，弄出一條狗來，把書中那個主角咬死了。我駭問何故，他說：“他也不是好人，死了就結束了。”他就是這怪脾氣。」（山西古籍出版社、山西教育出版社1999年版、712頁）。すなわち「上段中包氏提到的陳所翻譯的“一部日文小説”，其實就是《新蝶夢》」である。

9) 包天笑『鈞影樓回憶錄統編』香港・大華出版社1973.9。目次と奥付は統篇。「一九四九年日記」「後記」を含む。100頁。

——『鈞影樓回憶錄』北京・中国大百科全書出版社2009.1。「統編」を含む。「一九四九年日記」「後記」なし。550頁。

包天笑著、劉幼生点校『鈞影樓回憶錄 鈞影樓回憶錄統編』太原・山西出版传媒集团・三晋出版社2014.3。「一九四九年日記」「後記」なし。407頁

モーパッサン最初の漢訳「義勇軍」

——橋本青雨訳「義勇軍」

『清末小説から』第146号（2022.7.1）に掲載。神田一三名を使用。判明している限り清末に漢訳された最初のモーパッサン作品は陳景韓の文言訳「義勇軍」である。橋本青雨の日本語訳が底本だと国蕊が指摘した。この日本語底本を確定することに困難があったことを説明する。そののち翻訳の比較対照を具体的に行なう。陳景韓による最後部分の改変はどう見てもうまくない。モーパッサンという作家の理解にかかわる問題だからだ。

1 陳景韓漢訳モーパッサン

中国で最初にモーパッサン作品を漢訳したのは陳景韓（冷血）である。次のとおり。

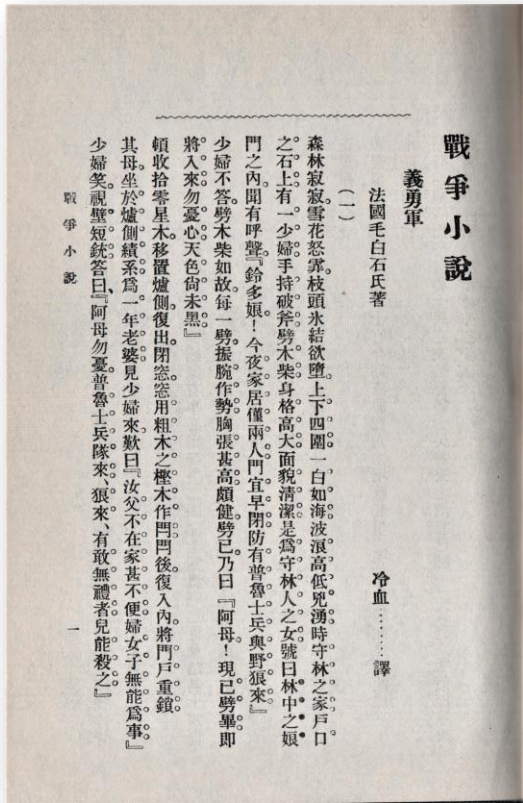
（法）毛白石氏著、冷血（陳景韓）訳「（戦争小説）義勇軍」『新新小説』第2号 光緒三十年十月二十日（1904.11.26）。

その後の該作品収録本については樽目録を参照してほしい。

陳景韓は日本に留学しており日本語を理解した。西洋の作品は基本的に日本語訳を経由して重訳したと考えていい。普通に知られている。

陳景韓漢訳「義勇軍」の底本を指摘したのは国蕊「陳冷血による翻訳小説の底本に関する考察」（2014）*1だ。底本について新しい発見を述べているのはすばらしい。

あらためて調べればモオパツサン著、橋本青雨訳「義勇軍」（『太陽』10巻13



号1904.10.1) であることがわかった。

このように書く理由がある。国蕊はそこにある「モオパッサン著」を明記せず『太陽』掲載号の刊年を「1904.11」と誤っているからだ。細かいことに違いない。しかし細部を意図的に間違えることはないだろう。日本語底本をそのまま記述の方がよい。いくら実物で確認しても誤記は生じる。正確に記述することが重要だ。それが次の研究につながると考えているにほかならない。ご了解いただきたい。

ギ・ド・モーパッサン (HENRI RENÉ ALBERT GUY DE MAUPASSANT、1850-1893) の原作は“LES PRISONNIERS 捕虜”だ。初出雑誌は“GIL BLAS ジル・ブラス” 1884.12.30。のち作品集“TOINE トワヌ” MARPON ET FLAMMARION, 1886 所収という*2。

作品題名を日本語にすれば「捕虜」「俘虜」「囚人」などになる。フランス地

方の森林に住む女性が機転をきかせてプロシア兵6名を捕縛した。フランス人仲間が大騒動してそれに対応する。そういう諧謔物語だ。プロシア兵にしてみれば捕虜だからそういう題名になった。フランス側で後半に活躍するのが義勇軍だから青雨日記は「義勇軍」である。陳景韓はそれをそのまま取り入れて漢訳題名を「義勇軍」とした。漢語ならば「志願軍」でもよい。

2 先行文献

翻訳研究において基礎となるのは底本を確定することだ。清末民初の状況は現在とは異なる。原語から直接漢訳しているはずだと短絡すれば肩すかしを食う。それほど単純簡単ではない。

一般的な例を図式で示そう。原語→英訳→日本語訳→漢語訳というばあいもある。漢訳の底本は必ずしも原語とは限らない。清末民初ではこのように日本語が介入していることもある。重訳はすべきではないという理屈は当時では通じない。しかもその漢語は文言文と白話文に分かれる。すこし複雑だ。

底本が不明だとその漢訳が質的にいってどの程度のものか判断することができない。忠実な翻訳なのかそれとも原文の大筋だけをつかんで大きく翻案しているのか。そこを見極めるために底本探索が重要な意味を持つ。

陳景韓漢訳「義勇軍」を見るばあい国蕊の底本指摘（2014）がある前とそれ以後のふたつにわかれる。

底本不明だった時期の文章2本を紹介する。翻訳史などの概説は除く。

ひとつは杜慧敏『晚清主要小説期刊訳作研究』（2007）*3だ。

杜慧敏は「義勇軍」が文言短篇であることを指摘する（58、70頁）。さらに原作がモーパッサンの“LES PRISONNIERS”（俘虜）だという。ただし日本語訳があることを知らない。フランス語原文と比較対照して論じた（140-144頁）。「義勇軍」を比較的詳しく論じているので注目する。その結論は次のとおり。

対照《義勇軍》の文言訳文和法文原文，從總体上来說陳訳的絕大部分都是忠実于原作的，用文言能将外文小説的意境表現得如此透徹，的確難能可貴。

更為重要的是，訳作的很多地方能够不失原作的生動而比原作的表達更為簡潔。

140頁

「義勇軍」の文言訳文をフランス語原文と対照すると総体的に言って陳（景韓）訳の大部分は原作に忠実であり文言を用いて外国語小説の情緒をこのように徹底して表現できたことは確かに評価すべきものである。さらに重要なのは翻訳の多くの部分で原作の生き生きしたところを失うことなく原作の表現よりもさらに簡潔にしたことだ。

杜慧敏は陳景韓漢訳に高い評価を与えている。ただし初歩的で基本的な誤りを犯した。陳景韓がフランス語原文から直接漢訳したと考えたことだ。ここは使用した日本語底本と比較対照すべきだった。前提が間違っているから正しい結論に到達することは不可能である。

陳景韓の改作について杜慧敏は3点を挙げた。それぞれを説明する。

1は固有名詞の書き換えだ。主人公の培蒂納（Berthine、ベルティーヌ）は「鈴多娘」にし、父親尼古拉・畢勳（Nig[el]olas Pichon、ニコラ・ピション）は省略した（142頁）。

Berthine（ベルティーヌ）をなぜ「鈴多娘」に書き換えたのか（注：娘は普通名詞）。音訳したにしてはかけ離れている。奇妙に思うべき個所だ。結論を先に述べると日訳が「鈴多（べるた）」だから陳景韓はそのままを引き写しただけ。また父親の名前は省略したがあだ名の「竹骨」は使っている。日本語底本を知らないから説明不足になる。

2は本文を5節に分割したことをいう。そこは緊急で切迫した鍵となる個所であったと評価する（142頁）。

簡単なことだ。フランス語原作は分割していない。しかし青雨日訳は区切っている。陳景韓はそれを守ったにすぎない。

その3はある人物（デブのパン屋）について詳細に描写している個所を省略したことをいう。そこは原作の風味を大いに損なった（144頁）。確かに陳景韓は彼の名前さえ漢訳していない。この陳景韓による省略が作品の最後に影響を与えるのだ。それを杜慧敏は書くべきだった。

杜慧敏は改変の代表として陳景韓が作品名を「義勇軍」にしたことだと指摘する。

女性の主人公が知恵と勇気をもって敵のプロシア兵を騙して捕虜とした。最後に皆が力を合わせて問題を解決した。そのために原題の「捕虜」ではなく「義勇軍」に変更したと述べる。

訳者が這裡彰顯的是抵抗外辱的愛國精神，這樣的翻譯宗旨也使訳作的表達變得更加沈重。144頁

訳者がここで顕彰しているのは外国からの恥辱に抵抗する愛國精神である。このような翻譯趣旨が訳者の表現をさらに深刻なものに変化させてもいるのだ。

ここでは「義勇軍」の語義について中国古典から根拠を引いてもいる（注43。161頁）。杜慧敏は題名の変更に重大な意味を見いだしたからだ。

しかしその題名に訳者の愛國精神にまで関連づけるのは誇大解釈である。はっきり言えば誤解だ。なぜなら底本にした日訳がそのまま「義勇軍」であるからにほかならない。陳景韓はなにも考えずにそれを漢訳題名とした。彼が独自に変えたわけではない。杜慧敏による的外れな主張である。

翻譯研究には底本の特定が必須となる。このことを実感させる事例だと考える。漢訳フランス文学作品を専門に研究したのは韓一字『清末民初漢訳法国文学研究』（2008）*4だ。ただし陳景韓漢訳には日本語底本があることに気づかなかった。そのためか説明は簡潔になっている。

現知最早の訳本、冷血訳的《義勇軍》（Les Prisonniers, 1884, 今訳《^{ママ}俘虜》）以普法戦争為背景，有比較強的“動作”性； 25頁

現在知られている最も早い翻譯は冷血訳「義勇軍」（（フランス語略）1884、現在は「俘虜」と訳す）であり普法戦争を背景として比較的強力な「行動」性がある。

最初の漢訳モーパッサンだからもう少し解説してもよかったのではないか。

日本語底本を指摘した国蕊のばあいはどうか。

「義勇軍」について日本語で次のように述べる。「人名では冷血の訳本は日訳本とほとんど一致しているが、フランスの原作とはずいぶん離れている。これに基づいて、一部の先学は冷血の翻訳が原作に従わない、不忠実なものであると指摘した」（240頁）

ここにいう「一部の先学」は上に述べた杜慧敏を指す。注3において杜慧敏とその著作を示す。「冷血の翻訳が原作に従わない、不忠実なもの」というのは上に述べた陳景韓による固有名詞の書き換えについて言っている。

杜慧敏は底本不明のまま陳景韓漢訳とモーパッサン原作を比較対照した。それは方法論的誤りだと国蕊は異議を唱えた。国蕊の指摘は正しい。

日本語底本の探索には困難がともなう。国蕊はそれを果敢に推し進めている。その点について筆者は高く評価する。今後もその作業を継続されることを期待している。

3 青雨日本語訳の問題

「義勇軍」を翻訳した橋本青雨（本名忠夫、1878-1944）は翻訳家、ドイツ語学者（『日本近代文学大事典』第3巻55頁など）だ。

ドイツ語学者だからシラーを翻訳しているのはわかる。そのほかモーパッサン、プーシキン、ゴーリキー、ドストエフスキーを訳述している。彼はフランス語、ロシア語も理解していたのか。そこは不明だ。そこから彼が翻訳したモーパッサン作品が何語かという問題が発生する。フランス語あるいはドイツ語を使用したのか。それとも英訳なのか。

訳例として2件を示す。ここに示した英訳は刊年からして底本にはなりにくい。そう理解している。あくまでも参考として使用する*5。

引用例のひとつは底本の判断にはならない。しかし青雨が勘違いしたとわかる個所だ。フランス語原文を示し訳は青柳瑞穂訳『モーパッサン短篇集3』*6から引用する。また陳景韓の漢訳も示しておく。

林守の娘は敵であるプロシア兵を誘導して家の穴倉に閉じ込めた。父親は援軍を求めて出て行った。娘はその時間を数えている。

Le père était parti depuis une heure et demie.

【青柳】父親が出ていってからもう一時間半になる。97頁

【英訳】Her father had been gone an hour and a half. p.245

【青雨】父さんが行つてから四十五分になるから 112頁

【冷血】なし 9頁

青雨はなぜかしら時間を間違えている。1時間半と45分は違う。陳景韓はこの部分を省略した。

次は投降を呼びかけて捕虜を押し込めている穴倉に水を注入している場面だ。

Une heure s'écoula, puis deux, puis trois.

【青柳】一時間すぎた。それから、二時間、三時間とすぎた。102頁

【英訳】An hour passed, then two, then three. p.249

【青雨】一分過ぎた、二分、又三分。114頁

【冷血】於是過一分二分三分。（そこで1分、2分、3分と過ぎた） 11頁

雨樋を利用して水を流し込むのだからわずか数分では不足だろう。ここは原文の1時間単位でなければ辻褄があわない。陳景韓は青雨日記のままを訳している。

水を注入する道具に雨樋を使う。その調達にかかる時間と長さを説明する個所だ。

Et en un quart d'heure on eut apporté au commandant vingt mètres de gouttières.

【青柳】かくて、ものの十五分もすると、二十メートルの樋が指揮官のところに運ばれた。101頁

【英訳】In a quarter of an hour they brought the commandant thirty yards

of pipes. p.248

【青雨】（「屋根の雨樋をはづせ。」）三四十分にして二十メートルほどの雨樋をはづして持つて来た。114頁

【冷血】『救火会之管理人来！』／於是有三人。至羅君前。羅君又令。曰、
／『速往取救火具！』／経三四十分。三人駕救火馬車至。（「消火団の關係者よ来い！」／そこで3人がラビニ（羅美似）の前に来るとラビニは命じて言った。
／「速く消火ポンプを取りに行くんだ！」／30、40分して3人は消火馬車を引いてきた）10-11頁

青雨はここでも原文の「十五分」を「三四十分」と取り違えている。可能性としてはドイツ語翻訳がそうなっているのかも知れない。ただし普通に考えて原作の数字を変更する必要はないだろう。ドイツ語訳もフランス語原作と同じだと推測する。しかし今それを確かめることができない。

注目するのは「メートル」を使用していることだ。英訳では「ヤード」である。それを見れば青雨はフランス語原文によって翻訳したと考えてもいい気がする。ドイツ語訳は知らない。

陳景韓の漢訳は青雨の書いた「雨樋」が理解できなかった。あるいはわかっただけに中国の読者には伝わらないと考えたものか。「救火具（消火ポンプ）」に書き換えたのはひとつの工夫だ。ポンプだから長さに関係はない。「メートル」は省略した。

青雨の底本はほぼフランス語であるように思う。しかし矛盾する個所もあることを指摘しておく。人名だ。

Henri IV

【青柳】 アンリ四世 85頁

【青雨】 ヘンリイ二世 108頁

【冷血】 恩利二世（アンリ二世） 2頁

フランス語ならばアンリだ。ドイツ語でも同じ。しかし青雨はなぜだか「ヘン

リイ」と英語風に訳す。陳景韓は「恩利」とした。これは青雨よりもフランス語風だ。英語 Henry ならば「亨利」とするのをよく見かける。ただし青雨が「四世」を「二世」と誤るのは理解しがたい。

次の単語は地名だ。

Rethel

【青柳】ルテール 85頁

【青雨】礼照（れいてる） 108頁

【冷血】天蕩堡 2頁

青柳の「ルテール」と青雨の「れいてる」は近いような、そうではないような。確証とするには不十分だ。陳景韓が「天蕩堡」を当てた理由はわからない。だいいち「れいてる」から離れる。すると中国で古戦場として知られる天蕩山にちなんだものか。不明とする。

とりあえず青雨が使用した外国語はフランス語かドイツ語だと思う。ただし結論を出すまでには至っていない。本稿では青雨日訳と陳景韓漢訳を比較対照するのが目的だ。青雨底本は今後の問題として残しておく。

日訳と漢訳を見てみよう。

4 青雨日訳と景韓漢訳

モーパッサンの該作品は普仏（プロイセン＝フランス）戦争を題材にする。しかし正規軍の衝突というような深刻なものではない。地方の森林地帯で林守の娘が機転をきかせてプロシア兵を捕縛する滑稽小作品だ。

原作は「捕虜」であるにもかかわらず青雨日訳が「義勇軍」にした理由はなにか。

原文で使われるのは「市民兵 les soldats-citoyens」だ。すなわち「義勇兵」が集合して「義勇軍」となる。くり返せば該作品には味方と敵というふたつの立場がある。フランス人に翻弄されるプロシア兵を嘲笑的に見れば「捕虜」だ。勇

敢に戦う娘と義勇兵に光を当てれば「義勇軍」である。モーパッサンは前者を選び青雨は後者を選択したというわけ。どちらにしても小説の中身は同一だ。

冒頭を見る（ルビ省略。以下同じ）。

【青雨】林は寂寞として何の気配もせぬ。唯雪のさらさらと梢に触つて、軽い震声をさせるばかり。細かい柔かい雪片は正午頃から降頻つて、枝毎に氷の水泡を結び、藪には軽げな白銀の屋根を蔽ひ、路といふ路には広く柔かに真白い毛氈を布伸べて、海を宛がらの林の寂しさを一層深くした。108頁

【冷血】森林寂寂。雪花怒霏。枝頭氷結欲墮。上下四圍。一白如海。波浪高低兇湧。1頁

森林は寂として雪片は飛び乱れ梢の氷は今にも落ちそう。上下四方はすべてが白く海のように波状にうねり荒れている。

気象状況を描写して物語は始まる。漢訳は相当に圧縮した文語文だ。陳景韓は日本文を直訳するつもりはないらしい。しかしまったくの別物というわけではない。漢訳は日本語に逐語的に対応してはいない。青雨日訳をもとにしておおよその意味を伝えた。

これ以降もその翻訳姿勢で全篇を貫くかと思えばそうならないから不思議だ。

風景描写のあとに家の中から主人公の女性の名前が呼ばれる。

【青雨】家の内から呼声が聞える。「鈴多や、今夜は二人限だから、もう内へお入り。普魯西の兵隊や狼などが出て来ないとも限らないから。」108頁

【冷血】門之内。聞有呼声。『鈴多娘！今夜家居僅兩人。門宜早閉。防有普魯士兵与野狼来。』1頁

戸の内から呼び声が聞こえる。『ベルタや！今夜は家にはふたりだけだから戸は早くに閉めるがいい。プロシア兵や狼が来るのに備えるのだよ』

ここは日訳をほぼそのまま漢訳している。記号のカッコも使用して同じである。

青雨が「ベルティーヌ Berthine」を「鈴多」に置き換えた理由は簡単だ。原音からの連想にはかならない。「ベル」を「鈴」と訳しあとは簡略化して「べると」である。

戦争が始まり若者は軍隊に行った。残された者が義勇軍を組織して訓練には励むことになる。次のような個所がある。細かな説明だと判断したものか陳景韓はそれを省略した。

【青雨】さて羅美似君が土地の防御司令官に任命された處で、若い者は悉く軍隊に召集されて了つたのであるから、残つて居る者の中から、奮つて敵に当らうといふ者を撰つて皆自分の部下にしたのである。肥満の大兵は脂肪を減らして呼吸が長く続くやうにも、活発に街々を駆足する、疲削けた兵は重荷を担いで、筋肉の発達を計つて居る。108-109頁

羅美似（らびに Lavigne ラヴィーニュ）は現在呉服屋をしている。昔は竜騎隊下士官だったから義勇軍の司令官を任された。

陳景韓漢訳では上を飛ばしてその次の場面になる。プロシア兵が鈴多の家に2度までも近づいてきた。父親は状況報告のために町へ行った。

説明個所は省略するが会話はそのまま漢訳している。残された母娘ふたりだ。

【青雨】「鈴多や、父さんは何時帰るか、お前知つて居るかい。」

「十一時前には帰りが難かしいでせうよ。いつも司令官の處へ行くと遅くなるから。」

と肉汁を煮やうと、鍋を爐に懸けたが、急に立つた儘ぴたりと動かなくなつた。何か変な音が爐の煙突を渡つて響くのを聞えたので、凝然と耳を側立てゝ居たが、

「おや、林の中を人が通るやうだよ、何でも七八人の蹻音だが——。」108頁

【冷血】『鈴多娘！阿父何時帰来。汝知否？』

少婦答云『十一点鐘前。恐不能帰来。今日尚須往司令官處報告。不能早帰。』

答時急急收拾肉汁。懸鍋於爐。作夜膳。未幾忽聞有声自外来。少婦急傾耳聽。驚曰『林之中。似有人足過。若七八人！』3-4頁

「ベルタや、父さんは何時帰るか、お前知って居るかい？」

娘は答えて言う。「11時前に帰りはむつかしいでしょうよ。今日は司令官のところへ行かなくてはならないから早く帰ることはできないわ」。答えながら急いで夕飯の肉汁の鍋を爐に懸けた。するとふと外から音がするのが聞こえる。娘はあわてて耳を傾けて聞くと驚いて言った。「林の中を人が通るようだよ。7、8人らしい！」

ほぼ日訳どおりの漢訳になっている。「少婦答云」を「娘は答えていう」と訳しておいた。

当時の小説は会話部分を表現するのに話者を明記するのが普通だ。「曰」「道」「云」などを使用する。カッコ記号を使用せずにそこが会話部分であることがわかるようになっている。

陳景韓は該漢訳において旧来の方法を採用しながらカッコを併用した。ここは新しい。だから漢訳が青雨の日訳にほぼ重なるが話者を記した部分だけが異なる理由だ。

同じ例を示す。家に入れろというプロシア兵の台詞だ。

【青雨】「今朝から林の中を迷つとつたんぢや。開けてくれ、開けんと戸を敲破るぞ！」109頁

【冷血】門外人云『今日来此林中迷道。……快開門！開！不開撲破！』4頁
戸の外の人が言う。『今日この林に来て迷ったんじや。……さっさと開けろ！開けろ！開けんとぶち破るぞ！』

漢訳で話者を追加した以外は直訳になっている。陳景韓はごく少数を除いて話者の明記を基本的に堅持している。その部分は陳景韓の加筆だ。

プロシア兵は林の中を迷い疲れて飢えていると訴え食べ物を要求した。彼らの様子を描写して次のとおり。

【青雨】雪塗れになつて普兵は入つて来たが、その兜形の軍帽は全然牛乳を凝めた菓子やう。而して余程疲労れて困憊してゐる容子であつた。110頁

【冷血】泥雪中之普兵。渾身如水乳。5頁

雪まみれになつたプロシア兵は全身が水と乳の混合物のようだった。

漢訳ではおおよその様子を述べている。具体的な軍帽もなければ兵士の疲労困憊状態も省略した。

食事と酒をふるまわれた兵士たちは眠り込んだ。そこで賢い娘の出番となる。家にある短銃を発砲してフランス兵がやってきたと騙した。兵士たちは慌てる。娘は穴倉に隠れるよう進言して兵士たちはそれに従う。こうして捕虜となった。父親の帰りを待つて経緯を告げる。食事を終えた父は援軍を求めて再び出かけた。兵士は穴倉から発砲しはじめた。娘はそれに対して怒る。

【青雨】鈴多は愕かぬが、その騒ぎが癩に触つて慍つた。野郎共打殺してくれやうかとまで憎くなつたのであつた。112頁

【冷血】省略

田舎の娘らしい、といつても夫がいて戦争に行っているのだが、その人物の肝っ玉が据わっている様子を描写して十分だ。陳景韓はなぜだかそこを黙殺した。

父親が義勇軍と一緒に帰ってきてからのことだ。穴倉にいるプロシア兵がどんな様子か皆は興味津々である。挑発してみたいくなる。穴倉の窓の前をわざと通つてみせるのだ。

同じように陳景韓が日訳の細部を削って大筋を示す場面を見る。

【青雨】一人何とか言ふ敏捷いのが、到頭遣つた。向ふから駈けて来て、びよいと鹿のやうに窓の前を飛んだ。甘く行つた。捕虜は死んだやうにことりともさせぬ。

「誰も居ない！」と一人が叫ぶ。すると一人が復た窓の前を駆けて通る。真

の遊戯に成つて了つた。一隊から一隊と時々刻々一人宛走る様子が、宛然小児の戦争遊戯をしてゐるやう。雪を後に跳飛ばしながら無暗と駆けて居た。寒いので枯木を拾い集めて熾に焚火を始めたが、その光で右翼から左翼へと走る其姿が歴然見える。113頁

【冷血】義勇軍中。有好奇心。知窖中有普兵。如小児。多自窖之空孔。向内窺。一人笑曰。『窖内不見有人在。』於是彼窺我窺。穴外人如蟻。10頁

義勇軍の中には好奇心のあるものがいた。穴倉にプロシア兵がいるのを知って小児のように穴倉の窓から内部を覗いた。ひとりが笑って言う。「穴倉のなかには誰もいないぞ」。そこで我もわれもと覗くのに穴倉の外は蟻の行列となった。

義勇兵は穴倉の窓前を走り抜けてプロシア兵の様子を窺う。何人もが右から左へと走る走る。青雨日訳は動的な描写である。それが陳景韓漢訳では穴倉の窓外から覗き込むことに変更された。こちらは静的なものになった。底本から完全に離れているわけではない。もとの状況に沿いつつも細部は勝手に作文した。

太ったパン屋も走った。日訳ではその様子をおもしろおかしく描写している。漢訳はそういう記述を省略する傾向がある。ただパン屋が銃撃を受けて負傷した個所は残した。

【青雨】彼是三分の二程も走つたかと思ふ頃、突然窖の窓からぱつと赤い焰がさす、と、一発どんと響いて、麻呂阿は一言恐ろしく叫ぶと諸共、俯向に倒れた。114頁

【冷血】突然穴口見紅焰。銃一発。穴外一人倒。衆譁然趨視。10頁

突然穴倉から赤い焰が見え銃が一発放たれ穴倉外のひとりが倒れた。皆は騒然として急いで見た。

撃たれたのは麻呂阿（マロア、Maloison マロアゾン）だ。太ったパン屋の名前である。漢訳では度外視した。このように日訳を省略しながらおおよそは把握しているのが陳景韓の漢訳だ。しかし前述のようにこのパン屋の名前を省略したのが

結末に負の影響を及ぼす。

穴倉に水を注ぐ場面は先に見た。水攻めに耐えきれずプロシア兵は降伏した。結末部分を紹介する。

【青雨】不意の敵襲を恐れて全軍を二分し、一隊は捕虜を率ゐ、一隊は麻呂阿を急造担架の木の枝を組んで布団を布いたのに乗せて担いで行く。

意気揚々として義勇軍の礼照市に凱旋した。羅美似君は普軍の前衛を捕獲したるの功を以て、大兵の麵麦焼は敵前に負傷したるの故を以て、各々勲章を獲たのであつた。115頁

パン屋の麻呂阿は太腿上部を撃たれていた。だから急造担架が出てくる。この作品の最後は戦わずに負傷したパン屋も勲章をもらったと皮肉を述べて笑って終わる。次は陳景韓漢訳だ。

【冷血】羅美似君。乃分兵隊作二分。一分押捕虜。一分在後衛。御防意外。普軍要奪。各唱凱歌。整隊帰天蕩堡。12頁

羅美似君は全軍を二分し、一隊は捕虜を護送し、プロシア軍が奪いかえそうとするかもしれないので一隊は後部を守り万一に備えた。それぞれは凱歌をうたい全隊して天蕩堡に帰ったのであつた。

全軍を二分するのはいい。青雨日訳の「不意の敵襲を恐れて」も漢訳に盛り込んだ。しかし陳景韓はパン屋の名前を略したからついでに負傷後のことも無視して漢訳しなかった。ゆえに漢訳では傷を負っただけで勲章をもらったという原作の皮肉は消し飛んでしまった。

モーパッサンは最後のこの1行を書くために全体を構成し統率している。陳景韓のようにそこを削除しては作品そのものが崩壊する。残念なことだ。

人名対照表

人 名	青 雨	陳景韓	備 考
Berthine ベルティエヌ	鈴多（べるた）	鈴多	娘、林守
Nicolas Pichon, dit l'Échasse ニコラ・ピ ション通称竹馬	（綽号）竹馬／竹 骨	（綽号）竹骨	娘の父、老林守
Henri IV アンリ四世	ヘンリイ二世	恩利二世	
Louis XIV ルイ十四世	ルイ十四世	路易十四世	
Lavigne ラヴィーニュ	羅美似（らびに）	羅美似	呉服屋、昔は竜 騎隊下士官
Ravaudan ラヴォーダン	×	×	町の長老
Potdevin ポトヴァン	×	×	義勇兵
Maloison マロアゾン	麻呂阿（マロア）	×	義勇兵、デブの パン屋
Planchut プランシュ	古久（ふうきう）	×	義勇兵、屋根屋

【注】

- 1) 国蕊「陳冷血による翻訳小説の底本に関する考察」『跨境:日本語文学研究』第1号
2014.6 高麗大学校日本研究センター 電字版。略号は【国蕊14】

引用する。

3. 義勇軍：「法毛白石氏著」(『新新小説』第1年第2号, 1904.11.26.)

日本語訳本：「義勇軍」(『太陽』, 橋本青雨訳, 1904.11). ←モオパッサン著なし、
雑誌発行月が間違っている

原 作：Les Prisonniers, 1884.12.30, GuydeMaupassant ←名前に区切りなし

なお漢語論文の国蕊「近代翻訳文学中日本転訳作品底本考論——以陳景韓的転訳活動
為例」『文学評論』2019年第1期 2019.1もほぼ同文。「原作：Guyde Maupassant,
Les Prisonniers (1884)」と変更したことから。ついでに書いておく。登場人物のひ
とりで通称「竹馬」という人物は娘の父親だ。国蕊はその姓名をフランス語で“Nigolas
pichon”とする。綴りが間違っている。“Nicolas Pichon ニコラ・ピション”だ。ま
た「羅美似」のフランス語に“Romy”を当てている。勘違いだろう。“Lavigne ラヴ
ィーニュ”である。些細なことだ。2本の論文ともにそれを指摘する人はいなかったら
しい。新しい発見のある論文だからこそ点検して小さな間違いは避けたほうがよい。

- 2) 参照：足立和彦ウェブサイト「モーパッサンを巡って」

- 3) 杜慧敏『晚清主要小説期刊訳作研究（1901-1911）』上海世紀出版集團、上海書店出版社2007.12 上海市社会科学博士文庫 第9輯。略号は[慧敏58]
- 4) 韓一字『清末民初漢訳法国文学研究（1897-1916）』北京・中国社会科学出版社2008.6。略号は[韓08]
- 5) 英訳“THE PRISONERS”の①②はともに同文。
 - ①GUY DE MAUPASSANT 著、英訳者名不記、“BALL-OF-TALLOW AND SHORT STORIES” NEW YORK: THE PEARSON PUBLISHING CO., 1910 hathi trust 所収
 - ②GUY DE MAUPASSANT著、ALBERT M. C. McMASTER、A. E. HENDERSON、MME. QUESADA AND OTHERS 英訳“MAUPASSANT ORIGINAL SHORT STORIES, COMPLETE” project gutenbergl また googlebooks 所収以下は見たが該当作品を収録していなかった。×印をつける。
×「アフター・ディナー・シリーズ the after-dinner series」には未収録。
open library 所収の以下も見た。
×GUY DE MAUPASSANT 著、英訳者名不記、“SHORT STORIES OF DE MAUPASSANT” GARDEN CITY, N. Y.: DE LUXE EDITIONS CLUB, 19--。該作品は未収録
×GUY DE MAUPASSANT 著、英訳者名不記、“THE COMPLETE SHORT STORIES OF GUY DE MAUPASSANT: TEN VOLUMES IN ONE” NEW YORK: P. F. COLLIER & SON, 1903。又 NEW YORK CITY: BLUE RIBBON BOOKS, INC. 1903。該作品は未収録
- 6) 青柳瑞穂訳『モーパッサン短篇集3』新潮文庫2002.6.12二十九刷。略号は[青柳97]

陳景韓漢訳ル・キュー「虚無党奇話」

——松居松葉『虚無党奇談』

『清末小説から』第147号（2022.10.1）に掲載。神田一三名を使用。ル・キュー原作、松居松葉訳『虚無党奇談』を陳景韓が漢訳している。その掲載誌は『新新小説』『月月小説』『小説時報』に分載される。しかも奇妙なことにある作品については重複して漢訳しなおしている。分散された漢訳全体をひとつにまとめて検討する。

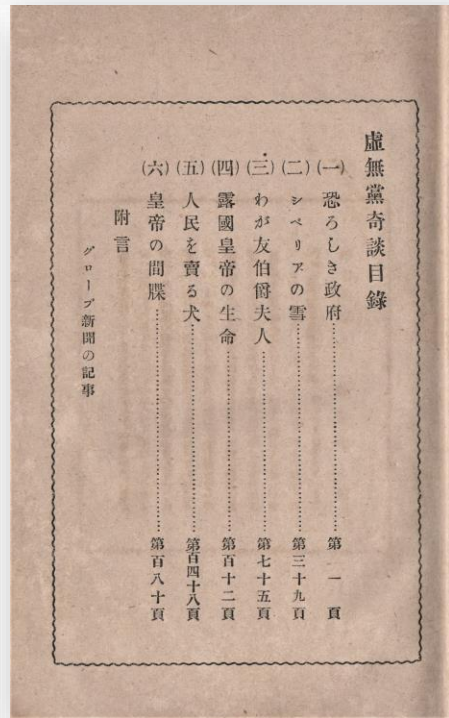
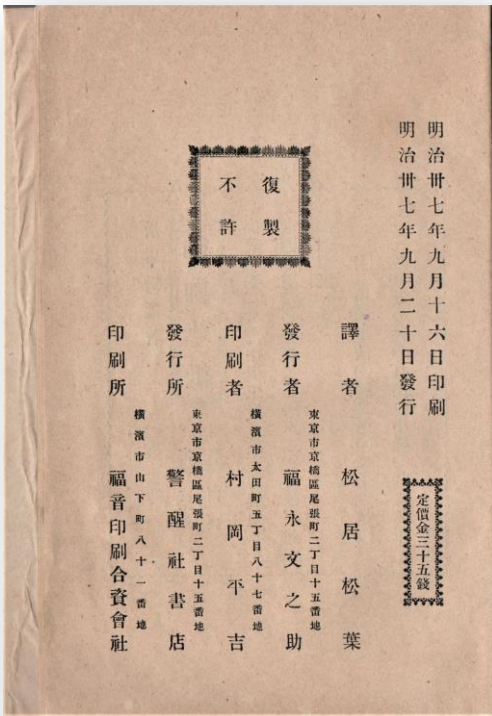
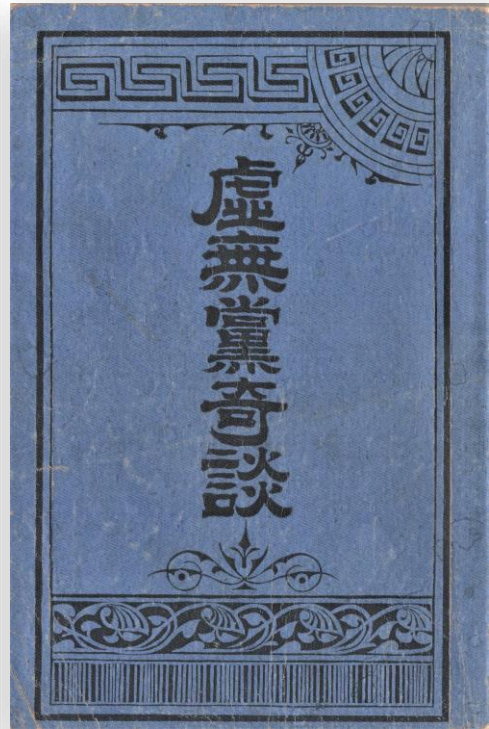
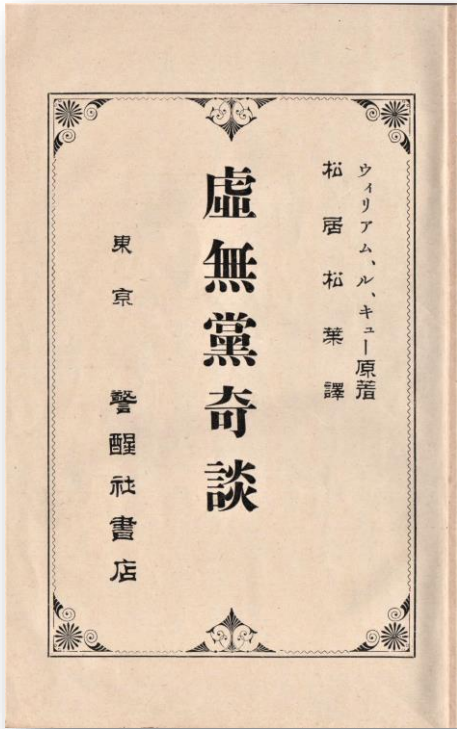
【前言】本稿を執筆し終わったあとで梁艶論文（参考文献を参照）を読んだ。失われた陳景韓漢訳を発見した優れた文章だ。ただしそれにより本文を書き直してはいない。梁艶による指摘は本文の該当箇所に注記するにとどめた。

ウイリアム、ル、キュー原著、松居松葉訳『虚無党奇談』（警醒社書店明治37（1904）.9.20。扉は「キュー」）がある。

松居松葉（本名真玄、1870-1933）は劇作家、小説家、翻訳家だ。

松葉訳は6篇を収録する。次のとおり。

- 一、恐ろしき政府
- 二、シベリアの雪
- 三、わが友伯爵夫人
- 四、露国皇帝の生命
- 五、人民を売る犬

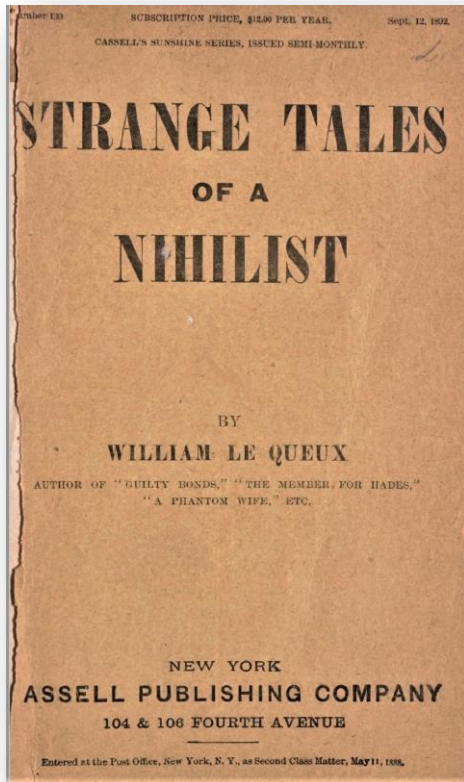


六、皇帝の間諜（一 あひゞき／二 美人の死骸／三 不忠主義）

附言 グローブ新聞の記事

中村忠行は、この松葉訳を漢訳したものが陳景韓「虚無党奇話」だと推測した（1973）*1。それは正しかった。

「ウイリアム、ル、キュー原著」とあるように原本は WILLIAM LE QUEUX “STRANGE TALES OF A NIHILIST” NEW YORK: CASSELL PUBLISHING COMPANY, 1892 (library of congress 所収) である。これには12篇を収録する。以下のとおり。



library of congress 所収

- I. A CROOKED FATE,
- II. ON TRACKLESS SNOW,
- III. MY FRIEND, THE PRINCESS,
- IV. THE BURLESQUE OF DEATH,
- V. SOPHIE ZAGAROVNA'S SECRET,
- VI. BY A VANISHED HAND,
- VII. THE JUDAS KISS,
- VIII. AN IMPERIAL SUGAR PLUM,
- IX. FALSE ZERO,
- X. THE MYSTERY OF LADY GLADYS,
- XI. AN IKON OATH,
- XII. THE TZAR'S SPY

松葉はル・キュー原作12作品の半分を目録したとわかる。（本文末に作品対照表を掲げる）

なお次がある。“A SECRET SERVICE: BEING STRANGE TALES OF A

NIHILIST” LONDON: WARD, LOCK & CO., 2nd ed. 1896 (hathi trust、google books 所収)。この再版本は1892年初版とは収録作品が異なる。また主人公の名前は Anton Prèznev と変更されている。初版はそれとは違い Vladimir Mikhalovitch だ。松葉の日訳はそう記述する。ル・キュー初版によったと考えていい。

1 渡辺浩司の指摘

松葉訳を底本にして漢訳したのが陳景韓だ。その『月月小説』に連載した3作品については早くから渡辺浩司による詳しい記述がある。樽目録X（第7版を指す 2015.10.10公開。現在は第14版 2022）より掲載している。次に引用する。振った漢数字は松葉訳の番号を示す。

三 「(虚無党叢談之一 短篇小説) 女偵探」上下下 冷 (陳景韓) 『月月小説』2年1-3期 (13-15号) 戊申 (1908) 人日 (2.8) -三月

(渡辺浩司) WILLIAM LE QUEUX “STRANGE TALES OF A NIHILIST” 1892中の “III. MY FRIEND, THE PRINCESS”。漢訳個所は日訳個所と一致するので、松居松葉訳『虚無黨奇談』（警醒社書店1904.9.20全訳ではない）中の「三 わが友伯爵夫人」からの転訳かも知れない

四 「(虚無党小説) 爆烈弾」上下 冷 (陳景韓) 『月月小説』2年4-6期 (16-18号) 戊申 (1908) 四月-六月

(渡辺浩司) 掲載は、2年4期 (16号)、2年6期 (18号)。WILLIAM LE QUEUX “STRANGE TALES OF A NIHILIST” 1892中の “IV. THE BURLESQUE OF DEATH”。漢訳は未完。漢訳個所は日訳個所と一致するので、松居松葉訳『虚無黨奇談』（警醒社書店1904.9.20,全訳ではない）中の「四 露國皇帝の生命」からの転訳かも知れない

五 「(虚無党小説) 俄国皇帝」上中編 冷 (陳景韓) 『月月小説』2年7-9期 (19-21号) 戊申 (1908) 七月-九月

(渡辺浩司) 掲載は、2年7期 (19号)、2年9期 (21号)。WILLIAM LE QUEUX “STRANGE TALES OF A NIHILIST” 1892中の “VIII. AN

IMPERIAL SUGAR PLUM”。漢訳箇所は日訳箇所と一致するので、松居松葉訳『虚無黨奇談』（警醒社書店1904.9.20全訳ではない）中の「五 人民を賣る犬」からの転訳かも知れない

該誌掲載の陳景韓作品には漢訳という表示はない。渡辺はル・キュー原作ばかりでなく松葉訳の短篇題名を指摘した。これが新しい。また「転訳かも知れない」と慎重に記している。陳景韓は日本語を理解する。そこから見ても漢訳3作品の底本は当たっているだろう。原題と松葉訳の「三 わが友伯爵夫人」「四 露国皇帝の生命」「五 人民を売る犬」を提示して明快だ。

その後ネットで公表された陳景韓の漢訳に言及する文章、目録を読んだ（詹宜穎論文を除く）。松葉訳と陳景韓漢訳が一部で一致しない。誤解が発生しているのは意外だった。渡辺によって正解が提出されていることを知らないらしい。準備不足で誤記することは誰にでもある。本稿の目的はその間違いを批判することではない。松葉訳にもとづく陳景韓漢訳を整理しなおすことを主旨とする。

以上を見れば、松葉訳の三から五までを陳景韓が漢訳し『月月小説』に掲載したのはわかる。普通に疑問が生じるだろう。その一と二、あるいは六の陳景韓漢訳はないのか。

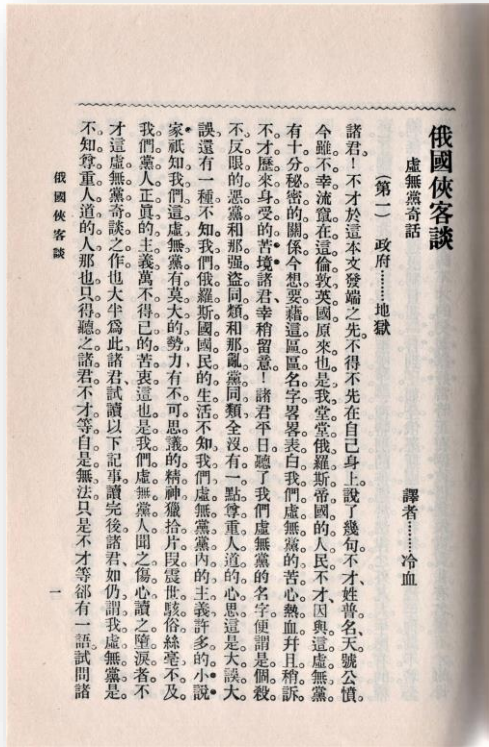
先行文献を読み目録を調べればすぐに判明した。ひとつは『新新小説』である。一と二ばかりでなく三までも掲載されている。三は『月月小説』掲載の「女偵探」が別にある。それと重複するのかと疑問が出るだろう。あとで説明する。

2 『新新小説』のばあい

『新新小説』に掲載された陳景韓漢訳をまとめて示す。ル・キューと松葉の書籍については同じだからくり返さない。作品名だけを取り出す。

一 「（虚無党奇話 俄国侠客談）第一 政府……地獄」 冷血（陳景韓）訳
『新新小説』第3号 光緒三十年十一月初一日（1904.12.7）

松葉訳「一、恐ろしき政府」。原作は“ I . A CROOKED FATE（曲がっ



「(虚無党奇話 俄国侠客談) 第一 政府……地獄」

た運命)”

二 「(虚無党奇話 俄国侠客談) 第二回 西比利亜之雪」 冷血(陳景韓) 訳 『新新小説』 第4期 光緒三十年十二月初一日 (1905.1.6)

松葉訳「二、シベリアの雪」。原作は“II. ON TRACKLESS SNOW (道なき雪の上で)”

三 「(虚無党奇話 俄国侠客談) 第三 我友伯爵夫人」 冷(陳景韓) 訳 『新新小説』 第6期 光緒31.2.1 (1905.3.6)

未完。松葉訳「三、わが友伯爵夫人」。原作は“III. MY FRIEND, THE PRINCESS (わが友、伯爵夫人)”

三 b 「(虚無党奇話 俄国侠客談) 第三 伯爵夫人(一)」 冷血(陳景韓) 訳 『新新小説』 第10期 光緒三十三年四月初一日 (1907.5.12)

未完。松葉訳「三、わが友伯爵夫人」を抄訳して再掲載。原作は“III. MY FRIEND, THE PRINCESS”

陳景韓漢訳の三「第三 我友伯爵夫人」と三b「第三 伯爵夫人（一）」はどちらも底本は松葉訳「三、わが友伯爵夫人」だ。重複するのはなぜか。この奇妙な事実については後で述べる。

各作品について簡単に紹介する。

一 「第一 政府……地獄」

松葉訳「一、恐ろしき政府」—— I. A CROOKED FATE (曲がった運命) である。

冒頭部分を対照して見る (ルビ省略。2字のくり返し記号は文字に変換する。以下同じ)。

【原作】 Brief forewords are necessary to this record of facts. / I, Vladimir Mikhalovitch, subject of the Tzar, now in exile in England, hereby make a free and full confession of my secret alliance with the so-called Nihilist Party. p.1

この事実の記録には簡単な前書きが必要である。／私、ウラジーミル・ミハロビッチは、ロシア皇帝の臣民であり、現在イギリスに亡命中であるが、いわゆる虚無党との秘密の関係についてここに自由かつ十分に告白する。

【松葉】 いよいよ本文にとりかゝる前に、自分の身の上をお話して置くことが必要である。／今や不幸にも、かく英吉利に流竄の身となつて居る自分は、露国皇帝の臣民浦出見信露好 (ルビ：うらでみるのぶろすきー) といふのが、本名である、私は所謂虚無党といふものと秘密の関係を結ぶに至つた其事情をば、茲に白地に、十分に告白しやうと思ふ。1頁

松葉訳は基本的に一人称で語られる。ロシアのユダヤ人がなぜ反ロシア皇帝の虚無党員になったか。どういう行動を実際に行ったかを主人公が詳細に述べる。松葉訳は6篇を選択して集めた連作短篇集である。

語り手はロシアのユダヤ人ウラジーミル・ミハロビッチ（Vladimir Mikhailovitch）だ。松葉は日本漢字を当てて浦出見信露好（うらでみるのぶろすき一）とした。その浦出見はたしかにウラジーミルに近い。ただしミハロビッチに信露好では音が離れる。「露好」だけを見れば日本の読者は「ロシアが好き」と連想するだろう。そういう意味ではなく松葉はロシア語の「ロスキー」の個所にはその漢字を当てている。

明治時代の日訳に固有名詞をまったくの日本風に置き換えるというのを見かける。上の例でいえば「浦路見晴」などにしてもよかった。だが松葉はその方法は採用しなかったということだ。原音に近い漢字を当てながら少し自由に翻訳したとわかる。

陳景韓の漢訳を見る。

【陳景韓】諸君！不才於這本文發端之先。不得不先在自己身上。說了幾句。不才姓普。名天。号公憤。今雖不幸。流竄在這倫敦英国。原来也是我堂堂俄羅斯帝国的人民。不才因与這虚無党。有十分秘密的關係。今想要藉這区区名字。略略表白我們虚無党的苦心熱血。并且稍訴不才歷來身受的苦境。諸君、幸稍留意！1頁

諸君！私は本文發端の前に自分の身の上についてまず少し話しておかざるをえない。私は姓を普、名を天、号を公憤という。今や不幸にもイギリスのロンドンに亡命しているが、もともと堂々たるロシア帝国の人民である。私は虚無党と十分に秘密の關係を持っているから、今この私めの名前を使用してわれらが虚無党の苦心と熱血を告白し、かつ私がこれまで身をもって受けてきた苦境を訴えようと思う。諸君、なにとぞご注意あれ！

陳景韓の漢訳は直訳ではない。話し手の姓名を普天、号を公憤と書き換えているところからもわかる。社会の悪に対する憤り（公憤）をわざわざ号にしているところに陳景韓の把握の方向が表われている。

細かな違いはある。松葉訳にもとづきながら陳景韓なりの表現をしているといっている。

本書の主題は物語の最初に出てくる話し手の言葉に表出している。すなわち「独裁と自由のどちらが好ましいか (whether Autocracy or Freedom is to be preferred)」 (p.2) だ。そこを松葉は「専制政治と自由と、そのどちらを諸君は望まるゝかという一事であるのだ」 (2-3頁) とする。ほぼ直訳である。

陳景韓は「『諸君。願為専制国的人民。還是願為自由国的人民?』」 (2頁) とカッコに入れて強調した。すなわち「諸君は専制国の人民になりたいか、それとも自由国の人民になりたいのか?」だ。訳文それぞれの表現に違いはあるが本来の意味は伝えている。

ウラジーミル (以下主人公と称する) はユダヤ人だ。父 (Isaac/松葉: 愛作/陳景韓: 露好。表示順は以下同じ) はサンクトペテルブルクの証券取引所の仲買人で一家は裕福な生活を送っていた。3歳下の妹マーシャ (Mascha/増香/香児) がいる。主人公が兵学校に入っているあいだに不幸が起こった。父が逮捕されシベリア送りになると母と妹は窮乏生活に陥る。母妹が流れ着いた先はユダヤ人居住地で2年来の農作物不作により飢餓状態だった。

陳景韓はその地区について松葉訳にはない加筆を行なっている (7頁)。過去は裕福だったと述べて現在の極貧を際立たせたかったようだ。約8行 (半ページ) もの加筆創作だが物語の大筋にはたいして影響はしない。しかし陳景韓にはそうすることが必要だったらしい。正確な漢訳よりは陳景韓の判断で底本に加筆削除するのである。

妹は母のためにパンを求めて知事の家に行ってきたが追い返される。帰宅してみると母は餓死していた。後をつけて来た知事から性的暴行を受けかけて抵抗している時、知事の所持していたピストルが落ちる。妹は知事を射撃した。原文、松葉訳と陳景韓漢訳を引用する。

【原作】 Mascha, in desperation, had resorted to the last extremity in defense of her honor. p.22

マーシャは死にもの狂いで自分の名誉を守るために最後の手段に打って出た。

【松葉】 殆ど半狂乱の増香は、此の如くして自分の名誉を、僅に保護する

ことを得たのであつた。32頁

【陳景韓】且説当時香妹打死了知県。雖然逃過了一時危難惹了這場大禍。更是大不得了。想要逃。沒有錢。又沒有人。又沒有去處。逃往那裏。想要隱秘。這樣打死知県の事。又是俄国警察的利害。如何隱秘得過。18頁

さてその時、香妹は知事を撃ち殺した。一時の危難を逃れたとしても、この大災を引き起こしたからにはもっと大変だ。逃げたいと思っても金はない、知人はいない、行き先がない。どこかに逃げて秘密にしたくても知事を殺したのだから、厳しいロシア警察からどうして隠れることができるだろうか。

ル・キューは妹が知事を射撃したことだけを述べている。松葉は原文のとおり
に訳した。だが陳景韓はそれだけだと物足りないと思った。上のように加筆する。

逮捕された妹は公開鞭打ちの刑に処せられる。その現場に到着した兄（主人公）
が乱入する。彼も同じく鞭打ちの刑を受けた。ふたりとも終身懲役となりシベリ
ア鉱山送りが決まった。ロシア皇帝に復讐するために彼は虚無党になる。

陳景韓は「さて私が次回でゆっくりお話ししますのを待たれよ（且俟不才再於
下回慢慢説来）」と章回小説風に結んで、次の「二、シベリアの雪」に続く。

二 「第二回 西比利亞之雪」

松葉訳「二、シベリアの雪」——II. ON TRACKLESS SNOW（道なき雪の上で）
である。

約100名の老若男女が流刑地シベリアまで徒歩で移動させられる。苛酷な状況
が淡々と記述されておりそれがかえって読者の恐怖を増加させて効果がある。

陳景韓は加筆をするが一方で省略もする。

移動する囚人のなかに20名ほどの女性がいた。その中のひとりマリー・ク
ートウゾウ夫人（Madame Maerie Koutowzow p.34／鞠阿工藤夫人まりあくどうぞう 49頁
／弓藤夫人 7頁）は主人公が見知っていた未亡人だ。ロシアの官吏が結婚を申し
込んできたのを手酷くはねつけた。復讐された結果がこうして囚人の身である。
陳景韓はこの前後約8行にわたる夫人の話題をすべて削除した。理由は不明。加

筆も削除も自由に行っている。

この夫人はもう1ヵ所に出てくる。たどり着いた別の牢獄で囚人たちがくり広げる食料争奪戦に参加できなかった。食事を取ることなく熱病になって6日目に死亡する。松葉は原文どおり丁寧に説明した。

陳景韓はなぜだかこちらは削除しなかった。「簡単にいえばその中にクドウズウ夫人という人がいる。名門の家柄の出身であるから家にあつては安樂に暮らすのに慣れていた。牢獄に入れられてから1ヵ月余にもならないうちに熱病にかかって死んでしまった（単説内中有個弓藤夫人。出身也是個世家大族。在家裏時。安享慣的。到了獄裏。不到一個多便染了一場熱病。就嗚呼哀哉了）」（7頁）

陳景韓は夫人の移動部分を省略したから彼女が1ヵ月余も牢獄に居ることに変更せざるを得なかった。改変するくらいなら前例と同じく省略してもよかっただろう。だが夫人については完全削除はしなかった。陳景韓はどうしても一部を残したかったらしい。

最終地の鉾山に到着する前に主人公はコサック騎兵のスキをついて脱走した。超人的な行動と幸運にもめぐまれ警察の追及を振り切って太平洋側にたどり着く。港に停泊していたカナダ漁船でロシアを脱出した。

陳景韓による細かな書き換えがある（15頁）。

松葉訳文ではこうだ。主人公は逃げて港に到着した。そこで探偵（police spy）から不審尋問を受けそうになった。彼は意を決して警察署に入り旅行券を示したが、署長によりその所有者がすでに死んでいることを見破られた。そこからただちに脱走した（73頁）。

陳景韓は変更して警察署を省略する。巡査ふたりが尋問して旅券の嘘をあばくことに変更した。さらにそうなった原因を推測するという底本にない加筆までしている。ここは小さい変更だから筋運びを左右しない。松葉訳そのままを漢訳するのではなくどこかに手を加えたいらしい。

陳景韓の漢訳は以上のとおり直訳ではない。大筋を押さえたうえで彼の筆は比較的自由に動く。作品に触れられていない個所であっても彼が必要だと考える部分には独自に説明を加える。このように省略しながら補足するという作業を見れば、陳景韓の漢訳姿勢がわかる。すなわちある部分では陳景韓は松葉訳を利用し

てほとんど自分の作品を創作している。ことばを変えれば日本語訳文は陳景韓にとって創作をするための素材のひとつにすぎない。原文を忠実に漢訳する方法とは別の方向をめざしているという意味だ。翻訳家よりも作家である側面が強く出ている個所があるといってもいい。

こうして「三、わが友伯爵夫人」に続く。

三 「第三 我友伯爵夫人」

松葉訳「三、わが友伯爵夫人」——III. MY FRIEND, THE PRINCESS（わが友、伯爵夫人）である。

ロンドンに逃れた主人公は当地にある虚無党実行委員本部の探偵となった。あるとき男女党员23名が捕縛処刑された。密告者はストラトノフスキー（Stratonovski／須虎士、能鋤伊すとらと、のうすきー／水多羅（水多）また奴密克（奴克））伯爵夫人だと特定される。伯爵夫人を殺害するよう主人公に命令が下された。姓名についての陳景韓漢訳は松葉訳を写している。

彼が伯爵夫人に近づいたのはアベニュー劇場（Abenue Theater／阿部尼座あべにいざ／阿部戯館）だった。親密になったふたりは伯爵夫人の邸宅で語り合う。夫人は歳のはなれた伯爵との不幸な結婚を嘆いて主人公を愛すると心情を吐露して涙する。

ここまでの『新新小説』第6期掲載の「第三 我友伯爵夫人」である。文末に「未完」とあるとおりだ。陳景韓の漢訳は細かな省略はあるにしても大筋はほぼ松葉訳そのままを把握している。

次の同誌第10期に掲載されているのは当然その続きだと読者は思う。ところがそうではない。話が新しく始まっているのには驚く。

奇妙なことだと言わざるをえない。ふたつは「第三」を共有してこちらは「第三 伯爵夫人（一）」だ。章題は似ているがこの（一）が物語の再度の始まりを示す。どういうことか。

比較するためにもとのル・キュー原作、松葉訳、『新新小説』第6期の陳景韓漢訳について冒頭を引用する（下線は筆者）。

【原文】 Few Londoners are aware that the headquarters of the most powerful secret organization in the world exist in their midst. The unsuspecting persons who pass up and down a certain eminently respectable thoroughfare in the northwest suburb, would be somewhat surprised if they knew that in one of the houses the Nihilist Executive Committee holds daily council and matures the plots which from time to time startle Europe. p.54

世界で最も強力な秘密組織本部が自分たちの中心部に存在していることを知るロンドン市民はほとんどいない。北西郊外のある非常に立派な大通りを行き来する無防備な人々は、その家のひとつで虚無党実行委員会が毎日のように会議を開き、時おりヨーロッパを驚かせる陰謀を熟成させていると知ればいささか驚くことだろう。

【松葉】 如何に炯眼なる倫敦子でも、倫敦の中央に、世界中で一番勢力のある秘密結社の大本営が有ることは知りはしまい、日々毎日北西の郊外に於ける有名なる市上をば、来往して居る幾多の人に対しては、何人も嫌疑の目を注ぎはしないのであるが、一たび其仮面を脱するや、彼等は其市上の或家に集会して、日毎の如く会議を開き、絶えず欧羅巴を聳動する大陰謀を企てつゝあるといふことを知るに至つては、何人も驚かない訳には往くまいと思ふ。そして其家に集まる人々こそ、実に虚無党の実行委員なるものであるのだ。 75頁

松葉の下線部分が原文と一致しない。原文では「(大通りを行き来する)無防備な人々は、その家のひとつで虚無党実行委員会が」となっている。「一たび其仮面を脱するや」も松葉の加筆だ。虚無党員は普段は仮面を付けて一般人になりすましているという意味だ。見れば「虚無党実行委員会」を含む箇所を後ろに移動させて別の文章にしたとわかる。それ以外に問題はない。

冒頭の記述は、日々陰謀を計画している虚無党実行委員会がほかならぬロンドン中心部に存在していることの意外性を読者に強く印象付ける。

陳景韓漢訳を見る。関係部分のみ区別するために掲載誌名を略して示す。

【新新6】倫敦府内の明眼人。却也不少。只是没一個。能辨得出。這倫敦府中。竟有一個極大極有勢力的秘密社会在內。每日在那府的西北。有名的各個市鎮。往来奔走。諸多秘密社会中人。誰疑心他。到了時候。一脱假面。便在市上旧家聚会。議論的却是震動全歐的勾當。諸君！這秘密社会不是別的。就是世界有名的虚無党人。1頁

ロンドンに炯眼の士は少なくないだろう。ただし、このロンドンに巨大で強力な秘密組織があり、その西北のそれぞれ有名な場所を毎日往来奔走している多くの秘密組織の人間に対しては誰も疑わないのだが、ひとたび時がくると仮面を脱ぎ捨てるやただちに市中の旧家に集まって議論するのは全ヨーロッパを震動させる悪事だと知ることのできる人はひとりもいない。諸君！この秘密組織とはほかでもない世界的に有名な虚無党員である。

ここでは松葉の勘違いと加筆を含んで陳景韓はほぼ直訳している。

三 b 「第三 伯爵夫人（一）」

問題は後（第10期）の陳景韓漢訳「第三 伯爵夫人（一）」の方だ。ふたたび同じ箇所を漢訳して次のとおり。

【新新10】且說不才自從逃至倫敦以後。便跟了同來的人。到了倫敦的西北角上。離開市稍遠。過了一處大街。街旁有個小弄。進了弄。走不到幾步。便有一帶板牆。中間開着大門。（後略）1頁

さて私はロンドンに逃げて来たあと、同行の人と一緒にロンドン西北角の繁華街から少し離れたある大通りを渡った。道沿いの路地に入って数歩も行かずに板塀がある。そこに表門が開いている。

ロンドン、西北、塀に囲まれた虚無党実行委員会のある建物など、たしかに松葉訳にはある。しかし主人公を本部に案内する同行者がいるのは違う。彼をロシアからアメリカに運んだ漁船について虚無党の通信船（2頁）だ、とここでわざ

わざ説明する。それも原文には存在しない。

基本的な状況設定は合っているにしても手を入れ過ぎて別作品のようだ。

男女党员23人が逮捕された原因はストラトノフスキー伯爵夫人（ロシア政府の秘密探偵）の密告による。夫人の以前の訳名は水多羅（水多）だった。こちらでは奴密克（奴克）だけを使用している。

伯爵夫人に死刑宣告が下されたあと、その実行を命じられたのは主人公（不才、我）だ。また事前に伯爵夫人の肖像写真を手渡されるというのも陳景韓による変更だ（3頁）。まだある。伯爵夫人は24、25歳であることを前回はそのとおりに漢訳した（3頁）。今回は21、22歳でより若くしている（4頁）。しかも別の虚無党员が原作とは異なる伯爵夫人の経歴までも説明する（5頁）。加筆が過ぎて松葉訳から離れる。

前回は松葉訳のとおり伯爵夫人と主人公が夫人の邸宅で親密な面会をしているところまで描写した。だが今回はそこまで筆が伸びない。自分の家族の復讐をするためには伯爵夫人を殺害することが必要だと決心して物語は中断する。

松葉訳を底本にしていながら陳景韓漢訳がどうしてここまで異なってしまうのか。かといって完全に松葉から離脱するわけでもない。人物の基本的構成および物語の筋運びは一致している。ただしこちらは漢訳というよりも翻案部分が増加した。

3 『月月小説』のばあい

上述のとおり松葉の「三 わが友伯爵夫人」は『新新小説』において「第三我友伯爵夫人」と「第三 伯爵夫人（一）」になった。両者は内容が似ているが同一ではない。奇妙な重複のしかたをして両者ともに中断した。

三 「女偵探」上下下——3度目の漢訳

みたび松葉訳「三 わが友伯爵夫人」——III. MY FRIEND, THE PRINCESS（わが友、伯爵夫人）である。

陳景韓は「女偵探」上下下と改題して『月月小説』に掲載される。「上下下」

とは該誌第14号と第15号ともに「下」を重複させた。「上中下」を誤植したの
だろう。

ここの「偵探」は「秘密警察 secret police」を意味する。伯爵夫人はロシア
政府の秘密探偵ということになっているから題名として間違っていない。ただ
し以前の「我友伯爵夫人」と見比べれば「女偵探」では優雅さを失った漢訳名だ。

【月月13】 倫敦市中。為虚無党员秘密巢窟。其本部在西北市上。莫斯街の
某号。為党中実行委員聚会之所。每當夕陽西墮。燈火初明。所有実行委員。
群來集議。我自西伯利亞逃出後。便來此地。1頁

ロンドン市中は虚無党员の秘密の巢窟である。その本部は市西北のモス
テン街某号にあり党中央実行委員が集合する場所である。夕陽が落ちて灯
火がともるたびに実行委員全員は集まって会議を開く。私はシベリアから
脱出したあとここに来た。

「莫斯街」を「モステン街」と訳したのには理由がある。松葉訳が原文の
“Mostyn Road” (p.54) を「茂須店町(もすてんまち)」（75頁）としているか
らだ。

松葉訳にほぼ忠実だった『新新小説』第6期の漢訳に比較すれば省略が多い。
本部がある家についての説明も省いている。そうはいつても『新新小説』第10
期で見せた大きい変化ほどには至っていない。松葉訳寄りでその中間に位置する。

ストラトノフスキー伯爵夫人、すなわち松葉訳の「すとらと、のうすきー」だ。
以前の漢訳では「水多羅(水多)」また「奴密克(奴克)」と表示していた。そ
れで合っている。こちらの漢訳ではそれを変えて最初「沙脱」(2頁)とする。
冒頭の日訳音に合致している。ところが同一ページ以降は「花脱」だ。「沙脱」
は誤植なのかもしれないが「花脱」では離れる。また別の個所では「奴斯夫人」
(下9頁)として出てくる。読者は前後関係で理解するだろう。しかし漢訳とし
ては粗雑といわざるをえない。

伯爵夫人の年齢も以前の24、25歳にもどしている。

伯爵夫人と劇場で知り合うと名刺を交換した。主人公は処刑人だから偽名を使

用して「姓蘇。名登。号季子」（4頁）だ。以前は「姓普。名天。号公憤」にもとづいて偽名に「普楽」（5頁）を使用していた。こちらでも変更したことがわかる。

固有名詞を自由に変更している理由は不明。統一感に欠けているから漢訳としては不安定に見える。

松葉『虚無党奇談』は物語としての一貫性を有する。それを基本に置くと陳景韓が名前を勝手に変えるのが不自然だ。名前に関してどうして一致させないのか。

『虚無党奇談』に収録された短篇は主人公を共有する。相互に関連して統一世界を形成している。その主人公の名前を変更することはその関連性を断ち切る。単なる短篇集として陳景韓は把握しているのではないか。そういう疑問になる。

『新新小説』から『月月小説』へと掲載誌が移動していても陳景韓が漢訳者としてしっかり把握していれば生じようがない整合性の欠落だと思う。

以上の違和感は陳景韓を翻訳家として考えると発生する。しかし陳景韓が作家だという側面に重点を移せば違って見える。その時々で自分が最適だと考えた名前の漢訳なのかもしれない。

伯爵夫人との恋に落ちた主人公はどうしても彼女を殺すことができない。虚無党実行委員会に呼び出されて叱責をうけるのだった。ここまでが陳景韓漢訳の「上」だ。原作の大筋をたどりながら細部に手を入れた漢訳になっている。

伯爵夫人を殺す決心のつかない主人公は直接会って告白した。自分は虚無党員であってあなたを殺さなければならない。伯爵夫人が言うには、夫の策略で自分は秘密探偵（密告者）にでっち上げられた、濡れ衣だと主張する。以上が編集の手違いだろうが「下」だ。「中」であるべきだった。

つづく「女偵探」は再度「下」を掲げる。いきなり伯爵夫人の死体で始まる。胸は血にまみれ顔には十文字が切り刻まれていた。

【原文】……the breast of wich was stained with blood. p.72

The fair, handsome face of the princess had been slashed with the knife in the form of a cross, and the blood gave it a terribly ghastly appearance.
／The cut was the distinguishing mark which Nihilists set upon the faces

of traitors! p.73

……その胸は血に染まっていた。

伯爵夫人の美しい顔はナイフで十文字に切り裂かれ、その血がひどく陰惨な印象を与えていた。／その切り傷は虚無党が裏切り者の顔につける特徴的な記しだった。

【松葉】……胸の辺りは血汐を以て染んで居る。102頁

見よ如何に其殺し方の惨酷なるぞ、夫人の美しい綺麗な顔は、小刀を以て十文字形に斬刻なまれ、今までとは打て変つて、二た目と見られぬ情ない有様であるのだ。／此十文字形の切疵は、言ふまでもなく虚無党が其密告者に対して、施す所の印であるのだ。103頁

【月月15】……胸腹間血肉狼藉。下7頁

看了他的顔。又看了看他的胸腹。只見胸口傷處。劃着一個十字形。他顔也劃了個十字形。明知這是虚無党。对着秘告人行刑的記号。定是虚無党员殺死的了。下7-8頁

……胸と腹のあいだが血と肉でひどいことになっていた。

彼女の顔を見て、さらに胸腹をちょっと見たが胸の傷口には十文字が刻まれ、顔にも十文字が刻まれている。明らかに虚無党が密告者に対してほどこす記号である。きっと虚無党员が殺害したのに違いない。

伯爵夫人は胸部をナイフで刺されて死去した。顔に十文字を刻むのは虚無党の儀式的な記号だと説明がある。松葉訳が原文のほぼそのままであるのに比較すると陳景韓の小さな書き換えが気になる。胸にも十文字を刻んだことにしたのだ。陳景韓は書き過ぎだとは思わないらしい。

死んだとばかり思っていた伯爵夫人は生きていた。病気で死んだ女中と入れ替わった。主人公ではない別の虚無党员がその死体をナイフで刺したということだ。顔に刻まれた十文字が人物入れ替わりの事実を察知できなくさせたという種明かしである。

物語の終わりに陳景韓が登場して解説をする。

【月15】冷曰。彼所謂伊斯夫人者。其果係偵探耶。抑果如彼所言原非偵探。而為虚無党所錯疑者。其事不結果。末由探知。下13頁

冷（陳景韓）いわく、あのストラトノウスキー（伊斯）夫人という者が果たして探偵か、あるいは彼女の言うようにもとから探偵ではなく虚無党が誤解をして疑っているのか。その事は決着しないし知ることもできないのだ。

伯爵夫人の名前がここでも違っている。「沙脱」から「花脱」となり「奴斯」が使われると思えばこの「伊斯」だ。同じ名前をなぜ使おうとしないのか。不思議である。

陳景韓は解説して伯爵夫人が探偵（secret police、密告者）であるかどうかはわからないと述べる。伯爵夫人は密告者ではないと自らが断言した。その場面だけでは不十分だと陳景韓は考えたとわかる。読者の理解が行き届かないことを危惧したらしい。訳者自身が出てきて事実不明だと重ねて念押ししたかたちだ。わかっている読者は困惑したかもしれない。

ル・キュー原作は復讐譚であるが同時に冒険活劇、あるいは恋愛小説にもなっている。ここではそれらに加えて身体交換の仕掛けを小さくほどこす。そこを見れば推理小説の要素も含む。

次は「爆烈弾」上下だ。

四 「爆烈弾」上下

松葉訳「四 露国皇帝の生命」——IV. THE BURLESQUE OF DEATH（死の喜劇）である。

主人公がロシア皇帝を殺害するための時限爆弾をイギリスからサンクトペテルブルクへ送るという話だ。結果として爆弾は破裂したがロシア皇帝を殺すことはできなかった。苦心の末に失敗だから「死の喜劇」という原題になったらしい。松葉が内容に沿った「露国皇帝の生命」と日訳すれば、陳景韓は実物そのものの「爆烈弾」にした。

ロシア皇帝の秘密探偵は虚無党と激しく対立し相互に監視体制を強めていた。その秘密探偵の具体的な活動例としてバルカン半島の暗殺事件を挙げる（113

頁)。陳景韓漢訳はそれを削除した(上1頁)。

虚無党の悪辣さの1例として仲間殺しをも容認したことを述べる。探偵を敵対する革命党に潜入させるために同僚の「P—といふ奴(fellow-spy, P—)」(114頁/p.81)を殺して信任を得させた。陳景韓はそこを「果然将他友人批奴殺死。投入虚無党(はたして彼の友人Pという奴を殺し虚無党に投入した)」(上2頁)とそのまま漢訳する。ただし底本にあるその後の説明部分は省いた。

このように底本の一部をいくつか省略するのは主人公の行動に焦点を当てて内容を圧縮するためだ。

原作は、つまり松葉訳も同じだが、その主人公が物語る構成を維持している。爆弾を運搬する人物として選ばれたのは入党してまもない主人公と、もうひとり俱利彌爾(ぐりねういつく/Grinevitch)だ。協力者として比士朗夫(ぺとろふ/Pétroff)がいる。

主人公の交替、あるいは人称の変更——一人称から三人称へ

ところがここで陳景韓は奇妙な変更をした。この「爆烈弾」において主人公を入れ替えたのだ。第3者を設定して、入党してまもないが信用があって敵が注目していない人物、すなわち「彼都」(上3頁)である。この新しい主人公ピートは松葉訳にある「比士朗夫ぺとろふ」から取ったらしい。

それまでは一人称で語られていた陳景韓漢訳だ。こうして物語の根底が覆った。話し手を第3者の彼都(ピート)に引き継いだから三人称小説だ。小説の基本構造について大改造をしてしまったということになる。なぜこのような改変を行ったのか。主人公を共有しない短篇集だと陳景韓は考えていたのであれば、ありうる。

上に見る人称変更の実例を挙げよう。ロシア政府の保安課長に新しく任命されたフランス人探偵義暴(ぎぼう/Guibaud)との会話だ。変装をした者同士が爆弾を奪い合った後のこと、松葉訳の主人公(陳景韓漢訳は彼都ピート)は知らぬ顔してギボウを自宅に招いた。

【松葉】で何處迄も何喰はぬ顔で、彼をして私の下宿屋へ来て、ウキスキ

一でも飲むやうにと勧め込んだ、所が義暴にも何か野心があつたものと見えて、何の異議も無く私の申込に賛成の意を表した、127頁

【陳景韓】彼都便対クト說道、相識多時。尚未我寓内去過。今日無事。可否駕臨藉談心曲。クト欣然応諾。便道、甚好。甚好。上7頁

ピータはギボウに言った。「知り合ってから長くになるがまだ私の部屋にきてくれたことはないね。今日はなにもないから話すのはどうかな」ギボウは喜んで応じて言った。「いいね」

松葉訳が主人公ウラジーミルの視点で記述しているのは一貫している。陳景韓漢訳は別人のピートを話し手に変更しているからカッコを使用して会話として訳した。まったく第三者ピートの発言であることがわかるだろう。

主人公ピート（本来はウラジーミル）がギボウを部屋に誘ったのは薬物を飲ませて情報を探るためだ。ひとつの収穫は虚無党内にスパイがひとりいることだった。その署名は「P.P.」とだけある。そこから彼得、巴取武助（ぺいとる、ぱとろぶすきー/Peter Patrovski）と推測した（129頁/p.93）。

陳景韓が「這人姓巴名取」（上8頁）と漢訳したのは松葉訳の「巴取」だけを引き抜いたからだ。前半のみだから「P.P.」とは一致しない。だが陳景韓はローマ字署名を省略しているために読者にはわからない。またせっかくスパイ「巴取」を出したにもかかわらず物語最後に結びつく伏線であることには気づかなかった（後述）。

【松葉】翌日私は巴取武助の謀反の次第を、実行本部へ話をして、死刑の宣告は忽に其頭に下つたのであつた。131頁

【陳景韓】彼都又去赴那虚無党的実行委員会。便将巴取的事。報告了党中。上9頁

ピートは虚無党の実行委員会へおもむき、ペイトルの事を党へ報告した。

陳景韓は後半にあるペイトル死刑の宣告を漢訳しなかった。ル・キュー原作および松葉訳には当然存在しているにもかかわらずだ。この部分を削除したから物

語結末との関連を見失った。

爆弾を運送する過程でイギリスの寒村から船を雇う。宝石を運んでいると偽ったから海賊に襲われるが切り抜ける。苦勞の末に爆弾は女性虚無黨員に届けられた。その直後にロシア政府のスパイであるギボウが出現する（145頁）。陳景韓はこの部分は必要がないと考えて略した（下17頁）。

数日後、ストランド街で号外が出た。ロシア王宮で爆弾が破裂し多数の負傷者がでたが死者はいなかったという。もうひとつの記事がセーヌ川の死体を報じた。

【原文】 In the same journal, under the heading, “A Paris Mystery,” was the report of the discovery of a body in the Seine, with the face cut in the form of a cross. / It was that of the traitor Patrovski. p.105

同誌には「パリの謎」という見出しで、セーヌ川で死体が発見され、顔が十字に切られていたという記事だった。／裏切り者のパトロヴスキーのものだった。

【松葉】 其夜再び発行された号外によつて見ると、巴里の清尼川に一の死骸が浮いて、其死骸の頬には、十文字の切傷があつたとしてある。／それは言ふまでもなく謀反人の巴取武助の死骸であつたのだ。146-147頁

主人公が実行本部に報告し「死刑の宣告」が下った結末がこれだ。事前に張られた伏線は見事に回収されている。

しかし陳景韓漢訳は違う。伏線として「巴取」をせっかく出しているにもかかわらず彼はこの最後部分を漢訳しなかった。セーヌ川に浮かんだ死体を漢訳しなかったのは翻訳家としてうかつだ。また因果関係を理解しなかったとしたら作家として不注意ではないか。

陳景韓の同様例としてモーパッサン原作を挙げておく。（法）毛白石氏著、冷血（陳景韓）訳「（戦争小説）義勇軍」（『新新小説』2号 1904.11.26）だ。モーパッサン著、橋本青雨訳「義勇軍」（『太陽』10巻13号 1904.10.1）を漢訳したもの。モーパッサンが考えて書いた文末のヒネリ部分を漢訳しなかった。

五 「俄国皇帝」上中編

松葉訳「五 人民を売る犬」——VIII. AN IMPERIAL SUGAR PLUM（皇帝の砂糖菓子）である。

前は爆弾を運ぶ仕事だった。今回の主人公はロシア皇帝一行が乗車した列車に自ら爆弾を仕掛ける実行者となる。

その具体的な状況を当事者である主人公（ウラジーミル）が説明する。これがル・キュー原作と松葉訳である。

陳景韓が漢訳してほぼ底本どおりになっている。ロシア国民の実状を説明している箇所から一部を引用する。

【松葉】此の如くして国内唯一人と雖も、自由の息をば吸ふことが能ないのだ、警察は僅かの金の為めに、人の生命を売る所の忌しい犬であつて、行政は腐敗し、法律は頽廢して居る。貧乏、困窮、飢渴、これ等の恐しい物は、国内到る處に充ち満ちて、幸福をいふものは、夢にも見る事が能ぬ、これが露西亜の今日の有様である。150-151頁

警察について「人の生命を売る所の忌しい犬」というところから松葉の「人民を売る犬」という題名になった。ただし本作の攻撃対象はあくまでもロシア皇帝そのものだからやはり原題の「皇帝の砂糖菓子」がふさわしい。種を明かせば「皇帝の砂糖菓子」の中に爆弾を仕込んだからである。

【陳景韓】因此国内人民。竟無一人。敢吐自由之氣。人人都是吞声忍氣。屈服於所有警察威權之下而已。不但加此。國中法律。既已紛乱。加以治理不善。到處土地荒蕪。工商衰竭。大半人民。終日汨沒於貧乏困窮。飢渴疾病之中。世間所謂幸福之說。我俄羅斯人。再不能夢見了。上2・3頁

このため国内の人民は、結局ひとりとして自由の息を吐かない。ひとびとは皆ぐっところえて泣き声を飲み込み警察の権威権力に屈服するのだった。そればかりではない。国中の法律はすでに退廢しており、加えて統治は腐敗し、至る所の土地は荒廢し、工商業も衰退している。大半の人民は

終日貧乏困窮と飢餓疾病の中に埋もれて世間でいう幸福というものは我がロシア人はもはや夢にも見ることができない。

直訳ではないが松葉の趣旨は把握していることがわかる。

その現状を打破するために虚無党が実行することは何か。ロシア皇帝を先頭とした勢力全体を破壊排除することだ。

【松葉】今の所謂皇帝なる者を其位より逐ひ斥け、其勢力を破壊し、彼を圍繞する其腐敗せる有司、其憎むべき勸告者を塵殺にし、斯くして文明と平和と自由とを齎し来り、正直にして勤勉に、よく神を畏るゝ所の全露西亜の老若男女に向つて、幾百年來の苦みを慰めてやらうと云ふのが、虚無党の本願なのである。151頁

【陳景韓】俄国的皇帝。実係破壊俄国平和的罪魁。我們党人。立竟将他逐出本位。殺了他的勢力。四旁附和的腐敗官員。亦須将他全行殺盡。先将擾乱平和的根子絶去然後正真的平和文明幸福。或有齎来的一日。不畏死。不怕難。正直勤勉。仁愛慈祥。由我党人。救出全俄的老幼男女。數百年困窮。這真是我虚無党人的本願也。3頁

ロシアの皇帝は実のところロシアの平和を破壊する罪人の首領である。我らが黨員は彼をその位置より追い出し、その勢力を破壊し、周りを囲む腐敗官吏をすべて殺しつくさなければならない。先に平和をかき乱す根を絶やせば、その後に本当の平和文明幸福がもたらされる日があるかもしれない。死を恐れず、困難をおそれず、正直にして勤勉に、仁愛し慈悲深くして、我が黨員により全ロシアの老若男女を数百年の困窮から救出する。これこそが我が虚無黨員の本願なのである。

「有司」は官吏のこと。陳景韓は正しく「官員」と訳している。ここも同様に直訳そのものではないが松葉訳の大筋は把握していると言っていい。

しかしある変更を施している。主人公の名前だ。前の「爆烈弾」では人称を変え「彼都」と名前を与えていた。それを再度書き直す。

【松葉】我が諸君は、既に浦出見、信露好なる私、即ち我が露西亜帝国に忠実なる軍人が、（後略）152頁

【陳景韓】我並非外人。我名胡勒。我原是個俄羅斯的忠実軍士。（後略）上4頁

私は決して別人ではない。私は胡勒という名前だ。私はもとはロシアに忠実な軍人だった。

三人称「彼都」だったのが今度は一転して一人称「胡勒」だ。読者はその名前を見て別の虚無党員の物語だと思うだろう。松葉訳を知っている人からすれば陳景韓漢訳は一貫していないと感じる。

なぜわざわざそう変更する必要があるのか。最初は主人公に姓名を普天、号を公憤と名乗らせていた。ならば主人公を「普天」で統一すればいいではないか。

たしかに主人公が行動するときには変名を使用した。松葉「仕事をするにはたへず変名を用ゐて居たから」（161頁）、「My real name had nothing todo with executive work. (私の本名は実行者の仕事とは関係はなかった)」（p.189）である。陳景韓はこの個所を漢訳していない。

しかしそうだからといって主人公が物語っているのだ。話者の本名を変える必要はない。だが陳景韓はそうするつもりはなかった。

作家としての側面が露呈しているらしい。その場その場で変更する。その脈絡のなさにいささか失望する。陳景韓漢訳コレリ『新蝶夢』（1906。底本は涙香訳『白髮鬼』）では原作の早い段階で物語を勝手に打ち切っている。翻訳として奇怪な操作をやったのける陳景韓だ。主人公の名前が変化するくらいで驚く方が繊細過ぎるということにもなる。

ロシア皇帝一行が列車で地方に行くことがわかった。虚無党は列車が支線を走ることを知って殺害方法をいろいろと検討した。そうして列車に爆弾を仕掛けることに決定した。選ばれた実行者は主人公である。原作は“me”（p.185）、松葉訳は「私」（157頁）そうして陳景韓漢訳は「我勒」（上7頁）だ。新しい名前の「胡勒」から来ているのはいうまでもない。

以上が「俄国皇帝」上編。次が中編である。

主人公はサンクトペテルブルクの菓子製造業者 (confectioner's/菓子家/食物店) のところへ行った。菓子製造業者には意味がある。砂糖菓子の中に爆弾を仕掛けたからだ。陳景韓が「食物店」としたのはその理由を理解していないのかと疑う。

そこには長く消息不明だったマーシャ (Mascha p.187/増香 159頁/真香妹 中10頁) がいて再会する。妹の名前が「真香」になっている。主人公の名前を「胡勒」に変えたのと同様に失敗だ。読者もその不可解さに首をひねるだろう。

そこに警察の手入れがあると知らされた。主人公は砂糖菓子の入ったカバンを持って窓から出ようとする。陳景韓がどのように細部を書き換えるか1例を示す。

【原文】 The window was high in the wall, and I could not reach it. /
“Take the bag with you.

Jump on my shoulders.” gasped Liusting his back and lowering his body.
p.190

【松葉】 窓は非常に高くして私の手は、逆もそこに達しなかつたのだ、すると龍須哲 (りゆうすてつく) は、つと私の側に寄つて来て、「さあなた、鞆をお持になつて、私の肩にお上んなさい」と、言ひながら、自分の身を低めて肩を貸して呉れた。162-163頁

【陳景韓】 我便一手搶了那皮包。便要上窗去。江吞道、且慢。且慢。這窗口甚高。你跳不上。於是一手取了椅子。一手扶着我。上了窗口。中11頁

私は急いでそのカバンを持つと窓に登ろうとした。江吞は言う。「ちょっと待った。この窓は高すぎて君は跳びつけないよ」そこで彼は片手で椅子を持ち、片手で支えてくれたので私は窓に上がった。

主人公が手助けされて窓から外に逃れるというのは違くない。しかし細部がこのように違ってしまうと翻訳ではなく翻案に近くなる。こういう調子でしかも前後を入れ替えさらに省略も行なつて陳景韓の漢訳はなされているのだ。

主人公は難を逃れ妹夫婦の家でその夜を過ごした。これで陳景韓漢訳中編が終了する。

松葉訳ではこの続きがある。秘密結社の力により主人公と妹婿のふたりはロシア皇帝一行の列車に潜り込んだ。爆弾砂糖菓子を設置して走る列車から飛び降りた。ロンドンに逃げ帰った主人公は新聞で、爆弾は破裂したものの皇帝を殺害することには失敗したと知る。

『月月小説』掲載分は未完である。読者はこの最後部分を読むことができないままで終わる。【注記1】梁艶によって未完部分が発見された。【注記2】を参照。

4 『小説時報』のばあい

陳景韓「俄国之偵探術」は『小説時報』第1期（1909）に掲載された。「各国時聞」にまとめられてその中の1篇だ。そのほかには「黒手党」「伯爵虎化記」「吸煙会」「獵河馬談」がある。その署名は「冷」。角書を見ると小説らしくない。ニュースあるいは雑録のたぐいだと思った。

あらためて調べてみると陳大康『中国近代小説編年史』全6冊（北京・人民出版社2014.1）はそれらすべてを採取していない。同様の理由なのだろう。

李志梅（2005）^{*2}は「俄国之偵探術」を含めて小説に分類している。それに従い樽目録第7版（2015）から収録した。

さらに国蕊（2014）^{*3}が松葉訳と原作を指摘した。【国蕊14-14】によればル・キュー原作、松葉訳『虚無党奇談』の第四章「露国皇帝の生命」だという。そこで文章を比較対照した。残念ながら違う結果になった。正解は以下のとおり。

六 「（各国時聞）俄国之偵探術」 冷（陳景韓） 『小説時報』第1期 宣統元年九月初一日（1909.10.14）

松葉訳「六、皇帝の間諜」。原作は“XII. THE TZAR'S SPY（ロシア皇帝のスパイ）”

松葉訳「皇帝の間諜」は3話に分かれている。ル・キュー原作は数字だけだ。松葉は独自に章題をつけて「一 あひゞき」「二 美人の死骸」「三 不忠主義」

である。陳景韓は松葉の章題を省略してこの物語全体を「俄国之偵探術」として漢訳した。主人公（普天 5頁）が復讐を成しとげる最終話である。「普天」とは陳景韓が最初に漢訳した「第一 政府……地獄」で示した主人公の名前だ。途中で何度か名前変更をした。ここにいたりようやく元にもどった。

パリのロシア秘密探偵局長マルティアノフ（Martianoff／圓手延まるてのぶ／麦推奴）と青年アンドレ（André／安度流あんどる／安度。注：伯爵の息子）が登場する。主人公がふたりを尾行して会話を盗み聞きする場面から物語は始まる。なにやら言い争いをしている。

ロシアからの亡命者で虚無党の父を持つナタリヤ・レベデフ（Natalya Lebedeff／奈娜理礼美貞夫なたりなればてふ／奈娜兒礼美貞）がいる。彼女はアンドレと会った。主人公からすればふたりの関係は一見して怪しい。なにかしら子細がありげだ。

父レベテフは爆弾所持を理由に逮捕された。娘ナタリヤは行方不明になる。後にセーヌ河に浮かぶ死体で発見された。

主人公は秘密探偵局長マルティアノフの家に家僕として入り込んだ。情報を盗み放題である。ある日、来客と主人の会話を盗み聞きして事件の真相を知ることになる。マルティアノフは局長だから虚無党についての秘密情報をすべて把握している。娘ナタリヤは亡命虚無党員である父レベデフに関する報告書（手紙）を知りたかった。そこで局長と面識のあるアンドレを通してそれを入手した。それが露見して彼女はマルティアノフ本人によって殺されたのだった。

マルティアノフ家において主人公の前任者だった虚無党員ザドレフスキー（Zadlewski／是土露好ぜどろういすきー／撲兒）がやってきてマルティアノフを暗殺して逃亡した。死刑執行の実行者は彼であった。秘密探偵局長マルティアノフが殺害されたことによって主人公の復讐は終わる（三 不忠主義の212頁）。主人公が直接手を下したわけではない。最高責任者を倒すことが重要だった。

ル・キューが述べる秘密探偵局長暗殺後の経過は松葉はそのまま訳した。しかし陳景韓が書き換えた小さな個所を示す。

主人公は仲間のザドレフスキーが訪問した事実を最後まで押し隠した。これが原文だ。

【原文】 but as I kept Zadlewski's visit a secret, and could throw no light upon the mysterious crime, I was set at liberty. p.308

しかし、私はザドレフスキーの訪問を秘密にしたので、この不可解な犯罪は解明されずに私は自由の身となった。

【松葉】 私はどこ迄も是土露好が訪ねて来たことを秘して居たから、此不思議なる罪悪に、何の光明も与ふることが能ず、私も巧く嫌疑の目を避けることが能た。212頁

主人公は暗殺者の存在を話さなかったから事件は迷宮入りになる。陳景韓はそれを次のように変更した。

【陳景韓】 到了明日。那撲兇已逃往別国。法国的官吏。便将這罪。加罪撲兇身上。再不追究了。俄国在法的虚無党人。聽了這個信悉。都暗暗地默誦。俄国自由洪福。虚無党洪福。9頁

次の日になるとあのザドレフスキーはすでに別の国に逃れていた。フランスの官吏はその罪をザドレフスキーに負わせてそれ以上追究しようとはしなかった。フランスにいるロシアの虚無党員はその知らせを聞くと、ロシア自由の大幸福、虚無党の大幸福、とみなが密かに頭の中で暗唱したのだった。

ザドレフスキーが逃げ切ったという結果は変わらない。しかし陳景韓の漢訳では主人公が仲間の名前を警察に告げたことになる。虚無党の規則からしてあり得ない。だが陳景韓はそう思わなかった。

問題はそれだけではない。陳景韓は「ロシア自由の大幸福、虚無党の大幸福」と書き加えてあたかも物語が完結したように記述した。だが松葉訳には解決部分がまだ続いている。陳景韓はそれをすべて省略したのだ。すなわち約9頁ほどの最後部分を漢訳しなかった。

そこには事件の真相が述べられている。話すのは主人公の妹マーシャ（増香）

だ。秘密探偵局長マルティアノフを暗殺したのは虚無党員ザドレフスキーではないという。別の虚無党員が実行した。しかもマーシャはあのアンドレ伯爵（実は虚無党員）と結婚したと告げる。その後、彼らはロマノフ王朝に一大打撃をあたえる虚無党に資金を提供しつづけている。そう述べて物語は終結する。

陳景韓漢訳では最後の謎解きがなされていないことになる。探偵小説でそこを削除するのは致命的な欠陥だ。清朝末期の読者は松葉訳を知らない。知らないのだから不完全燃焼で終わることもない。それが欠陥だとも思わないだろう。読者としてそれで幸せかといえ返答に窮する。だが松葉訳と陳景韓漢訳を比較対照すれば陳景韓の手抜きであることは明らかだ。

5 結 論

結局のところ陳景韓は松葉訳6篇をすべて漢訳した。3種類の掲載誌をへて公表時間は1904年から1909年までの5年間にわたる。息の長い連載だ。伯爵夫人については3度も漢訳し直している。それを含めてよほど気にいった松葉訳だったらしい。お気に入りならば齟齬が出ないように全体を調整すべきだ。ところが作品全体に共通して使われる名称を前後で維持することができていない。不可思議なところだ。掲載雑誌が異なるからといって人物名まで変更する必要はなかったと考える。

「俄国皇帝（五 人民を賣る犬）」は未完に終わった。漢訳していたが公表が中断したのか、残りは別の雑誌に掲載されているのか。詳細は不明だ。【注記2】梁艷論文によると「炸彈」として『旅客』2巻1期（1909.1.23）に掲載されていた。

やはり目立つのは松葉訳「六、皇帝の間諜」の最後部分を削除したことだ（漢訳は「(各国時間) 俄国之偵探術」）。実際に存在している問題解決の重要部分である。そこがないと作品の構成が崩れる。漢訳として成立しない。そこを注視すればどうしても不具合が生じているといわざるをえない。

「陳景韓漢訳『俠恋記』——有明山樵『伯爵と美人』」の例もある。陳景韓は有明作品を翻訳しはじめたが、途中で翻案に切り替え、最後は創作した。

いくつかの例にすぎない。だが陳景韓は漢訳しながら作家の素顔をややもすれ

ば露出させる。翻訳家としてはうまく機能していないように疑う。

作品対照表

LE QUEUX	松居松葉	陳景韓			
		『新新小説』	『月月小説』	『旅客』	『小説時報』
I. A CROOKED FATE,	一、恐ろしき政府	政府……地獄 3号1904.12.7			
II. ON TRACKLESS SNOW,	二、シベリアの雪	西比利亚之雪 4期1905.1.6			
III. MY FRIEND, THE PRINCESS,	三、わが友伯爵夫人	我友伯爵夫人、 6期1905.3.6 伯爵夫人（一） 10期1907.5.12	女偵探 ^{ママ} 上下下 13号1908.2.8 14号1908二月 15号1908三月		
IV. THE BURLESQUE OF DEATH,	四、露国皇帝の生命		爆烈弾 上下 16号1908四月 18号1908六月		
V. SOPHIE ZAGAROVNA'S SECRET,					
VI. BY A VANISHED HAND,					
VII. THE JUDAS KISS,					
VIII. AN IMPERIAL SUGAR PLUM,	五、人民を売る犬		俄国皇帝 上中 19号1908七月 21号1908九月	【梁艶による】 炸弾 2卷1期1909.1.23	
IX. FALSE ZERO,					
X. THE MYSTERY OF LADY GLADYS,					
XI. AN IKON OATH,					
XII. THE TZAR'S SPY,	六、皇帝の間諜				俄国之偵探術 1期1909.10.14

【参考文献】

詹宜穎「虚無党小説の跨境旅行——關於“Strange Tales of a Nihilist”英、日、中三個版本的考察」『東亜觀念史集刊』第13期 2017.12 電字版。2021.7.3：詹宜穎氏より論文ファイルをいただいた。多謝。2021.10.25追記：訂正論文ファイルをいただいた。こちらにも感謝。

梁艶「“佚失”的《（虚無党小説）俄国皇帝》下篇——陳景韓轉訳 *Strange Tales of a Nihilist* 發表始末」『清末小説から』第145号 2022.4.1

【注】

- 1) 中村忠行「晩清に於ける虚無党小説」『天理大学学報』第85輯 1973.3.21。142頁
- 2) 李志梅『報人作家陳景韓及其小説研究』華東師範大学2005.4 2005届研究生博士学位論文
- 3) 国蕊「陳冷血による翻訳小説の底本に関する考察」『跨境:日本語文学研究』第1号 2014.6 高麗大学校日本研究センター 電字版。略号は【国蕊14】。なお国蕊「近代翻訳文学中日本転訳作品底本考論——以陳景韓的轉訳活動為例」（『文学評論』2019年第1期 2019.1）がある。しかし記述を変更して松葉訳『虚無党奇談』だけを示す。間違いではない。しかし個別の作品を省略したから底本の詳細が不鮮明になった。

【追加2022.12】次の論文がある。国蕊「伯爵夫人的轉訳之旅——從対《虚無党奇話》翻訳与改写看陳景韓啓蒙意識的轉變」『瀋陽師範大学学報（社会科学版）』2018年第1期（第42卷第1期）2018.1.30

もうひとつの漢訳ル・キュー「虚無党奇談」

——松居松葉『虚無党奇談』

『清末小説から』第150号（2023.7.1）に掲載。沢本香子名を使用。松居松葉『虚無党奇談』は陳景韓のほかに景耀月も漢訳していた。漢訳内容を検討しあわせて景耀月についても紹介する。

松居松葉はル・キューWilliam Tufnell Le Queuxの原作“Strange Tales of a Nihilist”（1892）全12篇のうちから半分の6篇を選択して日訳した。それがウィリアム、ル、キュー原作（扉はウィリアム、ル、キュー原著）『虚無党奇談』（警醒社1904.9.20）である。その日訳6篇すべてを陳景韓が漢訳して「虚無党奇話」になった。それらは数種類の雑誌に分載（1904-1909）されていることも判明している*1。

本稿では同じ松葉日訳本にもとづき別人が漢訳した「虚無党奇談」を紹介する。

帝召訳「虚無党奇談」

著訳者、漢訳名と掲載誌などは次のとおり。

俄国威廉盧鳩著、帝召訳「虚無党奇談」『民吁日報』己酉年八月二十日（1909.10.3）-九月十六日（10.29）国立国会図書館所蔵影印本。印刷不鮮明箇所あり。

連載は新暦10月3-7、10、22、24、29日の全9回。『民吁日報』は1909年10

廣衆七十二行商報叩
賀電三 民呼報鑒氏氣
振興發揚踴躍恭祝萬
歲
東京夏聲雜誌社
賀電四 民呼報大鑒貴
報出世恭祝前途萬歲
留東豫晉泰離協會
賀電五 民呼報鑒恭祝
貴報出梓國民萬歲
東京中國留學生協會
小 說

●虚無黨奇談 第一章 威嚴之政府
瓦爾頓爾曰：天下欲發吾黨事，予遂王
不得不先刺取予所愛者，冠之斯文之
飾，是果予之所願耶。
予不覺今爲遠流，望之身矣。而西亞
皇帝臣民中，有所謂瓦德爾塔塔斯者，
者即我也。予於露國所語，虛無黨者，
爲帝極之結社，予今欲詳其事，俾世
君子以爲鑒焉。
予遂至事予深不愛英吉利人之陰，告
亦也。此輩尤以我爲重，自由之虛無黨人
爲一激烈強暴之同盟，不其性哉。予悲
夫，英吉利學於我露國之民生，政術，
吾露國光所射之露及吾黨對所語之
事，豈不能知其故也。彼輩唯見起於吾
黨勢力之偉大，及其風行雷厲，當
迅而進，其色相之陸離，光怪，是足
哉。予思之予重思之，彼英吉利，死，醉生
自由，太平之人民，豈知斯世之人，復有生
於露西亞皇帝政治之下者，其民，是知

●十萬毛瑟政府之督第四種族社會之
●母感貨貝母攝威力不懽不棟丈夫之

恭祝 民呼日報出版萬歲



何之異象也。不寧言民在露國運之款
記不幻。驚感之光，繼以愉快，英吉利
人之眼，豈非其所謂露而無告者哉。予不
陳吾黨可整可整可歌可泣之冒險事業
以歸天下之謂告者，予不得不先致
一辭以告世之君子。我虛無黨者，非黨到
吾國愛同黨之祖國法國西革命史上之
必有其一。予之祖國，予之祖國，予之
君子，能辨之也。
悲夫，吾黨今日於英吉利之國，良同享之
者，天帝之聖，神明之靈，吾黨終不免
以一別。露國之國，以高貴之者，何也。彼露
西亞之民族，固以其政治經濟之現狀
以顯明之手，復露西亞皇帝之
君，予當知人類中之切望，予當
者，豈真吾黨若也。彼露吾黨，
刑，刑，法，法，而者，予當爲
人無智慮，不惡死，吾黨者

人何以強強國皇帝之威嚴，其言
者，可以知也。夫吾黨能不以強者，
予之七首，蓋天下深昏主之血，惟是
我曹則惡專制，故欲改此政治，即不得
不於其所主者，出我人之手，手段之
外，藥，焉。嗚呼，是豈吾黨深願哉。
壯世之君子，汝觀露西亞之政治，非以
知吾黨之所爲，乃露西亞舉國人民之

日付と小説の一部

月3日に創刊された。紙面下半分に打ちあがる波を描いて「恭祝 民呼日報出版万歳」と添えている。漢訳「虚無党奇談」はまさにその創刊号から掲載が開始された。

漢訳は「第一章 威嚴之政府」と題する。9回で中断した。その内容は松葉日訳の冒頭7頁までを漢訳したもの。物語の最初部分で終了するという中途半端な結果だ。また大幅な加筆がある。

ル・キューの国籍を俄国とするのは間違い。松葉日訳には著者紹介がない。小説の舞台がロシアだから誤解したものだろう。また帝召が景耀月の筆名であるこ

とは陳大康年表（[編年④1860]）が指摘している。

松葉は「訳者の詞」において「此戦争の紀念として翻訳を初めた」と書いた。「此戦争」とは日露戦争を指す。また「此書は実に露国の活ける歴史と云つても可い」と述べてロシアに関する知識の増大を目的にもしていることが明らかだ。

ル・キュー原作の主人公（即物語の語り手）はロシアのユダヤ人ウラジーミル・ミハロビッチ（Vladimir Mikhalovitch）という。松葉は日本漢字を当てて浦出見・信露好（うらでみるのぶろすきー）だ。ミハロビッチがどうして「のぶろすきー」になるのかはわからない。景耀月は漢訳して瓦徳彌爾・瑠宝斯克だから松葉日訳そのままである。同じく、父（Isaac／愛作あいざつく）は亜札、妹マーシャ（Mascha／増香ますか）は馬克というぐあい。「ますか」を馬克とするのは近似というところだろう。

固有名詞が一致する。景耀月漢訳の底本が松葉日訳であることは明白だ。

ル・キュー原作から松葉日訳を経て景耀月漢訳へ

松葉日訳の7頁までの内容を簡単にまとめると次のとおり。

主人公はロシアのユダヤ人だ。ユダヤ人は法律上も差別されていた。だが父親はサンクトペテルブルクの裕福な仲買人だったから家族は上流社会の生活を送っていた。主人公は家を離れて兵学校に入る。演習の毎日だった。ある時から家族からの消息がとだえる。学友が見せてくれた新聞により父親がシベリア送りになったことを知った。あとで分かったことは父親がつまらないことで皇帝と不和になり、その結果、突然に囚人とされシベリアに送られたということだった。

その後にくり広げられるのは主人公の苦悩と残されて悲惨な境遇にもまれる母妹の様子だ。主要な物語が始まる前に漢訳は中断した。

ル・キュー原作では虚無党と秘密の関係を結んだ事情を告白することが目的だと主人公に言わせている。イギリス人は虚無党を殺人同盟だと誤解しているからそれを是正したい。とりわけイギリス人にこの本を読んで欲しいと希望するのだ。この部分の原文は次のとおり。

I. A CROOKED FATE（曲がった運命）

【原文】 At the outset it is my earnest desire to disabuse the minds of English readers that the Party of Freedom is a mere murder leagu. p.1

最初に言っておくと「自由党」が単なる殺人同盟であるという英国の読者の誤解を解くことが私の切なる願いである。

主人公ウラジーミルがなぜ虚無黨員になったのか。殺人謀略爆殺という手段を使うことがなぜ必要なのか。物語の中でその実際の状況と活動を細かく描写する。虚無党はロシア専制政府から犯罪集団だと認定されている。そこに生きるか死ぬかの苛酷な現実が発生する。虚無黨員となった主人公が自分の過去を振り返り反政府に変身した理由の正当性と詳細な経過を物語るのである。小説だから活劇的要素も入れて興味深い事例を多く記述する。読者をあきさせない。

上に示した原作部分の日訳（ルビ省略。以下同じ）と漢訳を引用する。

【松葉】 「一 恐しき政府」

此お話をする最初に當つて、私は熱心に英吉利の読者に望まねばならぬ事がある。それは人間の自由を重んずる我虚無党をば、たゞ殺人を是事とする、一個の同盟であるかの如くに思つて居らるゝ英吉利の読者に向つて、其誤解なることを是正するのは、自分の大いなる希望であるといふことを申上げて置く事だ。1・2頁

原作では単に「自由党」と記している。松葉はそのままでは日本の読者には理解しにくいと考えたものか「人間の自由を重んずる我虚無党」と加筆した。原文にはない虚無党を前面に出す。それ以外は原文どおりだ。

では景耀月はそこをどう漢訳したか（下線筆者。以下同じ）。

【景耀月】 「第一章 威嚴之政府（いかめしい政府）」

予述茲事。予深不願英吉利人之能讀吾書也。此輩尤以我珍重自由之虚無党人為一激烈強暴之同盟焉。10.3付（注：新聞の日付を示す）

言っておくと、私はイギリス人に私の本を読ませたくはない。あの人た

ちは私が自由を重んじる虚無党员であるのを激烈凶暴な同盟だと考えているからにほかならないからだ。

最初から奇妙な漢訳になっている。景耀月が「深不願（まったく願っていない）」と漢訳した根拠はどこにあるのか。松葉日訳の「望まねばならぬ」しか該当しない。必要不可欠の「ならぬ」だ。しかし景耀月はそれを否定だと勘違いしたらしい。前後の文脈からして、ぜひともイギリス人に読んでもらいたい、となるはずの文章だ。その程度の日本語理解かといっても景耀月にとっては小さな事だ。どうでもいいことだと気にしなかつただろう。そう感じる。

景耀月漢訳には加筆の傾向がある。

松葉日訳では次のように述べる個所だ。「人間の生命が吾々の目的の為に、屢ば犠牲にされるとは云ひ條、噫！それは吾々の目的ではない、吾々は切に平和を望むのだ」（3頁）

平和を望む虚無党はロシア専制政府関係者を犠牲にするのはしかたがないという説明だ。下線の後半分について景耀月は加筆して次のとおり。そこが問題である。

【景耀月】世之君子。當知人類中之切望平和。嗜安樂者。蓋莫吾党若也。
假使吾党得生於英吉利美利堅法蘭西者。予真為善良之民矣。 10.3付

世の君子諸君は知るべきだ。人類のうちで平和を切望し穏やかな生活を好むものは我が党よりほかにはないのである。もし我が党がイギリス、アメリカ、フランスに生まれていれば私は本当に善良な人民になっていただろう。

平和を切望する個所を拡大してイギリスなどを追加した。主人公が語る目的はロシア専制政府の極悪非道暴虐圧制を告発することだ。ロシアだからこそ成立した虚無党にほかならない。それを諸外国ならば、などと仮説を加筆する必要はなかった。加筆することによって景耀月の認識が疑われかねない。

主人公が幼少時、上流社会のような生活を送っていたのはサンクトペテルブル

ク St. Petersburg のリテナイア Liteinaia という地区だ。松葉は笠亭内（りつていない）と音訳した（4頁）。景耀月はそれに笠台里（10.4付）という漢字を当てた。彼は「内」が音訳表記だとは考えなかった。「内」は日本語の「うち」という意味に取り、漢訳して「里」にしてしまったとわかる。小さな個所に景耀月の日本語理解の程度が表出している。

木曜日の晩に主人公が妹と一緒に玄関の上り段のところに立っていると大勢の富裕階級の人々が訪問して来るのを見かけた。該当箇所松葉日訳と景耀月漢訳を示す。

【松葉】木曜日の晩に玄関の上り段の處に立て居ると、4-5頁

【景耀月】尤憶某木曜日之夕。落日過鄰園之樹。暮霞流艷。直射予院落之牆際及尾頂。長空俱入晚燒。天地一紫。時小鳥亦啁啾爭樹。予籬間之槐柳。幾成戰爭奮鬪之場矣。10.4付

とくに思い出すのはある木曜日の夕方のことだ。夕日は隣りの庭の樹木を通過し、夕霞は美しく、庭の壁と屋根にそそぎ、大空は夕焼けで天地は全体が紫色だった。小鳥は争うようにさえぎり、生垣の槐柳はほとんど戦場のようになった。

上流社会だから毎週開催される宴会について言っている。景耀月はある木曜日だけにしてしまった。どうしても情景描写をつけ加えたくなるらしい。もともと松葉日訳にはない。

来客を眺めている兄妹の服装について原作も松葉日訳も描写はしていない。だが景耀月はここでも詳細に書いている。主人公は薄青の礼服に肩飾り、妹は父親がパリから取り寄せた衣裳を着た。幸福な幼時の記憶を追加記述する。

好意的に考えれば、加筆によってその後一家を襲う悲劇を際立たせる考えだったといえないこともない。景耀月にはそうすることが必要だった。しかしそれでは漢訳の域を超えてしまう。翻訳ではなく翻案に近くなるという意味だ。

続く10月5日付においても主人公である兄が妹と過ごした往事が回顧される。皇帝が虚無党127人を逮捕しシベリアへ送った時、妹はそれを目撃した様子を記

述する。

「虚無党127人」に近い表記は松葉日訳「二 シベリアの雪」にある。主人公を含めて「老若男女合せて百有余人」がシベリア送りになった（40頁）。近いだけで一致するわけではない。ここは景耀月の創作であると考える。

主人公が家を離れて兵学校に入ることになった。ル・キュー原作はあっさりと言記述する。松葉もそのままだ。

【松葉】 其中私は修業の為に家から離れなければならない時が来て、親愛なる両親や妹に別を告げて、檻褸管（ぼろくだ/Vologda）の兵学校へ入ることゝなつた。5頁

ここに該当する景耀月漢訳を示す。

【景耀月】 転瞬已達就学之年。彼時不識吾父之志。何以必令予就陸軍学校。10.6付

瞬く間に就学の年になった。その時自分の父親が自分をどうして陸軍学校に行かせる必要があったのか父親の考えを知らなかった。

兵学校に行くというだけの日訳に父親の思惑を意味ありげに追加した。あとは両親が息子の出立のためにこまごまと準備する様子を述べる。住み慣れた家から出立する前に長々と惜別の気持ちを書き込む。涙にくれる両親妹との別れだった。果ては「私はこの時、この世界がはやく滅びてしまうように激しく望んだ（吾此時甚欲此世界速至末日）」とまで考えるという有様だ。よくもここまでふくらましたと思えるほどの景耀月による創作である。

つづく10月7日付でも父子の別れ場面が停車場において継続する。兵学校へは汽車に乗って行くのかと景耀月の加筆によって読者は知ることになる。もともと松葉日訳には存在しない。

家族愛の物語が展開されている。ゆえに主人公がなぜ虚無党員になったのかを説明するに至らない。

檻樓管（ぼろくだ／ト羅科達）の兵学校は首野鯉（くびのすこひ／科比璠斯奎）湖畔にある。松葉日訳は学校生活はごくあっさり書いている。

【松葉】私は朝から晩まで演習を事として居る此千篇一律の生活をば、じつと辛抱して送つて居たのだ。5-6頁

それが景耀月の手にかかると大きく変化する。科比璠斯奎（くびのすこひ）湖畔の気候からサンクトペテルブルクでは見かけなかった人々のこと、または1812年のナポレオンによるロシア侵攻（1812年戦争）、またボロジノ（保羅箕璠）の戦いを書き込む（10.10付）。この回の景耀月漢訳も日訳には存在しない。

主人公の父親がシベリア送りになったことを知る場面はいつ出てくるのか。松葉日訳にない景耀月独自の描写を読んでいてこの疑問が生まれてくる。

10月22日付になって上記の日訳に該当する部分が出てきた。

【景耀月】予在学校惟朝暮演習。此外絶無寸毫珍異之事。足娛予心。予性質流動。不耐持久。此千篇一律之生活。10.22付

私は学校で朝から晩まで演習だけでそれ以外に自分の心を楽ませる珍しい事は絶無だった。私は移り気だったからこの千篇一律の生活には耐えきれなかった。

日訳の「じつと辛抱して送つて居た」と漢訳の「不耐持久（耐えきれなかった）」では反対だ。それを除けば松葉日訳をほぼ漢訳しているといえる。主人公が家族からの手紙をいかに待望していたかを膨らませて詳細に語る。この日の回はそれだけ。なかなか事件に到達しない。

家書が届かなくなり心配が高まる。家族についての悪夢を見るようになった。電報を打とうと電信局に行ったが朝の5時だったから8時まで外で待った（細かい時間は景耀月が加筆したもの）。この10月24日付でも日訳にある家書をめぐって独自に大幅な加筆を行なう。そうしてこの回の最後によく松葉日訳を直訳した箇所が出現する（固有名詞の翻訳は松葉日訳を使用する）。

【松葉】或朝学友が故山から自分へ送つて呉れたノウオエ、ウレミヤ新聞を見て居たが、或項を指して其新聞を私に手渡した。／「君、これは君の親戚ぢやないか」。6頁

【景耀月】忽一朝晨起。学友朴克寧者冒冒然入。持予郷聖彼徳堡璫威烏奈麦新聞紙。授之予手。指其上曰。瓦徳彌爾。此中所載。非君之父乎。10.24付

ある朝起きると学友のパクニンがそそくさとやって来て私の故郷セントペテルブルクの『ノウオエ・ウレミヤ新聞』を手渡し指さして言った。「ウラデミル、ここに書いてあるのは君の父親じゃないか」

『ノウオエ、ウレミヤ (*Novoë Vremya*)』とはサンクトペテルブルクで発行(1868-1917)された新聞を指す。学友の名前はない。それを朴克寧と名付ける必要があるのか疑問だ。なにかしらつけ加えたくなる漢訳者らしい。

新聞に報道された内容を見る。

【松葉】『前週其筋の手によつて捕縛されたる、聖彼得斯堡笠亭内の猶太人、愛作、信露好は遂に囚人として西比利亜(さいべりあ)に護送せられたり』。7頁

【景耀月】依前月次第。警兵所逮捕聖彼得堡笠台里猶太人亜札璫宝斯克一名。決判囚流鮮卑利亜。本日遣兵役護送遂至出発。1.29付

先月の状況によれば、警察が逮捕したセントペテルブルクはリツテイナイのユダヤ人アイザック・ノブロスキー1名は、囚人としてサイベリア流刑が決まり本日護送された。

直訳とっていい。景耀月は直訳をすることができる。ゆえに日記をはずして漢訳する部分を増やすのは彼独自の方針だとわかる。加筆するのだ。関連する次の個所をみてほしい。

【松葉】私は指示された所を熱心に見ると、殆ど私の胸は裂けんとした。そして新聞は私の吐息の下に手から落ちた。6-7頁

【景耀月】予急欲視。而眼転昏花。不辨字画。予力疾省認。急于読竟其事。殆甫啓口未至悉其詳。予手自失能力。紙遂墮地。予亟眩暈而仆。少蘇則予斜倚空几。二三学友伴予左右。1.29付

私は見ようとしたが目がかすみ字が判別できない。私は無理やり読もうとしたが焦ってしまいほとんど口を開けたままでその詳しいことがよくわからない。私の手から力が抜けて新聞は地面に落ちた。急に眩暈がして倒れた。しばらくして気がつくと空いた椅子にもたれかかっており2、3の学友が私の傍にいた。

松葉日記において主人公は新聞の詳細を読んでいる。その衝撃で新聞を取り落としてしまったのだ。それを景耀月は新聞の内容が判読できないかのように書き換えている。しかも失神するまでに強調する。やはり書き過ぎだと考える。

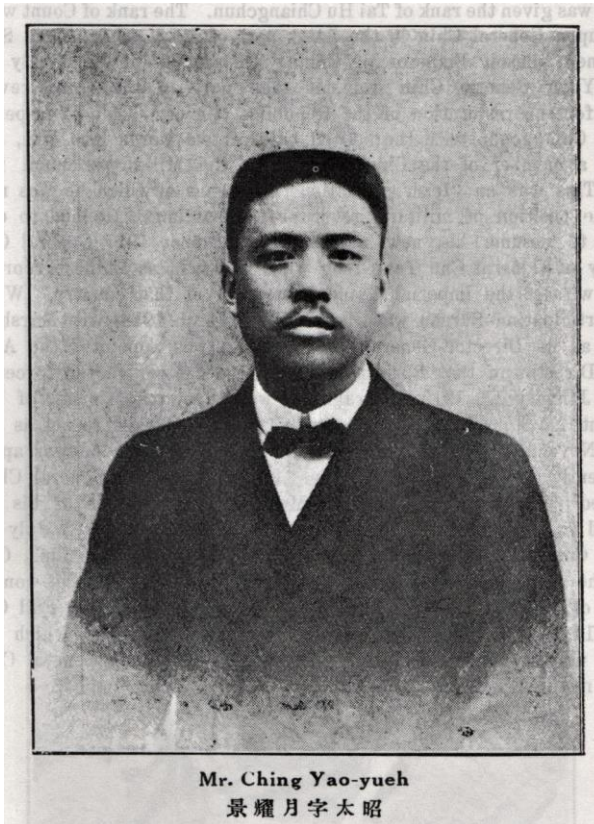
景耀月漢訳は底本を松葉日記にしているのは間違いない。しかし加筆の度が過ぎる。これでは翻案という方が適切だ。

もうひとつ。以上の漢訳を読んでやや意外な気がしないでもない。景耀月はその経歴からして反清朝政府の立場だ。ゆえに松葉日記によって提供された物語の枠組みを利用し、反ロシア専制政府（＝反清朝政府）の姿勢を強調した論陣を張るのではないかと予期した。しかし加筆してその内容が抒情に流れている。どこにも反清朝政府につながる要素がないのだった。

もっともその後の箇所では反清朝政府をあおる漢訳が出現する予定だったのかもしれない。中断したからただの好意的な想像に終わってしまう。『民吁日報』は同年11月19日には停刊となる。短命だったからどのみち松葉日記の長篇を漢訳して完結できるはずもなかった。

景耀月について

景耀月（1884-1944）の略歴については橋川時雄『中国文化界人物総鑑』（1940／1982）*2から引用してそのおおよそを見ておく。



『WHO'S WHO IN CHINA 中国名人録』第2巻

景耀月 1884-X 字は太昭、山西芮城の人。光緒二十九年癸卯科の举人、日本に留学して日本大学の法学士、かつて中華民国臨時政府各省代表会議を組織しその主席となり、南京参議院議員、臨時教育次長兼代教育総長、大總統府高等政治顧問、衆議院議員、經濟調査局参議、上海中国公学教授、南京两江法政大学校長、北京大学法学院講師、俄文法政大学講師、内政部警官高等学校教授、東北大学教授に歴任した。また国立北平大学法学士講師を兼任、民国二十五年には同大学工学院中国文講師であつた。589頁

この略歴を見れば政治家、教育家として著名だとわかる。日本大学の法学士だから日本語を理解した。松葉日記『虚無党奇談』を漢訳したのは不思議ではない。また『民立報』『民吁日報』の主筆を務めたことがある*3。

景耀月が『民吁日報』創刊号から翻訳を掲載したのも自然な経緯だ。

最後にふたつのことに触れる。

景耀月は小説を書いている。召「(畸零小説) 貴公子」(『民吁日報』1909.10.25)である。

松葉日訳はまた別の漢訳を生んだ。樽目録より抜粋する。

W0209*

亡国涙 (政治小説) 5続

猶太韋力庵原著 恨海重訳

新加坡『中興日報』光緒34.7.12-9.7 (1908.8.8-10.1)

WILLIAM TUFNELL LE QUEUX“STRANGE TALES OF A NIHILIST”1892

[編年④1572]原名「虚無党奇談」、光緒三十四年七月十二日(1908.8.8)至九月初七日、未完。連載時一名「俄国之革命党」[大康18-579]同左。起訖時間不詳、原名不記

[編年④1608]光緒三十四年九月初七日(1908.10.1) 未完

[仁敏14-780][仁敏14-781]未完

[美高13-53]政治小説、猶太^{ツツ}掌力庵原著、1908.8.10のみ、原名「虚無党奇談」[清民報1129]「俄国之革命党」、1908.8.6至1908.10.1、期中自1908.8.8始改為「亡国涙」、包含一「秘密結社の原因」、二「西比利亞之雪」

新加坡『中興日報』は残念ながら見ていない。記録するにとどめる。

【注】

1) 以下を参照。

詹 宜穎「虚無党小説の跨境旅行——關於 *Strange Tales of a Nihilist* 英、日、中三個版本的考察」『東亜觀念史集刊』第13期 2017.12 電字版

梁 艷「“佚失”的《(虚無党小説) 俄国皇帝》下篇——陳景韓轉訳 *Strange Tales of a Nihilist* 發表始末」『清末小説から』第145号 2022.4.1

神田一三「陳景韓漢訳ル・キュー「虚無党奇話」——松居松葉『虚無党奇談』」『清末小説から』第147号 2022.10.1

2) 橋川時雄『中国文化界人物総鑑』北京・中華法令編印館1940.10.25初版／名著普及会復刻1982.3.20

3) 景耀月関係の文献をいくつか挙げる。

○佐藤三郎『民國之精華』第1輯 北京写真通信社1916.12.20／台湾影印本1967.3。また国立国会図書館デジタルコレクション収蔵。

光緒三十年、山西大学堂より選派されて日本に留学す。同盟会に入り、全部の留学生間に中国財政研究会の組織あるや、其の正会長に挙る。自ら国報雑誌を発刊して革命を鼓吹す。宣統二年日本大学法科を卒業して帰国す。296頁

○『WHO'S WHO IN CHINA 中国名人録』第2巻 1925年（龍溪書舎1973影印本）
刊登的景耀月照片あり

1910東京帝国大学でLL.B.（法学士）を取得（202頁）。ここは橋川のいう日本大学法学士と異なる。

○曾虚白主編『中国新聞史』台湾・国立政治大学新聞研究所1966.4初版未見／1977.3四版

1910年10.11、上海で創刊された革命派の新聞『民立報』がある。主筆として宋教仁のほか景耀月（帝召）、馬君武、葉楚傖、談善吾（老談）などが揚げられる。272頁

○史和、姚福申、葉翠娣編『中国近代報刊名録』福州・福建人民出版社1991.2

『民吁日報』は上海で創刊。1909年10月3日-11月19日という短命に終わる（139頁）。于右任が編集長で景耀月が主筆だった。

林訳『俄宮秘史』の原作・補記

『清末小説から』第144号（2022.1.1）に掲載。沢本郁馬名を使用。林訳『俄宮秘史』の原作は馬泰来がすでに指摘している。著者はイリギスのル・キュー、書名は『ロシア前皇后の秘密生活』である。ル・キューがなぜ魁特と表記されるのか、彼の国籍、付建舟の誤記などについて備忘録的に記す。

林訳『俄宮秘史』の原作

林訳『俄宮秘史』の原作はすでに明らかにされている。

馬泰来「林紓翻訳作品原著補考」（『清末小説』第16号 1993.12.1）には次のように書いてある。

137. ≪俄宮秘史≫（The Secret Life of the Ex-Tsaritza. 1918）

英国魁特（William Le Queux, 1864-1927）原著，陳家麟同訳。上海・商務印書館，民国十年（1921）五月。（林訳原誤魁氏為法人。）117頁

著者はイリギスのル・キュー、書名は『ロシア前皇后の秘密生活』という。

不明であった原作を特定したのがよい。また林訳がル・キューを誤ってフランス人としたと指摘している。だから冒頭でイギリスと明記した。馬泰来の記述が正しい。

以上をふまえて以下は私の備忘録的補足である。

商 務 印 書 館 發 行

此書著者於十五年前奉派至俄留學時正值李
文忠專使至俄與俄國訂立密約之日故於當時
外交情形洞如觀火重以居俄既久
故於俄國皇族及民黨之互相水火

俄 羅 斯 宮 闈 秘 史

全 二 冊
三 定 二 全
角 價 冊 書

雙方之勢力消長如數家珍中間連及謁見
大文筆託爾斯泰一段議論警闐尤為全書
特色今俄國已四分五裂欲知
其來由此書不可不讀也

元 335)

中華 民 國 十 年 五 月 初 版
(俄 宮 秘 史 二 冊)
(每 部 定 價 大 洋 伍 角
(外 埠 附 加 運 費 匯 費))

原 著 者 法 國 魁 特
譯 述 者 靜 海 縣 林 家 綸
發 行 者 商 務 印 書 館
印 刷 所 上 海 北 南 路 北 省 寶 山 路
發 行 所 商 務 印 書 館
分 售 處

北 京 天 津 濟 南 煙 台 青 島 石 家 莊 鄭 州 開 封 安 陽 洛 陽 西 安 蘭 州 西 寧 銀 川 蘭 州 西 寧 銀 川
北 平 濟 南 煙 台 青 島 石 家 莊 鄭 州 開 封 安 陽 洛 陽 西 安 蘭 州 西 寧 銀 川
濟 南 煙 台 青 島 石 家 莊 鄭 州 開 封 安 陽 洛 陽 西 安 蘭 州 西 寧 銀 川
蘭 州 西 寧 銀 川 蘭 州 西 寧 銀 川

★此書有著作權翻印必究★

三四五六號

說 部 叢 書 第 四 集 第 一 編

俄 宮 秘 史

上 卷



商 務 印 書 館 發 行

林訳表紙奥付



原作扉（架蔵）

魁特の理由

まず簡単なところから説明する。ル・キューが林訳では魁特と表記される理由だ。特別な漢字のならばであって林訳以外には見かけない。

人名について多様な漢訳表記があふれている。当時の翻訳界にありがちなことだろう。

WILLIAM TUFNELL LE QUEUX を漢訳すれば以下のように出てきた。似たようなものに私が分類する。

葛威廉、葛維廉、
惠霖勞克、慧霖勞克、
威廉辣苟、威廉勒苟、威廉盧鳩、威林樂幹、維廉鳩、維廉勒鳩氏、維廉勒格、
維廉勒苟、維廉勒鳩、維廉勒蒯、威維立克、
惠廉奎克士、惠廉奎克士、威連勒格克司、威廉規克斯、威連勒格克司、
衛梨雅、勒克維廉、圭克士、威廉喬利亞斯

これほどまでに多様だ。多くの作品が別々の訳者によって漢訳された証拠でもある。以上の表記は基本的にウィリアムとル・キューの組み合わせであることが一目瞭然だろう。

ウィリアムはとりあえずおいておく。ル (LE) に辣、勒、盧、樂などを当てる。発音が近い。キュー (QUEUX) が葛、苟、勾、鳩、幹、格、蒯などになるのは理解の範囲内だ。ただし奎克士、格克司、規克斯などは英文綴りのままに読んだらしい。喬利亞スの前に威廉がついている。ならばル・キューが喬利亞スに相当するだろう。だが音読すると別物に聞こえる。どうしてそうなるのか不明である。

林訳のばあいは QUEUX を「魁」にした。「特」は WILLIAM TUFNELL LE QUEUX の タフネル (TUFNELL) を漢訳したもの。カタカナで示せばキュー・タフネルの順になる。魁特とした理由だ。

タフネルを漢訳したのは上の翻訳群には見ることができない。しかも林紓が陳家麟と共訳したル・キュー作品はこの『俄宮秘史』1作だけだ。

原作者の国籍

林訳に表示された原作者の国籍が違っているものがある。細かいことだ。国籍はわざわざ書かなくてもいいようなものだが当時の習慣では表示していた。間違いも生じるだろう。

林訳に見える間違っただけの例を示す。簡易表記をして「ママ」と示したのが実物だ。矢印で正しいものと原作者名を参考までに掲げておく。気にする研究者もいるから念のためだ。

(英^マ) 鎖司倭司女士著→アメリカ Emma Dorothy Eliza Nevitte Southworth
(1819-99)

(法^マ) 男爵夫人阿克西著→イギリス Baroness Emma Magdolna Rozália
Mária Jozefa Borbála “Emmuska” Orczy de Orci (1865-1947)

(法^マ) 亜波倭得著→イギリス George Allen Upward (1863-1926)

(徳^マ) 伊ト森著→ノルウェー Henrik Johan Ibsen (1828-1906)

(英^マ) 亜丁編輯→アメリカ William Livingston Alden (1837-1908)

林訳がイブセンをなぜドイツ人にしたのか理由はわからない。林訳以前に那威、挪威、瑠威と表示するものが刊行されている。それは参考にしなかったらしい。底本にしたのがデル (Draycot M. Dell) の小説化英語本だ。イブセンは間接的なものだから意識されなかったものか。ここをつかまれて林紓はイブセンの国籍すら間違っただけだと攻撃されることになった。よく知られている事実のひとつだ。

どのみち共訳者の毛文鍾が責任を負うべきだろう。林紓は外国語を理解しなかったから原作者の国籍については共訳者の意見を受け入れたはずだ。

馬泰来の探究と樽目録の対応

ル・キューの国籍については以上のようにすでに解決している。馬泰来の前出論文に指摘があるとおりだ。

俄宮秘史卷上

法國魁特轉譯德文

閩縣林紓同譯
靜海陳家麟

小引

此卷爲斐多路納之秘史。斐多路納者。俄皇后也。今流配於西伯利亞矣。此秘史誰爲紀之。紀之者。丹考夫伯爵夫人也。丹考夫與王后爲友。自其盛時。直至於流配之際。始行判權。余爲魁克。其識夫人。則路沙爲余介紹。路沙爲沙克森內親王世子之夫人。余見之於最司登宮中。宮爲郡王所居者。丹考夫之門地甚高。少時與王后同學。后父爲公爵。丹考夫之父。爲公爵舍人。公爵名魯意大公也。姓黑司。丹考夫既侍大公。則恆與右族往來。王后未嫁時。嘗

俄宮秘史 卷上

四〇一

俄宮秘史 卷上

二

四〇二

亞梨司。及一千八百九十四年。后入宮。偶俄皇尼耶拉司。丹考夫選爲女官。居宮中久。歐戰前三年。丹考夫契伯爵包雷司。頗有情愛。而王后心弗善也。時宮中尙有女官。名魯薄娃。心妬丹考夫。冀其爲后所不憚。則丹考夫出宮。已專其寵矣。既而丹考夫嫁伯爵魯薄娃。日加浸潤。而丹考夫遂擯出禁。丹考夫既放。遂及其夫至倫敦。居一年。頗有聲於友邦。已而伯爵以疾卒於英之肯申登。僑寓中伯爵既逝。王后復招歸森彼得堡。再侍東朝。至於俄國革命後。王及后皆見囚。流配於西伯利亞。於是丹考夫始別王后。凡以下所敘述。均出諸丹考夫之口。語皆切實。至有令人驚怖不已者。蓋俄宮之黑幕。爲丹考夫揭而示諸人間。其中種種。皆通德之陰謀也。丹考夫草稿爲德文。或意大利文。余則譯以英文。語語皆

林訳『俄宮秘史』には「法国魁特轉譯德文」と記述する（後述）。

くり返すがそれについて馬泰来は「林訳ではル・キューをフランス人だと誤る（林訳原誤魁氏爲法人）」と念をいれて書いているのだ。さらに説明して次のとおり。「ル・キューは実はイギリス人である。作品は清末民初において漢訳は少なくない。作者の訳名はけっして統一されているわけではなく……（中略：名前漢訳の例を複数あげる）……、しかしフランス人と誤るものはない。陳家麟の無学であることの一例である（按魁特實爲英人，作品清末民初漢訳不少，作者訳名並不統一，……，但未有誤爲法人者。陳家麟之不学，此又一例）」（馬泰来「林紓翻譯作品原著補考」『清末小説』第16号 1993.12.1. 117頁）

馬泰来がわざわざそう説明したのは理由がある。彼は過去においてル・キューをフランス人にしてきたからだ（後述するが付建舟が知っているのは以前の段階まで。後の訂正を見ていない）。

馬泰来「林紓翻譯作品全目」（錢鍾書等著『林紓的翻譯』北京・商務印書館1981.11）

である。林訳が「法国」と書いているのをそのまま受け入れた。

というわけで該訳作をフランス作品に分類しユゴーの前に配置した〔泰来137〕。魁特のままに示し原作者名ル・キューも原作についても不記だ。ただ「疑據英訳本重訳」とのみ説明している。

以上の説明から1981年時点でル・キューについて馬泰来ははっきりとは把握していなかったということが推測できる。

12年後の1993年に「補考」を書いて前出のとおりル・キューをイギリス人に訂正しその原作を特定し公表したという流れである。

『清末民初小説目録』では最新研究成果を収録するように努めている。馬泰来による原作特定は樽目録第3版（2002 中国）にも記載している。ただしそれだけでは不十分だと考えた。ゆえに樽目録第6版（2014 電字版 ウェブ公開 非売品）よりル・キューをフランス人とするのは誤りだと馬泰来を引用して明記することにした。ウェブ公開だから見ている人は利用しているだろう。見ていないばあい私の方からはなにもできない。

付建舟の記述

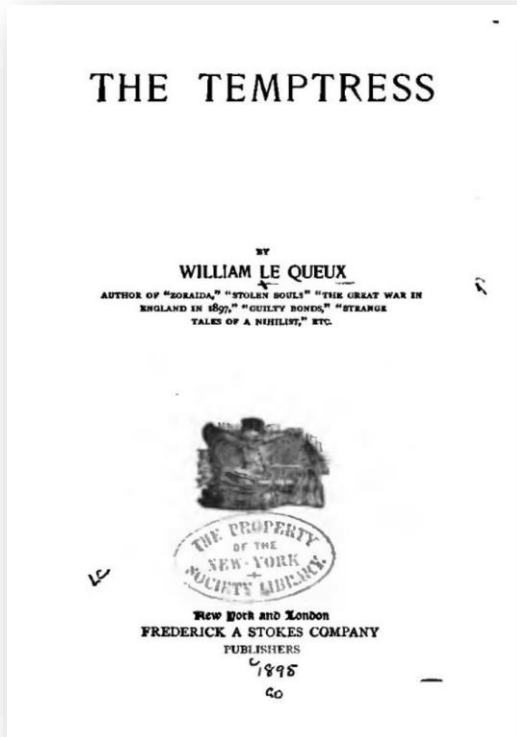
ル・キューについて当時の漢訳ではイギリス人とするのが圧倒的に多い。ただし一部にフランス、ロシア（1例のみ）の表示があることはある。

その少ないフランス表記3種類のひとつが次の作品だ。

（法）威廉規克斯著、商務印書館訳『（言情小説）美人磁』商務印書館 光緒34（1908）

いままで原作は不明であった。いい機会だから明らかにする。原作は WILLIAM LE QUEUX “THE TEMPTRESS”（1895）である（project gutenberg 所収）。

該漢訳には新訳（1908）、小本小説（1915）、説部叢書（1915）の3種類が刊行された。ここでは付建舟の著作から説明を紹介したい。といっても付建舟の著作は多い。ル・キュー原作に言及している以下の3種類を見る。



付建舟『清末民初小説版本経眼録二集』杭州・浙江工商大学出版社2013.1。

略号は [付二]

付建舟『清末民初小説版本経眼録・俄国小説卷』北京・中国致公出版社

2015.1。略号は [付俄]

付建舟『商務印書館〈説部叢書〉叙録』北京・中国社会科学出版社2019.8。

『叙録』と称する。略号は [付説]

並べると彼の知識の蓄積状況がわかるかもしれない。

[付二27] 写真あり。表紙は「社会小説／新訳／美人磁／商務印書館」、
奥付は原著者：法国威廉規克斯、編訳者：商務印書館編訳所、総発行所：上
海・商務印書館、光緒三十四年七月初版」、36回162頁1冊

写真を掲載しているのがよい。ただし上の時点では「法国威廉規克斯著述」と説明しているだけだ。原作者についての知識はなかったらしい。馬泰来が『俄宮秘史』に関してル・キューを指摘したのは1993年のことだった。しかし付建舟は上記著作の2013年時点で馬泰来論文があることに気づいていない。日本の『清末小説』に掲載された論文だから読んでいないのだろう。情報の伝達に時間差が生じるのはしかたのないことだ。

次の著作〔付説326〕において同じ写真を掲げながら説明に変化をつけた。原作者の英文綴りを明記している。

〔付説326〕原作者威廉規克斯是法国作家 William Le Queux (1864-1927) , 参見《重臣傾国記》。

原作者威廉規克斯について「フランスの作家 William Le Queux (1864-1927)」だとわざわざ明記する。ここが馬泰来説と異なる。というよりも以前の馬泰来にもどってしまった。しかも『重臣傾国記』を参照するように指示している。

そこで『重臣傾国記』の該当箇所を見る。

付建舟の誤指摘

付建舟の説明を直接引用するほうが理解が早い。

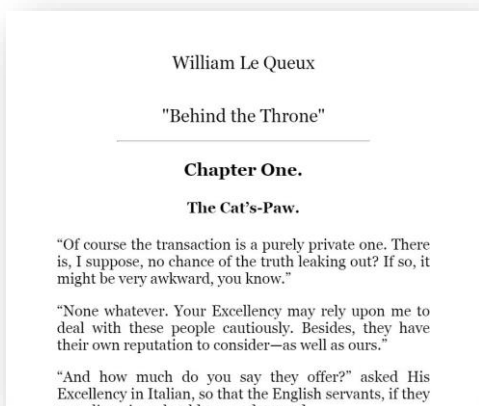
《樽氏目録》第4736頁記載，《重臣傾国記》(Her Majesty's Minister) , 原著者為 William Tufnell Le Queux (1864-1927) 。樽氏沿襲原著者属英国這一説法，但這一説法有誤，不是英国而是法国。他出生于英国倫敦，其父是法国人，其母是英国人。345-346頁

『樽氏目録』第4736頁の記載によると『重臣傾国記』(*Her Majesty's Minister*) は原著者は William Tufnell Le Queux (1864-1927) である。樽本氏は原著者がイギリス人であるという見方を踏襲するがこれは誤りでイギリスではなくフランスである。彼はイギリスのロンドンに生まれたがその父親はフランス人で母親はイギリス人だ。

上に見える『樽氏目録』というのは樽本編『清末民初小説目録』のひとつを指す。ただし第4736頁というのは不正確。第6版の第4734-4735頁に『重臣傾国記』3種類を収録する。

付建舟の説明には訂正すべき箇所が2カ所ある。

ひとつは『重臣傾国記』の原作だ。“Her Majesty's Minister”は間違い。正しくは“BEHIND THE THRONE (玉座の後ろ)” (1905)である。



付建舟によった樽目録第6版が誤っている。それには理由がある。『商務印書館図書目録 (1897-1949)』 (北京・商務印書館1981。97-98頁)だ。これにそう明記してあるのを樽目録が引用した。今回あらためて確認したが原作ではないことが判明した。底本は上記の作品であることをつきとめた。訂正する必要がある。

もうひとつ。付建舟がわざわざル・キューのことをフランス人とする箇所だ。父親がフランス人で母親がイギリス人ならば両系統の人であるということにすぎ

ない。父系を強調してフランス人とするのか。よくわからない理由だ。作家としてのル・キューを見れば多数の著作が英語で書かれている。ならばイギリスの作家というのが普通のとらえ方ではないか。

だいいち前述のとおり樽目録第6版よりル・キューをフランス人とするのは誤りだと馬泰来を引用して明記している。付建舟は同じ第6版の別箇所を指してもとのフランス人に引き戻したことになる。馬泰来に言及しないからすでに指摘があることを知らないらしい。

該漢訳の初出は(英)威連勒格克司著 趙尊嶽訳「重臣傾国記」(『東方雑誌』15巻6-16巻6号 1918.6.15-1919.6.15)である。



本文に表記して「英威連勒格克司原著」とあるのを見てほしい。またその「訳余剩語」のなかでは「ウィリアムは英国最近の作家であり健在だ(威連為英国邇来之文家。人猶健在)」と説明している。その漢訳者の説明までも否定してフランス人とするのは理解できない。

別の書物を参照しそれを示して樽目録第12版では次のように注記することに

した。「LE QUEUX は英国人とするのが常識。LE QUEUX, WILLIAM (TUFNELL). BRITISH. (TWENTIETH-CENTURY CRIME AND MYSTERY WRITERS. P.939)」

『俄宮秘史』——「法国魁特転訳徳文」について

ふたたび『俄宮秘史』にもどる。

林紓+陳家麟共訳『俄宮秘史』には「法国魁特転訳徳文」とあるとくり返す。前出付建舟の著作3種から関連部分を説明しながら紹介する。2013、2015、2019年と重ねているからその順序だ。

[付二295] 上下巻表紙奥付写真あり。奥付は原著者法国魁特、刊年部分は見えない。次のように説明する。「俄宮秘史」, 訳文為文言体, 署「法国魁特原著」有誤, 卷首題有「法国魁特転訳徳文」字様, 原稿為徳文或意大利文, 後由魁特訳為英文。「説部叢書」四集系列第四集第一編, 中華民國十年(1921)五月初版。([付115] も同じだから省略する)

ル・キューと原作についての説明はない。『美人磁』の箇所でも説明したのと同じである。馬泰来論文を知らなければそうならざるを得ないだろう。「署「法国魁特原著」有誤」については[付説]の箇所でも説明する。

『俄宮秘史』の内容がニコライ2世皇后(アレクサンドラ・フォードロヴナ)についてのものだ。それで付建舟は彼の経眼録シリーズ「ロシア小説巻」にも収録した。

該書には前言として置いた論文「清末民初俄国小説訳介路径綜考」がある。[付俄9]と[付俄11]はそのページ数を示す。本文の[付俄271]も上下巻表紙奥付写真を掲げてその説明は[付二295]と同じだ。

最近の[付説]で説明される『俄宮秘史』のル・キューは[付二295]を継承している。そう書かなければならない時点で暗雲が生じる。結局は本稿冒頭に紹介した馬泰来1993論文を付建舟が知らないことに起因する。同時に樽目録第6版の説明が付建舟の注目を引かなかったことでもある。

問題のひとつは「署「法国魁特原著」有誤」という説明だ。間違いだというの

だからフランス表示についてのものだと思うだろう。ところが付建舟の意図はそこにはない。『重臣傾国記』のところで触れた。〔付説326〕においてル・キューがフランス人であることを強調したのだ。一般にはイギリス人とするのとは異なる。

ル・キューのフランスはそのままにする。その根拠は訂正以前の馬泰来「林紓翻訳作品全目」と彭建華『現代中国的法国文学接受』（2008）だ。馬泰来1993論文が見えないからそうなる。

付建舟が間違いだとする対象は「原著」の方なのだった。簡単に述べればル・キュー原著ではないという付建舟の主張である。付建舟の文章を引用するが翻訳はしない。関連部分を取り出して説明する。

〔付説415-416〕可能因為《俄宮秘史》版權頁署“原著者法国魁特”的緣故。然而，他們均忽略了作品卷首“法国魁特轉訳徳文”的字樣，更忽略了卷首“小引”。出自法国魁特之手的“小引”說，此卷為斐多路納之秘史，“記之者，丹考夫伯爵夫人也。……凡以下所叙述，均出諸丹考夫之口，語皆切実……丹考夫草稿為徳文，或意大利文，余則訳以英文，語語皆肖，無復謬誤”。由此可見，《俄宮秘史》由俄国丹考夫所撰，由魁特英訳。林紓、陳家麟可能根拠英訳本漢訳。／俄国丹考夫与法国魁特生平事迹不詳，待考。

林訳が原著者をル・キューとするのは『俄宮秘史』の奥付にそう記してあるからだ。

それに対して付建舟が「原著」が間違っていると主張する根拠はふたつある。

ひとつは該漢訳書の本文に「フランス ル・キューがドイツ語より転訳（法国魁特轉訳徳文）」とあること。問題はドイツ語原文から転訳した箇所だというのだ。

さらに進めてもうひとつは漢訳「小引」である。

原作冒頭にある著者の説明「著者から読者へ TO THE READER / FROM WILLIAM LE QUEUX」が漢訳では「小引」となる。ここに該書の成り立ちについてル・キューの説明がある。

「(ニコライ2世皇后(アレクサンドラ・フョードロヴナ Alexandra Feodorovna 斐多路納)の私生活を)記録したのはザンコフ男爵夫人(Baroness Zéneide Tzankoff(旧姓 カメンスキー Kamensky) 丹考夫。林訳は伯爵夫人とする)である」。ザンコフ夫人の草稿はドイツ語あるいはイタリア語で書かれておりそれをル・キューが英語に翻訳した。

付建舟はそこを見て独自の考えを提出する。すなわち作品成立の経緯を考えれば原作者はル・キューではなくロシアのザンコフ夫人でなければならない。

付建舟の新提案を検討する前に少し説明する。

皇帝ニコライ2世といえば皇太子時代に日本滋賀県大津市を訪問中に警察官・津田三蔵により傷を負わされた大津事件が思い出される。だいぶ以前、大津市内で関係の遺品が展示されたことがある。そのなかのひとつに皇太子の出血をぬぐった白い布があった。端に大きく四角の欠けがある。旧ソ連に貸し出したとき切り取られたという説明があった。このたび関連の機関をネットで検索するとハンカチだという。切り取りについては言及がない。

原稿の作者ザンコフ夫人という人物についてル・キューは以下のように書いている。要点だけを取り出す。

カメンスキーは後のアレクサンドラ皇后と同級生であった。1894年にニコライ2世と結婚してからは皇后付の女官を長年勤めた。ボリス・ザンコフ男爵(Baron Boris Tzankoff 伯爵包雷(林訳はここでも伯爵とする))と結婚したのち別の女官と確執があつて宮廷を去る。ロンドンで外交生活を送っていたところ夫ザンコフ男爵が肺炎で死去した。それを知った皇后はザンコフ夫人をふたたび宮廷に呼び戻した。夫人は皇后がロシア革命でシベリアに流刑になるまでその元に仕えた。

ル・キューがそういうザンコフ夫人となぜ知り合ったかというところザクセン王太子妃ルイーゼ(Louisa, the ex-Crown Princess of Saxony / Archduchess Louise of Austria のこと。路沙)の紹介があったからだという。

ル・キューの「序」には実在の人物が出てくる。そうするとザンコフ夫人も実在したのだろう。

一応調べはした。たとえばネットで見た『ロシア宮廷回想録 RUSSIAN

COURT MEMOIRS 1914-1916』(1917)には似たような人物が出てくる。

元ブルガリア内務大臣の息子ルツカノフ・ザンコフ (Lutzkanoff-Tzankoff) 大尉である。彼は元農務大臣謙国務長官の娘で宮廷女官であるマリー・アーモロフ (Marie Ermoloff) と結婚した。だがこの女性はル・キュー本に説明のある旧姓 Kamensky とは名前が一致しない。これでは人物の特定ができないのと同じことだ。

そのザンコフ夫人が残した草稿がドイツ語あるいはイタリア語であったという。ル・キューがそれを英語に翻訳した (The Baroness's manuscript is mostly in German or Italian, but in translation and editing I have endeavoured to adhere strictly to her meaning.)。

付建舟もこの部分を紹介している。ロシア宮廷の女官がドイツ語とイタリア語で草稿を残すだろうか。違和感があるのは事実にしても否定する資料もない。そのまま信じるしかないだろう。

そこで付建舟の提出した問題だ。『俄宮秘史』の原著者はル・キューではなくザンコフ夫人でなくてはならないという。はたしてそうか。

私の考えを述べる。ザンコフ夫人は資料を提供したにすぎない。それもドイツ語とイタリア語の資料だ。それが書物のかたちになるためにはル・キューの英訳と編集がなされなくてはならなかった。ル・キューを抜きにしては成立しない書籍ならばその著者はル・キューをおいてはいない。

それでは不十分だというのであれば「ザンコフ夫人資料提供、ル・キュー著」と表示することを提案する。

母我漢訳プーシキン「棺材匠」

—アリンスン英訳

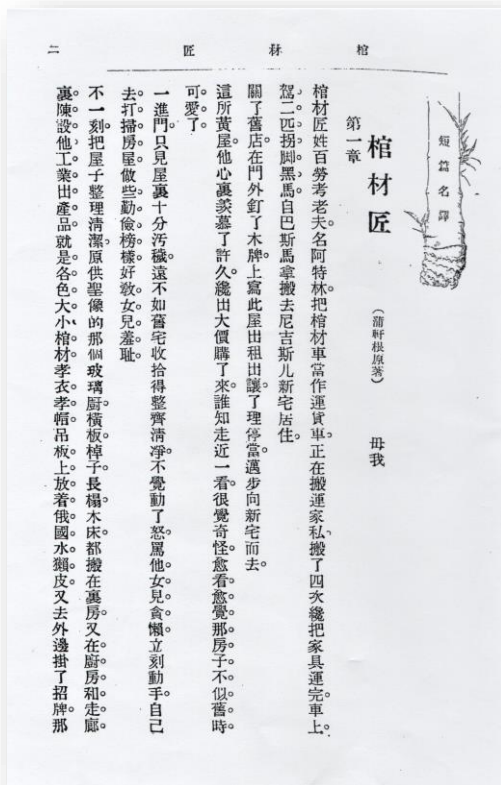
『清末小説から』第143号（2021.10.1）に掲載。蒲軒根原著、母我訳「（短篇名訳）棺材匠」の原作は表示のとおりプーシキンだ。漢訳プーシキンの短篇といっても底本が同一本であるとは限らない。陳景韓が「俄帝彼得」で使用したのは日本語本だ。陳景韓+母我「神槍手」のばあいはアリンスン英訳本だった。本稿で紹介するのは母我が単独で漢訳した「棺材匠」である。この底本も ALFRED (RICHARD) ALLINSON 英訳 “CROP-EARED JACQUOT AND OTHER STORIES” に収録されている。すなわち STORIES FROM POUCHKIN の “THE COFFIN-MAKER” だ。

雑誌初出

母我漢訳プーシキン「棺材匠」は日本語になおせば「葬儀屋」だ。原作についてはすでに渡辺浩司の指摘がある。それを含めて雑誌初出は以下のとおり。なお母我は陳无我（无我）だと筆者は考える。

蒲軒根原著、母我訳「（短篇名訳）棺材匠」『小説時報』第17期 1912.12.1
PUSHKIN著（渡辺浩司）Александр Сергеевич Пушкин (Aleksandr Sergeevich Pushkin) “Повести покойного Ивана Петровича Белкина (Povesti pokojnogo Ivana Petrovicha Belkina)” 1831中の “Гробовщик (Grobovschik)”

本稿の目的は漢訳の底本を指摘することだ。明らかにされている原作は大いに役立つ。参考にするのはいうまでもない。



母我「棺材匠」

鍵語はアリンスン英訳

母我は陳景韓と共訳で作品2件を発表している。これを見れば底本まで最短の時間で到達する。

1 大デュマ作、アリンスン英訳、母我、冷血（陳景韓）訳「賽雪児」22回
『小説時報』11-13期 1911.7.30-10.6

ALEXANDRE DUMAS père 著、ALFRED RICHARD ALLINSON 英訳 “CÉCILE; OR, THE WEDDING GOWN” LONDON: METHUEN, ND (C 1910'S?)

2 プーシキン作、アリンスン英訳、母我、冷（陳景韓）訳「神槍手」
『小説時報』第13期1911.10.6

ALEXANDRE DUMAS père 著、ALFRED (RICHARD) ALLINSON 英訳
“CROP-EARED JACQUOT AND OTHER STORIES” LONDON: METHUEN & CO. (1905) 収録の STORIES FROM POUSSKIN に “A FINE SHOT”

がある。

両作品ともに同じ雑誌、それも同時期に掲載された。

ここで重要なのは母我がたずさわった作品がアリンスン英訳だという点だ。母我が英訳を担当し陳景韓は修辞上の修正を加えたと考えられる。

漢訳プーシキン「棺材匠」は同じく母我の手になる。しかも『小説時報』掲載である。辛亥革命の時代だから掲載時期に少し間があいたらしい。以前は共訳者だった陳景韓が外れて母我の単独漢訳になった。訳者が母我のみだから日本語翻訳は考慮の対象から外れる。母我漢訳が使用した日本語底本は見当たらないからだ。

母我漢訳の底本はアリンスン英訳

母我漢訳で掲載誌が『小説時報』、しかも英訳者のアリンスンといえばプーシキン作品は限られる。すでに「神槍手」で紹介した。

くり返すが上記 ALFRED (RICHARD) ALLINSON 英訳 “CROP-EARED JACQUOT AND OTHER STORIES” に収録された STORIES FROM POUCHKIN に以下の3作がある。“THE SONWSTORM”、“A FINE SHOT”、“THE COFFIN-MAKER”である。

“THE COFFIN-MAKER”とは葬儀屋の意味だ。これが母我漢訳「棺材匠」になったと思われる。以下で検証する。

ひとつは主人公の名前だ。Адриан Прохоров は神西訳*1ではアドリアン・プロホロフとなっている。比較する英訳はアリンスン以外では前稿と同じく3種類を使用する。注にまとめた*2。

底本の固有名詞が漢訳にそのまま反映されると考えていい。このばあいは姓の「プロホロフ」だ。

英訳3種類の該当箇所を見る。

【TELFER】 Adrian Próhoroff

【EDWARDS】 Adrian Prohoroff

【KEANE】 Adrian Prokhoroff

これらの英訳 Adrian は共通する。問題は姓の方だ。前2種はプローホロフとプロホロフである（参照：神西訳はプローホロフ）。【KEANE】 Prokhoroff は「kh」とするから「プロコロフ」に近い。

アリンスン英訳は Adrian Prokorof と表記してプロコロフである。微妙な個所だが英訳3種類とは表記が異なる。

母我漢訳はそれを「姓百勞考老夫。名阿特林」と発音した。当時の中国では姓名の順に置きなおすことが多い。Adrian が阿特林になるのはかまわない。また百勞考老夫は漢音でプロコロフである。アリンスン英訳のままだ。これが証拠のひとつ。

証拠のふたつ目は作中に出てくる看板だ。

葬儀屋が移転して新しい家屋に看板を出した。太ったキューピッドが松明を逆さに持った (a fat Cupid holding in his hand a torch reversed) 絵柄だという描写がある。

キューピッドは弓矢と松明を持って象徴とする。松明はそこでは愛情を表わす。それを逆さに持つということは愛情の消滅を意味する。そこから連想して生命の消失に適用した。葬儀屋の看板に使用するのはいかような意図であるらしい。ロシアではそれが普通の看板なのかどうかは知らない。

神西訳では『白木及び色塗り霊柩の販売並びに飾付け。賃貸及び古棺修繕の御需めにも応ず』（130頁）と訳される。棺桶の種類が示されている。白木と色塗りが基本だ。それぞれに飾りのありなしが選択できるというわけ。

しかも看板の説明は地の文に引き続き改行なしである。英訳3種類も同じく改行されない。改行を問題視するのはアリンスン英訳はそれをしているからだ。

参考のために看板の文句を英訳3種から引用する。

【TELFER】 Here are sold and ornamented plain and painted coffins; coffins also let out on hire, and old ones repaired.

【EDWARDS】 Here coffins are sold, covered, plain, or painted. They are

also let out on hire, and old ones are repaired.

【KEANE】 Plain and coloured coffins sold and lined here; coffins also let out on hire, and old ones repaired.

英訳上の2例は同じ理解だ。棺桶には基本的に飾りあり、白木、色塗りの3種類があるという。【KEANE】は白木と色塗りの2種類のみ。前出の神西訳を見れば白木と色塗りに2分しそれぞれに飾りありなしの選択肢があった。もとの合計4種類が3種か2種になっている。そこが異なる。あとの貸し出しと修繕を宣伝するのはほぼ同じだ。当時のロシアには棺桶を貸し出す習慣があったらしい。

ところがアリンスン英訳は以上とは違う訳になっている。まず看板の文句を改行する。

in his hand a torch reversed, together with the following inscription :—

COFFINS MADE HERE,
PLAIN OR COLOURED, WITH OR WITHOUT
ORNAMENTATION.
ON HIRE,
OR, IF REQUIRED,
OLD ONES REPAIRED AS GOOD AS NEW.

Having completed the general arrangement, Adrian's daughters withdrew to their own room. As for the hero of our story, having made a final inspection of his whole abode from attic to cellar, he sat down by the window and lighted the tea-urn.

棺 二

牌上畫一個愛神倒拖了火把傍邊幾行大字寫的是
本號承辦棺材白批黑漆有花無花各色俱全一概出售出賃修理舊材與新無異
布置既畢阿特杯一個女兒各自回房他自己上下前後照看了一遍點上茶爐坐在窗前休息
原來造棺掘墓這一種人物彼此却有密切關係若將此種人心理和他們執業對照起來本來可笑不
怪莎士比亞和史考德二位先生時常扮演造棺掘墓的人好引人發笑

これは英訳3種が地の文章に続けた組版とは同じではない。

COFFINS MADE HERE, / 棺桶あります
PLAIN OR COLOURED, WITH OR WITHOUT / 白木または色塗り、
ORNAMENTATION. / 飾りのありなし。
ON HIRE, / 貸し出し
OR, IF REQUIRED, / あるいはご要望により
OLD ONES REPAIRED AS GOOD AS NEW. / 古棺を新品同様に修繕いた
します。

アリンスン英訳では棺桶の基本は2種類で飾りのありなしを選択する。
母我漢訳を見れば看板の文句部分そのものが地の文から切り離されて1文を形
成している。細かい改行はないが独立しているのが共通する。

本号承辦棺材。白批[皮]黒漆。有花無花。各色俱全。一概出售出賃。修理旧
材。与新無異。
棺桶あります。白木または黒色、飾りのありなし。すべて売り出し貸し出し、
古棺を修繕すれば新品同様です

直訳と言っていい。

念のために日本語訳も見ておく。

魚住衛訳「葬儀屋」(1910)*3は母我の漢訳「棺材匠」に先行する(ルビ省略)。

「普通棺、塗棺、各種販売、装飾、貸棺、並に古棺修繕も仕候」49頁

看板の簡単な字句ではあるがやはりアリンスン英訳とは違う。特に「装飾」を
別項目にしたのが決定的だと思う。

母我漢訳「棺材匠」はアリンスン英訳を底本とする。これが結論だ。

【注】

- 1) プーシキン作、神西清訳「葬儀屋」『スペードの女王・ペールキン物語』岩波文庫
1967.5.16／2010.5.25第5刷。略号【神西】
- 2) 次のとおり。冒頭に英訳者の姓を示す略号を置く。
【TELFER】ALEXANDER SERGUEVITCH POUCHKIN 著、MRS. J. BUCHAN
TELFER 英訳 “THE UNDERTAKER” (“RUSSIAN ROMANCE” LONDON:
HENRY S. KING & CO., 1875)
【EDWARDS】ALEXANDER SERGUEIEVITCH PUSHKIN 著、MRS. SUTHERLAND
EDWARDS 英訳 “THE UNDERTAKER” (“THE QUEEN OF SPADES AND
OTHER STORIES” LONDON: CHAPMAN & HALL, 1892)
【KEANE】ALEXANDER SERGUEIEVITCH PUSHKIN 著、T. KEANE 英訳 “THE
COFFIN-MAKER” (“THE QUEEN OF SPADES AND OTHER STORIES”
LONDON: CHAPMAN & HALL, 1892)
- 3) 魚住衛訳「葬儀屋」『帝国文学』第16巻第8号 1910.8.1

漢訳『露漱格蘭小伝』のこと

『清末小説から』第143号（2021.10.1）に掲載。沢本郁馬名を使用。信陵騎客漢訳『露漱格蘭小伝』の原作がわからない。内容を紹介して後日の探索を期す。

はじめに

信陵騎客訳『露漱格蘭小伝』はイギリスを舞台とした物語だ。漢訳を読むことはできる。しかし原作、原作者、訳者ともに詳細はわかっていない。

冷紅生（林紓）の「序」がある。林紓は該文において共訳した自分の『椿姫』について言及する。だが『露漱格蘭小伝』の原作が何かについて説明しない。また漢訳者の「自序」にも原作品、原作者に関する情報開示は皆無だ。信陵騎客名の漢訳作品は該作以外には見つかっていない。探索が困難である理由である。

林紓が「序」を書いているから清末ではよく知られた作品だと思う。複数の書店から刊行されている。目録を見れば普通学書室（1902）、支那新書局（1903、影印本あり）、文明書局（1904）、科学書局（1909）などがある。ただし私が見ているのは支那新書局の影印本1冊のみ。

孔夫子旧書網に写真がある。奥付は繙訳者：信陵騎客、発行所：上海・支那新書局、光緒二十九年四月発行と記載される。

本稿ではそれと同一版の影印本（奥付なし）を使用する。[付二407]に奥付写真が収録されているものも同じ版本だ。

本稿では内容を簡単に紹介するにとどめる。あるいは筆者が知らないだけで有名な作品であるかもしれない。ご教示をいただければ幸いだ。



孔夫子旧書網

小説のあらまし

原作が不明だから固有名詞は原則として漢音から推測される読みにならざるをえない。正確ではないことを先におことわりする。

書名の露漱格蘭（ルース・グランド）は美女の名前である。露漱についての物語を意味するから確かに重要な人物だ。彼女がいなければ小説自体が成立しない。ただし一貫して物語の中心に存在して行動するかといえはそういうわけでもない。

先にいえば彼女に関する秘密が本書の根幹を構成する。登場人物のひとりが失踪してしまう。その友人が行方不明の彼を探していくうちに露漱自身が秘密を抱えていることが明らかになる。彼女の過去が行動の背後に大きく横たわっているのだった。

最初は関係があるとは思えないふたりの人物だ。それが後半では結びついていく。その謎解きのために事実を追求して探偵役をはたすのが洛勃忒（ロバート）

という男性だ。

つまり本書には探偵小説の要素がある。とはいえ格闘とか暴力場面はない。ただ皆無ではなく枯れ井戸に突き落とすとか放火によって負傷者は出る。露漱は最後に精神病院へ送られる。その部分は悲劇だがそれで終わらない。失踪したと思われた男性はニューヨークで英気を養っていた。また準主人公洛勃忒が結婚をする。敢えて分類するならば悲劇的推理小説あるいは悪女を中心とした探偵恋愛小説である。

内容紹介

物語はイギリスの地方で始まる。

医者 の道生（ドーン）は奥特留という場所に居住していた。男爵の名前が地名になった地域だ。道生は娘のために家庭教師を雇うことにして新聞に募集広告を出す。それに応募してきたのが露漱格蘭という美女だった。地元の男爵は10余年前に妻を失っていた。その男爵が露漱をみそめて後妻とした。

話はふたつに分かれる。

喬治太保（ジョージ・ダイバー）が登場する。陸軍の兵士で駐屯先において貧乏な美女海倫（ヘレン）を娶る。父親は怒り喬治を勘当した。一方で喬治は妻とイタリアへ旅行して金が尽きると帰国する。その後は災難続きだ。ロンドンでも失敗し入水自殺を考えるが思いとどまった。妻子を残して3年半の間オーストラリアで金掘りに従事する。2万ポンド分の金を掘り出しこれで生活ができると帰国した。ところが偶然目にした新聞の死亡欄に妻の名前があるのに気づいた。彼は精神的に不安定な状況に陥った。

喬治が妻の死去を知った時に友人が一緒にいた。洛勃忒（ロバート）である。弁護士で伯父は男爵だ。男爵が後妻に露漱を娶ったので屋敷から足が遠のいていた。

妻に死なれた喬治は精神的に自立ができそうにもない。そういう彼を励ますために洛勃忒は彼を連れて別の友人とともにロシアの聖彼得堡に行ったりもした。しかし帰国後は喬治の症状は元に戻る。こう紹介しながら不審な点を感じる。せっかくロシアの首都に行きながら詳細な描写はないからだ。あるいは原作にある

のを漢訳する際に省略した可能性もある。その後、喬治は行方不明になった

喬治を探して洛勃忒は関係者たちを訪問する。ここが探偵としての動きを示す個所だ。調べた結果は衝撃的な物語だった。

男爵の後妻となった露漱は偽名であることが判明する。本名は海倫である。すなわち失踪した喬治の妻だった。

喬治がオーストラリアへ金掘りに出かけたのは生活のためだ。しかし妻子からいえば遺棄されたことになる。残された海倫は父親の元に息子を置いて求職のためにロンドンに出たという経過だ。その後改名して男爵と結婚したのだから重婚である。彼女の生活にゆとりができると露漱は父に仕送りをしながら消費生活を続けた。その生活を維持するためには帰国した夫が邪魔だ。父と共謀して瀕死の女性を海倫に仕立てて死亡後に墓を作った。喬治はその死亡記事を新聞で見て信じ込んだというわけ。

洛勃忒が調査の結果に得た事実を露漱に突きつけた。彼女はそれを認めて男爵に直接告白する。露漱の母親が精神病を患っていたのが彼女にも発症した。最後は太拉と改名させられて精神病院へ入院する。

一方、洛勃忒は捜査の過程で親しくなった喬治の妹格拉拉（クララ）と結婚してスイスに住んだ。

露漱にとっては悲劇的最後になった。しかし洛勃忒と格拉ラの結婚で小説の結末はなんとか大団円に持ち込んだという印象が強い。

新聞広告

出版元の支那新書局が広告を出した。広告記事の前半は物語のおおよそを紹介する。後半は出版社の感想が加えてある。それを前後にわけて次に引用する（記号は陳大康）。

[編年②684]『俄事警聞』第73号1902.2.25支那新書局広告／以下削除[編年⑤2518]も同文

是書為泰西著名之小説，歷叙露漱与夫因貧勃谿，其（夫）憤而遠遊澳洲。後露漱私易姓名，改嫁某男爵。不数月，其夫致富歸。露漱与聞其父，偽托病

死。其夫得死耗，一慟幾絶。嗣無意遇之于男爵某，大驚喜，趨与語，置不理，反被推落枯井中。後為其友某律師察出隱情，代為復仇。

本書は西洋の著名な小説である。次のことを述べる。露漱とその夫は貧困のために家庭内不和となり夫は怒って遠くオーストラリアへ行った。後に露漱は密かに姓名を変えある男爵に嫁いだ。数ヵ月もせずその夫が金持ちになって帰ってきた。露漱は父親から聞いて病死と偽る。夫は死亡を知って悲嘆のあまりほとんど死にそうになった。偶然あの男爵に出会い大いに喜んで話したが取り合ってもらえずかえって枯れ井戸に突き落とされる。その後、友人の弁護士が秘密を探索し彼の代わりに仇をうった。

物語の粗筋だ。大きく間違っているわけではない。しかし「露漱は密かに姓名を変え（露漱私易姓名）」と説明したのは事実ではない。もとは海倫だったが露漱に変えたのが正しい。

推理小説の要素を持っているから核心部分を暴露するのはよくない。それをあっさりと破る。現在からみれば無神経なものだ。当時の広告にはそれが普通のこととして出現している。しいていえば海倫を出さなかったから種をばらすことにはならないと考えたか。

細かいことだが「数ヵ月もせず（不数月）」というのは勘違い。実際は3年半である。枯れ井戸に突き落とされたのは露漱の夫である喬治だ。露漱が関係している。しかしそのまま死亡したわけではない。助け出されて後に自ら「私は枯れ井戸に突き落とされたのちに（我被推落井後）」（80頁）と述べているからわかる。

蓋天下至陰險至狠毒之女子，無有過于露漱者也。請天下讀《茶花女遺事》者，再讀《露漱伝》，始知色界欲海中，變状万端，如吳道子画地獄變相図也。洋装美本，每冊洋二角，薈批從廉。總經理：上海棋盤街支那新書局。

おおよそこの世で最も陰険かつ最も悪辣な女性といえば露漱を超えるものは皆無である。この世で『（巴黎）茶花女遺事〔椿姫〕』を読まれた人はさらにこの『露漱（格蘭小）伝』を読んでもらいたい。読めば色欲の世界が変化きわまりないことを知るであろう。まるで吳道子が地獄絵図を書いている

かのようなだ。(以下略)

呉道子、のちの道玄は唐代の画家、地獄絵を得意とした。広告主は露漱を最低の悪女として清末の読者に紹介宣伝した。

イギリス人男性が食い詰めてオーストラリアへ渡る。その妻は美貌を武器に改名して男爵夫人に成りあがる。経済的に余裕が出てくるとその生活を手放すのが嫌で元の夫を邪魔者扱いにする。たしかに悪女に違いない。いかにも当時のイギリスで書かれた大衆小説のひとつのように思われる。

アンデルセン最初の漢訳「裸の王様」

——台湾版「某侯好衣」

『清末小説から』第147号（2022.10.1）に掲載。沢本郁馬名を使用。頼慈芸「安徒生的第一個中文訳本不在中国，而在日治台湾——〈某侯好衣〉」（『翻訳偵探事務所：偽訳解密！台湾戒嚴時期翻訳怪象大公開』台湾・蔚藍文化出版股份有限公司2017.1／2020.8二版二刷）で最初の漢訳「裸の王様」が台湾で公表されたと指摘した。その底本を探索する。その結果は、坪内雄三（逍遙）著、第10課上、第11課下「領主の新衣」（『国語読本（高等小学校用）』巻6の22オ-27オ 富山房1900.10.2／1901.8.23訂正四版）である。

日本ではアンデルセンの「裸の王様」で知られる。最初の漢訳に関する新発見を紹介しさらに情報を追加する。

従来からいわれる漢訳の歴史

ハンス・クリスチャン・アンデルセン（HANS CRISTIAN ANDERSEN、1805-1875）作「皇帝の新しい衣裳」（1837）である。英訳は“THE EMPEROR'S NEW CLOTHES” また “THE NAKED EMPEROR” ともいう。

清末民初の漢訳を発表順に挙げれば次のようになる（未見を含む。原作者名は省略）。

- 1 周作人訳「皇帝之新衣」『紹興公報』1911？（未確認 張治による）*1
- 2 半儂（劉半農）訳「（滑稽小説）洋迷小影」『中華小説界』1年7期 1914.7.1*2

- 3 緑筠女史訳「(埃及童話)金縷衣」中華図書館『女子世界』4期 1915.4.10
(未見)
- 4 陳家麟、陳大鏡訳「国王之新服」『(社会小説)十之九』上海・中華書局1918.1 (未見)
- 5 趙景深訳「国王的新衣」『少年雑誌』10巻12号 1920 (未見)

上にあげた漢訳の底本はたぶん英訳だと思う。しかし英訳は多数ある。それぞれを特定することは困難だろう。

周作人訳「皇帝之新衣」はのちに重版した『域外小説集』（上海・群益書社1921）に収録される。日本東京で刊行した該書の初版である第1冊（1909.3.2）と第2冊（1909.7.27）には未収録だ。それらの刊年を見れば周作人は当時まだ「裸の王様」を漢訳していなかったことになる。

周作人は『知堂回想録』（1970）において当時のことを記述している。

辛亥帰国後給紹興公報訳的安兌爾然（今通称安徒生）的「皇帝之新衣」281頁*3

辛亥に帰国してのち『紹興公報』にアンデルセンの「皇帝の新衣」を翻訳した。

周作人が魯迅に促されて羽太信子と一緒に日本から帰国するのは1911年秋のことだった。帰国後に翻訳したというのだから1911年秋以後になるという理屈だ。

1に示したように張治は「皇帝之新衣」が1911年の『紹興公報』に掲載されたと断定した。筆者が見るところ上の周作人回想録にもとづいたのだろう。しかし彼が根拠と『紹興公報』の月日を明記しないところが不審だ。実物で確認していないのではないか。張治は英語が堪能で林訳ほか多くの原作を発掘している。優秀な研究者であることは間違いない。ただごくまれに根拠を示さず引用して言明することがある。筆者の知る限りこれが第3例目だ（誤っているのならご指摘いただきたい）。

ほかの研究者が『紹興公報』掲載「皇帝之新衣」に言及していてもその論拠は『知堂回想録』を出ない。筆者は『紹興公報』を見る機会を持たない。そのかわりに「皇帝之新衣」と『紹興公報』に関連して傍証を示す。

張菊香、張鉄栄編『周作人研究資料』上下冊（天津人民出版社1986.11）および張菊香、張鉄栄編著『周作人年譜（1885-1967）』（天津人民出版社2000.4）が詳しい。『紹興公報』に掲載された周作人（頑石）の文章を複数指摘している。「偵竊」は記載する（614頁／85頁）。しかし「皇帝之新衣」は見えない。

同じことは陳大康年表についてもいえる。[編年④2033]は該誌に掲載された周作人作品を次のように記録する。頑石（周作人）「（短篇小説）偵竊」（『紹興公報』1910.7.26）。陳大康が同じ『紹興公報』から「皇帝之新衣」をなぜ採取しなかったのか。これも疑問が生じる理由のひとつだ。

3件の資料がそろって『紹興公報』の周作人訳「皇帝之新衣」を採録していないのは偶然の一致だろうか。

疑わしいと思うその結果は次のようになる。実際には掲載されていないのではないか。

周作人は自分が翻訳した底本について後日いろいろ書いている。時には記憶違いのこともある。ゆえに「皇帝之新衣」を1911年の『紹興公報』に公表したという回想が信頼できるかどうか、筆者はこれに疑問符をつける。

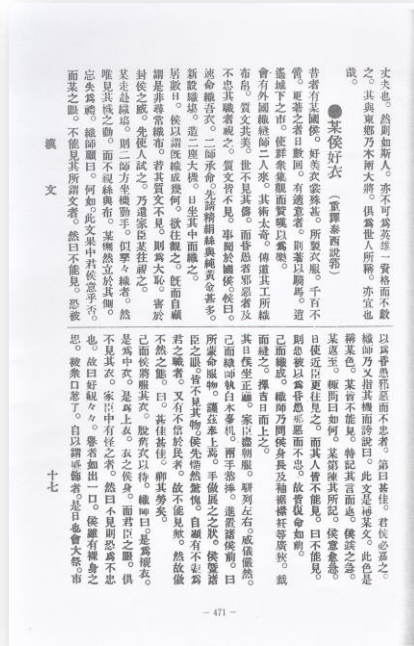
周作人漢訳の初出未確認を含めて清末民初における漢訳「裸の王様」の発表状況は以上のとおりだ。

ここに新発見が加わる。頼慈芸が「安徒生的第一個中文訳本不在中国，而在日治台湾——〈某侯好衣〉」（2017）*4を書いて提出した。最初の漢訳「裸の王様」は中国ではなく台湾で発表されたと



いう（頼慈芸は典拠を示さない。許俊雅論文らしいが筆者は未見）。それが「某侯好衣」だ。1906年だから周作人漢訳（1911年として）に比べて5年も先行する。

新発見の「某侯好衣」



国会図書館所蔵影印本（ひるぎ社1994）

その漢訳について目録風に記す。

某侯好衣 （重訳泰西説郛）

未署撰者名

『台湾教育会雑誌』 「漢文報」 50号 明治39（1906）.5.25

〔慈芸17-344〕 安徒生「国王的新衣」。従日文転訳。全文を収録する

略号〔慈芸17-344〕は該当論文と頁数を示す。

漢訳「某侯好衣」は漢字4字だから題名としては座りがいい。しかし日本語に直訳すれば「ある領主が衣裳を好む」だ。翻訳作品名としてはそぐわない。題名らしく「領主の衣裳好み」とする。

「西洋小説からの重訳（重訳泰西説郭）」とある。もとは英訳本ならば（デンマーク語のことは忘れて）「訳」だけにするだろう。重訳とわざわざ記すのは当時の台湾という場所からして日本語訳を底本にしていると推量できる。

頼慈芸は漢訳に使用された活字を根拠にして日本語からの転訳だと明記する。

頼慈芸の説明は次のとおり。台湾が1896年から日本領となっても統治政府は漢文を禁止しなかった。新聞雑誌には漢文版もあったという。ただし植字に使われた記号に特徴がある。日本文ではよく見られるくり返し記号、たとえば「々」（同ノ字点）などを使用している。それが日本風だ。日本統治時代の漢語雑誌によく見られた（344頁）。そういう解説だ。

例を示している。漢訳「某侯好衣」のある個所に「好観々々」（好看の意味）と活字を組んでいるのが日本語の記号だというわけ。

頼慈芸は紹介をそこで終了させた。文章の主旨は明確だ。アンデルセン最初の漢訳「裸の王様」は中国ではなく台湾で発表されたということにある。論旨は完結しているから問題はない。

しかし筆者から見れば物足りない。中途半端に終わった感が残る。なぜならさらに一步踏み込み日本語底本を探索することが必要だと考えるからだ。

漢訳の内容が主要な手がかりである。また使用されたくり返し記号も手助けとなる。

日本語底本の特定

頼慈芸が漢訳全文を該書に収録している。短文だから可能だった。それを読むと見たことがある。

すぐ気づいたのは坪内雄三（逍遙）著『国語読本（高等小学校用）』巻6（1900）に収録されている「領主の新衣」*5だ。

明治期に日本で使用された教科書のひとつである。それが台湾で流通したとしても不思議ではない。

冒頭部分を比較対照する。

【逍遙】昔、或国の領主に、着物道楽の殿様があつた。夥しく、着物を仕

立てさせて、一日に、幾度も〜着換へ、気に入ったのがあれば、それを着て、馬で、城下を乗り廻り、町のものに見せびらかすのを、何よりの楽みとせられた。」^{マア}22丁オ

【台湾】昔者有某国侯。好美衣裳殊甚。所製衣服。千百不啻。更著之者日数回。有適意者。則著以騎馬。逍遥城下之市。使群衆集觀而讚嘆以為樂。17頁

昔、ある国の領主は美しい衣裳をことのほか好んだ。仕立てさせた着物はおびただしいだけでなく、日に幾度も着替えた。気に入ったものがあればそれを着て馬に乗って城下を練り回り、群衆を集めて見せびらかせて称賛させるのを楽しみとした。

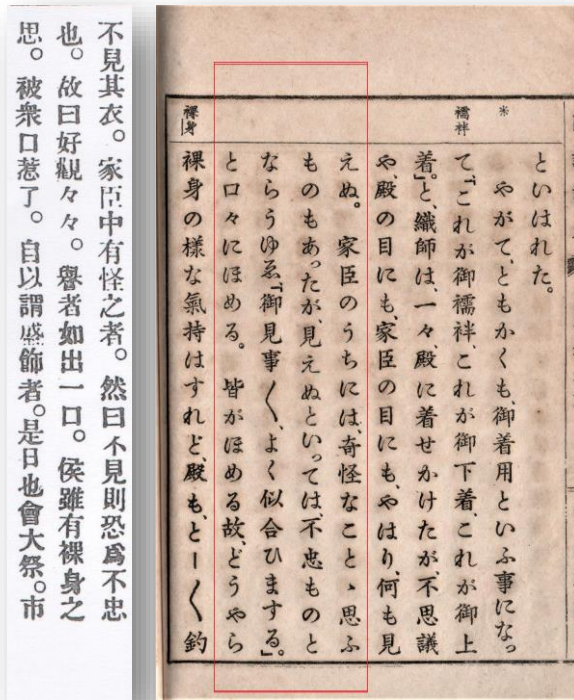


奥付と本文、扉

「繰返^{マア}〜」のくり返し記号が「くの字点」と呼ばれる。台湾版はほとんど逐語訳だ。上記部分では記号を使用せず「数回」と言い換えている。

皇帝は新衣を見せてまわるために一行を従えて列をなして歩く。これがアンデルセン原作だ。逍遥はそこを書き換えて領主を馬に乗せた。騎馬についても台湾版は逍遥本に従っている。

「くの字点」が使用されている個所を示す。



台湾版部分と逍遙本

領主は外国からの詐欺織師が織ったという新衣裳を身に着けた。殿の目にも家臣の目にも何も見えない。

【逍遙】家臣のうちには、奇怪なことゝ思ふものもあつたが、見えぬといつては、不忠ものとならうゆえゑ、「御見事〜、よく似合ひまする。」と口々にほめる。25丁ウ

【台湾】家臣中有怪之者。然曰不見則恐為不忠也。故曰好觀々々。譽者如出一口。17頁

家臣のなかには怪しんだ者もいたが、しかし見えないといつては不忠になるため、皆は「綺麗々々」と口をそろえてほめた。

ほぼ直訳だといつていい。くり返し記号は逍遙本では「くの字点」だが台湾版は「同ノ字点」におきかえた。

アンデルセン原作の結末はあっさりしている。皇帝は子供大人から「裸だ」と

嘲笑されたが最後まで着衣を装い行列の歩みをやめようとはしなかった。

しかし逍遙本はアンデルセン原作にはない終わり方をする。領主たちは騙されたことに気づき、詐欺師はさっさと逃げたことをつけ加えた。

【逍遙】殿も家臣も、今更に、はっと心づき、さては、織師の悪者にだまされたのではないかと、急ぎ、館へはせ帰って、「織師を呼び出せ。」とのゝしたが、もう遅い。悪者の織師は、とうに逃げ去って、影もなかった。27丁オ

【台湾】至此侯及群臣始憮然自悟。為奸人所誑也。急還館。罵曰。疾呼二織師來。將寸斷之。而二織師既逃去。杳無蹤跡矣。18頁

こうなると領主も家臣たちもはじめて悪人にだまされたことに気づいてがっかりした。急いで館へもどると「ふたりの織師を早く呼んでこい。切り刻んでやる」と罵ったが、ふたりの織師はすでに逃げ去って影も形もなかった。

結末まで両者は一致する。逍遙本が台湾版の底本である証拠だ。

アンデルセンはデンマーク語で作品を書いた。英訳によって世界に流布する。本稿で紹介した台湾版「某侯好衣」が成立するまでの経過を図式化すれば次のようになる。

デンマーク語原作→英訳→逍遙日本語翻訳→漢訳「某侯好衣」

上に示した2の劉半農訳「洋迷小影」の成立にも日本語訳が絡んでいる。ただし劉半農のばあいは日本語訳から発想のヒントを得たのみ。彼なりの書き換えをしている（別稿参照）。日本語教科書を直訳した「某侯好衣」はその点において半農漢訳とは異なる。

【参考文献】

楊 焄「“哎呀，聽聽這小孩子——安徒生童話在中国的推介与翻譯”『文匯学人』（第376期）2019.1.18 電字版

楊 焄「《皇帝の新装》伝入中国後、為何吸引了衆多翻譯、創作和研究者的關注？」
ウェブサイト「搜狐」2019.3.4 電字版

簡 平「安徒生的到来」『北京晚報』2020.7.13 電字版

甄 陶「安徒生童話的早期翻譯」ウェブサイト「澎湃新聞」2021.3.1 電字版

【注】

- 1) 張治『中西因縁：近現代文学視野中的西方「經典」』上海社会科学院出版社2012.8。
66頁。詳細な日付を書いていないとくり返す。該当部分は次のとおり。「1921年、
上海群益書社出版増訂本《域外小説集》，周作人補入了一篇《皇帝之新衣》，這是第
一篇漢訳安徒生叢話，最早發表於1911年的《紹興公報》上，依然採用文言訳法」
なお次の目録をあげる。編者不記（郭輝）『清末民初報刊小説目録（1815-1919）』
期刊卷、報紙卷（出版社、刊年ともに不記。2021.12入手）。ただし目録には『紹興
公報』それ自体を採取していない。収録雑誌が多いにもかかわらず該誌未収録は珍し
いから掲げた。
- 2) 次を参照のこと。「劉半農「洋迷小影」——杉谷代水「（狂言）衣大名」」『清末
小説から』第149号 2023.4.1
- 3) 周作人『知堂回想録』上下冊 香港・聽濤出版社1970.7
- 4) 頼慈芸「安徒生的第一個中文訳本不在中国，而在日治台湾——〈某侯好衣〉」『翻
訳偵探事務所：偽訳解密！台湾戒嚴時期翻譯怪象大公開』台湾・蔚藍文化出版股份有
限公司2017.1／2020.8二版二刷
- 5) 坪内雄三（逍遙）著、第10課上、第11課下「領主の新衣」『国語読本（高等小学校
用）』巻6の22丁オ-27丁オ。富山房1900.10.2／1901.8.23訂正四版。架蔵。また阿
部正恒『坪内逍遙の国語読本』バジリコ株式会社2006.12.22 所収。こちらは原本奥
付を収録しない。

劉半農「洋迷小影」

——杉谷代水「(狂言)衣大名」

『清末小説から』第149号(2023.4.1)に掲載。荒井由美名を使用。半農(劉半農)「(滑稽小説)洋迷小影」(『中華小説界』第1年第7期 1914.7.1)はアンデルセン作「裸の王様」の英訳を底本にする。ただし日本喜劇を参照したと前言で述べる。この日本喜劇は何か。杉谷代水「(狂言)衣大名」(『早稲田文学』1906年3月号)である。坪内逍遙「領主の新衣」『国語読本(高等小学校用)』巻6 富山房1900)を代水が起稿し、それから自身の「衣大名」を作った。さらに逍遙らの設立した文芸協会の発会式でそれが上演もされている。逍遙との関係が興味深い。半農が参照したといっても字句ではない。代水の発想を借用した。

ハンス・クリスチャン・アンデルセン(HANS CRISTIAN ANDERSEN、1805-1875)作「皇帝の新しい衣裳」である。デンマーク語の原作(KEJSERENS NYE KLÆDER)は『子供たちのために語られるおとぎ話』第3集(EVENTYR, FORTALTE FOR BØRN. TREDIE HEFTE. 1837.4.7)に収録された。アンデルセンは中世スペインの物語をドイツ語で読んで該作に翻案したという。そう周作人も書いているが、これについては言及しない。

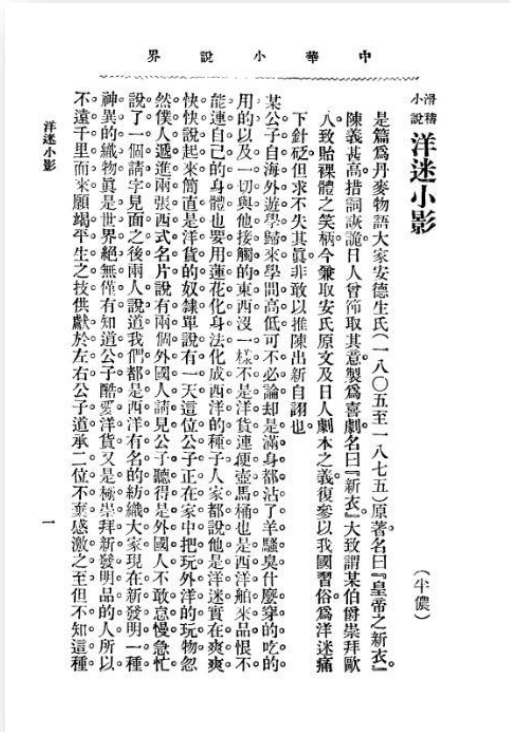
英訳は“THE EMPEROR'S NEW CLOTHES”である。別に“THE NAKED EMPEROR”とも。日本では「裸の王様」で知られる。

詐欺師に騙された王様が裸で行進する話はあまりにも有名だ。英訳も日本語訳も数多くが発表されている。本稿で紹介するのは民国初期に漢訳された劉半農「洋迷小影」(1914)である。半農自身が日本の喜劇を参考にしたと述べている。

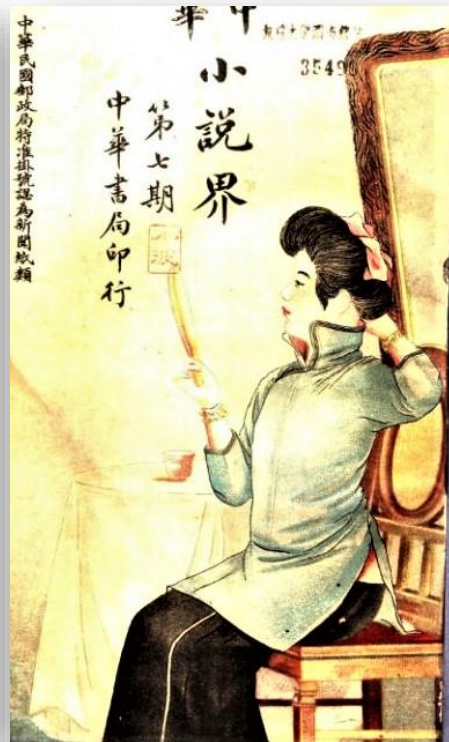
本稿はその部分を検討する。

劉半農「洋迷小影」の前言

半農（劉半農）「（滑稽小説）洋迷小影」（『中華小説界』第1年第7期 1914.7.1）という。



本文



表紙

原作者名はない。訳とも書かれていない。しかし劉半農による前言がある。デンマークのアンデルセン（（丹麦）安徳生）作「皇帝の新しい衣裳（皇帝之新衣）」だと明記する。以下のとおり。

是篇為丹麥物語大家安徳生氏（一八〇五至一八七五）原著。名曰『皇帝之新衣』。陳義甚高。措詞詼詭。日人曾節取其意。製為喜劇。名曰『新衣』。大致謂某伯爵崇拜歐人。致貽裸體之笑柄。今兼取安氏原文及日人劇本之義。

復參以我國習俗。為洋迷痛下針砭。但求不失其真。非敢以推陳出新自詡也。

本作はデンマークの物語大家アンデルセン氏（1805-1875）の原作である。題名を「皇帝の新しい衣裳」という。その意味は深く表現は滑稽だ。日本人がかつてその意味を抜き出して喜劇を作り「新しい衣裳（新衣）」と名付けた。そのおおよそは、ある伯爵が西洋人を崇拜して裸にされるという笑いぐさである。今、アンデルセン氏の原文と日本人脚本から一部を抜き出し、さらに我が国の習俗を参考にして西洋崇拜者の誤りを厳しく指摘する。真実を失わないようにと求めているだけである。古いものの精華を生かし新しいものを創造したと自慢しようというわけではない。

劉半農が該作を書いたおおよその経緯がわかる。

アンデルセン原著という。しかしそれはデンマーク語ではないだろう。半農はコナン・ドイルのホームズもの、あるいはロシア作品の漢訳でも知られている。アンデルセン原作も読んだのは英語訳だと思われる。興味深いのは、日本人の書いた喜劇が別にあるというところだ。

ひとこと。半農は「洋迷小影」の底本に使用した英訳も日本喜劇も明記しない*1。アンデルセン原作とというだけ。その彼がこれより4年後には北京大学教授として自分の所業を棚に上げる。林紓が『吟辺燕語』でラム姉弟の名前を出さずにシェイクスピア原著と書いた。半農はそこをつかむ。「林紓は戯曲を小説にかえて翻訳した」と批判したのだ。半農が銭玄同（偽名は王敬軒）と演じた「なれあいの芝居」のなかに出てくる。後の有名な「林紓は戯曲と小説の区別がつかない論」である。半農は底本がラムの小説本であることを知っていて知らぬ顔をした確信犯である。研究者としての半農は致命的な論理不一致を露呈している。だが林紓批判は政治運動だから半農は気にしなかつただろう。

いくつかの疑問——「洋迷小影」の意味

アンデルセン原作の日本語喜劇「新衣」があると説明する。この箇所ですまなく。日本語訳の「裸の王様」は多数ある。しかし喜劇だという。原作の内容からすればそうなる。おまけに半農の見ることができた脚本という限定がつく。意想

外だから急には思いつかない。今までの研究が半農の説明を引用するだけで停止している理由である。日本の戯曲までは手が回らなかった。

半農はアンデルセン原作を指して『皇帝之新衣』という。さらに日本喜劇の題名が『新衣』だ。「新衣」が共通している。何か意味があると思う。

読めば半農が書いている日本喜劇の内容は不思議なものだ。

まず「伯爵」が奇妙である。「崇拜欧人（西洋人を崇拜する）」伯爵とはなにか。日本の喜劇はそう設定されていると半農は述べる。伯爵はもともとヨーロッパの制度だ。日本で伯爵がいた時代もあったがどこか合わない。日本語の別単語を「伯爵」に置き換えたのか。ただ先走っていえば「伯爵」と日本の「大名」は違うだろう。

「西洋人を崇拜する」日本人が裸にされて笑いものになるという。だがそのような日本喜劇は見当たらない。可能性のある喜劇では日本人を騙すのは日本人だ。別の戯劇があるのであればご教示いただけるとうれしい。

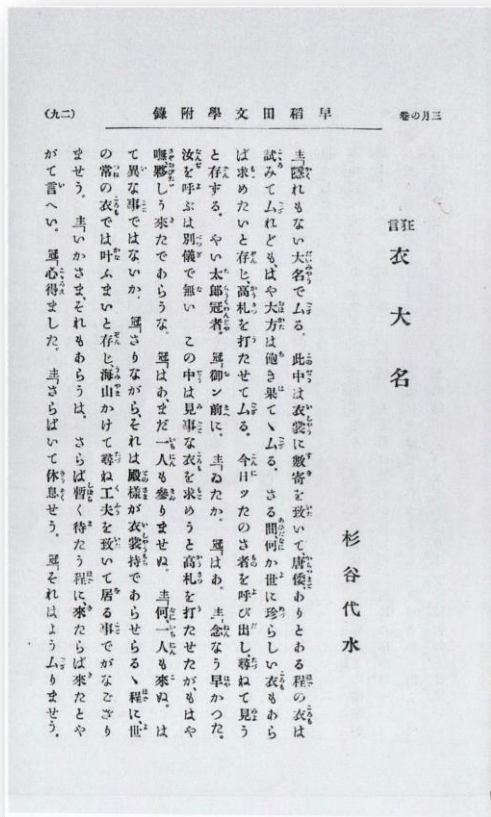
「新衣」という喜劇がまず見つからない。考えるに半農は自分が行なった改変を日本の喜劇と意図的に混同して説明している。あるいは、彼は日本喜劇を探索しにくい方向にむけて説明しているのではないかと思う。どのみち半農の作品全体が翻案だからどのようにも書くことができる。

「洋迷」は西洋を崇拜し熱狂的に愛する人を指す。「洋迷小影」は「西洋かぶれの肖像」という意味に取っておく。

アンデルセン原作は王様が詐欺師にだまされる話だ。ありもしない衣裳を見えると見栄をはる愚かさを笑う。その舞台を半農は中国に置き換えた。さらに西洋人崇拜批判に結びつけて西洋かぶれを批判する。大きな変更だ。改編者には改変の自由があるということでもある。

半農のいう日本喜劇とは——坪内逍遙と杉谷代水

前述のとおり「新衣」という日本の喜劇は見つからない。しかし似た狂言ならある。杉谷代水「(狂言)衣大名」(『早稲田文学』明治39年3月の巻 1906.3.1。国立国会図書館所蔵)である。のちに杉谷恵美子編『杉谷代水選集』(富山房1935.11.12)に収録された。



杉谷代水（本名虎蔵、1874-1915）。詩人、劇作家。富山房に入社、坪内逍遙『国語読本』の編集制作にたずさわった*2。彼の翻訳にはエドモンド・デ・アミーチス EDMONDO DE AMICIS 作『クオレ CUORE』（1878）の『（教育小説）日誌』（春陽堂 1902）、シェークスピア『沙翁物語』（富山房1903.3.11）、ジェームス・ボールドキン『希臘神話』（富山房1909.5）また『新訳アラビヤンナイト』上下巻（富山房1915.12.13、1916.2.11）などがある。

代水は逍遙『国語読本』を編集した。その内実は編集にとどまらずかなり積極的な役割をはたしたらしい。教材を起稿下書きしたという*3。

そこに収録されているのが「領主の新衣」（『国語読本（高等小学校用）』巻6 富山房1900.10.2/1901.8.23訂正四版）である。これこそアンデルセン原作だ。代水が英訳にもとづいて「領主の新衣」を作ったとしても不思議ではない。「領主」だから日本の大名だ。挿絵部分を掲げる。



挿絵と冒頭

その大名から後の狂言「衣大名」につながるのは自然である（後述）。

それだけに終わらない。島村抱月、逍遙らが新劇運動の母体である文芸協会を設立した。その発会式（1906）において狂言「衣大名」が上演されている*4。

以上の時間的流れを見る。逍遙『国語読本』の「領主の新衣」掲載から代水の狂言「衣大名」が生まれ、逍遙が関係する文芸協会での上演だ。一本の線で結ばれている。いずれも代水と逍遙の関係があることは明らかだろう。

ついでに言えば半農が提出したアンデルセン原作は『皇帝之新衣』だし日本喜劇は『新衣』だ。逍遙の「領主の新衣」とも「新衣」で重複する。さらに代水の「衣大名」を加える。「衣大名」を『新衣』と間違ったのではないか。半農の記憶に混乱があると推測する。

狂言は日本の古典的喜劇だ。半農の説明と矛盾しない。アンデルセン原作で日本の喜劇といえは現在のところ代水「衣大名」しか出てこない。日本では実際に

上演されており知られた狂言とっていいようだ。

冒頭部分の比較検討

半農「洋迷小影」の主人公は外国留学帰りの若様だ。ふたりの外国人詐欺師がやってきて新発明の織物を織るといふ。悪人には見えないという特徴がある。それによって人となりの善悪を判別することができるとの謳い文句だ。家来たちも素晴らしい衣裳だと絶賛する。若様は織りあがり縫製された衣裳を身に着け妻と自動車に乗って外に出かけた。見物人も悪人になりたくはないから見えない衣服をほめそやす。児童のひとりが若様は裸だと叫ぶ。見物人も気がつき罵った。若様は誤りを認めるどころか、お前たちはみんな悪人だから見るができないのだと言った。

アンデルセン原作とは異なる個所がある。主人公は若様で留学帰りの中国人に変更される。それに着道楽ではなくただの舶来品好きだ。時代は自動車が出てくるから現代である。しかし自動車に乗って裸であることが外から見えにくいだろう。ゆっくりと徒歩で行進してこそ裸である事実が明白になる。半農による改悪でしかない。

若様を騙す詐欺師が外国人だ。外国人が中国人をペテンにかけると書き換えた。もとの王様、皇帝を若様に地位を降下させている。地方有力者の息子にしか見えない。若様は最後まで事実気づかないままだったのかどうかは曖昧にする。そのほかはアンデルセン原作の大筋をほぼ踏襲している。基本が同じで細部が異なるから翻案ということになる。

つぎに半農「洋迷小影」と代水「衣大名」（ルビ省略）初出の冒頭から引用する（「衣大名」は雑誌初出と後刷りでは字句が異なる個所がある）。

【半農】某公子自海外遊学帰来。学問高低。可不必論。却是滿身都沾了羊騷臭。什麼穿的吃的用的。以及一切与他接触的東西。沒一樣不是洋貨。連便壺馬桶。也是西洋舶来品。恨不能連自己的身體。也要用蓮花化身法。化成西洋的種子。人家都說他是洋迷。實在爽爽快快說起來。簡直是洋貨的奴隸。1頁

ある若様が海外遊学から帰ってきた。学問の優劣は論じるまでもない。ただし全身が羊（洋と同音。外国の意）臭にまみれている。着るもの、食べるもの、使用するもの、すべて彼が触れるものは何でも外国製品でないものはない。尿瓶、便器などにいたるまで西洋の舶来品である。残念なのは自分の身体も蓮花化身法（明代小説の蓮花から化身する方法）によって外国人種になりたいところだがそれができない事だった。みなは彼が西洋かぶれだと言ったが、実のところはっきりいえば単なる舶来品の奴隷である。

【代水】主「隠れもない大名でム（ごご）る。此中は衣裳に数寄を致いて、唐倭、ありとある程の衣は試みてムれども、はや大方は飽き果てゝムる。さる間、何か世に珍しい衣もあらば求めたいと存じ、高札を打たせてムる。今日ツたのさ者と呼び出し、尋ねて見うと存ずる。やい太郎冠者。冠「御ン前に。（後略） 29頁

代水狂言の文末には「作者附記」がある。原作については次のとおり。「此作ハンス、アンデルゼンの寓意譚に基きて綴る」（38頁）。原作の王様は代水によって着物道楽の大名に書き換えられた。こちらの詐欺師は日本一の織物師だと申し出てくる。名を「漢服部（あやはとり）」という。「はとり」とは「はたおり」のこと。もとは漢から渡来した綾織工を意味する。狂言名は「衣大名」だがその内容は「裸の殿様」である。

両者は一見してまったく異なる書き出しだ。それもそのはず、半農は小説体だし代水は狂言体である。一致するほうがおかしい。

それでは半農が前言でわざわざ日本喜劇に言及した理由はなにか。別の言いかたをすれば、半農は代水狂言のどこに触発されたのか。

衣裳の色合いと模様

アンデルセン原作では詐欺師の織り出す衣裳の色と柄については簡単な説明しかない。参考までに大畑末吉訳「皇帝の新しい着物」*5を添える。

Ikke alene farverne og mønstret var noget usædvanligt smukt,

【大畑】その織り物はただ、色や柄が、なんとも言えず美しいばかりでなく、158頁

言っているのは色合いと模様だけ。それ以上の詳しい描写はない。

参考までにアンデルセン原作の英訳を見る。多いから1例を示して残りは注釈に回す*6。

○英訳者不記 “FAIRY TALES.” NEW YORK: R. WORTHINGTON, PUBLISHER. 1884/open library 所収
the two rogues (詐欺師) “the pattern very pretty and the colors brilliant”
p.300

英訳でも「模様はとても美しく色合いは鮮やかだ」と簡潔だ。細かい説明はないことに注目する。

日本語翻訳も同様にして掲げる（主として国立国会図書館デジタルコレクション所収）*7。

○ハンス、クリスチヤン、アンダーセン作、渡辺松茂訳「第21課 帝ノ新ナル衣服」『ニューナショナル第五リーダー直訳』積善館1888.6.13
「光沢アル色及ビ清浄ナル企図」82頁

日訳も英訳とほぼ同じく模様と色合いのふたつだけを述べていることがわかる。直訳ならばそうなるだろう。

ところが代水「衣大名」だけはそれらとは異なる。衣裳に織り込んだ模様を具体的に説明する。

「衣大名」初出より関連個所を複数引用する。

【代水】先づ地は春の野の薄緑でムる。子の日の小松を松の丸に織り出し、白茶の霞に雲井の鶴は何とムらう。33頁

春の野の浅緑に子の日の鶴と申してゐる。33頁

春の野の浅緑、子の日の松に雲井の鶴のあたりは、34頁

さて夏山の深翠に時鳥、秋の田の面の鴈金、冬の海辺の村千鳥と、斯様に大方織り成いてゐるが、34頁

田の面の雁、友呼ぶ千鳥の声々まで、耳に聞こゆるやうにおりやる。34頁

「春の野」「松」「雲井の鶴（カキツバタ）」「時鳥（ほととぎす）」「鴈金（かりがね）」「千鳥（ちどり）」など多様な図柄を展開している。実際には存在しない意匠だから詐欺師は自由にいい換えることができる。

模様を詳しく描写する萌芽は逍遙「領主の新衣」に存在する。一部のくり返し記号は文字に直してすなわち「織師は、尚ほも、機を指し、こゝの模様がしかじか、そこの色合がしかじかと自慢して、説明する」（23丁ウ）という個所だ。

「しかじか」部分をふくらませ具体的に記述すれば上の狂言になる。「領主の新衣」に代水が深くかかわっていたからこそ狂言で加筆できた。その可能性が高い。

半農の「洋迷小影」も絵柄は違うが記述は同様に詳しい。詐欺師のひとりが説明する。

【半農】這種織物的花紋与顔色。能隨時变化。比方眼前有牡丹花。織物上就現出牡丹花。有玫瑰花。就現出玫瑰花。做了衣服。美麗異常。2頁

この織物の模様と色合いはその時どきに変化いたします。たとえば眼前にボタンの花があれば織物にはボタンの花が現われ、バラの花があればバラの花が現われます。衣裳にすればことのほか美しい。

那外国人曾預先声明。花紋顔色。隨時变化。4頁

あの外国人は先に模様と色合いは時どきに変化すると公言しておった。

こちらは実物の花が衣に映し出されるという。半農独自の工夫がなされている。そこが代水とは異なる。

半農が代水狂言から得たものは描写をそのまま写して漢訳することではない。衣裳の色と柄をより詳細に提示するという発想そのものだ。半農がわざわざ日本

喜劇に言及したのはその発想に触発されたからである。

結 末

アンデルセン原作において、王様は詐欺師に騙されたことに気づく。しかしいまさら行列を中止するわけにはいかない。そのまま強行してしまう。

半農翻案ではそこも書きかえる。代水狂言との違いを見るために最後部分を併記する。

【代水】主「やれ腹立や腹立や。漢服部めに騙られて、日本一の恥をかいた。誰ぞあの太盗人めを捕へてくれい おのれやるまいぞ。ハツクシヨ。

(後略) 38頁

【半農】然兒公子到了此時。反不便認錯。仍旧咬定舌根說道。這是西洋新發明的織物。你們都不是好東西。那有看得見的資格呢。5頁

しかしながら若様はこの時になっても間違いを認めるどころか、舌をもつれさせて依然として言ったのだった。これは西洋新発明の織物なのだ、お前らは善人ではないのだからどうして見える資格があろうか、と。

前出「領主の新衣」（『国語読本』）の最後は「殿も家臣も、今更に、はっと心づき、さては、織師の悪者にだまされたのではないか、と、急ぎ、館へはせ帰って、「織師を呼び出せ。」とのゝしたが、もう遅い。悪者の織師は、とうに逃げ去って、影もなかった」（27丁オ）である。それをもとにして狂言が「誰ぞあの太盗人めを捕へてくれい」となるのは自然な流れだ。

半農の「咬定舌根」は「舌を噛んで」ということだがその理由がある。舌をもつれさせる心理的背景が存在することを示唆する。詐欺師に騙されたことを自分ではうすうす理解したが表立って言わずにごまかした。

半農は基本的にアンデルセン原作の英訳を底本にして翻案している。ただし織物の細部については代水狂言の描写に刺激を受けた。その発想を借用して彼独自の工夫を加えたのだ。そのことをもって日本人の喜劇に言及した。

【参考文献】

- 平林広人『アンデルセンの研究』東海大学出版会1967.12.20
- 新田義之「杉谷代水と児童文学」村松定孝+上笹一郎編『日本児童文学研究』三弥井書店
1974.10.1
- 村松定孝「「裸の王様」と「衣大名」」日本児童文学学会編『アンデルセン研究』小峰書店1975.10.31二版
- 菊地善太「翻案狂言による西欧文学受容」『日本大学大学院総合社会情報研究科紀要』第
15号 2014.7 電字版

【注】

- 1) 別例は樽本「林訳の改編者表記——瀬戸博士の嘘と捏造」（『清末小説から』第140号 2021.1.1）を参照。のち『清末小説四談』（2021.5.1 電字版）所収。
- 2) 『日本近代文学大事典』第2巻、220頁。菊池明執筆。また松下政蔵「杉谷代水の生涯——郷里に於ける代水」（『杉谷代水選集』所収）がある。
- 3) 松下政蔵「杉谷代水の生涯——郷里に於ける代水」に次のようにある。「明治三十年坪内博士は尋常小学校及高等小学校の国語読本編輯に着手せられ、三十三年に完成されたが、材料の配列、指図の工夫、口語文の採用等に苦心せられ、従来英米読本の直訳以上殆んど独自の新味を見なかつた国語読本に、純正なるわが国語教授の新材料を提供し、之を富山房より発行して、小学読本に、一新紀元を劃せられたのであつたが、この編輯に博士を助けて働いた人々は、杉谷、種村、桑田、石原等の諸氏であつたが、主として杉谷虎蔵が博士の意を受けて其のプランを立て、教材を起稿したのであつた」杉谷恵美子編『杉谷代水選集』富山房1935.11.12。6-7頁
- 4) 代水の「作者附記」より。「文芸協会発会式の当夜、和泉流の名匠高橋彌五郎氏これを演じ、時に本文を離れて自在に遊伎の妙を發揮せられたり。就中太郎冠者の見分役を太郎次郎の両冠者とし、兩人別々の性格を同果に収めたるは一段の工夫なりき。終局の處、大勢を舞台外に退かせ、シテ一人しょんぼりと残りて、小く「ハツクシヨ」の一結、今も尚ほ目にあり。苦心の功か不用意の妙か、我儕これを知らず。所謂良工の型として後代に伝へらるゝは是等ぞと思ひぬ」

5) 大畑末吉『完訳 アンデルセン童話集（一）』岩波文庫1984.5.16改版第1刷／1995.6.5第24冊

6) 次のとおり。

○EDWARD CLODD 訳 “FAIRY TALE FROM HANS ANDERSEN” NEW YORK: F. A. STOKES CO. [1895?]/hathi trust 所収

大臣 “What a fine pattern and what colours!” p.342

○ “FAIRY TALES AND STORIES, BY HANS CHRISTIAN ANDERSEN” NEW YORK: THE CENTURY CO., 1900/hathi trust 所収

詐欺師 “the fine pattern and the beautiful colors” p.474

○EDNA HENRY LEE TURPIN 編 “FAIRY TALES BY HANS CHRISTIAN ANDERSEN” NEW YORK: MAYNARD, MERRILL, & CO. 1904/hathi trust 所収

詐欺師 “the colors and the pattern were pretty” p.93

7) 次のとおり。

○アンデルセン原作、在居一士（河野政喜）訳『（諷世奇談）王様の新衣裳』春祥堂1888.12.19／『明治文化資料叢書 第9巻 翻訳文学編』風間書房1972.9.15所収。柳田泉解説あり。

「此模様（かた）や色合は如何でござると問かけまして」8頁、「是は綺麗だ、実以て綺麗だ、模様といひ、色合といひ……」10頁

○坪内雄三（逍遙）著「領主の新衣」『国語読本（高等小学校用）』巻6 富山房1900.10.2／1901.8.23訂正四版。架蔵。また阿部正恒『坪内逍遙の国語読本』バジリコ株式会社2006.12.22 所収。ただし原本奥付を収録しない。

「地質や模様が、類もなく立派なはいふまでもなく」22オウ

○奈倉次郎・菅野徳助訳「着道楽（文字通りには、王の新衣裳なり）」『小九郎次大九郎次／着道楽』三省堂1907.1.29 青年英文学叢書

「模様が綺麗で（the pattern very pretty）、色合が至極美しい（the colours extremely beautiful）」82頁

○木村小舟（定次郎）訳「一七 裸の王様」『教育お伽噺』博文館1908.10.15 家庭百科全書第13編

「オ、之れはどうも綺麗に織れた、色合と云ひ模様といひ、何一つ批難の入れ所がない」161頁

○アンダーセン原著、和田垣博士（謙三）・星野楽天（久成）共訳「第十九 裸体の王

様」『教育お伽噺』小川尚栄堂1910.10.13

「縞柄も色合も美しく」107頁

○上田万年訳「二 霞の衣」『安得仙（アンドルセン）家庭物語』鍾美堂1911.4.1

「さて模様が如何にも綺麗で、色合が至極美しいとは思召さぬかなどゝ尋ねた」34頁

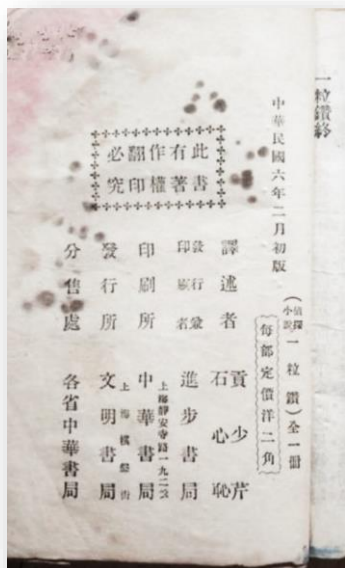
○近藤敏三郎訳「一 皇帝のお召物」『（新訳解説）アンダアゼンお伽噺』精華堂
1911.4.18

「何と此の模様は気が利いてゐませうが、此の又色合の美しさは他に御座りますまいな
どゝ」5-6頁

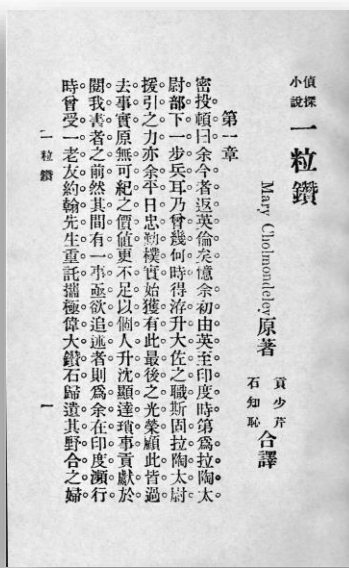
貢少芹訳『一粒鑽』の原作

『清末小説から』第149号（2023.4.1）に掲載。沢本郁馬名を使用。Mary Cholmondeley 原著、貢少芹＋石知恥合訳『（偵探小説）一粒鑽』（文明書局1917）の原作を指摘する。メアリ・チャムリ著『ダンヴァーズの宝石』1887である。

『（偵探小説）一粒鑽』全18章は本文に Mary Cholmondeley 原著、貢少芹＋石知恥合訳の表示がある。私が見ている影印本には奥付がない。孔夫子旧書網の写真を見ればそれが1924年1月再版であることがわかる。初版は上海・文明書局、中華民国六年（1917）二月刊行だ。



初版奥付は孔夫子旧書網から



影印本 本文 表紙



貢少芹漢訳『盗花』——研究者の誤解か？

貢少芹漢訳の1作である。別の1種について説明したことがある。翻訳という点で同じだから簡単に復習しておく。

(英) 莎士比原著、貢少芹訳意『(言情偵探小説) 盗花』(上海・文明書局、中華書局1916.6) という作品だ。上の『一粒鑽』とほとんど同時期に書かれた。こちらは「訳意」だった。本稿であつかう『一粒鑽』の「合訳」と似ているが完全に同じというわけではない。共訳者の名前は出されていない。

原作者の「莎士比」といえば普通に考えてシェイクスピアである。だから「シェイクスピア原著」という表記に研究者、目録作成者のほとんど全員が騙された。「莎士比原著」とあるのを見ただけで林訳批判を条件反射のごとく無意識に適用したのだ。作品は読まずに莎劇を小説化したものだと決めつけた。誤解の上塗りをしたというわけ。複数の人が間違った。

『盗花』の本文を読めば英国を舞台にした角書どおりの恋愛探偵小説である。しかも海賊が青年男子を誘拐して展開する物語だ。最後は海賊島を脱出した船上で戦闘が発生する。恋愛があり探偵が出てきて活劇でもある。

結局のところ莎氏あるいは莎劇とはまったく関係がない。私は貢少芹の創作ではないかと疑っている。

なぜ莎氏の名前を出したのか。その必要がないから戸惑う。それとも貢少芹が書く「莎士比」はあの莎氏を意味しないとでもいうのか。そうだとしたらまぎらわしい。それよりも作者不明の恋愛探偵小説を漢訳したという体裁をとっても不思議ではない。貢少芹はあえてそれをしなかった。莎氏の名前にしたほうが注目度は高くなるだろうという目論見か。

中国において莎氏についての知識は当時は少なかった。ラム姉弟『シェイクスピア物語』を底本とした林訳『吟辺燕語』(1904)が比較的よく知られているくらいのものだ。林訳批判が突如として巻き起こるのは1918年になってからになる。莎劇から直接漢訳した田漢の『哈孟雷特(ハムレット)』(1922年単行本)が出てくる以前でもある。莎氏の作品について詳しく知られているというわけではない。名前だけ聞く莎氏の作品だといえればある程度の販売増を期待できると考えたかもしれない。憶測にとどまる。

貢少芹が莎氏原著とした理由はそれくらいしか思いつかない。読んだ読者は莎氏原作だと本当に信じたのだろうか。莎氏が小説を書いたと思ったとしたら奇妙な話だ。貢少芹が意図した冗談だろう。それが一応の結論だった。冗談といわなくてはならないくらいに莎氏とは離れて遠い作品なのだ。

なお貢少芹訳にはほかに著名な原作者を掲げる作品がある。(法)大仲馬『(偵探小説)盗盗』(1915)、(英)哈葛徳『(奇情偵探小説)秘密女子』(1915。未見)などという。しかし莎士比の例が強い印象を残している。デュマとハガーの表記を真に受けることがむづかしい。実物を見ない限りなんともいえない。

その貢少芹が原作者 Mary Cholmondeley を英文のままに明記する。しかも石知恥という共訳者もあげている。実在の人物かあるいは「実知恥」のもじりかどうかはわからない。莎士比原著『盗花』には共訳者がいなかった。『一粒鑽』はそこが違う。角書に「偵探小説」とあるところが表面的には共通する。

Cholmondeley という作家は本当にいるのか。私には知識がないから確認する必要がある。これが出発点だ。

Cholmondeley について

調べれば Mary Cholmondeley (1859-1925) は実在したイギリスの小説家だった。Cholmondeley はチャムリと読む。

ついでながらイギリスの女性作家ハラデン (Beatrice Harraden 畢脱利士哈拉丁) の原作を漢訳 (訳者不詳) した『海外拾遺』(1908) があった。彼女の原作が漢訳されたのは私が知る限りその1作だけだ。清末の例がハラデンならば民初の唯一例がこのチャムリである (現代中国におけるチャムリについては別稿で述べる)。ふたりとも比較的多くの作品を書いている。しかし中国の読書界では別作品の漢訳を必要としなかったらしい。ただしそれで人気を広まらなかったと考えるのは早計だ。重版はしている。

『中国大百科全書・外国文学』(中国大百科全書出版社1982)、『外国人名辞典』(上海辞書出版社1988)、『外国文学大辞典』(春風文藝出版社1989) などには収録されない名前だ。チャムリの漢訳実例を示せば昔には岑礼また陳孟礼などがある。そういう例があるというだけ。原作者本人を指しているわけではない。なら

ば無理やり漢訳する必要もない。事実として貢少芹らは原作者名を漢訳していないのだ。

イギリス文学では著名な作家だとわかった。しかし清末民初の翻訳研究では言及がほとんどない。例外といえるのは楊玉峰『南社著訳叙録』（中華書局（香港）有限公司2012.12）だ。本稿の執筆途中で気づいた。楊玉峰はチャムリの漢訳を瑪麗・丘蒙徳莉とする。英文をそのまま読んだ。また『一粒鑽』の原作を特定している。筆者が得た結果と偶然に一致する。次に述べる。

『一粒鑽』の原作

チャムリの書いた多数の作品のなかから1作を探すことになる。このばあい手がかりは漢訳題名だ。『一粒鑽』といえばダイヤモンドである。それらしいチャムリの作品はないかと思えば「宝石 Jewels」を使うものがある。

その題名をもとにして調べると少し複雑な状況が出現した。

“The Danvers Jewels and Sir Charles Danvers”と題する書物がどこにも見えない。そうすると『一粒鑽』の原作はこれかと予測する。

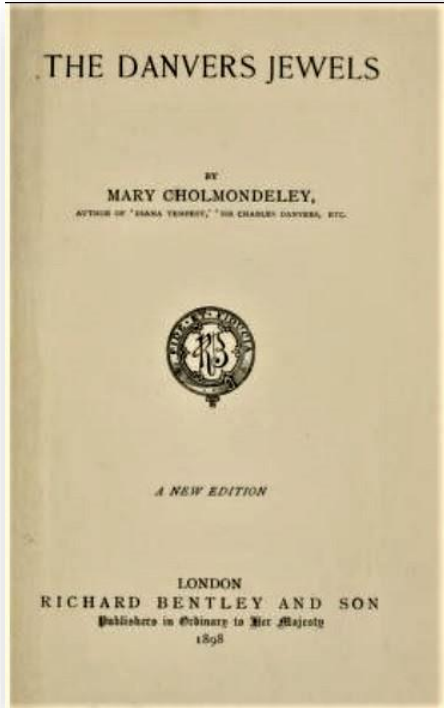
長い題名だ。さぐるとふたつの作品が合訂されていることがわかった。

それらはもとの題名と出版の年月が異なる。しかし普通に上記のような合冊本として流布している。

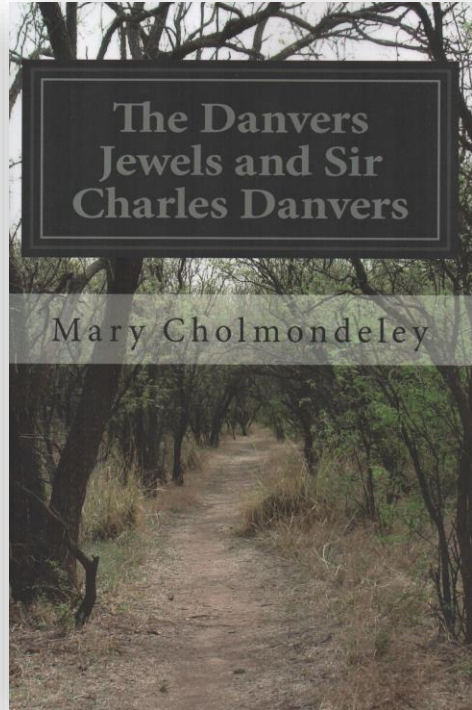
彼女の小説『ダンヴァースの宝石 The Danvers Jewels』は『テンプル・バー Temple Bar』雑誌に掲載された（未見）。1887年には最初の単行本が刊行されている（初版未見）。LONDON: RICHARD BENTLEY AND SON, 1898年版がある。

また LONDON: MACMILLAN AND CO., LIMITED / NEW YORK: THE MACMILLAN COMPANY, 1902 などを見ることができる。1898年版は3部に分けて全13章と終章（CONCLUSION.）とで構成される。別版では通して13章と終章だ。1887年といえばコナン・ドイルの『緋色の研究 A Study in Scarlet』が刊行された年である。

継続して『チャールズ・ダンヴァース卿 Sir Charles Danvers』1889年が出た。31章と終章が含まれる。



1898年版 ネットから



電字版を単行本にしたもの

それらを合本にしたものが上記の書物だ。くり返せば“*The Danvers Jewels and Sir Charles Danvers*” 1890年ニューヨーク版がネット（googlebooksあるいはproject gutenberg）でも読むことができる。刊年だけ示せばほかに1900年、1909年などがあって広く読者を獲得したとわかる。

前者の『ダンヴァースの宝石』は ALLEN J. HUBIN “*The Bibliography of Crime Fiction 1749-1975*” 1979 に収録される（p.80）。犯罪小説という扱いだ。

題名の異なる2種類とその合訂本が存在する。漢訳は18章だがチャムリ原作のひとつは13章プラス1章だし、もうひとつは31章プラス1章だ。章数が一致しない。漢訳は原作から離れている可能性がある。

どちらが『一粒鑽』の底本なのか。ともかく原文を比較対照するほかない。

貢少芹漢訳を見る

チャムリ著『ダンヴァースの宝石』と貢少芹漢訳『一粒鑽』の冒頭部分を引用して訳をつける。

【原文】 I was on the point of leaving India and returning to England when he sent for me. At least, to be accurate—and I am always accurate—I was not quite on the point, but nearly, for I was going to start by the mail on the following day. I had been up to Government House to take my leave a few days before, but Sir John had been too ill to see me, or at least he had said he was. And now he was much worse—dying, it seemed, from all accounts; and he had sent down a native servant in the noon-day heat with a note, written in his shaking old hand, begging me to come up as soon as it became cooler. He said he had a commission which he was anxious I should do for him in England. p.1

彼から来るように言われたとき私はインドを離れてイギリスに戻るところだった。少なくとも正確に言えば——私はいつも正確であるが——ちょうどその時というわけではなかったが、翌日の郵便船でほとんど出発しそうになっていたのだ。私は休暇をとるために数日前には総督府にいた。しかしジョン卿は私に会えないほど体調が悪く、あるいはそうなのだと少なくとも彼は言っていた。そうして今、彼はもっと悪くなり——すべての面から見て死にそうだった。そこで昼間の暑い中に現地の下男にメモを持たせて寄こした。それには涼しくなったらすぐに来てほしいと彼の震える年老いた手で書いてある。私がイギリスでやってくれるかどうかわからない頼みごとがあるというのだ。

話し手すなわち主人公が説明をはじめて一人称小説だ。読み進めればそれがミドルトン大佐 (Colonel Middleton) であることがわかる。

漢訳冒頭は次のとおり。

【漢訳】 密投頓曰。余今者返英倫矣。憶余初由英至印度時。第為拉陶太尉部下一步兵耳。乃曾幾何時。得洊升大佐之職。斯個拉陶太尉援引之力。1頁
ミドルトンはいふ。私は今イギリスのロンドンに帰ろうとしている。思

えば私がイギリスからインドに来たとき拉陶大尉部下の単なる一歩兵にすぎなかった。それがいつのまにか大佐の地位にまでのぼることができたのはひとえに拉陶大尉の推挙によるものだ。

チャムリ原作の冒頭は貢少芹漢訳と一致しない。ほとんど別物だ。インドをあとにしてイギリスにもどるという部分はそれらしくなぞっている。またミドルトンという人物も原作に出てくる。だが漢訳の拉陶大尉に相当する原文が見当たらない。ただし最後部分に名前が再登場する（138頁）。貢少芹の中では冒頭と末尾で一貫している。

中国の読者にとっては話し手のミドルトンが自分の略歴を説明するほうが物語に入りやすいだろう。貢少芹にはその意識があったのではないか。

ジョン卿（Sir (Ralph) John）が約翰と漢訳されるのは普通のことだ。貢少芹はひとしきりジョン卿の過去とミドルトンとの交流を説明する。ここも貢少芹の創作だ。そのあと原作の冒頭部分が漢訳に出現する。

【漢訳】 啓行之前一夕。老人忽遣侍者概斯卡脱至。貽書招余往。且言其有疾。4頁

出発の前夜、あの老人は突然下男のキャスカーを寄こし私に来るように書いてきた。また彼は病気だとも言っている。

ジョン卿の下男はたしかにキャスカー（Cathcart）という。概斯卡脱である。漢訳は英文原作そのままの直訳ではない。だが貢少芹の翻訳は細かい人名を拾い話の大筋をたどっているということが出来る。

衰弱した老人ジョン卿がイギリスに帰国するミドルトンに託したのはたくさんの宝石であった。袋からテーブルにあけた宝石についてジョン卿はなにやら意味不明な説明をした。

【原文】 I tore it off an old she-devil of a Rhanee's neck after the Mutiny, and got a bite in the arm for my trouble. p.6

反乱のあとのことだったがわしは年老いた女悪魔王妃ラーニーの首からそれを引きちぎったから腕に噛みつかれてな。

物語の最初にインドであることが明記されている。ラーニーはラジャの妻（延原謙は「ある王族の妻」とする）だ。インドの固有名詞と「反乱 Mutiny」を出してきた。チャムリの時代では読者はイギリスとインドの関係をふまえてすぐにその歴史的背景を理解しただろう。

学校の世界史教科書では「セポイの乱」と説明していた。昔の話だ。1857-1858年にインドでおきたイギリスに対する反乱である。現在はイギリス側からは「インド大反乱」といいインド側は「第1次インド独立戦争」と呼称が変化している。

ネックレスの入手先を説明しているようで何もいっていないに等しい。ジョン卿はインドでの商売に成功し長く住んでいた。インドで入手したにしても出所不明のあやしい宝石ということになる。ただ妙に生々しい説明を加えている部分に注目する。

【原文】 Look at those diamonds. A duchess would be poud of them. I had them from a private soldier. I gave him two rupees for them. p.6

このダイヤを見てくれ。公爵夫人はさぞかし自慢だっただろうよ。兵卒から手に入れたんだ。2ルピーでな。

公爵夫人と具体的だ。兵卒が彼女からそれを強奪した。いかにもありそうな話だ。ジョン卿がそれを2ルピーとタダ同然で入手したというのは本当かどうかはわからない。チャムリはわざと説明しない。漠然とした様子に記述している。

インドの反乱といっても中国では理解されないかもしれない。原文どおりに漢訳して注釈をつける方法もあった。だが貢少芹の工夫は原文の2ルピーをもとにして別の物語を作り出したところに見える。

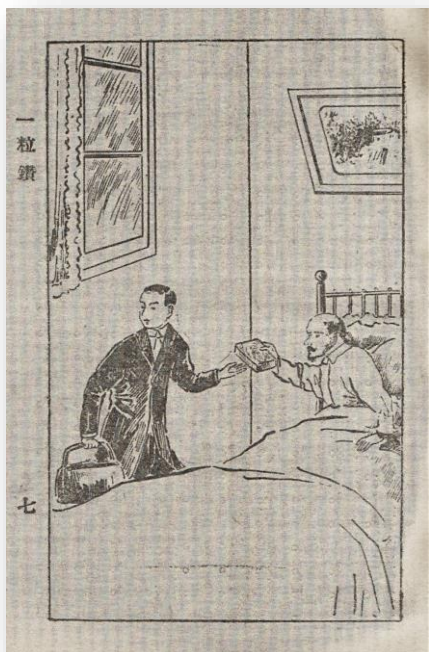
【漢訳】 是鑽為法国一貴冑婦為所御。彼往新嘉坡。行經海洋遇盜劫。嗣盜

為吾英駐印兵士所獲。故得是鑽。不知寶貴也。欲以是賞酒。冀博一醉。肆人疑為贗鼎。堅不可。適余往肆。見之。立予以二盧比購之歸。6頁

このダイヤはフランス貴族の婦人が所有していた。シンガポールへ行く途中で海賊に強奪された。盗賊はその後わが駐印英兵につかまった。兵士はこのダイヤが高価なものであることを知らず酒にかえて酔っぱらおうと思った。ところが店主は偽物だと疑い承知しない。ちょうどそこにわしが通りかかり直ちに2ルピーで購入して帰ったのだ。

貢少芹は「公爵夫人」「兵卒」「2ルピー」を利用して上のように書き換えた。原作があいまいで説明不足にしてあるのを補ったつもりだ。読者からすれば理解しやすくなった。

イギリスにいるラルフ・ダンヴァースにその宝石を手渡してほしい。ジョン卿はミドルトンにそう依頼するのだ。ラルフに会ったことはない。しかしその母親のことは知っている [And then he added, hoarsely, 'I knew his mother.']. その場面でダンヴァースの次男ラルフはジョン卿の名字であるという。チャムリはそれだけしか記述していない。秘密にすべき部分だと理解できる。



ダイヤを手渡すジョン卿

宝石をミドルトンに手渡す場面が絵図になっている。出版社から依頼された中国人絵師が描いたようだ。『盗花』の挿絵と同じ絵師かもしれない。ミドルトン（左）が若すぎるし軍人らしくない。宝石は袋に入れてあるのだが大きな箱のようにしてしまった。インドの家屋内は想像してそうなっらしい。原作にない挿絵を独自に掲載して違和感がある。

さて原文では人間関係について遠まわしに書かれているのはその事情があるのだ。しかし貢少芹にしてみればそこを明確にしなければ中国人読者の理解は得られないと考えたようだ。チャムリがわざとあいまいにした個所に光を当てた。

【漢訳】自言早歳。曾与同里之女郎梅麗。有嚙臂盟。更私訂婚約。事為其父母偵知。強嫁於喬雅淡浮斯為繼室。喬雅世居思滔滿頓埠。為一邑之富豪也。女子歸後仍不忘旧好。約翰亦不娶。期年産子一。名臘腐。実則約翰之血胤也。2-3頁

自分で次のように言った。若いころ同郷の女の子メアリと腕を嚙んで血を出すほどの誠実さで結びつきさらには密かに結婚の約束をした。それを父母に知られてしまい無理やりジョージ・ダンヴァース卿（Sir George Danvers）の後妻として嫁がされてしまった。ジョージはストーク・モートン（Stoke Moreton）に住む町一番の富豪だったのだ。彼女は嫁いだあとも昔のことを忘れずジョンもまた結婚はしなかった。1年後、男子を出産しラルフ（Ralph）と名付けたが実はジョンの血を引いていた。

「繼室」すなわち後妻だ。英語で **second wife** というがチャムリ原作に使用例はない。ジョン卿が会ったこともない人間に高価なダイヤを贈るという一見不自然な行為の背後にはなにかある。あくまでもにおわせているにすぎない。貢少芹は独自に創作したこの部分で梅麗（メアリ）を使用した。原作で出てくる伯母のメアリ（Lady Mary Cunningham）のことだ。伯母と継母の関係が複雑にみえる。

婚 姻 法

チャムリ原作は宝石をめぐる発生する殺人事件をあつかう犯罪推理小説である。ところが婚姻について曖昧な説明をする。あるいは言及はしても明確に説明しない。主要な部分ではないことはわかる。しかしチャムリの時代を背景にした特別なものだと推測できる。主人公がラルフの母親に面会する場面だ（引用文の下線は筆者）。

【原文】 I was introduced to an elderly lady whom I addressed for the rest of the evening as Lady Danvers, until Charles casually mentioned that his mother was dead, and that until the Deceased Wife's Sister Bill was passed he did not anticipate that his aunt Mary would take upon herself the position of step-mother to her orphaned nephews. p.50

私は老婦人に紹介された。その人を私は午後いっぱいダンヴァース夫人だとばかり思っていたのだった。チャールズは彼の母親が死去したこと、「死んだ妻の姉妹との結婚法案」が通過するまでは伯母のメアリが孤児となった甥の継母になることは期待していないと何気なく話してくれた。

なにを書いているかといえばダンヴァースの妻（チャールズの母）が死去したあと彼は妻の妹を後妻に迎えたということだ。

「死んだ妻の姉妹との結婚法案 the Deceased Wife's Sister Bill」はそのまの内容だ。イギリスにおいては死去した妻の姉妹と結婚することは禁止されていた。法案が通過して Deceased Wife's Sister's Marriage Act で成立するのは1907年になってからだ。チャムリの作品はそれ以前に書かれている。小説に書き込むくらいに話題となった法案だとわかる。あるいはチャムリの興味を引く出来事だった。

タブー扱いだったのは中国でも同様だ。陳独秀は姉妹婚であったことにより社会的な非難を受けていた。林紓から皮肉を受ける原因である。

貢少芹はこの部分をどのように処理したか。漢訳を見てみよう。

【漢訳】 見有一人降階迎迓。睨之則四十許麗人也。姿態如仙。豊韻独絶。

余自念是殆梅麗耶。無怪約翰為彼終身不娶也。於是脱帽致礼。56頁

階段を下りて出迎えてくれる人がいる。見れば40歳くらいの美しい人だ。仙女の姿態で艶やかさが抜きんでている。私はメアリだと思った。なるほどジョンが終身娶らなかったわけだ。そこで帽子を脱いであいさつをした。

貢少芹は原文を完全に無視した。中国における姉妹婚については口を閉ざしている。推理小説である本作には無用の記述だと考えた。

そう考えたのは日本語に翻訳した延原謙も同様である。例として示す。「レーフの次に紹介された老婦人を、私は、デンヴァ夫人だとばかり思ひこんで、チャールズからそれが母ではなく、母方の伯母に当るメアリ・カニングムであることを説明されて慌てたりした」（第5章280頁）

『一粒鑽』初版には「提要」（本稿末尾収録）が掲載されている。推理小説に粗筋を掲げるのは読者の理解を助けるためなのだろう。チャムリ原作があいまいにしているから親切心からの解説と思われる。上記の漢訳部分を簡略に表現して「野合之婦之子」である。正式に結婚せずに男子を生んだと赤裸々に書く必要があるという判断らしい。言うまでもなくチャムリ原文には「野合 illicit liaison」「私通 fornication, adultery」に類する単語は一切使用されていない。そこを貢少芹のようにすべてを説明してしまうと読者が想像する余地がなくなる。推理小説の楽しみを奪っているというべきだ。

チャムリの原作は犯罪推理小説である。宝石を預かったミドルトンの行った先々で殺人事件が発生する。たとえばミドルトンがジョン卿と別れたあとにジョン卿が殺害されたと知らされる。船中で知り合ったアメリカ人カーにイギリスでの滞在先のメモを渡した。そこは妹の住所だったがミドルトンが訪問すると転居していた。そのあとでその住居の住人が殺害されたのを知った。ミドルトンの関係する人間と場所に不幸が訪れるという一見奇妙で読めば巧妙な筋立てで進行する。その原因はジョン卿がミドルトンに託した宝石にあるのだ。

登場人物対照表

貢少芹の漢訳は冒頭部分が原文とは異なる。部分的な相違はいくつもある。訳

者が突然出現して説明する個所も見られる。ただし小説の大筋はたどっている。登場する人物は基本的に同じだ。英語をほとんどうまく音訳しているといえる。参考のために以下に主要人物の漢英対照一覧を掲げる。

- 密投頓 Colonel Middleton 主人公
約 翰 Sir (Ralph) John 主人公のインドでの知り合い、メアリの元恋人
解 因 Jane 主人公の妹
卡特禄 Valentine Carr アメリカの盗賊
錫瑪姆 Dulcima カー (Carr) の愛人＝別名：亜利尼 Miss Aurelia Grant
ラルフの偽りの婚約者
梅 麗 Lady Mary Cunningham 伯母でチャールズにとって継母 ジョン卿
の元恋人
臘 腐 Ralph Danvers メアリとジョン卿の子「野合之婦之子」
喬雅淡浮斯 Sir George Danvers メアリの夫
確而斯 Charles Danvers ジョージ卿と先妻の長男
伊非林 Evelyn Derrick 姪 ラルフと結婚する

多彩な人物が宝石をめぐる入り乱れる。ミドルトンがダンヴァース邸まで出向いて手渡した宝石が盗まれた。漢訳はその筋を追いながら結末が大いに異なる。

結末の相違

ミドルトンの預かった宝石を狙っているのは帰国の船中で知り合った親切そうなアメリカ人カーだった。インドのジョン卿を殺し関連場所を訪問して殺人を繰り返した。

宝石が盗まれると作者のチャムリは読者を誤誘導する。カーが犯人だ。いやチャールズが怪しい。宝石を盗んだ犯人は雪の降る中を汽車でロンドンに向かって逃走した。ところがその大雪のために列車は脱線した。それに乗っていたラルフの婚約者オウレリアは死亡した。カーが突然姿をあらわし横たえられたオウレリアの死体を確認すると出て行ってしまふ。

【原文】 As we looked, a hurried step came across the yard, a hand raised the latch of the door, and someone entered abruptly. It was Carr. For one moment he stood in the doorway, for one moment his eyes rested, horror-struck, on the dead woman, then darted at us, from us to the inspector, who was coolly watching him, and— he was gone! gone as suddenly as he had come, gone swiftly out again into the falling snow, followed by the wild barking of the dog. pp.208-209

見る間に急ぎ足の音が庭を横切りドアの門があげられ誰かが突然に入ってきた。カーだった。彼は戸口にちょっと立ち止まると恐怖に襲われた両眼を一瞬その死んだ女性に注ぐと我々を見た。それから彼のことを冷静に観察していた警部に眼をやると——彼はいなくなっていた。来るのと同じように突然行ってしまった。降りしきる雪の中を犬の激しい吠え声に追われながらふたたびすばやく出て行ったのだ。

居合わせた警部は追おうとするチャールズを引き留めた。彼の言葉によるとカーとオウレリアは夫婦で有名な宝石泥棒だったのだ。

原作は意外な結末をむかえた。読者にしてみればあっけなく終了したといえる。カーが静かにその場を去っていったのが衝撃的だ。逃亡したのだから今でもどこかで生きているのだろう。

ところが漢訳ではそこを大きく改変する。追われた卡特禄（カー）はピストルを発射して反撃してきた（134頁）。最後はつかまりロンドンに送られる。亜利尼（オウレリア）は負傷のため死亡した。カは毒薬の哥魯方（即緑気薬水名。氯気であれば塩素。不詳）をあおって自殺した。密投頓（ミドルトン）あての遺書を残していたのだった（136頁）。6頁半にわたる遺書は物語の粗筋をたどりながら事件の種明かしをしたものだ。大部分は貢少芹の創作である。

チャムリ原作のカーは逃亡してしまった。貢少芹の漢訳では書き換えて自殺させる。貢少芹の感覚では殺人まで犯す強盗は死亡して当然、むしろ死ななくてはならない。因果応報的な思考に支配されていたらしい。凶悪犯はそれだけ生への

願望が強いというのがチャムリ流の考えだった。そういう別の筋立てを許容する気は貢少芹にはなかったようだ。

結 論

『一粒鑽』の底本候補として2種類を提示した。『ダンヴァースの宝石 The Danvers Jewels』および『チャールズ・ダンヴァース卿 Sir Charles Danvers』だ。本文と訳文を検討した結果前者『ダンヴァースの宝石』が該当していると断言する。

ただし直訳ではない。作品名を見てもわかる。『ダンヴァースの宝石』が原作名だ。ダイヤを含んだ宝石全体を指している。しかし貢少芹は漢訳題名を『一粒鑽』にしてダイヤだけを強調した。原文の「宝石 jewels」をそのまま漢訳に使用してもいいようなものの『淡浮斯之宝石（亦珠宝）』ではない。イギリス人の名前を出しては中国の読者には理解がむづかしいとでも考えたか。その事情はわからない。『盗花』という予測不可能な題名を考えつくくらいだ。それに比較すればここは原作のダンヴァースがないだけはかなり忠実な漢訳ということになる。

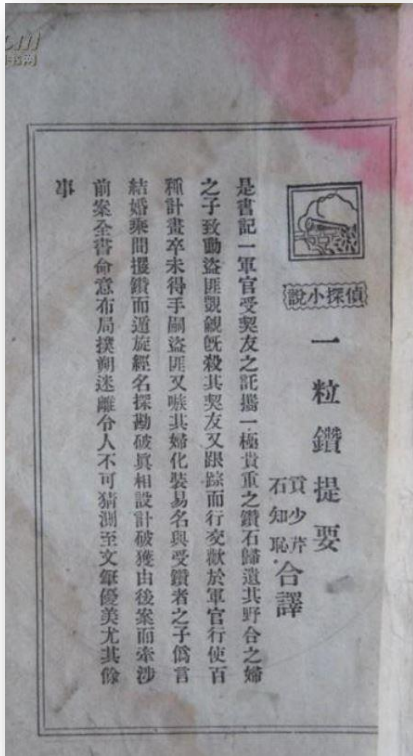
漢訳は原作の大筋と登場人物を借りているところまでは正しい。しかし随所に書き換えがある。原作者チャムリが隠しておきたかった、あるいは書くのをためらった箇所を貢少芹は簡単に暴露する。突然訳者が本文中に出現して解説をしはじめる。結末を大きく変更した。漢訳そのものが書き換えを基本にしていることを言わなくてはならない。

漢訳初版に掲げられた「提要」を資料として収録しておく。

初版所収（記号は筆者）

偵探小説「一粒鑽提要」貢少芹／石知恥合訳

是書記一軍官受契友之託、携一極貴重之鑽石、帰遺其野合之婦之子、致動盜匪覬覦、既殺其契友、又跟踪而行、交歡於軍官、行使百種計画、卒未得手、嗣盜匪又嗾其婦化裝易名与受鑽者之子偽言結婚、乘間攫鑽而遁、旋經名探勘破真相、設計破獲、由後案而牽涉前案、全書命意布局撲朔迷離、令人不可猜測、至文筆優美、尤其余事



【参考文献】

- メアリ・チャムリ (Mary Cholmondely) 著、延原謙訳「死の皮袋 The Danvers Jewels (1887)」『新青年』1929年10月増大号 (10巻12号)、11月号 (10巻13号)、12月号 (10巻14号)、1930年新年増大号 (11巻1号) 博文館。本の友社復刻。
- Mara Inglezakis, “Introduction to *The Danvers Jewels*” ウェブサイト Victorian Women Writers Project, INDIANA UNIVERSITY, 電字版 2011
- 楊玉峰「《一粒鑽》」『南社著訳叙録』 (中華書局 (香港) 有限公司2012.12

漢訳デラノイ『鉄錨手』の原作

『清末小説から』第150号（2023.7.1）に掲載。荒井由美名を使用。（英）般福德倫納著、商務印書館編訳所訳『（偵探小説）鉄錨手』（上海・商務印書館1906）の原作を特定する。BURFORD DELANNOY, *M. R. C. S.* (WARD, LOCK & CO., LIMITED, 1903) である。中村忠行の推測をたどりながら修正して正解を提示した。

『（偵探小説）鉄錨手』はバーフォード・デラノイ Burford Delannoy 原作の漢訳だ。漢訳題名を訳せば『錨の腕』である。探偵小説だから内容が想像できないようにしたのである。その意味ではうまい翻訳だ。

デラノイは筆名、本名は Adolphus Eugene Judge (1856-1931) というらしい (At the Circulating Library による)。

原作については中村忠行がすでに推測している。簡略化して示せば次のとおり。

[中村S3-48] 角書不記、光緒三十二年九月、説部叢書第六集第五編、H. BURFORD DELANNOY : “*THE MARGATE MURDER MYSTERY.*” 1902?

「？」の表示があることに注目すべきだ。重要な意味を持つ。中村は推測したが確定したわけではない。ついでながら中村の記す「H. BURFORD DELANNOY」は「H.」がなくても同じ。

書物全体の説明をしておく。私が見ている版本を示す。

商務印書館發行

家庭教育用書

五彩精圖方字二章	八
五彩看圖識字二册	角
五彩家庭教育畫二册 一面有圖一面有字兒童觀之自然識字	二角
五彩兒童教育畫十三册 【圖畫精工文字淺顯易懂】	每册七分
幼種唱歌一册 【以上五六歲兒童歌】	每册五分
幼種遊戲二册 【以上五六歲兒童】	每册一角
童話二集 【以上七八歲兒童】	每册一角
少年叢書已出十册	每册一角
少年雜誌一册	全册八角
新社會已出三册	每册一角
新說書一集 【以上十歲兒童變遷之用】	每册二分

壬午年九月初版
中華民國三年四月再版

(鐵錨手一册)
每册定價大洋貳角

原 著 者 英國般福德倫納
譯 述 者 商務印書館編譯所
發 行 者 商務印書館
印 刷 所 上海北河南路北首寶山路
上海棋盤街中市
商務印書館

總發行所 商務印書館
分售處 北京 德勝門外大街
濟南 經二路東首
青島 天津路
漢口 漢口英租界
廣州 惠愛路
長沙 太平街
重慶 陝西街
成都 都郵街
香港 德輔道中

★此書有著作權翻印必究★
商務印書館 宣統三年四月初三日呈報五月十四日註冊

奥付



表紙（孔夫子旧書網）

(英) 般福德倫納著、商務印書館編譯所訳『(偵探小説) 鉄錨手』42章 上海・商務印書館、丙午年九月初版／中華民國三年四月再版、説部叢書初集第五十五編

表紙はリボン文様の初集本だ。同じ「説部叢書」の元版ならば第六集第五編（光緒三十二年歳次丙午（1906）季秋初版）がある。また初集本には民国二年十二月再版（孔夫子旧書網に写真あり）も出ているという複雑さだ。1913年12月に再版して翌1914年4月にふたたび再版するのはわけがわからないと言う人もいるだろう。しかしこれが事実だ。

本稿の目的は中村が提示した原作を検討しさらに正確なものを探索することだ。そう書けばご理解いただけるだろう。正解は別のところにあった。

1 中村忠行の説明

該当部分を中村論文から抜き出して紹介する。『鉄錨手』について寅半生「小説閑評」*1から引用したあと次のように説明している。

その原書については、未だ比照する機を得ないが、私は『マルゲート殺人事件』（“*The Margate Murder Mystery.*” 1902）ではないかと、想像してある。蓋し、物語中の医師「馬互」は Margate の音訳と見られるからである。又、華訳の奥附には「商務印書館編訳所訳印」とあるが、これ亦売込み原稿なるべく、訳者は留日学生か留日学生上りの人物であつたらう。訳文は、いささか雅致に闕ける憾みがあるが、その反面、晦渋ならず、平凡に墮ちずといった長所もあり、まづまづの翻訳と言つてよい。殊に注目されるのは、文中に「！」・「？」などの符号や、会話を示す「」といった記号が、頻用されてあることである*2。

少し長く引用したのには理由がある。中村が漢訳作品の原作を探索する際の手順をみずから説明しているからだ。参考になる。

中村は商務版「説部叢書」本の複写を手元において説明している。ただし漢訳の『鉄錨手』は見ているが英文原作は見えていない。「未だ比照する機を得ない」と書いているとおりで。

英文そのものがなくても探究の矛先を緩めなかった。その姿勢に敬意を表する。登場する医師「馬互」は Margate の音訳だろうと目星をつけた。原作特定のひとつの手がかりとしたのだ。

上記の文章に注目する個所は3点ある。

注目点1：原作を“*The Margate Murder Mystery.*”（1902）ではないかと推測した。

注目点2：商務印書館編訳所訳印とするのは売込み原稿であろうと説明した。

注目点3：訳者は留日学生か留日学生上りの人物であろうと推察した。

注目点1の原作書名について別表記のバージョンがあるので補足しておく。Burford

Delannoy, *THE MARGATE MYSTERY*. NEW YORK: BRENTANO'S 1901
(open library による) だ。

刊年と題名が異なる。1901年本はアメリカ版だ。1902年の後版で書名に変更を加えたように思う。内容は両者ともに同一である。

あらかじめ言っておく。該作品は『鉄錨手』の原作ではない。前出のとおり医師「馬互」が Margate だと中村は推測した。しかし Margate (マーゲート) は英国の地名だ。マーゲートのホテルで女性が死体で発見された。そういう新聞報道があって物語が進行する。残念ながら該作については推測外れである。中村は英文原作が入手できなかった。1970年代日本のことだからそれはしかたがない。

2 中村説の影響

中村の推測したものは原作ではないことが今では判明している。すると意外なところに影響を与えていたことが浮き出てきた。中国の文献にそれを見る。

鉄錨手(The Margate Murder Mystery)	[英] 般福德伦纳(H. Burford Delannoy)著 商务印书馆译	1906. 9	上海: 商务印书馆	说部丛书六集第五编
		丙午九月(1906)/1914. 4 再版		说部丛书初集第五十五编

任翔、高媛主編『中国偵探小説理論資料(1902-2011)』602頁

上記の表は任翔、高媛主編『中国偵探小説理論資料(1902-2011)』(北京師範大学出版社2013.3. 602頁)にある。樽目録第3版(齊魯書社2002)から無断借用した。なぜわかるのかその理由がある。“THE MARGATE MURDER MYSTERY”を掲げる文献は中村論文を引用した樽目録第3版にしか存在しないからだ。その典拠を示さない任翔らは無断借用したといわれても否定できない。しかも原文には存在している「？」を削除した。どうみても任翔らが原作として独自に特定したことを示している。

原作が間違っているとすると典拠を示していないから他人に責任転嫁することができない。自己責任ということになる。

3 注目点にもどる

注目点2の商務印書館編訳所訳である。中村はその表記についてひとつの説明を行なった。売り込み原稿であろうという。

確かに訳者には個人名を出すばあいと編訳所名義にするものに分かれる。売り込み原稿であれば買い取り原稿でもある。言われてみればそうかもしれない。中村以外に解説する例を見ない。可能性のひとつを示した。卓見である。

もうひとついえば訳者が商務印書館の社員であるばあいもあるだろう。編訳所に所属していればそうなる。人物を特定する材料はない。商務印書館社員が売り込みしたにせよそれ以上のことは不明である。

ところがこの『鉄錨手』については別のところに解答が出されていた。珍しいといえる。後で述べる。

注目点3は翻訳者が日本留学経験者だという。唐突に出されている。根拠が示されていない。中村の長年にわたる研究の経験からそう結論したのだろう。そのような例を多く見てきたところからくる考えだと思う。

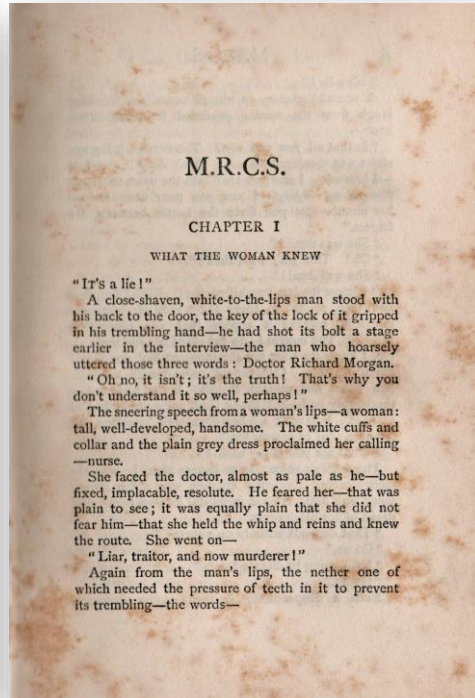
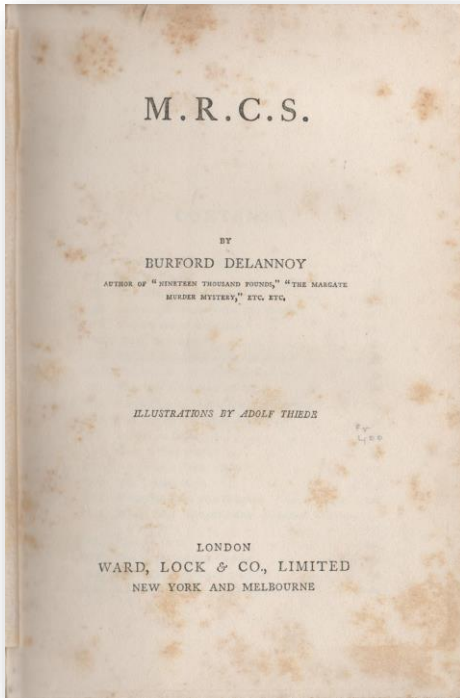
こちらも注目点2に関連して解明されることになる。

4 原作の特定

漢訳作品の原作を探求するばあい多作の作家では接近方法に工夫が必要だ。最終的には作品本文を照合する。しかし効率よく探索するためには章の数を見ることがある程度有効だといえる。清末民初の翻訳はよほどの省略をしない限り原作の章立てを守っているばあいが多い。ただし絶対的な基準にはならないことはいうまでもない。個々の作品による。

『鉄錨手』の漢訳は42章だ。デラノイの作品もそこを見る。前に紹介した *THE MARGATE MYSTERY* は16章だった。章立てからして違う。

そうして見つけたのが BURFORD DELANNOY, *M. R. C. S.* (WARD, LOCK & CO., LIMITED, 1903) である。



冒頭を分割して対照する。

【原作】 “IT'S a lie !”

A close-shaven, white-to-the-lips man stood with his back to the door, the key of the lock of it gripped in his trembling hand—he had shot its bolt a stage earlier in the interview—the man who hoarsely uttered those three words: Doctor Richard Morgan.

「ウソだ！」

ヒゲをきれいにそり白い唇をした男がドアを背にして立ち彼の震える手に鍵を握っていた——彼は話をする前にドアにかんぬきを掛けていたのだ——「ウソだ」と3語をかすれ声でもらすその男はリチャード・モーガン医師である。

【鉄錨手】 「卿妄言耳」言者為一少年。面色蒼白如死灰。倚戸側足而立一手持鑰。作欲啓戸状。其人業医。馬姓互名小字礼佳。

第二章
鐵錨手

「聊妄言耳。」言者爲一少年。面色蒼白如死灰。倚戶側足而立。一手持鑰。作欲啟戶狀。其人業醫。馬姓。互名。小字禮佳。時一婦應聲曰。「否。否。妾何曾妄言者。」言訖。作乾笑。婦長身玉立。風致娟好。衣灰色領袖。俱白一望而知爲看護婦也。少須。婦指馬互而謂曰。「惡賊！殺人賊！」馬互顛聲曰。「聊妄言耳。」婦冷笑曰。「君惟能言此四字耳。謀殺樓上之婦人者。非君也耶？君目妾爲誰耶？當君潛入彼室時。妾假寐。以窺之。厥後注炭強水合融於婦口者。非君也耶？料強水瓶於婦手者。非亦君也耶？」馬互曰。「渠已死！」婦曰。「胡陽託不知爲誰？殺之者實即君耳。君既殺之。復以瓶置其手。俾人見之。信爲自裁。君須知今日之妾不似一載前之愚蠢。易爲人播弄矣。」馬互曰。「聊將何求？」婦曰。「君固雷亞勝愛妻之情。適雷以其婦死。戚甚。已返寢室。雷君誠篤人也。前此從未嘗一疑及其不貞。」

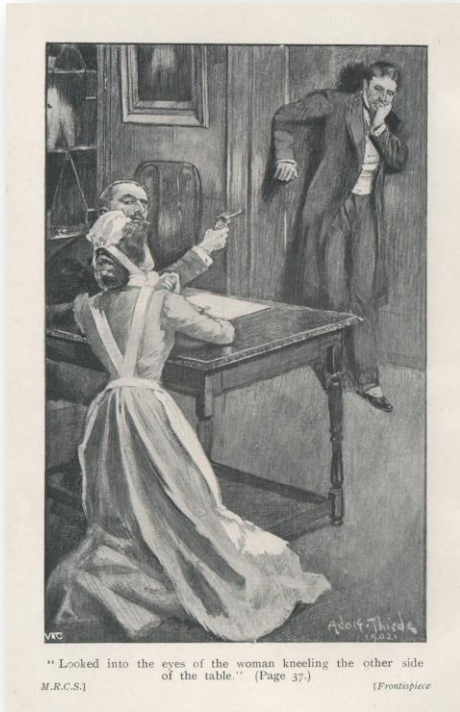
『鉄錨手』

「でたらめだ」そういうのは若者だった。顔色は蒼白で死人のようだ。ドアに寄りかかり片手に鍵を持って開けようとしていた。その人は医者で姓は馬、名は互、小字は礼佳である。

「man (男)」が漢訳では「少年 (若者)」になるのは許容範囲内か。顔の表情については原文どおりにはなっていない。「面色蒼白如死灰 (顔色は蒼白で死人のようだ)」と書き直した方が中国の読者には理解しやすいという訳者の判断かもしれない。

同じ流れかと思うのが医者の名前を記述する部分だ。「馬姓互名小字礼佳」は日本語になおせば「姓は馬、名は互、小字は礼佳である」とせざるをえない。それが普通である読者には不思議に感じなかっただろう。しかし分解すると奇妙なことになる。姓は「Mor (馬)」名は「gan (互)」小字は「Richard (礼佳)」だ。なぜ「姓馬互名礼佳」と漢訳しなかったのかと疑問に感じる。漢語では「馬互」という姓はないという意識が働いたものだろうか。原作が英語だから漢語の慣例

から外れてもかまわない。それが翻訳ではないか。だが『鉄錨手』の訳者はそうとは思わなかったらしい。それにしても原作者を漢訳して般福德倫納にしているだけに不統一だと感じる。



看護婦絵図

【原作】 “Oh no, it isn't; it's the truth! That's why you don't understand it so well, perhaps!”

The sneering speech from a woman's lips—a woman: tall, well-developed, handsome. The white cuffs and collar and the plain grey dress proclaimed her calling—nurse. p.7

「いえ、違うんです。本当です！たぶんそれがあなたがよく理解しない理由なのですわ！」

女性の口から冷笑的な言葉が出た。その女性は背が高く、健康そうで美人だった。白い袖と襟、無地の灰色の衣服は「看護婦」とよばれていることを公表していた。

【鉄錨手】時一婦応声曰「否否。妾何曾妄言者」言訖。作乾笑。婦長身玉

立。風致娟好。衣灰色。領袖俱白。一望而知為看護婦也。1頁

その時ひとりの女性が答えて言った。「いえいえ。ウソではありません」
そう言い終わると作り笑いをした。女性は背が高く美しく灰色の衣服で襟
と袖が白い。一目見てすぐに看護婦であることがわかった。

中村のいうように漢訳に記号「」を導入して原文をほぼはずさず漢語に移している。

5 『M. R. C. S.』が『鉄錨手』になる理由

さて原作の『M. R. C. S.』は Membership of the Royal Colleges of Surgeons of Great Britain and Ireland (MRCS) の略称である。イギリスアイルランド王立外科医院会員と言われる。あるいは Member of the Royal College of Surgeons という説明もある。簡単にいえば外科医師の資格を有していることを証明するものだ。

ドイルの『バスカヴィル家の犬 The Hound of the Baskervilles』（1901-1902 雑誌連載、単行本1902）第1章冒頭に出てくることを思い出す人もいるだろう。ステッキに「To James Mortimer, M. R. C. S., from his friends of the C. C. H.,」と刻印されているのがそれだ。こちらでは「王立外科医学校免許証所持者」と翻訳されている*3。

原作の書名はひらたくいえば単なる『外科医』である。それを見た漢訳者にはいくつかの選択肢があったはず。漢訳するばあいはそのまま『外科医生』にするのもひとつのやり方だ。しかしそれでは探偵小説らしくない。考えて『外科医生案』とか『外科医生殺人案』でもよかった。ところが出てみると『鉄錨手』という題名になっている。その理由はなにか。

探偵小説の漢訳であるばあ題名に無頓着だと犯人をばらしてしまうことがある。訳者の知恵の出どころとっていい。

『鉄錨手』は被害者のひとりが「腕に錨の刺青を入れていた」からだ。その片腕が瓶に入れられていたという猟奇的な場面に由来する*4。

意外に思われる題名が「偵探小説」という角書とよく合致しているように思う。原作が『M. R. C. S.』だと判明すると関連する文章が浮かんでくる。

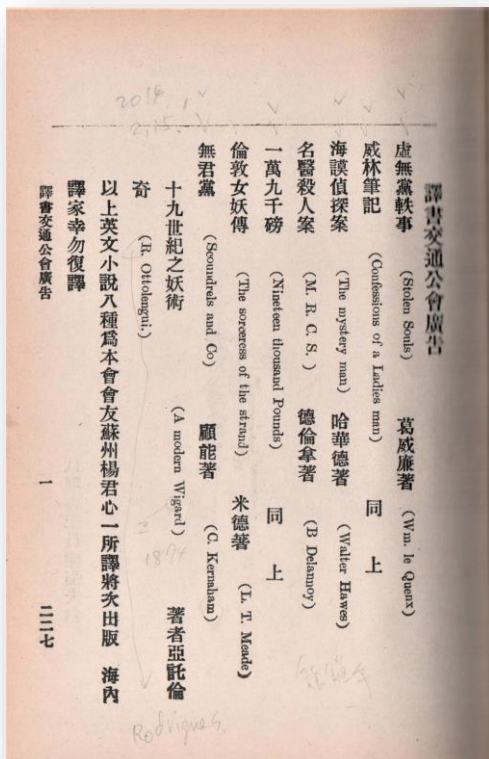
6 漢訳者は楊心一

「訳書交通公会広告」（『月月小説』第2号 光緒三十二年十月望日1906.11.30）である。

訳書交通公会とは漢訳書についての情報を共有交換することを目的にする組織だ。翻訳中の作品について原書名、翻訳名および著者の姓名を該会に提出する。公会でそれをまとめ会員に配布するという。つまり翻訳が重複しないように調整する意味も持たせる。発起人は周樹奎桂笙だ。賛同者に呉沃堯趺人、汪慶祺惟父の名前があげられている（以上は該誌第1号の「訳書交通公会試辦簡章」による）。

その具体的な書名が該誌第2号に掲載された。

英文小説8種が原作名とともに掲げられている。その中の2種類がデラノイ原



作なのだ。

名医殺人案 (M. R. C. S.) 徳倫拿著 (B Delannoy)

一万九千磅 (Nineteen thousand Pounds) 同上

さらにはその訳者まで明らかにしている。「本会会友蘇州楊君心一所訳」という。

『M. R. C. S.』についていうと上に見る漢訳名、原作名、原作者漢訳名などは実際に刊行されたものと微妙に異なる。

作品名、原作者についての表記に変化がある。訳書交通公会→単行本の順に並べる。

名医殺人案→鉄錨手／徳倫拿→般福徳倫納、

細かな手直しがあったとわかる。公会広告の『名医殺人案』は仮題だったらしい。『鉄錨手』と比較しても劣らない題名だと思う。徳倫拿と徳倫納では末尾1字が異なる。

奇妙なのは発表時間だ。『月月小説』第2号の刊行は光緒三十二年十月である。ところが商務印書館の初版がそれ以前の同年九月だ。なにかちぐはぐな感じを受ける。告知をしたときにはすでに商務印書館から刊行されているのはなぜなのか。しかも楊心一の名前が消滅して商務印書館編訳所名義となっている。売り込み訳稿は実名をだしてはならないというわけではなかろう。楊心一の名前がなくなった理由はわからない。

7 楊心一について

楊錦森 (字は心一、1889-1916) は光緒三十三年 (1907) に郵伝部高等実業学堂商務専科を卒業、同年アメリカのペンシルベニア大学に留学、5年滞在した後の1911年に帰国した。『時報』『小説時報』『東方雑誌』『法政雑誌』などに翻

訳を含んだ多くの文章を発表している。1913年からは中華書局英文編集部勤務した。数えの二十八歳で逝去*5。

郵伝部高等実業学堂は1905年に南洋公学が改名したものだという。

楊心一の翻訳は複数が『月月小説』に掲載されている。それは渡米の1907年以前のことだ。『神州日報』にも掲載される翻訳がある。時期的に留学とかぶさっているように見える。留学の前に手渡していたのかもしれない。『小説時報』掲載分は帰国後のことである。

『鉄錨手』の初版は1906年だから留学以前だ。英語が堪能だったからこそアメリカ留学生に合格したのだと思われる。

その略歴からいえば楊心一はアメリカ留学生出身ということになる。ただし『鉄錨手』については留学以前の翻訳だから留学歴とは関係がない。

8 『(偵探小説) 雙指印』のこと

デラノイに関連して『(偵探小説) 雙指印』に触れておく。

(英) 培福台蘭拿著 未署訳者名「(偵探小説) 雙指印」『東方雑誌』2年1-5期 光緒31.1.25-5.25(1905.2.28-6.27)

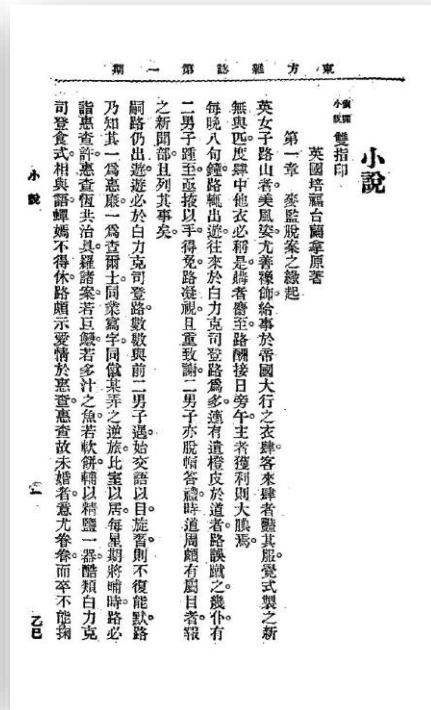
のちに商務版「説部叢書」、「小本小説」叢書に収録された。これについても前出中村の説明がある。引用する。

この小説(注: 雙指印)の原作者については、『説部叢書』本では奥付にその記載がなく、誰とも判明しない。従つて、阿英氏の書目にも、これを逸してゐるが、『東方雑誌』掲載の方には、「英・培福台蘭拿著」とある。これを何と訓むか。「般福德命納」と同列に置いて、H. Burford Delannoyの音訳と見ることも不可能ではなささうであるが、未だその自信はない。

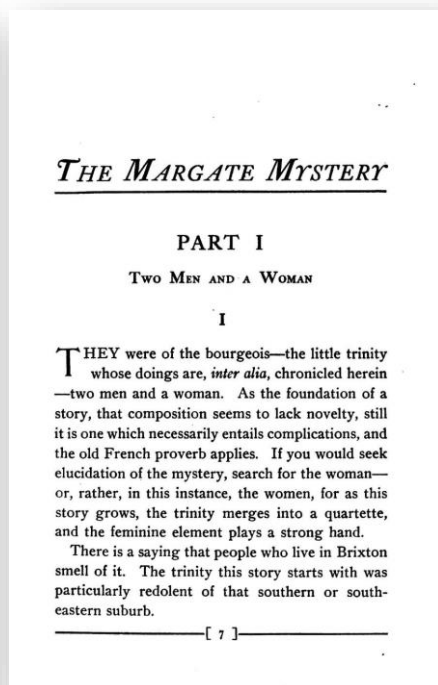
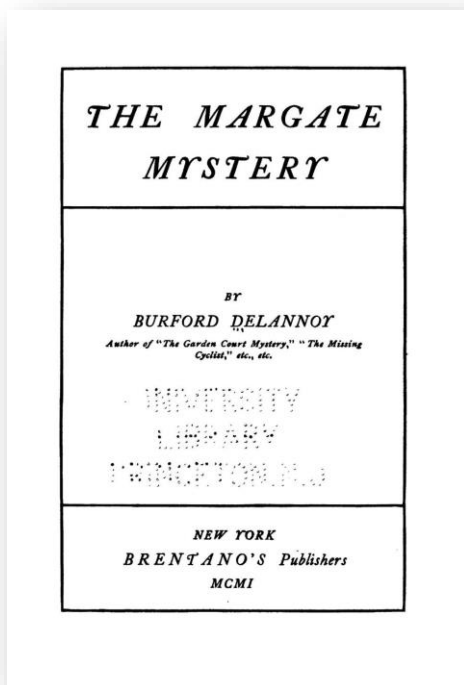
51頁



孔夫子旧書網



『東方雜誌』



中村は培福台蘭拿についてバーフォード・デラノイと読むことを躊躇した。その必要はなかった。まさにその通りデラノイなのだ。しかも「雙指印」の原作こそが前出 *THE MARGATE MYSTERY*. 1901 (または、*THE MARGATE MURDER MYSTERY*. 1902) の漢訳なのである (原作と漢訳の書影を掲げる。ただし漢訳は省略部分があるから英文原作とは一致していない)。

楊心一がデラノイを漢訳して般福德倫納あるいは徳倫拿だった。『雙指印』は培福台蘭拿だ。微妙に違う。しかし違いは違いである。

商務印書館が版元である『東方雑誌』に連載された。訳者名は不記。その後商務版「説部叢書」に収録されて商務印書館編訳所訳だ。編訳所の社員が漢訳したと考えていいだろう。記号の「」は使用していない。それを多用した楊心一とは異なる。

【注】

- 1) 寅半生「小説閑評」『遊戯世界』第1-18期／阿英編『晚清文学叢鈔・小説戯曲研究巻』北京・中華書局1960.3上海第1次印刷／台湾・文豊出版公司1989.4影印本
- 2) 中村忠行「清末探偵小説史稿——翻訳を中心として(2)」『清末小説研究』第3号 1979.12.1。49頁
- 3) 富山太佳夫訳、小池滋監訳『詳注版 シャーロック・ホームズ全集 5』ちくま文庫、1997.8.25。330頁。C. C. H. についてワトソンは何かの狩猟クラブ (the Something Hunt) ではないかという。ホームズがチャリング・クロス (Charing Cross) ではないかと答えてチャリング・クロス病院 (Charing Cross Hospital) が導き出される。335頁
- 4) 該当する部分を原文と漢訳から引用する。

It is in the shape of an anchor, a tattoo mark on the same hand that the finger was missing from. p.395／蓋青某右手缺一指。而腕際鏤一鉄錨。91頁

We went further, Sir, and I was horrified to find on the shelf in a room a bottle. In that bottle, Sir, was a hand—a hand without a finger, and on the hand was a tattoo mark of an anchor. p.395／余於一室獲一瓶。瓶中貯一人手。手缺一指。腕際鏤一鉄錨。92頁

- 5) 略歴については次を参照した。姜栄剛「晚清留学生小説家楊心一生平事迹新考」『許昌学院学報』2012年第1期（第31卷第1期）

『老残遊記』初版の刊年

——孟晋書社に關係して

『清末小説から』第135号(2019.10.1)に掲載。神田一三名を使用。孟晋書社刊行の『老残遊記』初集20回本は刊年不記である。従来は1906年に出版されたことになっている。推測にすぎない。書籍そのものに出版年月が記載されていないのだ。特定するために第2次資料を使用する。天津『大公報』に孟晋書社営業停止の広告がある。それによると廃業は光緒三十二年三月初九日(1906.4.2)である。当然廃業以前の出版になる。すなわち『老残遊記』初集の刊行は光緒三十二(1906)年二月半ばから三月はじめの期間である。

劉鉄雲『老残遊記』初集単行本の刊行年月は不明である。初版を見ればそれがわかる。刊年の記述はない。

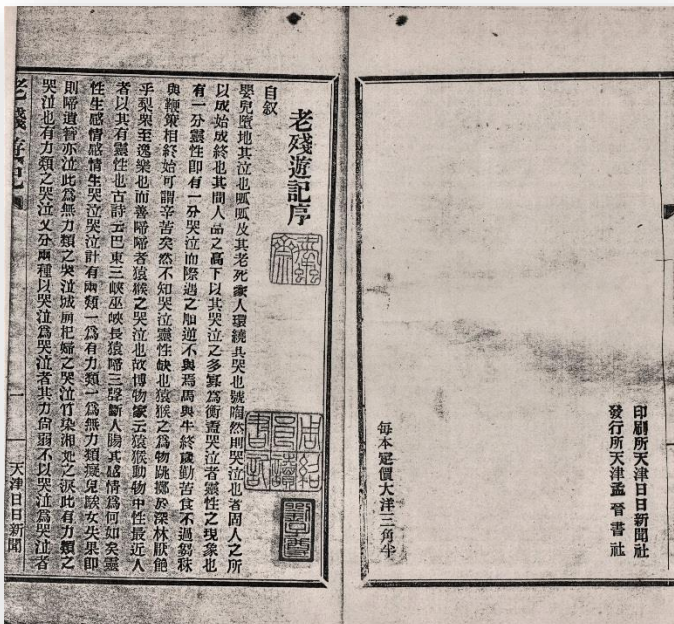
「印刷所天津日日新聞社／發行所天津孟晋書社／每本定価大洋三角半」とだけ記述される。

書誌的には「無出版年月」あるいは「刊年不記」と書くほかない。ただ従来から推測はされていて光緒三十二年(1906)だろうという。初集と二集の刊行状況をふまえての予想にすぎない。具体的な根拠が示されたことはないように思う。

判明している事実とそうでないものを区別する必要がある。箇条書きにする。
○は確認している、△は推定、推測を示す。

- 1 『繡像小説』卷1-13 第9-18期連載 ○癸卯八月初一日(1903.9.21) — △甲辰(1904)五月

- 2 『天津日日新聞』全20回 ○乙巳九月初一日（1905.9.29）－△光緒三十二年二月十五日（1906.3.10^{ママ}[9]）
- 3 劉鉄雲乙巳（1905）日記 ○「九月二十九日一紙」「十月初三日卷十一」「十月初四日卷十五」「十月初五日卷十六」「十月十九日二紙」
- 4 天津孟晋書社 刊年不記（△光緒三十二年（1906））
- 5 二集『天津日日新聞』全9回 ○光緒三十三年七月初十日（1907.8.18）－十月初六日（11.11）



天津孟晋書社本

説明する。

1の『繡像小説』連載は巻13（内容は原稿第14回）で中止となった。主編李伯元が原稿第11回を没書にしたからだ。第9期の刊年は表記がある。しかし第18期は刊年不記だ。推定した「甲辰（1904）五月」は複数の新聞広告にもとづく。精度はかなり高いと判断している。

2の『天津日日新聞』に第1回からあらためて再度掲載された。郭長海が「自序」を確認している（『劉鉄雲の佚詩和几件聯語』『清末小説』第33号 2010）。

連載の終了月日は不明のままだ。ただし推定されている。劉徳隆は1回分の字数を基礎にして第20回の掲載日を光緒三十二年二月十五日（1906.3.10^{ママ}[9]）とした

(『劉鶚年譜長編』644頁)。新聞の実物を見ることができない。この推測は参考のひとつだ。

3の劉鉄雲乙巳日記にある第11回は没書を復元したもの。その翌日から新しく第15、16回を書き始めた。九月にはすでに新聞連載が始まっている。九月二十九日を含んで十月初三日に原稿復元をやりおえた。時間的な流れからして不自然ではない。

4の単行本刊行年は推測だ。1905年頃に『天津日日新聞』連載があった。それを根拠にして単行本は1906年ではないかというのが従来からの説明だ。状況証拠だけだから説得力に欠ける。本稿はこの部分に新しい資料を提出する。

5の二集は同じく『天津日日新聞』に連載された。こちらの刊年は確定している。

以上の材料をもとに初版単行本の刊行年月を考える。

前出劉徳隆の推測「光緒三十二年二月十五日(1906.3.10¹⁹)」を参照する。

すると初集単行本の刊行は年月を絞ることができる。

初集の『天津日日新聞』連載中に単行本化はされないだろう。連載終了後になる。大まかにいって初集連載完結の推測光緒三十二年二月から二集連載開始の確定光緒三十三年七月までだ。新暦でいえば1906年3月以降から1907年8月以前になる。

この推定はあくまでも推定にすぎない。物的証拠があつて可能性としていうことができるのは光緒三十三年七月(1907.8)以前には単行本が出版されていたということのみ。

ただしこの説明には弱点がある。二集連載開始前に刊行されたという証拠はあるのか。ない。二集を新聞に連載しながら初集単行本が出てくることはありうる。そうなれば1907年末まで可能性が広がる。確定できない。

もう少し予測の幅を狭められないか。単行本初版そのものに記述がない。第1次資料がないのであれば第2次資料をさがすことになる。刊行を示唆するほかの文献がないか。それを提示することが本稿の目的だ。

本稿では発行所の孟晋書社に注目する。

該書社は『老残遊記』の発行所として知られている。だがそれ以外に名前を見

たことがない。

天津には当時『天津日日新聞』『大公報』『中国報』『中外実報』『津報』『民興報』などの刊行物がある。キリスト教関係の出版社も営業していた。孟晋書社はそれら出版組織のなかのひとつだ。ただし該社の主要な出版物は文芸関係では『老残遊記』初集のみらしい。清末にそれ以外の書物を刊行した例をみつけることができない。別の分野の刊行物があるかどうかは不明だ。

その孟晋書社が自らの活動を停止する新聞広告を出している。結論を先にいえば別の組織に買収された。吸収合併である。すなわち孟晋書社の廃業広告といっていだろう。



「孟晋書社告白」／天津『大公報』光緒三十二（1906）年三月十九日

買収された孟晋書社と買収した孟晋書局協記の2社が並んで広告を出した。天津『大公報』光緒三十二年三月十九日（1906.4.12）から六日連続である。掲載場所は移動しても内容は同一だ。

「孟晋書社告白」茲因本社於光緒三十二年三月初九日截止憑中盤興協記新東執業所有以前進出款項以及各戸寄售書款項等情均由前社創辦人自行理直與協記接辦人無涉特此声明

本書社は光緒三十二年三月初九日限りで盤興協記を仲介人とし新理事に業務執行を任せました。すべての収支費用および各店の委託販売書の費用などは元の創設者が処理をします。協記の引継ぎ人とは関係がありません。ここに宣言します。孟晋書社広告

「孟晋書局協記告白」本局頂盤天津孟晋書社以光緒三十二年三月初十日為始重新開張添加協記字樣嗣後進出等項概以協記図章為憑所有前社進出各款項及寄售等款由前社創辦人理取概與協記無涉特此布告

本書局は天津孟晋書社を譲り受けました。光緒三十二年三月初十日より新しく開業し「協記」を付け加えます。以後、収支などの費用は協記の印鑑を証拠といたします。元書社の収支費用および委託販売などの費用はすべて元の創設者が処理します。協記とは関係がありません。ここに宣言します。

買収した孟晋書局は「協記」を付け加えたただけだと説明する。しかし見出しは「書社」ではなく「書局」だ。これは社名変更だろう。それを含めての新しい開業である。

両者が強調するのは孟晋書社廃業に伴う残務整理、それも主として金銭関係の清算が主となっている。中国の当時の出版社は書店を兼ねており店頭販売も行なう。また自社刊行物だけでなく他社の出版物も委託販売をするのが普通の形態だ。それらの代金清算について責任の所在を明確にした広告だとわかる。

以上の広告から『老残遊記』初版刊行の下限が判明する。すなわち孟晋書社が営業停止した光緒三十二年三月初九日（1906.4.2）以前の出版になる。存在しない孟晋書社が『老残遊記』を刊行することはできないからだ。

これに前述の『天津日日新聞』連載終了の推定光緒三十二年二月十五日（1906.3.10⁷[9]）以後を組み合わせる。

本稿の結論は次のとおり。

『老残遊記』初集の刊行は光緒三十二（1906）年二月半ばから三月初めの期間である。旧暦の二月半ば、三月初めと幅をもたせるのは日にちが特定できなければ正確な新暦に換算できないからだ。

通説の1906年刊行をあらためて確認した。違うのは資料に基づいて同年二月末から三月初までの間に絞り込んだところだ。

劉家公認の贋作『老残遊記』

『清末小説から』第137号（2020.4.1）に掲載。神田一三名を使用。百新公司が刊行した『老残遊記』上下編がある。胡適が贋作だと指摘して有名だ。それ以来取り上げる研究者はいない。劉大紳が百新公司本について証言をしている。見れば劉大紳ら劉家の人々が出版を公認した作品であった。

表題の「劉家」とは劉鉄雲の子孫を指す。劉鉄雲自身は「劉氏」と称して区別する。その劉家の人たちが刊行を許可した贋作『老残遊記』という意味だ。「劉家公認の贋作」など聞いたことがないと思う。私が本稿ではじめて使用する。

贋作の存在は1925年に胡適が指摘して知られることになった。胡適が使用した用語は「偽作」だ。偽作という点のみが強調されて現在にいたる。研究者には周知のことだ。

しかしそれが劉家公認だとしたらどうだろう。ありえないと思うのが普通ではなかろうか。

胡適の「偽作」認定は強烈だった。偽作だと明言されてしまった書籍だ。研究者がその思い込みから自由であることはむつかしい。しかし必要な材料はすでに数十年前から提出されている。先入観なしに読めば真相にたどりつくことができる。

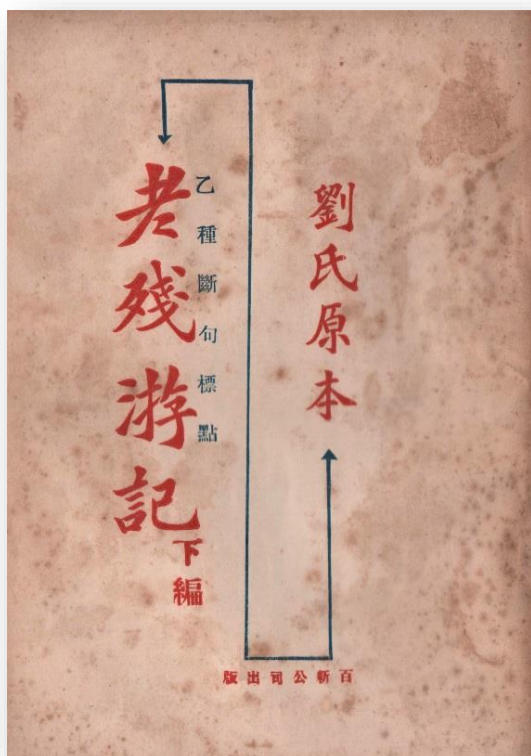
厳密に把握しなければならない。前半20回は劉鉄雲の本物で後半20回が贋作の『老残遊記』だ。それがどのようにして成立したか。以下において説明する。

1 いくつかの版本

阿英によれば甲乙の2種類がある*1。

甲種本は線装石印1924年刊。乙種本は洋装鉛印で同年刊。ともに百新会社が出版元だ。表紙に「劉氏原本老残遊記」と書かれていると紹介する。『老残遊記』で劉氏となれば著者は劉鉄雲に決まっている。だから阿英は該書の著者名を記述しない。著者名をどのように表示するかが特別に重要だという認識がなかった。

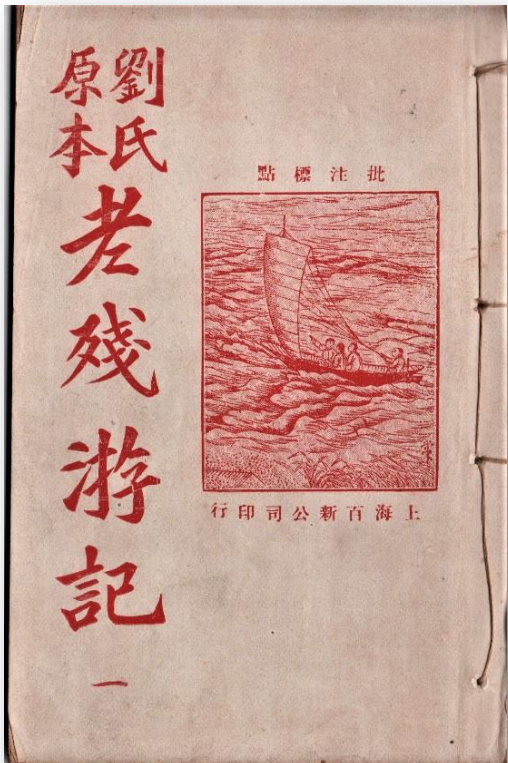
架蔵のひとつは洋装活版2冊1925年三版だ。「乙種断句标点／劉氏原本」で上下編、原著者：丹徒劉鉄雲、点校者：許嘯天、発行者：徐鶴齡、上海百新公司、中華民國十三年十一月初版／中華民國十四年十月三版とある。



乙種

原著者を劉鉄雲としており普通の表示に見える。しかしこれには裏の事情がある。

もうひとつは線装石印4冊1928年本だ。ただし贋作を含まない。表紙に「劉氏原本」と表示する。上編20章のみ。原著者：丹徒劉鉄雲、校閲者：澄江徐鶴齡、上海百新公司、中華民國十七年八月初版、丙種。阿英のいう甲乙のほかに丙種もあることがわかる。



丙種

原著者に劉鉄雲と表示するのは後の重版である。贋作の初期版本は基本的に洪都百鍊生とする。劉鉄雲名を使用するか否かが分かれ目となる。理由があるのだ。

百新公司刊行の初版は1916年8月に出た（初版は百新公司本を指す。以下同じ）。それ以後、判型、表紙意匠、印刷方式などを変化させながら増刷をくり返している。後版のひとつの奥付を見れば1923年4月の十九版あるいは1934年6月二十六版がある。劉徳隆は1937年5月二十九版をあげる*2。

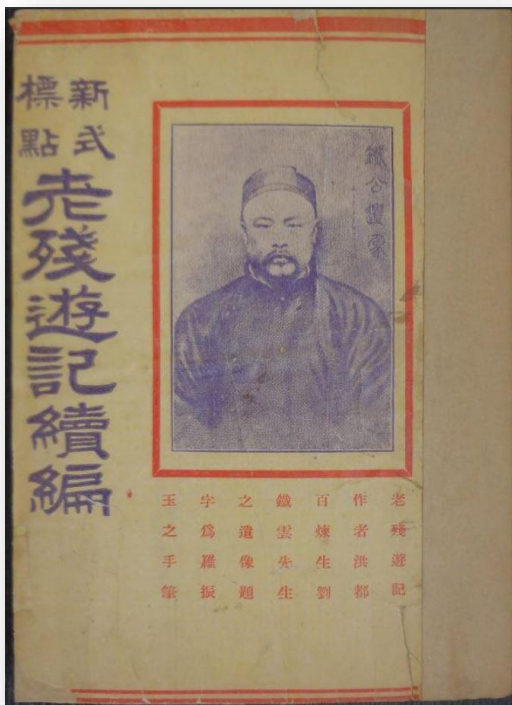
出版元の百新公司については朱聯保編撰『近現代上海出版業印象記』（1993）*3が簡単に紹介している。それによれば1912年に徐鶴齡が創設した。最初は百新図書公司といいのちに百新書店と改名したという。1930年代からは張恨水、周

瘦鷗、李涵秋らの小説を出版した。本稿で示している百新公司是百新図書公司と同じ意味と考えていだろう。記録によれば1917年から1953年まで存在している。

2 不思議な肖像

清末小説で重版される作品はごく少数に限られた。ほとんどの作品が雑誌初出で終わりだ。幸運にも単行本になったとしても初刷りでとまる。南亭亭長「文明小史」でさえ『繡像小説』連載終了後の1906年に商務印書館から単行本で刊行されたに過ぎない。しかも著者名は記載していないのだった。一般読者がその刊行を知らないもの当然だろう。李伯元の名前で再登場したのはなんと約50年後のことだ。阿英の叙引がついた北京・通俗文藝出版社1955年本である。数種類を除いて清末小説はそれほど残りにくい。

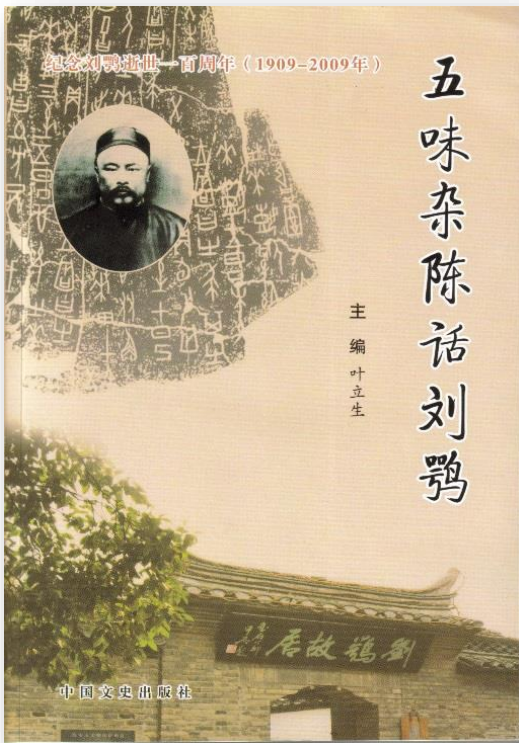
ところが百新公司系『老殘遊記』は以上だけでも版数は十分に多い。これほどあるのは珍しい。



また別に洪都百鍊生劉鉄雲『（新式標点）老殘遊記続編』第21-40回（華北書局1931.10。孔夫子旧書網より）が出ている。これは贋作部分のみを単行本にしたもの。表紙に「老殘遊記作者洪都百鍊生劉鉄雲先生之遺像題字為羅振玉之手筆」と説明する。本文は贋作だから劉鉄雲の名前を出せば偽の看板だ。

その表紙を飾った劉鉄雲の肖像は当時としては希少の部類に属す。よく見る劉鉄雲の写真（『鉄雲臚龜』）とは異なるという意味だ。「鉄公遺象」という題字は羅振玉の筆になるとも明らかにした。劉鉄雲と羅振玉の関係を知っていればなるほどと納得のいく説明だ。

一般に出まわった肖像ではない。劉鉄雲の親族から入手したものだろう。この「鉄公遺象」が再び公開されるのは葉立生主編『五味雜陳話劉鶚』（北京・中国文史出版社2009.3）まで待たなくてはならない*4。



該書は百新会社が刊行を計画していた続編の原型である。書名、内容とも一致する。ただし作者を劉鉄雲とするのは百新会社とは直接の関係はない。念のためにいっておく。華北書局だから出版社が異なる。また1931年という刊年からし

て本稿でいう「劉家公認の贋作」には含まない。ただの贋作だ。それも海賊版だと思う。

この華北書局本には不可解なことがあるとふたたびいう。洪都百鍊生劉鉄雲と明記するのはその後の文献によって虚偽を追加したとわかる。ただ普通は見かけない劉鉄雲肖像*5を表紙に使用しているのはなぜなのか。肖像を劉大紳が所有していたことが現在はわかっている。それが1931年刊行の該書に掲載されている理由がわからない。何度も書くのはあまりにも不思議だからだ。表紙に使う許可を劉家から得ていたのか。肖像は劉大紳所有だからなにかしらの関係はあったはずだ。不明なままにする。

疑問はまわって戻る。劉家が贋作者に劉鉄雲の肖像を提供するだろうか。かなり奇妙であるのは事実だ。『続編』は1931年の出版だから1916年初版本に比較すると時間的にだいぶ後の刊行物になる。出版社は違うが本文は百新公司本と同じ。

どれくらいの数が刊行されたのかわからないくらいに版数が多い。それも基本的には百新公司本だけだ。海賊版を除いて1社独占出版のような印象を受ける。これには理由がある。

いくつかの謎をはらんでいる。だが一般の読者には興味のない話かもしれない。一連の百新公司本は1937年当時奥付を見るかぎり二十九版まで増刷するくらい販売され続けた。それ以降の版本は追跡できない。それを見てもおおいに歓迎されたとわかる。

3 胡適が偽作と指摘

一方で胡適が「老殘遊記序」（『老殘遊記』上海・亜東図書館1925.12）においてそれが偽作であることを指摘した。

彼が示す版本は上下両巻で「全本」「照原稿本加批増注」と書いてあるという。胡適は出版社名は出さず1919年刊とだけ記述する（版数不記）。書いてなくとも百新公司本であることは明白だ。

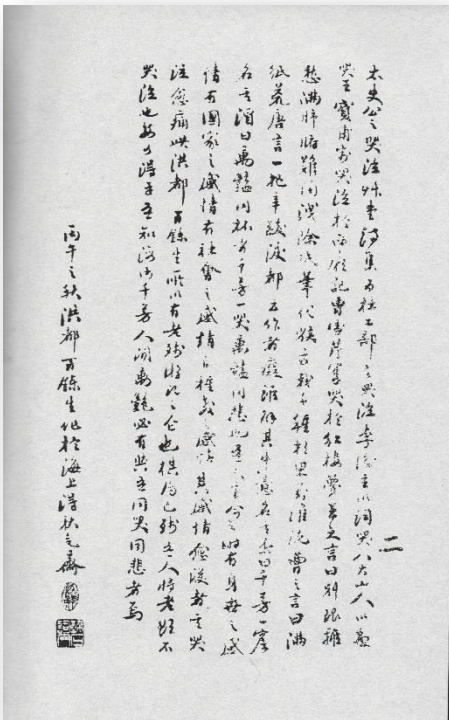
その奥付に「著述于清光緒丙申年山東旅次」と記述する箇所を胡適はとらえる。

あとで示すが手元の1923年十九版にも確かに小活字でそのように印刷されている。百新公司本のいくつかに見ることができる。その記載が偽物であるのは明らかだ。

丙申1896年は庚子1900年の五年前だし原序が記すのは丙午（1906）之秋だから年数が合わないといふ胡適は主張した。

胡適が庚子を基準に置くのは「老殘遊記」の執筆時間を「庚子（1900）の乱後に書き始め丙午（1906）に完成した〔此書作于庚子乱後，成于丙午年〕」（23頁）と考えたからだ。これは胡適独自の把握であり根拠はないといつていい。

執筆開始を庚子後とするのは間違っていないが大ざっぱすぎる。特定しているとは言えない。叙に「丙午之秋洪都百鍊生記於海上得秋氣齋」と明記する百新公司初版本その他がある。



百新公司初版（影印）

胡適はその「丙午之秋」を疑うことなく信じた。今だからそれが虚偽であるとわかる。劉鉄雲の「自叙」に日付はない。叙が書かれたのは作品完成後だと胡適は考えた。「丙午之秋」を根拠とする。正しくない。劉鉄雲は『天津日日新聞』

にあらためて連載を始めるにあたり自叙から発表を開始している。光緒三十一年乙巳年九月初一日（1905.9.29）だ（郭長海33）。

胡適はそこにある捏造年月を根拠にして百新公司の40回本は「偽作」で絶対間違いないと宣言したのだった〔四十回本之偽作，絶対無可疑〕（37頁）。

偽作であるという胡適の指摘が正しくないとはいわない。後半の第21-40回はまさに贋作である。問題は胡適による決めつけだ。前半20回の真作を含んだ全体を偽作と言った。そうして真相が見えなくなった。

贋作『老殘遊記』だという指摘は学界に影響を与えた。胡適の文章が公表されて以来、贋作百新公司本について取り上げる研究者はいない。せいぜいが版本を説明して贋作もあると言及するくらいのことだ。どういう由来の贋作なのかを深く探索する専門家はいなかった。贋作は贋作というだけで見捨てられるほかない。

ただし胡適の文章が公表されたあともそれに関係なく百新公司本が売れて版数を重ねたのは前述の通りだ。

私は別の視点からこの百新公司本をながめる。

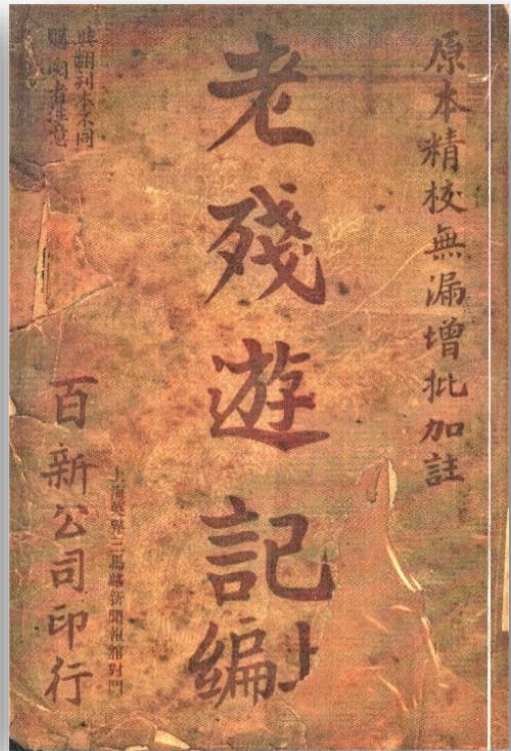
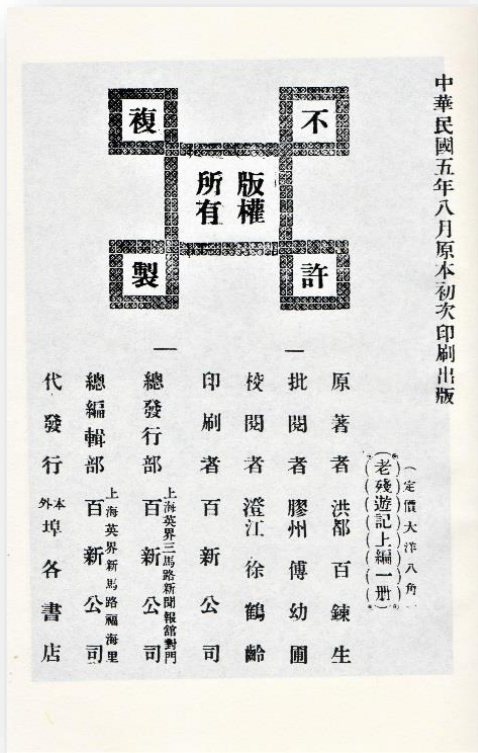
確認する。百新公司本『老殘遊記』は前半が劉鉄雲の本物で後半が他人による贋作である。胡適は「上下両巻」全体が贋作であるかのように印象操作した。違う。実態は本物と贋作が組み合わさった異形の書物だ。

洪都百鍊生は誰なのか不明だった時期が長くつづいた。著者が劉鉄雲であるという事実がどのような経緯で社会へ知られていったのか。本稿はその軌跡をたどる試みのひとつである。手がかりのひとつはこの贋作にある。

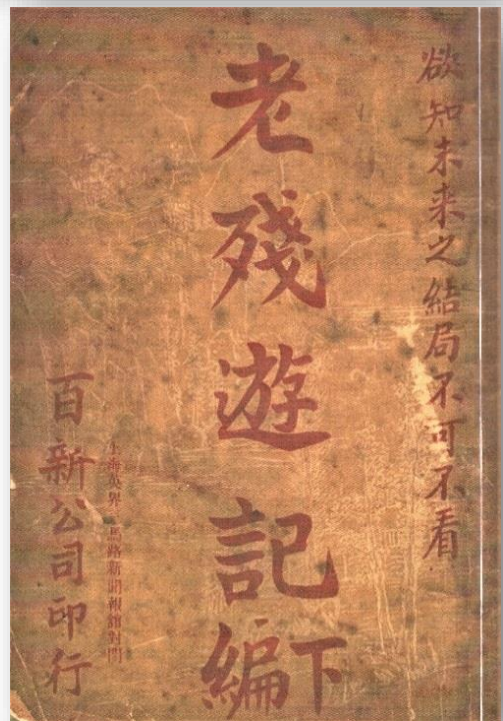
4 あらたな展開

贋作の初版（影印本）をあらためて見る。

『老殘遊記』上下編2冊だ。上編表紙の右側に「原本精校無漏増批加註」、左側に「与期刊本不同／購閱者注意」と示す。奥付は原著者：洪都百鍊生、批閱者：膠州傅幼圃、校閲者：澄江徐鶴齡、上海・百新公司、中華民國五年八月原本初次印刷出版だ。初版が1916年であるのは確認できる。下編表紙の右側は「欲知未来之結局不可不看」と変更した。



初版影印本 上編表紙與付



下編表紙 奥付なし

初版には「著述于清光緒丙申年山東旅次」はない。胡適がよった1919年版にはある。また1923年版でも確認している。後版でわざと追加したようだ。

下編の奥付は影印されていない。ないはずはないと思う。底本とした版本にたまたま奥付がなかった可能性はある。前出劉徳隆論文では初版について奥付の著者は「前人」とする(41頁)。この「前人」には重要な意味がある。後で触れる。実物の初版下編を見ていないから奥付の有無については判断を保留しておく。

気になるのは表紙に「与期刊本不同」と表示した部分だ。ここの「期刊」は『繡像小説』以外には考えられない。百新会社の編集者はそれを知っている(後述)。知る人は少数のはずだ。

次に示すのは同書重版本(複写)である。

『老殘遊記』上下編 表紙は『劉氏原本老殘遊記』。上編奥付は原著者：洪都百練生、批閱者：膠州傅幼圃、校閱者：澄江徐鶴齡、上海・百新公司、中華民國五年八月照劉氏原本印行出版／中華民國十一年四月第十八次重印出版／中華民國十二年四月第十九次重印出版。下編奥付は著者：前人のほかは上編と同じ。

胡適は「全本」「照原稿本加批増注」と説明していた。上記版本の奥付は「上下／編四十章増批加注」だ。版によって表現が異なるらしい。

初版の原著者は正しい。後版では上のように「洪都百練生」と誤植する。同音だし紛らわしい漢字だからしかたがない。

1916年初版、あるいは1923年十九版という刊年が要注意だ。いずれも胡適の垂東図書館本が1925年に刊行される以前であることにご注目いただきたい。つまり胡適が該本の「序」において偽作だと指摘する前の刊行物である。胡適以前には誰も百新公司本の後半が贋作だとは思っていない。区別するための一般的基礎知識がない時代だった。

十九版の上編表紙は「劉氏原本／老殘遊記上編／精校無漏増加批註／注意／百新公司印行」と詳しくなる。下編表紙は絵図を変え3行目を「欲知未来之結局不可不看」とする。初版からの流用だ。部分的に異同はあるが残りは基本同文である。

この「注意」を見る(記号は筆者)。

有所權版
製複許不

中華民國五年八月照劉氏原本印行出版
 中華民國十一年四月第十八次重印出版
 中華民國十二年四月第十九次重印出版
 上編四十四章增批加注
 老殘遊記上編一冊
 定價大洋八角
 善遠於清光緒丙申年山東德天

原 著 者 洪都百練生
 批 閱 者 膠州傅幼圃
 校 閱 者 澄江徐鶴齡
 刷 印 者 百新公司
 總 發 行 部 百新公司
 發 行 人 徐鶴齡
 代 發 行 外埠各書店

劉 氏 原 本
 老 殘 遊 記
 上 編
 精 校 無 漏 增 加 批 註



注
 此書原本 共四十章 分上下兩 編在清光 緒丁酉歲 將全書之 半披露於 天津日日 新報南華 後京津滬 書坊摘抄 印成鉛石 印小本並 將其原文 割裂改動 本公司 以是為之 誠特登得 此兩編之 原本印行 公之同好 一字不謬 願愛諸君 鑒別是幸

百 新 公 司 印 行

有所權版
製複許不

中華民國五年八月照劉氏原本印行出版
 中華民國十一年四月第十八次重印出版
 中華民國十二年四月第十九次重印出版
 下編四十四章增批加注
 老殘遊記下編一冊
 定價大洋一元

著 者 前 人
 批 閱 者 膠州傅幼圃
 校 閱 者 澄江徐鶴齡
 刷 印 者 百新公司
 總 發 行 部 百新公司
 發 行 人 徐鶴齡
 代 發 行 外埠各書店

劉 氏 原 本
 老 殘 遊 記
 下 編
 款 知 未 來 之 結 局 不 可 不 看



注
 此書原本 共四十章 分上下兩 編在清光 緒丁酉歲 將全書之 半披露於 天津日日 新報南華 後京津滬 書坊摘抄 印成鉛石 印小本並 將其原文 割裂改動 本公司 以是為之 誠特登得 此兩編之 原本印行 公之同好 一字不謬 願愛諸君 鑒別是幸

百 新 公 司 印 行

本書は原本全40章で上下両編に分かれる。光緒丁酉（1897年）の『天津日日新報』に前半を發表した。南方革命後に北京天津上海の出版社が抄録して鉛印、石印、小本に印刷して原文を分断し改変した。弊社はそれを遺憾なことだと考え特に原本両編を探し出し一字の違いないものを刊行する。ご愛顧をお願いしたい〔此書原本共四十章分上下両編。在清光緒丁酉歲將全書之半披露於天津日日新報。南革後京津滬書坊摘抄印成鉛石印小本並將其原文割裂改道。／本公司以是為之憾。特覓得此兩編之原本印行公之同好一字不漏。願愛諸君覽別是幸〕

出版元による宣伝文であることを心得て読む必要がある。虚偽を含んでいるという意味だ。個別の真偽を区別しなければならない。

光緒丁酉（1897年）の『天津日日新報』に前半を發表したと説明する。「新報」は「新聞」の誤り。誤植であるにしても1910年代の時点で『天津日日新聞』それ自体を出すのはきわめて稀だ。現在でも新聞名を天津『日日新聞』と誤記する中国人研究者は多い。はるか昔にはほぼ正しい新聞名を書いているのはめったにない。

1916年初版の表紙にはこの「注意」は見えない。1934年二十六版あるいは1937年二十九版にもない。少なくとも1922年十八版と1923年十九版には存在する。

傅幼圃は「老残遊記下編序」において『天津日日新聞』を提示した。それを表紙の「注意」に引用したと考えられる。その時編集者が新聞掲載の年について「清光緒丁酉歲」と余計な字句を挿入した。『天津日日新聞』は事実だが掲載を1897年とするのは嘘である。

「南革」は「老残遊記」の中で「北拳」とともに使われる。小説内では南方の革命運動を指す。表紙の「注意」に使用してここでは辛亥革命を言っていると考えていいだろう。北京天津上海の出版社と続ける。

当時『老残遊記』を刊行した北京の出版社は見当たらない。天津であれば孟晋書社の活版本がある。1906年だから辛亥革命以前だ。説明と矛盾する。百新会社の編集者が孟晋書社本を知っていたかどうかはわからない。上海で出た小本と

いえば商務印書館1913年本だ。

ここの京津滬は通常の用法で中国大都市という意味なのだろう。厳密なものではない。一方で百新公司は原本を入手して本文を厳格に校正したことを宣伝する。

「注意」のなかで提示する掲載年が事実ではない。丁酉1897年にわざと誤ったのは奥付に原著者洪都百鍊生へいぜんに添えて「著述於清光緒丙申年山東旅次」と記したからだ。胡適の指摘した箇所である。丙申1896年の執筆にして発表年との整合性をとろうとしたと思われる。予言の書であることを強調したかった。わかっているのにわざと誤った記述にした。虚実が錯綜しているから記事の信憑性が低下するのもしかたがない。

傅幼圃「老殘遊記下編序」を読めばそこから貴重な証言をいくつか抽出することができる。

次のように書く。洪都百鍊生著「老殘遊記」は『天津日日新聞』にはじめは連載された〔洪都百鍊生所撰老殘遊記始披露於天津日日新聞報陸續登載〕。著者名も「新聞」も正しく表示している。

その序文執筆の日付は「民国元年歳在壬子嘉並月望日（旧曆十二月十五日〔1913.1.21〕）」とする。1916年出版の書籍につけたにしては新曆1913年の序ではだいぶ時間に差が生じている。その時間差はどうして生じたのか。理由はあるのだ。

上編には錢啓猷序が収録されている。その日付は「中華民國五年六月」だから1916年8月刊行と矛盾しない。

『天津日日新聞』に言及しているのが異色である。ただし天津・孟晋書社と初出の『繡像小説』には触れない。不徹底だからやや不可解だ。ここで初版表紙左側にある「与期刊本不同／購閱者注意」が手がかりになる。「期刊」は初出の『繡像小説』を指す。それとは百新公司の内容が異なると注意をうながす。すなわち雑誌初出では原稿第11回が没書にされていることを知ったうえで書いている。1916年に初出の『繡像小説』とのちに単行本の内容が異なるなど知る人は本当にわずかだ。よほど事情を知る人だとわかる。それには事情があるのだ。

「老殘遊記」が『天津日日新聞』に掲載されていた。それを把握している人は当時としては劉鉄雲の関係者以外にはほとんど存在しないといってい。それを

序で書いているからには百新公司主任徐鶴齡（該書奥付に校閲者と発行人として記述される）からも事情を聞いたのだろうと推測される。

傅幼圃の説明のおおよそは次のとおり。

傅幼圃は『老殘遊記』を愛読し自分で注釈をつけていた。壬子（1912）年に上海で百新公司主任徐君（注：鶴齡）と話したおり「老殘遊記」の話になった。彼（徐鶴齡）が探して入手した原稿は上下編だ〔弊公司兎有原稿係上下両編〕という。傅幼圃は下編を読んで興味深く感じたので評語をつけて出版を勧めた。

傅幼圃の序が壬子となっているのは徐鶴齡と面談した時間をもとにしているとわかる。ふたりが会って話したのは事実だろう。少なくとも百新公司本が刊行された1916年以前だ。その年壬子が本当かどうかは本人にしかわからない。

壬子1912年以前の『老殘遊記』単行本といえば天津・孟晋書社、上海・商務印書館（1907未確認）、上海・神州日報館（1907未見）などがある。傅幼圃が書いた時間が正しいとすれば以上のいずれかを読んでいたことになる。

傅幼圃が上で述べているなかで興味深いのは下編原稿がすでにあるという箇所だ。上編の原稿というのも気になる。

それにしても後版の表紙に「劉氏原本」と記す不可思議さは消えることがない。著者はただ洪都百鍊生とのみ名乗っていた時代のことなのだ。著者が劉鉄雲であることを知っていなければ「劉氏原本」とつながらない。事実を把握していたからこそ「劉氏」と『天津日日新聞』を出してきた。劉氏どまりで鉄雲まで明示しない理由はなにか。説明がないから知りたいと思う。

5 劉大紳の証言

贋作に書かれた序文などどうせでたらめに決まっている。そう受け取るのが普通の間接だろう。胡適が吐き捨てるように書籍全体を偽作だと断言したではないか。

確かに胡適の指摘するように該書奥付に記述された執筆時間は間違いである。しかし傅幼圃序は当時としては異色の『天津日日新聞』を提出している。ここに注目すべきだ。胡適は該紙について自分の「老殘遊記序」では何も説明していな

い。

傅幼圃は百新公司本が出てくる経緯についても説明した。それらを全面的に否定することはできない。

ひとりの証言者がいる。傅幼圃の記述を裏付ける説明を公開しているのだ。「老残遊記」の著者劉鉄雲の息子劉大紳である。劉家の大紳が述べるから意味がありかつ貴重な文章だ。

贋作について劉大紳が「関于老残遊記」において詳述する（「五 《老残遊記》之仿作」*6『資料』73-76頁）。

劉大紳が最初に述べるのは海賊版の多さだ。漢口で『続老残遊記』が出ていると人から聞いた。のちに上海の某書局*7が贋作（仿作）を作った。書名は『老残遊記続編』という。刊行前に新聞で予約を募集した。劉大紳が問い合わせると彼らは二集（二編）が実際に存在することを知らなかった。劉大紳もそれが贋作であることを知らなかった（『資料』73頁）。

この某書局とは百新公司を指すことは容易に了解できる。

以上の説明からわかることは以下のとおり。

百新公司が最初計画していたのは『老残遊記続編』だ。初集（あくまでも二集との対比でいっている）とは別に続編を新たに書き下ろしていた。百新公司の社長、編集者はもともと洪都百鍊生が劉鉄雲だとは知らない。劉鉄雲自身が本名が知られることを希望しなかったし彼の子孫つまり劉家の人々は実名を出さないように努力をしていた（劉大紳説）。表面に出ているのは筆名の洪都百鍊生のみである。百新公司側に見れば著者不明だから続作の許可を（意志があったとして）得ることもできない。そこに劉鉄雲の息子劉大紳から抗議を受けた。百新公司の人間は関係者が実在すると知って驚いたことだろう。劉家と交渉の結果、出版社は最初の計画を変更した。初集と続編を同時に刊行するという流れだ。

6 劉大紳と百新公司の人々

劉大紳の説明は続く。

出版社の社長が釈明にやって来た。すでに多くの予約応募があり広告費も巨額

にのぼる。発売中止となると赤字になってしまう。再三許しを求めし劉家の「真本」を刊行して報酬も出すという。劉大紳にしてみれば続編を禁止する理由はない。そこで約束を交わした。（贋作について）「洪都百鍊生」名を使用することは許さない。「二編」「二集」も同様に使用禁止とする。主編傅（注：幼圃。「老殘遊記下編序」を書いた人物）をよこして相談した。傅幼圃が3度目の訪問時に本文の照合を行なうために初集切抜き本*8を借りていった。その後初編と贋作を刊行し各20部を送ってきた。劉大紳は報酬を断り刊行物だけを収めた（『資料』73-74頁）。

人物の特定をする。劉大紳がいう出版社社長というのは百新会社の徐鶴齡だ。傅幼圃がいう主任と同一人物だろう。

劉大紳は主編が傅幼圃だと書いている。また面談もした。ここは傅幼圃序の記述と微妙にずれる。傅幼圃は劉大紳に会ったとは述べない。傅幼圃が自分で劉大紳と直接交渉をした事実は伏せておきたかったのか。あるいは書かないように言われたのか。劉大紳の名前を出すことが出来なければ面談について触れないのも理解できる。

傅幼圃は『色欲宝鑑』百新公司1914.7、『風流皇帝』百新公司1916.4、『中国痛史』新華書局1927、百新公司また傅幼圃著、徐鶴齡校『色情之男女』上海・百新公司1931.8三版／1935.5再版などを出す。

傅幼圃は作家だったが百新会社の編集者だと劉大紳が勘違いした可能性もある。あるいははじめは編集者で後に作家となった。または編集者と作家を兼ねていた。不明のままにしておく。

百新会社が最初に立てた計画は前述のとおり続編のみを出版することだった。初集の刊行は考えていなかった。劉大紳からの抗議があって「真本」すなわち初集20回ならびに続編（贋作）を同時に刊行することに変更した。ここで重要なのは該書が劉鉄雲の本物を含んだ『老殘遊記』である点だ。

「二集」「二編」および「洪都百鍊生」*9の名義を使用するなど劉大紳が申し入れた。そこをもういちど見る。

劉大紳は「老殘遊記」について「初集」といわない。初出の『繡像小説』『天津日日新聞』ともに「初集」という単語は使っていないからだ。ただし「二集」

の方は「老殘遊記二集」と表示がある。

贋作はたしかに「二集」「二編」を使用していない。「下編」である。ここは劉大紳との約束を守っている。ここで当然な疑問が出てくる。劉大紳は徐鶴齡に劉鉄雲が執筆した「二集」がすでに発表されていると説明しなかったのだろうか。それについては記述がない。百新会社が独自に続編を刊行することを容認したことだけがわかる。

もうひとつの約束である「洪都百鍊生」については微妙である。

劉厚沢はそこに注22をつけて説明する。贋作に「鴻都百鍊生」名義を使用することは許可しないという点は口約束だったから事実上は守られなかった（『資料』100頁）。

劉厚沢の注釈では百新公司本は原作者についての約束を守らなかったとある。最初から贋作を含めた全体を洪都百鍊生でくくったかのように書いている。このような説明が百新公司本に対する悪印象を増加させた要因のひとつだ。これについて私は異議をとない。もう少し細かく検討する必要がある。

上編は洪都百鍊生の著作だから奥付に「原著者：洪都百鍊生」と表示する。当然のことだ。ここは約束違反ではない。洪都百鍊生は『繡像小説』と『天津日日新聞』に掲げられている筆名だ。従来から使用されており当時すでに一般常識になっている。

だが下編が問題となる。「続編」すなわち贋作については洪都百鍊生を使うなという劉大紳の要求だった。百新公司はそれにどう対応したか。

1923年十九版下編の奥付に「著者：前人」と記述してある。また劉徳隆は1916年初版について奥付の著者は「前人」だと書いた。孔夫子旧書網に掲げられた1922年十八版も同じく「著者：前人」とする。前述したように初版影印本には奥付がない。ただし劉徳隆の記述ほかからして初版も「著者：前人」とあるだろう。

普通に読めば上編の洪都百鍊生と同じことだ。しかし洪都百鍊生という文字は確かに使ってはいない。名前の特定できない古人であるという意味にもとれる。わざと曖昧にしたといえるだろう。贋作に洪都百鍊生は使用していないと百新公司は言い逃れることができる。それにしても「著者：前人」というのは巧妙とい

うことになるのか。苦しい処置だった。劉大紳との約束に従おうとする百新公司側の誠意だと受け止められなくもない。

以上の状況を見れば百新公司は初期の段階で劉大紳との約束をほぼ遵守しているといっていいただろう。初編続編の各20部を受け取った劉大紳は作者名表示については何も書いていない。「著者：前人」なら許容範囲内だと考えたか。

のちに刊行された贋作は全体を劉鉄雲名でひとくくりにした。時間が経過して最初の約束がなし崩しにされたからだと思う。そこまで広げて批判することはできない。

いうならば1923年十九版に「劉氏」と提起されたことでさえ当時では大きな情報開示だ。なにしろ筆名の洪都百鍊生しか知られていなかった時代である。

7 劉大紳の傅幼圃觀

劉大紳の傅幼圃贋作に対する評価は高い。

「註三 傅君の作品は相当な価値がある。私たち兄弟は傅君の公明正大さに敬服している。また権限を持つ人が続編を重版する時には傅君の本名を入れることを強く願う。また傅君の序文も入れて埋没するのを免れればこの文字の因縁も将来は美談となるであろう〔註三 傅君所作、亦自有相当価値。紳兄弟于敬佩傅君光明磊落外、並甚願有權者再印該続編時、易入傅君真名。並將傅君声叙之文附入、既免埋没、且留此一段文字因縁、可為将来嘉話也〕」（『資料』75-76頁）

傅幼圃とは直接会って交渉をしている劉大紳だ。続編の内容についても助言をしたという。劉大紳の傅幼圃に対する好感があふれていて率直な感想だと思う。この手放しの賞賛を読めば続編の作者は傅幼圃だとするのも間違いないだろうと考える。

百新公司が贋作『老殘遊記』の刊行を準備していたときの話だ。劉大紳の兄である次男劉大黼がそれを聞きつけ問いただした。事情説明を受けた結果彼も承認した（『資料』74頁）。

「私たち兄弟」というのは劉大紳と劉大黼を指す。ゆえにこの贋作はまさに劉家公認の出版物ということになる。ここは肝心なところだ。批判されなければな

らない書物ではない。

8 劉厚沢の陳蓮痕説

劉大紳はのちに青島『新語』副刊に傅幼圃が文章を書いて続編を執筆した経過を説明しているのを読んだ（『資料』74頁）。

傅幼圃が書いた文章に執筆したとあるのだから続編の著者である。

ところが劉厚沢は違う意見を注釈に述べている。

すなわち1927年に青島『新魯日報』に「新語」副刊があった。編集者の陳蓮痕が若いときに『老殘遊記』続編を代筆した（為人捉刀続《老殘遊記》）ことを述べているという。だから続編の作者は陳蓮痕であって傅幼圃は批注を施したにすぎない。ただし陳蓮痕と傅幼圃が同一人物であるかどうかはわからないと（『資料』100頁）。

掲載紙欄は同じ「新語」であるにもかかわらず意見が一致しない。劉大紳は傅幼圃だといひ劉厚沢は陳蓮痕だったと書く。陳蓮痕の代筆が事実だとすれば劉大紳の勘違いになる。

ここでもう一度傅幼圃「老殘遊記下編序」を取り出す。

傅幼圃の説明によると徐鶴齡と話した時にはすでに下編原稿があった。前出のとおり「弊社が探して入手した原稿は上下編だ」と記す。それと劉厚沢がのべる陳蓮痕の代作という文章が一致しそうだ。代筆というから徐鶴齡が陳蓮痕に執筆依頼して続編を用意していた。それを傅幼圃が見た。また原稿上編というのは『天津日日新聞』切抜き本だ。劉大紳が提供した。ここは劉大紳の証言と合致する。

陳蓮痕はのちにいくつもの作品を書いている。

陳蓮痕（原名燕方）は『新魯日報』『新魯月刊』の主筆をつとめたという。魏紹昌主編『民国通俗小説書目資料彙編』（2014）^{*10}には次の目次を収録する。

『京華春夢録』上海競智図書館1925.3、『順治出家』上海大達図書館1935.7、『乾隆休妻』同左1935.12、『雍正奪嫡』同左1936.4、『同治嫖院』上海広益書局1937.4再版。

陳蓮痕ならば「老残遊記続編」原稿を代筆したかもしれない。そうすると執筆したのは傅幼圃だと考えていた劉大紳は誤解していたのだろうか。新しい資料がないので記述はここまでにする。続編の原稿について陳蓮痕と傅幼圃がどのような役割分担をしていたのか詳細は不明である。

贋作作者が傅幼圃であれ陳蓮痕であれ劉家が公認した刊行物であることに変わりはない。

9 ふたたび胡適について

アメリカから帰国した胡適がこの贋作『老残遊記』百新公司本を読んでいるのは確実だ。「老残遊記序」を書く前である。だから「序」において該書が贋作だと指摘することができた。胡適は「老残遊記」の作者洪都百鍊生が誰なのかを以前から探索していた。「老残遊記」が「劉氏原本」であり『天津日日新聞』に掲載されたことを知る材料のひとつになったのは百新公司本の存在だったに違いない。

書いておかなくてはならないことがある。胡適が百新公司本によって「劉氏原本」と『天津日日新聞』の存在を知ったからといって書物の実物を入手することとは別問題である。『天津日日新聞』連載の実物あるいは孟晋書社本を指している。一般に出まわっている普通の刊本ではない。新聞は入手しにくい。孟晋書社は天津の出版社だからこれも大量に刊行したとは考えられない。

胡適の「序」には『繡像小説』も『天津日日新聞』にも言及はない。沈黙した。実物で確認することができなかったからだろう。ゆえに「老残遊記」について『繡像小説』連載と『天津日日新聞』掲載には回数に異動があることも気づいていない。

普通の「序」ならば「老残遊記」執筆発表の経緯を具体的に説明するだろう。しかし胡適の興味はそこにはなかった。

胡適「老残遊記序」の章だてが彼の興味のありどころを示している。すなわち「一 作者劉鶚的小伝」「二 老残遊記裏的思想」「三 老残遊記的文学技術」だ。「老残遊記」の執筆公表過程についてはなにも記述しない。そこまでの知識

はなかったとわかる。

胡適はあるべき版本説明をせず唐突に1919年版を提出して偽作だと断言した。偽作のみを特別に取り上げて否定する意味があったのだろうか。疑問を感じる。

胡適は贋作について劉家との関係、あるいは具体的な事情をまったく知らなかった。真相は劉家公認の贋作だったのだ。そこを見逃した。たしかに劉大紳の「関于老殘遊記」が発表されるのは時間的にいえば胡適序よりも後のことだ。事情を知らなかったから無理もないともいえる。しかし劉鉄雲初集を含んだ百新公司本を唐突に取り出し全体を偽作と決めつけたのは軽率な判断であったといわなければならない。

10 最後に汪原放「校読後記」

同書所収の汪原放「校読後記」についてひとこと。

汪原放が本文を校閲した際に初出を参照した形跡はない。彼は本文確定に使用した版本を次のようにあげる。商務印書館鉛印袖珍本、広益書局石印本、泰東図書館標点本、「照原稿本」40回本（注：百新公司）などだ。各種版本は商務印書館本を種本に使用していると指摘する。『天津日日新聞』あるいは孟晋書社本をあげない。

例として2ヵ所の漢字違いを示している。それらを次の版本と比較対照してみる。記号は次のとおり。

商＝商務印書館、天＝天津日日新聞、百＝百新公司、胡＝胡適

第2回 商：上船進去（天：下船進去／百：下船進去） → 胡：止船進去（注：商務の間違い。胡適の訂正は不適切）

第12回 商：却正是的湾子（天：却正是個湾子／百：却正是的湾子） → 胡：却正是[河]的湾子（注：商務の間違い。胡適の訂正は不適切）

上の2ヵ所を見ても適切な校閲にはなっていない。その原因は初出を知らないからだ。

亜東図書館本『老殘遊記』は1925年初版より1934年には第10版を刊行している。有名な版本のひとつである。しかし汪原放の文章からもわかるように『天津日日新聞』本を見ていないのはやはり小さくない問題だ*11。

【注】

- 1) 阿英「老殘遊記版本考」は「關於老殘遊記二題」に収録。『小説二談』上海・古典文学出版社1958.5。61-62頁。初出は魏如晦（阿英）「關於『老殘遊記』兩題」『宇宙風乙刊』第31期 1940.10.16
- 2) 劉徳隆「《老殘遊記》版本概説」『清末小説』第15号 1992.12.1。41頁。劉徳隆『劉鶚散論』昆明・雲南人民出版社1998.3所収。また孔夫子旧書網参照
- 3) 朱聯保編撰『近現代上海出版業印象記』上海・学林出版社1993.2。216-217頁。別に1911年新開設とする文献もある。「1911年上海書業名録」汪燿華編『上海書業名録（1906-2010）』上海世紀出版股份有限公司、上海書店出版社2011.6。8頁
- 4) 樽本照雄「劉鉄雲の写真をめぐる」『清末小説二談』2017.2.1ウェブ公開
- 5) 劉鶚著、劉徳隆編『抱殘守缺齋日記』上海世紀出版集團、中西書局2018.6に収録する。「鉄公遺象」の裏には劉大神の筆で「先大夫鉄雲公遺像」と書いている。劉大神が所有していたとわかる。以下にも収録する。劉蕙孫子女編『翰墨清芬——劉鶚、劉大神、劉蕙孫三世手迹輯存』私家版（壹号文化伝播有限公司印刷制作 2014）、劉蕙孫子女編『余瀕集——劉成忠、劉鶚、劉大神、劉蕙孫四世詩存』私家版（壹号文化伝播有限公司印刷制作 2016）
- 6) 「關於老殘遊記」。署名は紳『文苑』第1輯1939.4.15。のち『宇宙風乙刊』第20-24期1940.1.15-5.1に再掲載。また魏紹昌編『老殘遊記資料』北京・中華書局1962.4（ほどこされた劉厚沢注が貴重。日本影印あり。『資料』と称する）、劉徳隆、朱禧、劉徳平編『劉鶚及老殘遊記資料』成都・四川人民出版社1985.7などに収録される。ただし後者は原稿の複写によっており注のつけ方など『資料』所収とは異なる。
- 7) 「某書局」とするのは初出。『資料』73頁も同じ。ただし『劉鶚及老殘遊記資料』399頁は「百新書局」とする。
- 8) 劉家では初集について『天津日日新聞』切抜き本を20部所有していたという（註一）。「關於老殘遊記」執筆時には2部があると書いている。ただし孟晋書社の単行本について

て劉大紳の言及はない。その存在を知らなかったかもしれない。もうひとつ。二集が問題だ。劉大紳は二集が『天津日日新聞』に掲載されたことは知っている。ただしその記憶が初集と混同しているといわざるをえない。考えれば二集そのものを手元に所有していなかったと思われる。だからこそ百新公司の続編刊行を許可したのではないか。二集を所持していれば初集と同じように百新公司に提供するだろう。二集の実物を提供することができないから劉大紳は百新公司続編の刊行を認めたと推測する。

- 9) 初出のまま。『資料』74頁は「鴻都百鍊生」に書き換えているが正確ではない。鴻都百鍊生は二集で使用されたからだ。『劉鶚及老残遊記資料』も洪都百鍊生のままである。

399頁

- 10) 魏紹昌主編『民国通俗小説書目資料彙編』3冊 上海世紀出版股份有限公司、上海書店出版社2014.12
- 11) 参考：樽本照雄「『老残遊記』の版本と修改について」『清末小説閑談』法律文化社 1983.9.20

「説部叢書」の箱売り

—商務印書館の販売活動

『清末小説から』第150号（2023.7.1）に掲載。商務版「説部叢書」は元版一百編完成を記念して木箱に収納のうえ販売した。この木箱に注目する。後の初集本もまた箱売りされている。新聞広告などに出現する木箱を追跡する。



孔夫子旧書網に掲載された写真（一瞬姿を現わしアワのように消えた）をご覧いた

だきたい。商務印書館版「説部叢書」全一百種を収納する鍵付き木箱だ。蓋に「説部叢書／共弍百種／上海商務印書館蔵版」と彫りこんである。「弍」は「一」の古字。写真を見れば鍵を取っ手がわりにして手前に引いて開けたらしい。

別の写真には「説部叢書」初集本（リボン文様）の複数冊が示されていた。民国初期に出された初集本（付建舟の用語では四集系列）がその木箱に保管されていたことを示す。ただしもうひとつの可能性もある。初集に先行する元版（タンポポ文様。同じく十集系列）だ。清朝末期に刊行された。それが収まっていたとしても不思議ではない。

清末の元版一百編（種でも同じ）が完結したのを記念して一括販売したことを指している。その際、全冊を格納するために作成した木箱が最初だ。古典籍などを横置きして収めるのと同じ形式である。

「説部叢書」の各冊には薄厚があって一定しない。平装だから縦置きするには少々無理がある。古典籍あつかいだと考えればそれだけの価値を自負していたともいえる。あるいは100冊を超える大量刊行物だ。縄で括るわけにもいかない。段ボール箱も普及していない時代である。帙で包むという方法も考えられなくはない。しかし冊数が多い。複数套が必要というのでは扱いにくい。まとめて売り捌くには専用の木箱を用意した方がやりやすかったと推測する。

商務印書館が「説部叢書」を木箱に入れて販売したという事実は文献で知っている。だが実物の鮮やかな色彩写真を見るのははじめてだ。

清末の元版は全十集一百編である。民初の初集本も全100編だ。「共一百種」であることに変わりがない。写真の木箱が収納したのは元版あるいは初集本である。つまり箱売りしたのは1度だけではなかった。

いきなり本題に入ってしまった。筆者の知る限り「説部叢書」を収納する専用木箱を取り上げて説明した論文はないように思う。

続けて少し説明する（過去の文章と重複するところがある）。

1 「説部叢書」の成立から

商務版「説部叢書」はいうまでもなく外国小説の翻訳シリーズだ。

元版は一集十編の全十集で合計一百編をもって構成される。初集本はそれをまとめて初集100編にした（漢数字とアラビア数字で区別する）。両者は表紙の意匠と集編数が異なる。

いくつかの問題は清末の元版から民初の初集本に変更された部分に集中して発生している。特に奥付の刊年記述に混乱が生じているように見える。ある作品についていうと「乙巳2（1905）初版／1913.12再版／1914.4再版」（簡略化して表示）などがある。1913年再版で同時に1914年再版とするのはなぜなのか。刊年が違うにもかかわらず同じ再版を表示するのは奇妙だ。あるいは「1905.3再版／1906.4四版／1914.4再版」という作品もある。1906年に四版が出てのちの1914年が再版では矛盾する。版数が刊行の順番になっていない。理解しがたい。そう思うのが普通の感覚だろう。類似の例が複数ある。商務印書館の版本についての記述方針が不明なのだ。

しかしその不思議な記述も「説部叢書」の刊行経過を把握すれば謎は解ける。一方でそれ以後に刊行された「二集」（第二集ではない。2集と表記する。傍点筆者。以下同じ）から「第三集、第四集」（同じく第3集、第4集）にはその種の問題はない。

収録作品の入れ替えと意匠の変更、集編の番号振り直しはいつ実行されたのか。不透明な個所が現実に存在する。以前にも述べたが版元の商務印書館がそれらについて今まで説明したことはない。ということで筆者が説明している*1。

できるだけ実物を観察し周囲の状況を勘案した。「説部叢書」の成立と変遷は大要次のとおり。木箱の出現と関係するから確認しておく（必要個所に「○箱売り」と記入する）。

●1903年 表紙に「説部叢書」と明示する元版が出現する（作品によっては「説部叢書」が成立する以前に刊行されたものがある。先元版と称する）。第一集十編から第十集十編まで数年をかけて出版が続けられた。

●1905年 表紙をタンポポ文様に統一し叢書としての一体感を演出した。

●1908年旧暦五、六月 『佳人奇遇』『経国美談』の2作品を『天際落花』『劇場奇案』に入れ替えて改組する。元版十集全一百編が完結した。○箱売り開

始。1909年、1911年（写真あり）、1912年も継続。

●1913年新暦5-12月 初集と改称し表紙をリボン文様へと一新する。統一番号に振り直した。初集第1編から第100編までの全100編である。○箱売り未確認

●1914年4月 初集100編全部を一括して重版した。以前の版数とは無関係に奥付表示は一律に「再版」と記述する。商務印書館は金港堂との合弁を解消した（1914.1.6）。それを記念する再版だ。ただし宣伝文句にはしていない。○箱売り未確認。1915年○箱売り継続。1916年、1920年も継続。

●1915年 2集100編完結。○箱売り継続

●1920年 第3集100編完結。○箱売り継続

上の変遷概要を見れば箱売りは1908年に始まって1920年までも続いている。長期間にわたる販売方法だった。後で詳しく説明する。

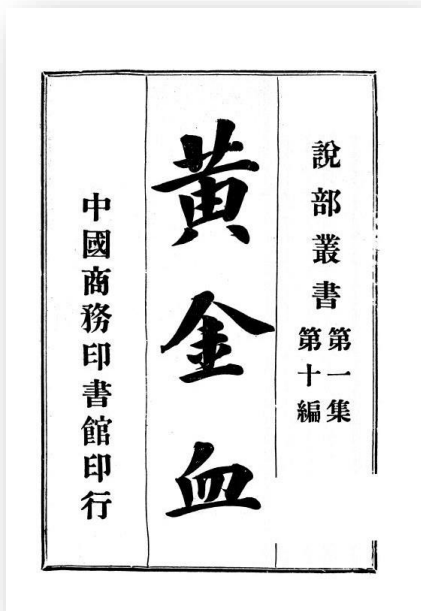
2 製本の変化

「説部叢書」の製本方法は元版でも異なるものがある。初期のものは表紙でくるんで丁寧な製本する。『夢遊二十一世紀』元版の第一集第三編の表紙と扉を示す（孔夫子旧书网より）。糸綴じで見返しが扉になっているのが見える。表紙の意匠はタンポポ文様になる前の元版だ。

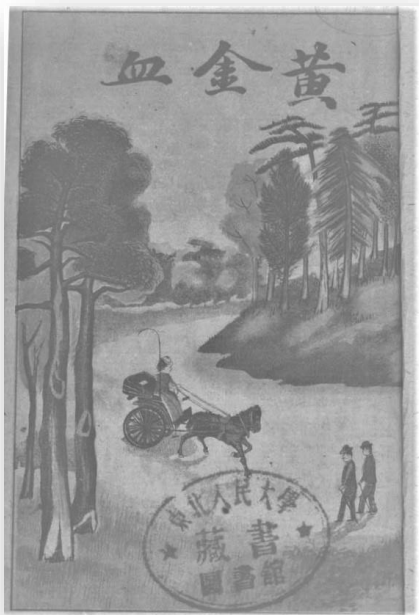


しかし後には表紙と奥付を別に印刷して貼りつけることにした。貼るだけだから変更は自在だ。また針金綴じになっているばあいもある。

たとえば元版の第一集第十編『黄金血』（1904）の表紙は絵図で扉がついている。しかし初集第10編（1914）は表紙を貼り替えてなじみのリボン文様だ。



元版の扉と表紙



初集本表紙（孔夫子旧書網より）

元版とその重版の初集本は本文についていえば基本的に同じだと考えていい。表紙と奥付だけが別物だ。「林訳小説叢書」も同様に表紙奥付が異なるにすぎない。

3 「説部叢書」の箱売り

「説部叢書」を最初にまとめて箱売りをしたのは1908年である。元版全一百編が完結したのを契機とする。上に掲げた写真の木箱（年代不明）が該当するかもしれない。ここに注釈を加える。後述するように1920年頃まで箱売りは続いた。その期間、蓋の意匠が同一であったわけではない。少なくとも2種類はあった。この写真の木箱はそのなかのひとつだと考える。

あらためて説明する。

商務印書館は「説部叢書」をどのように売り出したのか。商務印書館を取り仕切っていた夏瑞芳は新聞広告の有効性を理解していた。自社刊行物の販売を促進するために新聞広告を大量に打ったのも方法のひとつだ。

新聞広告に見られる「説部叢書」関係の記事を主にたどって述べる。先行論文に収録された資料から抽出する。

参考にした論文とその略号は次のとおり。また手元から少しの文献を追加する。

【文文】 關文文『晚清報刊上の翻訳小説』 済南・齊魯書社2013.5

【編年④】 陳大康『中国近代小説編年史』 北京・人民出版社2014.1

【付晚上】 付建舟『晚清民營書局發行書目』 上冊 哈爾濱・黑龍江教育出版社2016.12

【民小史】 黄 曼『民初小説編年史（1912-1914）』 武昌・武漢大学出版社2021.5

【文娟21】 文 娟『前『五四』時代的文化符号：商務印書館与中国近代小説』 桂林・広西師範大学出版社2021.6

木箱が最初に出現する1908年の広告から見ていく。文章内容が似ていれば掲載月日の早い記事より孫引きする（原文に記号は使われていないはずだ。しかしそのままを使用。広告文の「木箱」は目立つようにゴチック体で示す。以下同じ）。それ以外の文献は内容を省略する。全文の翻訳はしない。注目するのは木箱の有無、冊数、

価格などである。

[編年④1577]『中外日報』光緒三十四年七月二十日(1908.8.16)「商務印書館説部叢書全部出售」「本館自癸卯年創行説部叢書至今，五、六年間成書十集。(中略)為書一百種，計一百二十八冊，外加総目提要一冊，装一木箱，極為精緻。全部定價二十八元」

[文文252]『時報』光緒三十四年七月廿七日(1908.8.23)。注：「為書三百種，計一百八十八冊」と誤る。

[文娟21-334]『申報』光緒三十四年七月二十九日(1908.8.25)。注：旧曆は補った。「為書一百種，計一百八十八冊」と誤る。原文がそうになっているらしい。

ここにある「癸卯」は1903年だ。「説部叢書」刊行開始の年を断言した。「五、六年間」だから1908年あるいは1909年になる。しかし新聞の日付が1908年だ。おおよその時間を示しただけだとわかる(『上海指南』1909にも「五六年」と記述する。定型文だ)。「十集」は元版を指す。「総目提要」1冊を附録に付け、木箱に収納して定価が28元だと告知した。全一百編で冊数は全128冊と記す。ところが後の記事では違う冊数を提示している(後述)。この28元は商務印書館にしてみれば大幅割引した価格だ。

次の広告は支払い方法を説明する。

[編年④1597]『神州日報』光緒三十四年八月十八日(1908.9.13)「購閱説部叢書按月繳銀辦法」「本書十集，訂一百三十本，原定價四十元零二角五分，又加木箱一具，價一元。凡現銀購買全部者，減價二十八元，并附贈袖珍小説全部，計二十冊。今為閱諸君便利起見，另定按月繳銀辦法，分為甲、乙兩種。甲：全部二十九元。先交定洋五元，以後按月交四元，至六個月為止；乙：全部三十一元，先交定洋五元，以後按月交二元，至十三個月為止。(後略)」

[文文253]『時報』光緒三十四年八月十九日(1908.9.14)「又加一木箱

具価一元」とある。

[文娟21-334]『申報』光緒三十四年八月二十日(1908.9.15)「又加木箱一具, 価一元」とする。

ここでは十集全130冊と述べている。冊数が異なっていることに注目されたい。もとの定価では合計40元2角5分、さらに木箱1元の追加が必要とされる。それを一括で支払うと28元となり、おまけに袖珍小説20冊が付いてくる。分割払い、すなわち月賦払いの方法には甲乙の2種がある。甲は総額29元、先に5元を支払い、あとは月4元の6ヵ月払い。乙は総額31元、先に5元を支払いし、あとは2元の13ヵ月払い。

分割払いにも細かい設定をした。購買者はそこから選択することができる。木箱はもともと1元の価らしい。一括払いも月賦払いでも木箱が無料で付いてくるという説明である。

1909年にも元版28元で箱売りは続いた。

[編年④1672]『神州日報』光緒三十四年十二月二十一日(1909.1.12)「《説部叢書》百種, 計一百二十八冊, 合装一木箱, 定価二十八元(後略)」

[文娟21-336]『申報』宣統元年正月初五日(1909.1.26)

[文娟21-338]『申報』宣統元年正月初七日(1909.1.28)

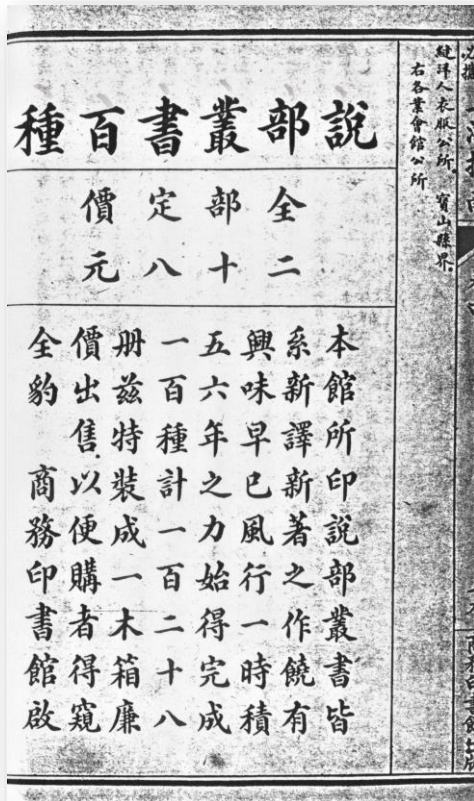
[編年④1747]『神州日報』宣統元年三月二十日(1909.5.9)「(前略)説部叢書十集一百種, 連木箱一只, 每部二十八元。(後略)」

[文娟21-339]『時報』宣統元年三月二十日(1909.5.9)

『上海指南』(宣統元年(1909)五月初版/七月再版)広告に木箱の記述がある。「説部叢書百種/全部定価/二十八元/本館所印説部叢書皆系新訳新著之作。饒有興味早已風行一時。積五六年之力始得完成一百種計一百二十八冊。茲特裝成一木箱廉価出售以便購者得窺全貌」(句点筆者)

128冊、28元は一貫している。

次の文献は上文とほぼ同じ。



『上海指南』1909年広告

[付晚上196]『商務印書館書目提要』1909.九改定7版。「説部叢書百種、定価二十八元／本館所印“説部叢書”、皆系新訳、新著之作，饒有興味，早已風行一時，積五六年之力始得完成一百種，計一百三十一冊，茲特裝成一木箱以便購者，得窺全貌，茲將書目列後」

木箱を用意したことと定価が28元は変わらない。ただしここでも冊数が128冊と131冊で異なる。

『東方雑誌』第8巻第1号（1911.3.25）の広告も木箱を出す。同誌第8巻第9号（1911.11.15）には木箱の白黒写真を添えていたと記憶する。資料が手元にないため国立国会図書館に調査を依頼した。掲載すると回答をもらう。ここに示すのはその木箱広告だ。

その広告文は次のとおり（句点筆者）。「(装訂結実) 説部叢書 (印刷精良) / 装一木箱定価二十八元／本館所印之説部叢書皆系新訳新著之作。饒有興味早已風行

商務印書館出版圖書

精印 結裝
良刷 實訂

説部叢書

裝一箱定價二十八元

本館所印之説部叢書皆系新譯新著饒有興味早已風行一時積五六年之力始得完成一百種計一百二十八冊若每冊零購共須洋四十元零若百種合購祇收回洋念八元并裝一木箱以便攜帶

旅行客居之良伴侶

茶餘飯後之好消遣

12 海風

『東方雜誌』廣告 国立国会図書館所蔵

一時。積五六年之力始得完成一百種計一百二十八冊。若每冊零購共須洋四十元零。若百種合購祇收回洋念八元。并裝一木箱以便攜帶／（旅行客居之良伴侶）（茶余飯後之好消遣）」である。

『上海指南』のものとはほぼ同文だ。128冊、28元も共通する。木箱に収納して携帯に便利だという。しかしいつも持ち運ぶものではないだろう。木箱ならば移動が簡単だという意味に理解しておく。

木箱の写真が不鮮明なのは残念だがかすかに見ることができる。

冒頭に掲げた色彩写真と見比べる。鍵口まわりの意匠が異なる。彫り文字の大きさ、配置も一致しない。なによりも「説部」「弑」という文字の形が別物だ。手彫りだから完全に同じにはならない。しかし下部にあるはずの「上海」がない。ただの「商務印書館蔵版」となっているのは大きな違いだ。また「上海」がない分、字体も色彩写真のものより大きい。同時期に作って「上海」があるのとないものが共存するのは不可解だ。そこから見て木箱は複数種が製作されたという結

論になる。

『東方雑誌』掲載の木箱と色彩写真の木箱とではどちらが先なのか。時間の特定はむつかしい。手掛かりは色彩写真に初集本が収録されていたことだ。それを信頼すれば1914年頃だ。『東方雑誌』掲載の木箱が先になる。色彩写真の木箱は後の製作だろう。あくまでも推測にすぎない。単に2種類があるというだけでもよい。

中華民国になった1912年にも箱売りが維持されている。以下のとおり。

[文娟21-353]『小説月報』第3年第4期1912.7「商務印書館出版図書」「《説部叢書》装訂結実，印刷精良，装一木箱定価二十八元。旅行客居之良伴侶，茶余飯後之好消遣。本館所印之説部叢書皆系新訳新著，饒有興味，早已風行一時，積五六年之力，始得完成一百種，計一百二十八冊。若每冊零購共須洋四十元零，若百種合購，只收回洋念八元并装一木箱以便攜帶」

[民小史96] 上文とほぼ同じだが「旅行客居之良伴侶，茶余飯後之好消遣」の位置が一致しない。

ここでも合計28元という価格設定だ。冊数は128冊。木箱に収納して携帯に便利だというのも1911年の『東方雑誌』と共通している。

以上は元版（タンポボ文様）一百種の箱売りである。リボン文様に変更した1913年の初集本も箱売りしたかは不明だ。これについての広告は確認できていない。

1914年に初集本全100編をまとめて再版した。これが次の段階である。

その出版予告広告は1913年12月25日掲載であって日付がまことに微妙だ。商務印書館と金港堂両社の合弁解消に向けた協議がほぼ終結した時期に当たっている。合弁解約成立を見越して箱売りを予告していると理解する。

[文娟21-357]『申報』1913.12.25「商務印書館＜説部叢書＞」「本館出版小説情節新奇，趣味濃深，極承閱者歡迎，惟以陸續發行，未得窺全豹為憾，本館特重行匯印，發售定価二十元，預約十元，不及原価四分之一。中有林

琴南先生手筆^マ十一種、尤為本叢書之特色。三年陽曆三月出版、決不有誤、另刊目錄樣本、函索即行寄贈、預約二月底截至。愛読小説者幸勿失此機會」
[文娟21-357]『小説月報』第4卷第8号1913.12.25「商務印書館出版説部叢書」
「本館出版小説一百三十冊、一万六千余頁、七百数十万言、零售四十余元、預約減收十元、陽曆二月截止。本館出版小説情節新奇、趣味濃郁、極承閱者歡迎、惟以陸續發行、未得窺全豹為憾。茲特重行彙（匯）印、發售定價二十元、預約僅售十元、不及原價四分之一。中有林琴南先生手筆二十一種、尤為特色。三年陽曆三月出版、另刊目錄、樣本函索即行寄贈（後略）」

[民小史300] は上記の『小説月報』広告について「一百零三十冊」「三年陽曆三月出版、決不有誤、另刊目錄樣本、函索即行寄贈」とする。傍点部分が両者でわずかに異なる。

冊数は130冊だ。民国3（1914）年3月に必ず出版するという予告広告である。予約の期限が2月となっている（後に延期された）。重版してしかも定価がもとの28元から20元に値下げになった。予約をすれば10元というまさに破格の低価格といえることができる。この広告には木箱が出てこない。

収録する林訳小説の種類数が『申報』は「十一種」だ。『小説月報』では「二十一種」として数字が違う。前者の「十一種」が本当にそう記述されているならば誤植だろう。なぜなら「説部叢書」にある林訳小説は21種が正確だからだ。

4 商務印書館と金港堂の合弁をめぐって

1913年12月25日の広告が微妙だと書いた。くり返せば合弁問題が関係しているからだ。すなわち広告を出した直後の1914年1月6日に商務印書館は金港堂との合弁を取りやめる。

上の「説部叢書」重版予告は合弁解消を視野に入れた計画的なものと思われる。合弁解約を記念して刊行するという意思表示である。それ以外に考えようがない。ただし合弁解約記念という真の理由は伏せた。だいいち1913年12月の段階ではまだ合弁期間内だ。表立って合弁解約記念と銘打つわけにもいかないだろ

う。その後も類似の表記は見えない。実施はあくまでも商務印書館による内向きの行事であった。

購入予約期限は1914年2月末だ。『申報』（1914.2.17）に締め切り迫るという広告がある（[文娉21-357]）。同日『時報』の広告も同文だ（[民小史331]）。

1914年3月1日の『申報』には「緊要広告」が掲載される。「説部叢書」の予約期限を10日ほど延期する。予約ならば10元、それを過ぎれば20円で販売すると告げる（[文娉21-358][民小史336]）。すなわち3月10日が締め切り日になった。締め切り日までを数える広告が続く。

新しい展開は1914年4月6日の『時報』の広告に出現する。

[民小史351]『時報』1914.4.6「説部叢書再版広告」：「説部叢書業于三月十号訂出，因遠近諸君惠臨上海総館及各省分館購預約券者紛紛不絶，逾于初版預印之数，以致不敷分配，良用歉疚，現已重行付印，約陽曆五月必可出書，屆時再当登報布告，請諸君凭券取，特書此声明」

この声明は読んでみればおかしい。3月10日に受注が終わっている。予約が多すぎて予定していた印刷数を超えてしまったという。予約締め切りから1ヵ月近く経過しているのにその対応ができないという奇異な釈明だ。さらに以前の広告では刊行の約束は3月だった。ところが4月6日時点で出版できていない。そこを「再版広告」では言い訳をする。現在すでに重印すませているから5月には必ず出版する、その際には新聞で知らせる、と明言した。刊行を3月から5月に変更したのだった。つまり実質上の出版延期声明である。初集本の1914年再版は十分に準備をしていたはずだ。ところが予想を上回る購入予約が入ったらしい。ただし予約の詳細な数字は明らかにされたことがない。

「説部叢書」初集の再版本が出版されたら告知すると保証した。ところが該当する新聞広告が見受けられない。見落としていることもありうる。

事実を把握することが重要だ。初集再版本の奥付に記載されている「中華民國三（1914）年四月再版」が決め手である。商務印書館の新聞広告にある5月刊行告知はそのとおりに実行されたかもしれない。しかし奥付は1914年4月にした

可能性も残る。刊年記載と実際の発行時期に関する詳細は不明のままだ。

「説部叢書」初集再版本販売の広告は見えない。だから木箱についても不明だ。そのかわりに「林訳小説叢書」が出てくる。

『小説月報』第5巻第3号1914.6.25に「林訳小説叢書」50種を特価10元、加えて図書券2元を贈呈、8月末までという広告がある（[文娟21-360]「装成一箱」「如要装箱，加価一元」、[民小史394]）。ほぼ同じ内容で1914年7月19日の『申報』広告がある。「林訳小説叢書」50種原価36元のところを16円で販売する（8月までに購入するなら10元で加えて図書券2元を贈呈）とくり返している（[文娟21-360]。[文娟21-361]「如要装箱，加価一元」）。こちらにも廉価販売だ。『小説月報』第5巻第5号1914.8.25の広告にも「装成一箱」と書く（[民小史419]）。50種97冊を数えるからこちらにも箱を用意したとわかる。

ただし研究者によってそれが木箱だとは認定していない。鄒振環は「装一紙匣」と書いて紙箱にしている*2。補足して書く。「林訳小説叢書」の「装成一箱」について上記のように「如要装箱，加価一元」と書いてある。1元は「説部叢書」の木箱の値段だ。「林訳小説叢書」についても木箱を用意したと考えるのがよい。

廉価購入期限は9月24日まで延期された（[民小史425]『神州日報』1914.9.8）。

それに先立ち『申報』1914.1.10の広告「商務印書館股東特別会」がある。これは商務印書館と金港堂の合弁解消を株主総会で事後承認する予定であることを知らせる。秘密保持のために理事会で先に決定し株主総会の承認は後回しにしたのだった。

合弁解約が成立すると商務印書館は積極的に継続して広報した。ひとつの例として『東方雑誌』第10巻第9号1914.3.1の広告で「完全華商」と大いに宣伝したことを挙げる。類似の広告宣伝は多くみられる。

『学生雑誌』第1巻第1号1914.7.20に「完全華商股份商務印書館」の広告が出現する。「従前日本人所附股分三十七万八千一百元於本年一月盡数收回」と説明している。日本人が商務印書館の株を所有していた事実を認めそれらをすべて回収したと報告するものだ。

さらに『小説月報』第6巻第5号1915.5.25にも「完全華商商務印書館」の広告がある（[文娟21-364]）。わざわざ「完全華商」と宣伝したのには理由が存在する。

上に述べたように1914年に商務印書館と金港堂は合弁会社ではなくなっている。ゆえに「完全に中華の会社」だと強調した。間違っていない。

それよりも奇怪なことがある。約10年を遡る1903年に両社は合弁した。その際に商務印書館は合弁について公表しなかった。おかしいではないか。

商務印書館と金港堂の合弁成立時に立ち戻る。商務印書館は合弁の事実を隠そうとしたとしかいいようがない。どのように説明したか。金港堂の刊行物を扱う清国代理店になったと告知しただけだ（『申報』1903.12.30、『上海週報』1904.1.1。[文娟21-298]には日付がない。1903.12.19か）。それでは一般読者が合弁の事実を知るのはむづかしい。隠そうとするから弱点とみられてそこを攻撃する出版社がでてくる。のちの中華書局である。その創設者が元商務印書館社員の陸費逵だから皮肉なものだ。

中華民国が成立して商務印書館から飛び出した陸費逵らが中華書局を設立した。当時、商務印書館は金港堂との合弁会社をまだ維持している。陸費逵は商務印書館において出版部部長を勤めていた。内部事情に詳しいのは当然だ。教科書編集の熟練者でもある。商務印書館内では重責を担っていた人物だ。辛亥革命の到来することを予期し新しい教科書を準備していた。しかしその計画がつぶされて商務印書館を離脱する気になったらしい。教科書の編集販売は商務印書館を経済的に基礎から支えた重要分野だ。陸費逵らはその知識に精通し編集技能を保持していたから中華書局でも新しい教科書を刊行した。

異民族が支配する清朝から独立して中華民国が成立した。その清朝時代に編集刊行された商務印書館の教科書を今も使用するのか。だいいち商務印書館は日本金港堂という外国人が経営する会社と合弁をしているのだ云々。中華書局はそういう暴露広告を大々的に新聞に掲載して商務印書館を非難糾弾したのだった。

中華書局からの連続する攻撃批判圧迫を受け精神的に耐え切れず夏瑞芳は日本金港堂との合弁を破棄することにした。

夏瑞芳自身が金港堂（実質は原亮三郎個人）との合弁を取りまとめた（ただし商務印書館と金港堂の合弁契約書は公表されたことがない）。商務印書館にしてみれば合弁後の経営業績は上昇している。大きく貢献したのは教科書の編集発行だ。金港堂から派遣された日本の長尾慎太郎（号雨山）、小谷重らと商務印書館側の高鳳

謙、張元済らが共同編纂した『最新国文教科書』である。爆発的な人気を博し商務印書館の経済的基盤を大きく支える重要な部門となる。また日本人印刷担当者たちとの人間関係も良かった。彼らから最新の印刷技術を導入することができた。

商務印書館の首脳は合弁を斡旋した山本条太郎（三井物産）また合弁相手の原亮三郎（金港堂）らと緊密に連絡を取り合っていた。1910年、夏瑞芳がゴム株投機（一名陳逸卿事件）で巨額損金を被った。その時には商務印書館の張元済から山本、原らに実情を報告し打開策を相談したこともある。山本は夏瑞芳を経済的窮地から救出すべく親身になって相談に乗っている*3。商務印書館と金港堂の合弁そのものは経営的に見ても順調に発展拡大していた。

筆者は合弁の10年間に商務印書館と金港堂が獲得した株式利益を試算したことがある。日本側が得たのは合計521,899元だ。一方の商務印書館側は合計948,865元だった。中国人研究者はややもすれば日本側の利益だけを述べて商務印書館の所得を無視する。商務印書館は金港堂の約1.8倍の利益を得ている事実を言わないのはなぜか。もしかして被害者を装いたいのだろうか。

夏瑞芳にすれば自らがまとめた合弁を自分で取りつぶした形になる。当時の政治状況に圧迫されて泣く泣く関係を切った。

一方で商務印書館にとって金港堂はすでに用済みだったと見ることもできる。教科書編集および印刷技術などの知識、および経営に関しても学びつくしている。それ以上の合弁は必要ではないという判断があったように思う。それも早い時期から理事会内部の日本人を排除する方向で動いている。

合弁は日中対等で始まった。出資金も双方10万元で同額だ。理事会の人事も商務印書館は夏瑞芳（兼社長）と印錫璋、金港堂は原亮三郎と加藤駒二と同数である。ところが資本金でいえば1906年に均衡がくずれる。商務印書館が金港堂を上まわる資本に増強した。その後も徐々に一方的な増資が続く。最終的に1913年は商務印書館側資本が821,900元に対して金港堂側は378,100元に止まっている。約2.18倍だ。理事の人事にしても1909年には日本側理事をすべて排除した。商務印書館主導の経営姿勢を露骨に示したということである。早期から合弁解除に向けて準備を固めていた。そういう基本方針だったようだ。そこに中華書局による攻撃が加えられた。商務印書館にとってはまさに渡りに船という状況

という側面も否定はできない。

以上が本当のことである。鄒振環「商務印書館与金港堂——20世紀初中日的一次成功合資」（『出版史料』1992年第4期（総第30期）1992.12）に見るとおり日中合弁で成功した事例だった。

夏瑞芳は合弁解除の直後に凶弾に倒れた。

商務印書館は中華書局に反論して現在は「完全華商」であることを強調する。わざわざ合弁解約書の全文を新聞広告に掲載した（『申報』1919.7.25）ことはよく知られている事実だと思う（[文娟21-417]は該広告を収録しない。小説広告ではないからか）。

「説部叢書」と「林訳小説叢書」の廉価販売広告は1915年に見える。「説部叢書」部分のみを抽出する。

[文娟21-364]『申報』1915.6.7「《説部叢書》零售四十余元，全部二十元，一百二十八冊」

[文娟21-365]『小説月報』第6巻第6号1915.6.25「《説部叢書》一百三十冊，零售四十余元，全部二十元」

[文娟21-366]『申報』1915.10.16「前曾選印初集一百種以餉同志，茲更精選情節新奇，趣味濃郁者一百種匯印，集中有林琴南先生手筆四十五種尤為特色」「“説部叢書”初集、“林訳小説”叢書，各収實価十元，期限仍以本年十二月為止」

[文娟21-366]『申報』1915.10.24「《説部叢書》初集一百廿八冊，零售四十余元，全部二十元」

以上の広告に木箱は出てこない。提供はやめてしまったのかと疑問が生じる。ところが同年年末の広告にふたたび姿を現わす。

5 初集本の木箱広告

初集本の広告を連続して掲載している。順番に示す（下線筆者）。

[文娟21-368]『申報』1915.12.16「<説部叢書>第一集(二)」作品とその紹介は省略。以下同じ。

[文娟21-368]『申報』1915.12.20「<説部叢書>第一集(一)^①」「全書一百種、定価二十元。本館所印《説部叢書》、皆系新訳新著之作、饒有趣味、早已風行一時、積五六年之力、始得完成一百種計一百三十一冊、茲特装成一木箱、以便購者得窺全貌」

①此則廣告為《説部叢書》第一集系列廣告的第一種、故廣告標題有標“一”注明、第二種已經前于12月16日刊載。

ここに木箱がふたたび出現している。販売価格は20元に据え置いた。

文娟がほどこした注①を見る。(二)の方が(一)よりも以前に掲載されたという指摘は正しい。しかし下線をつけた「第一集系列」とは何か。似た表示に「第一集初集」がある(『商務印書館図書目録(1897-1949)』北京・商務印書館1981)。しかし「第一集系列」という記述は今まで見たことがない。付建舟のいう「十集系列」「四集系列」と似ていてまぎらわしい。それらとは別の系列があるのかと勘違いしそうだ。推測すると広告にある「第一集」を指してそのまま「第一集系列」と言っているのではないか。ここにこそ正確な注釈が必要だった。

筆者は中村忠行にならって元版と初集本に区別する。付建舟は上述のとおり十集系列と四集系列だ。「第一集系列」はそれらとは異なっているから理解に苦しむ。文娟はそれが初集であることを理解しているだろう。「第一集系列」と新しく造語する必要はまったくなかった。初集本あるいは四集系列だと書けばすむことである。後述する試行本の「第一集」があるがこの初集本とは刊年が異なる。

くり返すが広告にある「第一集」の中身は初集にほかならない。商務印書館こそが「初集」と表示すべきだった。なぜそうしなかったのか。初集は全100編ある。それを10編ごとにまとめて広告に出した。まるで元版のように区切っただけだ。

「第一集」と表記した理由は推測できる。初集に続く2集がある。この2集を指して新聞広告では「第二集」([文娟21-376]『申報』1916.1.23)と書いて整合性

を保持したつもりだ。注意してほしい。「説部叢書」第二集は存在しない。「二集」というのが正確だ。「初集」に続くのだから「二集」となるのは当然である。それを維持していれば問題はなかった。だがそのあとで「第三集」「第四集」を出したのだから呼称はもともと不統一なのだ。

この広告はどう見ても「初集」「二集」という実物にある表記を反映していない。版元である商務印書館自身が実態を把握せずに不適当な用語を使う。その程度の管理能力しかなかったのかと疑う。

以下に表題だけを示す。

[文娟21-369]『申報』1915.12.23「<説部叢書>第一集(三)」

[文娟21-370]『申報』1915.12.24「<説部叢書>第一集(四)」

[文娟21-371]『申報』1915.12.30「<説部叢書>第一集(五)」

[文娟21-372]『申報』1916.1.3「<説部叢書>第一集(六)」

[文娟21-373]『申報』1916.1.13「<説部叢書>第一集(七)」

[文娟21-374]『申報』1916.1.15「<説部叢書>第一集(八)」

[文娟21-374]『申報』1916.1.17「<説部叢書>第一集(九)」

[文娟21-375]『申報』1916.1.19「<説部叢書>第一集(十)」

[文娟21-376]『申報』1916.1.23「第一集<説部叢書>九十一至一百」。文娟の説明は「内容同1916年1月19日、但標題相異」。

以上は「説部叢書」初集だ。同じく2集の販売広告に木箱がでてくる。

[文娟21-383]『申報』1916.2.18「商務印書館<説部叢書>二集出版」「預約期限既満、書已完全出版、曾購預約諸君、請即凭券取書。全書共一百種、洋装一百六十余冊、定価二十八元、郵費一元二角。如欲另備木箱、加洋一元四角」

ここは正しい「二集」を使用する。1908年の木箱は1元だった。それが別売りで1元4角に値上がりしている。上の広告によれば2集も箱売りだ。木箱は元

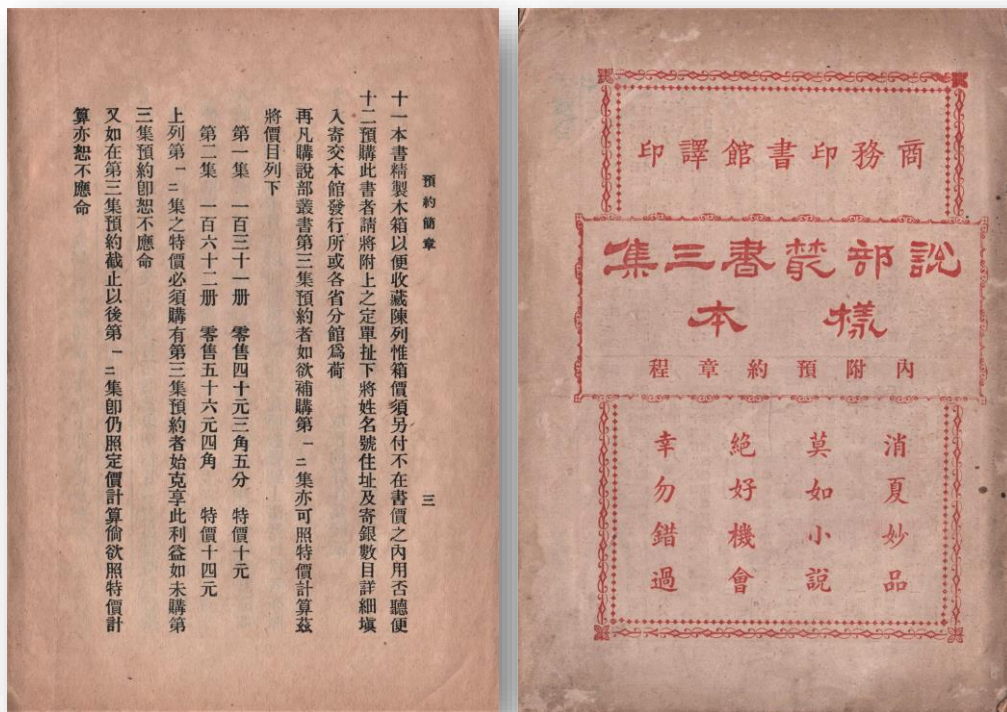
版、初集および2集を収納するのにも使われた。

その後も初集本の箱売りは続く。

[文娟21-383]『申報』1916.3.3「第一集<説部叢書>（一）第一至第十止」
「全書一百種，定価二十元。本館所印《説部叢書》，皆系新訳新著之作，
饒有趣味、早已風行一時，積五六年之力，始得完成一百種，計一百三十三
冊，茲特裝成一木箱，以便購者得窺全貌（後略）」

この広告では100種で合計133冊とある。ここでもまだ「第一集」の「第一至第十止」と現実を反映していない記述をする。奇異だ。

『説部叢書三集様本／内付予約章程』商務印書館（刊年不記。推測1920）が手元にある。



説部叢書三集様本

その内容は商務印書館が宣伝用に作成した小冊子である。「説部叢書」第3集

が完結するのでまとめて販売する。その予約募集を案内している。無料配布したから刊年不記だ。

「説部叢書三集予約簡章」の1条に「予約期限以旧曆庚申年七月底為止八月底出書」（1頁）とある。庚申は1920年を指す。1920年旧曆七月を予約期限と定めた。ゆえに該小冊子は1920年に配布されたと判断する。

木箱が出てくるのは次の部分だ。「本書精製木箱以便收藏陳列惟箱価須另付不在書価之内用否聽便」（3頁）。以前に言っていた携帯に便利という説明はさすがに消えている。收藏陳列するために作成したと表現を変えた。ただし料金は別に支払う必要がある。価格は明示されていない。要不要は自由だ、というから購入者は選択できた。

この小冊子には「第三集目録」がある。続いて既刊の「初集」「二集」に収録した作品目録を明記する。それぞれの名称は正しい。しかし別の箇所では違う記述をする。

「第一集 一百三十一冊 零售四十元三角五分 特價十元」（3頁。以前は「原定価四十元零二角五分」と書いていた）とか「第二集」（3頁）である。「初集」「二集」にしていない。小冊子の題名が『説部叢書三集様本』だ。初集、2集、第3集を収録するから「三集」としている。それにしても呼称不統一というのが基本方針なのかと疑ってしまうほどに緩い。細かいことは問題にしないのだろう。

冊数は131冊とする。初集の冊数について商務印書館自身が異なる数字を提出しているのは明らかだ。後でまとめて説明する。

6 もうひとつの「説部叢書」第一集——試行本

元版と初集については以上のように説明はできる。ただしここに不可思議な「説部叢書」第一集がある。商務印書館が新聞広告で称する「第一集」（＝初集）とは別物だ。鄭方曉『清末民初商務版《説部叢書》研究』（復旦大学2013 博士論文）でその存在を知った。探してみれば以下のものが見つかる。集編番号、書名、刊年のみを示す。

- 第一集第一一編『金銀島』1914.4再版
- 第一集第一二編『回頭看』乙巳2（1905）／1913.12再版
- 第一集第一三編『迦茵小伝』（乙巳2(1905)／1913.12再版)
- 第一集第一七編『埃及金塔剖尸記』1913.12再版
- 第一集第二二編『鬼山狼侠伝』乙巳（1905）7初版／1914.4再版
- 第一集第二三編『曇花夢』1906.4／1914.4再版
- 第一集第二六編『斐洲煙水愁城録』乙巳10／1914.4再版
- 第一集第三四編『魯濱孫飄流続記』丙午4（1906）／1914.4再版
- 第一集第三五編『洪罕女郎伝』1906.1／1913.12三版
- 第一集第三五編『洪罕女郎伝』丙午1（1906）／1914.4再版
- 第一集第三九編『蛮荒誌異』丙午2（1906）／1913.12三版
- 第一集第八十編『朽木舟』1913.12三版



五分		二角		一角	
身作则		以端本		為購閱	
之法也		為購閱		情破綻	
道者可		滅絕人		為世之	
以鑿矣		情破綻		甚這好	
		順人道		之許不	
		行試驗		人為實	
		解剖生		沈迷科	
		七醫士		是編通	
		本小		是書專	
		描摹小		學教師	
		之標範		之標範	
		以貢獻		於青年	
		界凡學		校諸君	
		為購閱		為購閱	
		以端本		以端本	
		身作则		身作则	
		之法也		之法也	

版出館書印務商

説小育教

記石棄石埋

説小探偵

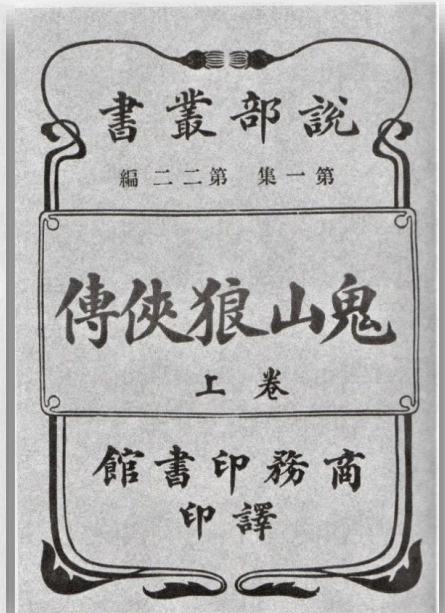
案士醫七

總發行所 商務印書館

發行所 上海 北河南路 北京 宣武門外 天津 法租界 漢口 英租界 廣州 惠愛路 香港 德輔道中 長沙 太平街 重慶 打銅街 成都 春熙路 昆明 正義路 貴陽 中華南路 西安 南大街 太原 南門外 濟南 經二路 青島 湖南路 煙台 順泰街 石家莊 中興路 鄭州 經二路 開封 經二路 徐州 經二路 蚌埠 經二路 蕪湖 經二路 安慶 經二路 九江 經二路 南昌 經二路 長沙 太平街 重慶 打銅街 成都 春熙路 昆明 正義路 貴陽 中華南路 西安 南大街 太原 南門外 濟南 經二路 青島 湖南路 煙台 順泰街 石家莊 中興路 鄭州 經二路 開封 經二路 徐州 經二路 蚌埠 經二路 蕪湖 經二路 安慶 經二路 九江 經二路 南昌 經二路

★此書有著作權翻印必究★

新舊宣統三年四月初三日出版五月十四日發售



孔夫子旧書網

「第一集」と称するのは元版だ。表紙は元版のタンポポ文様と同じである。ただし単色であるのが元版とは異なる。そこまではいい。ところが「第一一編」と

表示する。初集の編番号に似ている。だが初集は「第十一編」だ。意味は同じだが表記が違う。つまり上に示したのは元版の表紙と初集の集編番号の双方を混合したものだ。別の言いかたをすれば元版ではないし初集でもない。第3形態というべき刊行物である。

また刊年を見れば1913年12月から1914年4月に集中している（記述している初版の刊年はここでは重要ではない）。そこから筆者は元版の延長上にある試行本だろうと考えた。赤色リボン文様の初集本とほぼ平行して印刷刊行された。ただし後世に広く伝わるのは赤色リボン文様の表紙を持つ初集本だ。商務印書館は混合種の第一集については継続刊行しなかった。だから忘れられた。古書店にいくつかが現われてその存在が判明する。

筆者は試行本だと幾度か言及したが反応を示す研究者はまだ出現していないようだ*4。

7 「説部叢書」初集の冊数

商務印書館の提示する改組後の元版、改称して初集の冊数が問題である。

改組後の元版および初集が全100編（種）という数字は基本にあって変わらない。ところが作品によっては1編で2冊、3冊あるいは4冊に分冊されることがある。編数と冊数が異なる原因だ。

どこまで違う冊数が示されているのか。次にまとめる。

1908年8月16日の広告では128冊と記述した。それで一貫していれば問題は表面化しなかつただろう。ところが1908年9月13日で130冊、1915年12月20日で131冊とした。1916年3月3日にはさらに増えて133冊という。1918年1月28日は123冊に減少（[文娟21-403]）。同年7月18日は131冊にもどる（[文娟21-406]）。1920年6月8日も131冊（[文娟21-424]第一集とする）。1920年も131冊。また商務印書館が配布した『図書彙報』第118期（1927.4）、同第121期（1930.2）の記述はどちらも「初集一百種 一百三十冊 二十元」なのだ。

発行済みの書籍数がどうして一致しないのか。ばらばらな数字は読者に理解しにくい印象を与えている。複数の数字が出ているということは広告を出すたびに

実物で確認したからだろう。数えて以前とは違う数字が出現した。怪しい。

いい機会だから樽目錄第14版（2022）にもとづき付建舟『商務印書館〈説部叢書〉叙録』（北京・中国社会科学出版社2019.8）を参照して数えてみた。筆者の得た数字は全131冊である。商務印書館の『商務印書館書目提要』1909.九改定7版、また『申報』1915年12月20日の広告および『説部叢書三集様本／内付預約章程』（1920）また文娟の収集した広告文の全131冊と一致する。商務印書館編訳所所員が「説部叢書」の実物で数回にわたって勘定したところに誠実さが窺えて評価できる。しかし全体の数字が合致しないから商務印書館編訳所の管理能力が逆に問われる結果になった。

「説部叢書」の木箱売りは1908年から始まっている。1920年まで追跡できた。蓋についていえば本稿掲載色彩写真とは別の意匠、彫り文字になっているもの（1911）がある。少なくとも2種類の存在は確認できる。

【注】

- 1) 参照文献。樽本照雄「商務印書館版「説部叢書」の成立」および「商務版「説部叢書」研究の昔と今」。『商務印書館研究論集 増補版』清末小説研究会2016.5.15 電字版所収
- 2) 鄒振環『20世紀上海翻譯出版与文化變遷』南寧・広西教育出版社2000.12。51-52頁。
また同著『訳林旧踪』南昌・江西教育出版社2000.9。129頁
- 3) 関連文章をいくつか示す。
汪家熔「橡皮股票風波中的夏瑞芳」『出版博物館』2009年第2期（総第6期） 2009.6
柳和城「商務印書館“橡皮股票”風波豈容否認！——与汪家熔先生商榷」『中華読書報』2009.8.15 電字版
汪家熔『中国近現代出版家列伝・張元濟』上海辞書出版社2012.10 張元濟写真帳付き。
『大變動時代的建設者——張元濟伝』（成都・四川人民出版社1985.4）を増補訂正したもの。『繡像小説』の主編について「這個刊物的編輯人可能是夏曾佑」（107頁）と1980年代の主張を繰り返している。間違い。商務印書館自身が李伯元を『繡像小説』に招いたと新聞広告を出していた事実がある。
趙俊邁『典瑞流芳：民国大出版家夏瑞芳』北京・商務印書館2017.4。附録に「商務印書

館大事紀」があるも金港堂との合弁とその解消の記載がない、『繡像小説』刊行に触れない。

柳和城『書裏書外——張元済与現代中国出版』上海交通大学出版社2017.8

柳和城『橄欖集：商務印書館研究及其他』北京・商務印書館2020.1

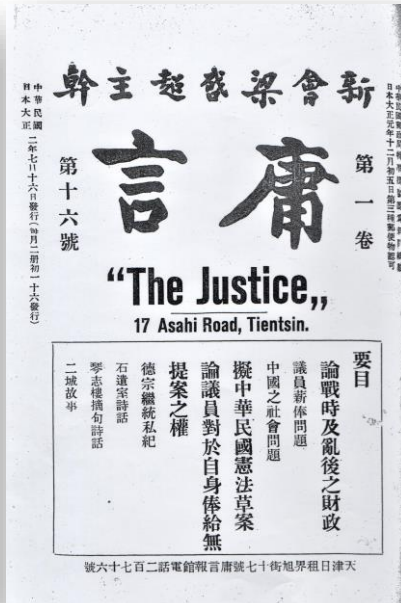
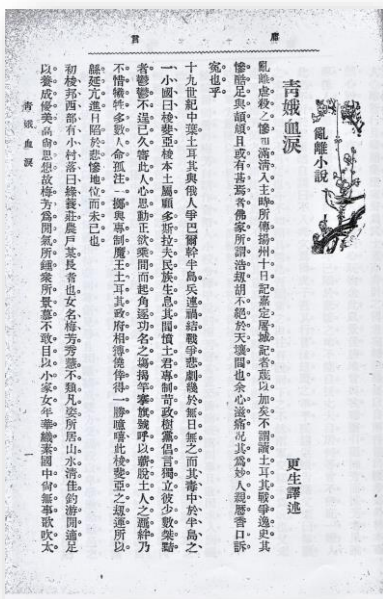
黄 嗣『中国出版家・夏瑞芳』北京・人民出版社2021.8。附録1 商務印書館董事會議章程、附録2 “中華民國三年一月商務印書館股東非常會議”記録、附録3 商務印書館与日本金港堂終止合辦合同などがある。商務印書館と金港堂の合弁に関して以前の中国学界では「敏感」な問題だった。本書を読めばその「禁区」は解禁されたように思う。

- 4) 神田一三「商務版「説部叢書」試行本」（『清末小説から』第125号 2017.4.1）および「「説部叢書」元版はタンポポ文様」（『清末小説から』第126号 2017.7.1）。樽本『清末小説三談』（清末小説研究会2019.3.1 電字版）所収

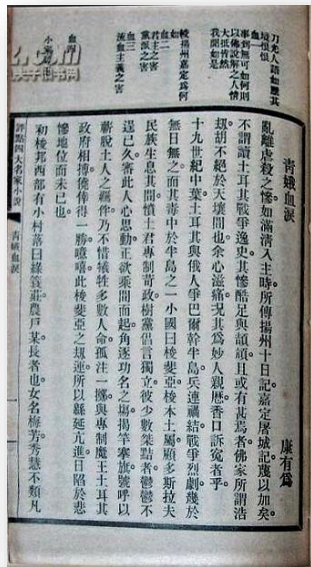
厚生「青娥血涙」は康有為作か

『清末小説から』第148号（2023.1.1）に掲載。「許指巖の啓事」（『小説月報』第4巻第5号（1913.9.25））があるという。許指巖自身のお知らせだ。『庸言報』に掲載された更生「青娥血涙」は『小説月報』第4巻第4号（1913.8.25）掲載の弾華「帳下美人」とは同一著者だと宣言している（弾華、更生均指巖別号）。現在まで「青娥血涙」の著者更生は康有為だと考えられてきた。なぜ更生作品が康有為作品になったのかその理由を述べる。清末小説研究会ウェブサイト（2021.11.15）に大要を公表した。本稿に収録する。

更生訳述「（乱離小説）青娥血涙」（『庸言』1巻16号 1913.7.16）がある。

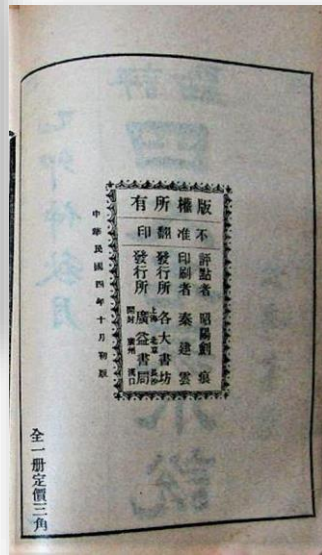
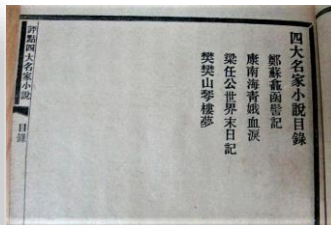


表紙 本文



奥付 扉 目次 本文

孔夫子旧书网より



それが『評点四大名家小説』（上海・広益書局1915.10）に収録された*1

該書はほかに梁啓超「世界末日記」、鄭孝胥「函髻記」、樊増祥「琴樓夢」などを収めて1冊本になっている。その際「青娥血涙」の著者は目次で「康南海」、本文で「康有為」と明記された。ならば初出の更生は康有為の別号ということになる。確かに陳玉堂『中国近現代人物名号大辞典』（2005）*2に康有為の号として厚生がある。『清議報』『新民叢報』『丙辰』などに署名が見えるという（1153頁）。

それ以後、筆者の知る限り次の刊行物に収録された。

張正吾主編『晚清民国文学研究集刊』（第4輯 1996.8。連燕堂校点。「識」275頁）および于潤琦主編『清末民初小説書系・社会卷下』（北京・中国文聯出版公司1997.7.20）。『評点四大名家小説』が底本である。いずれも著者を「康有為」とする。

ということで「青娥血涙」は康有為唯一の小説作品として認められている。現

在まで異論は出ていないように思う。

ところが興味深い資料があることに気づいた。黄曼編著『民初小説編年史(1912-1914)』（武昌・武漢大学出版社2021.5）に記載される。

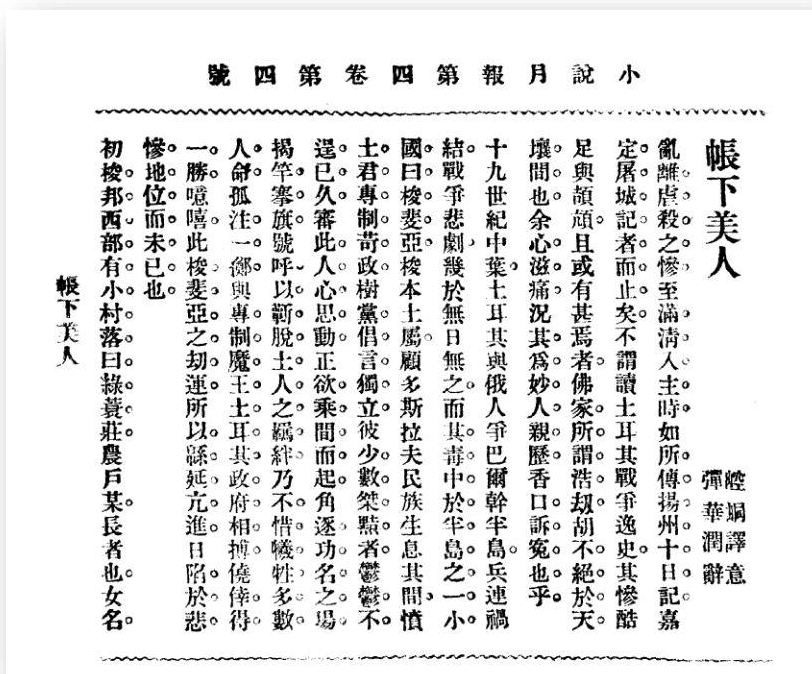
この年表は小説に関連する新聞記事も収録する。そのひとつが『小説月報』第4巻第5号（1913.9.25）に掲載されたという許指巖の「啓事」だ。すなわち、本人が出した告示、お知らせである。

その内容を簡単にまとめる。

「帳下美人」（『庸言報』16期の「青娥血涙」）は許指巖自身の作品だ。弾華と更生はいずれも彼の別号というもの。

昨年、北京の友人余青萍君に売り込んでもらおうと写しを送ったが売れなかった。そこで小説月報社に送って受理された。余君は病没してしまい原稿は未回収のままだった。それが突然『庸言報』第16期の小説欄に掲載されている云々。全文は孫引きだから注に示す*3。

こういうばあいは小説の実物を見る方が早い。



『小説月報』第4巻第4号（1913.8.25）

本稿のはじめに示した『庸言』掲載の「青娥血涙」と『小説月報』第4巻第4号（1913.8.25）掲載の崆峒訳意、弾華潤詞「帳下美人」を比較対照した。同文であることがわかる。ということは題名の異なるふたつは同一作品だ。

初出の更生がなぜ康有為になったのか。

時間系列で見ていくと『評点四大名家小説』が原因のようだ。すなわち劍痕が「青娥血涙」を『評点四大名家小説』に収録する際にそこにある更生を康有為名義に書き換えた。

許指巖名義の作品は大量に公表されている。

更生名義の作品はほかには「（寓言小説）獅子国」（『新聞報』宣統3.9.12-15未完（1911.11.2-5）未見）があるらしい。ただしこちらも許指巖の作品であるかどうかは不明だ。

弾華名義の別作品は見つからなかった。

【注】

- 1) 孔夫子旧書網に写真あり。扉は「乙卯仲秋月」、「評点四大名家小説序言」は「中華民國四年九月劍痕識于海上寓齋」、奥付は評点者：昭陽劍痕、発行所：広益書局、中華民國四年十月初版。
- 2) 陳玉堂編著『中国近現代人物名号大辞典（全編増訂本）』杭州・浙江古籍出版社 2005.1。ただし、許指巖（317頁）に「厚生」は記載されていない。
- 3) 記号は黄曼のまま。「許指巖啓事：《帳下美人》短篇（即《庸言報》十六期中之《青娥血涙》）確系本人撰著（弾華、更生均指巖別号），客歲曾以副本寄京友余君青萍紹介求售，久未售出，始送《小説月報》社，即蒙登録，而余君旋病故，未及收回原稿，茲忽于《庸言報》第十六期小説欄中登出，想余君已經送入該社而未及關照之，故因兩方面著作權之名譽攸關，用特宣言，舛錯事由一切責任均歸撰稿本人承担，与兩方面主任無涉。許指巖謹白。」264頁

【附録】清末小説研究会ウェブサイト2021.11.15

先日お知らせしました。黄曼編著『民初小説編年史（1912-1914）』（2021）です。
なによりもこのような基礎資料が編集刊行されたことを喜びます。

とても詳細で1912年から3年分を収録して1冊484頁です。新聞、雑誌に発表された作品を日付順に記載しています。そればかりか出版広告、また関連する文章も収録しているのが貴重です。

読んでいて面白いと思う個所がありました。作者の別名に関するものです。ひとつご報告しましょう。

『小説月報』第4巻第5号（1913.9.25）に掲載されたという許指巖の啓事がおもしろい（264頁）。

すなわち弾華「帳下美人」と更生「青娥血涙」は同一著者だと許指巖が自分で広告しているのです（弾華、更生均指巖別号）。

樽目録のQ0930「青娥血涙」は作者を更生（康有為）と記述します。

『評点四大名家小説』（1915）に収録されて「康南海青娥血涙」とあるからです。これが揺らぎます。

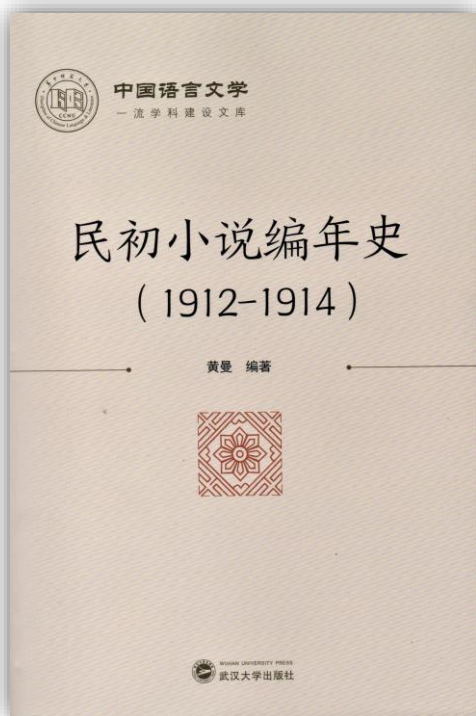
許指巖啓事のとおりであれば、ほかの記述も見直す必要があるでしょう。

【追記2022.9.30】「許指巖啓事」は文娟『前『五四』時代的文化符号：商務印書館与中国近代小説』（桂林・広西師範大学出版社2021.6）にも収録されている（356頁。字句が一部異なる）。

民初小説年表の最新成果

—黄曼『民初小説編年史』について

『清末小説から』第145号（2022.4.1）に掲載。黄曼編著『民初小説編年史（1912-1914）』（武昌・武漢大学出版社2021.5）を書評する。民初小説の年表だ。陳大康『中国近代小説編年史』全6冊（北京・人民文学出版社2014.1）を継続している。その特色は実物で確認した新聞雑誌だけを採取するところにある。詳細このうえない。単行本は収録しないが別の目録を見ればよい。ただし小さな間違いがあるのは個人作業のため避けることができない。継続刊行されることが望まれる。



黄曼編著『民初小説編年史（1912-1914）』（武昌・武漢大学出版社2021.5）である（以下『民小史』と称する）。

民初小説についての基礎資料が刊行されたことを喜ぶ。

本文は12頁から484頁までである。そのすべてに目を通した。紹介をかねて感じることを述べる（本稿の一部は清末小説研究会ウェブサイト2021.11.22で報告した）。

全体の紹介

書名に「民初」とある。カッコ内に示すとおり1912年1月より1914年12月までの3年

間に発表された小説を対象としている。

「凡例」によるとこの3年分は「民初小説編年史」の一部分だという。黄曼は1912年から1916年までの新聞雑誌を閲覧して編集した（陳広宏「序」）。将来、残りが継続して刊行される可能性もあるかもしれない。

書名の「編年史」は日本でいう「年表」という意味だ。

配列の方法は発表の時間順に小説作品を掲げる。日付単位だから詳細になる。新聞に掲載された小説のばあいは作品名と作者および掲載誌がくり返される。日付のない月だけ、あるいは月日不明の雑誌は後ろにまとめる。新聞掲載の作品ばかりではなく関連する記事、広告までも収録する。実際にそのとおりになっている。丹念な仕事である。

以上を見れば陳大康『中国近代小説編年史』全6冊（北京・人民文学出版社2014.1。略称は〔編年〕）の編集方針とほぼ同じであることがわかる。すなわち陳大康年表が清末で終わっているのを黄曼が継続して民初というわけだ。

参考になる先行文献の一部を次に示す。

孟兆臣『中国近代小報史』北京・社会科学文献出版社2005.10

劉永文編著『民国小説目録（1912-1920）』上海世紀出版股份有限公司、上海古籍出版社2011.12

羅紫鵬「附録1：《申報》小説家及其作品一覽表（1907-1919）、《新申報》小説家及其作品一覽表（1916-1919）」『《申報》《新申報》小説家述考（1907-1919）』北京・中国社会科学出版社2018.12

年表と目録は違うが以上の刊行物と重複する個所もある。かまわない。参考資料が複数あれば相互検索ができるからより便利だ。

新しい発見と注意点

樽目録と比較対照した。結論からいえば全2,622件について点検することになった。

従来目録では見ない新聞雑誌が採取される。『中華民国公報』、浙江嘉善

『善報』、『民生日報』、『愛国小説報』、『中華童子界』などだ。その結果、樽目録に新しく234件を追加した。

『民小史』に収録する小説は新聞（報紙）と雑誌（期刊）に掲載されたものに限る。

時期的にみて商務印書館版「説部叢書」が収録されているだろうと期待した。しかし単行本は採取対象にしない編集方針らしい。「凡例」に単行本は排除するとは明記されていない。しかし単行本で唯一収録されたのは『時事新報小説合編』（上海・時事新報館1912.10. 133頁）のみだ。原則から外れる理由は知らない。

そうであるから書名を正確に記せば『民初報刊小説編年史』である。見ていない単行本を別の目録から無断借用するよりも良心的ということができる。

新聞に掲載された作品はすべて採取する方針となっている。これは記述に手間がかかる。連載長篇小説ならば連日のように掲載紙と作品名、作家名がくり返される。これが3年分にもかかわらず1冊分のページ数を必要とした理由だ。

たとえば上記劉永文『民国小説目録』では新聞連載作品の第1回だけを採用しているものがある。『民小史』はその欠けている継続部分を補って途中の掲載をすべて掲げる。

ところが途中を省略するばあいがあるのも事実だ（略号〔民小史〕の数字は頁数。刊年は簡略化する）。

「男女現世宝」『新聞報』〔民小史27〕叢録、白話章回、1912.3.1。至本月6日
止。

「女兒魂」『大共和日報』〔民小史62〕文言、1912.5.24。至5月31日止。

「覆轍鑑」『新聞報』〔民小史114〕白話章回、1912.9.5。至本年11月9日《新聞報》止。

結果として不統一である。その理由は不明だ。

実物で確認した作品だけを掲載している。『民小史』の特色のひとつだ。ゆえに新聞雑誌で欠号があれば収録しない。推測で記入する危険性を黄曼はよく理解している。それだけ信頼できるという意味でもある。

実物を確かに見ている証拠をひとつだけ掲げる。

『東方雑誌』第9巻3号(1912.9.1)に掲載された「五十故事」がある。「五十故事」は総称であってその下に複数の作品が収録される。その1作品を示して目次は「蜘蛛之露布」だ。本文は見ずに目次の記載をそのまま採取する編集者が多い。ところが黄曼は本文にある「鼯鼯之露布」本文で確認していることがわかる人だけが理解するだろう。

あるいは上述陳大康年表に記載された発行年についての誤りを発見することもある。1912年で両目録は交差するからそういうことが生じる。

つぎの連載作品だ。

葛麗斐史著 天游訳述「(理想小説)新飛艇」『東方雑誌』第8巻第1-12号 宣統三年二月二十五日(1911.3.25)-1912.6.1

陳大康年表は連載途中の第8巻第11号の刊年について以下のように記す(比較しやすいように刊年を整えた。下線は筆者)。『民小史』の記述と並記する。

【編年⑤2310】第31-34章、第8巻第11号、(宣統三年民国元年旧曆)十一月二十五日(1912.1.13)

【民小史51】白話、第8巻第11号、1912年5月1日

下線部の新曆「1月13日」と「5月1日」では刊行月日が異なる。1911年10月10日(旧曆八月十九日)が辛亥革命だ。新曆1912年1月1日になるのは旧曆宣統三年十一月十三日からである。清末から民国へ移行する混乱期だ。刊行物によっては刊年表示が旧曆だったり新曆にしたり複雑に併存している。民国になっても旧曆を使用する雑誌もあるから一律ではない。

上記の両者が一致しないから『東方雑誌』該号奥付で確認する。変化を見るため前後号の刊年も示す。○印をつけたのが【編年⑤2310】と【民小史51】で一致しない第8巻第11号だ。

第8巻第8号 宣統三年八月二十五日発行

第8巻第9号 辛亥年九月二十五日発行

第8巻第10号 中華民國元年四月初一日発行（中国大事記 自辛亥九月十四日至民国元年三月初十日）

○第8巻第11号 中華民國元年五月初一日発行

第8巻第12号 中華民國元年六月初一日発行

製 複 許 不		表 目 價 告 廣 誌 雜 方 東		冊 出 月	
分 售 處	發 行 所	印 刷 所	發 行 者	項 目	冊 六 冊 十 一 冊
杭州 寧波 嘉興 紹興 湖州 蘇州 無錫 常州 鎮江 揚州 南通 蕪湖 漢口 長沙 常德 衡陽 柳州 貴陽 昆明 蘭州 西寧 迪化 哈密 喀什 和田 吐魯番 鄯善 哈密 庫車 焉耆 吐魯番 鄯善 哈密 庫車 焉耆 吐魯番 鄯善 哈密 庫車 焉耆	北京 天津 漢口 廣州 香港 上海 南京 蘇州 無錫 常州 鎮江 揚州 南通 蕪湖 漢口 長沙 常德 衡陽 柳州 貴陽 昆明 蘭州 西寧 迪化 哈密 喀什 和田 吐魯番 鄯善 哈密 庫車 焉耆 吐魯番 鄯善 哈密 庫車 焉耆	上海 北京 天津 漢口 廣州 香港 上海 南京 蘇州 無錫 常州 鎮江 揚州 南通 蕪湖 漢口 長沙 常德 衡陽 柳州 貴陽 昆明 蘭州 西寧 迪化 哈密 喀什 和田 吐魯番 鄯善 哈密 庫車 焉耆 吐魯番 鄯善 哈密 庫車 焉耆	紹興 亞泉 杜社 東興 雜社 紹興 亞泉 杜社 東興 雜社	定價及兌票三 郵本 國三分一角八分三角六分 郵日 本六分三角六分七角二分 費外 國一角二分七角二分一元四角四分	等第地位一 冊三 冊半 年全 年 特等 一面四十元 一百二十元 二百元 二百二十元 上等 一面三十元 八十元 一百一十五元 二百四十元 普通 一面二十元 五十五元 一百元 一百六十元 每行五角半 一元五角 二元八角 四元五角 特等（底頁外面）上等（封面底頁之裏面及圖書論說前）餘均為普通
中華民國元年五月初一日發行 第八卷第十一號					

『東方雜誌』第8巻第11号

上の第10号掲載「中国大事記」の「辛亥十一月十二日」の次項目に「中華民國元年正月初一日」を掲げる。そこで新曆採用について次のように述べる。「改用陽歷……以黃帝紀元四千六百零九年辛亥十一月十三日。為中華民國元年元旦。經各省代表議決。由總統頒行」（8頁）

『東方雜誌』は第8巻第10号より刊年を新曆表記に切り替えた。だから第11号の「中華民國元年五月初一日発行」は当然新曆である。「初一日」と旧曆を思わせる表記だが事実上新曆だ。

少なくとも【編年⑤2310】の「旧曆十一月二十五日（1912.1.13）」ではない。写真で示したとおり【民小史51】が正しい。調べたうえでの結論だ。

大量の新聞雑誌をひとりで採録記述するのだから間違いも発生する。民初の新聞雑誌では印刷が不鮮明なばあいも往々にしてある。誤認が出てくるのはしかたのないことだ。

署名の「東塾」を黄曼は「東塾」と記す。利用者は実物を見て確認する必要がある。

あるいは「𪛗叟」を「𪛗叟」とする。印刷所が該当漢字を所有していないのか。従来の目録（樽目録を除く）は「𪛗」を当てて見ぬふりをしていた作者名だ。

あるいは『民小史』掲載に当たって作品名の一部が欠けてしまった箇所がある。カッコを補って黄色で示すと次のとおり。

430頁「滑稽小説<假陳天(華>>)」。440頁「復仇小説<殺人(女>>)」。462頁「俠情小説<劍声(花影>>)」。

なんらかの手違いでデータが部分的に消失したらしい。校正でも見逃した。

以上、細かなことを指摘した。全文を点検したことをいうためだ。

小さな字句の異同は気にする必要はない。工具書の最終目的は実物に到達することだとは誰でも理解している。必要に応じて使い分ければいい。手掛かりはいくらあってもよいのが常識だ。最終的に利用者の判断にまかされている。

ま と め

以上をまとめて以下のとおり。カッコ内で筆者の感想を述べる。

1 実物で確認したもののみを採取している。（堅実な方針だ。もっとも見ていない新聞雑誌は記載のしようがない）

2 著者などは実物記載のままを採取する。（翻訳ならば原作名、原作者などを一歩深めて注記しない。それをやりはじめるとページがいくらあっても足りないだろう。ありのままを記載するところで止めるのもひとつの見識である。陳大康年表がそれを実践している）

3 単行本は収録しない。新聞と雑誌掲載作品だけを採取対象とする。（単行本については別のものを見ればほぼ解決する）

4 人名索引、作品索引は作成されていない。（学術資料には不可欠だと思う）

残念なことだ。あるいはそれを備えた次の刊行が予定されているかもしれない。とりあえず樽目録第14版（2022）に取り込んだ。こちらは全文検索が可能である）

5 同じ活字を並べているだけで読みにくい。（編集上の問題である。工夫のしかたはいくつもあった。日付を太活字にする、罫線を引くなどの処置があればかなり読みやすくなったと思う。陳大康年表の方式を取り入れたからそこまでは考えなかったようだ）

利用者はこの『民小史』を手元に置いて各種目録、年表などと相互検索するだろう。そうすると作品名、作者名、掲載時期など異なる箇所が見つかるばあいがある。どちらが正しいかは各自が実物で調べて解決するほかない。工具書の責任にしないほうがいい。

なお編者不記『清末民初報刊小説目録（1815-1919）』期刊巻、報紙巻（出版社、刊年ともに不記）について紹介する機会もあるだろう。

『清末民初報刊小説目録（1815-1919）』について

——出所不明の目録を私が信用する理由

『清末小説から』第146号（2022.7.1）に掲載。編者、印刷所、刊年のいずれも記載がない。出所不明である資料は研究に使用しないのが普通だ。しかし、該目録は見ればその考えが変わる。まず見たこともない地方の雑誌、新聞に掲載された小説を収録する。シンガポール、アメリカ、オーストラリア、フランスなどに及ぶ。しかも同じ作品を転載している事実を細かく注記する。新聞と雑誌に対象が絞られているがこれほど大量の小説を収録した清末民初小説目録は見たことがない。内容的には信頼できると確信した。該目録の収録作品と従来の単行本とあわせて『清末民初小説目録 第14版』になった。

はじめに——不思議な目録

書名に見る「報刊」は新聞雑誌を指す。すなわち報紙（新聞）小説目録（新聞巻とする）、期刊（雑誌）小説目録（雑誌巻とする）を称して上記のとおり。全2冊の小説目録には基本的に単行本は含まれていない。本稿はこの目録について紹介する。

内容を紹介する前に言わなければならないことがある。該目録は不可解な存在だ。製本された印刷物だが、編者、出版社、刊年、定価などについて一切の記載がない。出所不明だから不審な目録と考えるのが普通だ。出所不明の書籍は常識からいって学術的基本資料として使用することはない。

しかし目録本体を検証した結果、該書は資料として信頼できると判断した。その内容について結論めいたものを最初に示す。筆者の見解を単純化していえば

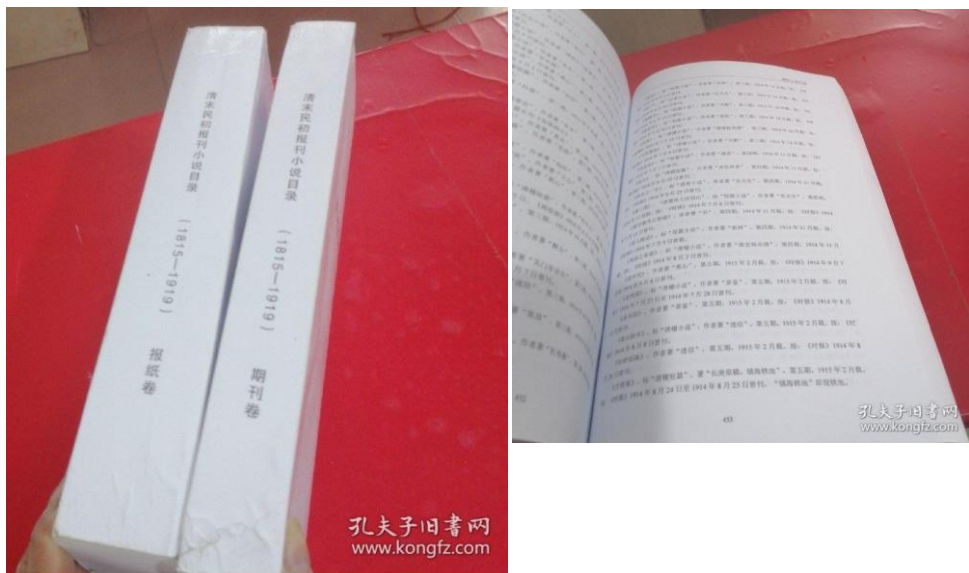
「詳細、厳密かつ広範囲」である。その経過について説明する。最後に編者を推断してみる。

入手の経緯

該目録を見つけたのは偶然である。誰かに教えてもらったわけではない。また日本の中国書籍専門店の販売目録に掲載されてもいない。古書ネットを閲覧していて目にとまった。

書名は前出のとおり『清末民初報刊小説目録（1815-1919）』という。

出品した書店の説明がまた奇妙だ。「作者：本社編集部、年代：不詳、出版社：本社編集部」というだけ。別の言いかたをすれば不明ということにほかならない。売価も高い（688人民元）。これだけならば購入する気にはならなかっただろう。しかし添えられた複数の写真を見て気が変わった。



写真によれば昔の電話帳のような分厚い2冊本だ。不鮮明な内容写真だが目録であることがわかる。見る限り新しい。新刊ならば古書ネットでは複数の書店が同一書を掲げることが多い。ところが在庫1点のみと表示している。これが出品されたのは「上書時間2021-05-22」とあるからそうなのだろう。ネット上で検

索しても同一書籍は見つからなかった。手に取らなければ話にならない。2021年11月に注文して届いたのは同年12月のことだ。私が入手したということは、中国人研究者の興味は引かなかったらしい。

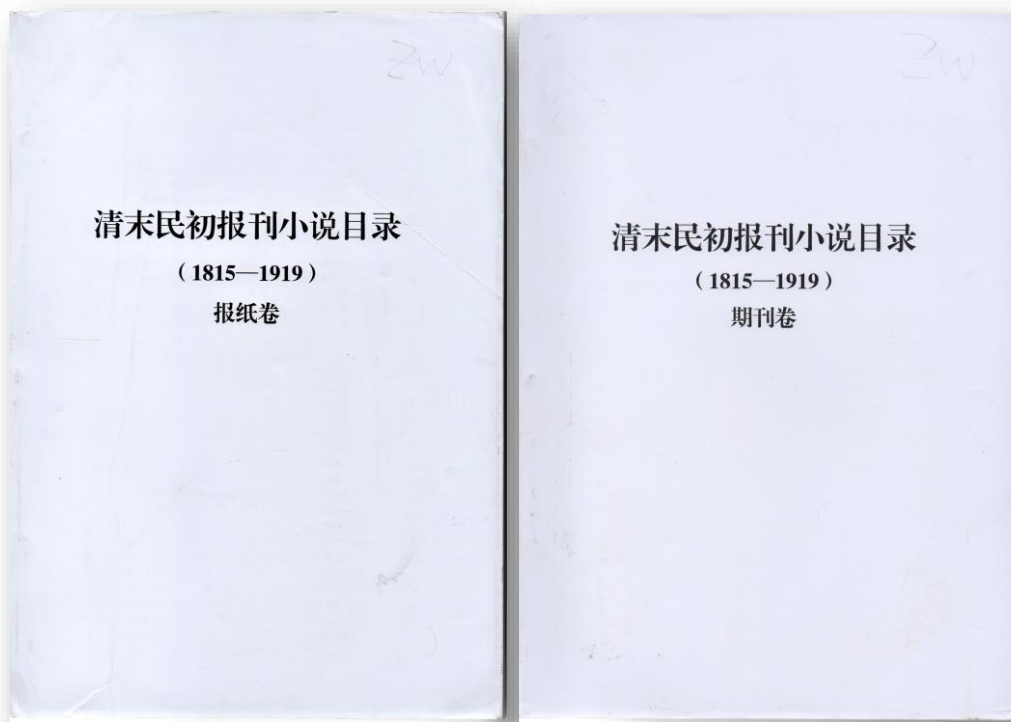
大 要

実物をみて出品書店の不可解な説明も理解できた。前記のとおり編者、出版社、刊年、定価ともに不記なのだ。これでは説明のしようがない。

2冊ともに製本されている。それにより校正用の試し刷りではないことがわかる。細かく見れば印刷所に所有しない活字（外字）は写真を貼りつけている。少なくとも校正作業は経ている。だからまったくの印刷見本というわけでもない。

不思議なのは頁数（ノンブル）の打ち方が普通ではない。書物の見開き右ページは奇数が大原則だ。下冊はその原則を無視して偶数から始めている。新聞巻のページをめくりながら最後まで気持ちの悪い思いをした。

いろいろ見ても正式な刊行物ではありえない印刷物だ。これはどういうたぐい



のものか。刊行物の性質を考えてみよう。

可能性のひとつは研究助成金の成果として印刷されたもの。附録だろうから出版社、刊年がなくてもかまわない。しかし編者くらいは明記するだろう。助成金を使用したのであればその承認番号を記載するのが普通だ。それもない。

以前には「試行本」という意見聴取本のようなものがあつた。それでも一応編者、印刷会社、刊年くらいは記載した。それがないから試行本以前の形態かと推測する。やはり印刷見本の類かと考えざるをえない。どうして売りに出たのかを含めて不思議な刊行物だという理由だ。

判型はほぼA4版に相当する。くり返せば雑誌巻（略号は〔清民刊〕）と新聞巻（同じく〔清民報〕）だ。1815-1919年に公表された小説を収録して目録部分は全1,652頁ある。目次は次のとおり。

凡例 1

- 一 期刊小説目録 1-697頁——雑誌巻
- 二 報紙小説目録 698-1652頁——新聞巻
——以下（索引巻）
- 三 報刊小説篇名索引 1653 未見
- 四 報刊小説著訳者中文姓名索引 1971 未見
- 五 報刊小説著訳者英文姓名索引 1977 未見
- 六 刊載小説報刊名録索引 1983 未見

「凡例」とページ数を見れば第3冊索引巻も刊行されたいらしい。だが入手できていない。ネットで検索したが見つからなかった。

編者名すら記載しない不審な刊行物だ（以下、G目録と称する。その理由は後述）。しかし、その「凡例」から本文へと読み進めていくにつれて最初の懸念はまったく消失した。学術的価値の高い小説目録であることを理解したからだ。

編集方針

雑誌、新聞を創刊の早い順に配列する。その範囲は1815-1919年だ。各種刊行

物の説明をしてそれぞれが掲載した小説を配列するという編集方針だ。1815年というのは正確ではない。なぜなら掲げられた『察世俗毎月続記伝』が1815年創刊というだけで所収の作品は「未見」としているからだ。次の『遐邇貫珍』1853年が初期の雑誌になる。

新聞雑誌について創刊年、創立者、出版社などを簡単に紹介する。さらに使用したそれら資料の所在を明記する。たとえば「国家図書館蔵該報縮微膠卷」「全国報刊索引數據庫」「大成老旧刊全文數據」などである。実物、影印本のほかにマイクロフィルム、光ディスクあるいは電腦による電字書庫（データベース「電子資源」／カナダ1459頁）も活用したことがわかる。これは資料としてG目録が信頼ができる根拠証拠のひとつだ。

もう少し説明すれば、以前の小説目録のあるものは使用資料を「凡例」などでまとめて記載する。しかし、新聞雑誌のいちいちについてその所在を明記したわけではない。このG目録は以前とは異なる。その典拠の確かな提示方法を見ただけで信用できる。

目録作成の時代変遷を目の当たりにする気がする。実物あるいは影印本を主としていた時代から、マイクロフィルム（縮微膠卷）からデジタル資料（數據庫）時代へ進化発展ということだ。そういう時代になったということも感慨深い。ただし資料を所蔵する図書館などへは足を運ぶ必要があるのはいうまでもない。

G目録の編者が参考資料として重視したのは劉永文目録（略称：劉書）と陳大康年表（略称：陳書）である。

劉永文『晚清小説目録』（2008）、『民国小説目録（1912-1920）』（2011。本稿は両書をまとめて劉目録という）および陳大康『中国近代小説編年史』（2014。本稿は陳年表と称する）と書名をあげている。中国学界では清末民初小説についてこの2種類が目録の基準になっていることがわかる。

各種新聞雑誌を上記2種類の先行文献が収録したかしなかったかをまず注記する。「劉、陳二書未録」「劉書未録、陳書有録」などがそれを示す。それは大まかな説明である。「劉書未録、陳書有録」とあるから陳年表には作品のすべてを収録していると考えれば間違い。広州『七十二行商報』もそう書いているが全8件のうち実際は1作品しか収容していない。それでも「陳書有録」となるから注

意を要する。

詳 細

基本は資料のあるがままを記述する。不記ならば書かない。未見の雑誌は「未見」と明記する。

各作品について編者の注が施されるばあいがある。同一小説が別の新聞などに転載されることが多々見られる。それを細かく拾って注に記入する。手間がかかる。

優れた点のひとつでもある注についてのべる。唐人、明人、清人の作品が原型であることを指摘する箇所が複数ある。

1例を挙げる。哈爾濱『遠東報』掲載のある作品に「此篇実為清人和邦額『夜譚随録』中「汪越」篇」と説明を加えた。ならばこれは清末小説ではないから目録に採録するのは不相当だという人もいるだろう。しかし注記がなければ清末民初の作品として扱うことになる。利用者が判断できる注釈をほどこすのはG目録の編者の学識を示している。貴重な箇所である。

雑誌の「小説」欄に掲載された戯曲についても同じだ。戯曲を収録すると「戯曲と小説の区別がつかない」とまるで1世紀以上前の中国で広くいわれた言葉を述べる研究者がいる。特に名前を秘すが東甫（広西師範大学文学院）などだ。清末民初では戯曲を小説としてあつかっていた歴史的事実がある。それを知らないらしい。G目録の編者はそれを承知のうえで戯曲を収録し「非小説、実為戯曲」と注記して判断は利用者にゆだねているのが親切だ。

収録数の多さを示すために例を『漢口中西報』（1906-1937）に取る。

この新聞について「據北京大学図書館及国家図書館蔵該報縮微膠卷著録、劉、陳二書有録」と記述する。マイクロフィルムに基づいたとわかる。劉目録と陳年表はともに収録している。しかし、両書の範囲はもともと異なっている。劉目録は清末民初だが陳年表は清末までだ。自然と収録数は違ってくるだろう。実際の収録状況を下に掲げる。

『漢口中西報』のばあい

	1906-1911	1912-1919	
劉目録	62*	0	*1907-1910年を収録する
陳年表	67* ²	0	* ² 1907-1910年を収録する
G目録	67* ³	105	* ³ 吳趼人「還我魂靈記」を採録しない

一見して理解できるだろう。今更ながら意外に思うのは劉目録だ。劉目録は民初を対照にしているにもかかわらず該新聞については作品の収録がない。見る機会がなかったのだろう。G目録によってその事実が判明した。

清末部分はほぼ同じ数字を示すが民初は圧倒的にG目録が多数だ。これを見ても詳細であることが理解できる。

もうひとつの例を示す。

旧金山『中西日報』のばあい

	1908-1911	1912-1919
劉目録	0	
陳年表	402	0
G目録	429	668（合計1,097）

『中西日報』には「劉書未録、陳書有録」と注記がある。ただし陳年表は清末までだから1911年で終了した。G目録はそれに加えて1912-1919年を収録するから圧倒的な多数を示す。

厳密

特記すべきは記述の厳密さだ。作品のひとつひとつに「同劉」「同陳」「同劉、陳」と注記して比較対照したことがわかる。

題名、角書、著者、訳者、刊行月日などを照合する。「同」とあれば記載が一致することを示す。その表示がないばあいは、どこかの箇所が異なっているという意味なのだ。

漢字1字が違えば「同」にはならない。原載の角書が「**紀事小説**」なのにそれを「**記事小説**」とすればそこが一致していない。あるいは連載の開始、完了日付が不記であればそこが相違する。ゆえに注記はしないという処理となる。厳密かつ手間ひまがかかっている。

優れた注記も多くある。

1例は「**賣技女**」（貴陽『鐸報』1917.3.7[清民報1494]）だ。その注は次のとおり。「『**大漢報**』（漢口）1917.3.13掲載時篇名更為「**周婉貞**」、作者署天一」。内容を读んでいるから同一作品が題名を改変したと指摘することができたというわけ。

欧米作品の原作に関して独自に調査したものがある。その努力をしているのもよい。

複数のグリム作品（『格林童話』）を指摘している。アラビアンナイト、ドイルのホームズもの、モーパッサン、アーヴィング、チエホフ、ユゴー、オルツィ*1などもある。原作の指摘は貴重だ。しかしG目録のばあいは原作の版本、刊年までは記していない。それでもないよりはずっといい。

清末民初時期に多く翻訳された日本語経由の作品についてはどうか。樽目録では原作について探索した結果をできる限り注記するようにしている。ところがG目録は日本作品の原作についてほとんど無視した*2。

それでは日本の研究は見えていないのかといえば例外がある。つぎの作品「**怨**」だ。注釈部分を掲げる。

[清民刊222]「**怨**」 「按：此篇原作者為英国作家 L. J. BEESTON、見日本学者渡辺浩司《L. J. BEESTON の中国語訳》一文」

渡辺「L. J. Beeston の中国語訳」は『清末小説から』（第110号2013.7.1）に掲載された。G目録は全1,652頁の中でここ1ヵ所だけに日本人名を引用した。渡辺はそのほか多数の日本語作品について新発見した成果を詳細に指摘している。だがそれらにG目録はまったく引用していない。見えない可能性は低いと思う。

G目録の編者は「詳細、厳密かつ広範囲」を原則とすると推測した。しかし日本語関係の作品にはくり返すが言及がない。なにか理由があったのだろうか。こ

の不可解な処理の理由は知らない。ご注意いただきたいのは筆者はそれがG目録の欠点だと言っているのではないことだ。日本語関係の原作を知りたければ別の目録を見れば多くが解決できる。ただG目録が日本語関係作品について言及していないという事実は残る。

その点を除いて注目すべき箇所は多くある。

著訳者の使用する筆名について本名を注で明記している。また作品によっては別の新聞に転載された例も多く見える。それを注釈で詳細に記したのも親切だ。従来の目録はそこまで手が回っていないのが事実だ。

せっかくG目録の全ページを点検したから少しの不具合もあげておく。

不一致——しかし欠陥ではない

ひとつの傾向がある。たとえば旧金山『中西日報』掲載の作品について『申報』に載ったと注釈する。しかしもとの『申報』には該当する作品が見当たらない。確かに『申報』に掲載されたがひとつ作品とは認定されなかった。だがのちの『中西日報』は作品として扱っている。ひとつの理由となるだろう。つまり不一致という可能性だ。複数について見られるから間違いというわけではない。

G目録は戯曲だからといって排除してはいない。注釈に「非小説、実為戯曲」と明記しているのは上述したとおりだ。

ただし見落としがある。

漢訳イブセン「群鬼」（『新潮』第1巻第5号1919.5.1）は収録しない。ところがのちの『国民公報』（成都1919.7.15-19）に掲載されたものは採録して「非小説、実為新劇」と述べるのみ。初出の『新潮』は不記だ。不一致である。

文藝評論をいくつか採取している。小説に関係するという判断かもしれない。編者の裁量に任されている。

誤記を1例あげる。呉鉄吾「珠」（『振勝日報』1919.5.3）の注に誤記がある（〔清民報1640〕）。作者は該新聞において「胡鉄吾」として登場する。ところが「呉鉄吾」だろうと記述した（該報所刊小説多署胡鉄吾、似呉鉄吾当為呉鉄吾）。誤植は珍しいからここで指摘した。

広範囲

清末時期からの特徴だが新小説は日本横浜から発信された。当初から国際的な情報網があった。G目録にもシンガポール、シドニー、サンフランシスコ、カナダ、インドネシア、フランスで刊行された漢語新聞が収録される。当時の中国人が集まった地域を示している。それらの漢語新聞雑誌の小説を採録できたのも現代のインターネットを利用した成果にほかならない。

編者を探索する

G目録は陳年表を参照している。年表の刊行は2014年だ。それに言及しているからG目録それ以後の刊行だと推測する。

ウェブサイト「国家社科基金項目數據庫」に以下の記載を見つけた。

14FZW043 後期資助項 中国文学 清末民初報刊小説目録 2014-12-01 郭輝 中級

題名が同じだ。郭輝の名前が出てきた。郭輝ならば「《晚清小説目録》匡補」（『明清小説研究』2013年第2期（総第108期） 2013発行月日不記）を知っている。劉目録を訂正するくらいの学識がある。G目録の編者ではないか。当時は作者について「単位：河北大学中国語言文学博士後流動站」と記述があった。

G目録を最初から点検しはじめてある注釈に目がとまった。

【清民報862】と【清民報864】2ヵ所に「郭按」とある。編者の注だ。ここだけに「郭」が出ている。郭輝である可能性が高まる。

それらの事情を説明して中国人研究者に質問をした。その回答にいわく、G目録は見たことがないが、郭輝は山西師範大学文学院に在籍している、と。そのご教示にもとづきさらに調査すると次の論文が見つかった。

郭輝「転載与抄襲：『遠東報』小説再評価（1910-1921）」『文学与文化』2018年第4期（総第36期）2018.11.15 電字版

興味深い個所がある。上記論文は研究助成の成果の一部だと説明している。「基金項目：国家社会科学基金後期資助項目（14FZW043）」。文末に著者の所属を明記する。「郭輝、山西師範大学文學院副教授、中国人民大学教育部訪問学者」

先に示した研究助成番号が一致する。G目録の編者は郭輝で間違いない。郭目録と推測していたからG目録と称したのだ。

最後に

郭目録が収録した作品数を樽目録と比較して説明する。雑誌巻は8,508件を照合し、新たに1,804件を追加。新聞巻は9,559件を照合し、新たに8,150件を追加。郭目録の収録小説数は全体で合計28,021件になる。単行本を除いた数字だから大規模だといえる。ちなみに樽目録はそれを吸収し、さらに単行本を加えるから全47,778件と最大になるのも当然だ。

郭目録は信頼のできる刊行物であることを説明した。従来の小説目録の空白を大いに補充すると確信する。

この密度を維持した単行本の目録を編集されることを希望したい。

【注】

- 1) この部分は清末小説研究会ウェブサイトで公開した。

少し気になった個所を紹介する。わずかに1例だ。

『繡像小説』に「三疑案」が掲載された。中村忠行の研究によって以下の原作だと判明している。

バロネス・オルツイ（オルツイ男爵夫人 BARONESS ORCZY）作『ミス・エリオット事件 THE CASE OF MISS ELLIOTT』（1905）の中の3篇。

伊蘭案 “THE CASE OF MISS ELLIOTT（ミス・エリオット事件）”、

雪駒案 “THE HOCUSSING OF CIGARETTE（シガレット号事件）”、

跛翁案 “THE LISSON GROVE MYSTERY（リッスン・グローブの謎）”

以上について該目録（略号：[清民刊]）は次の注釈をつけた。

〔清民刊64〕「伊蘭案（埃利奧特小姐事件）」「跛翁案（利森樹叢謎案）」両篇実為英国奥希茲女男爵所撰『角落里的老人』（*THE OLD MAN IN THE CORNER*）。「雪駒案」与『角落里的老人』12篇故事在人物設置、叙事模式上有極大相似處、但未知出自何作。

もとの作品集の題名は漢訳で示せば『埃利奧特小姐事件』あるいは『義律小姐謀殺案』となる。『角落里的老人』は別の刊行物だ。

「伊蘭案」と「跛翁案」の原作は正しい。しかし「雪駒案」の原作だけが不明だという。わざわざ調査してどうして間違った結果になるのか理由がわからない。

目録編集が緻密であることと原作探索は別らしい。意外な気がする。それにしても原作探究に中村忠行の先行研究が役に立たなかったのは残念なことだった。

詳細な目録である。間違いが皆無ではないということで取り上げた。強調しているわけではないからご了承いただきたい。【参考文献】パロネス・オルツィ著、平山雄一訳『隅の老人【完全版】』（株式会社作品社2014.1.31）

- 2) 例外と思われるのは次のとおり。〔清民刊28〕「十五小豪傑」について「由日本森田時軒之『十五小年』転訳而来」。〔清民刊29〕「美人手」について「有学者認為乃日人黒岩涙香原訳、漢訳本據日訳本重訳、日訳本名『美人の手』」。〔清民刊147〕「孽縁」について「訳自日人「己之罪」」。

文娟論文を評した文章を評する

——陳鵬安論文について

『清末小説から』第148号（2023.1.1）に掲載。荒井由美名を使用。陳鵬安書評は文娟論文を副題にする。しかし文娟論文を評した荒井由美「吳禱についての文娟論文」を視野に入れていない。荒井の指摘を知らないらしいから評論としては不十分だ。それよりも新しく発見した吳禱についての新事実を前面に出した方がより適切だった。

はじめに

本稿の構造は簡単だ。吳禱を論じる文娟論文（2018）が出発点にある。それについて2本の評論が前後して公表された。荒井由美論文（2019）と陳鵬安論文（2022）だ。

本稿では主として陳鵬安論文を取り上げる。文娟論文を評して荒井論文とほどのような違いを見せているのか。それを検討するのが目的である。

興味深いのは陳鵬安（浙江財経大学日文系）が吳禱漢訳研究の専門家であることだ。博士論文「吳禱翻訳研究」（北京師範大学、2020.6審査通過）があるという（未見）。吳禱漢訳の専門家は文娟論文をどのように読んだのか。大いに関心がある。

文娟論文からはじまる

本稿であつかう各論文は次のとおり。番号を振る。いずれも吳禱が主題となっている。

- ① 文娟「試論吳禱在中国近代小説翻訳史中的地位——以商務印書館所刊

- 単行本為研究視角』『明清小説研究』2018年第4期（総第130期）2018.10.15
②荒井由美「呉禱についての文娟論文」『清末小説から』第133号 2019.4.1
③陳 鵬安「呉禱相關史料的新發現——兼与文娟〈試論呉禱在中国近代小説
翻訳史中的地位——以商務印書館所刊単行本為研究視角〉商榷」『明清小説
研究』2022年第1期（総第143期）2022.1.15

陳鵬安はネットで公開されている『清末小説から』掲載の②荒井論文を見ているだろうか。③陳鵬安論文には言及がない。しかし読んでみると筆者は推測する。その根拠を示す。

『清末小説から』第144号（2022.1.1）に掲載された梁艷「關於呉禱訳〈（偵探小説）虚無党真相〉の底本及其他」がある。陳鵬安は梁艷の文章について自分の博士論文と似た個所があるという。筆者は陳鵬安の博士論文を見ていないからそれが事実かどうかは判断できない。明らかなのは陳鵬安がウェブサイト公開の『清末小説から』を閲覧していることだ。梁艷論文を見ているならば『清末小説から』第133号掲載の②荒井論文も目にしているだろう。簡単な推論である（これは間違っていた）。

筆者は①文娟論文を読んでいくつかの問題点を指摘した。理解を深めるためにそれらをまとめてここに示す。なお各項目について③陳鵬安論文の言及があるかどうかを確認して附記する。

記号は次のとおり。

／○陳鵬安あり＝陳鵬安も同じ個所について②荒井論文と同様のことを記している。

／△陳鵬安あり、別物＝陳鵬安は言及しているが②荒井論文とは別のことを述べている。

／×陳鵬安なし＝陳鵬安は気がついていない、あるいは無視した。

①文娟論文の問題点を挙げる。

問題点 1：商務印書館の「説部叢書」元版の完成は1908年であると指摘した神田一三論文（2002）がすでに存在する。それがあつたことを知らないのか言及し

ない。／×陳鵬安なし

問題点 2：沢本香子「書家としての吳禱（作為書法家的吳禱）」の掲載誌、掲載年月日を明示しないのは不親切だ。／△陳鵬安あり、別物。文娟が明示していないことはいわずに沢本論文の掲載誌、掲載年月を示して引用する（36頁）。

問題点 3：王雲五『商務印書館与教育年譜』、『商務印書館図書目録（1897-1949）』は資料として利用する価値がない。／×陳鵬安なし

問題点 4：吳禱漢訳『賣国奴』には底本とした登張竹風『賣国奴』にはない個所を指摘したのはよい。ただしより適切な個所を引用すべきだった。／×陳鵬安なし

問題点 5：樽本『新編増補清末民初小説目録（第3版）』を利用するが出版社名と刊年を明記していない。それよりもネットで公開している最新版（2018年当時では第10版。2022年は第14版）を使用すべきだ。／×陳鵬安なし。ただし樽目録X（第7版 2015）を使用する（35頁）。第7版を見ているならば論文執筆時には第13版（2021）がすでに公開されていた。それを参照すべきだった。

問題点 6：「商務印書館所刊吳禱訳作単行本統計表」を作成する際に利用した参考文献を明記しない。／×陳鵬安なし

問題点 7：商務印書館「説部叢書」の元版（表紙タンポポ文様）と初集本（表紙リボン文様）の区別がついていない。元版は清末刊行、初集本は民初刊行であることを認識していないのである。／×陳鵬安なし

問題点 8：吳禱漢訳『賣国奴』の刊行年を1903年ではなく1905年3月だとした。1903年と記述するのは陳大康だ（[編年②662]）。陳大康は「説部叢書」の後版である初集本奥付に誤記された1903年を信用した。初版を見て確認しなかったのが間違いの原因である。文娟は陳大康説に従わず独自に周辺の資料を探し推論した（文娟にとって陳大康は指導教授だ。名指しすることは避けたい）。しかしこのばあいは傍証を挙げる必要はない。上海図書館が所蔵する該書の初版（光緒三十一年（1905）年十一月首版）を見れば即座に解決する。／△陳鵬安あり、別物。中村忠行論文を引用して1905年以前に1903年版が存在する可能性をいう（34頁）。中村論文の誤りを信用した。なによりも『賣国奴』初版を見るべきだった。文娟と同じくその努力をしなかったのが誤りの原因だ。研究を進めるどころか後

退させてしまったといわざるをえない。

問題点9：呉禱漢訳『車中毒針』の原作者と訳者について誤解をしている。英国勃拉錫克の英文原著を石井ブラックが日本語に翻訳口述したものを今村次郎が筆記したとする。英国勃拉錫克と石井ブラックは別人という認識である。そうではない。勃拉錫克はHenry James Blackといい日本に帰化して快樂亭ブラックと称した落語家。石井ブラックも同一人物なのである。／○陳鵬安あり。英人ブラックについての説明は正しい。原作がデュ・ボアゴベであることを指摘する。しかし英語翻訳本については可能性があるというだけ。底本を提示しない（35頁）。荒井「呉禱漢訳デュ・ボアゴベ『車中毒針——英人ブラック『車中の毒針』」（『清末小説』第145号 2022.4.1）において明らかにした。

問題点10：商務印書館と日本金港堂の合弁問題を提出しているのはいい。しかしここでも典拠資料を示さないのは問題だ。また合弁の原因は日本で発生した「教科書事件」ではない。文娟は俗説を取り入れたから誤る。／×陳鵬安なし

問題点11：呉禱漢訳『薄命花』の原作を不明にしているのは調査不足だ。樽目録の最新版を見れば柳川春葉「虚無党の女」だと書いてある。／△陳鵬安あり、別物。樽目録Xにより春葉作品をあげる。さらにル・キュー原作を示す（35頁）。陳鵬安の指摘は正しい。しかし沢本香子「呉禱漢訳ル・キュー『薄命花』——柳川春葉「虚無党の女」の原作」（『清末小説から』第143号 2021.10.1）においてすでに明らかにしている。

問題点12：呉禱漢訳『侠黒奴』について述べた個所に崔琦「晚清白話翻訳文体与文化身份的建構——以呉禱漢訳《侠黒奴》為中心」（『中国現代文学研究叢刊』2014年第3期（総176期）2014.3.15）の文章と重なる部分がある。自分と他人の文章は厳密に区別する必要がある。／×陳鵬安なし

問題点13：周作人が呉禱漢訳『賣国奴』について発言していることをいう。ならば周作人が自分の「侠女奴」を改悪していることも説明すべきだ。／×陳鵬安なし

以上を書き出してみれば文娟論文には問題点が多いと理解できる*1。

陳鵬安論文の指摘と新発見

②荒井論文が指摘した問題点に対する③陳鵬安の反応を上にも△×で示した。ほとんどが×だ。どうやら陳鵬安は見ることでできた②荒井論文の存在を知らずに立論してしまったようだ。

では陳鵬安自身は①文娟論文についてどのような指摘をしたのか。次に「指摘」「新発見」に分けて箇条書きにする（順序は入れ替えた）。

指摘 1：『黒衣教士』の原作者表記の溪崖霍夫を溪岸霍夫と誤記する（35頁）。

指摘 2：『俠黒奴』の日訳底本を1892年と誤る。また『俠男児』は間違いで『俠黒児』でなければならない（35頁）。

指摘 3：『薄命花』の英文底本はWilliam Le Queuxの *Stolen Souls* 中の1篇 *The Soul of Princess Tchikhatzoff* だ（35頁）。ただし出版社不記。上述問題点11に同じ。

指摘 4：『俠女郎』の底本である押川春浪作品は〔博文館〕1907年ではなく『英雄小説 大復讐』本郷書院1912である（ここは渡辺浩司を引用する）。また未発表の「学生捉鬼記」は同じ本郷書院本に収録される「探険小説 幽霊小家」と推測される（36頁）。

指摘 5：「斥候美談」の英文底本について“The Crime of the Brigadier”を高須梅溪は採用したはずだ。しかしどの版本かはわからない（37頁）。樽本照雄「吳禱漢訳ドイル「斥候美談」——高須梅溪訳「大佐の罪」（『清末小説から』第145号 2022.4.1）において問題はすでに解決している。

新発見 1：西湖天涯芳草館主「書恨并引」（『遊戯報』1899.4.7）、「書恨并引 続前稿」（『遊戯報』1899.4.12）がある（36頁）。

新発見 2：德国摩哈孫著、中国芳草館重訳『虚無党真相』1908再版。原作は塚原渋柿園『虚無党』『続虚無党』（国民書院1904.12、1906.2）がある（36頁）。これについては梁艶「关于吳禱訳《偵探小説》虚無党真相》的底本及其他」（『清末小説から』第144号 2022.1.1）が発表されている。

新発見 3：亶中吳禱訳述「仏教歴史問答」（『仏学叢報』第2、3、5期 1912-1913）がある。底本は日本永井龍潤『通俗仏教歴史問答 印度之部』（興学院1902）

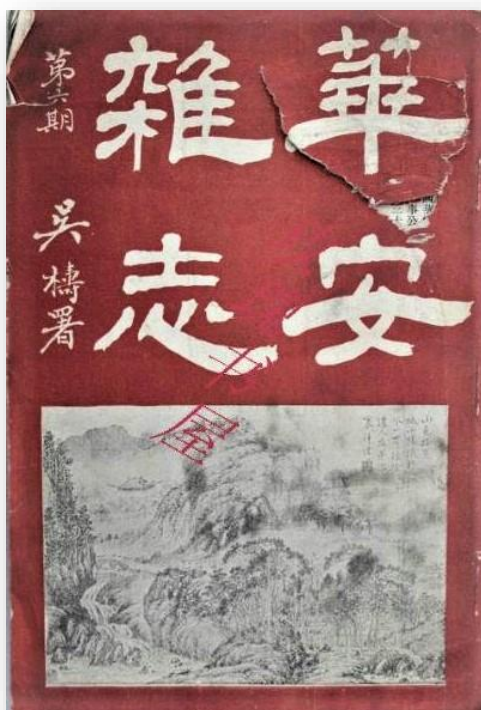
(37頁)。注に示した文娟『前『五四』時代的文化符号：商務印書館与中国近代小説』109頁注①に記載がある。ただしこちらの掲載号は第5期1913のみ。

新発見4：錢塘吳禱「警告争路権之同胞」（『時報』1907.12.22-23）という時評文がある（37-38頁）。

新発見5：『華安雑誌』（1919-1920）に天涯芳草名で小説「淞浦強濤記」「新東厨司令登庸記」「寓言小説黄龍陣」「社会実写小説弱女救災記 一名歳寒松」の4篇を発表している（38-39頁）。いずれも保険業務を宣伝するもの。該誌は上海華安合群保寿股份有限公司の編集する非買品の雑誌。

新発見6：『華安雑誌』の表紙には吳禱署とある。

上記のとおり新発見が6件ある。非売品（保険加入者に配布したらしい）の『華安雑誌』を発掘したのがすばらしい。雑誌の表紙に揮毫しているらしい。これはぜひとも写真で示してほしかった。それがあれば書家としての吳禱という認定がより確実なものになったはずだ。（孔夫子旧書網に写真がある。それを掲げる）



『華安雜誌』第6期 第9期

陳鵬安は呉禱『賣国奴』の1905年初版の実物を見ていないことから1903年刊行の可能性を強調した。それを除けば上のようにいくつもの新発見がある。問題の多い文娟を掲げて副題とする必要はなかった。呉禱に関する文献を新発見したことを前面に出した方が理解しやすいし独特のものになったと思う。

呉禱漢訳研究の専門家としてふさわしい成果をあげている。陳鵬安論文には高い評価が与えられるべきだと考える。

【注】

- 1) 文娟『前『五四』時代的文化符号：商務印書館与中国近代小説』（桂林・広西師範大学出版社2021.6）がある。本稿で掲げた①文娟論文はそのうちの第3章第4節「二、日文転訳的代表：呉禱」として収録された（文娟は呉禱と『繡像小説』については第5章で詳しく述べたという）。ほぼもとの文章のままである。②荒井論文が指摘した多くの問題点は度外視した。しいていえば問題点10の商務印書館と日本金港堂の合弁原因について「教科書事件」を取り消したことくらいだ（122頁）。ただし67頁注①に葉宋曼瑛の論文を示して「教科書事件」によって金港堂が商務印書館に投資したとのべる（注：苦境にあった金港堂がどうして清末の出版社、それもよりによって経営の傾きかけていた商務印書館に投資する必要があるのか。葉宋曼瑛の論理には整合性がない）。同時に樽本「辛亥革命時期的商務印書館和金港堂之合資経営」の両者の合弁に「教科書事件」は関係ない、と引く。両論併記して文娟の思考は停止している。

変更していない例をあげる。

121頁に「商務印書館所刊呉禱訳作単行本統計表」を掲げたのは以前と同じだ。商務印書館「説部叢書」には清末の元型と民初の初集本がある。過去に何度も指摘している。文娟はその区別をしなかった（問題点7）。指摘されると文娟は著書の該当箇所に必要な注釈をつけた。「本統計表中“説部叢書”所収呉禱作品番号，按照四集系列統計」121頁。「四集系列」の集編番号を使用したという説明だ。この「四集系列」（付建舟の用語）とは初集本を指す。清末の刊行物だから元版（十集系列）の集編番号を使用すべきだという理屈の通った正しい意見は採用しなかったわけだ。訂正せずもとのままに時代が異なる民初の集編番号をつけて平気なのが不可思議である。文娟は別の個所で「光緒年間的十集系列」「民国年間的四集系列」（52頁）と区別している。区別するな

らば統計表は元版だから集編番号を訂正する必要があった。研究専門書は正確さを基本にすべきだ。修正する手間を惜しむ理由がわからない。

また上記「統計表」の誤植もそのまま引き継いでいる。『俠黒奴』の底本を尾崎紅葉訳『俠男[黒]児』と誤って訂正していない（陳鵬安指摘1）。また「黒衣教士」の原作者を（俄）溪岸[崖]霍夫原著と誤記したまま（陳鵬安指摘2）。『俠女郎』の底本である押川春浪作品を1907年博文館と誤ったまま（樽目録第13版2021で記載ずみ。陳鵬安指摘4）。

「説部叢書」に関する指摘への対応を見ると陳大康とは異なる。陳大康が『中国近代小説編年史』（北京・人民出版社2014.1）で文娟と同じ誤りを犯した。くり返せば清末の「説部叢書」に民初初集本の集編番号を記載したのだ。つけ加えると民初の「林訳小説叢書」を注記するのも正しくない。それらが誤りであると指し示されると陳大康は後の目録では説明せずにそれらをすべて削除した。誤記をしたという認識があるとわかる。文娟も指導教授の陳大康に学ぶべきだった。注釈をつけて言い逃れることができると考えたのは研究者としていかなものかと思う。

気のついたいくつかを記す。

菊池幽芳『乳姉妹』について次のように説明する。「《乳姉妹》由日本作家菊池幽芳所著、并非欧美小説家的作品」（70頁）。誤り。幽芳の底本はCHARLOTTE M. BRAME（筆名 BERTHA M. CLAY）“LORD LISLE'S DAUGHTER.” 1880 だ。

林訳『吟辺燕語』はシェイクスピア劇ではなくラム姉弟の『シェイクスピア物語』だ（……，而是蘭姆姐弟編写的《莎士比亞戲劇故事集》^②）85頁。ここつけられた注^②は次のとおり。「樽本照雄在《林紓冤罪事件簿》則認為林紓翻譯的是奎勒・庫奇（A. T. Quiller-Couch）《莎士比亞歷史劇故事集》（*Historical tales From Shakespeare*）中的文章」。この注釈を『吟辺燕語』または『莎士比亞戲劇故事集』につけるのは不適切である。まるで『吟辺燕語』の底本がクイラー=クーチ本だと樽本が書いているように読める。誤解を招きかねない。もとよりそのようなことは書いていない。

登張竹風「賣国奴」は先に雑誌『明星』（1904）に「連載」され、後に金港堂から単行本になった。文娟はそう複数個所で書いている（115、117、206、207頁。注：樽目録第3版に『明星』「連載」を記していると説明する（24頁注^②、66頁注^②、115頁注^①）が誤り。そんなことは書いていない。「連載」の明細を示さない。実物で確認していないことが明らかだ。またその典拠についても注釈がない。実を言えば『明星』に掲載された登張竹風「賣国奴」は翻訳内容の要約である。「連載」ではなく1回だけ

の読みきりだ。ゆえに「連載」後に単行本化されたと書くことはできない。『明星』「連載」の根拠は巻末の「参考文献」198（436頁）に掲げる楊鳳鳴「近代中国文学翻訳中の日本影響——以吳禱為例」（太原・山西大学2014）にある。楊鳳鳴が文娟に先行して「連載」と書いている（8、24頁）。「連載」ではないから明白に誤りだ。文娟は自分で検証することなく楊鳳鳴の語句を無断借用した。そう言われなくては文娟はそれぞれの個所に注釈をつける必要があった。それを怠ったからあたかも文娟自身が探し当てたような印象を与える。（注：この部分については清末小説研究会ウェブサイト2022.9.21で公表した。別稿参照）

沢本香子「書家としての吳禱」についてはあいかわらず注記せず「参考文献」にも掲載しない。

「参考文献」に本稿で示した②荒井論文（2019）は収録していない。文娟論文を批判するものは意図的に外すというのは専門書として公明正大な姿勢に欠ける。また参照したはずの崔琦論文（2014。本稿の問題点12に掲げた）も見えない。それよりも文娟自身の論文①（2018）を掲げないのはどうしてなのか。単行本に収録したとはいえ以前に独立した論文1本として発表しているのだ。「参考文献」に収録するのが普通だろう。不可解である。

ひとつ。文娟（あるいは多くの研究者）はいまだに樽目録第3版（齊魯書社2002）を使用している（問題点5でも述べた）。そこにある記号の区別を理解せずあれこれと「不足」を言い立てる。理解しがたい。紙媒体の第3版は第4版（電字版）が公開された時点で利用期限が切れている。第5版以降も電字版で公表を継続しているのを知らないのだろうか。2022年には第14版をウェブサイトで公開した。最新版を使用するのが研究の基本だ。

ではウェブサイト公開の文章は資料として採用しないという中国学界の指導方針でもあるのか。それも違う。張治がウェブサイト「彭拜[澎湃]新聞」（2020.1.16）に掲載した書評を文娟は「参考文献」189として掲げている（435頁）。古いがネットの目録Xを使用している陳鵬安もいるのだ。

ふたこと。『繡像小説』の編者問題と発行遅延問題のふたつは1980年代に活発な論争があった。編者が李伯元かどうかについて雑誌『出版史料』（1986）が特集を組んだくらいだ。しかし関連する汪家熔、張純の論文は文娟著作の「参考文献」にはない（汪家熔の別論文は53頁注①にある）。『繡像小説』については第5章を設けている。それにもかかわらず従来の研究を無視したのは残念だ。陳大康も文娟もその論争経過に

については見ぬふりをして放置した。

特に発行遅延問題を取り上げる。張純が「關於清末《繡像小説》半月刊の終刊時間」（『晚清小説研究通信』第1号1985.4。のち『徐州師範学院学報』1986年2期1986.6.1）で提出した。それ以前、それ以後も研究者はすべて架空の刊年を書いていた。月2回の刊行が維持され李伯元の死去によって停刊した、である。阿英が根拠もなくそう断言したからにはほかならない。それゆえだろう中国学界は長年にわたって張純の提起した発行遅延問題を黙殺し続けた。一方で日本の研究雑誌『清末小説から』が関連論文を掲載した。

では刊年不記の雑誌の刊行をどうやって特定するのか。当時発行されていた新聞広告が資料として利用できるという発想は中国学界では生まれなかった。張純でさえ新聞は信用できないと強く反対したのだ。しかし新聞を使用する方法の正しさを事実が証明している。当時は利用できる新聞は多くない。影印本などが整備されるにつれて複数の資料を見ることができるようになった。新聞を利用して論文を書く中国人研究者も出始めたという経緯なのだ。

それに関して文娟が『繡像小説』の刊行年月について次のように書いているのに首をひねる。「72期雑誌究竟何時出版無法確定，過去学界对此問題進行過一定的探討」（208頁）。この説明はほとんど虚偽に近い。なぜなら文娟が該書に示した文献を見る限り中国学界で「一定的探討」を行なった過去など存在しないからだ（これについては次の文迎霞論文を参照のこと）。文娟は文迎霞論文を「参考文献」に掲げていない。それゆえか文迎霞が示した諸論文が文娟本に見えない。そこに研究の空白が生じる。

張純論文以外で論じたものを以下に掲げる（網羅していない）。

文迎霞「關於《繡像小説》的刊行、停刊和編者」『華東師範大学学報（哲学社会科学版）』2006年第3期（総第185期）2006.5.(15)（注釈に1980年代の関係諸論文が見える）

文娟『結縁与流変——申報館与中国近代小説』桂林・広西師範大学出版社2009.3

陳大康「中国近代小説史料——《繡像小説》中小説史料編年」『文学遺産 網絡版』劉霞によると2010.4.5（未確認）電字版。のち『中国近代小説編年史』に吸収された。

劉霞「關於《文明小史》の刊行時間」『現代語文』2012年第1期（総第454期）2012.1.5

劉穎慧『晚清小説広告研究』北京・人民出版社2014.9

王文君「淺談近代報刊廣告的問題——以《申報》刊《繡像小説》廣告為例」『九江学院学報（社会科学版）』2015年第3期 未見

王文君「再議《繡像小説》的停刊時間——読《申報》刊《繡像小説》広告札記」『中国海洋大学学报（社会科学版）』2016年第2期 2016.3.10

以上をもって「一定的探討」というのだろうか。ならば張純論文1985、1986年から文迎霞論文2006年までの約20年間という空白はどう説明するのだろうか。見解の相違というならば苦しい。

しかも『繡像小説』が第13期より刊年を表示しなくなったことも記述しない。阿英の根拠のない断言が発行遅延問題を無視した原因であることも説明しない。『繡像小説』についての阿英論文は基本文献としてははずすことはできない。だが文娟はそれを「参考文献」に掲載しない。ないない尽くして落胆する。

2014年になって前出陳大康『中国近代小説編年史』が出版された。まるで最初からわかっていたかのように『繡像小説』の刊年不記を言い、新聞を利用して推定刊行年月を記述したのだ。文娟も同様である。『繡像小説』刊行の資料に新聞を使用するという発想は目の前に落ちていたらしい。というよりも文娟がいる研究環境では新聞利用は説明の必要もない当然の方法として確立していたのだろう。そうして李伯元死後の1906年5月に「文明小史」第59回を掲載した『繡像小説』第55期は刊行されたから、劉鉄雲の原稿を盗用したのは歐陽鉅源だ、と当たり前のように書く（199頁）。

陳大康と文娟のふたりとも問題が黙殺されつづけた情況に言及しない。中国人から直接聞いたセリフが思い出される。「事実は誰が発見しても事実にすぎない」。ここには学術的優先権を尊重する考えが存在しない。陳大康も文娟も研究の基本姿勢は同じに見える。先行論文の積み重ねの上に成果が生まれる。その経過を飛ばして結論だけに乗って立論しているのだ。それが中国学界のやり方らしい。しかし国境を超えた研究の世界でそれは通用しない。わざわざ言うまでもないことだった。

あとがき

前回の『清末小説四談』（2021）以後に発表した文章を集める。

呉禱漢訳小説については以前から興味を持っていた。しかし漢訳そのものがなかなか入手できなかつたのが事実だ。今は以前と研究状況が変わっている。北京の古書ネットから入手したものもある。大きな変容だ。そのほかは複写、影印で見た。それらの成果を本書に収録したらこうなった。

呉禱漢訳小説以外にも漢訳小説関係の文章がいくつかある。筆者の興味の方向がそちらに向いているからだ。もともと清末民初の翻訳という研究分野は難問を抱えている。原本、底本、漢訳の雑誌初出、単行本をなど揃えるのは手間と暇がかかる。

日本語本ならば原本を入手するよう努めた。それができないばあいは国立国会図書館デジタルコレクション所蔵を見る。

日訳がもとづいた原本についても海外の古書ネットを利用して入手することができる。無理ならばウェブサイト所蔵本を探索した。やるべきことが多い。

本書がお役に立てばうれしい。

今回は収録を見あわせた「老残遊記」関係文書も収めた。

同時に公開した『清末民初小説目録 第14b版』も参照されたい。

樽本照雄

著者略歴

樽本照雄 (TARUMOTO Teruo)

1948年 広島市生まれ

1972年 大阪外国語大学大学院修士課程修了

現 在 大阪経済大学名誉教授 博士(言語文化学)

研究誌『清末小説から』を公開中

編著書 『林紓冤案事件簿』李艶麗訳 商務印書館2018

『清末民初小説目録 第13版』ウェブ公開2021

『清末小説四談』ウェブ公開2021

『清末民初小説目録 第14版』ウェブ公開2022

『清末民初小説目録 第14b版』ウェブ公開2023

しんまつしょうせつごだん
清末小説五談

発 行★2023年 8 月 1 日

著 者 兼
発 行 人★樽本照雄

発 行 所★清末小説研究会 〒520-0801

滋賀県大津市におの浜2-2-5 212号

樽本照雄方

<http://shinmatsu.main.jp>

Printed in Japan

非賣品

